京都府遺跡調査報告集

第157冊

新名神高速道路整備事業関係遺跡

（１）女谷・荒坂横穴群第13次

（２）荒坂遺跡第５次

２０１４

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1　新名神高速道路整備事業関係遺跡
女谷・荒坂横穴群第 13 次



調査地全景（北東から）

巻頭図版２　新名神高速道路整備事業関係遺跡
女谷・荒坂横穴群第 13 次


（1）34号横穴石棺出土状況（南東から）


（2）43号横穴遺物出土状況（南東から）

巻頭図版３　新名神高速道路整備事業関係遺跡
女谷・荒坂横穴群第 13 次



（1）35号横穴出土遺物



（2）38号横穴出土遺物

巻頭図版４　新名神高速道路整備事業関係遺跡
女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1) 43号横穴出土遺物



(2)出土遺物(耳環)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年４月に設立されて以来、33年間にわたり、府内各地で公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っています。業務の遂行にあたり、皆様方より賜りましたご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成23・24年度に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した女谷・荒坂横穴群と荒坂遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が、地域の埋蔵文化財への理解と関心を深めるうえで、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された西日本高速道路株式会社をはじめ、京都府教育委員会、八幡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　上　田　正　昭

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

新名神高速道路整備事業関係遺跡

1)女谷・荒坂横穴群第13次

2)荒坂遺跡第５次

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
(1)女谷・荒坂横穴群第13次	八幡市美濃山御毛通地内	平成24年４月24日～平成25年２月27日	西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所	奈良康正 筒井崇史 山﨑美輪
(2)荒坂遺跡第５次	八幡市美濃山荒坂地内	平成23年４月21日～平成24年２月24日		村田和弘

3．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。

4．土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

6．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影と現場写真の一部は、調査課企画調整係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

新名神高速道路整備事業関係遺跡---------- 1
（1）女谷・荒坂横穴群第13次 ---------- 5
（2）荒坂遺跡第５次----------163

挿 図 目 次

１．女谷・荒坂横穴群第13次

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図---------- 2
第２図　調査地区配置図 ---------- 8
第３図　出土土器器種分類図 ----------10
第４図　調査前地形測量図 ----------14
第５図　調査後地形測量図 ----------15
第６図　25号横穴平面・立面・土層断面図 ----------17
第７図　25号横穴遺物出土状況図----------18
第８図　25号横穴出土土器実測図----------19
第９図　25号横穴出土鉄器実測図----------20
第10図　26号横穴平面・立面・土層断面図 ----------21
第11図　26号横穴遺物出土状況図----------23
第12図　26号横穴出土土器実測図----------24
第13図　26号横穴出土耳環・鉄器実測図 ----------25
第14図　26号横穴出土玉類実測図----------25
第15図　27号横穴平面・立面・土層断面図 ----------27
第16図　27号横穴遺物出土状況図----------29
第17図　27号横穴出土土器実測図----------30
第18図　27号横穴出土耳環・鉄器実測図 ----------31
第19図　27号横穴出土鉄器実測図２ ----------32
第20図　28号横穴平面・立面・土層断面図 ----------33
第21図　28号横穴土層断面図 ----------34
第22図　28号横穴遺物出土状況図----------36
第23図　28号横穴出土土器実測図----------37
第24図　28号横穴出土耳環・鉄器実測図 ----------38

第25図　ＳＸ20平面・土層断面図----39
第26図　29号横穴平面・土層断面図----40
第27図　29号横穴遺物出土状況図----41
第28図　29号横穴出土土器実測図----42
第29図　29号横穴出土鉄器実測図１----43
第30図　29号横穴出土鉄器実測図２----44
第31図　30号横穴平面・立面・土層断面図----46
第32図　30号横穴土層断面図----47
第33図　30号横穴遺物出土状況図----48
第34図　30号横穴出土土器実測図----48
第35図　30号横穴出土鉄器実測図----49
第36図　31号横穴平面・立面・土層断面図----50
第37図　31号横穴土層断面図----51
第38図　31号横穴遺物出土状況図１----52
第39図　31号横穴遺物出土状況図２----53
第40図　31号横穴出土土器実測図１----54
第41図　31号横穴出土土器実測図２----55
第42図　31号横穴出土鉄器実測図１----56
第43図　31号横穴出土鉄器実測図２----57
第44図　32号横穴平面・立面・土層断面図----59
第45図　32号横穴土層断面図----60
第46図　32号横穴遺物出土状況図----61
第47図　32号横穴出土土器実測図----62
第48図　32号横穴出土鉄器実測図１----63
第49図　32号横穴出土鉄器実測図２----64
第50図　33号横穴平面・立面・土層断面図----66
第51図　33号横穴遺物出土状況図----68
第52図　33号横穴出土土器実測図----69
第53図　33号横穴出土耳環・鉄器実測図----69
第54図　34号横穴平面・立面・土層断面図----70
第55図　34号横穴土層断面図----71
第56図　34号横穴遺物出土状況図----73
第57図　34号横穴石棺出土状況図１----74
第58図　34号横穴石棺出土状況図２----75
第59図　34号横穴石棺石材実測図１----76

第60図　34号横穴石棺石材実測図２----77
第61図　34号横穴石棺石材実測図３----78
第62図　34号横穴石棺石材実測図４----79
第63図　34号横穴石棺石材実測図５----80
第64図　34号横穴出土土器実測図１----81
第65図　34号横穴出土土器実測図２----82
第66図　34号横穴出土耳環・鉄器実測図----83
第67図　35号横穴平面・立面図----84
第68図　35号横穴土層断面図----85
第69図　35号横穴遺物出土状況図１----87
第70図　35号横穴遺物出土状況図２----88
第71図　35号横穴出土土器実測図１----90
第72図　35号横穴出土土器実測図２----91
第73図　35号横穴出土耳環・鉄器実測図----92
第74図　36号横穴平面・立面図----93
第75図　36号横穴土層断面図----94
第76図　36号横穴遺物出土状況図----96
第77図　36号横穴出土土器実測図----97
第78図　37号横穴平面・立面図----98
第79図　37号横穴土層断面図----99
第80図　37号横穴遺物出土状況図----100
第81図　37号横穴出土土器実測図----101
第82図　37号横穴出土耳環・鉄器実測図１----102
第83図　37号横穴出土鉄器実測図２----103
第84図　38号横穴平面・立面図----104
第85図　38号横穴土層断面図----105
第86図　38号横穴遺物出土状況図----108
第87図　38号横穴出土土器実測図１----110
第88図　38号横穴出土土器実測図２----111
第89図　38号横穴出土鉄器実測図----112
第90図　39号横穴平面・立面図----113
第91図　39号横穴土層断面図----114
第92図　39号横穴遺物出土状況図----115
第93図　39号横穴出土土器実測図----116
第94図　40号横穴平面・立面図----117

第95図　40号横穴土層断面図----118
第96図　40号横穴遺物出土状況図----119
第97図　41号横穴平面・立面図----121
第98図　41号横穴土層断面図----122
第99図　41号横穴遺物出土状況図----124
第100図　40号横穴・41号横穴出土土器実測図----125
第101図　41号横穴出土耳環・鉄器実測図----125
第102図　42号横穴平面・立面図----126
第103図　42号横穴土層断面図----127
第104図　42号横穴遺物出土状況図----130
第105図　42号横穴出土土器実測図----131
第106図　43号横穴平面図・土層断面図１----133
第107図　43号横穴土層断面図２----134
第108図　43号横穴遺物出土状況図----135
第109図　43号横穴出土土器実測図１----137
第110図　43号横穴出土土器実測図２----138
第111図　43号横穴出土耳環実測図----138
第112図　御毛通２号墳平面・土層断面図----139
第113図　埴輪出土状況図----140
第114図　埴輪実測図１----142
第115図　埴輪実測図２----143
第116図　埴輪実測図３----144
第117図　埴輪実測図４----146
第118図　３トレンチ平面・土層断面図----147
第119図　４トレンチ平面・土層断面図----148
第120図　横穴配置図(平面・断面)----150
第121図　各支群横穴位置図１----151
第122図　各支群横穴位置図２----152

２．荒坂遺跡第５次

第123図　Ａ～Ｃ地区土層断面図----164
第124図　Ｄ地区土層断面図----165

付 表 目 次

１．女谷・荒坂横穴群第13次

付表１　横穴番号対照表---------- 5
付表２　女谷・荒坂横穴群調査次数一覧---------- 7
付表３　女谷・荒坂横穴群調査概要一覧----------153
付表４　荒坂Ａ支群横穴変遷表 ----------158
付表５　DNA分析を実施した歯の一覧----------161
付表６　出土土器観察表----------169
付表７　耳環法量表----------185
付表８　鉄製品法量表----------185
付表９　26号横穴出土臼玉法量表----------190

図 版 目 次

１．女谷・荒坂横穴群第13次

巻頭図版１　調査地全景(北東から)
巻頭図版２　(1)34号横穴石棺出土状況(南東から)
　　(2)43号横穴遺物出土状況(南東から)
巻頭図版３　(1)35号横穴出土遺物
　　(2)38号横穴出土遺物
巻頭図版４　(1)43号横穴出土遺物
　　(2)出土遺物(耳環)

１．女谷・荒坂横穴群第13次

図版第１　(1)調査地全景(南西から)
　　(2)調査地全景(上から)
図版第２　(1)25・26・27号横穴検出状況(北東から)
　　(2)30号横穴検出状況(北東から)
図版第３　(1)31・32・33号横穴検出状況(北東から)
　　(2)34号横穴検出状況(北東から)
図版第４　(1)35・36号横穴検出状況(北東から)

(2)37・38号横穴検出状況(北東から)
図版第５　(1)39・40・41号横穴検出状況(北東から)
(2)42号横穴検出状況(北東から)
図版第６　(1)34号横穴石棺出土状況１(北東から)
(2)34号横穴石棺出土状況２(南西から)
図版第７　(1)調査前状況(南東から)
(2)25・26号横穴調査前状況(南東から)
(3)25号横穴検出状況(南東から)
図版第８　(1)25号横穴横断土層ｂ－ｂ'(南東から)
(2)25号横穴遺物出土状況(南東から)
(3)25号横穴完掘状況(南東から)
図版第９　(1)26号横穴検出状況(南東から)
(2)26号横穴横断土層ｂ－ｂ'(南東から)
(3)26号横穴縦断土層(南東から)
図版第10　(1)26号横穴玄室遺物出土状況(南から)
(2)26号横穴玄室人骨出土状況１(西から)
(3)26号横穴玄室人骨出土状況２(西から)
図版第11　(1)26号横穴玄室臼玉出土状況(南から)
(2)26号横穴奥壁棚検出状況(南東から)
(3)26号横穴完掘状況(南東から)
図版第12　(1)27号横穴検出状況(南東から)
(2)27号横穴縦断土層(南から)
(3)27号横穴横断土層ｄ－ｄ'(南東から)
図版第13　(1)27号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(2)27号横穴玄室鉄製品出土状況(北西から)
(3)27号横穴完掘状況(南東から)
図版第14　(1)28号横穴検出状況(南東から)
(2)28号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
(3)28号横穴玄室遺物出土状況１(南東から)
図版第15　(1)28号横穴玄室遺物出土状況２(南東から)
(2)28号横穴奥壁棚検出状況(南東から)
(3)28号横穴完掘状況(南東から)
図版第16　(1)ＳＸ20、29号横穴検出状況(南東から)
(2)ＳＸ20縦断土層(北東から)
(3)ＳＸ20横断土層ｄ－ｄ'(南東から)

図版第17　(1)29号横穴縦断土層(北東から)
(2)29号横穴横断土層ｄ－ｄ'(南東から)
(3)29号横穴玄室遺物出土状況１(南東から)
図版第18　(1)29号横穴玄室遺物出土状況２(南東から)
(2)ＳＸ20完掘状況(南東から)
(3)29号横穴完掘状況(南東から)
図版第19　(1)30号横穴縦断土層(北東から)
(2)30号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
(3)30号横穴玄室内流入土堆積状況(南東から)
図版第20　(1)30号横穴玄室遺物出土状況１(南東から)
(2)30号横穴玄室遺物出土状況２(南東から)
(3)30号横穴完掘状況(南東から)
図版第21　(1)31・32・33・34号横穴検出状況(東から)
(2)31号横穴横断土層ｄ－ｄ'(南東から)
(3)31号横穴玄室遺物出土状況１(北東から)
図版第22　(1)31号横穴玄室遺物出土状況２(北東から)
(2)31号横穴奥壁棚検出状況(南東から)
(3)31号横穴完掘状況(南東から)
図版第23　(1)32号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
(2)32号横穴遺物出土状況(北東から)
(3)32号横穴玄室人骨・鉄製品出土状況(南西から)
図版第24　(1)32号横穴玄門付近溝状遺構検出状況(南東から)
(2)32号横穴奥壁棚検出状況(北東から)
(3)32・33号横穴完掘状況(南東から)
図版第25　(1)33号横穴横断土層ｂ－ｂ'(南東から)
(2)33号横穴縦断土層(北東から)
(3)33号横穴玄室遺物出土状況１(北西から)
図版第26　(1)33号横穴玄室遺物出土状況２(北東から)
(2)33号横穴玄室遺物出土状況３(北東から)
(3)33号横穴玄門付近溝状遺構(南東から)
図版第27　(1)34号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
(2)34号横穴玄室遺物出土状況１(南東から)
(3)34号横穴玄室遺物出土状況２(北東から)
図版第28　(1)34号横穴玄室遺物出土状況３(北東から)
(2)34号横穴玄室遺物出土状況４(南東から)

(3)34号横穴石棺内土層堆積状況(南西から)
図版第29 (1)34号横穴石棺内人骨出土状況(南東から)
(2)34号横穴石棺底石出土状況(南西から)
(3)33・34号横穴完掘状況(南東から)
図版第30 (1)35号横穴縦断土層(南から)
(2)35号横穴横断土層ｄ－ｄ'(南東から)
(3)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況１(北東から)
(4)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況２(北から)
(5)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況３(北から)
(6)35号横穴玄室人骨出土状況１(北西から)
(7)35号横穴玄室人骨出土状況２(北から)
(8)35号横穴玄室鉄製品出土状況(東から)
図版第31 (1)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況(東から)
(2)35号横穴玄室遺物出土状況(北から)
(3)35号横穴玄室遺物出土状況(北から)
図版第32 (1)35号横穴玄室遺物出土状況(東から)
(2)35号横穴玄室耳環・人骨出土状況(南から)
(3)35号横穴玄室完掘状況(東から)
図版第33 (1)36号横穴横断土層ｄ－ｄ'(南東から)
(2)36号横穴縦断土層(北東から)
(3)36号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
図版第34 (1)36号横穴縦断土層(南東から)
(2)36号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(3)36号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
図版第35 (1)36号横穴玄室遺物出土状況(東から)
(2)36号横穴完掘状況(南東から)
(3)35・36号横穴全景(南東から)
図版第36 (1)37号横穴縦断土層(北東から)
(2)37号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
(3)37号横穴玄室遺物出土状況(北から)
図版第37 (1)37号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(2)37号横穴玄室遺物・鉄釘出土状況(南から)
(3)37号横穴完掘状況(南東から)
図版第38 (1)38号横穴縦断土層(北から)
(2)38号横穴玄室遺物出土状況(東から)

(3)38号横穴玄室遺物出土状況(東から)
図版第39　(1)38号横穴玄室遺物出土状況(西から)
(2)38号横穴玄室遺物出土状況(西から)
(3)38号横穴完掘状況(東から)
図版第40　(1)39号横穴完掘状況(南東から)
(2)40号横穴完掘状況(南東から)
(3)41号横穴完掘状況(南東から)
(4)42号横穴完掘状況(南東から)
図版第41　(1)39号横穴横断土層ｃ－ｃ'(南東から)
(2)39号横穴縦断土層(北東から)
(3)39号横穴墓道遺物出土状況(北西から)
(4)39号横穴玄室完掘状況(北西から)
(5)40号横穴縦断土層(北東から)
(6)40号横穴縦断土層(北東から)
(7)40号横穴横断土層ｅ－ｅ'(南東から)
(8)40号横穴玄室完掘状況(北西から)
図版第42　(1)41号横穴横断土層ｃ－ｃ'(南東から)
(2)41号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(3)41号横穴玄室遺物出土状況(南西から)
図版第43　(1)41号横穴玄室遺物出土状況(東から)
(2)41号横穴玄室両袖検出状況(北東から)
(3)41号横穴玄室完掘状況(北東から)
図版第44　(1)42号横穴横断土層ｄ－ｄ'(南東から)
(2)42号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(3)42号横穴玄室遺物出土状況(北西から)
図版第45　(1)42号横穴玄室人骨・棺台出土状況(南西から)
(2)42号横穴玄室両袖検出状況(北西から)
(3)42号横穴玄室完掘状況(北西から)
図版第46　(1)43号横穴横断土層ｆ－ｆ(南東から)
(2)43号横穴縦断土層(南西から)
(3)43号横穴玄室遺物出土状況(北西から)
(4)43号横穴玄室遺物出土状況(北西から)
(5)43号横穴玄室遺物出土状況(北西から)
(6)43号横穴玄室耳環・人骨出土状況(南から)
(7)43号横穴玄室遺物出土状況(南東から)

(8)43号横穴玄室耳環出土状況(南西から)
図版第47　(1)43号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(2)43号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
(3)43号横穴完掘状況(南東から)
図版第48　(1)御毛通２号墳完掘状況(南東から)
(2)周溝土層堆積状況(南東から)
(3)埴輪出土状況(南西から)
図版第49　(1)３トレンチ完掘状況(南から)
(2)３トレンチ北壁土層(南西から)
(3)３トレンチ東壁土層(北西から)
図版第50　(1)４トレンチ完掘状況(南から)
(2)４トレンチ北壁土層(南西から)
(3)４トレンチ東壁土層(北西から)
図版第51　出土遺物１　25・26号横穴
図版第52　出土遺物２　26号横穴
図版第53　出土遺物３　26・27号横穴
図版第54　出土遺物４　27・28号横穴
図版第55　出土遺物５　28・29号横穴
図版第56　出土遺物６　30・31号横穴
図版第57　出土遺物７　31号横穴
図版第58　出土遺物８　31号横穴
図版第59　出土遺物９　31・32・33号横穴
図版第60　出土遺物10　33・34号横穴
図版第61　出土遺物11　34号横穴
図版第62　出土遺物12　34・35号横穴
図版第63　出土遺物13　35号横穴
図版第64　出土遺物14　35号横穴
図版第65　出土遺物15　35号横穴
図版第66　出土遺物16　35・36号横穴
図版第67　出土遺物17　36・37号横穴
図版第68　出土遺物18　37・38号横穴
図版第69　出土遺物19　38号横穴
図版第70　出土遺物20　38号横穴
図版第71　出土遺物21　38号横穴
図版第72　出土遺物22　38・39・41号横穴

図版第73　出土遺物23　42号横穴
図版第74　出土遺物24　42・43号横穴
図版第75　出土遺物25　43号横穴
図版第76　出土遺物26　43号横穴
図版第77　出土遺物27　25・26・27号横穴
図版第78　出土遺物28　28・33・35号横穴
図版第79　出土遺物29　29号横穴
図版第80　出土遺物30　30・31号横穴
図版第81　出土遺物31　32号横穴
図版第82　出土遺物32　37号横穴
図版第83　出土遺物33　34・38・41号横穴
図版第84　(1)出土遺物34　耳環
(2)出土遺物35　玉類
図版第85　石棺石材１(上段・蓋石１、下段・底石１)
図版第86　石棺石材２(上段・小口１、下段・側石１)
図版第87　家形埴輪１
図版第88　家形埴輪２
図版第89　(1)家形埴輪３
(2)家形埴輪４
図版第90　(1)家形埴輪５
(2)鶏形埴輪

２．荒坂遺跡第５次

図版第91　(1)Ａ地区　調査前状況(西から)
(2)Ａ地区　完掘状況(西から)
(3)Ｂ地区　完掘状況(北から)
(4)Ｃ地区　１トレンチ完掘状況(南から)
図版第92　(1)Ｃ地区　２トレンチ完掘状況(南から)
(2)Ｄ地区　調査前状況(北から)
(3)Ｄ地区　１トレンチ完掘状況(北から)
(4)Ｄ地区　２トレンチ完掘状況(西から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡
平成23・24年度発掘調査報告

はじめに

今回の調査は、平成23・24年度新名神高速道路整備事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査として、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。

本報告で報告するのは、女谷・荒坂横穴群第13次調査と荒坂遺跡第５次調査の２調査である。前者はこれまでの分布調査や発掘調査で70基以上の横穴の存在が確認されている京都府内最大級の横穴群である。これまでの発掘調査で古墳時代後期から飛鳥時代にかけての横穴群であることが明らかになっている。後者もこれまでの調査で、古墳時代前期末の小規模な方墳１基（御毛通古墳）のほか、若干の遺構・遺物が確認されている。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、八幡市教育委員会をはじめ、各関係機関のご指導、ご助言、地元自治会や近隣住民の方々にご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額西日本高速道路株式会社関西支社が負担した。

（奈良康正）

〔調査体制等〕

女谷・荒坂横穴群第13次調査

現地調査責任者　調査第２課長　水谷壽克

現地調査担当者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
調査第３係調査員　奈良康正・筒井崇史・山﨑美輪
調査第１課資料係調査員　松尾史子

調査場所　京都府八幡市美濃山御毛通地内

現地調査期間　平成24年４月24日～平成25年２月27日

調査面積　2,150㎡

荒坂遺跡第５次調査

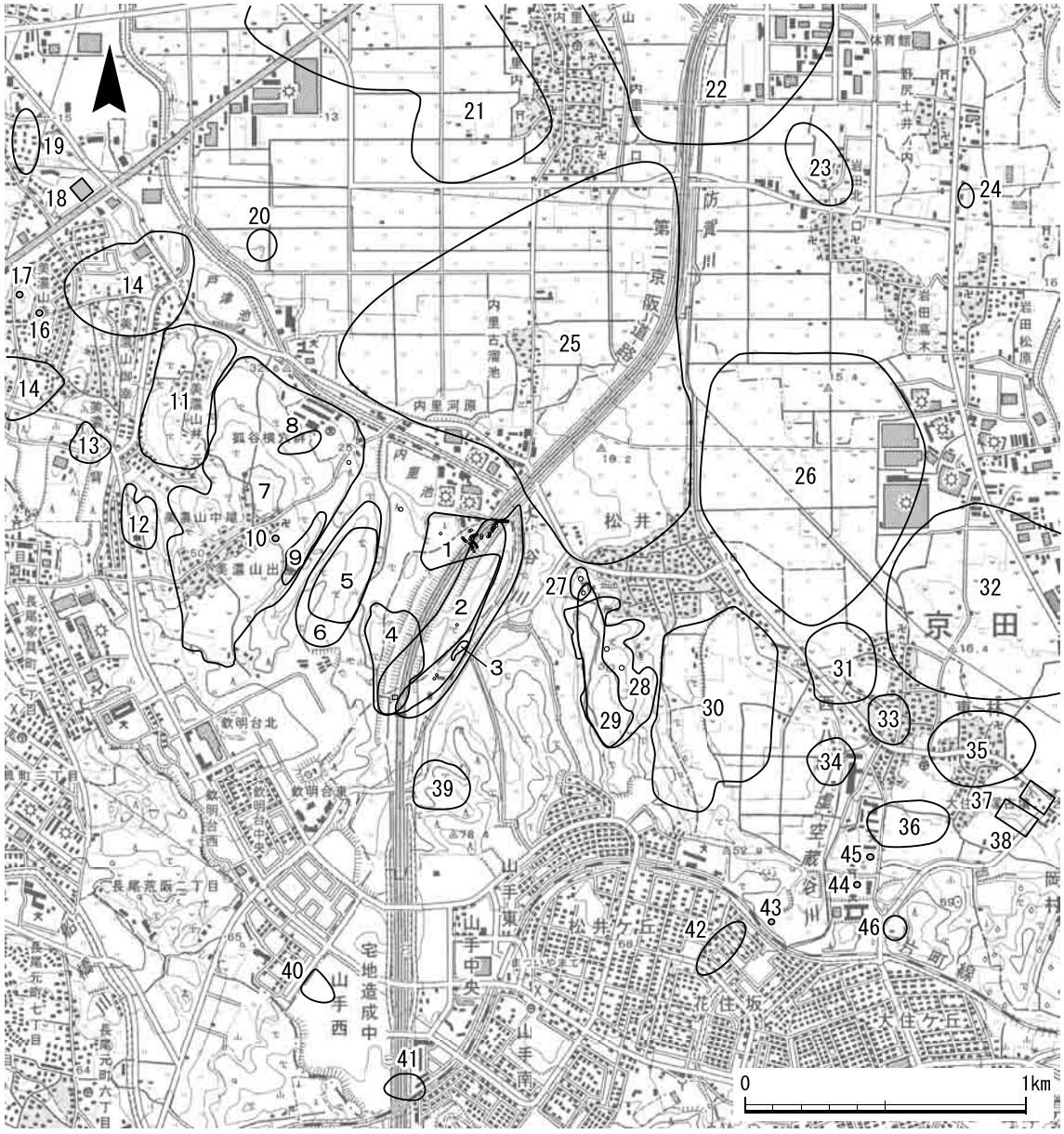
現地調査責任者　調査第２課長　水谷壽克

現地調査担当者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
調査第１係主査調査員　柴　暁彦
調査第３係調査員　村田和弘

調査場所　京都府八幡市美濃山荒坂地内

現地調査期間　平成23年４月21日～平成24年２月24日

調査面積　315㎡（Ａ地区80㎡・Ｂ地区25㎡・Ｃ地区40㎡・Ｄ地区170㎡）



1. 女谷・荒坂横穴群
2. 御毛通古墳群
3. 御毛通遺跡
4. 荒坂遺跡
5. 美濃山廃寺
6. 美濃山廃寺下層遺跡
7. 美濃山遺跡
8. 狐谷横穴群
9. 美濃山横穴群
10. 王塚古墳
11. 金右衛門垣内遺跡（井ノ元遺跡）
12. 宮ノ背西遺跡
13. 宮ノ背遺跡
14. 西ノ口遺跡
15. 幸水遺跡
16. 東二子塚古墳
17. 西二子塚古墳
18. ヒル塚古墳
19. 山田東遺跡
20. 五反田遺跡
21. 内里五丁遺跡
22. 内里八丁遺跡
23. 西岩田遺跡
24. 玉造遺跡
25. 新田遺跡
26. 魚田遺跡
27. 天神社古墳群
28. 松井横穴群
29. 向山遺跡
30. 向谷遺跡
31. 西村遺跡
32. 門田遺跡
33. 八河原遺跡
34. 西野遺跡
35. 東林遺跡
36. 杉谷遺跡
37. 大住車塚古墳
38. 大住南塚古墳
39. 口仲谷古墳群
40. 交野ヶ原窯跡群
41. 松井窯跡群
42. 上西野遺跡
43. 上西野古墳
44. 内山古墳
45. 月読神社古墳
46. 城山遺跡

第1図　調査地及び周辺遺跡分布図（国土地理院　1/25,000　淀）

位 置 と 環 境

1)地理的環境

八幡市は、京都府の山城盆地の西南部に位置し、その市域の東側から北側にかけては木津川が流れ、川を介して東に城陽市、北東は久御山町、北は京都市と大山崎町と接している。また、西方の男山丘陵には大阪府との府境があり、枚方市と丘陵を介して接している。八幡市の地形は南西側が男山から連なる丘陵地、北東側は木津川によって形成された沖積平野によって構成されている。女谷・荒坂横穴群は、八幡市西部から南西部にわたって横たわる標高46～48mの美濃山丘陵の斜面に造営されている。

2)歴史的環境

女谷・荒坂横穴群をめぐる歴史的環境については、主要な遺跡を第１図に示した。八幡市域西～東の男山丘陵およびその裾部に弥生時代から古墳時代にかけての集落、古墳、古代寺院、さらに狐谷横穴群(８)、美濃山横穴群(９)、女谷・荒坂横穴群(１)、松井横穴群(28)、堀切谷横穴群などの横穴群が分布する。市域の北東側の平野部では、木津川旧河道によってつくられた自然堤防である微高地に弥生時代から中世にいたる集落が広範囲に分布している。以下、第１図に示す範囲を中心に男山丘陵とその周辺部に展開する諸遺跡の動向を概観する。

八幡市内では旧石器・縄文時代の遺跡の発見例はほとんど無い。美濃山丘陵に立地する美濃山廃寺下層遺跡(６)、荒坂遺跡(４)、宮ノ背遺跡(13)でナイフ形石器が、金右衛門垣内遺跡(10)ではナイフ形石器と翼状剥片が出土している。

弥生時代の遺跡では、平地部の内里八丁遺跡(22)で前期から中期にかけての水田跡や竪穴建物などが確認されている。中期には、美濃山丘陵の金右衛門垣内遺跡で大規模な集落が形成されていたとみられ、石鏃を中心とする大量の石器も出土している。中期後半を中心とする方形周溝墓群が、丘陵と低地部の境界付近に位置する幸水遺跡(15)で確認されている。低湿地に位置する木津川河床遺跡では後期の溝・土坑を検出し、遺物も多数出土している。丘陵部では後期になると美濃山を中心に、標高40～50mの低丘陵に小規模な集落が営まれる。西口遺跡(14)、宮ノ背遺跡、美濃山廃寺下層遺跡で竪穴建物が検出されている。また、式部谷遺跡では弥生時代後期とみられる突線紐六区画袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代になると、市域西部から南部に前期・中期古墳が集中して造営される。北から順に、八幡市域で最大の前方後円墳である石不動古墳、前方後方墳の茶臼山古墳、美濃山丘陵には一辺52mを測る大型の方墳であるヒル塚古墳(18)、御毛通古墳群(２)、東二子塚古墳(16)、西二子塚古墳(17)、墳長76m以上を測る前方後円墳である王塚古墳(10)などが分布する。女谷・荒坂横穴群のすぐ南側には、後期と考えられる口仲谷古墳群(39)が丘陵上に13基確認されている。京田辺市域には史跡指定されている大住車塚古墳(37)、大住南塚古墳(38)が分布している。しかし、中期から後期にかけて古墳の造営は活発ではない。しかし、古墳時代後期になると八幡市美濃山から京田辺市松井・大住にかけて、大規模な横穴群がつくられる。

北から順に、狐谷横穴群(８)、美濃山横穴群(９)、女谷・荒坂横穴群(１)、松井横穴群(28)、

堀切谷横穴群が分布する。このように南山城地域の中でも、特に木津川左岸は横穴が分布する地域として知られている。この地域以外で確認されている横穴群には、京田辺市南部の木津川に近い独立丘陵斜面に造られた飯岡横穴群や木津川市山城町に所在する北谷横穴群などがある。

古墳時代の集落は、東部の沖積平野を中心に確認されている。内里八丁遺跡は、古墳時代中期から後期にかけての竪穴建物26棟が検出されている。門田遺跡(32)では古墳時代後期の竪穴建物が４棟検出されている。新田遺跡(25)は、女谷・荒坂横穴群の位置する丘陵の北側の平野に位置しており、八幡市と京田辺市にまたがる広大な集落跡で、５世紀後半とされる造り付け竈をもつ竪穴建物も検出されている。

奈良時代、律令制の下では、八幡市域はほぼ山城国に属していた。古代寺院としては、志水廃寺、西山廃寺(別名足立寺)、美濃山廃寺(５)の３寺が確認されている。志水廃寺では瓦積基壇が検出されているほか、鬼面文軒丸瓦が出土している。西山廃寺(別名足立寺)では表面に金箔が残る塼仏、奈良三彩などが出土している。美濃山廃寺では掘立柱建物30棟以上、礎石立柱と掘立柱を交互に使用する特異な形態の建物を検出したほか、覆鉢形土製品やひさご形土製品などの特徴的な遺物が出土している。集落は、門田遺跡、新田遺跡で掘立柱建物が検出されている。内里八丁遺跡では、奈良時代を中心とした大型の掘立柱建物や、墨書土器・石帯・和同開珎などの遺物が出土しており、役所的な性格をもつ遺跡とみられている。その他の古代の遺跡としては、京田辺市最南端に位置する交野ヶ原窯跡群(40)、松井窯跡群(41)など須恵器を焼成していた窯跡があり、操業期間は長岡京期から平安時代初頭頃とされる。

平安時代になると、貞観元(859)年に九州の宇佐八幡宮から八幡神が平安京の裏鬼門にあたるとされる男山に勧請され、石清水八幡宮が創建された。八幡宮の成立以後、八幡市域のほとんどが八幡宮領となり、その影響によって平野部の集落遺跡が増加する。内里八丁遺跡、内里五丁遺跡(20)、新田遺跡、門田遺跡では平安時代後期の掘立柱建物などが検出されている。

平安時代に石清水八幡宮が創建されて以来、八幡市の中心となるのは門前町として発展してきた現在の市街地部分である。八幡宮領である市北東部の平野部は急速に耕作地化が進み、現在に至っている。

女谷・荒坂横穴群が位置する美濃山丘陵は享保年間(1716～1735)に江戸幕府領となり、宝暦年間(1751～1763)には開墾されており、これ以降現在にいたるまで、畑や茶畑、竹林として利用されてきた。　（山﨑美輪）

（１） 女谷・荒坂横穴群第13次調査

１．調査の経緯及びこれまでの調査

１）調査の経緯

女谷・荒坂横穴群は、遺跡地図に登載された周知の埋蔵文化財包蔵地である。今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に先立ち、埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲の記録保存調査を実施した。

当該地には、荒坂Ａ支群12～15号横穴の存在が知られていた。そのため、調査着手前に京都府教育委員会文化財保護課と現地確認を行ったところ、丘陵南東斜面で、天井が崩落し地形的に存在が確認できる横穴３基と、天井のわずかな開口が確認できる横穴２基の合計５基を確認した。これまでの調査成果から、横穴は群をなして構築されていることが判明しており、現状の地形観察からも横穴の存在が予測されることから、発掘調査が必要と判断された。

現地調査は、平成24年４月24日に着手した。当初は、高速道路の橋脚施工地点５か所を対象とした調査を計画していたが、現地確認の状況を鑑み、橋脚の施工方法を検討した結果、埋蔵文化財への影響が避けられないことから、事業対象地の全面にわたって発掘調査を実施することとなった。調査の結果、先に確認できていた５基を含め、調査対象地の全域にわたって21か所の横穴状の痕跡を検出した。このうち１基については、今回の施工において影響を受けないことが判明したため、調査除外となり、さらに１基は調査の結果、横穴ではないことが判明した。そのため、今回発掘調査を実施した横穴は19基である。

調査に当たり、遺構番号は、検出した順に北東からＳＸ01、ＳＸ02・・・と付した。だが、既出の横穴間で、新規に検出した横穴には、そのまま続き番号を付与しているため、順不同となっている地点がある。また、今回の調査対象地は、荒坂Ａ支群に該当し、当支群は遺跡台帳に24号横穴までが記載されているため、今回の調査では25号横穴から新規に横穴番号を付与することとした。そのため、ＳＸ01は25号横穴となり、以下、横穴番号を付表１のとおり改めることとした。なお、45号横穴（ＳＸ16）が調査除外となった横穴である。ＳＸ20に関しては、後述のように横穴ではないことが判明したため、横穴としての番号は付していない。また､旧来の12～15号横穴は、今回の調査対象地内に存在することとなっているが、今回検出した横穴との対応関係が不明のため、京都府教育委員会文化財保護課と調整の上、欠番扱いとした。

調査の進行に伴い、25・26・30～43号横穴（ＳＸ01・

付表１　横穴番号対照表

調査番号	新規番号	備考
SX01	25号横穴	
SX02	26号横穴	
SX03	27号横穴	
SX04	28号横穴	
SX20	―	横穴ではない
SX18	29号横穴	
SX05	30号横穴	
SX06	31号横穴	
SX07	32号横穴	
SX21	33号横穴	
SX17	34号横穴	
SX08	35号横穴	
SX09	36号横穴	
SX19	37号横穴	
SX10	38号横穴	
SX11	39号横穴	
SX12	40号横穴	
SX13	41号横穴	
SX14	42号横穴	
SX15	43号横穴	
SX16	44号横穴	平成24年度未調査

02・05～15・19・21)の15基に関しては、羨道の一部、及び玄室の天井が良好に残存していることが判明した。詳細な記録を作成するに当たっては、横穴内部において人力による測量作業等が必要となる。しかし、軟弱な地盤を掘削して構築した天井は、崩落の可能性が高く、内部での作業は危険と判断されたことから、京都府教育委員会文化財保護課と協議を行い、３次元レーザー測量を実施することとなった。また、その実施に際しては、西日本高速道路株式会社にもご理解いただいた。先の15基の横穴については、３次元レーザー測量により天井の記録を作成した後、重機により天井を除去し、玄室内部の調査を行った。

平成25年２月３日には、現地説明会を開催し、260名余りの方々にご参加いただいた。

現地説明会終了後、遺物の取り上げ、図面の補完等を行った後、下層の断ち割り作業を実施した。その結果、遺物の出土とともに人骨が遺存することが判明した。また、丘陵裾部に予定されている橋脚設置箇所(３・４トレンチ)についても、記録保存調査を実施した。

25～35号横穴は、擁護土壁の施工により掘削されることとなるが、36～43号横穴に関しては、施工に配慮をいただくことにより、一部が影響を受けずに現地で保存されることとなった。この地点については、記録保存完了後に掘削土により埋戻しを行った。埋戻しを含め、平成25年２月27日に現地調査を終了した。

２)第１～12次調査の概要

女谷・荒坂横穴群では、これまでに12次にわたる発掘調査を当センターが実施している。

【第１～９次調査】 当調査は、平成５～14年度にかけ、第二京阪道路(一般国道１号)の建設に先立ち、建設省(現国土交通省)及び日本道路公団(当時)の依頼を受け実施した。[注1] 建設予定地内には、女谷横穴群や荒坂横穴群の所在が知られており、確認調査により、これまで認識されていなかった多くの横穴の存在を確認したことから、発掘調査を実施することとなった。発掘調査を実施した横穴は52基に及び、山城地域においても、最大規模の横穴群であることが判明した。また、調査成果から、両横穴群は途切れることなく分布することから、同一の横穴群であると判断され、「女谷・荒坂横穴群」と改称し、併せて遺跡範囲の見直しが実施された。

なお、この遺跡名称の改称と遺跡範囲の見直しに伴い、当初、別個の横穴群として調査次数を付けていたが、同一横穴群としての調査次数を再整理したものが付表２である。

さて、これら９次にわたる確認調査と本調査の結果、上述のように、合計52基の横穴の調査を実施した。これらのうち48基は、調査前には認識されていなかった２つの埋没谷地形の斜面に造営されていた。新たに確認された谷地形の斜面の分布状況から、女谷Ｂ・C支群と荒坂Ｂ・Ｃ支群が設定され、既知の横穴の分布範囲はそれぞれのＡ支群とされた。残る４基は、既知の女谷Ａ支群と荒坂Ａ支群において、それぞれ２基ずつ新たに確認された横穴である。

横穴の調査は、玄室や墓道が調査区外に延びるなどため、すべての横穴について、その構造や出土遺物の全容が明らかになっているわけではないが、調査の結果、古墳時代後期後半から本格的な造墓を開始し、飛鳥時代中頃まで造墓が続くことが明らかにされた。個々の支群ごとのその消長をみると、荒坂Ｂ支群がやや古く造墓活動を行っているようであり(古墳時代後期後半～末)、

荒坂Ａ支群、女谷Ｂ・C支群は古墳時代末から飛鳥時代中頃にかけて造墓活動が続く。

これら一連の調査で検出された横穴の構造的特徴は、玄室の全長に対してその２倍以上の長さの墓道を付す点である。このため横穴の総全長が13～16ｍのものが少なからず存在し、最も長い横穴は21.3mに達する。こうした特徴は、女谷・荒坂横穴群の北西に位置する狐谷横穴群でも同様の特徴がみられ、女谷・荒坂横穴群の周辺における横穴の構造的特徴として注意される。本横穴群では横穴の閉塞は原則として土砂を盛り上げて行っているが、唯一、荒坂Ｂ支群５号横穴では人頭大の礫を用いて閉塞を行っている。また、女谷Ｂ支群６号横穴、荒坂Ｂ支群２号・３号・５号・13号横穴では埋葬面としての礫床が確認された。女谷・荒坂横穴群では礫を使用した構造物は必ずしも多くない。

また、出土した遺物として注目されるのは、女谷Ｂ支群18号横穴の胡籙金具がある。この胡籙金具は本横穴群で唯一出土したものである。金銅製のもので、一部に布も遺存していた。荒坂Ｂ支群２号横穴では馬具が出土しており、これも唯一の例である。鉄製品では、鉄刀や鉄鏃といった武器類が多いものの、一横穴あたりの出土点数は少なめで、鉄製品の副葬されていない横穴も存在する。このほか、釘の出土点数が少なく、第13次調査とは対照的な状況である。さらに上記で閉塞石が確認された荒坂Ｂ支群５号横穴では、閉塞石の周辺で円筒埴輪が出土している。この円筒埴輪は東海系とされるもので、古墳時代後期の所産である。しかし、本横穴群の近隣では確認されておらず、いかなる経緯で本横穴群で使用されることになったのか不明である。

また､平安時代に横穴を再利用した可能性を示すような遺物が出土した横穴が確認されている。

【第10～12次調査】 当調査は、平成20～22年度に新名神高速道路整備事業に先立ち、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所(新名神京都事務所)の依頼を受け実施した[注2]。南東向きの斜面において、８基の横穴の調査を行った。女谷Ｂ・Ｃ支群とは距離を隔てた丘陵に位置するため、新たに女谷Ｄ支群とされた。調査の結果、横穴は古墳時代後期末から飛鳥時代前半までの比較的短期間に造営されたことが明らかになった。ここで検出された横穴の構造的特徴は、上述と同様に玄室の全長に対して長大な墓道を付す点である。ただ、横穴の総全長が全体として短くなっており、15m前後のものが主体であるが、12m以下のものも存在する。これについて、調査担当者は時間の経過とともに横穴の規模が縮小している可能性を指摘している。また、この一連の調査では閉塞石や礫床を用いた横穴は確認されなかった。なお、女谷D支群では平安時代になって横穴の再利用が行われていたことがわかっている。再利用時の遺物として注目されるのは、女谷Ｄ

付表２　女谷・荒坂横穴群調査次数一覧

次数	調査遺跡	調査期間	調査面積（㎡）	備考
1	荒坂横穴群	H5.7.19 ～ 11.2	1,450	確認調査
2	荒坂横穴群	H12.1.26 ～ 2.15	100	確認調査
3	女谷横穴群	H12.2.1 ～ 2.24	1,800	確認調査
4	荒坂横穴群	H12.8.2 ～ H13.1.18	2,500	確認調査
5	女谷横穴群	H12.8.2 ～ H13.2.27	8,140	横穴 15 基調査
6	荒坂横穴群	H13.4.11 ～ 10.3	3,900	横穴 22 基調査
7	女谷横穴群	H13.4.11 ～ 6.28 H12.11.6 ～ H13.2.27	1,070	横穴８基調査
8	女谷横穴群	H14.4.10 ～ 6.27	700	横穴５基調査
9	荒坂横穴群	H14.4.15 ～ 6.27	1,040	横穴２基調査
10	女谷・荒坂横穴群	H21.1.28 ～ 2.26	250	確認調査
11	女谷・荒坂横穴群	H21.7.9 ～ H22.2.25	2,000	横穴８基調査
12	女谷・荒坂横穴群	H22.5.13 ～ 6.11	400	



第２図　調査地区配置図

支群４号横穴から出土した瑞雲双鸞八花鏡である。この鏡は唐鏡を原型として日本で作られた踏み返し鏡と考えられる。横穴を墓として再利用した際の副葬品と考えられる。このほか、横穴の埋土や横穴の墓道をつなぐ通路の埋土から瓦片が少数出土している。女谷Ｄ支群から西へ300mのところには、古代寺院として美濃山廃寺が所在することから同廃寺との関わりが注目される遺物である。　（奈良康正･筒井崇史）

２．調査方法及び出土土器について

１）調査方法

調査は、現況の地形測量と、丘陵頂部の橋脚施工予定地点から開始した。その後、丘陵斜面の調査に着手し、竹林の表土、及び造成盛土を重機により除去した。ただし、横穴の周辺については、重機による掘削が遺構に及ぼす影響を考慮し、人力により表土、造成盛土を除去することとした。遺構精査および掘削は人力により順次行い、記録図面及び記録写真の作成を実施した。原則、遺構平面図は1/20縮尺、土層断面図は1/10縮尺、遺物出土状況図は1/5縮尺で作成した。

横穴は、古墳時代後期における墓制の一種で、被葬者を納める空間である玄室と、玄室へ至るための通路である羨道及び墓道で構成される。羨道は、天井を有し、玄室の入り口である玄門に接続している。一方、墓道は、天井の有無により羨道とは区別され、丘陵斜面を切り通して構築されている。羨道と墓道の境界が羨門である。横穴の掘削は、原則として検出した範囲の墓道先端から奥壁に向かって、縦断及び横断の土層堆積を確認しながら順次行った。また、遺物が出土した場合には、国土座標・出土標高を記録し、必要に応じて出土状況図を作成した。

（奈良康正）

２）出土土器の型式分類（第３図）

女谷・荒坂横穴第13次調査では、横穴に供献された多数の遺物が出土した。このうち土器については、須恵器を主体として多種多様な器形のものが出土している。ここでは、土器類の型式分類を行うとともに、胎土についても分類し、説明を行う。なお、今回の型式分類ならびに胎土の分類は、第13次出土遺物を対象としたものである。

今回の調査で出土した土器類は、報告したものだけでも294点に達する。これらの中には、横穴に関わらないものも含まれるが、大半は横穴に供献、副葬されたものである。また、破片のため図示をしなかった土器片もあり、実際の供献土器の点数はさらに多かったと推定される。

ここでは型式分類を、須恵器・土師器の別に行う。また、型式分類するほどの器形の出土がないものについては一般的な名称を用いることにする。

①須恵器の分類

蓋　３型式に分類でき、調整や杯とのセット関係などから細分できるものもある。

蓋Ａ…やや丸味を帯びた天井部を有するもの。奈良文化財研究所（以下奈文研）分類の杯Ｈ蓋に相当する[注3]。杯Ａとセットになる。頂部に回転ヘラケズリを施しているか否かで、蓋Ａａと蓋Ａｂに細分できる。

蓋Ｂ…やや扁平な笠形を呈し、口縁部内面に杯受けのかえりと天井部に乳頭状のつまみを有するもの。奈文研分類の杯Ｇ蓋ならびにかえりを有する杯Ｂ蓋に相当する。杯Ｂまたは杯Ｃとセットになる。杯Ｂとセットになるものを蓋Ｂａ、杯Ｃとセットになるものを蓋Ｂｂに細分する。

蓋Ｃ…やや扁平な笠形を呈し、天井部に擬宝珠状のつまみを有するもの。奈文研分類の杯Ｂ蓋に相当する。杯Ｃとセットになる。



第３図　出土土器器種分類図

杯　３型式に分類でき、調整や蓋とのセット関係などから細分できるものもある。

杯Ａ…やや丸味を帯びた底部に蓋の受け部を有するもの。奈文研分類の杯Ｈに相当する。蓋Ａとセットになる。底部に回転ヘラケズリを施しているか否かで、杯Ａａと杯Ａｂに細分できる。

杯Ｂ…平底気味の底部に、ほぼ斜め上方にやや内湾気味、もしくは直線的に口縁部が延びるもの。奈文研分類の杯Ｇおよび杯Ａに相当する。蓋Ｂとセットになるものを杯Ｂａ、セットにならないものを杯Ｂｂに細分する。

杯Ｃ…杯Ｂに高台が付くもの。奈文研分類の杯Ｂに相当する。蓋Ｃとセットになるほか、一部の蓋Ｂとセットになると考える。

高杯　杯部の形状と脚柱部の形状から４型式に分類でき、脚柱部のスカシの有無などで細分できるものもある。

高杯Ａ…蓋受けをもつ杯部を有し、長脚二段スカシのもの、もしくはその退化形態。原則として蓋を有する。脚柱部にスカシを持つか持たないかで､高杯Ａａと高杯Ａｂに細分できる。

高杯Ｂ…蓋受けをもたない杯部を有し、長脚二段スカシのもの、もしくはその退化形態。脚柱部にスカシを持つか持たないかで、高杯Ｂａと高杯Ｂｂに細分できる。原則として蓋を有さないが、まれに高杯Ｂと思われるものがある。

高杯Ｃ…無蓋・短脚で、杯部が丸底気味の椀状を呈するもの。スカシは認められない。

高杯Ｄ…蓋受けをもつ杯部を有し、短脚のもの。ただし、原則として蓋を有さないと考える。また、スカシを有さないことが多い。

長頸壺　脚台ないし高台の有無など(注4)から大きく４型式に分類でき、脚台部のスカシの有無などから細分できるものがある。

長頸壺Ａ…有段の脚台部を有するもの。スカシを施すものと施さないものとがあり、前者を長頸壺Ａａ、後者を長頸壺Ａｂに分類する。

長頸壺Ｂ…高台系のもの。円形のスカシを施すものとスカシの認められないものがある。前者を長頸壺Ｂａ、後者を長頸壺Ｂｂに分類する。

長頸壺Ｃ…脚台・高台ともに有さないもの。原則として丸底である。

長頸壺Ｄ…一般的な高台を有するもの。形態的には奈良時代に位置づけられる。

②土師器の分類

土師器の型式分類については、さまざまな形態や調整を施したものがあるため、複数の横穴から出土するものや畿内中枢部(飛鳥地域・藤原宮・平城宮)で出土するものと同型式のもの(模倣も含む)を主に分類した。型式分類を行わなかったものについては、「杯」「椀」と呼称する。

蓋　形態から２型式に分類できる。

蓋Ａ…口縁部の内面にかえりを有するもの。須恵器の蓋Ｂａと同一の器形である。

蓋Ｂ…頂部から緩やかに口縁部に至る浅い笠状を呈するもの。口縁端部内面が肥厚気味になるものがある。

杯　形態や暗文・ミガキ調整の有無などから５型式に分類できる。

杯Ａ…口縁部内面が肥厚し、内面に暗文を施すもの。底部外面にヘラケズリを施すことが多い。飛鳥地域などの当時の政治中枢部やその周辺で見られるもので、いわゆる「畿内産土師器」[注5]と呼ばれるものである。ただし、女谷・荒坂横穴群周辺で模倣された可能性も残る。

杯Ｂ…在地系の杯類(後述する杯Ｄ)が「畿内産土師器」である杯Ａや杯Ｃの影響を受けたと考えられるものを一括する。器形を模倣したり、暗文を施すなど、影響の現れ方は多様であるため、系統的に並べることができない杯類である。

杯Ｃ…口縁部内面が内傾し、内面に暗文を施すもの。底部外面にヘラケズリを施すことが多い。杯Ａと同じく、いわゆる「畿内産土師器」と呼ばれるものである。ただ、杯Ａと同様に、女谷・荒坂横穴群周辺で模倣された可能性もある。

杯Ｄ…在地系の杯と考えられるものを一括して分類する。原則として杯Ａあるいは杯Ｃの分類に当てはまらないものである。古墳時代後期の在地系と推定される椀類の系統に位置づけられると考える。

杯Ｅ…杯Ａ～Ｄとは器形が異なるうえ、須恵器の蓋Ａとほぼ同じ製作技法で作られたと考えられる。

高杯　形態等から大きく２型式に分類できる。ただし、出土した横穴は各型式１横穴ずつである。

高杯Ａ…椀形の杯部に大きく開く脚部が付くもの。今回出土したのは１点のみである。

高杯Ｂ…皿状もしくは浅い杯状の杯部に、ほぼ水平に開く脚裾部を持つ脚部がつくもの。杯部内面に放射暗文と螺旋暗文を施す。

甕　形態から大きく２型式に分類できる。

甕Ａ…球形の体部に頸部が「く」字状に屈曲して口縁部にいたるもの。法量の違いによって大小に分かれる可能性もあるが、今回は特に細分していない。

甕Ｂ…いわゆる長胴甕である。今回出土したのは１点のみで、体部下半を欠損する。

３)胎土の分類

胎土に含まれる砂粒の種類や量などから分類を行う。ただし、肉眼による観察、判別であり、科学的な分析は実施していない。

①須恵器の胎土の分類　大きく５群に分けることができるが､これらに含まれないものもある。

Ⅰ群…あまり砂粒を含まないもので、断面が紫灰色ないし赤灰色を呈するもの。器表面の色調は暗青灰色を呈するものが圧倒的に多い。

Ⅱ群…胎土中に黒色粒を多く含むもの。焼成や調整によって黒色粒の状態に違いが見られる。明確に区別をすることの意義がどの程度あるか明らかでないが、一応細分しておく。

Ⅱａ…黒色粒が高温のため溶け出しているもの。Ⅱｂ・Ⅱｃよりも黒色粒がやや大粒で、量も多い。

Ⅱｂ…黒色粒が筋を引くもの。

Ⅱｃ…黒色粒を比較的多く含み、明確に固形状を呈するもの。

Ⅲ群…長石や微細な砂粒を多く含む一方、黒色粒をほとんど含まないか、わずかしか含まないもの。やや砂っぽいものが多い。

Ⅳ群…長石を主体的に含むが、黒色粒をほとんど含まないか、わずかしか含まないもの。淡青灰色ないし灰色を呈するものが多い。

Ⅴ群…微細な砂粒を含むが、黒色粒もほとんど含まないもの。やや砂っぽいものがある。

②土師器の胎土の分類　大きく３群に分けることができるが､これらに含まれないものもある。

Ａ群…橙褐色を呈し、砂粒をあまり含まないもの。雲母や赤色斑粒を含むものもある。

Ｂ群…淡黄褐色を呈し、微細な砂粒を含むもの。

Ｃ群…淡黄褐色を呈し、長石や赤色斑粒などの砂粒を含むもの。　（筒井崇史）

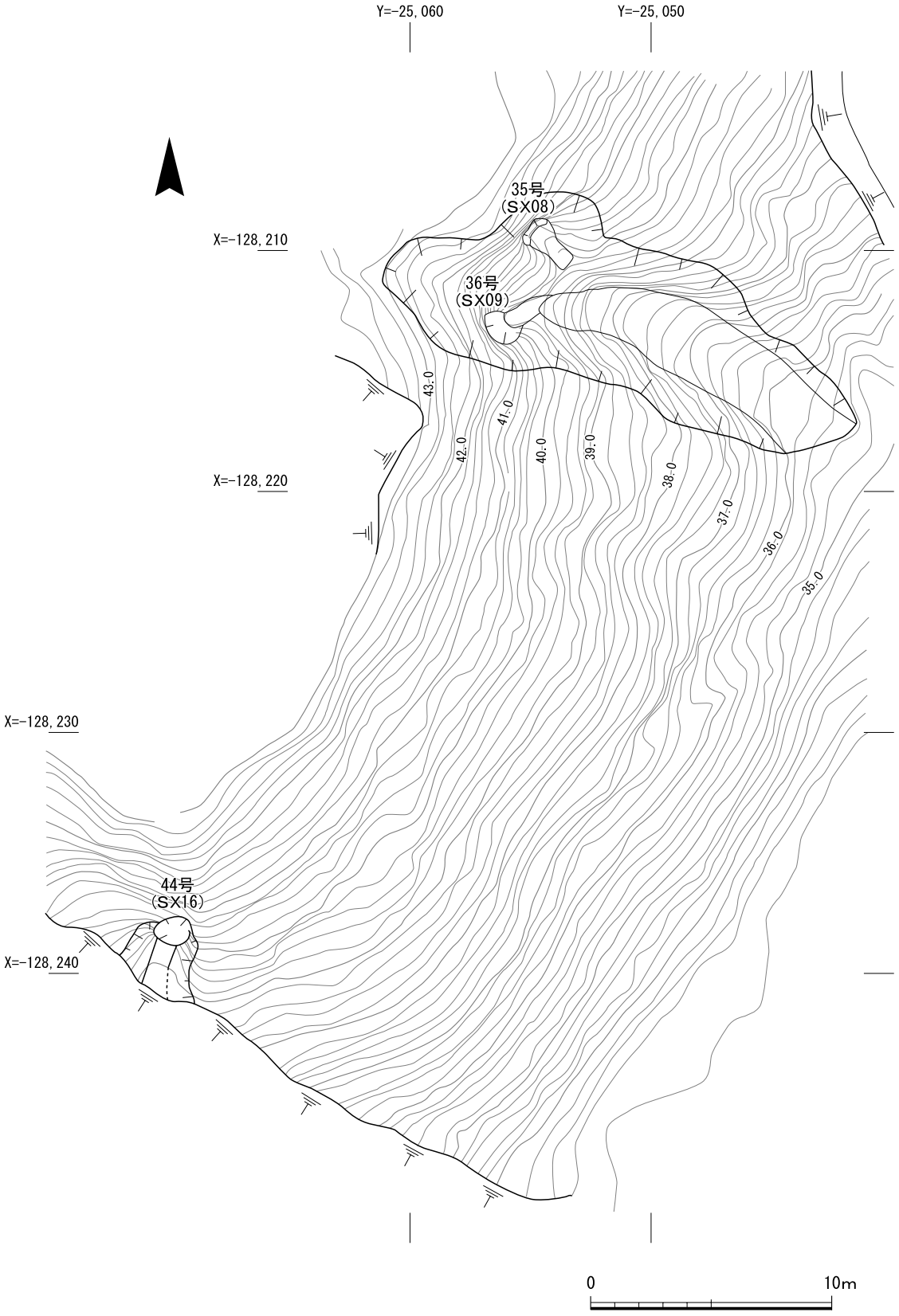
３．　調査 概 要

今回の調査地は、これまで調査が実施されてきた丘陵の南東斜面に位置する。調査の経緯でも述べたように、当初の高速道路の橋脚施工地点に限った調査から、事業対象地のうち、横穴の分布が見込まれる斜面を中心に面的な調査を実施することとした。調査の結果、検出した横穴は20基で、このうち１基については施工において影響を受けないことから、調査除外となったため、最終的に19基の横穴の調査を実施した。なお、この調査区では横穴以外の遺構は検出されなかった。検出した横穴は、いずれも南東に向かって傾斜する丘陵斜面に造営されていることから、横穴そのものは南東に向かって開口している。これらの横穴の前面には、過去の調査で検出されていた通路状の遺構の存在は確認されなかった。これは最も低い13号横穴の先端付近から丘陵斜面の角度がいっそう急になって､調査地の前面を流れる大谷川の河床へ至ると考えられることから、河川の作用による削平等を受けている可能性がある。

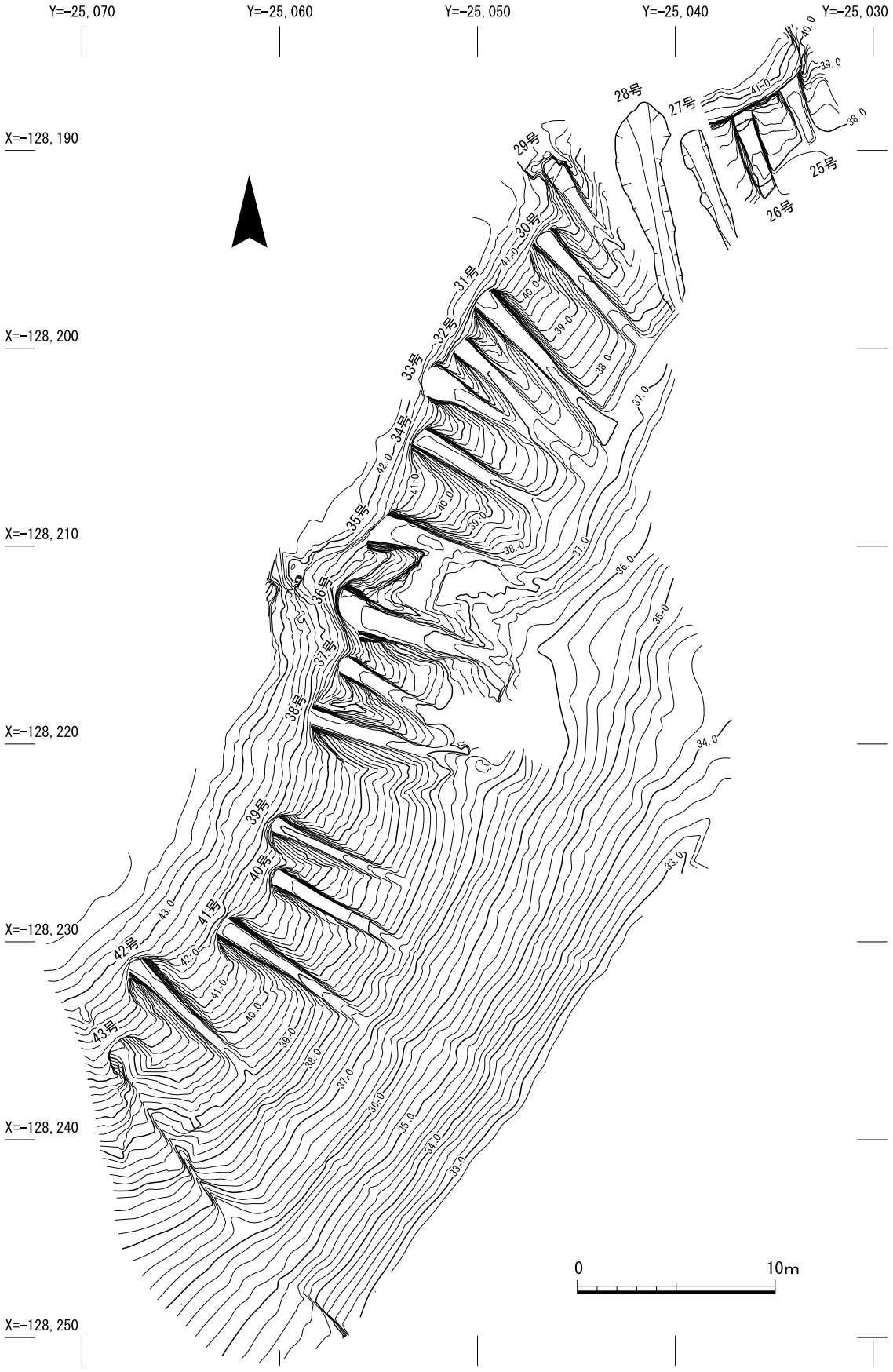
横穴の大半は天井が部分的に残存していたものの､本来の天井は崩落等によって失われており、大きく変形しているような状態であった｡玄室の大半は一部に空洞があるような状態であったが、いくつかの横穴で完全に玄室も埋没していたものがあった。

調査を進めた結果、いずれの横穴でも墓道に供献されたような遺物は検出されず、遺物は基本的には羨道ないし玄室で出土した。個々の横穴については、以下で詳しく報告することにする。

以上の横穴の調査のほか､橋脚施工地点のトレンチ調査を４か所で実施した(１～４トレンチ)。このうち２～４トレンチでは、顕著な遺構・遺物が確認できなかった。１トレンチでは直径22mほどの円墳(御毛通２号墳)を検出し、その周溝から多数の埴輪片が出土した。御毛通２号墳についても以下で詳しく報告する。　（奈良康正・筒井崇史）



第4図　調査前地形測量図



第５図　調査後地形測量図

（１）25号横穴（ＳＸ01）

①立地・調査時の状況

25号横穴は調査地の北東端部に位置し、南東方向に開口する。北東及び南東側には市道が敷設されており、その境界までが調査対象地となるため、墓道の大半は調査区外へと延びてゆく。竹の伐採後、わずかに天井の上端が開口していることが確認できた。全長は検出した範囲で5.6mを測り、主軸はＮ－20°－Ｗをとる。

②規模・構造（第６図）

ａ）墓道・羨道

先述のように、墓道の大半は市道と交差して調査区外へと延びて行くため、その全容は不明である。床面の標高は37.65～37.66mを測る。床面には墓道先端から3.0m付近で緩やかな傾斜の段差が設けられていた。このことから、この地点が玄門であると判断した。羨道の天井は全て崩落して残存していなかったため、墓道との区分が不可能であるが、両者合わせて検出した長さは3.0mを測る。検出した墓道の先端から1.5mまでは同一幅で直線的に延びているが、その先は玄門に向かって「ハ」字状に広がっていく。最大幅1.3m、最小幅0.3mをそれぞれ測る。この形状が変化する地点から側壁の傾斜が急になることから、墓道から羨道への変換点となる可能性がある。

ｂ）玄室

先述したように、玄室と羨道の境界にはわずかではあるが段差が設けられており、床面が一段高くなる地点から奥壁までを玄室と捉えた。

全長2.6m、玄門幅1.3m、最大幅1.9m、床面の標高37.74～37.79mを測る。玄室は、左側壁がわずかに屈曲してふくらみを有する。玄室内は、締りのない天井崩落土で埋没していたが、奥へ行くほど空間が広く残されていた。奥壁からおよそ２ｍまでは天井が残存しており、天井高は1.6～1.8mを測るが、玄室内の崩落土の状況からも旧状は止めていないと判断されるため、本来の天井はさらに低かったと考えられる。奥壁はわずかに前傾しながら立ち上がり、横断面は三角形を呈するが、崩落の影響により本来の形状に関しては不明である。

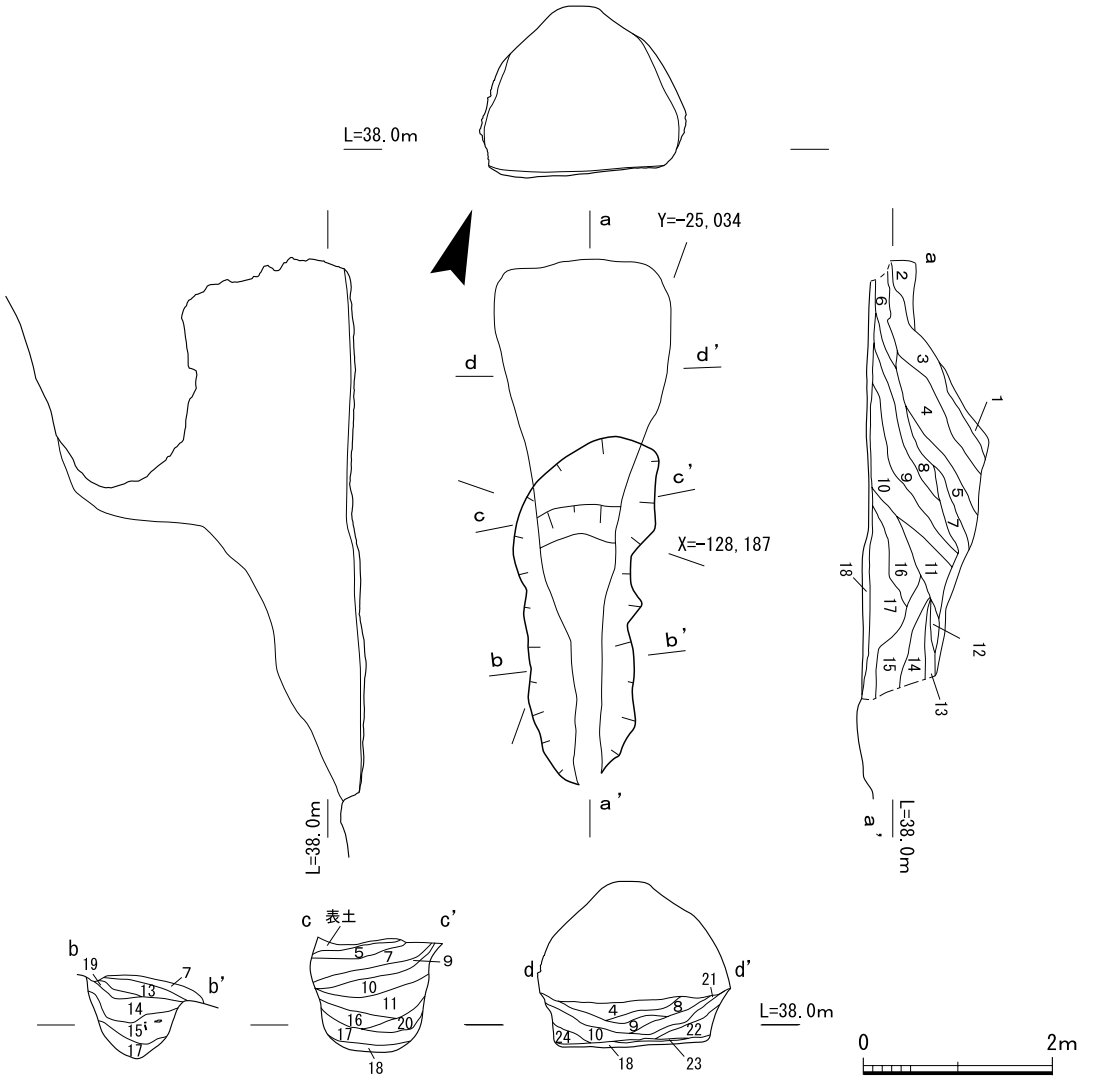
③土層堆積状況（第６図）

玄室内堆積の１～10層は天井崩落土であり、いずれも締りがなく、礫を多く含んでいた。床面直上で確認された18層は、墓道から玄室まで連続して認められるため、築造時の整地土と判断される。12～14層はやや締りに欠けるため判断を下しえないが、15～17層は閉塞に伴う堆積と考えられる。

④遺物出土状況（第７図）

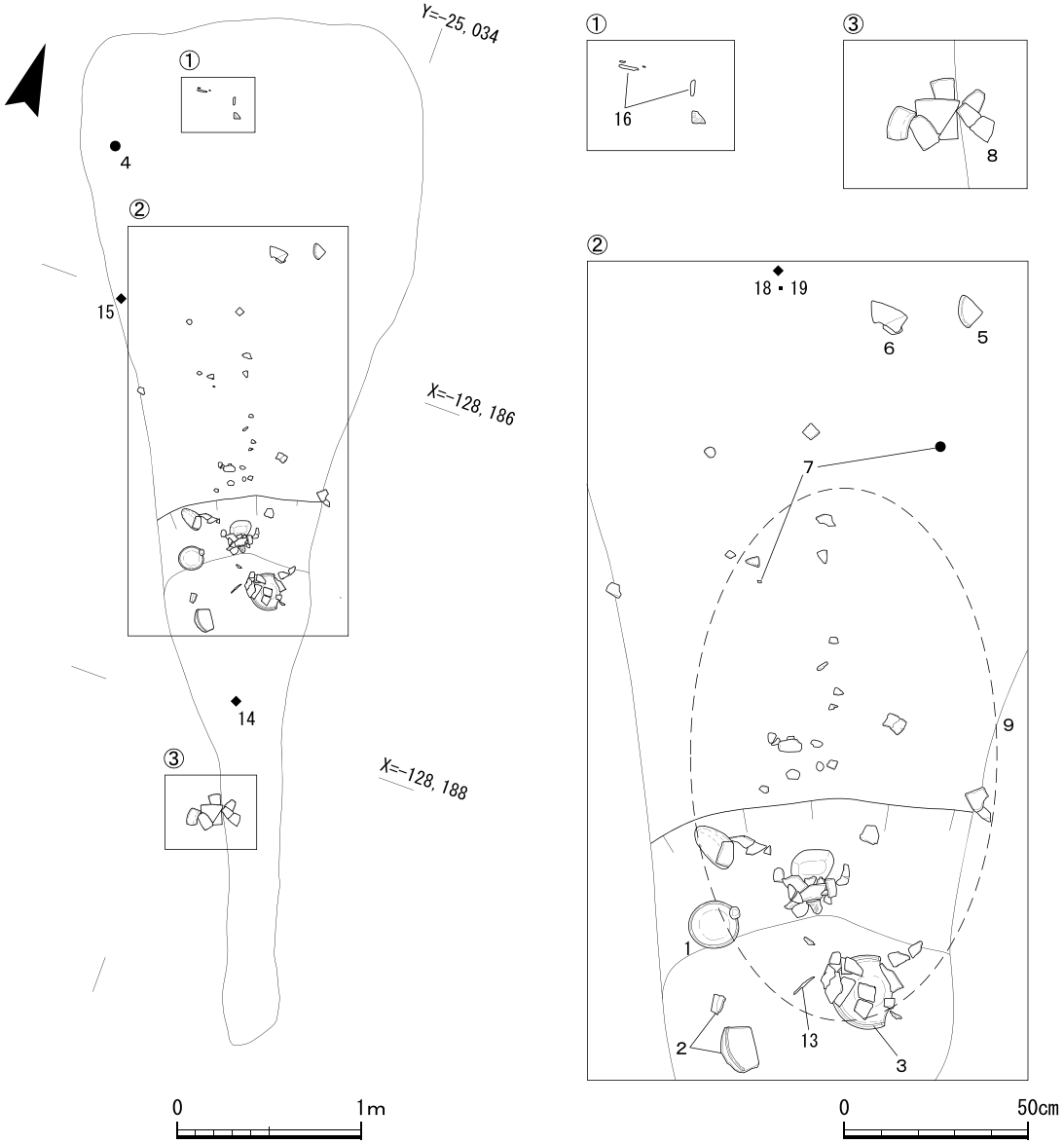
遺物は、玄室と羨道の境界で検出した段差の付近で比較的まとまって出土している。出土層位は床面から0.1～0.2m程高い位置であり、墓道の埋没に伴い混入したものと判断される。玄室内から出土した土器はいずれも破片であった。鉄製品も７点が出土している。

（奈良康正）



1. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(細砂、締りなし)
2. 淡黄色(2.5Y8/4)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を含む、締りなし)
3. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(細～粗砂、腐植土層)
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
5. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細～粗砂)とにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(細～極粗砂の混入土、締りなし)
6. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
7. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細～粗砂)に灰白色(10YR7/)(シルト～中砂が30%混入、径２～３cmの礫混入)
8. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(細～極粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
9. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(細～粗砂)ににぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土(細～中砂をうすく層状に含む、径１～３cm程の礫を多く含む)
10. 褐色(10YR4/6)砂質土(細～極粗砂、締りなく径１～２cm程の礫を含む)
11. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む、締りなし)
12. 橙色(7.5YR7/6)砂質土(細～中砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
13. 橙色(7.5YR6/8)砂質土(極細～、径１～５cmの礫やや多く混入)
14. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～粗砂、径５mm～５cm大の礫を多く含む、締りなし)
15. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極細～粗砂、径１～５cmの礫を多く含む)
16. 褐色(10YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を非常に多く含む)
17. 褐色(10YR4/4)砂質土(細～極粗砂)
18. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極粗砂)
19. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(細～粗砂、腐植土層)
20. 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(極細～粗砂、径0.5～１cm程の礫を多く含む)
21. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(中～粗砂)に橙色(7.5YR6/8)砂質土(細～粗砂塊を10%含む)
22. にぶい黄橙色(10YR7/3)(細～粗砂)、灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～粗砂の混入が均質な堆積)
23. にぶい黄橙色(10YR5/4)砂質土(中砂、遺物を含む)
24. にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土(細～極粗砂)

第６図　25号横穴平面・立面・土層断面図

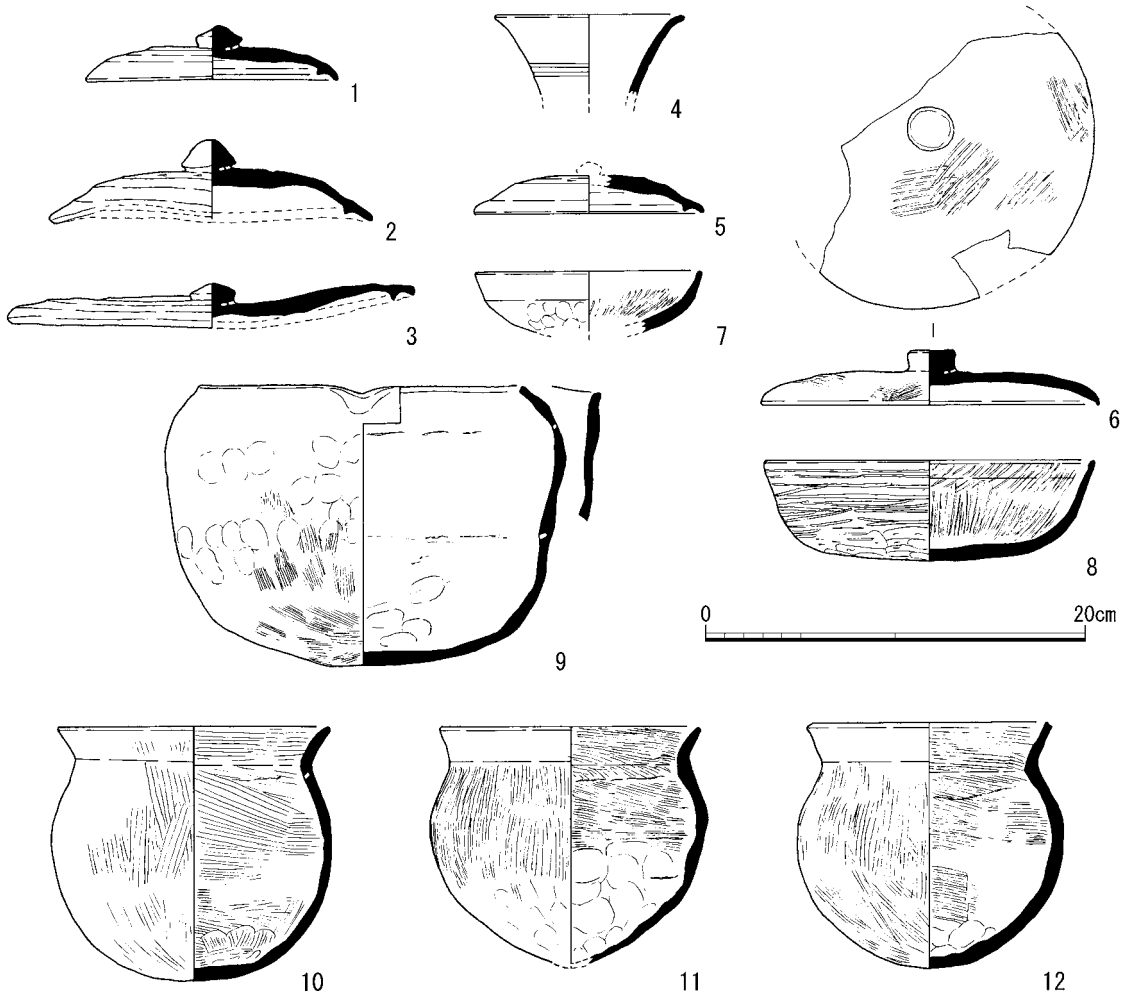


第７図　25号横穴遺物出土状況図

⑤**出土遺物**（第８図１～第９図19）

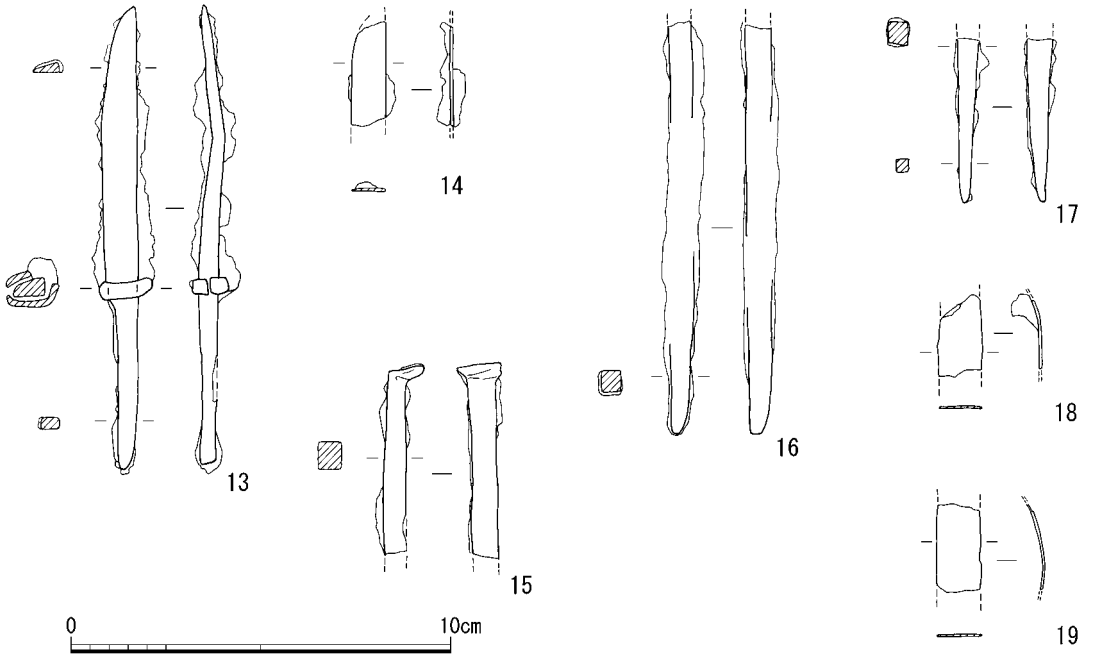
25号横穴から出土した遺物には土器と鉄製品がある。上述のように、25号横穴出土遺物の大半が破片化しており、複数の破片が接合するような状況で、原位置を保つものは認められなかった。また、完形品として復元できないものが多い。

ここで報告するのは須恵器４点、土師器８点で、その他にも図示できない小破片がある。25号横穴では、ほかの横穴に比べ、土師器の出土点数が多い。須恵器には蓋Ｂ３点（１～３）、長頸壺１点（４）がある。蓋Ｂは法量に違いがあるものの、いずれも杯ＣとセットになるＢｂと推定される。１は唯一、完形で出土した。胎土は黒色粒を含み、３と類似している。２は口縁部等の欠損が著しく、完形に復元できなかった。また、焼け歪みも著しい。胎土は微細な砂粒が多く砂っぽい。３は口縁部の2/5程度が欠損している。焼け歪みのために器形が扁平気味である。胎土は黒色粒を含む。４は長頸壺の口縁部の破片で、頸部中位に沈線を２条施す。全容は明らかでない。



第８図　25号横穴出土土器実測図

土師器には蓋Ａ１点（５）、蓋Ｂ１点（６）、杯Ａ２点（７・８）、片口鉢１点（９）、甕Ａ３点（10～12）がある。５～８は胎土・色調が類似し、都城系の土師器(注6)そのもの、あるいはそれを在地で模倣したものと考えられる。５は内面にかえりを有しており、須恵器蓋Ｂａと同一器形であるが、焼成は土師質である。胎土には赤色斑粒を含む。６は頂部外面にミガキを施すが、剥離が著しい。胎土には雲母を含む。７は内面に１段放射暗文を施すことからＡｂに分類できる。口縁端部は内方にわずかに肥厚する。胎土には雲母を含む。８はほぼ完形に復元することができた。形態や調整などから、いわゆる畿内産土師器、もしくはその模倣品と考えられる。内面には２段放射暗文を施すことからＡａに分類できるが、底部の螺旋暗文の有無は摩滅のため確認することはできなかった。胎土には雲母や赤色斑粒を含む。時期は形態や暗文の特徴などから飛鳥編年(注7)の飛鳥Ⅳないし飛鳥Ⅴに位置づけられる資料と考える。９は片口鉢であるが、類例を知らない。底部がやや平底気味である点や口縁部が大きく内傾する点など、古代の遺物ではない可能性もある。胎土には黒色粒を含む。10～12は口径12～14cm、器高12～13cmで、ほぼ同形同大の甕である。おおむね体部内外面と口縁部内面にハケを施すが、11は底部付近の内外面ともにナデやユビオサエを施す。胎土はいずれもＢ群であるが、12は黒色粒を含む。



第９図　25号横穴出土鉄器実測図

鉄器は刀子２点(13・14)、釘３点(15～17)、不明鉄製品２点(18・19)などがある。13はほぼ完存する。一部欠損するものの、鏃が認められる。14は刀子の刃部の破片と推定される。釘はいずれも完存しない破片資料である。15は頭部が残存している。16は頭部を欠損するもので、縦方向の木目が認められる木質が残存する。残存長が10.9cmとかなり大型の釘である。17は釘の先端部である。18・19は不明鉄製品である。厚さ0.5mm程度と薄いが、用途等は不明である。

（筒井崇史）

（２）26号横穴（ＳＸ02）

①立地・調査時の状況

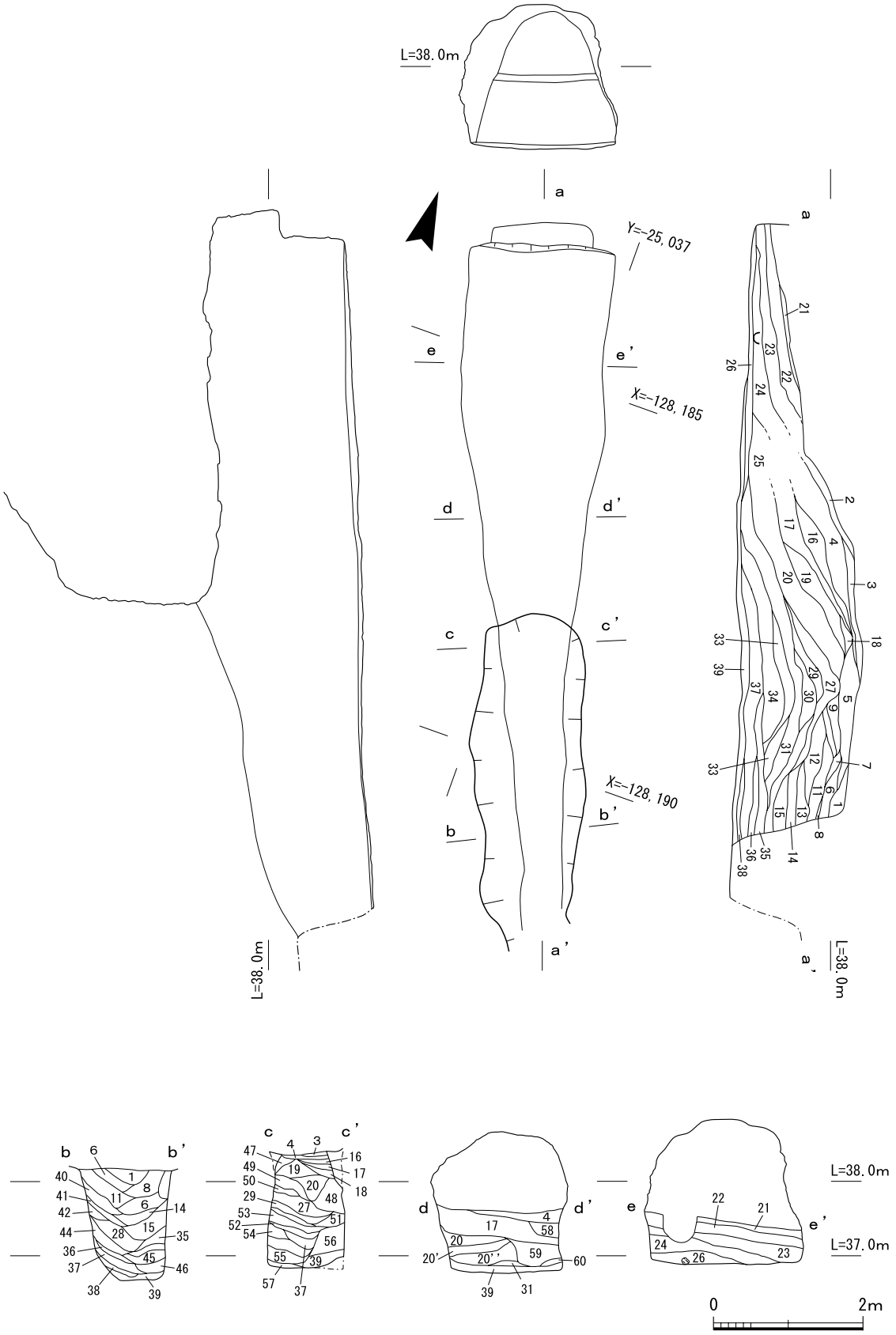
25号横穴の南西に隣接して検出した。竹の伐採後、表土を除去した段階で、残存する天井が一部分のみ開口することによって検出した。墓道先端が25号横穴と同様に市道と交差し、調査区外へと延びていくため全容は不明である。全長は検出した範囲で9.8mを測り、主軸はＮ－19°－Ｗにとる。

②規模・構造(第10図)

ａ）墓道・羨道

先述のように、墓道の全容は不明である。床面の標高は36.59～36.80mを測る。床面には、墓道先端から3.6m付近でわずかであるが段差が設けられていた。遺物の副葬がこの段差より一段高くなる地点より奥側に限定されることから、この地点が玄門であると判断した。羨道の天井は一部が残存しており、床面からの高さは1.8～２mを測る。羨門の特定には至らなかったが、墓道と合わせて両者は検出した範囲で長さ6.2m、幅0.5～1.5mを測る。

ｂ）玄室



第10図　26号横穴平面・立面・土層断面図

26号横穴断面図土色

1．暗褐色（7.5YR3/3）砂質土（細～中砂、径３～5cm程の礫を多く含む）
2．暗褐色（10YR3/3）砂質土（細～粗砂、腐植土層）
3．明黄褐色（10YR6/6）砂質土（細～粗砂）
4．灰白色（2.5Y8/1）砂質土（極細～粗砂）
5．褐色（7.5YR4/3）砂質土（シルト～粗砂、径１～8cm程の礫を非常に多く含む）
6．にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土（細～中砂）
7．明黄褐色（10YR6/6）砂質土（細～中砂）
8．黄褐色（10YR5/6）砂質土（細～極粗砂）
9．褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～極粗砂､径１～5cm程の礫を含む)
10．明褐色（7.5YR5/6）砂質土（細～中砂）
11．明褐色（7.5YR5/6）砂質土（細～中砂、径3cm程の礫をわずかに含む）
12．赤褐色（5YR4/6）砂質土（細～粗砂、径１～5cm程の礫を非常に多く含む）
13．にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（細～極粗砂、径２～5cm程の礫をわずかに含む）
14．褐色（10YR4/4）砂質土（細～極粗砂、径１～3cm程の礫をわずかに含む）
15．褐色（10YR4/6）砂質土（細～極粗砂、径１～4cm程の礫をわずかに含む）
16．褐色（10YR4/6）細～粗砂､径１～4cm程の礫をわずかに含む）
17．浅黄色（2.5Y7/4）砂質土（細～極粗砂、径0.5～1cm程の礫をわずかに含む）
18．にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土（細～中砂）
19．褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～中砂､径１～3cm程の礫を多く含む)
20．にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土（細～粗砂、径１～5cm程の礫を非常に多く含む）
21．にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（細～極粗砂）
22．にぶい黄橙色（10YR7/3）砂質土（粗～極粗）
23．灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(粗～極粗砂､径１～3cm程の礫を含む)
24．灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（中～極粗砂、径１～4cm程の礫を多く含む）
25．灰黄褐色（10YR6/2）砂質土（シルト～極粗砂、径１～3cm程の礫を多く含む）
26．褐灰色（10YR4/1）砂質土（粗～極粗砂、径１～2cm程の礫を多く含む）
27．にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土（細～粗砂）に赤褐（5YR4/6）砂質土（細～中砂が50%混入、径１～5cm程の礫を多く含む）
28．褐色（7.5YR4/6）砂質土（細～極粗砂）に赤褐色（5YR4/6）砂質土（シルト～細砂が30%程混入）
29．にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土（細～粗砂）
30．褐色（7.5YR4/3）砂質土（細～極粗砂、径１～4cmの礫を多く含む、締りなし）
31．赤褐色（5YR4/6）砂質土（細～極粗砂、径１～5cm程の礫を多く含む）
32．にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土（極細～極粗砂、径１～4cm程の礫を多く含む、やや締りあり）
33．褐色（7.5YR4/6）砂質土（極細～粗砂、径１～3cmの礫を多く含む）
34．褐色（7.5YR4/3）砂質土（細～粗砂､径１～2cm程の礫を含む、やや締りあり）
35．褐色（10YR4/4）砂質土（細～極粗砂、径2cm程の礫をわずかに含む）
36．褐色（7.5YR4/4）砂質土（シルト～粗砂）
37．褐色（7.5YR4/3）砂質土（シルト～粗砂、径２～3cm程の礫をわずかに含む）
38．褐色（7.5YR4/6）砂質土（シルト～中砂）
39．にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（シルト～中砂）
40．明褐色（7.5YR5/8）砂質土（細～粗砂）
41．褐色（7.5YR4/6）砂質土（細～粗砂）
42．明褐色（7.5YR5/6）砂質土（細～極粗砂）
43．黄褐色（10YR5/6）砂質土（細～極粗砂、径１～2cm程の礫をわずかに含む）
44．褐色（7.5YR4/4）砂質土（極細～粗砂）
45．にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（細～極粗砂、１～2cm程の礫をわずかに含む）
46．褐色（10YR4/4）砂質土（細～粗砂､＊有蓋高杯蓋出土）
47．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土（細～中砂、径１～2cm程の礫をわずかに含む）
48．褐色（10YR4/6）砂質土（細～中砂）
49．明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細砂､径1cm程の礫をわずかに含む)
50．明褐色（7.5YR5/8）砂質土（細～中砂、径0.5～1cm程の礫をわずかに含む）
51．にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土（細～中砂）
52．明褐色（7.5YR5/6）砂質土（細～粗砂、径１～3cm程の礫をわずかに含む）
53．明褐色（7.5YR5/8）砂質土シルト～中砂）
54．にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（細～極粗砂、径１～2cm程の礫をわずかに含む）
55．にぶい黄褐色（2.5Y5/8）砂質土（細～極粗砂）に明赤褐色（5YR5/6）（細～中砂）が30%程混入
56．にぶい黄褐色（2.5Y5/4）砂質土（細～極粗砂、径１～3cm程の礫を多く含む）
57．褐色（10YR4/4）砂質土（細～粗砂）

先述したように、玄室と羨道の境界にはわずかではあるが段差が設けられており、床面が一段高くなる地点から奥壁までを玄室と捉えた。

全長3.6m、玄門幅1.5m、最大幅2.0mを測り、床面の標高36.81～36.94mである。奥壁には、棚状施設が削り出されていた。床面からの高さはおよそ1.0mを測り、幅約1.4m、奥行0.3～0.4mを測る。上面には天井崩落土が薄く堆積していたが、棚上に載せられている遺物等は確認できなかった。天井は崩落せず残存しており、奥壁は垂直に立ち上がる。奥壁での天井高は1.7mを測る。奥壁上部の痕跡から天井断面は三角形に掘削していたと推測される。

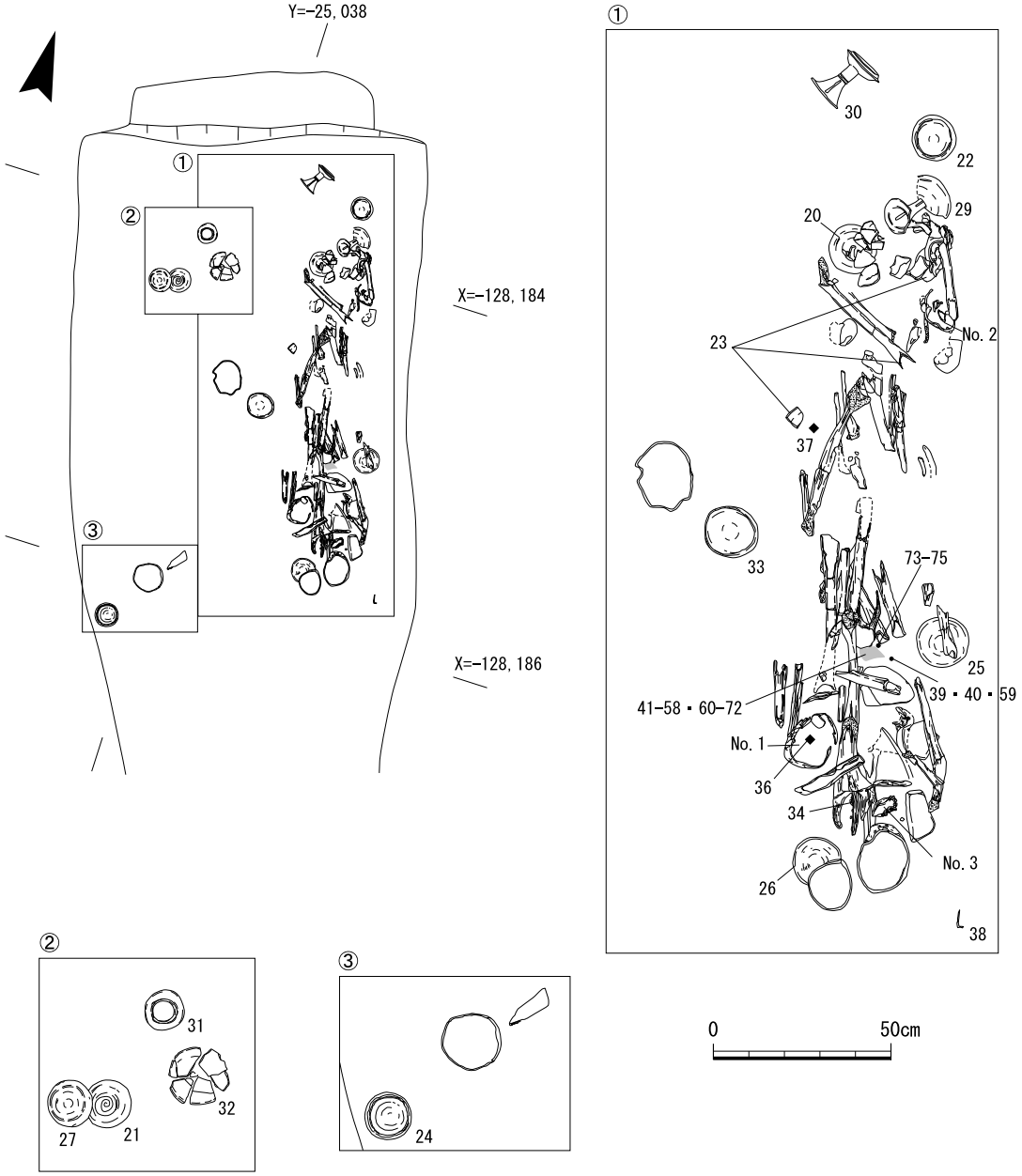
③土層堆積状況（第10図）

縦断土層断面図で確認できる２～25層までは天井崩落土である。玄室中央付近から墓道にかけて、薄く均一的に確認される39層及び57層は、築造時の整地土と考えられる。27層ないし29～38層が閉塞に伴う堆積と考えられる。

④遺物出土状況（第11図）

玄室以外では、遺物はわずかしか出土していない。調査区境界付近の墓道では、床面から15cm程浮いた状態で須恵器高杯蓋(28)がほぼ完形で出土している。玄室内では、西半部では玄

門付近において須恵器杯Ａ(24)１点と人骨が出土している。奥壁寄りでは須恵器杯Ａ・蓋Ａ、短頸壺が26層直上で出土している。東半部では、床面直上で土器や人骨が集中して出土している。頭蓋骨は少なくとも５体分が確認できた。解剖学的な位置関係をとどめていないことから、改葬に伴い集骨を行ったものと考えられるが、頭蓋骨の下に須恵器を枕様に配している例も確認できた(20・26など)。長管骨は比較的良好に残存していたが、その他は保存状態が悪く、取り上げに際し大きく破損してしまった。また、これら人骨の出土が幅0.6m、長さ2.0mの範囲に限定されることから、改葬骨の移動・安置に際してはある種の規定が存在したことが類推できる。収納に際し、木棺等の利用も考えられるが、釘等はほとんど残存しておらず、その存否については不明である。遺物取り上げに際し、剥片化した木質の小破片を確認していることから、板等が敷かれ



第11図　26号横穴遺物出土状況図

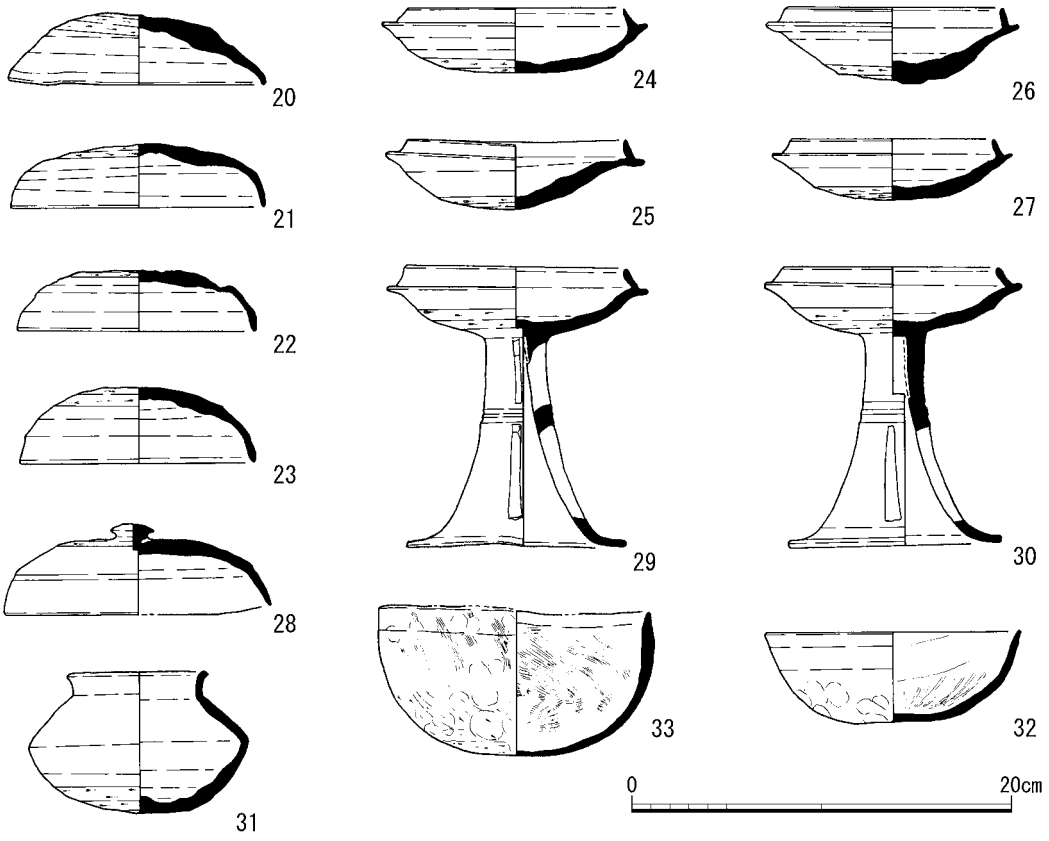
ていた可能性も考慮すべきかもしれない。人骨の直下からは玉類がまとまって出土している。

（奈良康正）

⑤出土遺物（第12図20～第14図75）

26号横穴から出土した遺物には土器・耳環・鉄製品のほか、玉類がある。

土器の内訳は須恵器12点、土師器２点である。須恵器は蓋Ａ４点（20～23）、杯Ａ４点（24～27）、高杯Ａ蓋１点（28）、高杯Ａ２点（29・30）、短頸壺１点（31）である。蓋Ａはいずれも頂部に回転ヘラケズリを施すＡａであるが、頂部にケズリの及ばない範囲がみられる。また、口径13cm前後のもの（20・21）と12cm前後のもの（22・23）に分けられる。胎土は、20～22は黒色粒が認められるが、23は砂粒をあまり含まず、ほかの個体とは異なる。21は20・22に比べると色調がやや濃い。23は土師質のような焼き上がりで、外面に煤が全面に付着する。杯Ａは26を除き底部外面に回転ヘラケズリを施すＡａである。26は底部外面がヘラキリ後不調整のＡｂで、補助ケズリ[注8]を確認できる。杯Ａは法量からみると、口径13cm前後のもの（24～26）と12cm前後のもの（27）とがある。胎土のほか色調や焼成からみると、20・25・26が非常に類似している。28は胎土や色調などから29・30のいずれとセットになるものか判断できない。胎土はやや精良である。29・30はほぼ同形同大の高杯Ａであるが、29が通有な長脚２段スカシであるのに対して、30は脚部の上段にスカシが施されていない。このような個体はほかに確認しなかった。29・30ともに杯部立ち上がりの端部がやや肥厚し、受け部がやや短い、また脚端部を丸くおさめるなど共通した特徴が



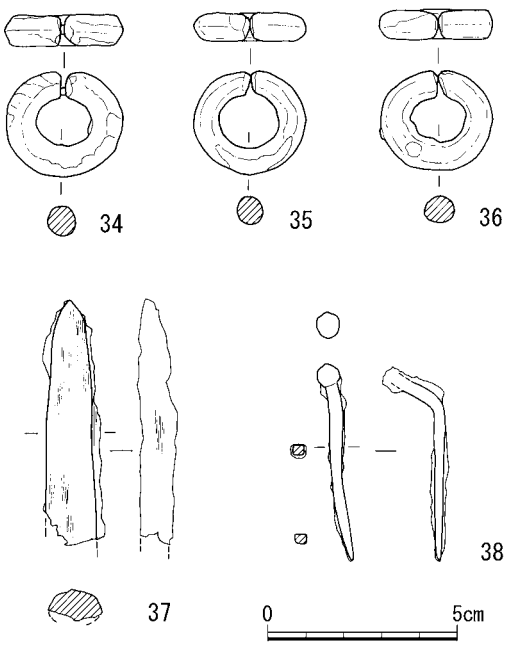
第12図　26号横穴出土土器実測図

みられる。胎土はともにⅣ群であり、焼成や色調の点でも非常によく似ている。31は算盤玉形の体部に外反する短い口縁が付く。焼成は高杯Ａ２点(29・30)に比べてやや良好である。

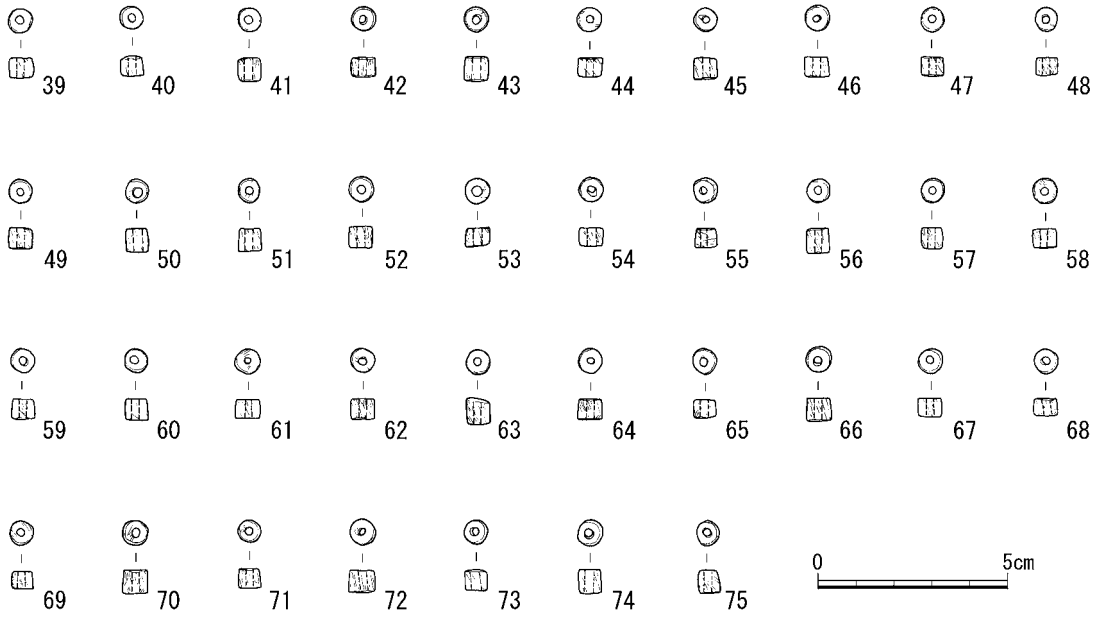
土師器は杯Ｂ１点(32)、鉢１点(33)である。32は口縁部は外上方に広がり、底部はやや丸底気味の形状を呈する。内面に放射暗文を施し、ナデに伴う痕跡が明瞭である。胎土はＡ群であるが、類似した器形を飛鳥地域などで見い出すことはできないことから在地系の杯と考える。33は口縁部がほぼ直立し、底部が丸底を呈する。底部外面に手持ちのヘラケズリを施すが、方向は任意で一定しない。胎土は30号横穴出土の土師器杯Ｂ(151)に類似する。

耳環は３点出土した(34～36)。34がわずかに大きいものの、ほぼ同形同大で、幅2.8～3.1cm、天地2.7cm前後、重量16～21gである。耳環の断面はいずれも円形である。34は明らかに金環であり、35は錆が著しいものの、部分的に金色を呈することから金環と思われる。また、36は錆が著しく、詳細は不明である。いずれも銅芯に鍍金あるいは箔貼する(注9)。

鉄製品は２点(37・38)ある。37は刀子と推定されるが、全体に木質が良好な状態で遺存しており、鉄製品そのものの形状は不明である。刃部が厚く両刃のようにもみえることから刀子ではないかもしれない。38は途中で折れ曲がっている。釘である可能性が高いが、ほかの出土例に比べ、やや細



第13図　26号横穴出土耳環・鉄器実測図



第14図　26号横穴出土玉類実測図

い。釘だとしても、26号横穴で出土した唯一の釘となることから、木棺や木櫃のようなものの存在は考えにくい。

玉類は全部で37点出土した（39～75）。法量は、直径5.0～6.1mm、全高4.4～6.0mm、孔径2.0～2.9cm、重量0.3～0.4gで、ほぼ同じである。直径に対して、全高が高いのが特徴で、石材も同一のものである。石材は滑石であろうか。個々の法量に関しては付表９を参照されたい。なお、玉類が出土したのは、今回の調査では26号横穴のみである。（筒井崇史）

（３）27号横穴（ＳＸ03）

①立地・調査時の状況

26号横穴の南西に隣接して検出した。先の２基と同様に、墓道先端が市道と交差し、調査区外へと延びていくため全容は不明である。全長は検出した範囲で9.0ｍを測り、主軸はＮ－22°－Ｗにとる。

②規模・構造（第15図）

ａ）墓道・羨道

先述のように墓道の全容は不明である。床面の標高は37.11～37.80ｍを測る。墓道先端から6.0ｍ付近で、それまで直線的に構築されていた側壁が屈曲し、奥壁方向へと撥形に広がっていく。このことから、この地点が玄門であると判断し、その奥側を玄室と捉えた。羨道の天井は全て崩落して残存していなかった。羨道･墓道の区分が不明瞭であるため各々の規模は確定できないが、検出した範囲では両者合わせて長さ6.0ｍ、幅0.45～0.9ｍを測る。

墓道並びに羨道の掘削を順次行い、羨門付近まで調査を実施したが、降雨により羨門付近の天井崩落土の堆積が約２ｍにわたって崩れ落ちてしまった。そのため、図面・写真等の記録が欠落することとなった。

ｂ）玄室

先述したように、側壁がわずかに屈曲し撥形に広がりを有する地点を玄門と捉え、そこから奥側を玄室とした。

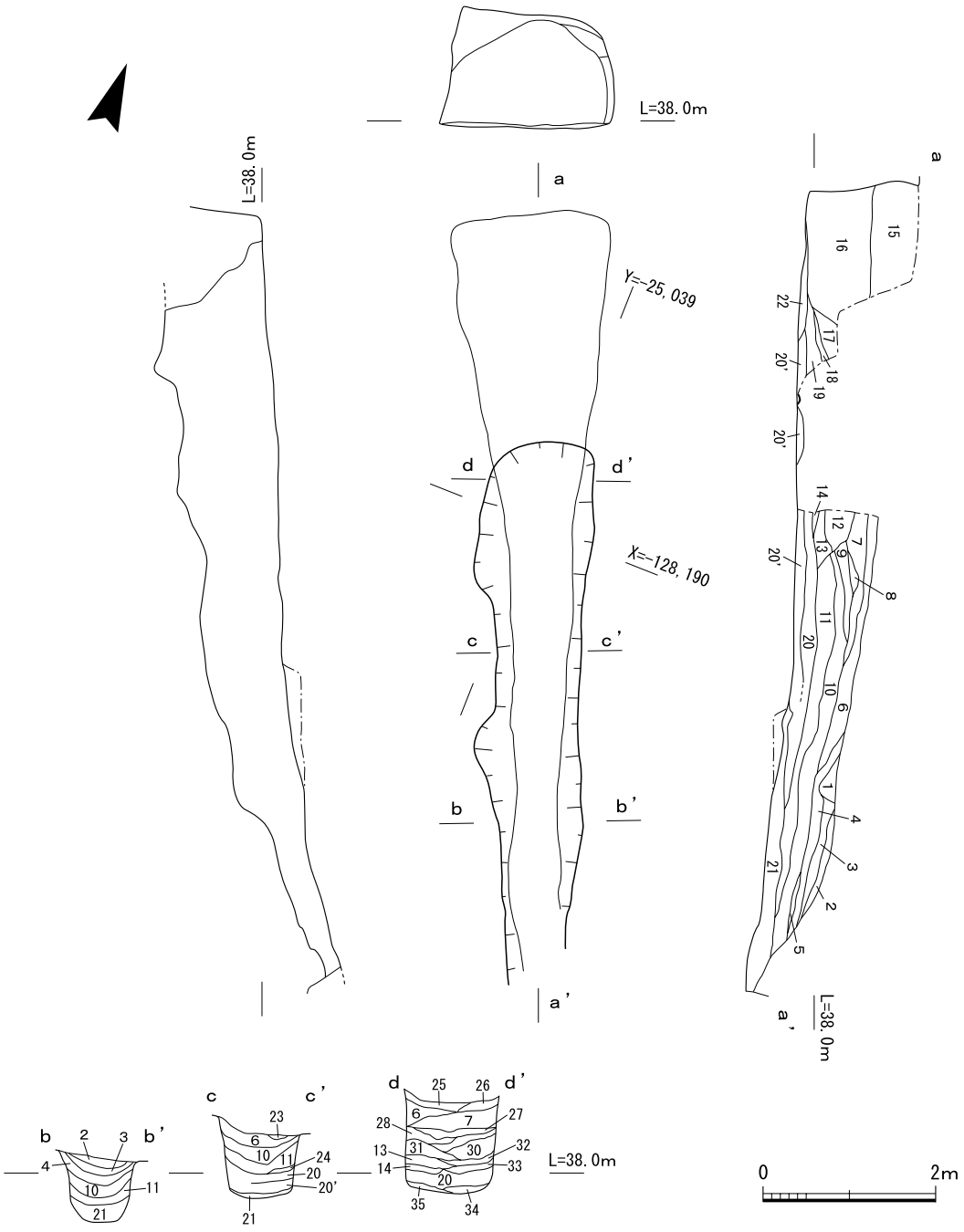
全長3.0ｍ、玄門幅0.9ｍ、最大幅1.9ｍ、床面の標高37.81～37.95ｍをそれぞれ測る。玄門の掘削を行ったが、天井との間に隙間を見出すことができず、玄室内部の調査に際しては、重機により天井を除去した後、実施することとなった。そのため、天井の形状等についての情報は得られなかった。

③土層堆積状況（第15図）

墓道は、地山と同系統の褐色系の砂質土で埋没していた。玄門付近で、奥壁方向に向かって緩やかに傾斜していく閉塞土と考えられる12・13層を確認していたが、先述のとおり記録をとる前に崩落してしまったため、詳細は不明である。だが、玄室内で確認した18～19層が対応する可能性がある。この上層は、締りのない天井崩落土が堆積していた。

④遺物出土状況（第16図）

玄門付近で須恵器蓋Ａ・Ｂ、杯Ａ・Ｂが多数出土した。蓋Ａ１点(80)はわずかな間層を介して下層から出土しており、副葬時期に時期差が存在すると考えられる。また、右側壁際には大甕(93)が安置されていた。口縁部をわずかに欠損するがほぼ完形であった。大甕(93)は、床面から0.2m程高い位置からの出土であり、その位置関係から、閉塞土の中に埋め込まれた様相を呈している。玄室の中央右側壁寄りからは耳環が２点出土している(94・95)。玄室奥側の東半部で鉄釘が集中して出土した。表面には木質の遺存が確認された。　　(奈良康正)



第15図　27号横穴平面・立面・土層断面図

27号横穴土層断面図土色

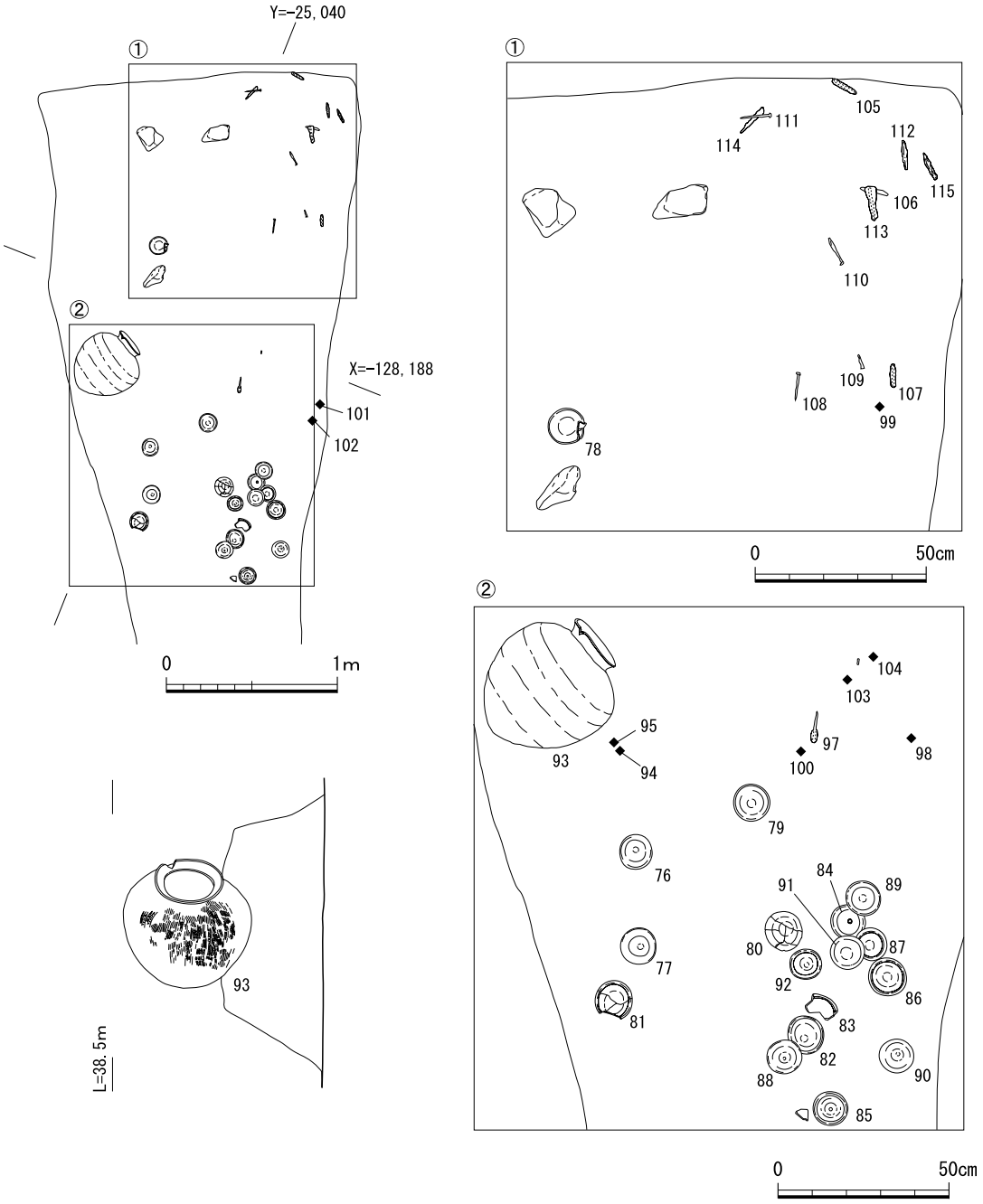
1. 褐色(10YR4/4)砂質土(細～粗砂)に明赤褐色(5YR5/8)(シルト～中砂が30%程、層状に混入)
2. 黒褐色(10YR3/2)砂質土(極細～粗砂)
3. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(極細～中砂、径0.5～2cm大の礫をごくわずかに含む)
4. 褐色(10YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径1～3cm大の礫をごくわずかに含む)
5. 褐色(10YR4/4)砂質土(極細～粗砂)
6. 赤褐色(5YR4/8)砂質土(極細～中砂)
7. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(細～粗砂、径1～5cm程の礫を多く含む)
8. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(極細～中砂、径1～3cm程の礫をわずかに含む)
9. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～粗砂、径1～7cm程の礫を多く含む)
10. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(シルト～中砂)
11. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～中砂)
12. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土(細～粗砂、径1～3cm程の礫を多く含む)
13. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(極細～中砂、径1～3cm程の礫を含む、締りがやや良い)
14. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(細～極粗砂、径0.5～1cm程の礫をわずかに含む)
15. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径1～3cm程の礫を含む、天井崩落土)
16. 15に同じ
17. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～粗砂、径1～3cm程の礫をわずかに含む)
18. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細～極粗砂、径1～2cm程の礫を非常に多く含む)
19. 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(細～極粗砂、径1～4cm程の礫を多く含む)
20. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～粗砂)
20'. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～中砂、締り良し、4.8m地点から奥は、径3～5cm程の礫を多く含む)
21. にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土(シルト～極粗砂、径1～4cm大の礫を多く含む)
22. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(細～極粗砂、径1～2cm程の礫をわずかに含む)
23. 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(極細～粗砂)
24. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(シルト～粗砂、径0.5～1cm程の礫を含む)
25. にぶい橙色(7.5YR6/4)砂質土(細～粗砂、径1～3cm程の礫を含む)
26. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～粗砂)
27. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(極細～粗砂、径1～4cm程の礫をわずかに含む)
28. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～中砂)
29. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～粗砂、径1～3cm程の礫を含む)
30. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～中砂、径1～2cm程の礫をわずかに含む)
31. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細砂、径3～4cm程の礫を含む)
32. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(極細～中砂)
33. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(細～粗砂、径3～4cm程の礫を含む)
34. 褐色(10YR4/4)砂質土(シルト～粗砂、径1～2cm程の礫を含む)
35. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～粗砂、径1～2cm程の礫をわずかに含む)

⑤出土遺物(第17図76～第19図115)

27号横穴から出土した遺物には土器・耳環ほか、鉄製品がある。土器は須恵器のみで、18点出土した。

須恵器の内訳は蓋Ａ５点(76～80)、杯Ａ３点(81～83)、蓋Ｂ４点(84～87)、杯Ｂ５点(88～92)、甕１点(93)である。蓋Ａは、いずれも口径11cm前後、器高3.5cm前後で、頂部外面はヘラキリ後不調整のＡｂである。80は焼け歪みが著しい。78はやや粗い胎土で、分類に当てはまらない。杯Ａは、いずれも口径11cm前後、器高３cm前後で、底部外面はヘラキリ後不調整のＡｂである。立ち上がりは低く、81・83は立ち上がりと受け部の端部がほぼ同じ高さである。81は焼成が甘く、浅黄色に焼き上がる。83の胎土はⅠ群であるが、断面の色調はやや淡い。蓋Ｂは杯ＢａとセットになるＢａである。いずれも口径９cm前後、器高3.5cm前後で、頂部外面に回転ヘラケズリを施す。つまみはいずれも乳頭状を呈する。胎土は後述する杯Ｂほど類似していないが、いずれも微細な砂粒を主体とする。84は長石などを少量含む。85はやや砂っぽい。86・87は黒色粒を少量含む。杯Ｂはいずれも蓋ＢａとセットになるＢａである。口径9.5cm前後、器高3.5cm前後で、底部外面はヘラキリ後不調整である。いずれの個体にも補助ケズリが確認できる。胎土は92が微細な砂粒を含むものの、杯Ｂ４点は胎土・色調・焼成ともよく類似する。93は口径18.7cm、器高39.8cmで、外面に格子状のタタキを施す。内面には同心円状の当て具痕が残る。

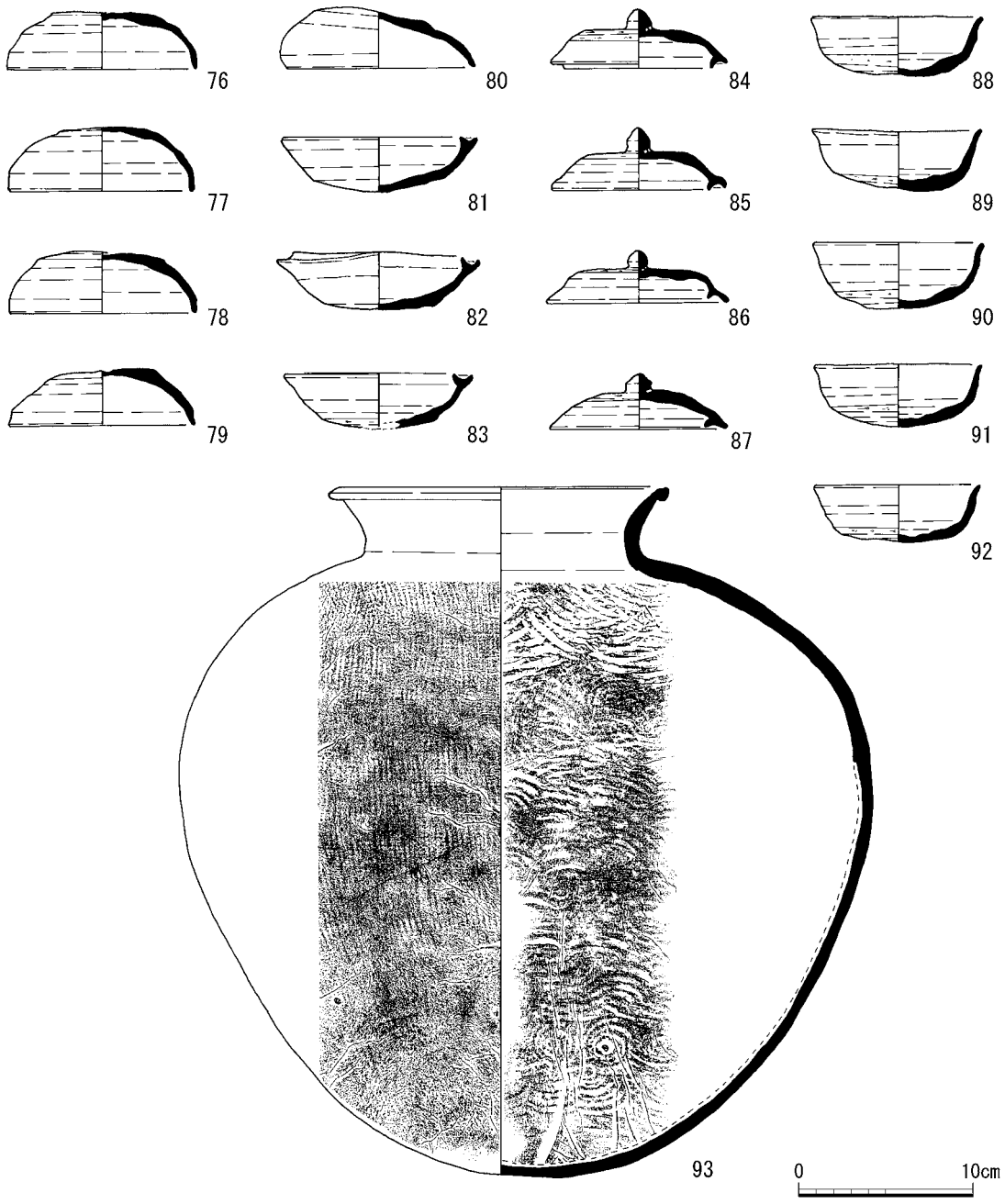
耳環は２点出土した(94・95)。ほぼ同形同大で、幅2.9cm前後、天地2.7cm前後、重量４ｇ前後である。ただし、他の横穴でみられるような銅芯に鍍金あるいは箔貼するものではなく、薄い銀の板を叩いて成形している中空の耳環である。松本百合子氏の整理によれば、こうした耳環は６世紀末から７世紀前半に限ってみられるという(注10)。



第16図　27号横穴遺物出土状況図

鉄製品には不明鉄製品(96)、釘19点(97～115)がある。96は表面に木質が明瞭に遺存しており、大きく屈曲していることから、鏃である可能性がある。釘は断面方形で、頭部を屈曲させるものがほとんどである。鍛造品と思われるが、科学的な分析による確認はしていない。錆化のため全体の形状が不明瞭なものも多く、完存するものもあるが、折損等によって部分的にしか残存しないものも多い。なお、釘については、ほかの横穴から出土したものもほぼ同じ特徴を持つことから、ここでは特記すべき事項についてのみ記述する。また、個々の法量については付表８を参照されたい。

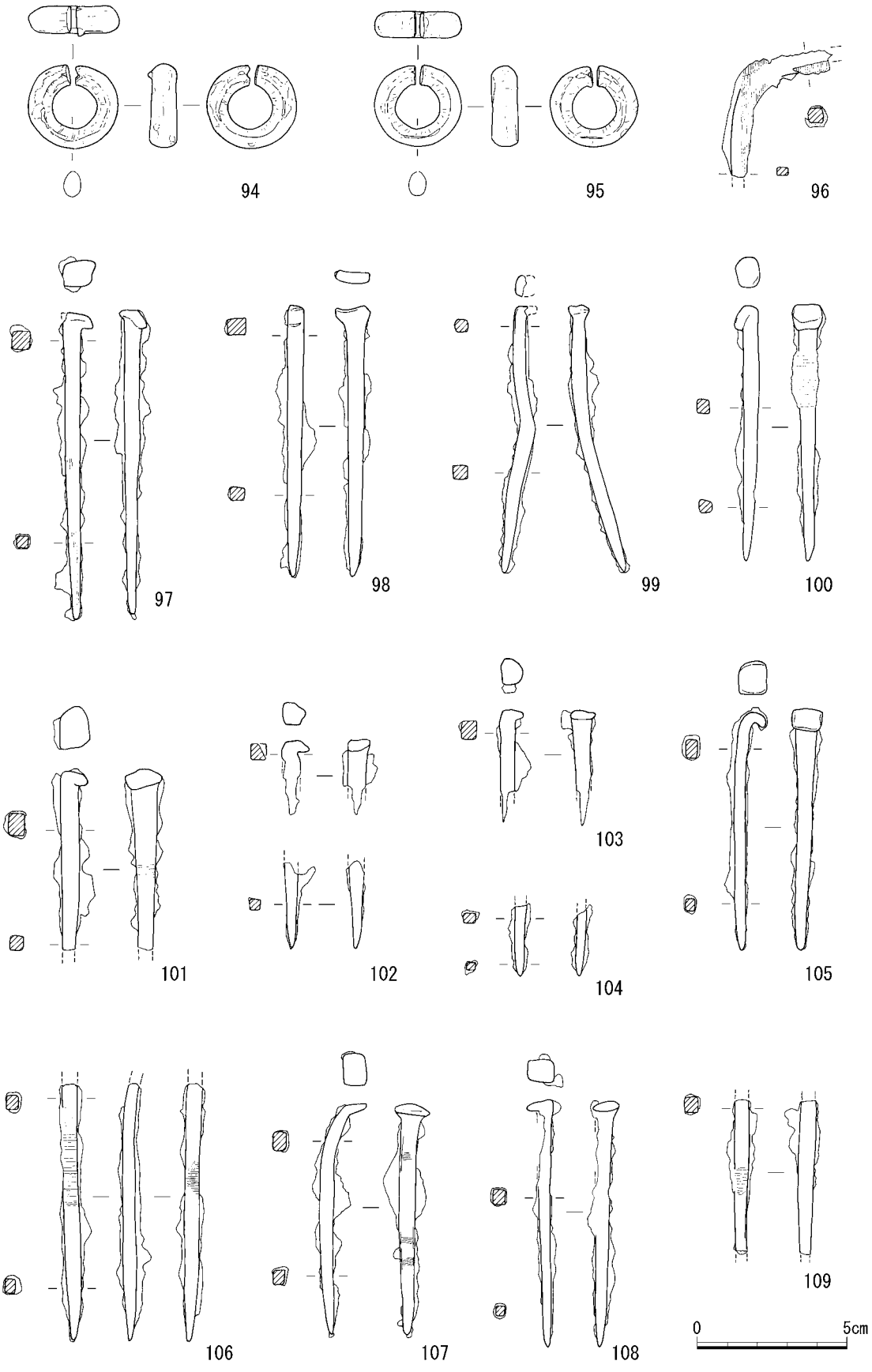
さて、27号横穴から出土した釘は全長が９cm程度のもの(97～100・106・110～115)とやや短



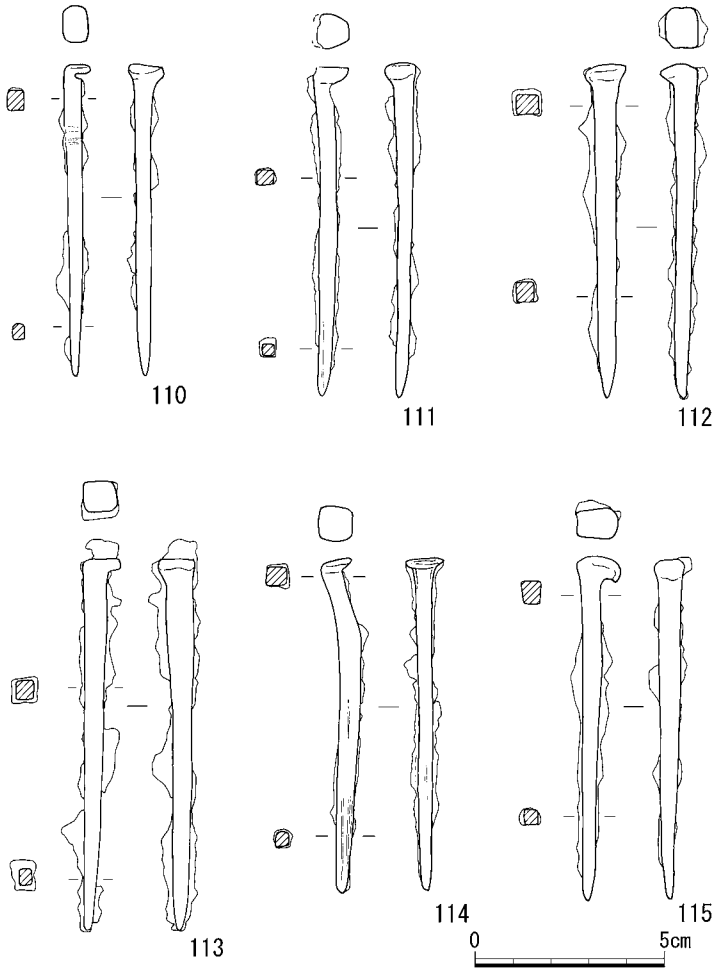
第17図　27号横穴出土土器実測図

い８cm程度のもの(105・107・108)とがある。頭部をほぼ直角に折り曲げるものがほとんどであるが、100・105は釘身と平行するように折り返す。頭部を確認できるものは16点、先端を確認できるものは15点あることから、少なくとも16点の釘が存在する。木質が遺存しているものが一定量出土していることから木棺に使用されたものと考える。

（筒井崇史）



第18図　27号横穴出土耳環・鉄器実測図



第19図　27号横穴出土鉄器実測図

（4）28号横穴（SX04）

①立地・調査時の状況

27号横穴の南西側で検出した。25～27号横穴が主軸をN－20°－W付近にとるのに対し、当横穴は主軸をN－11°－Wにとり、先の3基とはおよそ10°程の差異を有する。墓道先端がわずかながら調査区外へと延びていくため、全容は不明であるが、全長は検出した範囲で15.7mを測る。今回調査した横穴の中で、32号横穴と並び最も規模が大きい1基である。

②規模・構造（第20図）

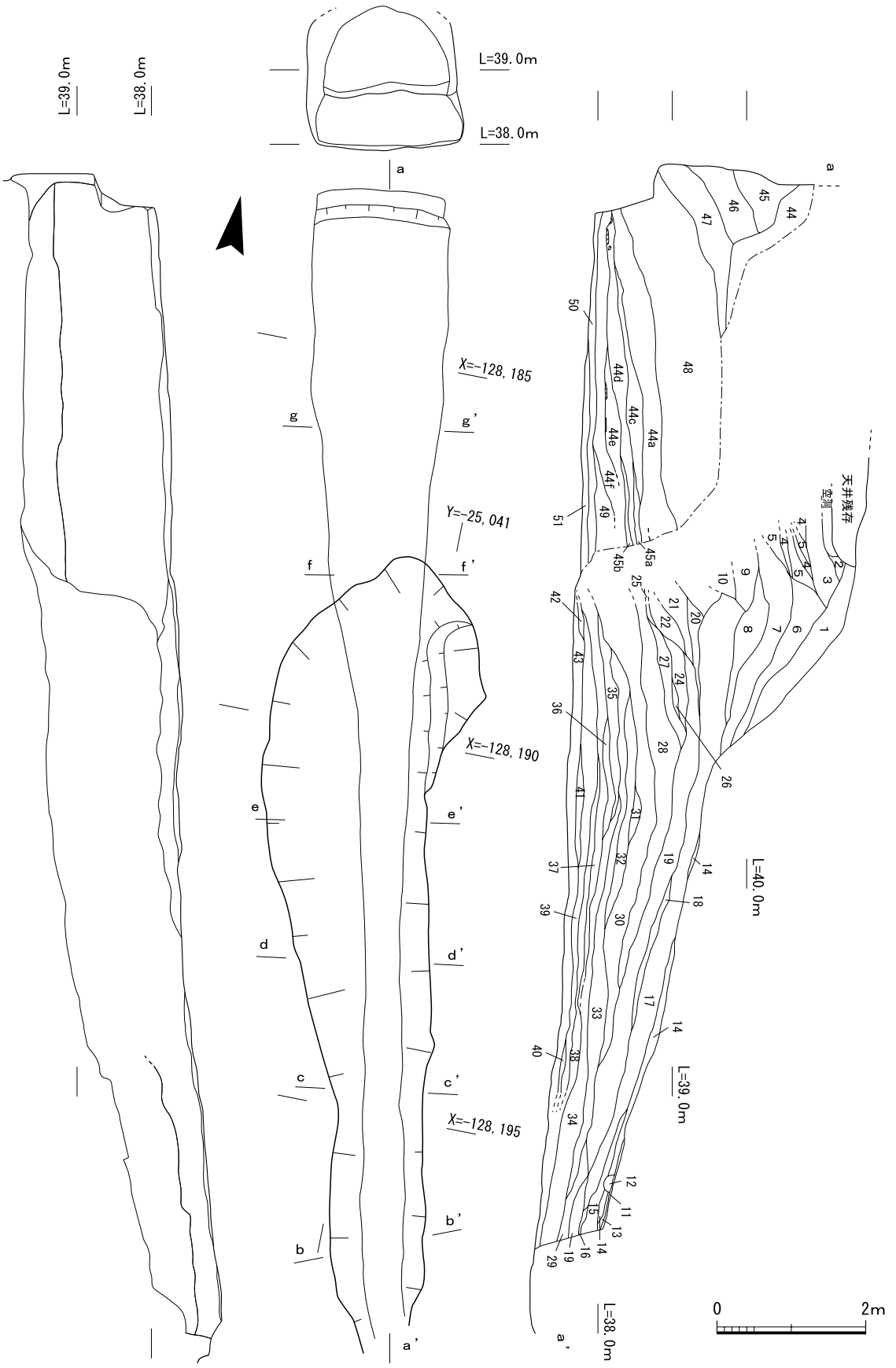
a）墓道・羨道

先述のように墓道の全容は不明である。床面の標高は37.20～37.66mを測る。検出した墓道の先端から10.2m付近で床面に、わずかではあるが段差が設けられている。この地点に対応するように右側壁が内側へと屈曲し、外側に開いていた側壁が左側壁とほぼ平行となる。このことから、この地点が玄門であると判断し、その前側を羨道・墓道と捉えた。羨道の天井は全て崩落して残存していなかった。羨道・墓道の区分が不明瞭であるため各々の規模は確定できないが、検出した長さは両者合わせて10.2mを測る。床面は、最大幅1.2m、最小幅0.45mをそれぞれ測る。

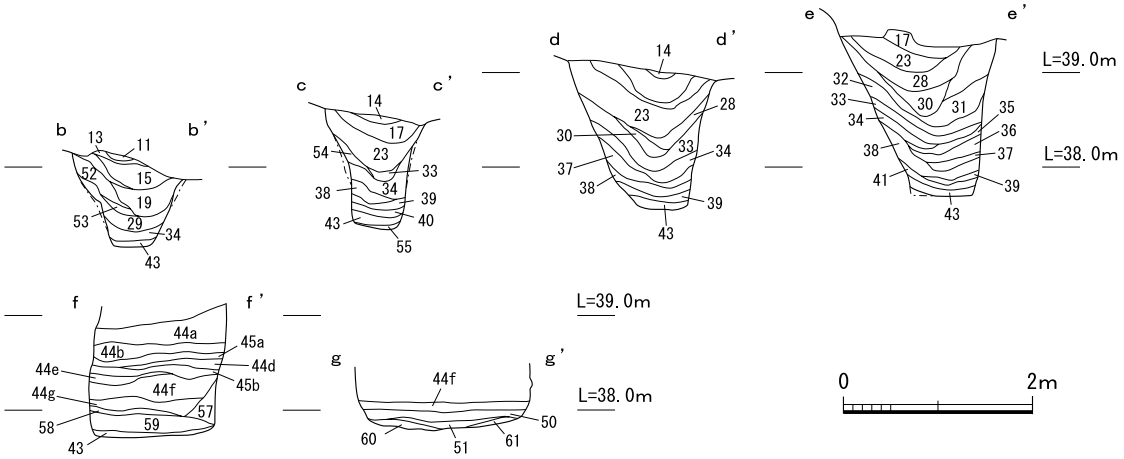
b）玄室

玄室の天井は大部分で残存していたが、玄室中央付近には大きな陥没痕が確認できた。その後、墓道・羨道部分の調査が終了し、玄室内の調査を開始したところ、内部は天井崩落土と陥没痕から流入した土砂で埋没し、空間はほとんど残されていないことが判明した。そのため、残存する天井は重機により除去し、玄室内部の調査を実施することとなった。そのため、天井の形状等の詳細は不明である。また、天井除去後、写真・図面等の記録を行う前に、堆積土の崩落が起きたため、その部分の記録保存が欠落することとなった。

先述したように、玄室と羨道の境界にはわずかではあるが段差が設けられており、床面が一段高くなっている。さらに右側壁にも屈曲が観察されることから、この地点までを玄室と捉えた。全長5.5m、玄門幅1.2m、最大幅1.8mを測り、床面の標高37.76～37.96mである。玄室内は、締り



第20図　28号横穴平面・立面・土層断面図



1. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～中砂)
2. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～極粗砂)
3. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～中砂、径１～４cm程の礫をわずかに含み、地山魂が混入する)
4. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(細砂)
5. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
6. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細砂)
7. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
8. 褐色(10YR4/4)砂質土(シルト～中砂、径１～３cm程の礫を含む)
9. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土と褐色(10YR4/4)砂質土の等質混入(細～極粗砂、径１～２cm程の礫を多く含む、地山魂も混入)
10. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
11. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(シルト～中砂)
12. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(細～極粗砂)
13. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径１～２cmの礫をわずかに含む)
14. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(シルト～粗砂、径1～２cmの礫をわずかに含む)
15. 暗褐色(10YR3/3)砂質土(シルト～粗砂、径１～３cmの礫を多く含む)
16. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(シルト～粗砂)
17. 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土(シルト～中砂、径１～３cmの礫をわずかに含む)
18. 褐色(10YR4/4)砂質土(シルト～中砂)
19. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(シルト～中砂、径２～５cmの礫を多く含む)
20. 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土(極細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
21. 褐色(10YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
22. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極細～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
23. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(シルト～中砂、径１～２cmの礫をわずかに含む)
24. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～粗砂、径１～７cm程の礫を多く含む)
25. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細～中砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
26. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
27. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(細～中砂、締りあり)
28. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土(シルト～細砂)
29. 褐色(10YR4/4)砂質土(シルト～粗砂、径1～８cmの礫を多く含む)
30. 褐色(10YR4/6)砂質土(細～中砂、径２～３cmの礫をわずかに含む)
31. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径２～３cm程の礫を含む)
32. 赤褐色(5YR4/8)砂質土(シルト～中砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
33. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～中砂)
34. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～細砂)
35. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(極細～粗砂)
36. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径２～５cm程の礫を多く含む)
37. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(シルト～細砂、径1～２cm程の礫をわずかに含む)
38. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～細砂)
39. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～極細砂)
40. 褐色(7.5YR4/3)砂質土(シルト～中砂、径1～３cmの礫を含む)
41. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(シルト～粗砂、径1～２cm程の礫をわずかに含む)
42. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
43. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土(細～極粗砂、径1～２cmの礫を含む)
44a･d･f. にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(細砂、径１～２cmの礫を多く含む、締りなし)
44b･c･e. にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土、明黄褐色(10YR6/6)砂質土等の天井崩落土の堆積(細～粗砂、径１～５cm程の礫を非常に多く含む、締りなし)
45a. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)崩落土
45b. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～細砂、流入土)
46. にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)崩落土
47. 橙色(7.5YR6/6)砂質土(細～中砂)にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫を多く含む)の互層堆積、崩落土
48. 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)崩落土
49. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
50. にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土(細～極粗砂、径1～４cm程の礫を含む、良く締まる)
51. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～粗砂、径1～３cm程の礫を含む)
52. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(細砂)
53. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(シルト～粗砂)
54. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～粗砂)
55. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(シルト～極粗砂、径1～４cmの礫を多く含む)
56. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(細～中砂、径１～３cm程の礫を含む)
57. 灰白色(10YR8/2)砂質土(中～粗砂、径１～２cm程の礫を含む、壁崩落土)
58. 褐色(10YR4/4)砂質土(極細～粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
59. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む、良く締まる)
60. 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(シルト～極粗砂、径0.5～１cm程の礫を含む)
61. にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土(極細～粗砂)

第21図　28号横穴土層断面図

のない天井崩落土で埋没していた。奥壁には、棚状施設が削り出されていた。床面からの高さはおよそ0.8mを測り、幅約1.7m、奥行0.2～0.3mを測る。上面には薄く天井崩落土が被っていたが、棚上に載せられている遺物は確認できなかった。奥壁は垂直に立ち上がっていた。

③土層堆積状況（第20・21図）

玄室内は締りのない天井崩落土及び陥没痕からの流入土で埋没していた。43層は墓道・羨道築造時の整地土と考えられる。玄室内では、床面の段差を解消するために51層で平坦面を形成した後、その上にさらに50層を全面にわたり敷き詰めている状況が確認された。

④遺物出土状況（第22図）

玄室内での埋葬面は４面確認された。玄室内に堆積した複数回にわたる天井崩落土の44a層の上面、44c層の上面、44e層の上面、そして50層上面である。

44a層の上面からは須恵器壺(121)が単体で出土している。体部はほぼ完存するが、頸部から上を欠損していた。44c層の上面では、土師器杯２点(126･127)を合わせ口に重ねていた(第22図③)。44e層の上面では、保存状態の悪い人骨片がわずかに出土した。50層上面では奥壁際、中央付近の東・西壁際の３か所で人骨が集中している地点を確認した。人骨はいずれも保存状態が悪く、長管骨を残すのみであった。解剖学的な位置関係は保っておらず、方向を揃えるように配置されることから、改葬に伴い集骨されたと考えられる。西壁際で出土した一群の中には、頭蓋骨の存在を示唆する土の変色箇所が検出され、その傍からは耳環が１点(129)出土している。墓道に堆積する17層掘削中に埴輪片が出土しているが、上部から転落して埋没したと考えられる。

（奈良康正）

⑤出土遺物（第23図116～第24図142）

28号横穴から出土した遺物には土器・耳環のほか、鉄製品がある。土器には横穴に伴うもののほか、平安時代の土師器が４点出土した。

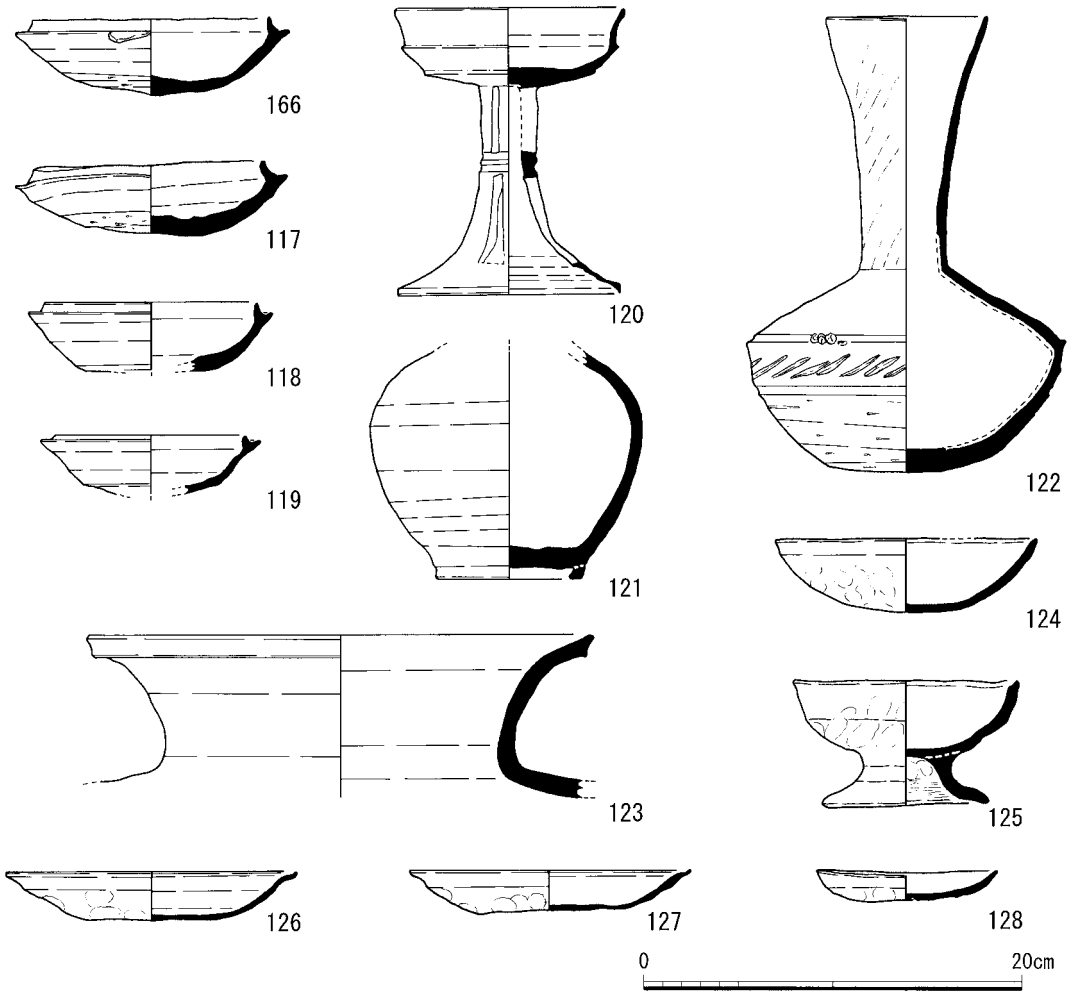
土器には須恵器８点、土師器１点がある。須恵器の内訳は、杯Ａ４点(116～119)、高杯Ｂ１点(120)、壺１点(121)、長頸壺Ｃ１点(122)、甕１点(123)である。杯Ａ４点のうち、116・117は口径13.5cm前後、器高4.0cm前後で、底部外面に回転ヘラケズリを施すＡａである。116と117の胎土・色調は類似するが、116は黒色粒がやや少ない。117と胎土・色調・焼成が類似するものとして26号横穴出土の杯Ａ(25)がある。118・119は口径12cm前後、器高3.0～3.5cmで、ヘラキリ後ナデ、もしくはヘラキリ後不調整のＡｂである。118の胎土はやや砂っぽい。120は脚柱部にスカシを有するＢａに分類できるが、杯部外面に文様をもたない。脚柱部のスカシは２段３方向であるが、３方向の例は少なく珍しい。また、脚柱部の下半部はほかの例に比べて薄い作りである。胎土は砂粒をほとんど含まない、精良なものである。121は、肩部が丸くおさまる壺の体部で、口頸部は欠損のため不明である。高台を有しており、体部や高台の形状から、116～120・122などの土器よりも新しく、奈良時代のものと思われる。出土層位からも横穴に伴う遺物ではない可能性が高い。122は脚台等を有さない長頸壺で、底部外面は回転ヘラケズリによって丸底気味に仕上げられている。体部最大径付近に長さ２cm、幅0.3cm程度の刺突文をやや粗い間隔で施し、その上



第22図　28号横穴遺物出土状況図

下に沈線を１条ずつ巡らす。123は口頸部内外面の一部と肩部外面の大半に自然釉が厚く付着する。口縁端部に面を持ち、大きく外反する。体部が部分的に遺存するが、内外面ともタタキ等の痕跡は認められない。

土師器には高杯Ｂ１点(125)がある。やや深手の椀形の杯部に、短くて大きく開く脚部が付き、



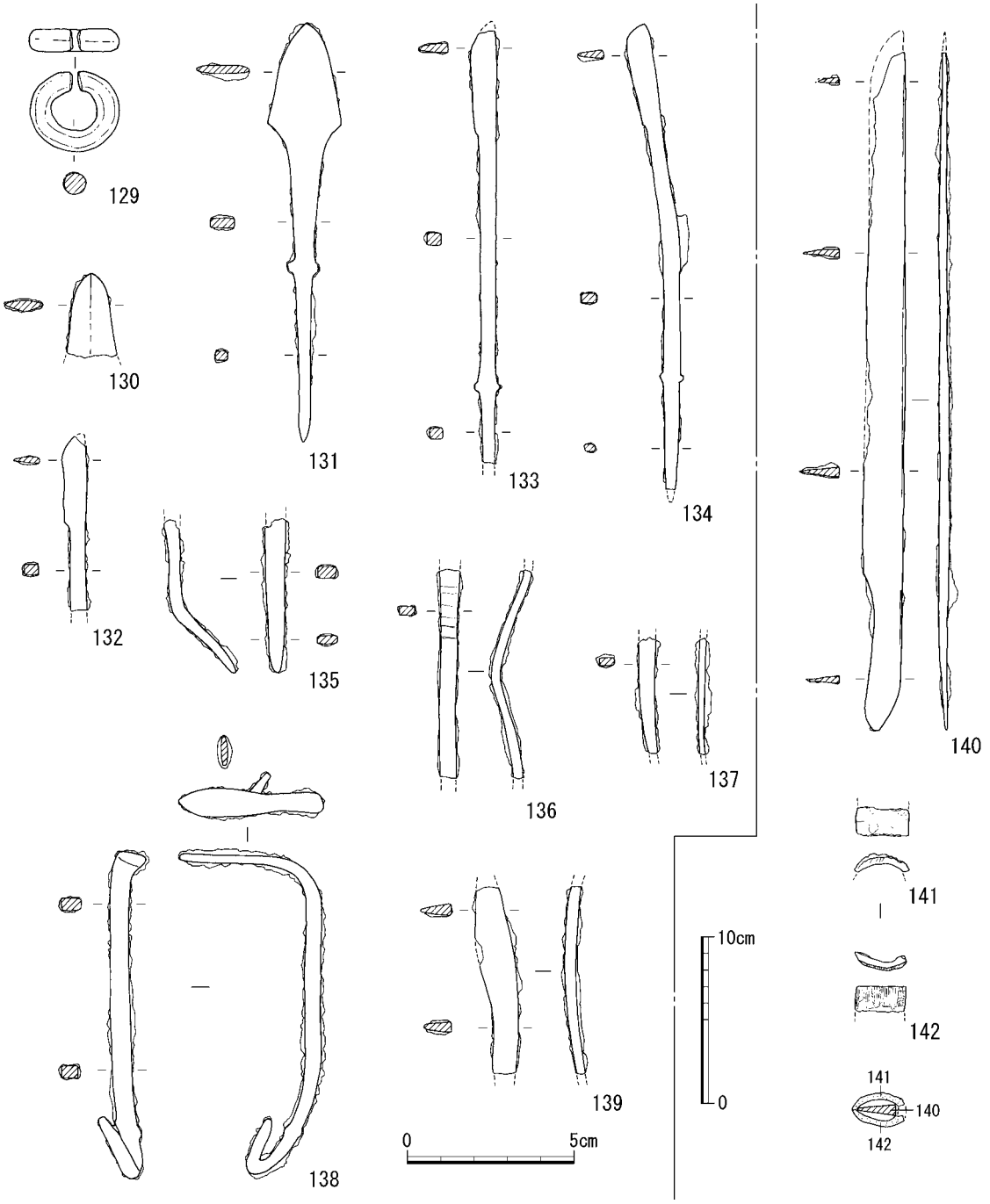
第23図　28号横穴出土土器実測図

口縁端部は内傾する。脚部内面にはハケを施す。胎土には雲母・赤色斑粒を含む。飛鳥地域ではあまり類例のない器形であり、在地系の器形と考える。

平安時代の土師器としては、杯もしくは椀(124)１点、杯２点(126・127)、小型の皿１点(128)がある。124は口縁部にヨコナデを施し、内面にナデを施す。外面はユビオサエで成形した後にナデを施す。胎土に微細な砂粒を含むが、127よりは砂粒がやや多い。器形から時期を判定しにくいが、126・127とほぼ同一面で出土している。126・127は、口径15cm前後、器高2.5cm前後を測り、ほぼ同形同大である。口縁部にヨコナデを施し、口縁端部をつまみ上げる。いわゆる「て」字状口縁を呈する。胎土は126が砂粒を含むのに対して、127は微細な砂粒を含むものの精良なものである。器形等から平安時代中期ごろのものであろう。128は小型の皿である。胎土に石英や長石などの砂粒を含む。耳環は１点(129)出土した。129は錆化のために種類は不明である。

鉄製品には鉄鏃９点(130～138)、不明鉄製品１点(139)、鉄刀とその附属具(140～142)がある。鉄鏃には鏃身が三角形を呈するのもの(130･131)と片刃の長頸鏃(132～134)、柳葉状のもの(138)の３種がある(注11)。131はほぼ完存するもので、全長13.6cm、鏃身最大幅2.2cm、鏃身最大厚さ0.2cmである。131ほか、133･134で刺状関が確認できる。134は頸部の途中で屈曲している。このほか、

鉄鏃の頸部や茎と思われる破片がある(135～137)。135や136も途中で屈曲している。これらの屈曲は埋没過程などで生じたものと思われるが、138は鉄鏃の頸部がほぼ直角に曲げられたり、茎が完全に折り返されていることから、意図的に曲げられたものと思われる。このように意図的に大きく曲げられた鉄鏃は、35号横穴や39号横穴でも出土している。不明鉄製品(139)は、部分的に屈曲が認められるが、刀子の可能性もある破片である。140は鉄刀である。切先のほか、刃部の一部も欠損し、残存長は40.7cmである。刃部側に斜め関を有し、茎は蕨手様を呈する。茎に目釘孔等は確認できない。141･142は鉄刀の周辺で出土したもので、木質が明瞭に遺存しているが、形状等から鎺と考える。　(筒井崇史)



第24図　28号横穴出土耳環・鉄器実測図

（５）ＳＸ20

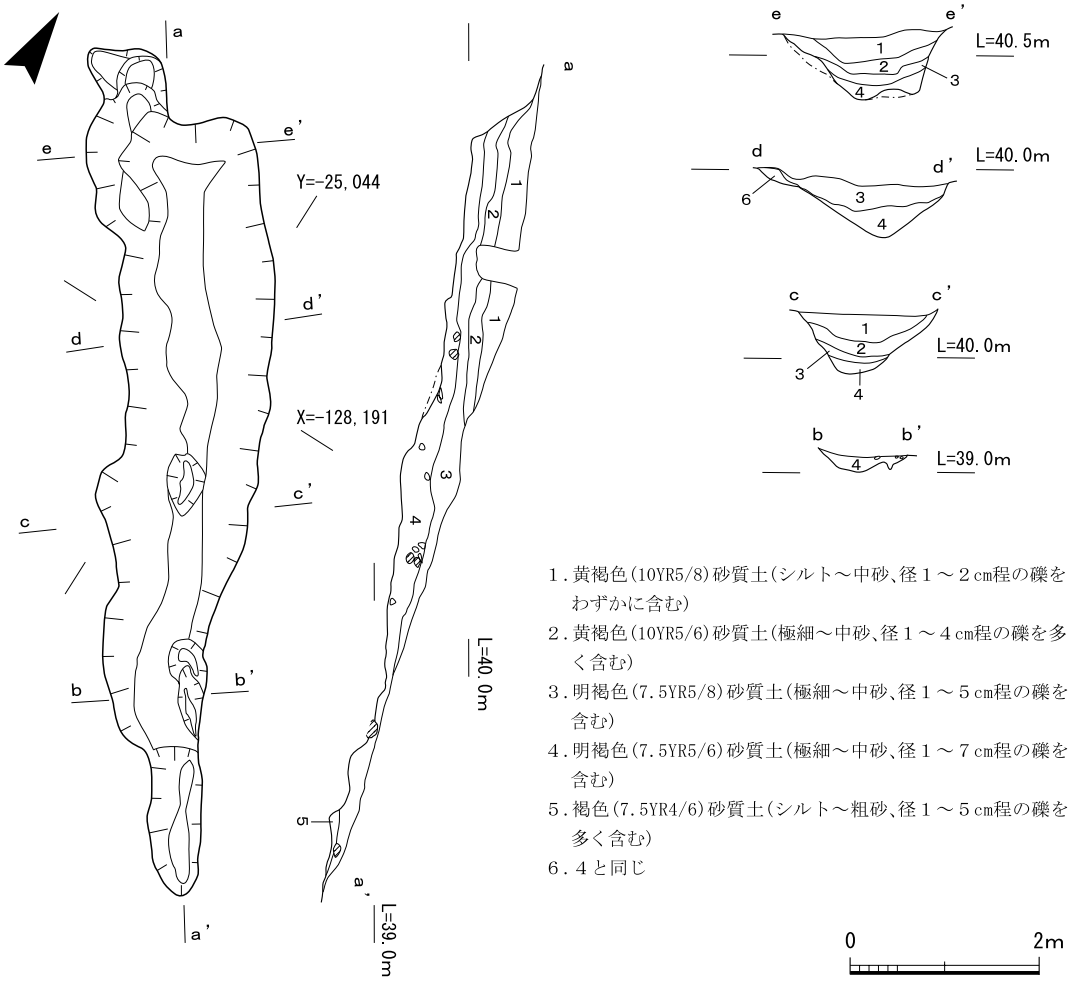
①立地・調査時の状況

28号横穴の南東に近接して検出した。主軸をＮ－32°－Ｗにとり、全長は9.0mを測る。検出時の状況から横穴と判断し、調査を進めたが、得られた成果から横穴ではないとの結論に至った。

②規模・構造（第25図）

遺構先端と判断した地点より順次掘削を実施し、堆積状況の確認を行った。底面の標高は38.51～40.08mを測るが、先端から奥壁まで丘陵に一致して傾斜していた。底面は幅0.3～0.5mの間で一定せず、凹凸や小規模な抉れ等が確認できた。玄室を意識した平坦面も形成されていなかった。埋土は1.0～5.0cm程の礫を含む単純な５層の堆積をなしており、閉塞に伴うと考えられる堆積も確認できなかった。遺物は、最下層から染付椀１点が出土したのみである。

ＳＸ20の上部では、丘陵がわずかであるが谷上に窪んでおり、形状及び堆積状況から、この窪んだ地点に雨水等が集約され、それが流れ落ちる作用により浸食された溝状遺構であると判断した。（奈良康正）



第25図　ＳＸ20平面・土層断面図

（６）29号横穴（ＳＸ18）

①立地・調査時の状況

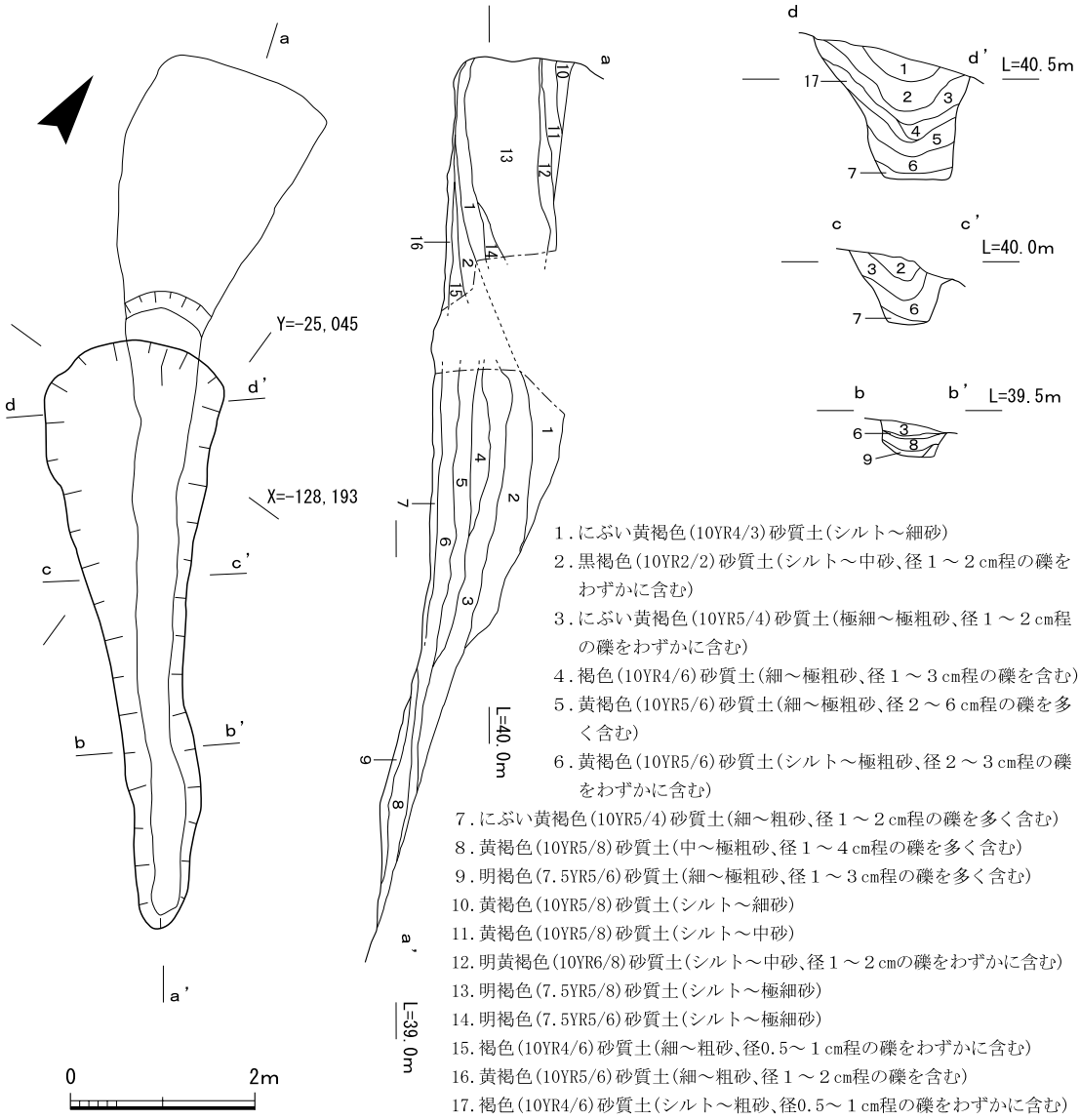
ＳＸ20の南東に近接して検出した。全長は9.4mを測り、全体を検出できた横穴の中では最小規模となる。墓道・羨道と、玄室の境界付近で主軸が屈曲しており、墓道・羨道の主軸はＮ－36°－Ｗにとるが、玄室の主軸はＮ－17°30′－Ｗをとる。

玄室中央付近でＳＸ20と切り合い関係にあり、29号横穴が先行する。また、ここから奥の玄室天井は、遺構検出段階に陥没痕として確認していた。

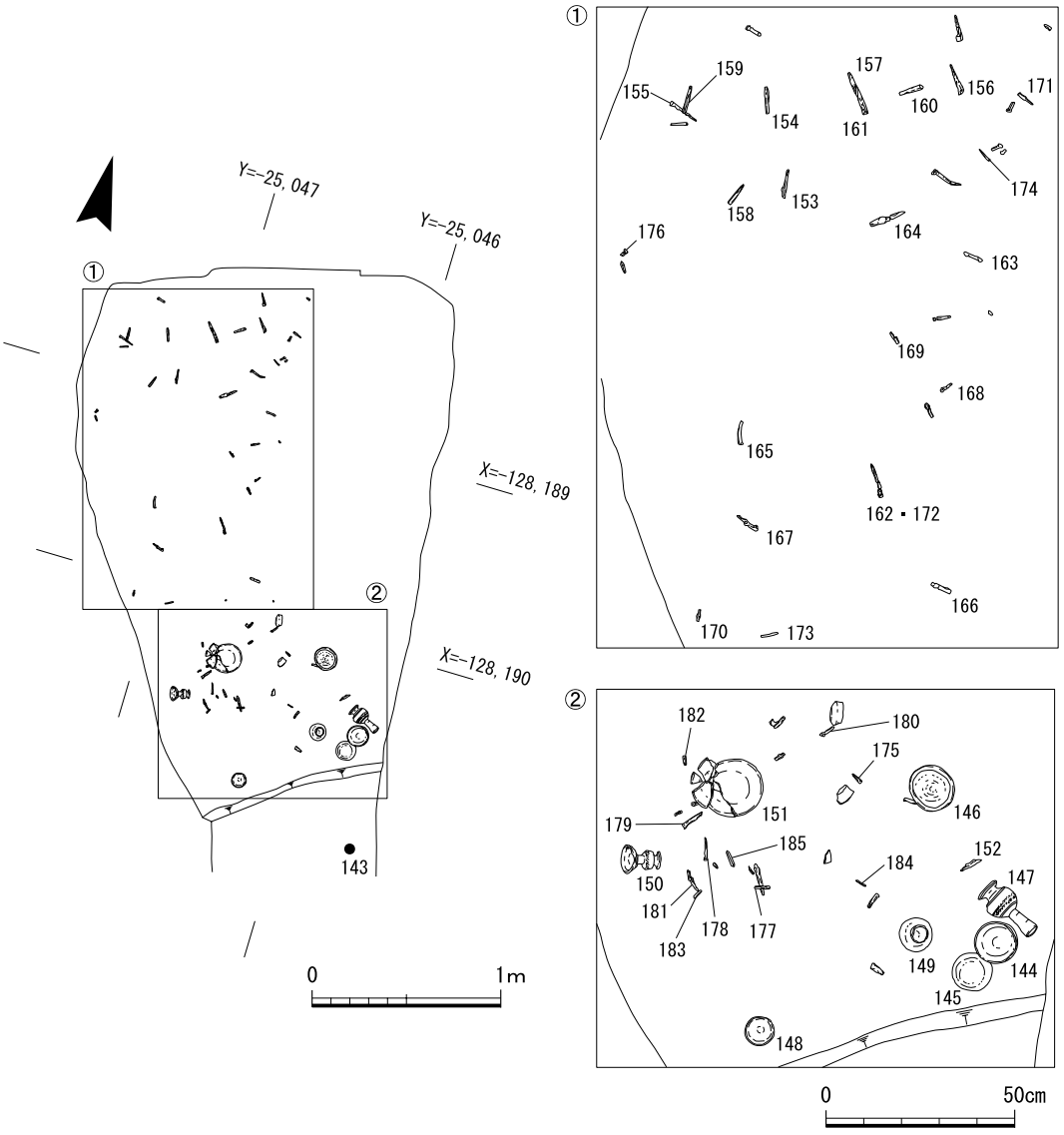
②規模・構造（第26図）

ａ）墓道・羨道

調査区内で墓道の先端までを検出した。床面の標高は38.79～39.38mを測り、わずかに蛇行しながら斜面上方へ延びていく。墓道先端から46.9mで、主軸が北で西へと20°程振れるとともに、



第26図　29号横穴平面・土層断面図



第27図　29号横穴遺物出土状況図

床面にわずかではあるが段差が設けられていた。この地点が玄門に相当すると考え、ここまでを羨道・墓道と捉えた。羨道の天井は玄門付近の一部が残存していたのみである。羨道・墓道の区分が不明瞭であるため各々の規模は確定できないが、検出した長さは両者合わせて6.9mを測る。幅は0.25～1.1mを測る。

b）玄室

先述のように、主軸の屈曲と、墓道先端から6.9m付近で床面に設けられた段差から、玄室の範囲を特定した。全長2.5m、玄門幅1.1m、最大幅2.0mを測る。床面の標高は39.49～39.63mを測り、玄門部と羨道の床面との比高は、およそ0.1mを測る。奥壁はほぼ垂直に立ち上がるが、天井は北東側に隣接するＳＸ20と切り合う部分は削平されており、その奥は崩落していた。そのため、横断面の形状等は不明である。

③土層堆積状況（第26図）

ＳＸ20による削平を受けているため、玄門付近の堆積状況については不明である。玄室内は奥

壁に向かって傾斜するシルトから極細砂(10～14層)の堆積が確認され、雨水等による流入土であると考えられる。16層は築造時の整地土と判断される。15層が閉塞に伴う堆積と考えられるが、先述のように玄門付近の詳細は不明である。

④遺物出土状況(第27図)

埋葬面は１面と考えられ、遺物は16層上面から出土した。土器類は玄門付近に集中しており、須恵器杯Ａ・蓋Ａのほか、台付瑞、長頸壺Ｂ、短頸壺等が出土した。鉄製品は西半部の奥壁寄りに集中しており、木質の遺存する鉄釘が多数を占めることから、木棺等の存在が想定される。

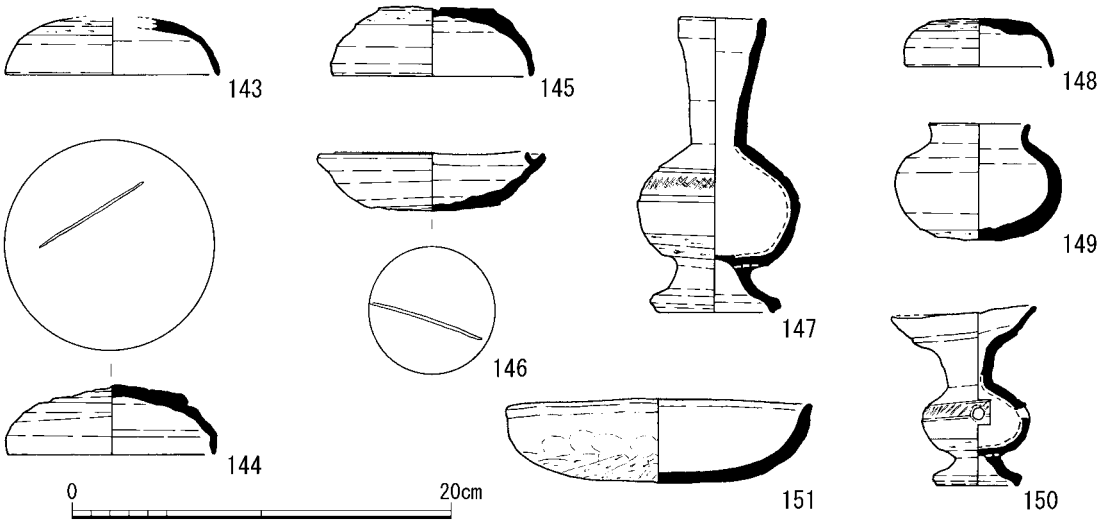
(奈良康正)

⑤出土遺物(第28図143～第30図185)

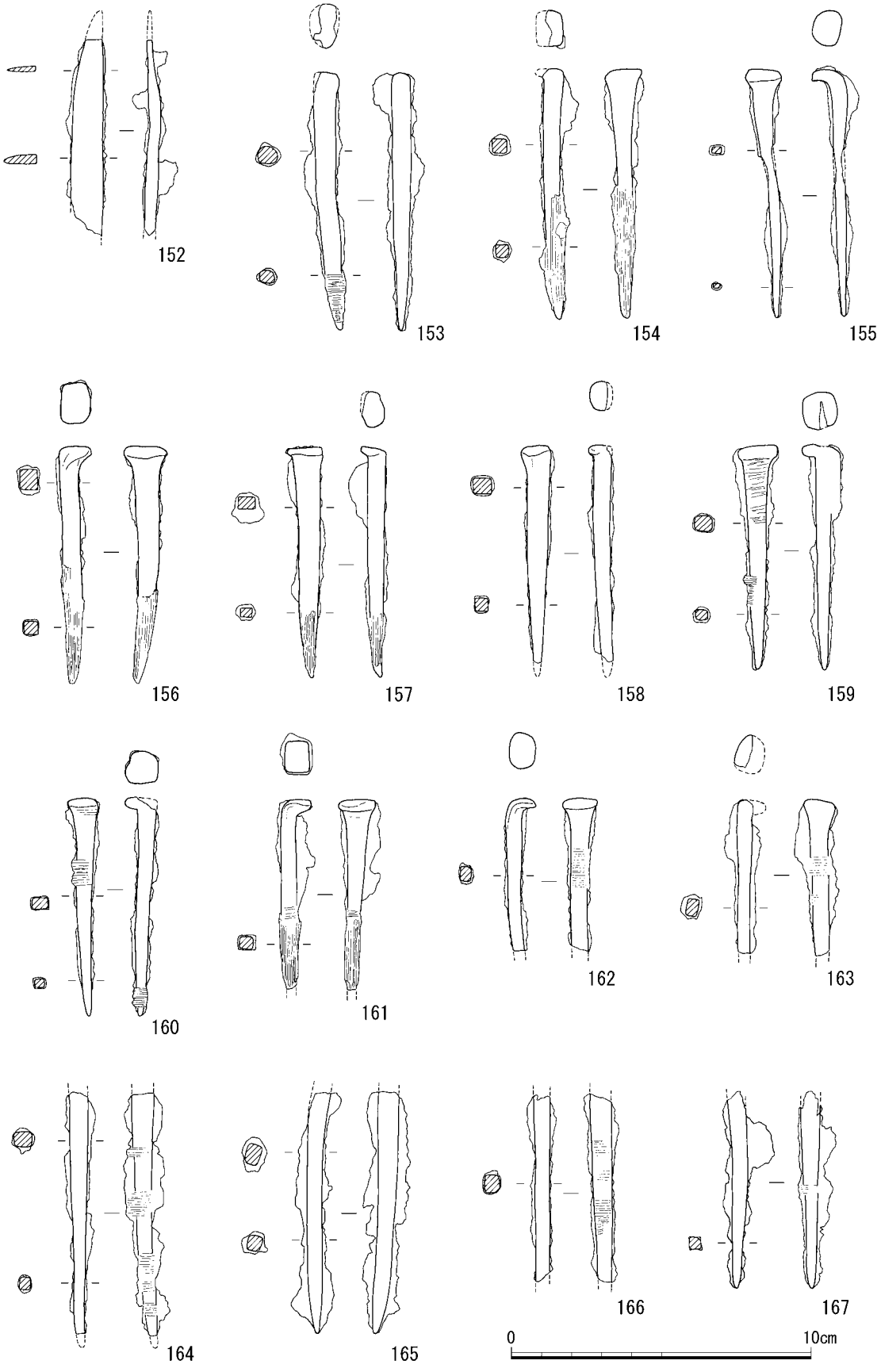
29号横穴から出土した遺物には土器のほか、鉄製品がある。土器は須恵器８点、土師器１点が出土した。

須恵器は蓋Ａ３点(143～145)、杯Ａ１点(146)、長頸壺Ｂ１点(147)、壺蓋１点(148)、短頸壺１点(149)、台付瑞１点(150)である。これら須恵器８点のうち、143の胎土が若干異なるものの、残る７点は胎土・色調・焼成がいずれも類似する。蓋Ａは、いずれも口径11cm前後であるが、やや口径の大きい143は頂部外面に回転ヘラケズリを施すＡａ、144・145はヘラキリ後不調整のＡｂである。144は頂部に「一」のヘラ記号がみられる。また、145は補助ケズリが確認できる。146は底部外面がヘラキリ後不調整のＡｂで、口縁部の立ち上がりと受け部が短い。底部外面には「一」のヘラ記号がある。同じヘラ記号を有する144と146はセットになる可能性もある。147は小型の長頸壺Ｂで、体部上半に沈線を２条施し、その間にヘラで「×」字状に刺突文を施す。脚台にスカシ等は認められない。148は法量などから壺蓋と判断した。小型の短頸壺である149とセットになる可能性がある。150は短い「ハ」字状に開く台を有する。体部中位に直径0.65cmの円形の穴を穿つ。また、沈線を２条施しその間に刺突文を施す。やや焼け歪みが認められる。

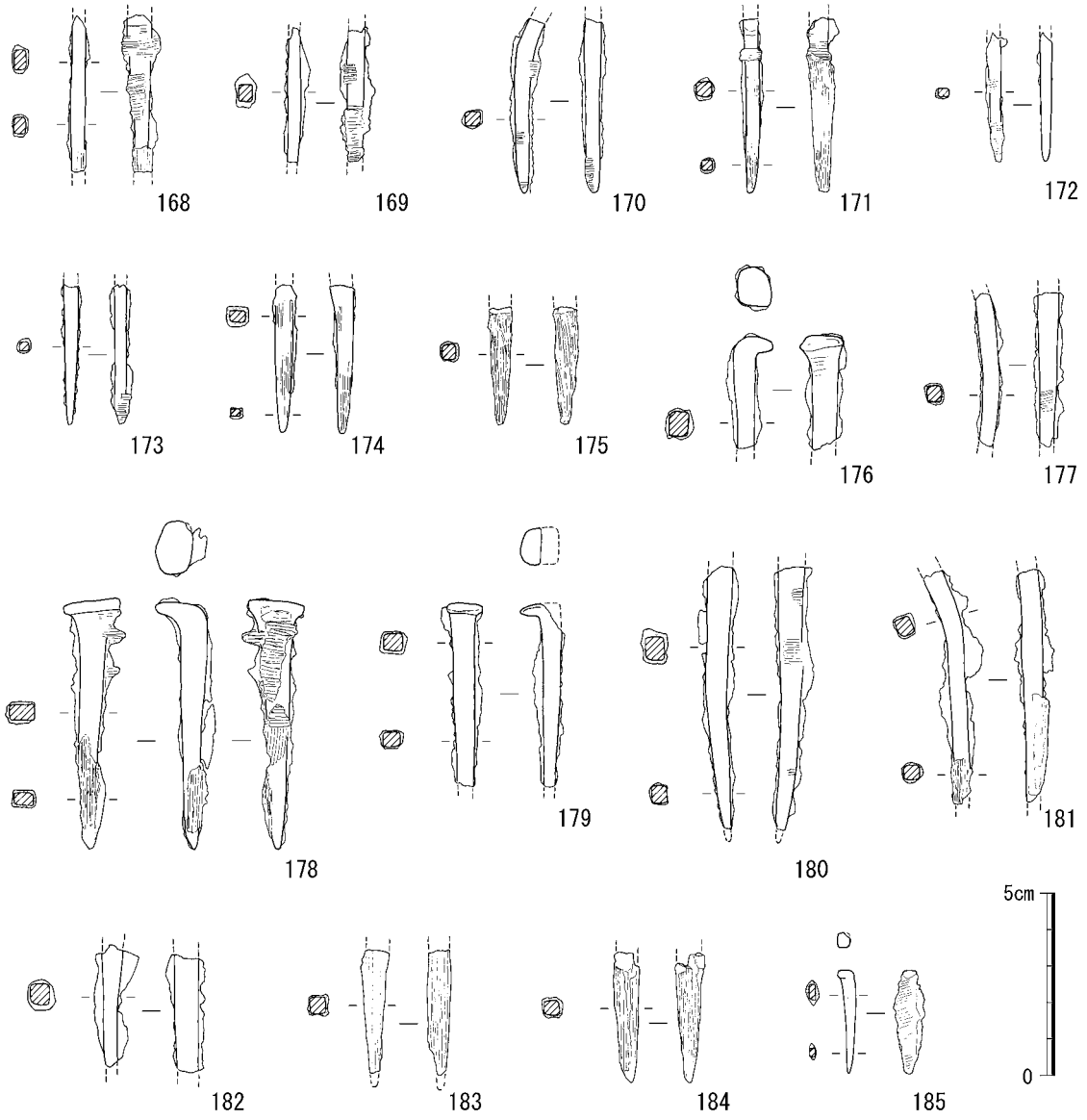
土師器は杯Ｂ１点(151)のみである。151は口縁部をわずかに外反させる。内面は摩滅のため暗



第28図　29号横穴出土土器実測図



第29図　29号横穴出土鉄器実測図１



第30図　29号横穴出土鉄器実測図２

文の有無は不明である。平底気味の底部外面にはケズリを施す。胎土は26号横穴出土の土師器鉢(33)に類似する。都城系を模倣した在地系の土器であろうか。

鉄製品には刀子１点(152)、釘33点(153～185)がある。152は切先と刀身の一部、茎などを欠損するが、刀子と推定している。釘は断面方形で、頭部を屈曲させるものである。出土した釘は推定されるものも含めると、全長が８cm前後のもの(153～156・164・165)と７cm前後のもの(157～160・167・178・180)の大きく２群に分けることができる。頭部を確認できるものは14点、先端を確認できるものは20点あることから、少なくとも20点の釘が存在する(185は除く)。木質の残るものが多い。木質は、先端側では縦方向の木目、頭部側では横方向の木目であることが確認できる。釘の点数や検出状況などから木棺の存在が想定できる。なお、185は全長2.85cmの小型の釘である可能性がある。　(筒井崇史)

（７）30号横穴（ＳＸ05）

①立地・調査時の状況

29号横穴の南西に隣接して検出した。墓道先端が調査区外へと延びていくため、全容は不明である。全長は検出した範囲で11.6mを測り、主軸はＮ－44°－Ｗにとる。

②規模・構造（第31図）

ａ）墓道・羨道

先述のように墓道の全容は不明である。床面の標高は37.29～37.94mを測る。両側壁ともに、羨道から玄室までほぼ直線的に延びており、顕著に屈曲することがない。このため、副葬遺物の出土位置から玄室の範囲を推測することとした。横断土層断面ｅ－ｅ’を作成した地点付近を限りに遺物の出土が見られなくなることから、この地点を玄門であると判断し、そこから前側を羨道・墓道と捉えた。羨道の天井は全て崩落して残存していなかった。最大幅は0.95m、最小幅は0.3mをそれぞれ測る。羨道・墓道の区分が不明瞭であるため各々の規模は確定できないが、検出した範囲では両者合わせて7.4mを測る。

ｂ）玄室

全長4.2m、玄門幅0.95m、最大幅1.8mを測る。床面の標高37.95～36.16mで、奥壁の手前1.6mの地点から奥へ向かって緩やかに傾斜しながら上がっている。奥壁は、緩やかな弧を描きながら天井へと繋がってゆく。天井は崩落せず残存していたが、玄室内には崩落土の堆積が認められるため旧状は留めていない。奥壁での天井高は1.6mを測る。天井の横断面の形状は丸くドーム状を呈する。

③土層堆積状況（第31・32図）

２・５・７・８・15・16・18～21層は、天井崩落土である。９もしくは10～14層が閉塞に伴う堆積であると判断されるが、玄門付近で崩落土の上に閉塞土が被さっていることから、埋葬から閉塞までの間に、天井崩落が起こったのではないかと考えられる。４層は厚さ数mm単位で薄く複数回にわたって堆積した明褐色シルトである。わずかな開口部から、長い年月をかけ雨水等によって、厚く堆積した流入土であり、玄室内を1/2程埋めていた。検出した墓道・羨道中央付近から、玄室手前2/3の範囲には最下層に薄く23層が堆積しており、築造時の整地土と判断される。

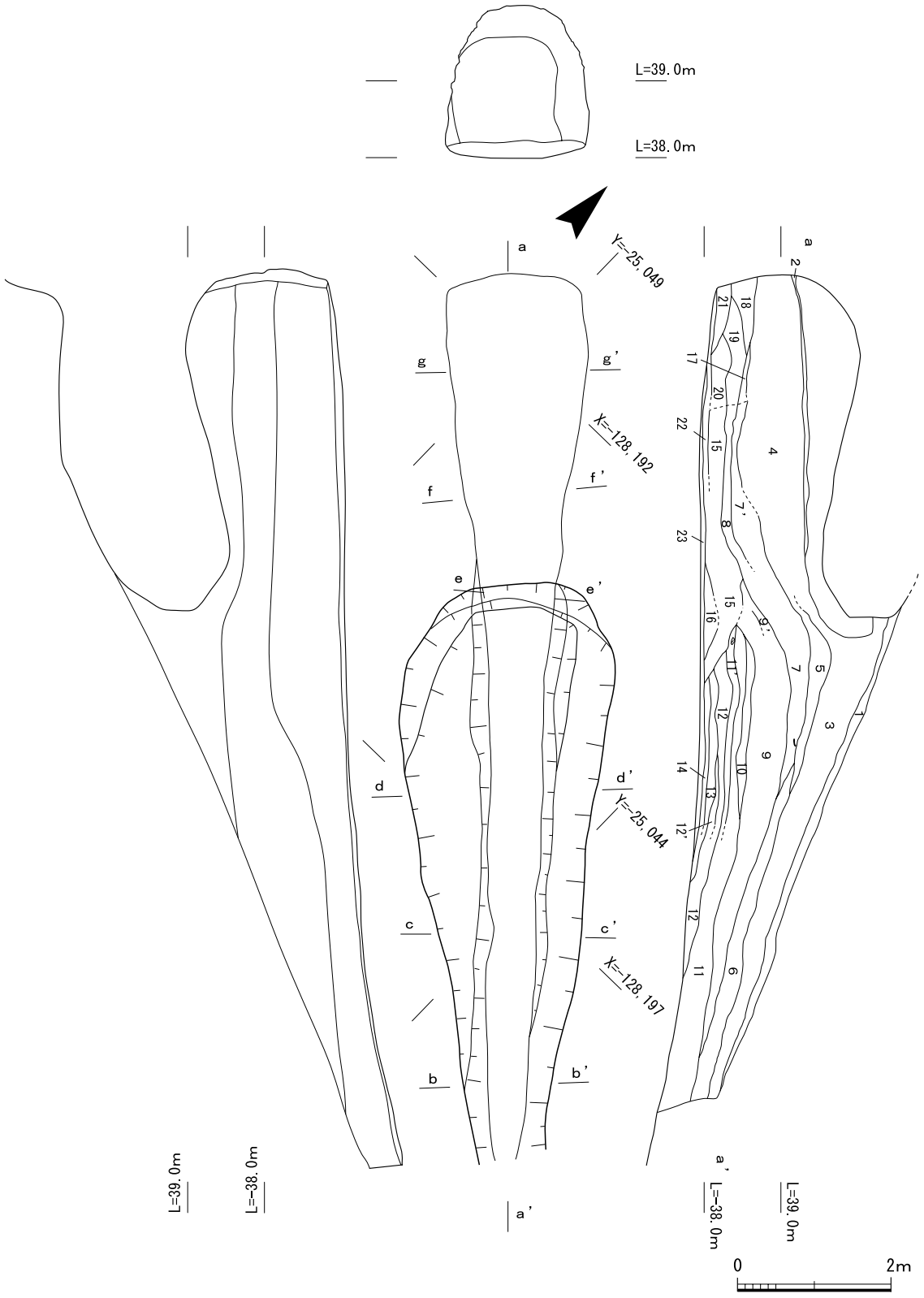
④遺物出土状況（第33図）

遺物は、玄門付近及び奥壁寄りの大きく２か所で出土した。出土は22層及び23層上面の２面にわたって確認され、上層の第１面からは須恵器蓋Ｂ（190･191）、杯Ｂ（192）、蓋Ｃ（194）、杯Ｃ（195）及び鉄製品（198～201）が、下層の第２面からは須恵器高杯Ａ（188・189）が出土している。また、平安時代の土師器皿（197）が玄室内流入土に混入していた。（奈良康正）

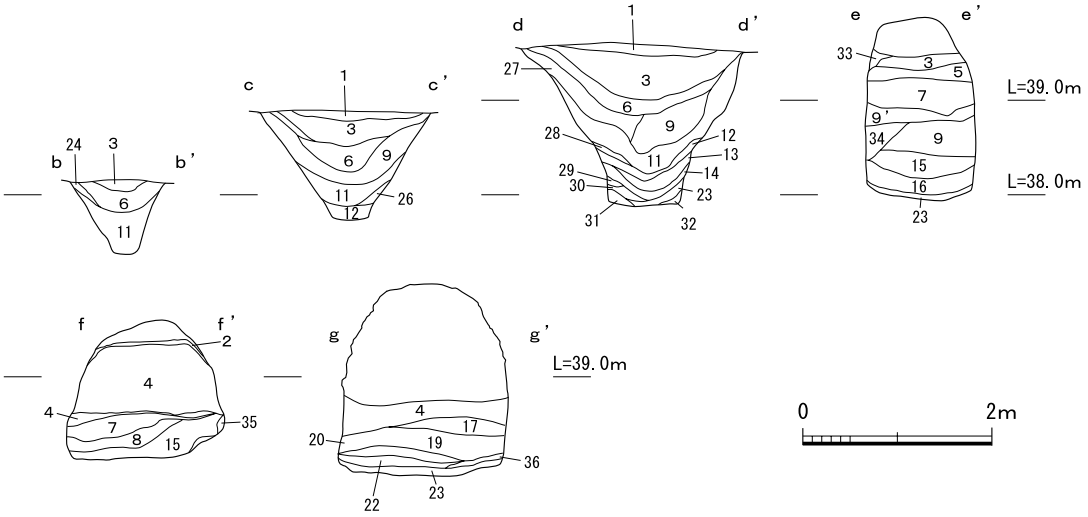
⑤出土遺物（第34図186～第35図201）

30号横穴から出土した遺物には土器・鉄製品がある。土器には横穴に伴うもののほか、平安時代の土師器１点がある。

土器は須恵器11点のみである。内訳は、蓋Ａ１点（186）、杯Ａ１点（187）、高杯Ａ２点（188・



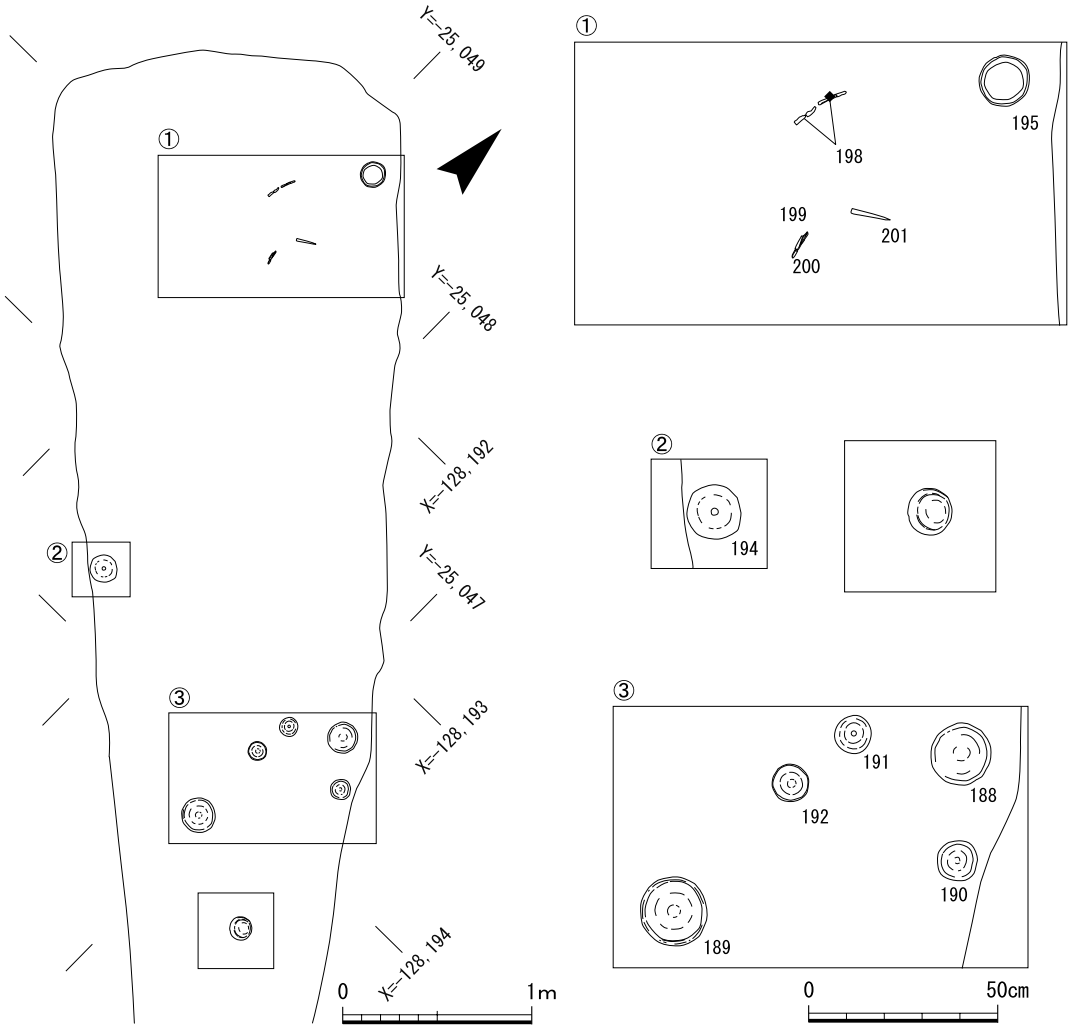
第31図　30号横穴平面・立面・土層断面図



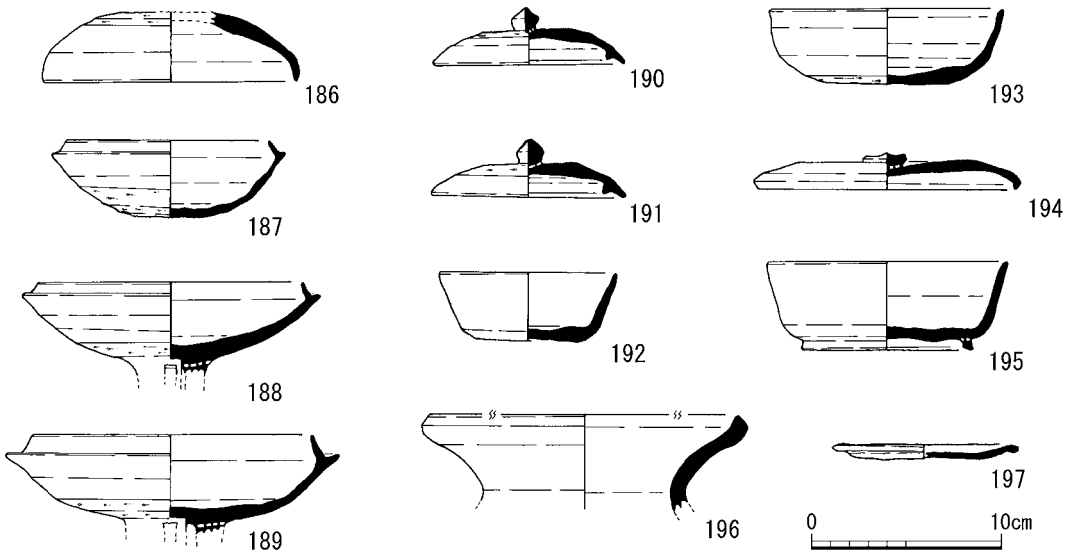
1. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～細砂)
2. にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む、崩落土)
3. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～粗砂)
4. 明褐色(7.5YR5/6)シルト(中粒砂ごくわずかに含む、流入土)
5. 褐色(10YR4/4)砂質土(極細～粗砂、径３～４cm程の礫をわずかに含む)
6. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(シルト～中砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
7. 褐色(10YR4/4)砂質土(シルト～粗砂、径２～４cm程の礫をやや多く含む)
8. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(シルト～粗・極粗砂、径２～３cm程の礫を含む)
9. にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土(細～粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
10. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径２～６cm程の礫を多く含む)
11. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(シルト～中砂、径１～４cm程の礫をわずかに含む)
12. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(シルト～細砂)
13. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～粗砂)
14. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(細～中砂、径0.5～１cm程の礫をわずかに含む)
15. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～粗砂)に黒褐色(10YR3/2)砂質土(細砂)が均等に混入、径１～３cm程の礫を含む)
16. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(細～粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
17. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む、崩落土)
18. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極細砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
19. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む、崩落土)
20. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む、崩落土)
21. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土・にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(シルト～極粗砂、崩落土)
22. にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む、崩落土)
23. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
24. 褐色(10YR4/4)砂質土(細～粗砂)
25. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～粗砂)
26. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土(シルト～極細砂)
27. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(極細～粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
28. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～中砂)
29. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(極細砂)
30. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(細～中砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
31. 褐色(7.5YR4/3)砂質土(シルト～中砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
32. 17に同じ
33. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(極細～中砂、径0.5～２cm程の礫を含む)
34. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～中砂、径0.5～１cm程の礫をわずかに含む)
35. にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(粗砂～極粗砂)
36. にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土(極細～中砂、径１cm程の礫をわずかに含む)

第32図　30号横穴土層断面図

189)、蓋Ｂ２点(190・191)、杯Ｂ２点(192・193)、蓋Ｃ１点(194)、杯Ｃ１点(195)、甕１点(196)である。186は破片資料であるが、口径13.3cmに復元でき、頂部外面はヘラキリ後不調整であることからＡｂに分類できる。187は底部に回転ヘラケズリを施すＡａである。受け部は短く、わずかに突出するのみである。胎土はやや粗い。高杯Ａは、ともに脚部を欠損しており、本横穴やほかの横穴から接合する脚部の出土は確認できなかった。このことから、意図的に脚部を折損・廃棄したのち、横穴内に供献した可能性もある。188の胎土は189に比べて黒色粒や砂粒が少なく、やや精良である。189はやや粗い。蓋Ｂは２点とも杯ＢａとセットになるＢａで、口径９cm前後、器高３cm前後である。頂部外面に回転ヘラケズリを施す。つまみは乳頭状を呈する。杯Ｂ２点

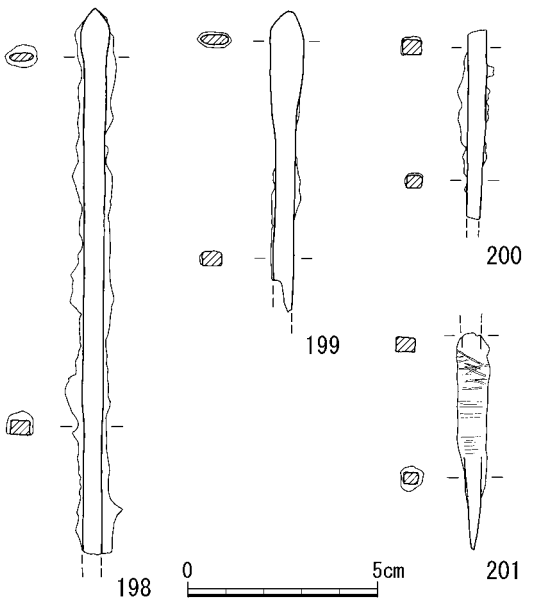


第33図　30号横穴遺物出土状況図



第34図　30号横穴出土土器実測図

のうち、192は上記蓋Ｂａのどちらかに対応するものと考える。193は底部から口縁部にかけての屈曲部分がやや丸くおさめられている。法量から上記の蓋Ｂａとセットにならず、Ｂｂに分類できる。194は焼け歪んでいるが、いわゆる笠形を呈するものである。つまみはやや扁平な宝珠形を呈する。胎土には黒色粒を少し含む。195の杯Ｃと胎土・色調・焼成の点でセットになる可能性が高い。195は高台の外側が接地する。196は小破片資料であるため、口径や傾きについては確かではない。



第35図　30号横穴出土鉄器実測図

平安時代の土師器としては、小型の皿１点(197)がある。197はいわゆる「て」字状口縁を呈する小型の皿で、胎土には砂粒をほとんど含まない。平安時代後期ごろのものと推定される。

鉄製品には鉄鏃４点(198～201)がある。このうち、198・199は柳葉形の刃部を持つ長頸鏃である198は錆化のため、関の形状等は不明である。200・201は鉄鏃の茎の破片と推定される。201には矢柄を糸で巻き付けたと思われる痕跡を確認できる。（筒井崇史）

（８）31号横穴（ＳＸ06）

①立地・調査時の状況

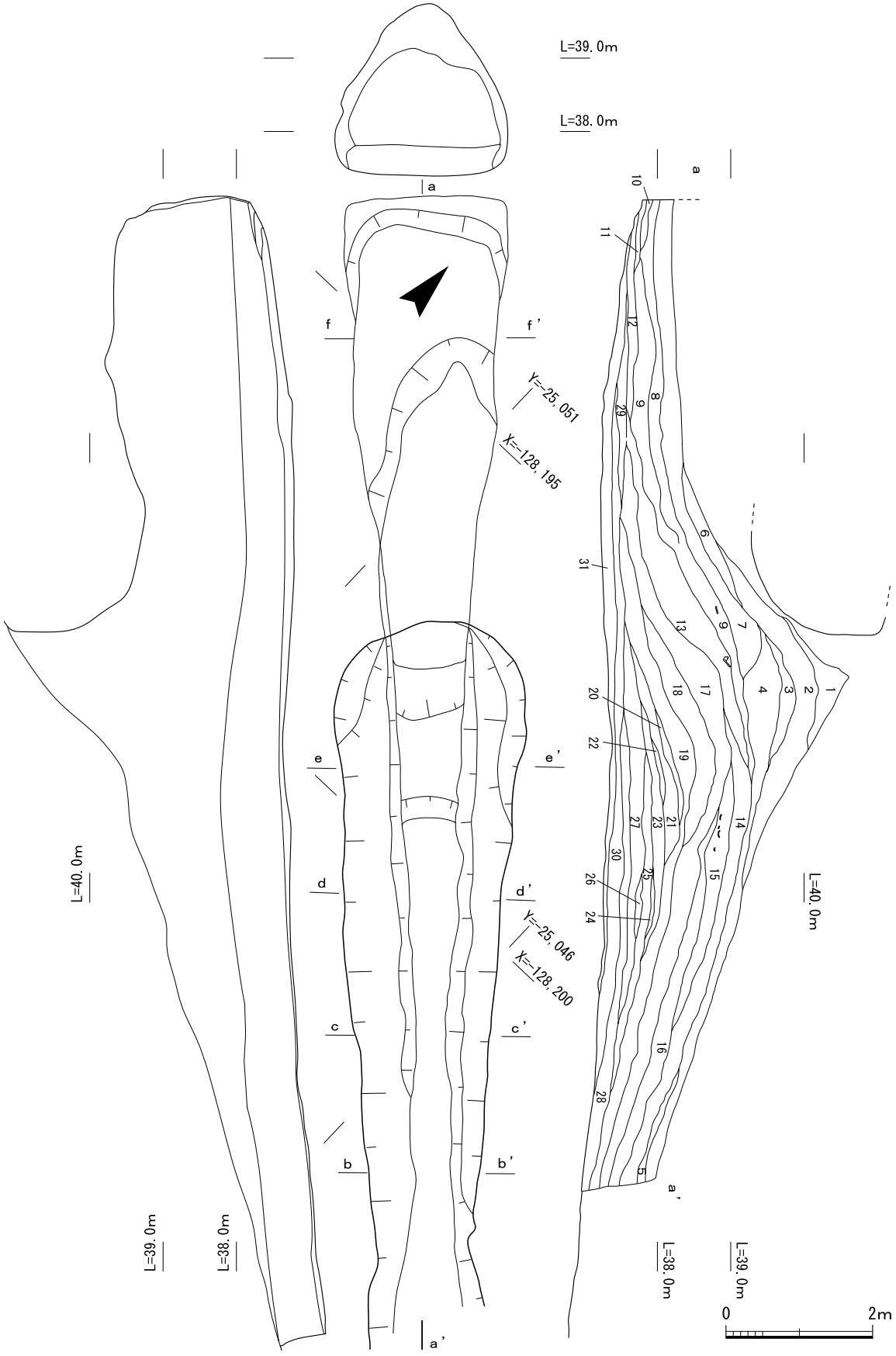
30号横穴の南西に隣接して検出した。30号横穴と主軸方向をほぼ揃えているが、芯心間で4.3ｍほど離れている。墓道先端が調査区外へと延びていくため、全容は不明である。全長は検出した範囲で15.7ｍを測り、主軸はＮ－43°30′－Ｗにとる。

②規模・構造(第36図)

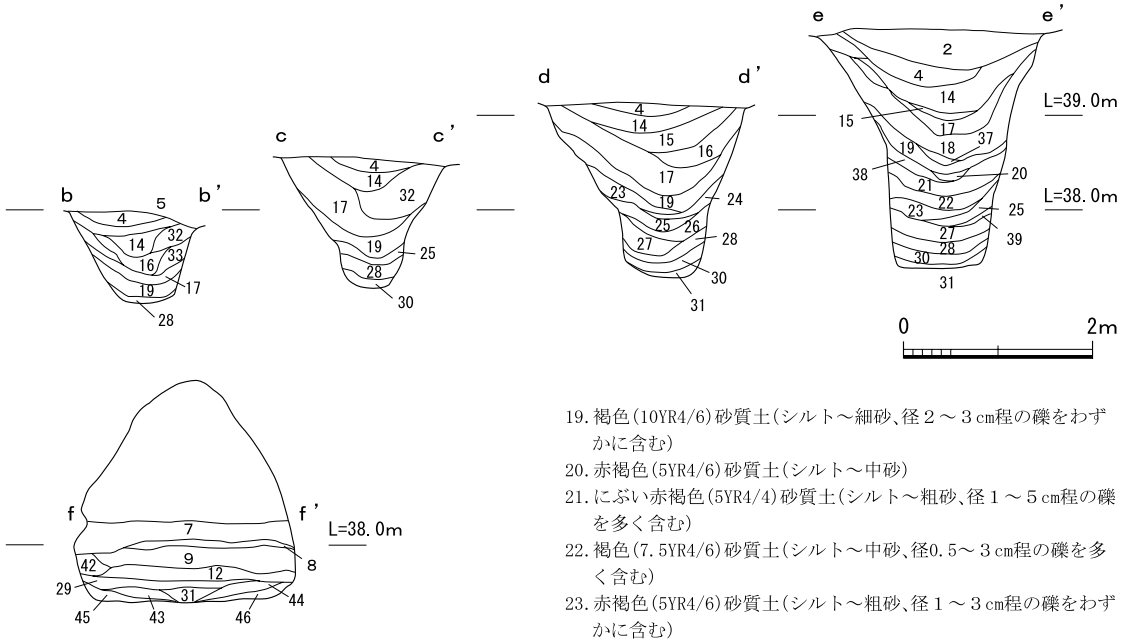
ａ)墓道・羨道

先述のように墓道の全容は不明である。床面の標高は36.80～37.34ｍを測る。両側壁は、玄室に向かってほぼ直線的に延び、天井が残存している地点付近からわずかに広がり、玄室内で屈曲し平行となっている。このため、墓道・羨道と玄室を形態から区分することは困難なため、副葬遺物の出土位置等から玄室の範囲を推測することとした。天井が残存する地点付近から奥壁側に遺物の出土は集中する。このことから、この地点が玄門であると判断し、そこから前側を羨道・墓道と捉えた。

羨道は天井が全く残存していなかった。羨道・墓道の区分は、不明瞭であるため各々の規模は確定できないが、検出した範囲では両者合わせて9.9ｍを測る。床面幅は0.4～1.1ｍを測る。玄門手前部分では、床面に段差を設けており、長さ1.0ｍ程にわたりわずかに高くなっていた。墓道



第36図　31号横穴平面・立面・土層断面図



1. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～粗砂、径１～５cm程の礫をわずかに含む)
2. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(細～粗砂)
3. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
4. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～中砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
5. 褐色(10YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
6. にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土と黄褐色(10YR5/8)砂質土の混じり合った堆積(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む、天井崩落土)
7. 褐色(10YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径１～３cm程の礫をわずかに含む、流入土)
8. にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
9. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(極細～粗砂、径１～２cmの礫をわずかに含む)
10. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(シルト～粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
11. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(シルト～極粗砂、径１～３cm程の礫をわずかに含む)
12. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を非常に多く含む)
13. にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土と明黄褐色(10YR6/6)砂質土の堆積(細～極粗砂、径１～３cmの礫を多く含む)
14. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(細～中砂、径２～３cm程の礫を多く含む)
15. 褐色(10YR4/6)砂質土(極細～中砂、径１～４cm程の礫を含む)
16. 褐色(10YR4/4)砂質土(シルト～極粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
17. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(シルト～細砂)
18. にぶい赤褐色(5YR5/4)砂質土(極細～粗砂、径２～10cm程の礫を多く含む)
19. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～細砂、径２～３cm程の礫をわずかに含む)
20. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(シルト～中砂)
21. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土(シルト～粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
22. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～中砂、径0.5～３cm程の礫を多く含む)
23. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(シルト～粗砂、径１～３cm程の礫をわずかに含む)
24. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(シルト～中砂)
25. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～極粗砂、径１～２cmの礫をわずかに含む)
26. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(シルト～極粗砂、径２～３cm程の礫をわずかに含む)
27. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土(極細～極粗砂、径１～４cm程の礫を含む)
28. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～中砂、径１～３cm程の礫を含む)
29. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細～極粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
30. 赤褐色(5YR4/6)砂質土(シルト～中砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
31. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～粗砂)
33. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(細砂)
34. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～細砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
35. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
36. 褐色(10YR4/6)砂質土(細～中砂)
37. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
38. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(シルト～粗砂、径0.5～２cm程の礫をわずかに含む)
39. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(シルト～中砂)
40. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(シルト～極粗砂、径１～２cm程の小礫を少し含む)
41. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～３cm程の礫をごくわずかに含む)
42. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(極細～粗砂、壁体崩落土)
43. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(シルト～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
44. 43に同じ
45. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細～粗砂)
46. 45に同じ

第37図　31号横穴土層断面図

側では0.1m程、玄室側では0.05m程の比高が存在する。

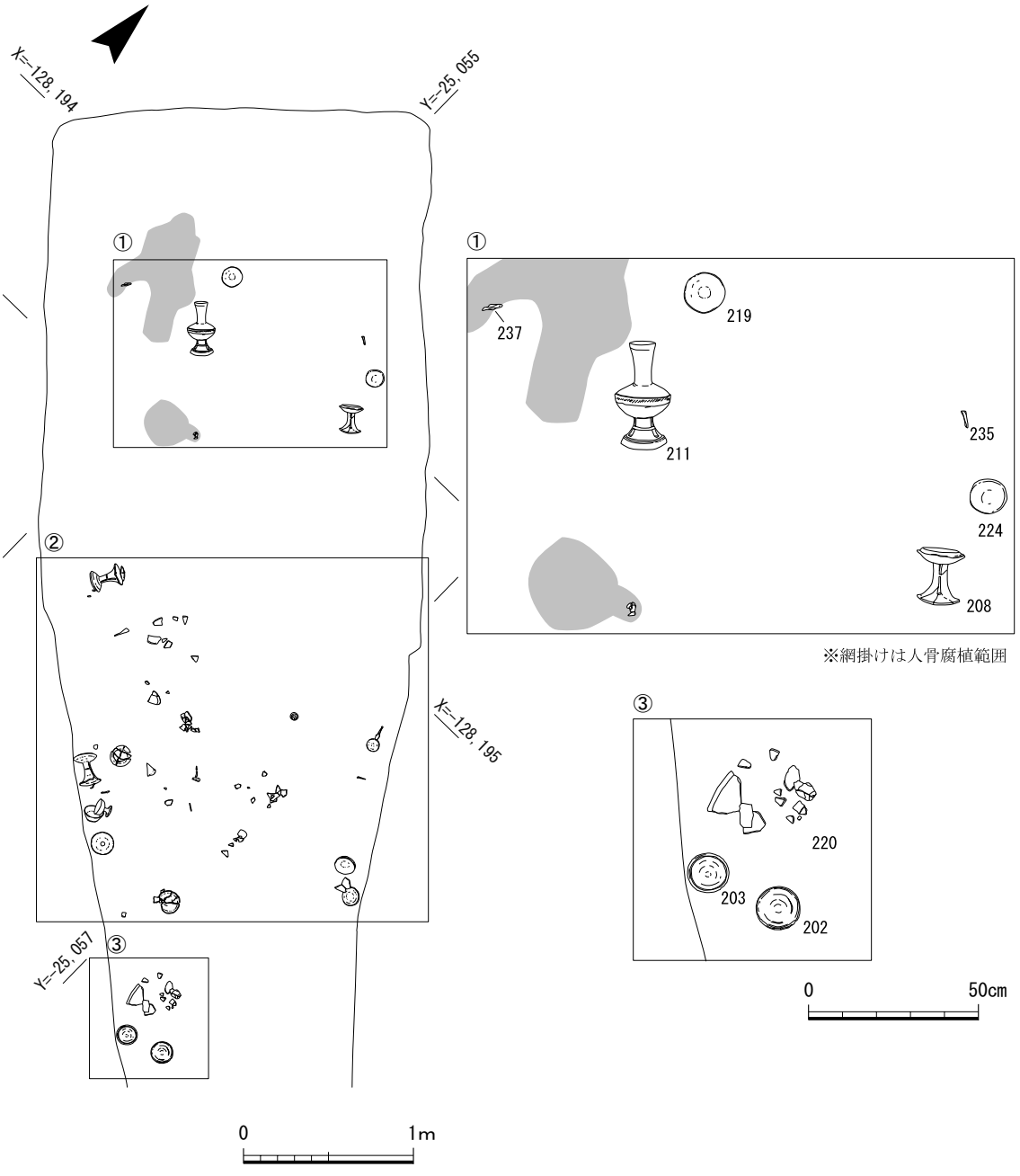
b)玄室

玄室は、全長5.8m、玄門幅1.1m、最大幅2.3mを測り、床面の標高37.28～37.54mである。床面は、玄門手前から玄室中央に向けわずかに低くなっていき、その後、奥壁に向け緩やかに上がっていき、奥壁際では、床面の高低差は最大0.5mに及ぶ。奥壁裾では、壁面に沿うように「コ」

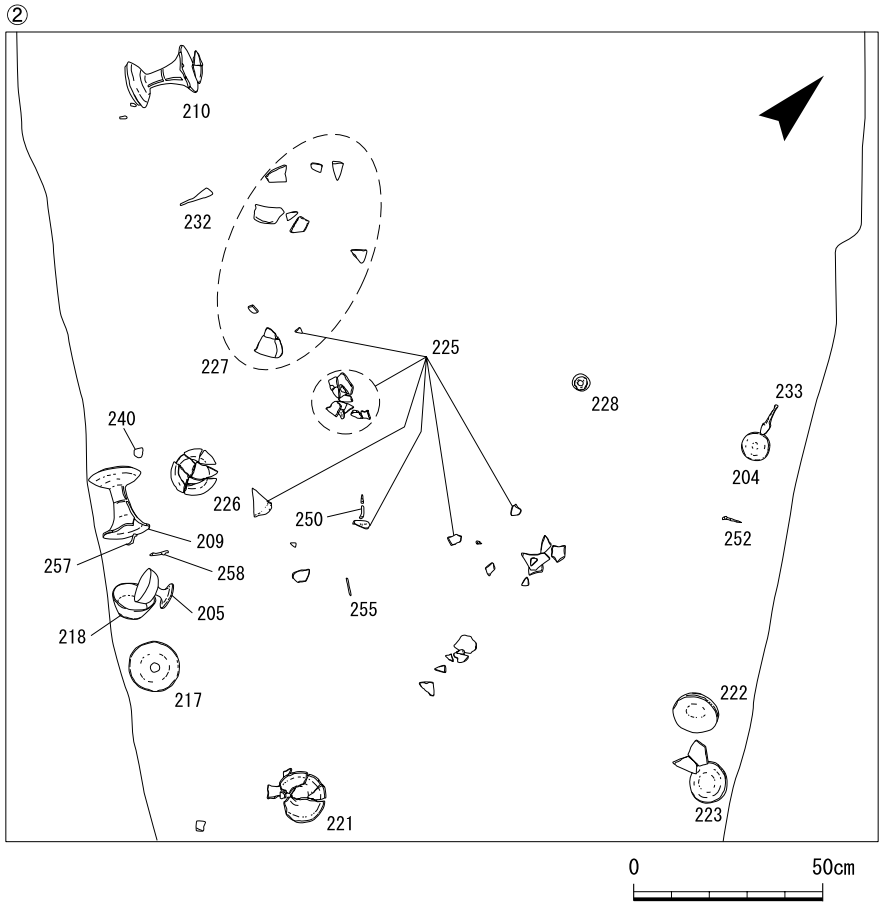
字形に平坦面が削り出されていた。平坦面と床面との比高は0.25m程を測るが、棚と認識できるほど明瞭な形状は留めていなかった。奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、天井の横断面は三角形を呈していた。天井高は2.1～2.4mを測る。

③土層堆積状況（第36・37図）

玄室の中央付近は、先述のように低くなっており、その窪みを埋めるように最下層には31層が堆積している。直上の30層と合わせて、玄室内の床面を平坦に調整するために、築造時になされた整地土と判断される。17～28層が閉塞に伴う堆積と判断される。閉塞後、墓道部分が埋没し、その後、天井が一部崩落したものと考えられる。追葬に伴う堆積の乱れは確認できなかった。



第38図　31号横穴遺物出土状況図1



第39図　31号横穴遺物出土状況図２

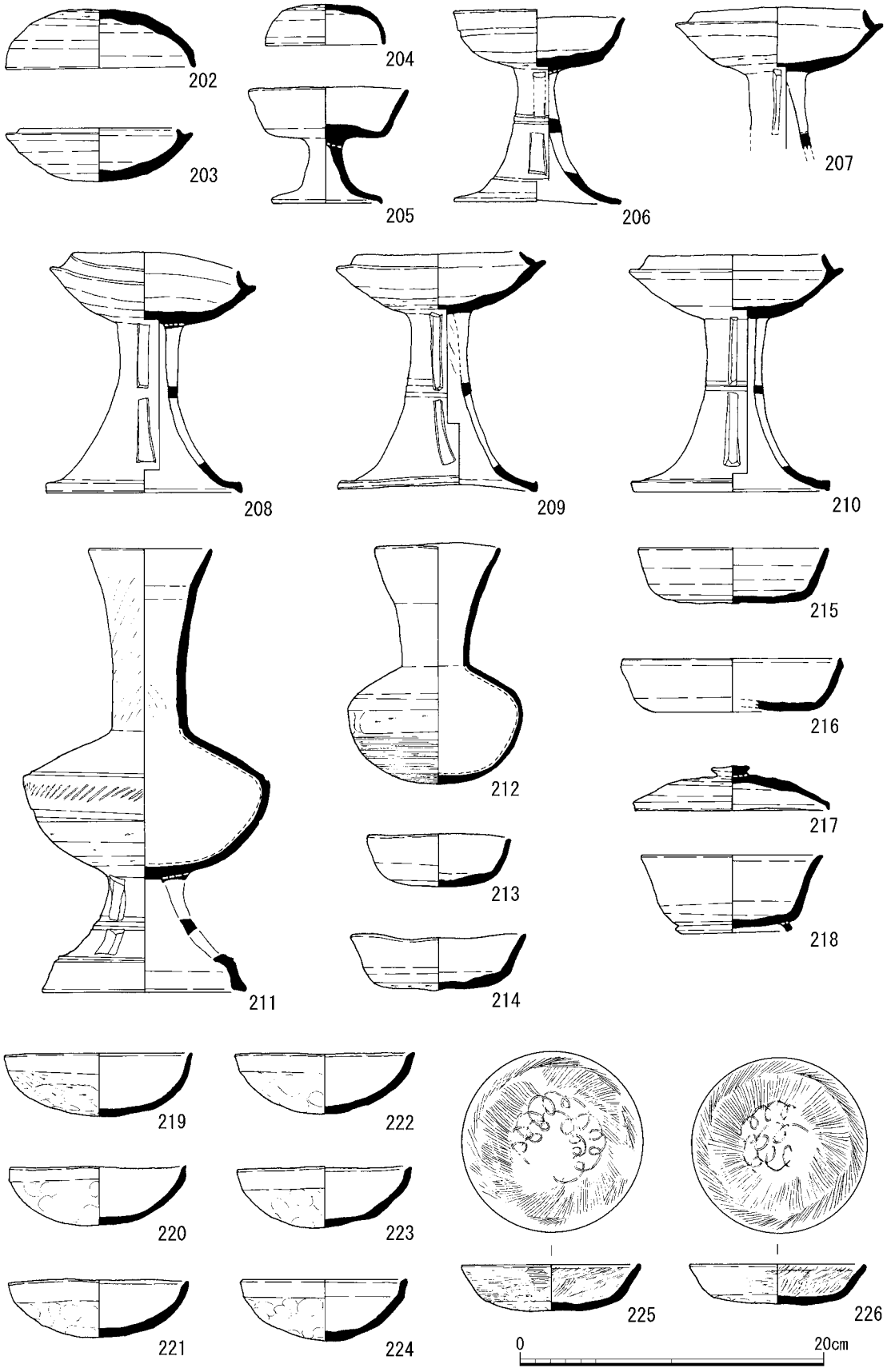
④遺物出土状況（第38・39図）

玄室内の遺物は、30・31層上面から出土している。埋葬面は１面と考えられるが、出土した遺物には時期差が認められる。玄室手前側と奥側の大きく２か所に遺物の集中が認められ、手前側では、最後の埋葬に伴い、周辺の土器類を片付けた状況が観察される。奥側では、右側壁付近で人骨が出土している。保存状態が良好ではなかったため、人骨そのものは原形を留めておらず、床面への浸み込みとしてのみ確認できた。また、墓道が埋没する過程で堆積した15層からまとまって遺物が出土している。（奈良康正）

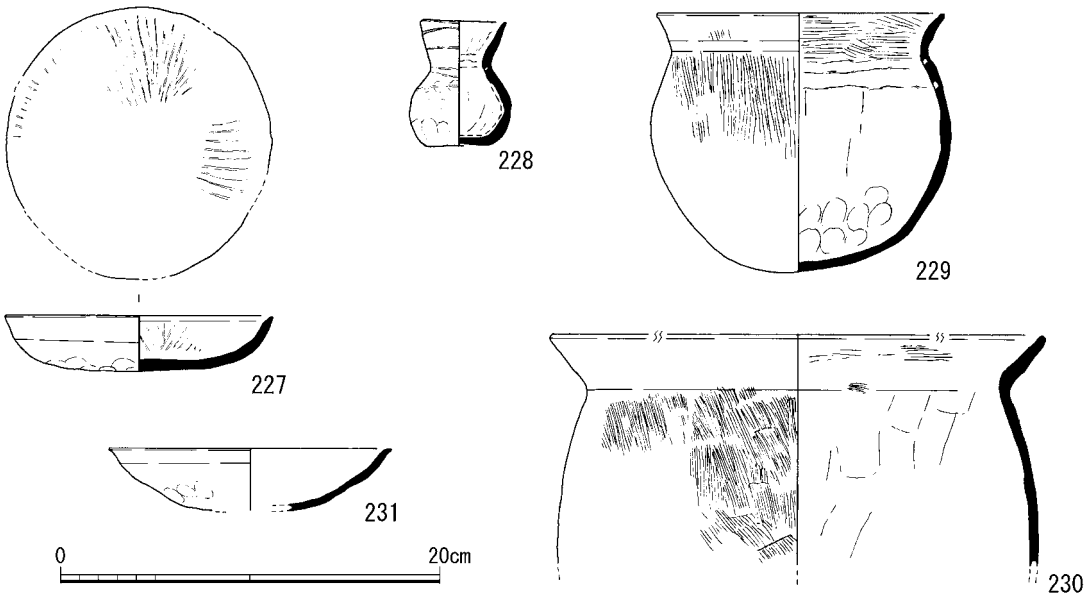
⑤出土遺物（第40図202～第43図259）

31号横穴から出土した遺物には土器のほか鉄製品がある。土器の内訳は須恵器17点、土師器13点である。また、鉄製品は28点出土した。

須恵器には、蓋Ａ１点(202)、杯Ａ１点(203)、壺蓋１点(204)、高杯Ｂ２点(205・206)、高杯Ａ４点(207～210)、長頸壺Ａ１点(211)、長頸壺Ｃ１点(212)、杯Ｂ４点(213～216)、蓋Ｃ１点(217)、杯Ｃ１点(218)がある。202は頂部外面に回転ヘラケズリを施すＡａであるが、中央部にケズリ残しがある。胎土は黒色粒が溶出する。203は口縁部の立ち上がりや受け部が短い。胎土はやや砂粒が多い。なお、焼成はやや軟である。204は法量などから壺蓋と判断した。胎土は精良である。205は杯Ｂｂに脚部を接合したような高杯で、脚部にスカシが認められない。206は杯部外面に沈



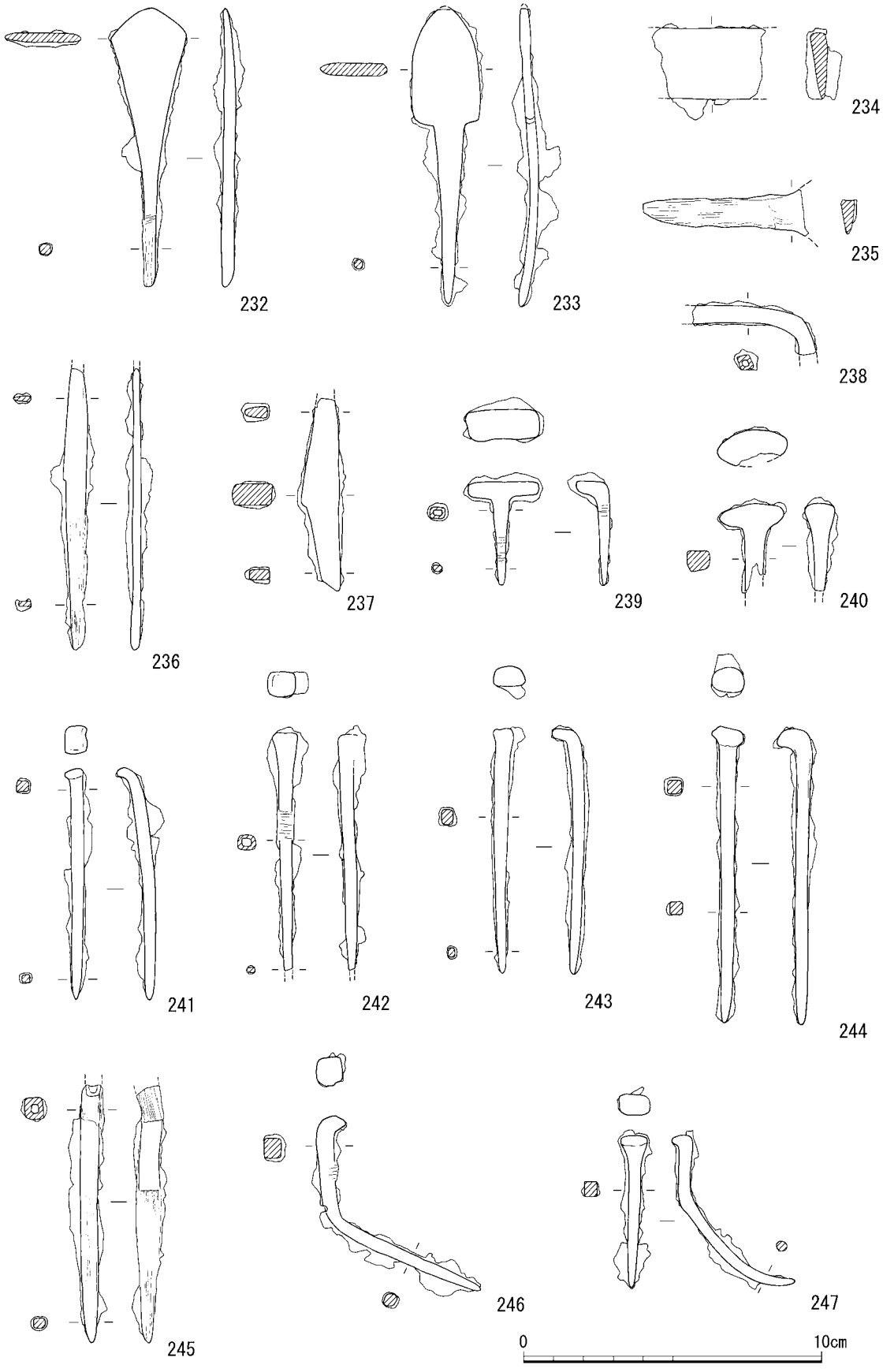
第40図　31号横穴出土土器実測図1



第41図　31号横穴出土土器実測図２

線状の段があり、杯底部から口縁部に立ち上がるところにも段差を有する。スカシは上下２段に穿孔される。高杯Ａ４点はほぼ同形同大であるが、207のみ脚部下半を欠損する。形態的にもよく類似するが、脚端部の形状や脚柱部中位の沈線のあり方などがそれぞれ異なる。211は脚台に上下２段３方向のスカシを有する。体部最大径付近には刺突文を施し、その上限に沈線を１条ずつ巡らす。212は脚台も高台も有さない球形状の体部を呈する。体部下半から底部にかけての外面には回転ヘラケズリののちカキメを施す。杯Ｂは形態や法量などに違いがあり、213・214はＢａ、215・216はＢｂと推定される。また、216は口縁端部が真上につまみ上げたような形状を呈することから別の器形とすべきかもしれない。胎土は213が比較的精良である。215は胎土に７mm程度の小礫を１個含む。216はやや砂粒が多い。217は笠形を呈し、口縁端部が下方に屈曲する。また、頂部に回転ヘラケズリを施す。胎土には長石を含む。218は焼け歪みのため、口縁部の一部が大きく外反している。高台は内端部が接地する。胎土には大粒の長石や黒色粒を含む。217の蓋Ｃとセットになると思われ、胎土は類似するものの、色調はやや淡い。

土師器は杯Ｄ６点(219～224)、杯Ａ２点(225･226)、杯Ｃ１点(227)、ミニチュア土器１点(228)、甕Ａ１点(229)、甕Ｂ１点(230)がある。杯Ｄはほぼ同形同大の法量であるが、胎土や製作技法の違いから大きく３つに分類できる。まず、第１群として219がある。219は口縁部の直下から底部の外面にかけてケズリを施す。口縁端部内面に沈線を１条施す。また、外面に粘土紐の接合痕がある。胎土には長石や石英を少量含む。次に第２群として220がある。220は全体に摩滅が著しいが、口縁部がほぼ真上に立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面の調整は摩滅のため、ケズリかナデか判別できない。胎土には石英や長石などをやや多く含む。第３群として221～224がある。口縁部がわずかに外反ないし外傾するとともに、端部内面が内傾して浅い凹面をもつものである。ただし、221は沈線状になっている。これらも摩滅が著しいが、外面の調整はナデやユビオサエなどである。胎土には長石や石英を多く含み、全体に粗い。土師器の胎土であるＡ～Ｃ群とは異

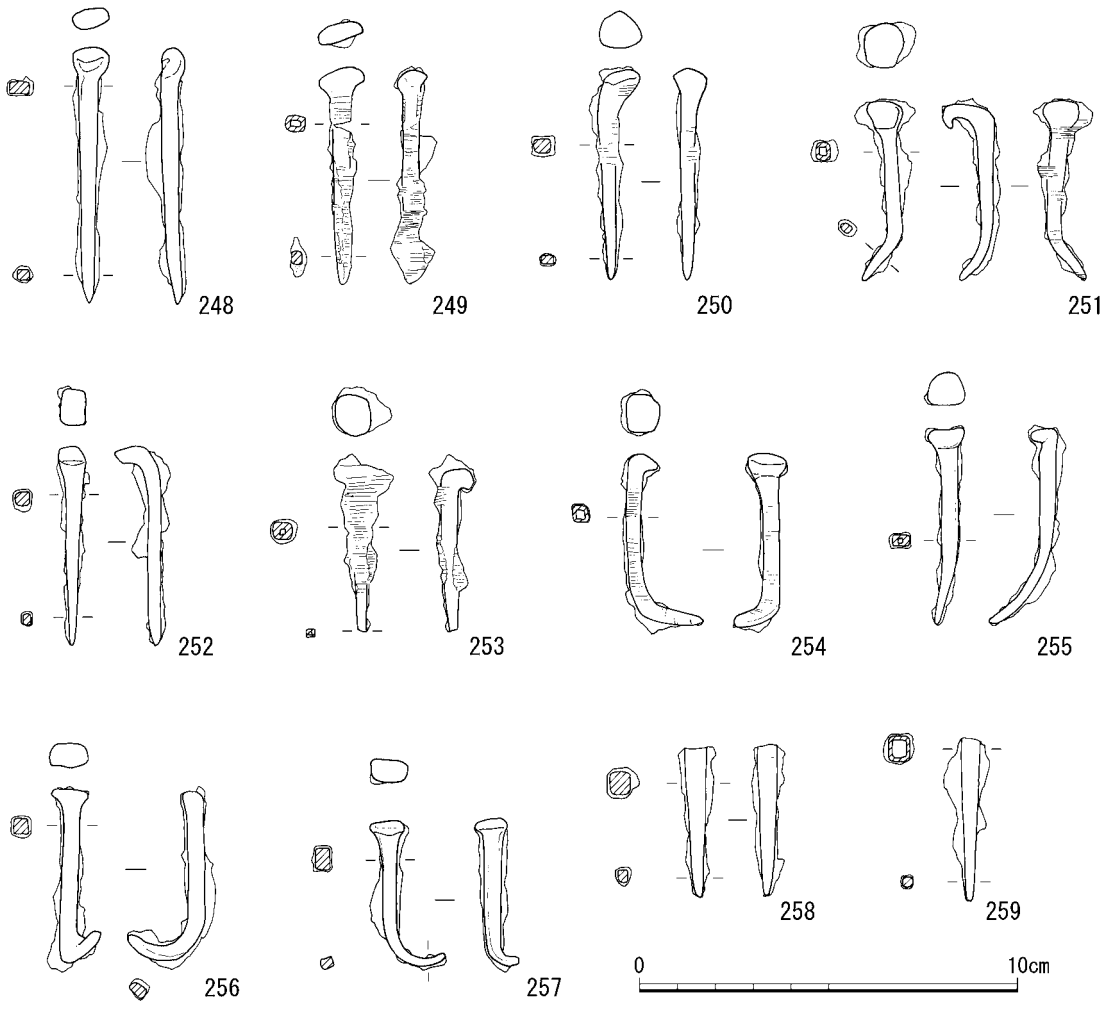


第42図　31号横穴出土鉄器実測図 1

なる胎土のグループと考える。以上の219～224は器形や胎土の特徴から在地系の杯と考える。225・226は同一の胎土・製作技法によるもので、杯Ａａに分類できるが、25号横穴出土の杯Ａａ（８）に比べると小型品である。口縁部外面にミガキを密に施し、底部外面はナデを施す。内面に２段放射暗文と螺旋暗文を施す。典型的な都城系の土師器と考える。時期的には飛鳥Ⅳぐらいであろうか。胎土は非常に精良である。227は口縁端部が内傾する面をもち、摩滅が著しいものの内面に１段放射暗文を施す。底部はナデやユビオサエで調整する。胎土は225・226よりも微細な砂粒を含む。都城系そのもの、もしくはその模倣と考える。228は手づくねによるミニチュアの壺と考える土器である。胎土には雲母・赤色斑粒を含む。229はほぼ完形である。25・33・36号横穴でほぼ同形同大で、調整の特徴や焼成・色調もよく似た甕Ａが出土している。胎土もこれらとおおむね同じである。230は残存率が1/12しかないものの、体部の形状から甕Ｂと推定した。胎土は229などと同じであるが、色調がやや褐色を呈する。

平安時代の可能性のあるものとして土師器杯（231）がある。胎土には砂粒を含むが比較的精良である。よく似た器形のものとして28号横穴出土の土師器杯（124）がある。

鉄製品には鉄鏃２点（232・233）、鉄刀破片１点（234）、刀子３点（235～237）、鏃１点（238）、不



第43図　31号横穴出土鉄器実測図２

明鉄製品２点（239・240）、釘19点（241～259）がある。232は圭頭式の鏃である。茎には木質が残存する。233は三角形鏃で、土圧のためか縦断面径は緩やかな「Ｓ」字状を呈する。238は破片のみで全容は不明であるが、鉄刀の一部である可能性を考えている。235は刀子と推定されるが、木質が良好に依存しており、本来の形状等は不明である。236は先端を欠損する刀子である。茎には木質が遺存する。237は中央部の断面形が長方形を呈するが、刀子の可能性があると考えている破片である。238は鎹と推定される。239・240は不明鉄製品であるが、240は釘が錆によって膨らんでいるだけの可能性もある。239は幅広の頭部を持ち、先端を確認できることから、全長が3.8cmほどの釘である可能性が高いが、詳細は不明である。出土した釘は断面方形で、頭部を屈曲させるものである。出土した釘は推定されるものも含めると、全長が7.5～8.5cm前後のもの（241～243）、９～10cmのもの（244・246）、６～７cmのもの（247～249）、５cm前後のもの（250～255）などがある。５cm前後の短めの釘が確認できるが､ほかではあまり例をみない長さである。245は断面形がやや大きく、33号横穴出土の大型の釘（315）に類似したものである可能性もある。頭部を確認できるものは16点、先端やそこに近いところを確認できるものは19点あることから、少なくとも19点の釘が存在する。木質の残るものがみられる（242・245・249～251・253・254）が、その大半は横方向の木目である。釘の点数や検出状況などから木棺の存在が想定できる。

（筒井崇史）

（９）32号横穴（ＳＸ07）

①立地・調査時の状況

31号横穴の南東に近接して検出した。墓道の一部が33号横穴と重複している。調査区内で全体を検出しており、全長は14.0mを測り、主軸はＮ－46°－Ｗをとる。

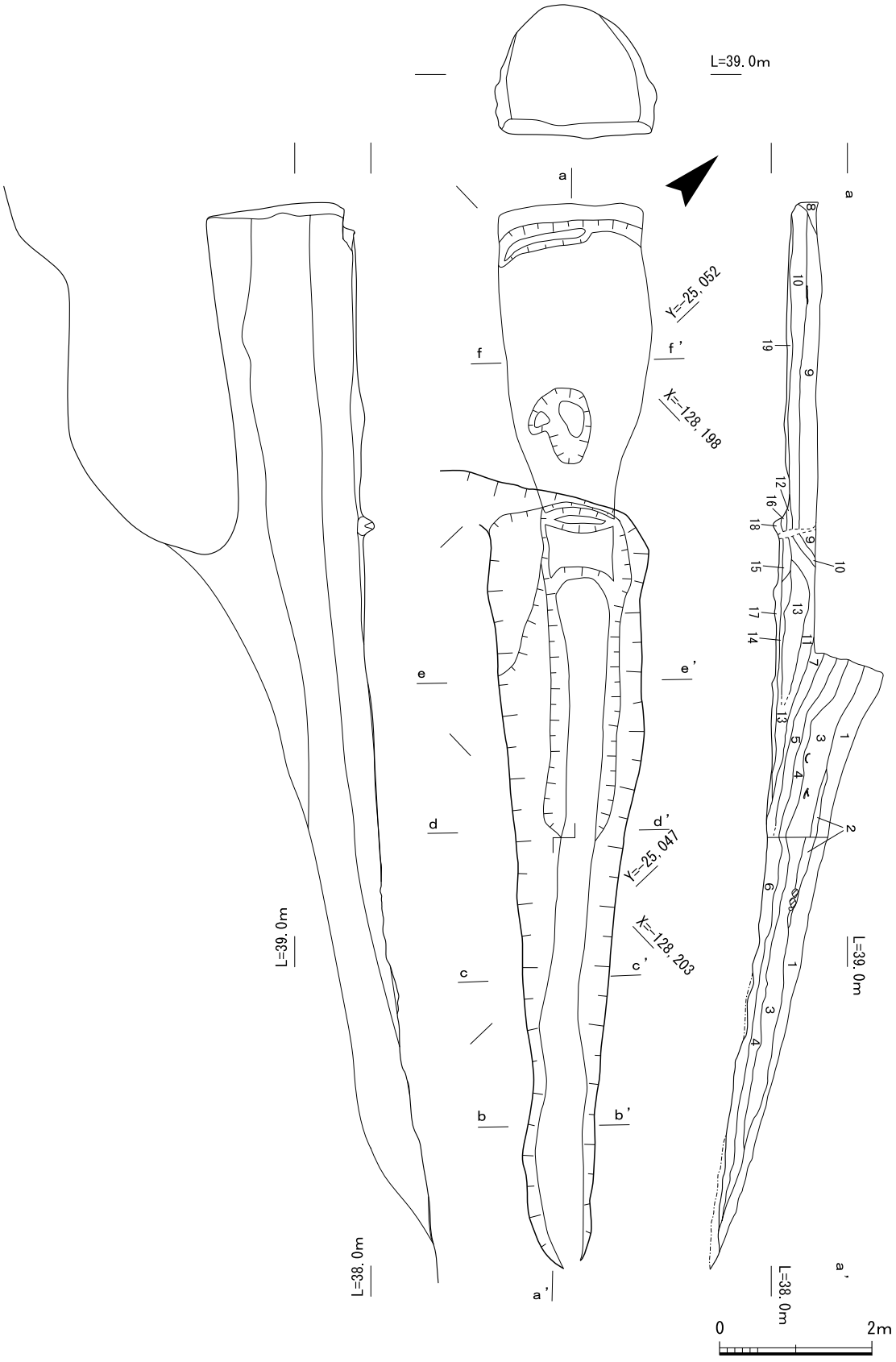
当横穴の縦断土層断面であるが、当初は32・33号横穴の墓道を一体のものとして広く捉えていたため、２基を１基と捉え土層断面図を作成した。その後、横断土層断面ｄ－ｄ’地点で作成軸線の修正を行ったため、土層断面図に一部食い違いが生じている。また、横断土層断面ｅ－ｅ’から奥側の堆積は、記録を作成する前に崩落したため、情報に欠落が生じている。

②規模・構造（第44図）

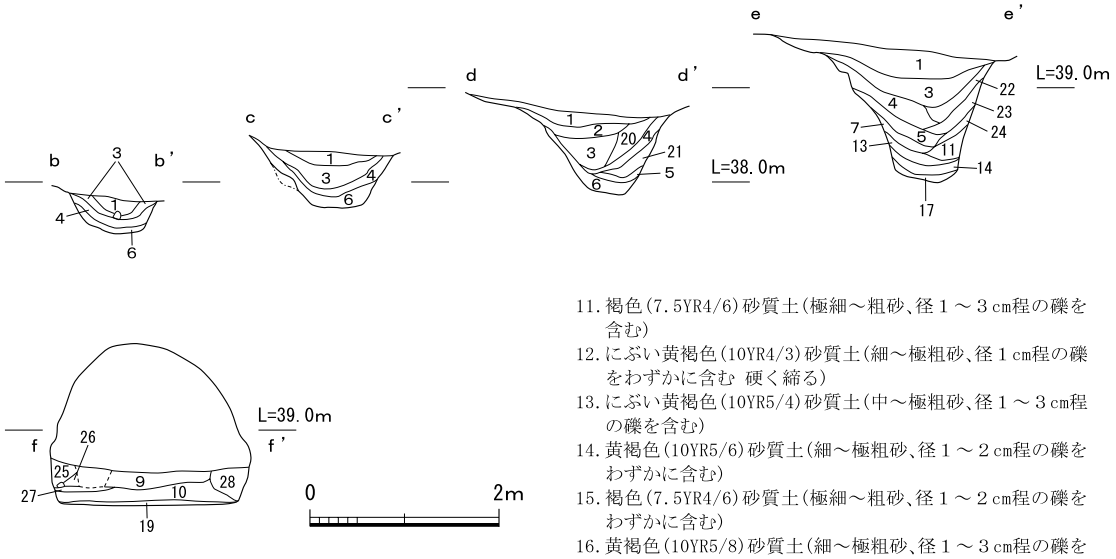
ａ）墓道・羨道

墓道の先端まで調査区内で検出した。床面の標高は37.21～38.01mを測り、墓道の先端付近でわずかに蛇行している。両側壁の傾斜は、玄室に向かって確認できた範囲では立ち上がることなく緩やかであった。羨道の天井は残存していなかった。墓道先端から9.8mの地点で主軸方向と直交する溝１条を検出した。この溝は、主軸と直交しており、この地点を境に、両側壁が奥壁方向にわずかに広がる傾向も見て取れることから、この地点が玄門であると判断し、そこから前側を羨道・墓道と捉えた。また、玄門に板材等を据え、閉塞に用いた痕跡の可能性を想定したが、堆積状況からは、そういった兆候は確認できなかった。

検出した範囲では両者合わせて9.8m、床面幅は0.4～0.9mを測る。玄門手前部分で、わずかに



第44図　32号横穴平面・立面・土層断面図



1. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～粗砂、径２～４cm程の礫を含む)
2. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土・にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土の堆積(シルト～極粗砂、径１～２cmの礫をわずかに含む)
3. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(極細～粗砂、径１～７cm程の礫を多く含む)
4. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～極粗砂、径２～８cm程の礫を多く含む)
5. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～粗砂)
6. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(シルト～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
7. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径0.5～２cm程の礫を含む、締りなし)
8. 橙色(7.5YR6/8)砂質土(細砂～極粗砂、径２～３cm程の礫を含む)
9. 明褐色(5YR5/6)砂質土(シルト～極粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
10. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
11. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
12. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細～極粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む 硬く締る)
13. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(中～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
14. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
15. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
16. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
17. 黄褐色(10YR5/6)砂質土・灰黄褐色(10YR5/2)砂質土の堆積(細～極粗砂)
18. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極粗砂)
19. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細～粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
20. 褐色(7.5YR4/3)砂質土(極細～中砂、径１～３cm程の礫を含む)
21. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
22. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(シルト～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
23. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～中砂)
24. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
25. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径２cm程の礫をわずかに含む、側壁崩落土)
26. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂)
27. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂、硬く締る)
28. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫を含む)

第45図　32号横穴土層断面図

床面に段差を設けており、およそ0.4mにわたって、0.1m程高くなっている。

b)玄室

先述した主軸と直交する溝から奥側を玄室と捉えた。全長4.2m、玄門幅0.9m、最大幅2.1mを測り、床面の標高は38.18～38.27mである。玄門で検出した溝は、上面幅0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。にぶい黄褐色砂質土で埋没しており、遺物は出土せず、有機物等の痕跡も確認できなかった。床面は、奥壁に向けわずかに高くなっており、中央付近には不整形な土坑が１基穿たれていた。土坑は、わずかに窪む程度であるが、詳細は不明である。奥壁際には、右側3/5程であるが溝が掘削されていた。上面幅は0.3m程を測り、深さは6.0cm程であった。奥壁裾には、階段状に幅0.2～0.3m程の掘削が確認でき、床面との比高は0.1m程度であった。奥壁は、垂直に立ち上がり、天井の横断面は丸くドーム状を呈していた。奥壁での天井高は1.9mを測る。

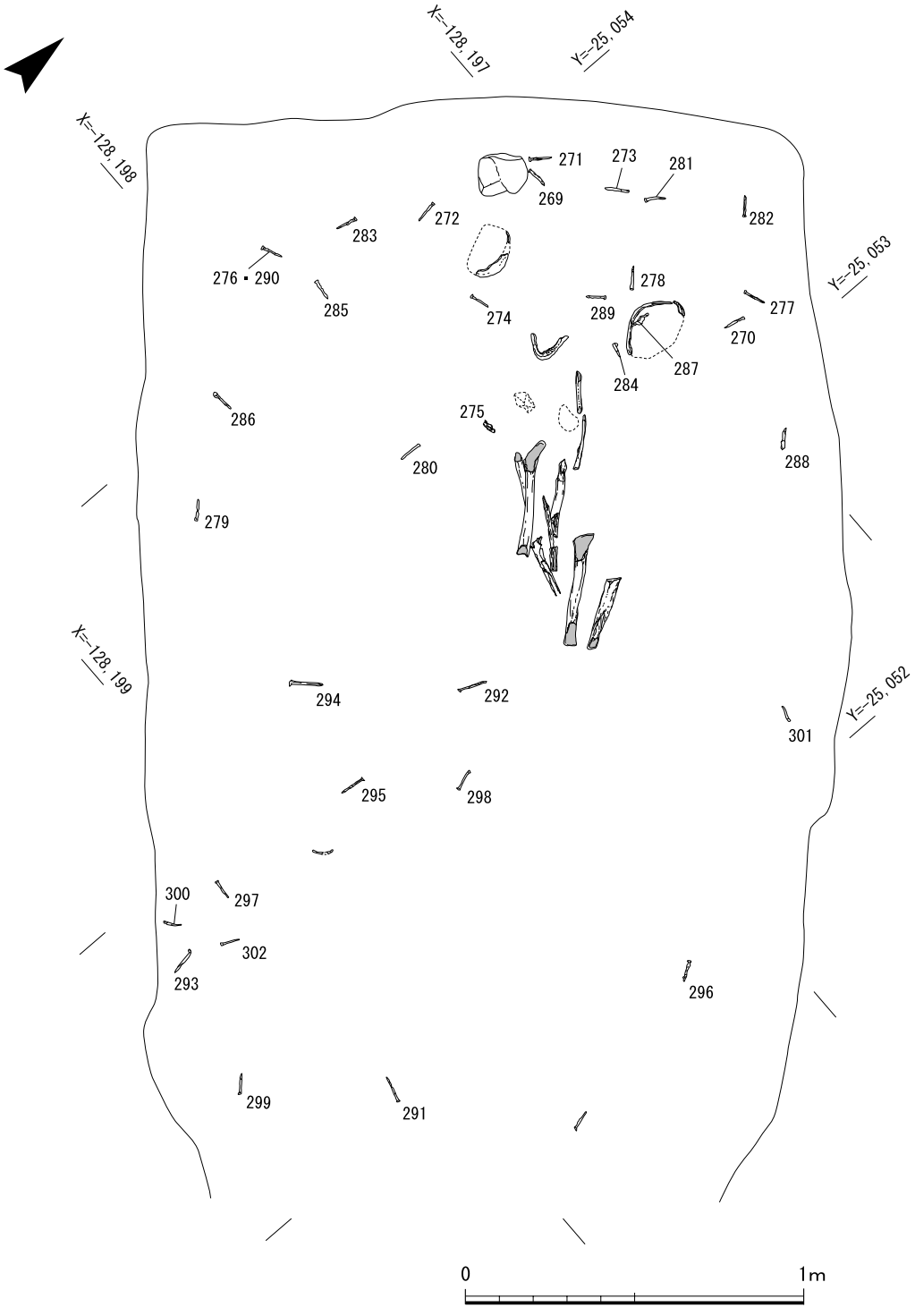
③土層堆積状況(第44・45図)

玄門付近は、記録を作成する前に崩落してしまったため、閉塞状況に関する情報が得られなかった。撹乱が及んでいるため不明瞭な部分があるが、11～16層が閉塞に伴う堆積と判断される。玄

室内最下層の19層は、構築に伴う整地土と考えられる。玄門部で検出した溝は、閉塞土により覆われていた。玄室内で確認した９・10層は、礫を多く含む締りのない天井崩落土である。

④遺物出土状況（第46図）

玄室内の埋葬面は２面である。天井崩落土である10層上面から人骨が出土した。保存状態が悪く小片が残存するのみであった。土器等は出土していない。19層上面においては、鉄製品と人骨



第46図　32号横穴遺物出土状況図

が出土している。人骨は玄室中央付近にまとまっており、頭蓋骨の一部と長管骨が出土した。いずれも解剖学的な位置関係は留めていなかった。長管骨はいずれも骨端を欠損していた。おおむね向きを揃えて並べられており、改葬による集骨が行われたと考えられる。

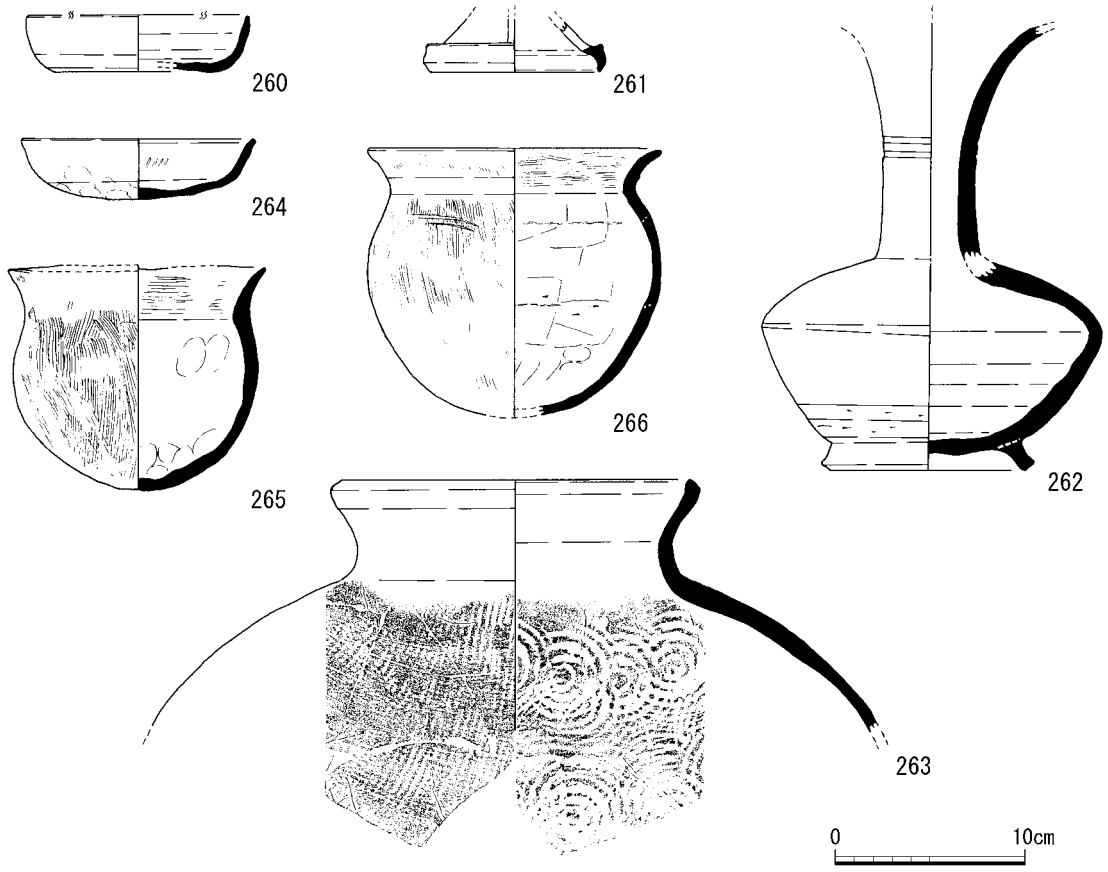
墓道・羨道の埋土である３層から、まとまって遺物が出土している。同一層位からの複数時期にわたる出土であることから、墓道が埋没する過程で流れ込んだ遺物と考えられる。

（奈良康正）

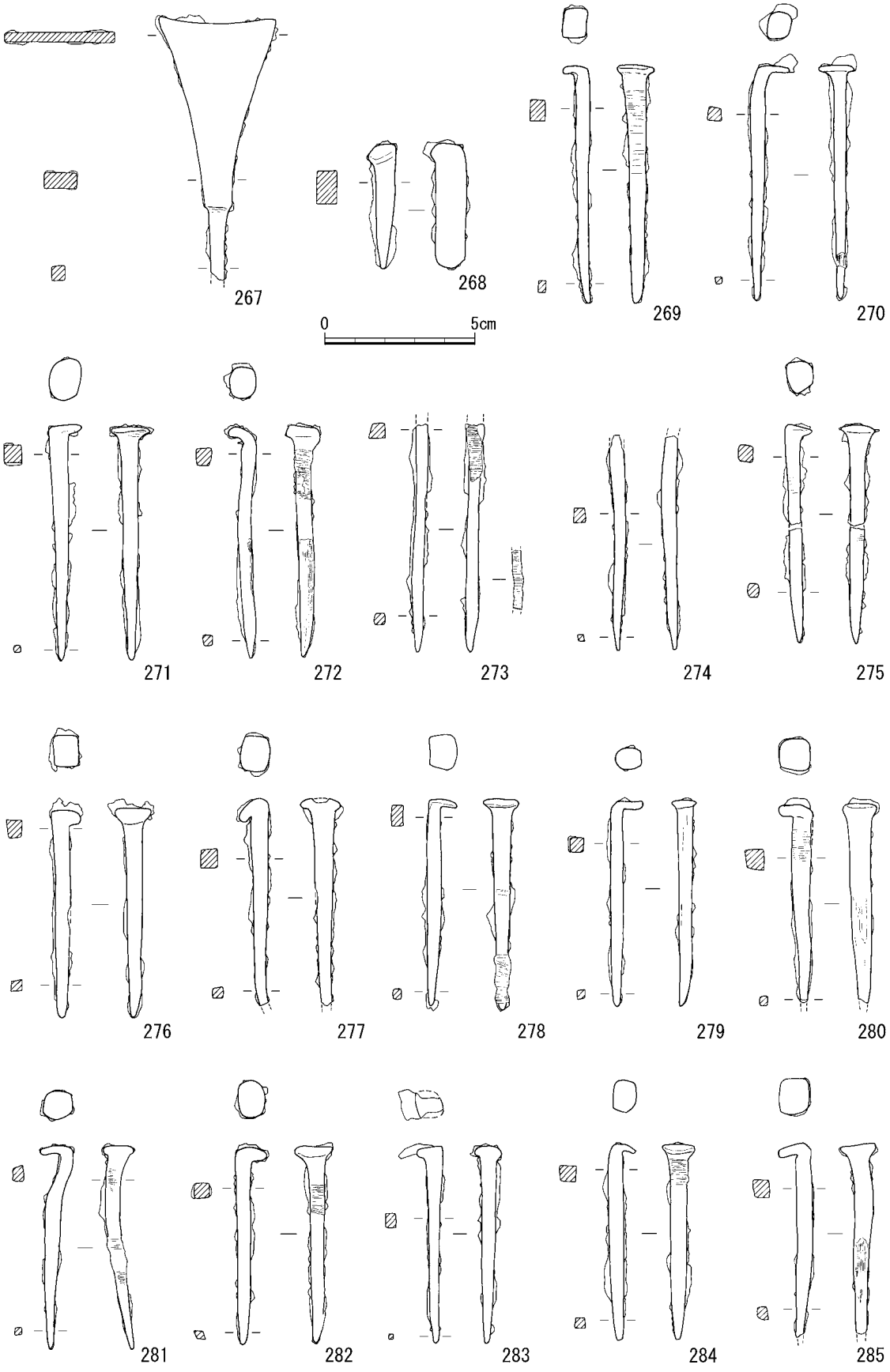
⑤出土遺物（第47図260～第49図303）

32号横穴から出土した遺物には土器のほか、鉄製品がある。土器の内訳は須恵器３点、土師器３点である。このほかに古墳時代の須恵器の破片１点がある。また、鉄製品は37点出土した。

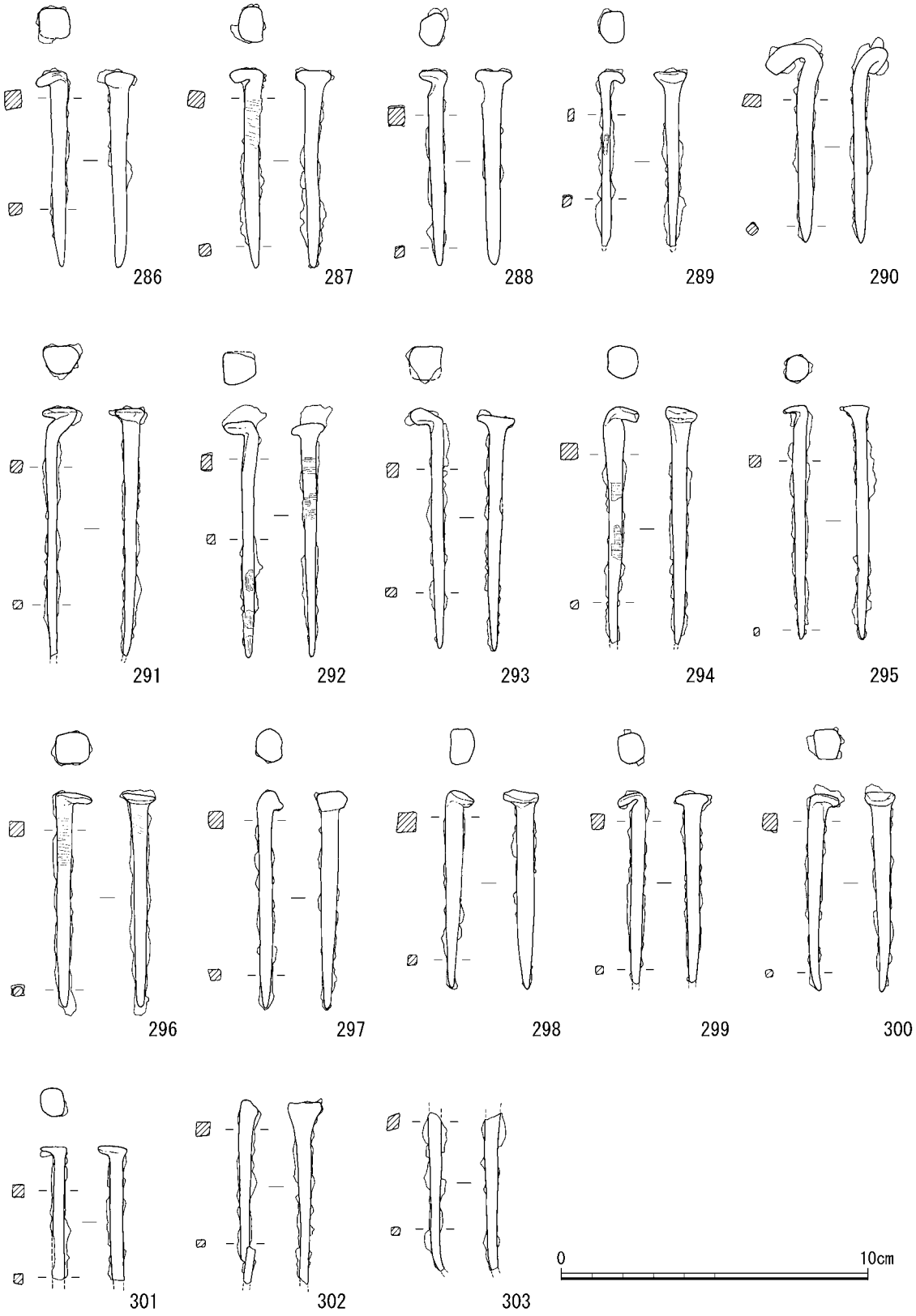
須恵器は杯Ｂ１点(260)、長頸壺Ｄ１点(262)、甕１点(263)がある。260は1/12以下の小破片であるが、杯Ｂとして復元した。262は細片化が著しかった個体で、口縁端部を欠損するほか、頸部と体部の接点もわずかで、実測図は図上復元である。肩部に稜を持つが、体部に刺突文などはみられない。また、隣接する33号横穴の墓道で出土した破片にも接合するものがあった。胎土に微細な砂粒を含み、断面が赤褐色を呈するのでⅠ群の可能性が高いが、断面の色調はやや淡い。高台の形状などから、型式的には最も新しい長頸壺Ｄに分類できる。奈良時代前半のものであろう。263は外反気味に立ち上がった口縁部がやや内湾し、端部を内上方に向かってつまみ上げ気



第47図　32号横穴出土土器実測図



第48図　32号横穴出土鉄器実測図１



第49図　32号横穴出土鉄器実測図２

味の形態を呈する。体部外面は格子状タタキののち、部分的にナデを施すようである。口縁部は無文で、類似した口縁部形態のものとして30号横穴出土の須恵器甕の破片(196)がある。

土師器は杯Ｂ１点(264)、甕Ａ２点(265・266)がある。264は都城域で出土する杯Ｃに類似した特徴を持つもので、摩滅しているものの、内面に放射暗文を施している。胎土には微細な砂粒をやや多く含む。265・266は、ほぼ同じ製作技法で作られた甕であるが、265は頸部の屈曲がやや緩い。また、法量は266の方が一回り大きい。266は須恵器長頸壺Ｄ(262)と同様に33号横穴から出土した破片の一部が接合した。胎土は266がほかの甕Ａと同じであるのに対して、265は長石等の微細な砂粒を多く含んでおり、別の胎土である可能性が高い。

他に古墳時代の須恵器と考えられる破片が１点(261)ある。261は高杯の脚部と考えられ、小破片であるが長方形のスカシを確認することができる。形状から陶邑編年のＴＫ47型式(注12)前後の高杯の脚部と推定する。

鉄製品には鉄鏃１点(267)、楔１点(268)、釘35点(269～303)がある。鉄鏃は１点のみ出土した。方頭式と考えるものであるが、刃部が外側に膨らむのではなく、わずかに内側に凹むものである。関は角関である。268は楔の可能性があると考えている。釘は大きく２か所に分かれて出土しており、269～290の22点は奥壁側で、291～303の13点は玄門側で出土した。前者の釘は、全長が６～７cmのもの(278～288)が多く、次いで全長が７～８cmのもの(269・271～277・290)がある。このほかに全長が８cmをわずかに超えるもの(270)や全長が６cm未満のもの(289)がある。釘に木質の残るものは少ないが、272や280・282などでは頭部側に横方向の木目が、先端側に縦方向の木目が確認できる。ほぼ完存するものが多く、22点の釘すべてが木棺１つ分に使用されていたと考える。また、後者の釘は全長が７～８cmのもの(293～297)と、全長が６～７cmのもの(298～300・302)の大きく２つのグループがある。このほかに８cmをわずかに超えるものとして291がある。301・302は本来の全長等の復元は不可能である。釘に木質の残っているものは少ない。ほぼ完存するものが多いが、13点の釘すべてが木棺１つ分に使用されていたとしてもやや点数が少ないかもしれない。　(筒井崇史)

(10)33号横穴(ＳＸ21)

①立地・調査時の状況

32号横穴の南西側に隣接して位置する。墓道先端部は32号横穴と重複している。確認できた範囲では、全長9.5mを測り、主軸はＮ－60°－Ｗをとる。

②規模・構造(第50図)

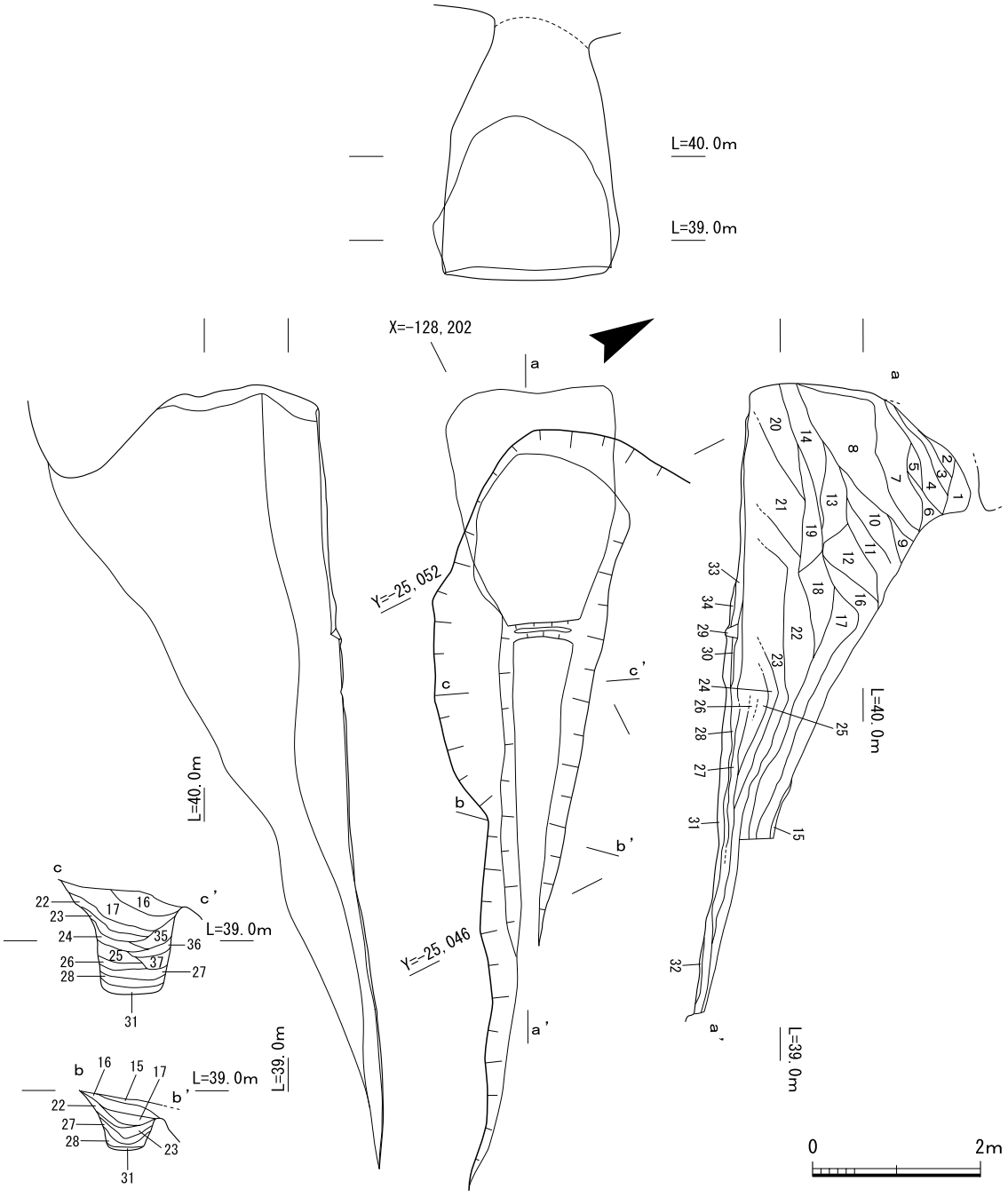
ａ)墓道・羨道

先述のように、墓道が32号横穴の墓道と重複しており、先端寄り1/2程は32号横穴の墓道に重なるように延び、南側の肩部が確認できるのみである。墓道先端から6.6mの地点で主軸方向と直交する溝１条を検出した。この地点で両側壁の傾斜が急峻となり、平面的にも屈曲して奥壁側へ広がりを有することから、玄門に相当すると判断し、この地点までを墓道・羨道とした。調査

区内で検出した長さは6.6m、床面の標高は37.7～38.35mを測る。重複する32号横穴の墓道床面と比較すると0.3～0.5m程、33号横穴が高くなっている。羨道の天井は残存していなかった。

ｂ）玄室

先述のように、床面で検出した主軸と直交する溝を境に、立体的な構造に明瞭な変化が認められることから、ここが玄門であると判断した。玄室は、全長2.9m、玄門幅0.8m、最大幅2.1mを測り、床面の標高38.41～38.66mである。天井は奥壁側を1/4程度残すのみで、その他は崩落していた。玄門で検出した溝は、上面幅0.2m、深さ0.1～0.2mを測る。褐色砂質土（29層）で埋没して



第50図　33号横穴平面・立面・土層断面図

33 号横穴断面図土色

1. 黄褐色(10YR5/8)粘質土(径１cm前後の小礫を含む)
2. 褐色(10YR4/4)砂質土(細砂を多く含む、雨水による流れ込み土か)
3. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(径１～４cmの礫を少し含む)
4. 明褐色(7.5YR5/8)砂礫(径１cm前後の礫を多く含み、径３～４cmの礫をわずかに含む)
5. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂を多く含む、径１cm前後の小礫を少し含む)
6. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(径１cm前後の礫を少し含む)
7. にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土・暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土の堆積(極細～極粗砂、径２～５cm程の礫を多く含む)
8. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～粗砂及び径２～３cm程の礫をわずかに含む)
9. 黄褐色(10YR5/8)粘質土(径１cm前後の小礫をやや多く含む)
10. 明褐色(7.5YR5/8)粘質土(径１～２cmの小礫を少し含む)
11. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(シルト～粗砂、径１～２cmの礫をわずかに含む)
12. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
13. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(シルト～中砂、径１～３cm程の礫を含む)
14. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
15. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～粗砂、径２～４cm程の礫を含む)
16. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
17. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
18. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極細～極粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
19. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む 締りなし)
20. 明黄褐色(10YR(6/6)砂質土・にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土の混入土(中～極粗砂、径１～７cm程の礫を多く含む)
21. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土・にぶい黄橙色(10YR(7/4)砂質土の混入土(中～極粗砂、径１～７cm程の礫を多く含む)
22. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(シルト～極粗砂)
23. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(シルト～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
24. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
25. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
26. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～極粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
27. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～極粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
28. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～中砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
29. 褐色(10YR4/6)砂質土(極細～粗砂、径１cm程の礫をわずかに含む)
30. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(シルト～粗砂
31. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土・暗褐色(7.5YR3/4)砂質土が同程度混入(シルト～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
32. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～粗砂に灰黄色(2.5Y6/2)粘質土が混入)
33. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粘質～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
34. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(極細～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
35. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極細～粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
36. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～粗砂、径１～４cm程の礫を含む)
37. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～中砂(径１～２cm程の礫を含む)

おり、遺物は出土しなかった。玄室内の整地土の堆積がこの溝を限りに途絶えることから、施工に際し土留め等を行った痕跡の可能性が考えられる。有機物等の痕跡は確認できなかった。奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、天井の横断面は崩落が激しく詳細は不明である。

③土層堆積状況(第50図)

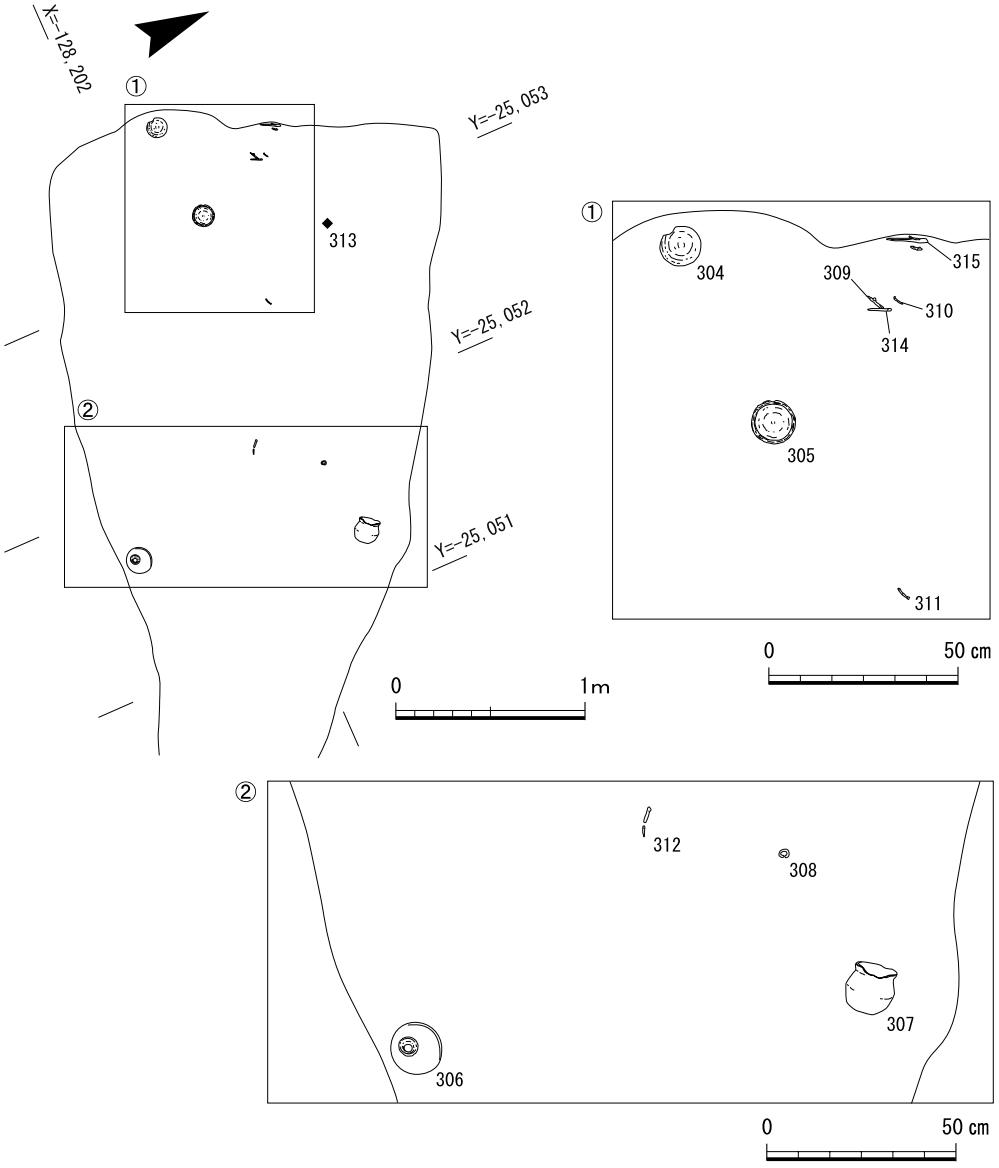
墓道先端付近の堆積状況については、32号横穴の墓道であるとの判断から、記録を作成することなく掘削を行ってしまい、欠落が生じている。しかし、この部分に関しては、墓道の埋没に伴う堆積であると考えられる。24～28層が閉塞に伴う堆積と判断される。29層は玄門で検出した溝の埋土である。ここから奥壁側で確認される33・34層が玄室床面の造成土である。先述のように溝を境に羨道部分では認められない。30～32層が墓道・羨道の造成土と考えられる。

④遺物出土状況(第51図)

玄門付近の両側壁際で須恵器平瓶(306)と土師器甕(307)が１点ずつ出土した。甕は横転しているが、どちらも正位に据えられていたと考えられる。玄室奥壁寄りでは、須恵器杯Ａ・蓋Ａが１個体ずつ正位で出土している。鉄釘は７点出土しており、最も手前のものと奥壁際との間隔はおよそ1.6mを測る。出土点数が少ないことから、判断が難しいが、玄室中央に主軸と並行に木棺を据えていた可能性が考えられる。 (奈良康正)

⑤出土遺物(第52図304～第53図315)

33号横穴から出土した遺物には土器のほか、耳環・鉄製品がある。土器の内訳は須恵器３点、土師器１点である。



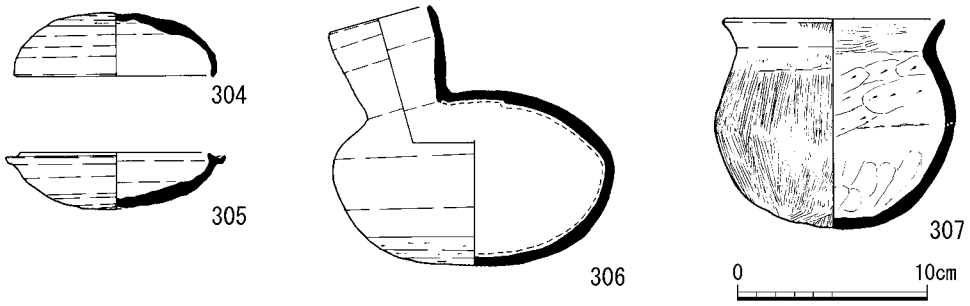
第51図　33号横穴遺物出土状況図

須恵器は蓋Ａ１点(304)、杯Ａ１点(305)、平瓶１点(306)がある。304は頂部外面がヘラキリ後不調整のＡｂである。断面が赤褐色を呈する。305は底部外面がヘラキリ後不調整のＡｂである。口縁部の立ち上がりが短く、受け部の上端からわずかに突出する程度である。胎土からみると304とはセットにならない。306は口縁部がやや内湾気味を呈し、肩部が丸味を帯びている。完形のため、詳細な製作技法は明らかでないが、体部の頂部に閉塞のための粘土の充填痕を確認することができる。焼成はやや軟である。胎土は砂粒をほとんど含まない。

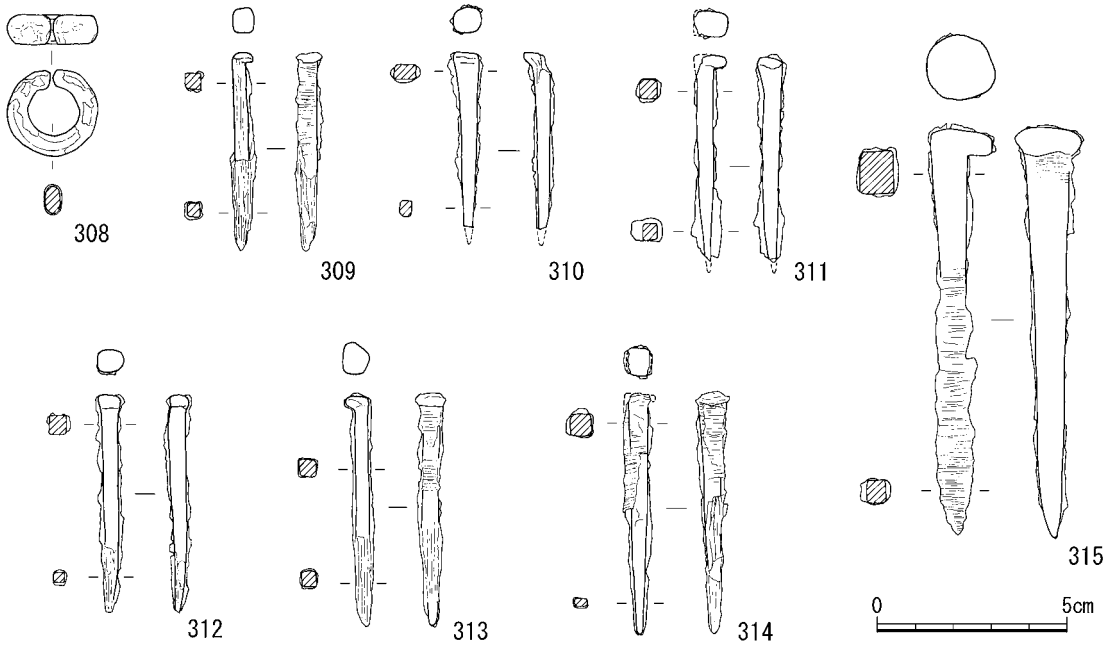
土師器は甕Ａ１点(307)がある。307は32号横穴出土の265・266とほぼ同じ製作技法で作られているが、体部内面上半にケズリを施している点が若干異なる。胎土には砂粒を含む。

耳環は１点(308)出土した。耳環の断面は円形である。一部に錆がみられるものの、金色を呈するところが残存することから金環と思われる。銅芯に鍍金あるいは箔貼する。

鉄製品は釘のみ７点出土した(309～315)。釘は、全長が5.5～6.5cmの一群(309～314)と10.5cm



第52図　33号横穴出土土器実測図



第53図　33号横穴出土耳環・鉄器実測図

のもの(315)とに分かれる。いずれも断面が方形で、頭部を折り曲げる型式のものである。309・312～315では木質が良好に遺存しており、何らかの木製の容器に使用されていたと考えられるが、出土した釘の本数が少ないことから、木棺ではない可能性もある。　（筒井崇史）

(11)34号横穴(ＳＸ17)

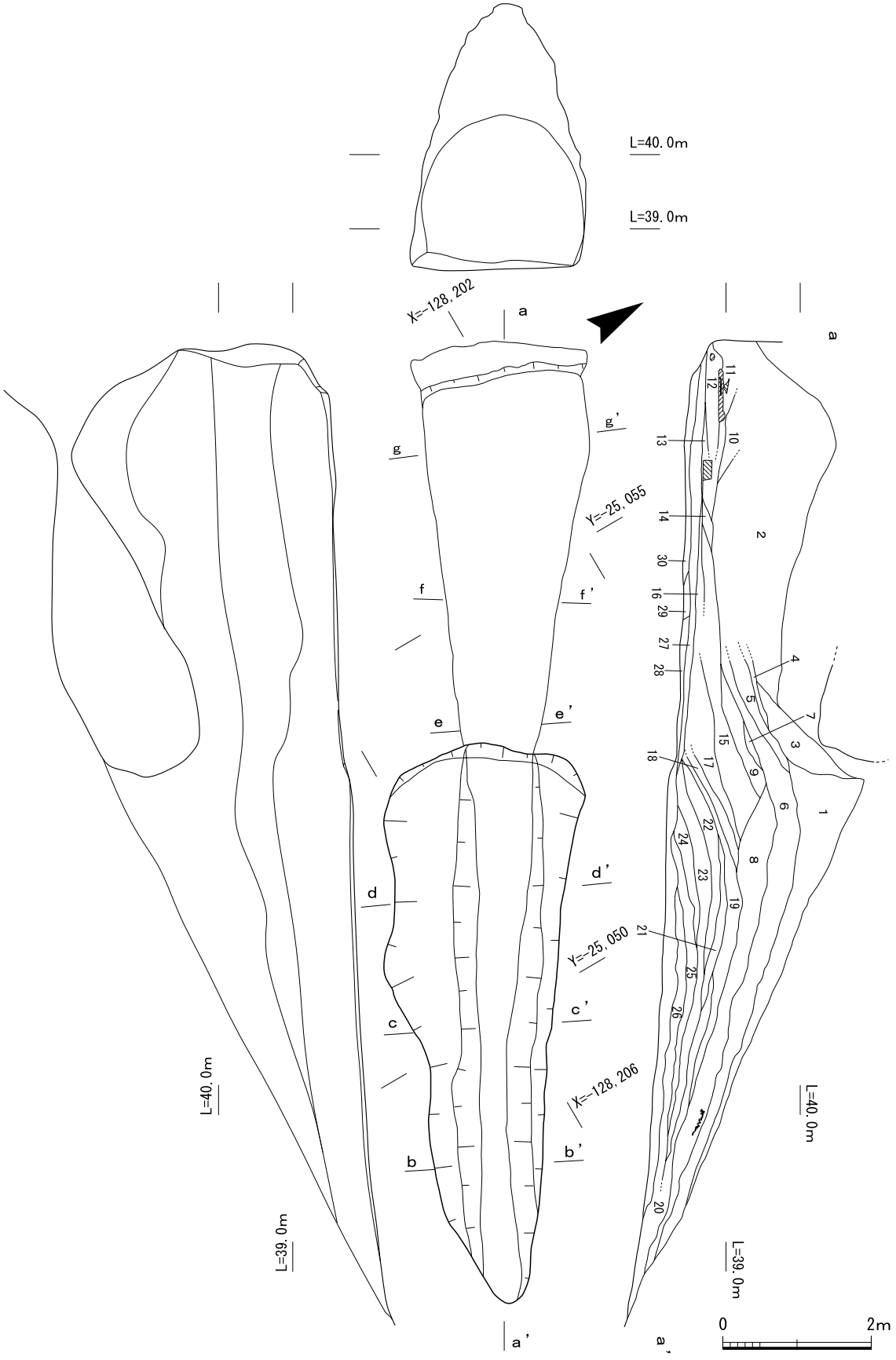
①立地・調査時の状況

33号横穴の南西に位置し、南東方向に開口する横穴である。墓道・羨道は全て埋没しており、天井の陥没等も見られなかったため、地形からは存在の兆候がつかめず、遺構精査を繰り返すことによって検出した。全長は13.0mを測り、主軸はＮ－59°－Ｗをとる。

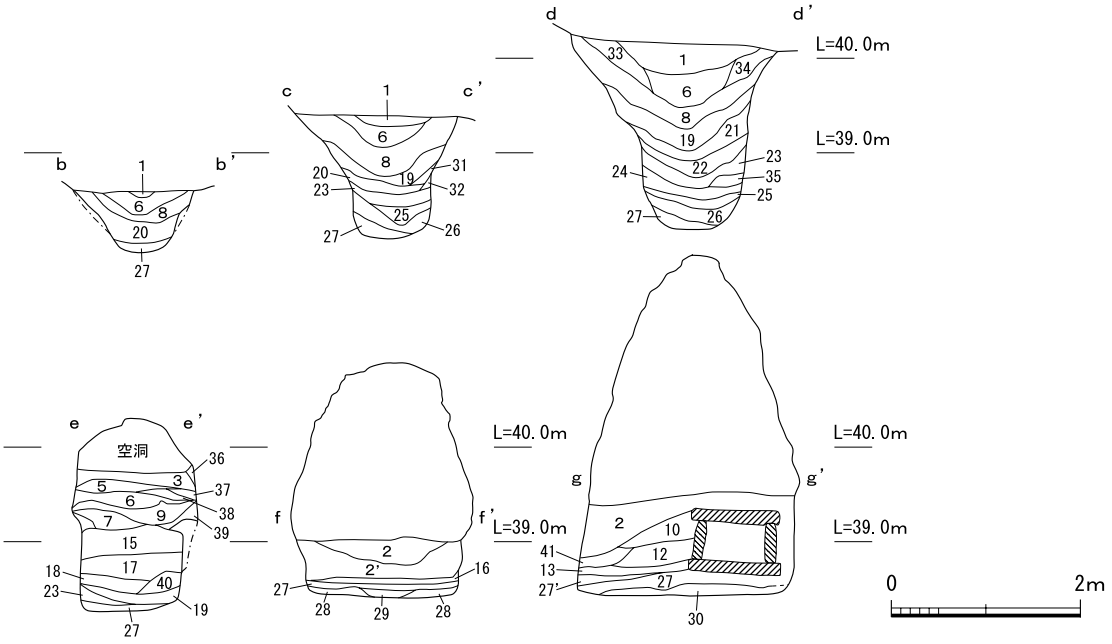
②規模・構造(第54図)

a)墓道・羨道

34号横穴は、墓道の先端まで調査区内で検出した。墓道先端から7.6mの地点で、床面にわずかであるが段差が設けられていた。また、副葬遺物の出土が、この地点から奥壁側に限られるこ



第54図　34号横穴平面・立面・土層断面図



1. 褐色(10YR4/4)砂質土(極細～粗砂、径１～５cm程の礫を含む)
2. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂径１～３cmの小礫をやや多く含む。まれに６～10cmの礫を含む、崩落土)
3. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極細～細砂)
4. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(極細～粗砂、径１～３cm程の礫をわずかに含む、しまりなし)
5. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～中砂、径１cm程の礫を含む)
6. 暗褐色(10YR3/3)砂質土(細～粗砂、腐植土)
7. 褐色(10YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む、天井崩落塊を含む(24層))
8. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(極細砂、径１～３cm程の礫を含む)
9. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(細～中砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
10. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫をやや多く含む)※10、11、14層は天井崩落土
11. 明褐色(7.5YR6/8)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫をやや多く含む、まれに５cm前後の礫を含む)※10、11、14層は天井崩落土
12. 11に同じ
13. 黄褐色(10YR5/8)粗砂、初期の崩落土か、遺物はこの層に含まれている)
14. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を少し含む)※10、11、14層は天井崩落土
15. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
16. 13に同じ
17. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～粗砂、径１～３cm程の礫を含む※21よりわずかに色調が暗い)
18. 褐色(10YR4/4)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
19. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細～中砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
20. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト～中砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
21. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
22. 明褐色(75YR5/6)砂質土(細～粗砂、径１～３cm程の礫を多く含む)
23. 褐色(10YR4/4)砂質土(細～極粗砂、径１～４cm程の礫を含む)
24. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土、(細～極粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
25. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～極粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
26. 20に同じ
27. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(シルト～細砂、径１～４cm程の礫を含む)
28. 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土(粗砂を多く含むまれに径１cm程の小礫を含む)
29. 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土(粗砂、径２～４cm程の礫を含む)
30. 28に同じ
31. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細～極粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
32. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細～粗砂)
33. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細砂)
34. 13に同じ(径0.5～１cm程の礫をわずかに含む)
35. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(極細～極粗砂、径１～２cm程の礫を含む)
36. 淡黄色(2.5Y8/4)砂質土に明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混入(シルト～粗砂、径0.5～２cm程の礫を多く含む、天井崩落土)
37. 36に同じ
38. にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土(極細～中砂、径0.5～１cm程の礫を含む)
39. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細～粗砂、径１～２cm程の礫をわずかに含む)
40. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(極細～中砂、径１～３cm程の礫を非常に多く含む)

第55図　34号横穴土層断面図

とから、ここが玄門であると判断した。墓道・羨道は全長7.6m、幅0.35～1.0mを測り、床面の標高は37.8～38.2mである。羨道の天井は全く残存していなかった。

b)玄室

床面に段差が設けられた地点を玄門と判断したため、その地点から奥壁までが玄室となる。玄室は、全長5.4m、玄門幅1.0m、最大幅2.4m、床面の標高38.3～38.5mをそれぞれ測る。床面は、

奥壁に向かって緩やかに傾斜しており、わずかではあるが標高が上がっている。奥壁際には、床面との比高約0.2mを測る段差が存在し、幅2.4m、奥行0.2～0.4mを測る。整形は不均整で、段差の削り出しも水平面を意識しておらず、緩やかに傾斜することから、棚を意識した造作ではない可能性が高い。玄門付近の横断土層断面ｅ－ｅ'を観察すると、両側壁には、壁面から天井にかけてのアーチ部分の基部が、崩落せずに突起として残存していた。このことから、玄門付近の天井高は0.9～1.0m前後であったと推測される。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井は残存していた。天井は内面の崩落が激しく、天井高は玄門付近では1.9m程であったが、玄室中央付近では3.6mを測る。天井横断面の形状は、内面の崩落が激しいため不明である。

③土層堆積状況（第54・55図）

34号横穴は、玄室天井の崩落が激しく、崩落土の堆積は最も厚い地点で床面から2.0mに及んでいた。19層以下、26層までが閉塞に伴う堆積と判断される。閉塞土の上層には、羨道の天井崩落土と考えられる９・15・17層が堆積しており、開口部を埋めるように流入土等が堆積している。さらに、流入土の上層に玄室の天井が大きく崩落していた。墓道から玄室にかけては最下層に薄く27層が確認され、築造に伴う整地土と考えられる。

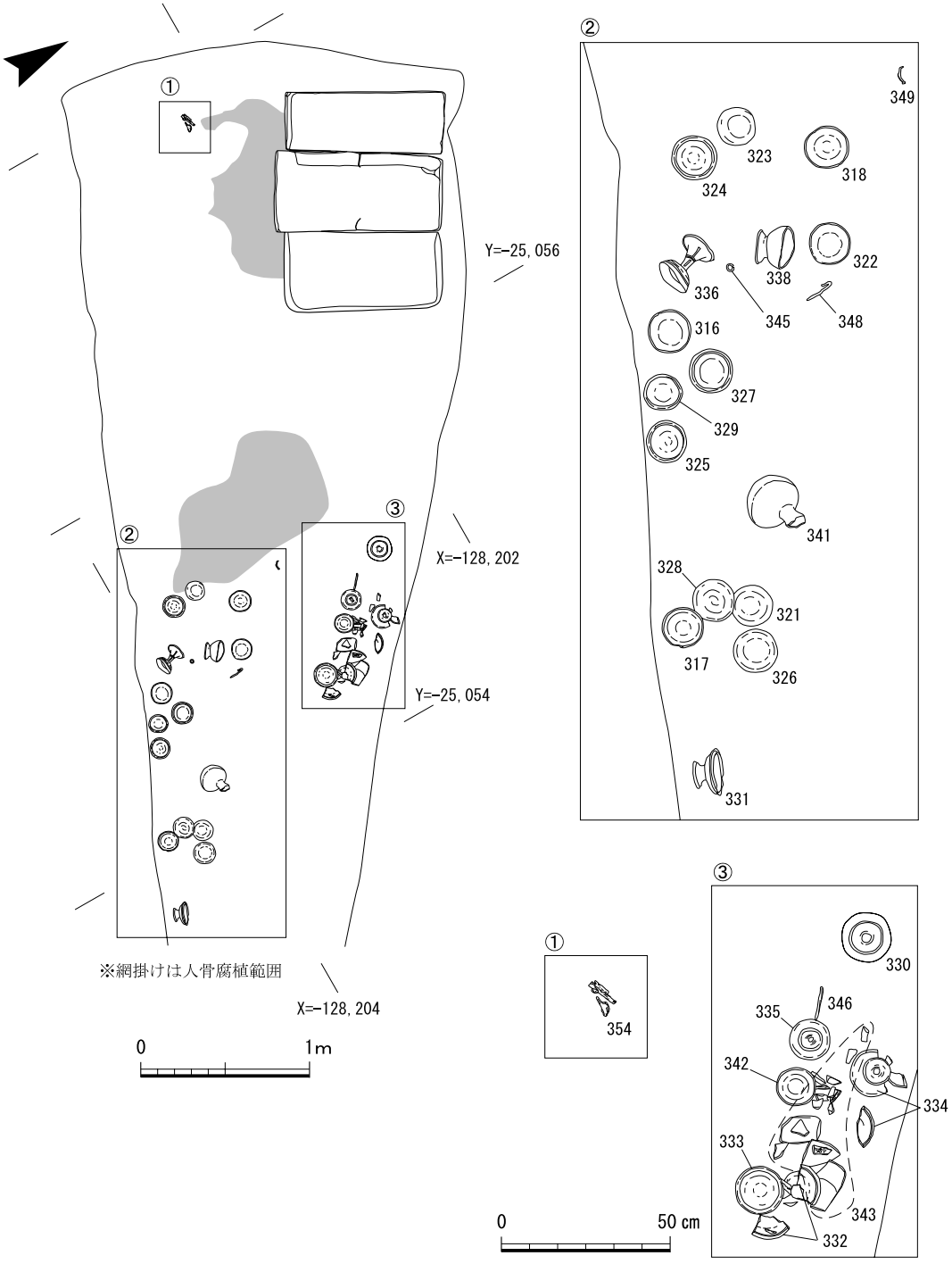
④遺物出土状況（第56図）

遺物は、28・27・12層上面の３面で出土した。28層上面では、玄室内の玄門寄りの地点で集中して出土した。右側壁の一群は、玄室主軸に沿って２ｍ程の範囲に広がっており、須恵器蓋Ａ、杯Ａ、高杯Ｂ・Ｄ、平瓶、壺や鉄鏃等が出土している。出土状況は、316・321・323～325・327が正位で、317・318・322・326・328・329が逆位であった。左側壁の一群はある程度密集して出土しており、須恵器高杯Ｄや土師器杯Ｃ・Ｄ、鉄鏃等が出土している。高杯Ｄは332・333が正位、330・334・335が逆位での出土であった。土師器は、343が大きく破損していたが、２点ともに正位での出土であった。340は墓道先端付近８層から出土した。墓道が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。また、354は奥壁付近、石棺の南西側で27層上面から出土した。12層の上面では、人骨の痕跡を確認した。石棺が1/2程埋没した後に、埋葬がなされた痕跡である。

⑤石棺出土状況（第57図）

27層上面では、玄室奥の左側壁際に石棺が１基据えられていた。石棺は、玄室の主軸と方向を揃えており、天井崩落土により完全に埋没していた。使用された石材は、大阪府・奈良県境の北側付近に所在する牡丹洞付近にみられる新生代の二上層群下部、ドンヅルボー層上部の水中堆積した礫岩混じりの凝灰岩である。府内での上記の材質を用いた石棺の検出例は、京都市音戸ヶ谷古墳群、向日市物集女車塚古墳、京田辺市堀切谷横穴群と合わせて４例と少ない[(注13)]。

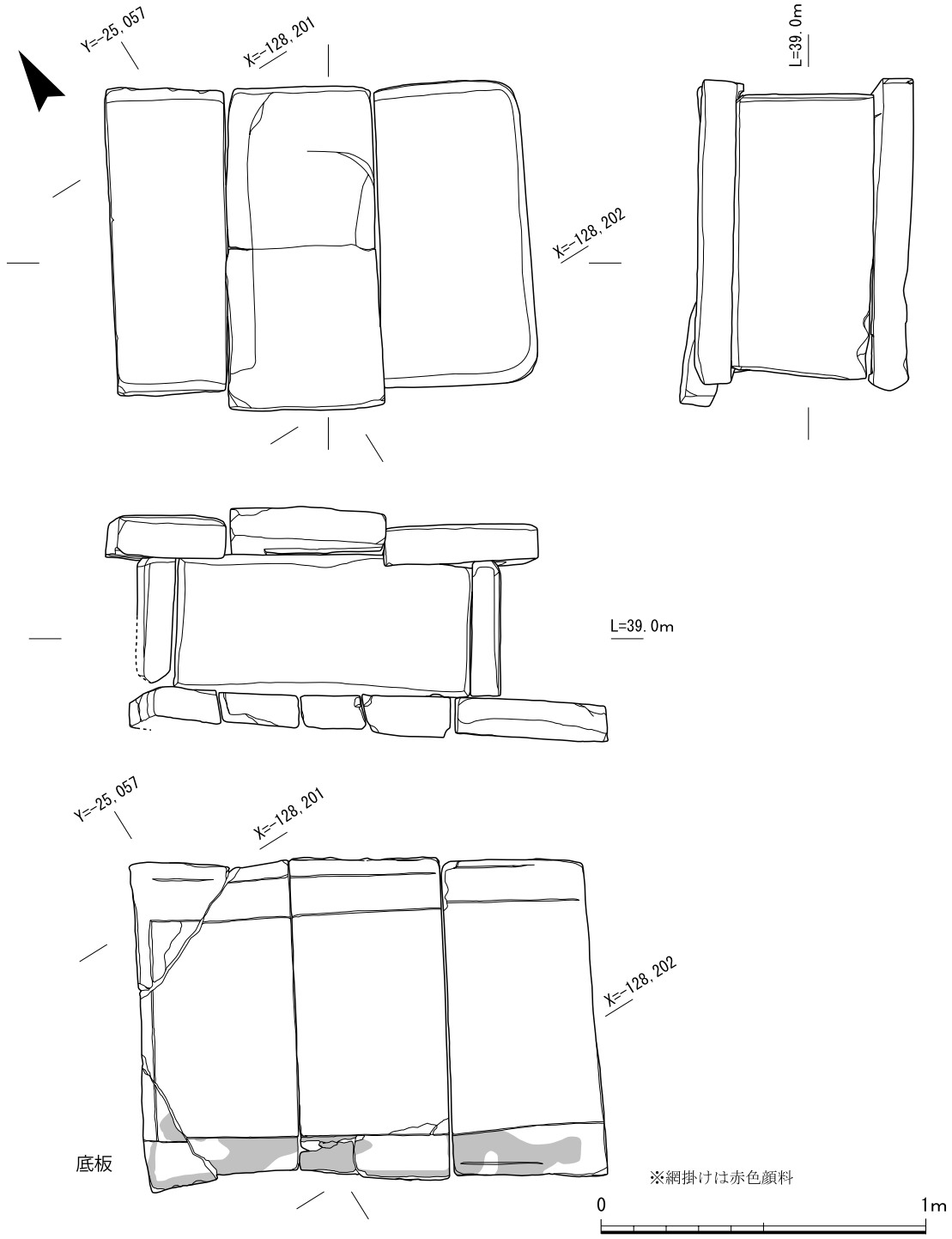
蓋石及び底石はそれぞれ３石、小口と側石は２石ずつの計10石で構成されていた。蓋石は全長1.3m、全幅0.84～1.0m、底石は全長1.42m、全幅0.98～1.02m、蓋石上端から底石下端までの全高は0.64mを測る。内法はそれぞれ0.9m、0.6m、0.45mである。以下、記述に際し、蓋石は玄門側から蓋石１、蓋石２、蓋石３とし、底石に関しても蓋石と同様とする。小口は玄門側を小口１、奥壁側を小口２とし、側石は左側壁側を側石１、右側壁側を側石２とする。



第56図　34号横穴遺物出土状況図

蓋石１は、長辺0.93m、短辺0.46m、厚さ0.13mを測る。玄門側長辺の角は両端部を丸く仕上げており、両短辺と合わせた三方の上端は面取りを行っている。裏面には、小口、側石と組み合わせるため「コ」字状に溝状の刳り込みが施される。刳り込みは幅11.6～12.8cmを測り、深さは2.0cm前後で、左側壁側が鈍角を呈するのに対し、右側壁側は鋭角を呈する。刳り込みの施されない長辺の側面は、丁寧に平滑に仕上げられていた。

蓋石２は、長辺0.98m、短辺0.47m、厚さ0.1～0.13mを測る。出土後、調査の過程において中



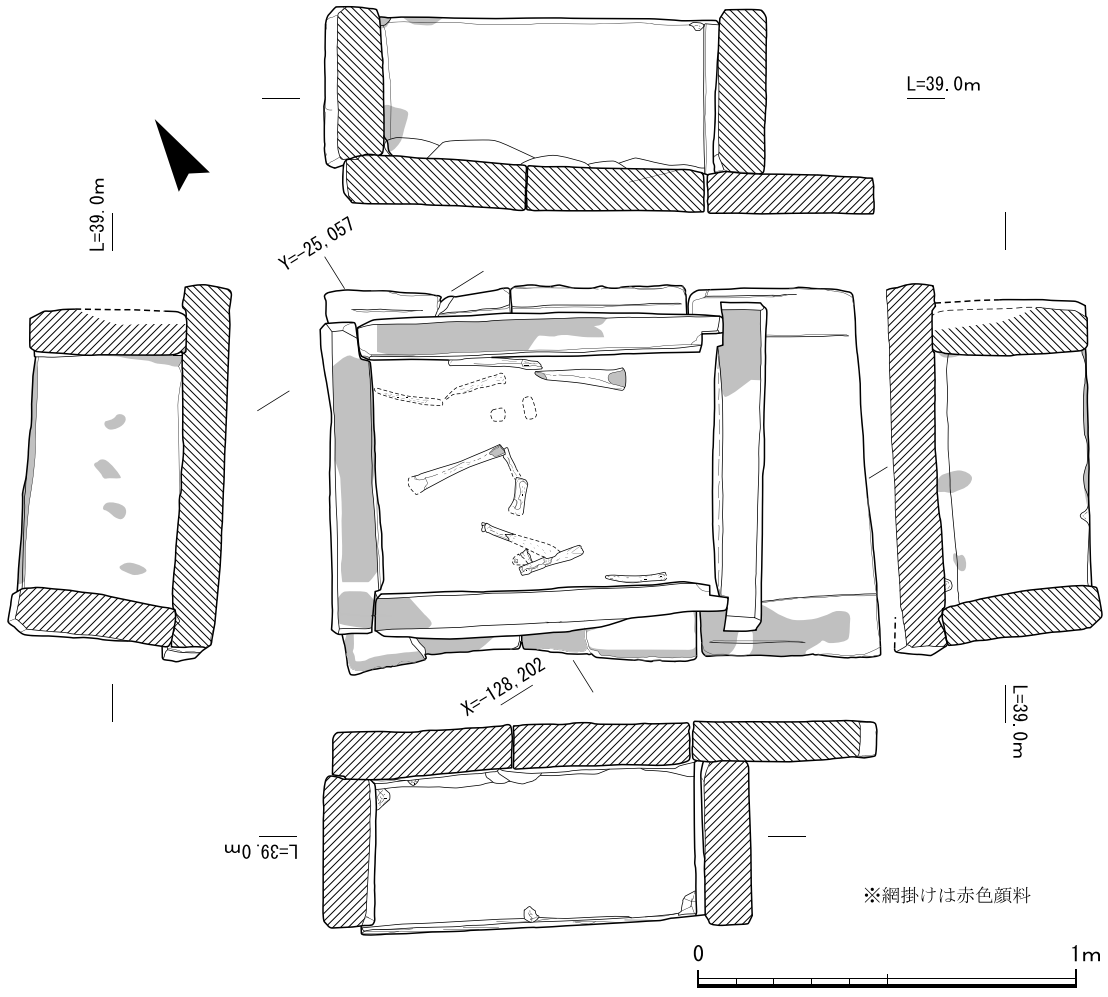
第57図　34号横穴石棺出土状況図１

央付近で割れてしまった。３枚で構成される蓋石の中央に位置するが、奥壁側長辺の角は両端部を丸く仕上げており、両短辺と合わせた三方の上端は面取りを行っている。裏面は、左側壁側には刳り込みが施されていたが、右側壁側と奥壁側の長辺は切り欠いており、左側壁側は10.8～12.8cm、右側壁側は10.4～12.8cmを測るが、長辺は幅６cm程度と他の1/2程しかなかった。蓋石２は、本来は端部に位置する部材であったと判断され、「コ」字状に刳り込みを施す蓋石１とは様相を違えている。

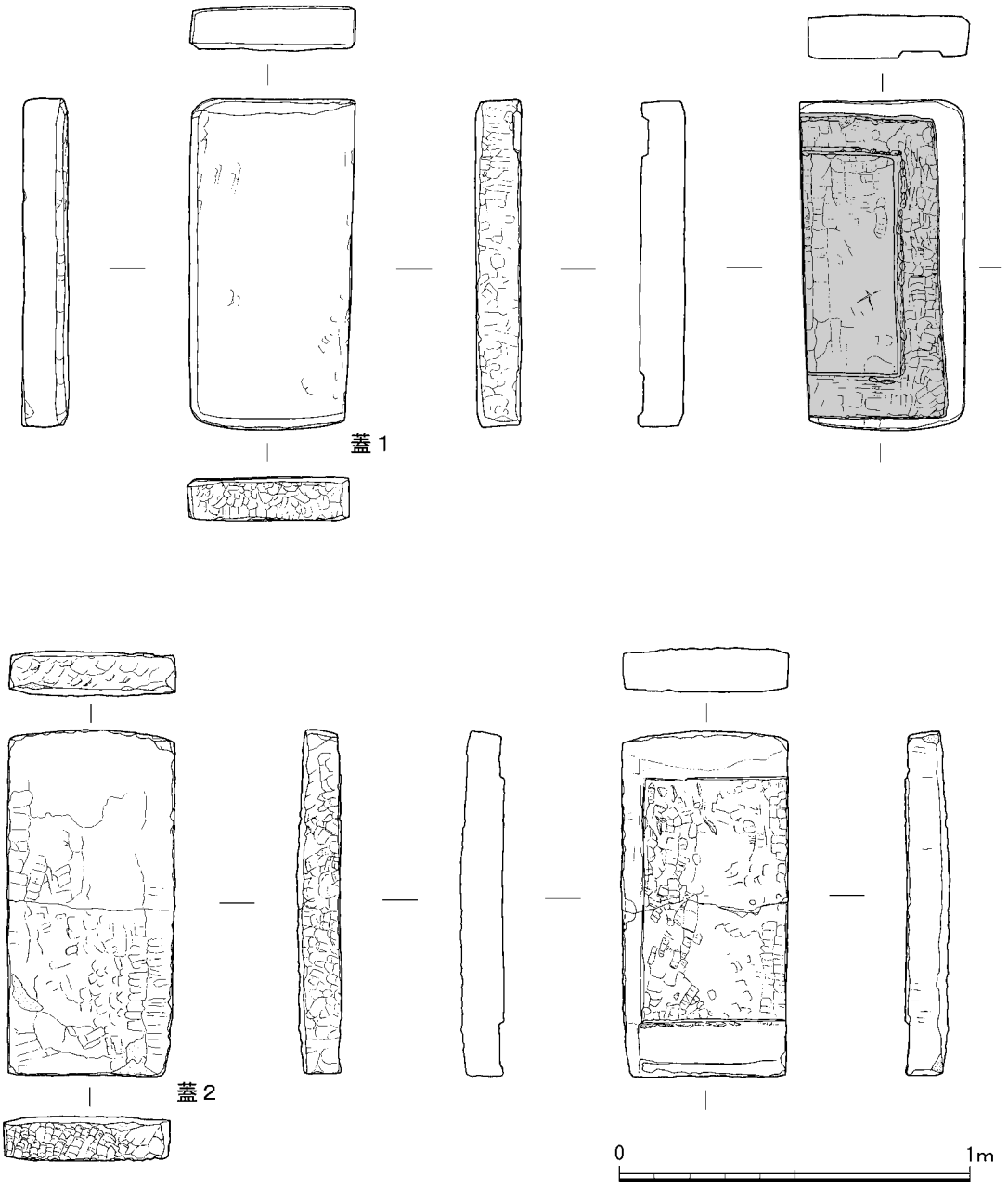
蓋石３は、長辺0.93m、短辺0.35m、厚さ0.13mを測る。両短辺上端は面取りを行っている。裏面の刳り込みは両短辺側に溝状に施され、幅12.8～14.0cmを測る。側石１と接していた部分には赤色顔料がわずかに残存している。この部材は中央やや奥壁寄りで小口２と組み合わさっていたが、その部分には刳り込みは施されていなかった。この部材に関しても端部ではなく、中間部に置かれるべきもので、本来の位置とは違う箇所に用いられていると判断される。また、小口２と接する部分にも、石材と同形に赤色顔料が残存している。

底石１は、長辺0.98m、短辺0.46m、厚さ0.12mを測る。両短辺に溝状の刳り込みが施され、幅11.8～12.0cmを測る。どちらも外側の立ち上がりはわずかな痕跡程度である。奥壁寄り長辺の角は丸く仕上げられており、裏面も玄門側長辺を除いて下端は面取りを施す。この形態から、本来は底石２と接する面が端部に位置していたと考えられ、用いられている場所または方向が本来とは異なると考えられる。右側壁側の刳り込みには赤色顔料が残存する。底石１には、小口１が載せられており、その位置は奥壁寄りの位置であった。

底石２は、長辺１m、短辺0.48m、厚さ0.11～0.13mを測る。奥壁寄り右側壁側が破損しており、刳り込みに沿うよう小片を含め３つに割れている。左側壁側の刳り込みは溝状を呈し、幅12.0～



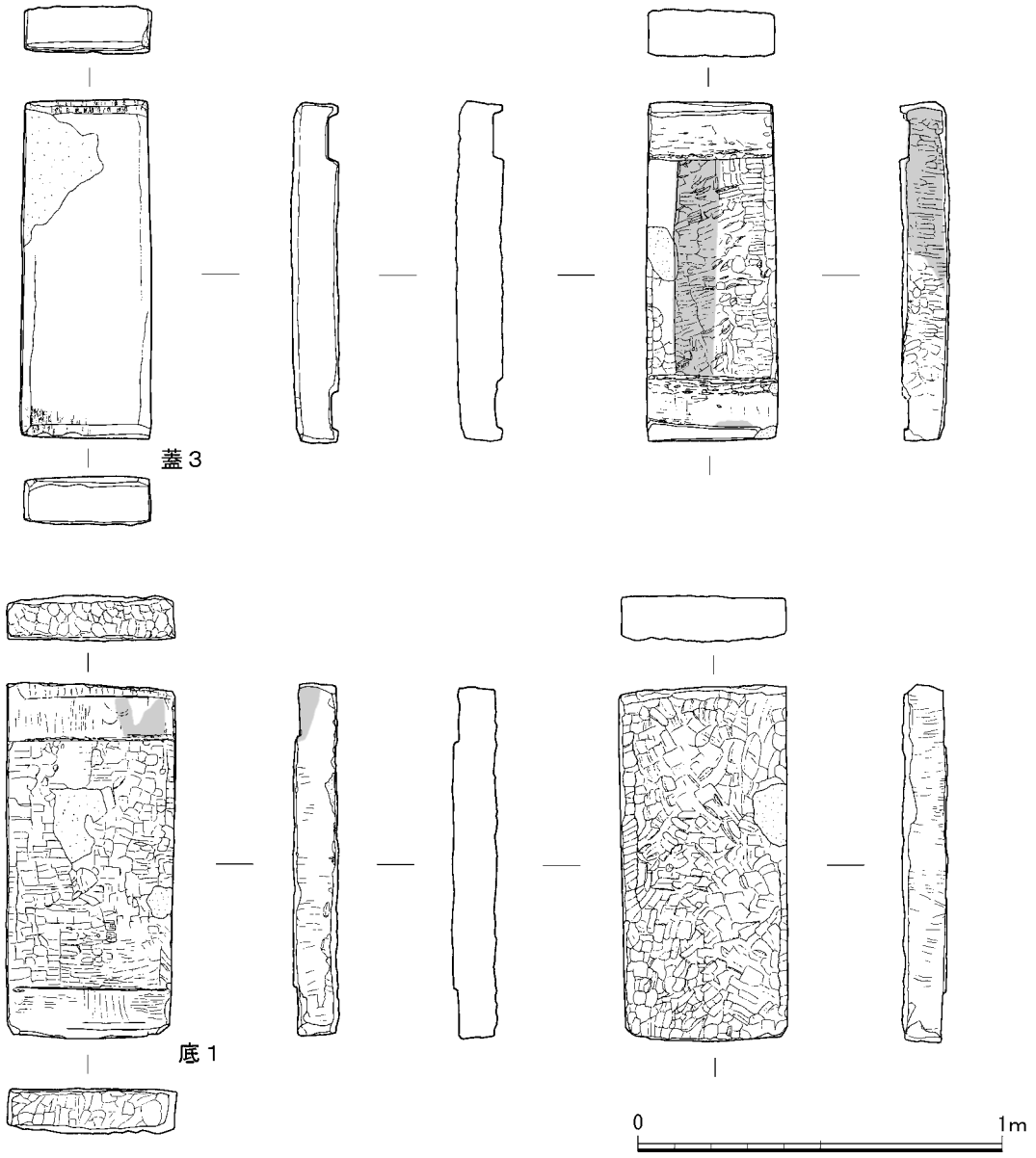
第58図　34号横穴石棺出土状況図２



第59図　34号横穴石棺石材実測図１

12.8cmを測るが、左側壁側は外縁の削り残しがわずかしか認められず、端部までほぼ平坦に近い形状である。裏面の整形が粗く、凹凸が激しい。右側壁側の刳り込みには一部、赤色顔料が残存する。

底石３は、長辺0.99m、短辺0.47m、厚さ0.12mを測る。奥壁側長辺の両端部が三角形に破損している。奥壁寄りの左側壁側の角は丸く仕上げられているが、右側壁側はそのような加工が明瞭ではない。奥壁側長辺と両短辺には「コ」字状に刳り込みが施されており、左側壁側は溝状を呈するが、右側壁側と奥壁側は外縁に削り残しが認められず、端部まで平坦である。短辺側は13.2～16.0cmの幅を有するが、奥壁側は4.4～6.0cm程度の幅を測るのみである。側石２を取り除くと、接していた切り欠きの箇所に、赤色顔料が残存していた。奥壁寄りの端部には小口２が載

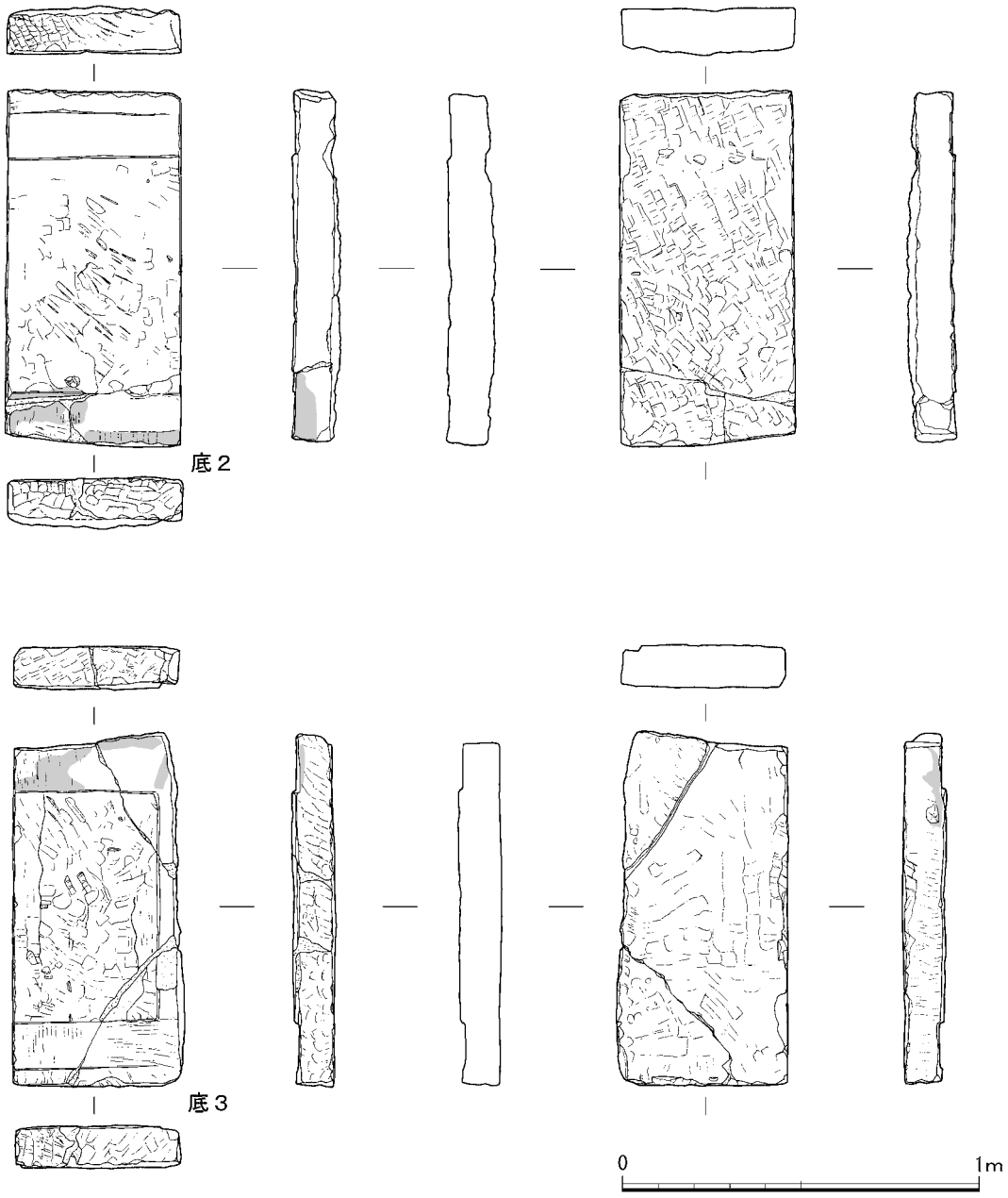


第60図　34号横穴石棺石材実測図２

せられていた。

小口１は、長辺が0.9m、短辺0.41m、厚さ0.12mを測るが、長辺は、上端がやや短く台形状を呈しており、右側辺側をわずかに欠損するが0.8mを測る。内側となる両短辺の端部を切り欠いており、断面形は「凸」状を呈する。切り欠きの幅は９cm前後を測る。外側となる面の上端と左右の角は面取りがなされ、底石と接する面は平滑に仕上げられている。内面下端付近と、底石と接していた部分には赤色顔料が残存している。

小口２は、長辺0.86m、短辺0.41m、厚さ0.12mを測る。これも小口１と同様に台形状を呈し、上端は0.78mを測る。内側となる両短辺の端部を切り欠いており、断面形は「凸」状を呈する。切り欠きの幅は９～11cmを測る。外側となる面の上端と左右の角は丁寧に面取りがなされており、下端面は内側になる部分を４cm程切り欠き、上述のように底石３の端部と組み合わせている。上端面と内外面に部分的に赤色顔料が残存している。



第61図　34号横穴石棺石材実測図３

側石１は、長辺0.95m、短辺0.4m、厚さ0.12mを測る。玄門側の小口部の内側となる部分を「Ｌ」字に切り欠き、小口１の刳り込みと組み合わせている。しかし、小口と接する切り欠きは幅が５cm程で、小口１の切り欠きの1/2程しかなく、小口切り欠きの中央付近で組み合わされているため整合しておらず、両者には隙間が生じている。また奥壁側の小口２と組み合う側は切り欠きを施さず、小口２の切り欠きと組み合わせている。こちらは、側石の厚みと小口の切り欠きが整合し、隙間は生じていない。上面及び奥壁側の小口には広く赤色顔料が残存している。

側石２は、長辺0.93m、短辺0.41m、厚さ0.1～0.13mを測る。側石１と同様に、玄門側の小口部の内側となる部分を「Ｌ」字に切り欠き、小口１の切り欠きと組み合わせている。こちら側は小口の切り欠きの最も内側に側石の切り欠き部分を寄せて組み合わせているが、やはり、切り欠

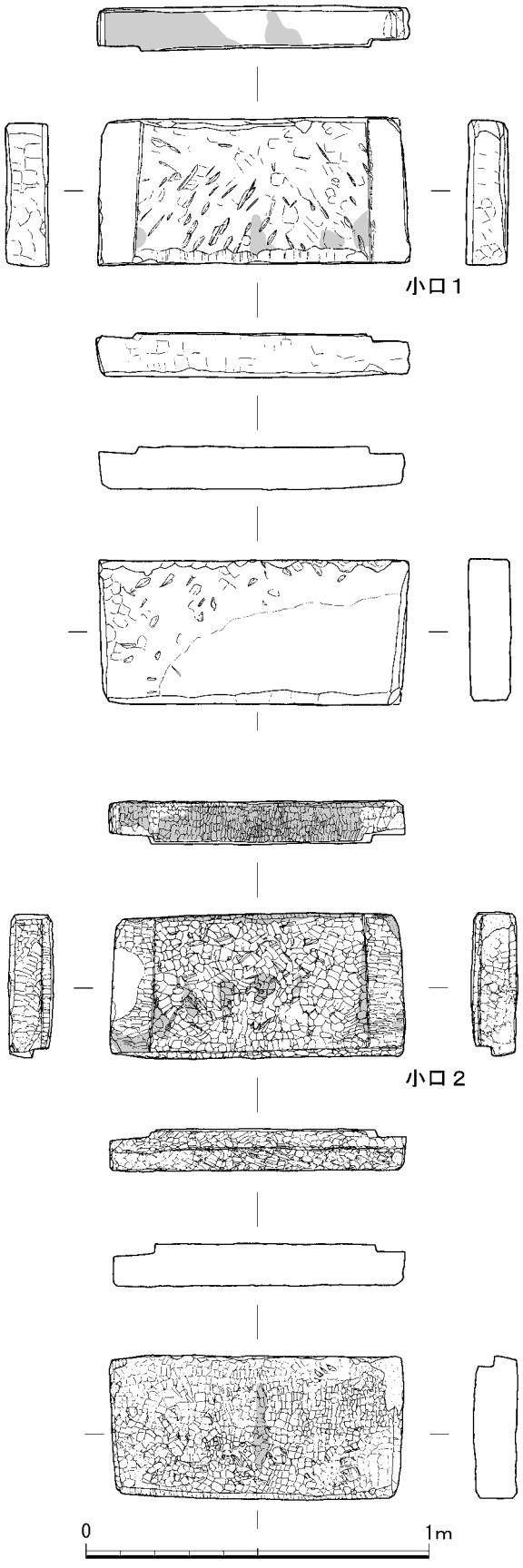
きの大きさが異なるため正確に組み合っていない。また、このことによりわずかながら内法が狭くなっている。上面には広く、奥壁側の小口及び内面には部分的に赤色顔料が残存している。

赤色顔料は、側石１、小口２の上面において最も顕著に認められ、側石２、小口１ではそれぞれ前者に近い部分に残存している傾向が見て取れる。また、蓋石についても、側石１、小口２に接していた部分の顔料が転写された様相を呈している。底石に残存する赤色顔料は、側石１、小口２が接していた部分に一部欠落が認められる。このことから、赤色顔料は底石に塗布されていたものではなく、小口、側石に塗布されていたものが後に移ったものと考えられ　　（奈良康正）

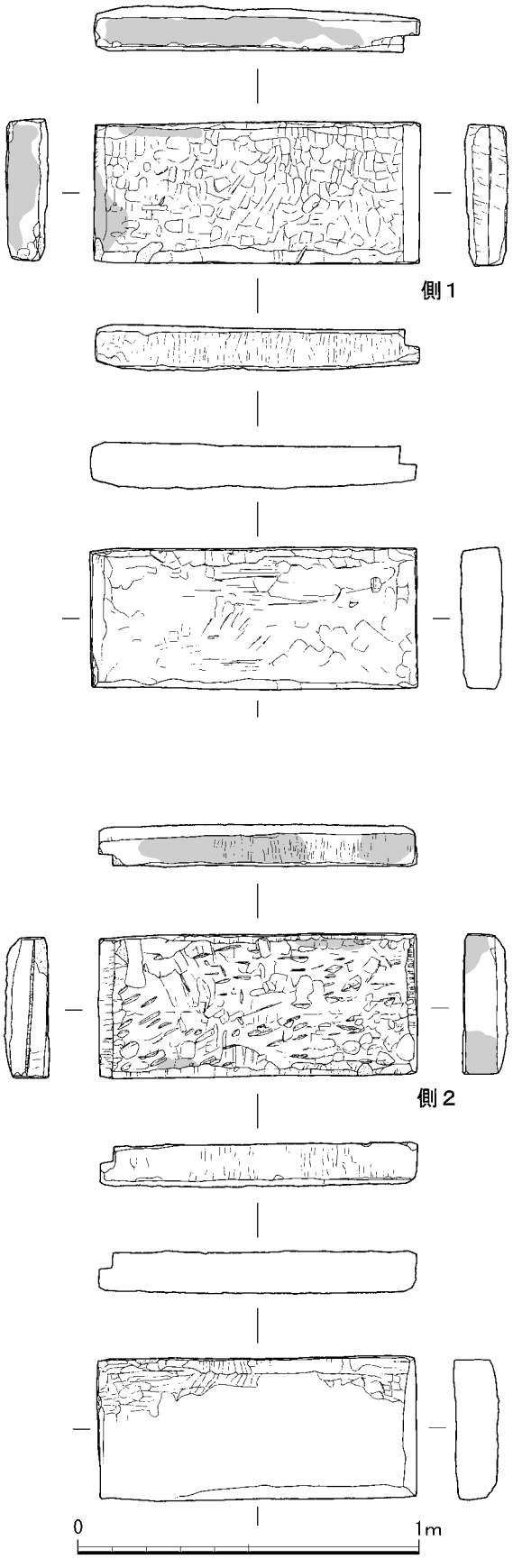
⑥出土遺物（第64図316～第66図354）

34号横穴から出土した遺物には土器のほか、耳環・鉄製品がある。土器の内訳は須恵器25点、土師器３点である。

須恵器は蓋Ａ８点（316～323）、杯Ａ６点（324～329）、高杯Ｄ６点（330～335）、高杯Ｂ（336）、瑞１点（337）、壺２点（338・339）、甕１点（340）、平瓶１点（341）がある。蓋Ａはいずれも口径12cm前後であるが、頂部に回転ヘラケズリを施すＡａ（317～323）と施さないＡｂ（316）とに分けられる。ただし、317・318・322は頭部の中央にケズリ残した部分が存在する。また、323は頂部のヘラケズリに回転台を使用せず、手持ちによるヘラケズリを施す。318は口縁端部に不自然な段が認められ、粘土紐による巻き上げ痕跡の終端を示すものである可能性がある。

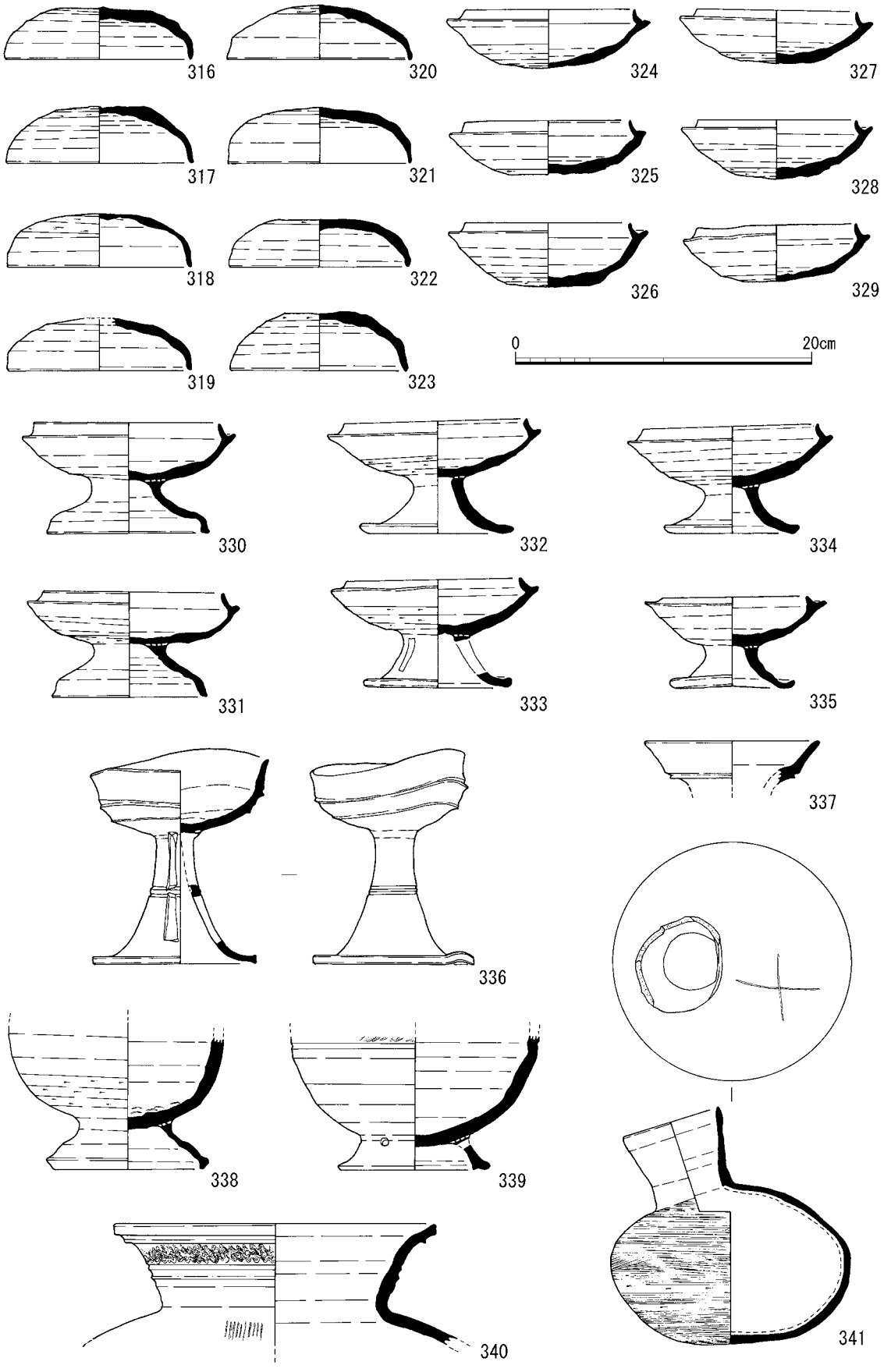


第62図　34号横穴石棺石材実測図４

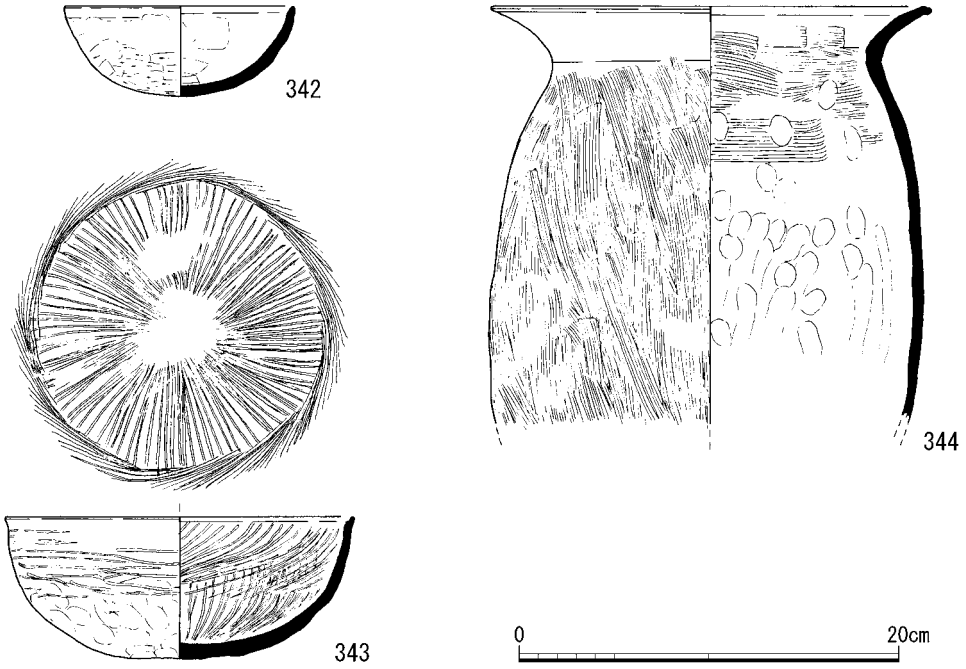


第63図　34号横穴石棺石材実測図５

316の１点のみであるが、同一法量で、頂部への調整に違いがみられることから、口径12cm前後を境に回転ヘラケズリの省略が行われるようになった可能性を考えたい(注14)。316・319・321のほか、杯Ａａの326・328の合計５点が胎土・色調・焼成が類似している。また、色調はやや赤っぽいという特徴がみられる。その他の個体では、317・320・322で胎土に黒色粒がやや目立つほか、323は胎土に砂粒をやや多く含む。杯Ａも口径はいずれも12cm前後で、底部に回転ヘラケズリを施すＡａ(324～328)とヘラキリ後不調整のＡｂ(329)とに分けられる。杯Ａａのうち、326～328の３点は回転ヘラケズリがやや粗めである。胎土は325・327・329のほか、蓋Ａａの320・322の５点が胎土・色調・焼成が類似し、色調は全体に灰色っぽいという特徴がみられる。なお、329は杯Ａ６点の中では最も法量が小さい。胎土はやや砂っぽい。高杯Ｄは本横穴のみで確認できた器形で、脚部の形状には２種類ある。１つは「ハ」字状に開いた脚部が端部を下方に強く屈曲しているものである(320・321)。もう１つは「ハ」字状に開くものである(332～335)。なお、333は長方形のスカシを２方向に穿孔するが、その位置は３等分したうちの２か所にあたり、偏りがみられる。６点のうち、330～334は口径が13～13.5cm程度であるが、335のみ10.8cmと一回り小さい。胎土に黒色粒を多く含むものもある。336は大きく焼け歪んでいる。脚部に長方形スカシを２段に施すが、杯部の外面は無文である。337は瑕の口



第64図　34号横穴出土土器実測図１



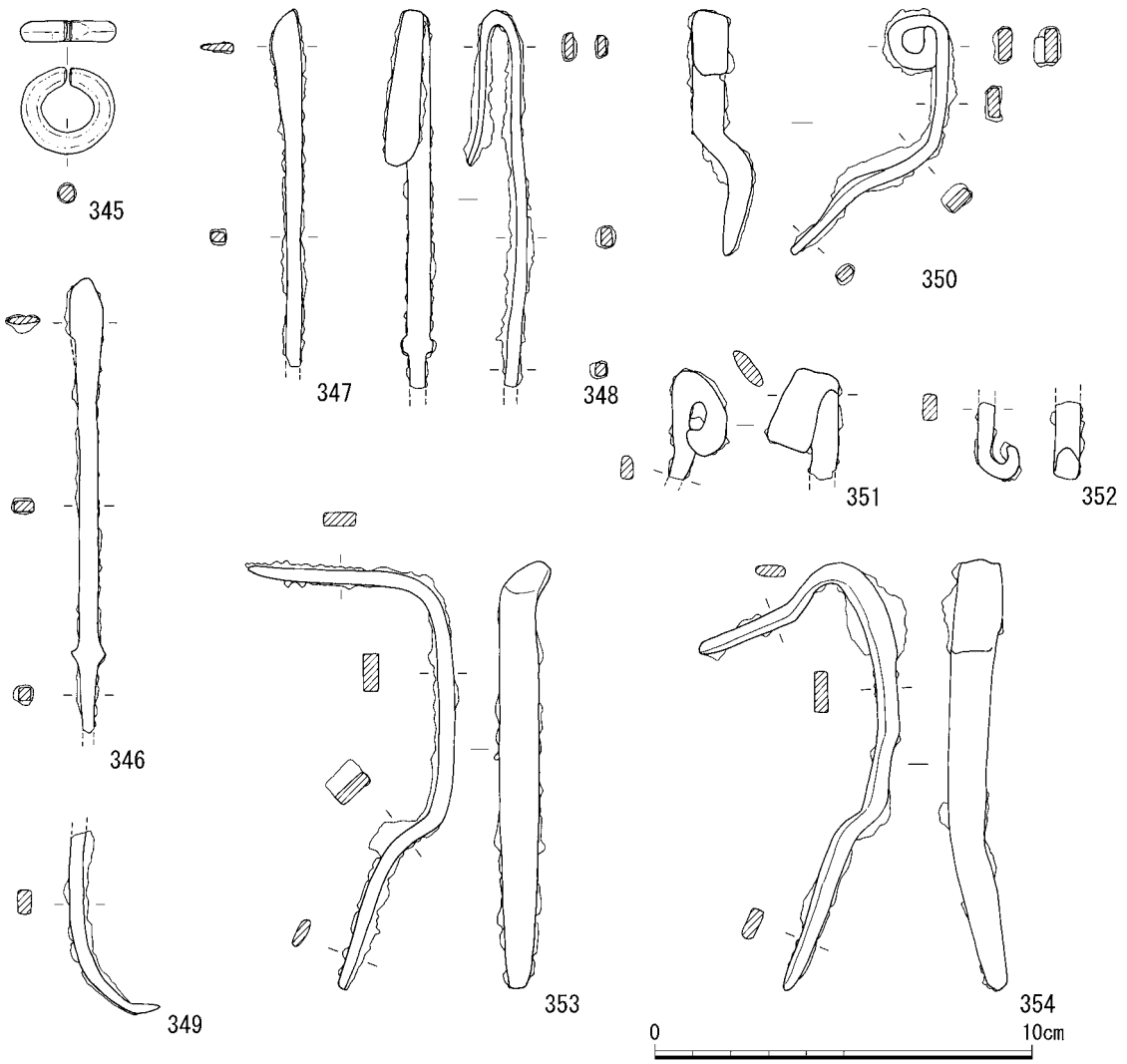
第65図　34号横穴出土土器実測図２

縁の破片と推定される。338・339は壺の底部である。どちらも上半部の破片がないため器形の特定にはいたらないが、脚台ないし高台の特徴からみると、338は長頸壺Ａの底部と考えられ、スカシを穿孔しない。339は長頸壺Ｂと考えられ、高台の上部に直径0.5cm程度の円形の孔が３方向に穿たれる。また、体部外面の一部に自然釉が付着する。340は甕の口縁部である。外面の上半部に波状文を施す。胎土には黒色粒を少し含む。341は平瓶である。体部外面は回転ヘラケズリ後にカキメを施す。体部の上面には「＋」のヘラ記号がある。胎土は黒色粒を含む。

土師器は杯Ｄ１点(342)、杯Ｃ１点(343)、甕Ｂ１点(344)がある。342は在地系の杯と考えられる。胎土は微細な砂粒をやや多く含み、雲母や赤色斑粒もわずかに認められる。成形時の粘土紐接合痕が認められる。343はいわゆる都城系土師器もしくはその模倣と考える。底部外面はユビオサエやナデを施し、口縁部外面にミガキを施す、いわゆるa1手法をである(注15)。内面に２段放射暗文を施す。形態や暗文の施文方法などから飛鳥Ⅳ以降と推定される。胎土は比較的精良である。344は甕Ｂであるが、体部下半以下を欠損する。胎土には微細な石英・長石・雲母を含む。

耳環は１点(345)出土した。銅芯に鍍金あるいは箔貼する耳環では、38号横穴出土の耳環に次いで軽いものである。断面形は円形である。部分的に錆が認められるものの、金色を呈することから金環と思われる。

鉄製品には鉄鏃４点(346～349)、不明鉄製品５点(350～354)がある。346～348は長頸鏃で、鏃身部は346・348が柳葉状を呈し、347は片刃式のものである。346・348は棘状関を確認できるが、347は不明である。また、348は頸部の上部付近で大きく折り曲げられている。屈曲度が大きいため、意図的に曲げられたものかもしれない。349は鉄鏃の茎の破片と思われる。350・351は幅１cmほどの細長い鉄板の先端を環状に折り曲げたものである。紐を通すためのものと思われるが、



第66図　34号横穴出土耳環・鉄器実測図

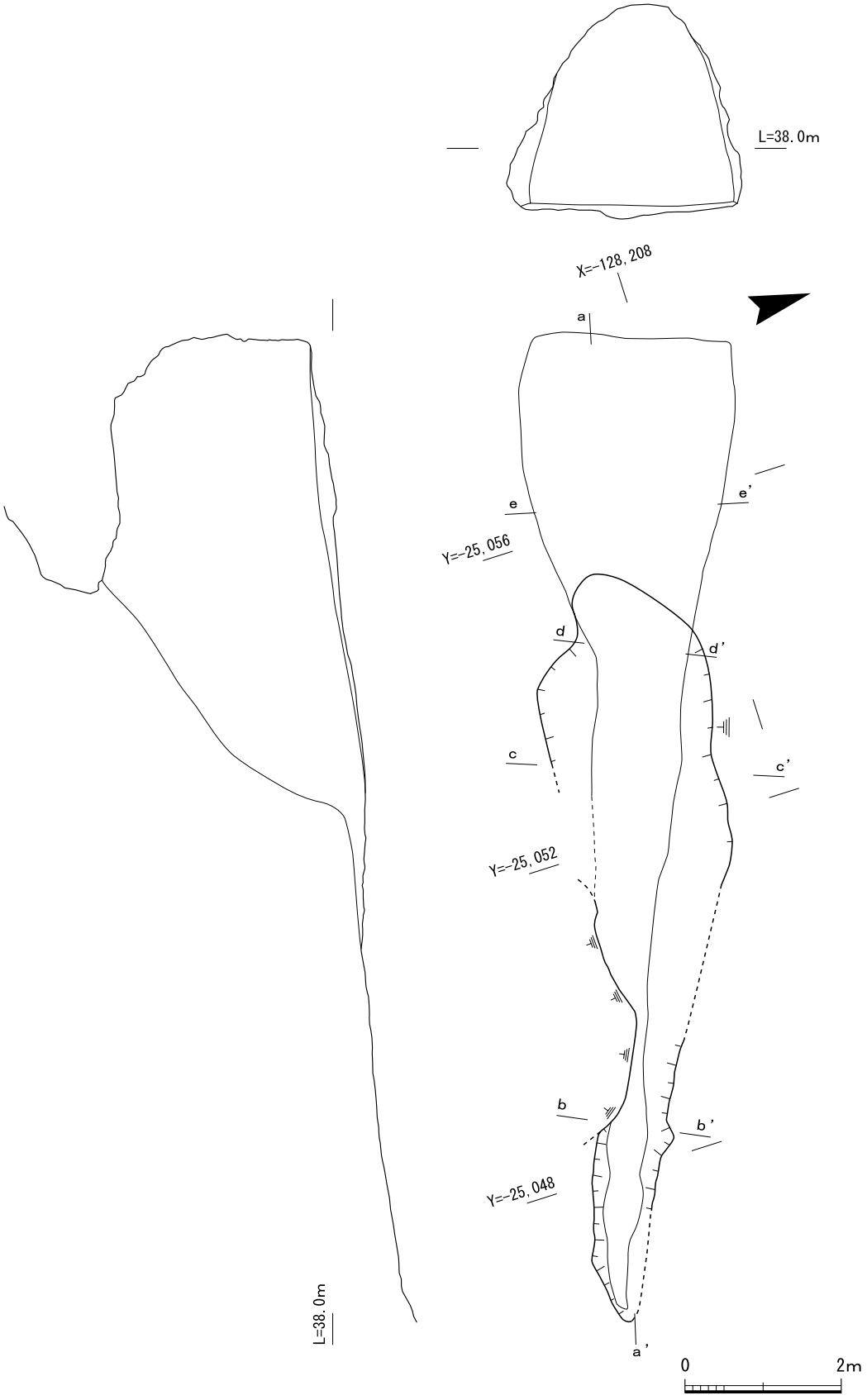
どのような用途に使用したものか不明である。350はほぼ完存するが、351は環状の部分のみが残存する。352も同様のものではないかと考える。353・354は、353が本来の形状をとどめており、354が一部変形しているものの、折損箇所が認められないことから、２点とも完存しているものと考える。また、鉄板に鋲等の痕跡を確認することはできない。353の上半部の「コ」字状の部分で何かを受けたり、装着したりするのではないかと考えるが、用途については明らかでない。

（筒井崇史）

(12)35号横穴（ＳＸ08）

①立地・調査時の状況

35号横穴は調査地の中央付近、34号横穴に隣接して検出した。35号横穴は調査着手前に玄室部分が開口しているのを確認した。調査は、墓道・羨道部分の掘削及び埋土堆積状況の確認、土層断面図の作成を順次行い、その調査が完了した後に重機で天井を除去し、玄室内の調査を行った。35号横穴は玄室奥壁から墓道先端まで完存しており、全長12.4mを測る。玄室内では埋葬面を２



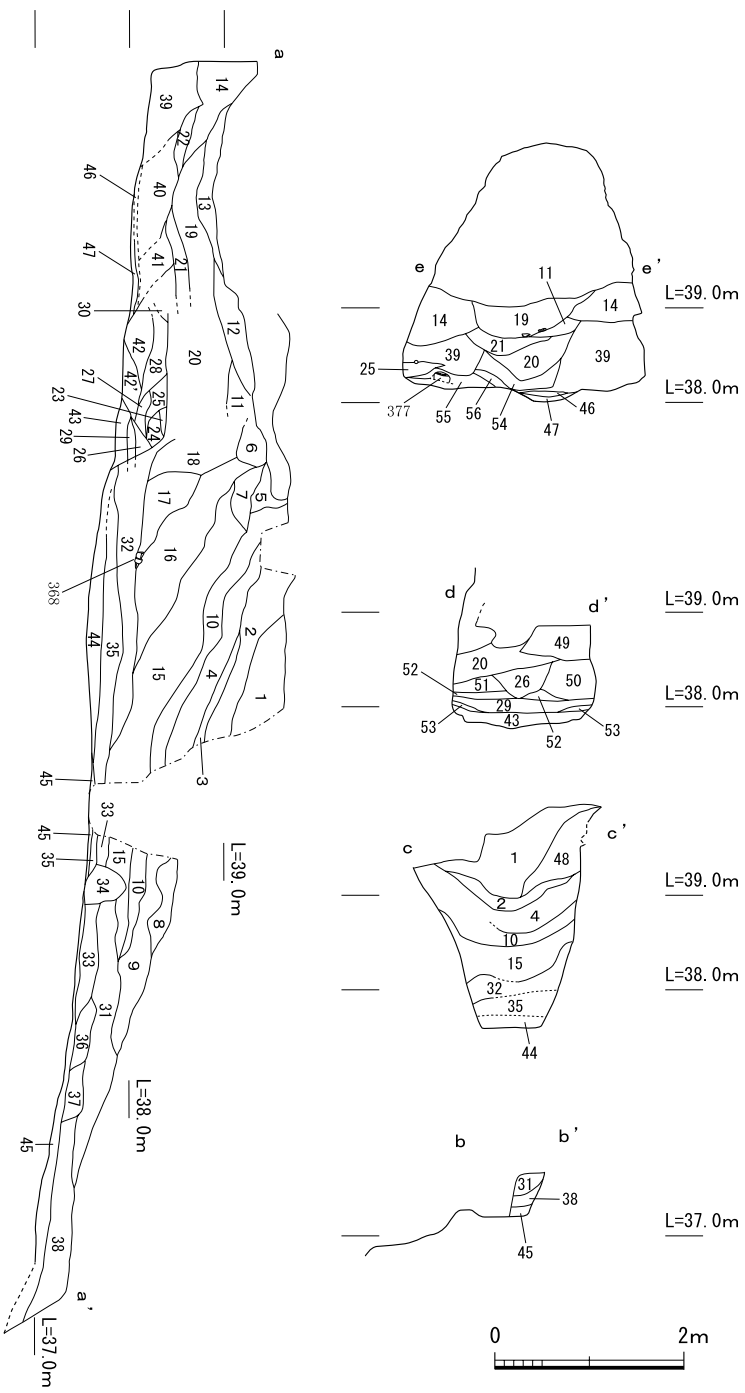
第67図　35号横穴平面・立面図

面確認した。第１面は46層上面、第２面は43層上面である。なお、この横穴は撹乱により墓道の右側壁が大きく削平されている。35号横穴の主軸はＮ－77°－Ｗにとる。

②規模・構造（第67図）

ａ）墓道

墓道は全長8.4m、幅0.6～1.0m、墓道床面の標高37.1～37.7mを測る。墓道端から約６ｍの付近までは横断面の形状が上方がやや開く逆台形を呈している。墓道の上部幅は最大で1.3m、墓道底の幅は最大１ｍである。墓道先端から8.4mの地点で床面にわずかな段差がある。遺物の副葬もこの段差より奥であったことから、この地点を玄門と判断した。玄室手前にはマウンド状の高まりがあり、これを閉塞土とすると、玄門位置とも一致する。35号横穴には羨道が敷設されていなかった可能性がある。



第68図　35号横穴土層断面図

ｂ）玄室

玄室と墓道の間に設けられた段差によって、床面が一段高くなる地点から奥壁までを玄室と捉えた。玄室は、平面形は撥形を呈しており、玄室長4.0m、奥壁幅2.6m、玄門幅2.1mを測る。床面は、固く締まった46・47層で整地されており、標高は38.1～38.3mである。奥壁は床面から垂直に立ち上がる。奥壁の形状から天井の断面形はアーチ形と推測される。

③土層堆積状況（第68図）

墓道の縦断面図は、断ち割り作業を先行したことにより、欠落している箇所がある。墓道内の

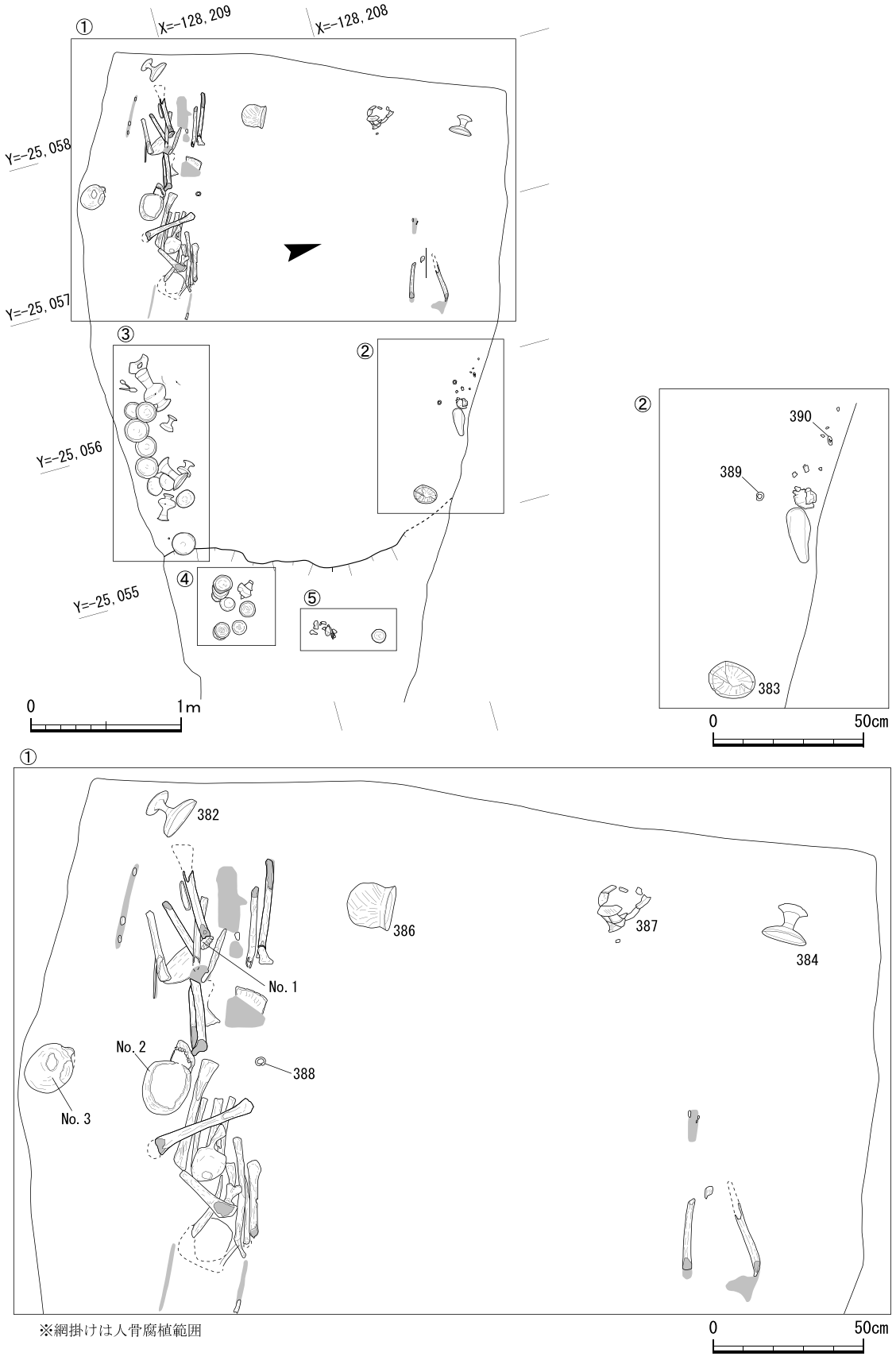
35号横穴土層断面図土色

1. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂、径１cm程の小礫を含む)
2. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細砂～粗砂、径１～５cm程の礫を含む)
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細砂～粗砂、径５cm程の礫をわずかに含む)
4. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(粗砂～極粗砂、径５cm程の礫をかなり多く含む)
5. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細砂～粗砂)
6. 褐色(10YR4/4)砂質土(細砂～極粗砂、径３～５cm程の礫を含む)
7. にぶい黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２cmの礫を含む)
8. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中砂～極粗砂)
9. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(中砂～粗砂)
10. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(中砂～極粗砂、径２～５程の礫を多く含む)
11. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細砂～粗砂、径２～５cm程の礫を多く含み、こぶし大の礫も混じる)
12. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(中砂～シルト)
13. 暗褐色(10YR3/3)土(腐植土、礫、枯葉が混じる)
14. 明赤褐色(5YR5/6)土
15. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中砂～極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
16. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径２cm程の礫をわずかに含む)
17. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径２～５cm程の礫を多く含む)
18. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫を含む)
19. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(粗砂～極粗砂、径５cm程の礫を含む)
20. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～７cm程の礫を多く含む)
21. 明褐色(7.5YR5/6)土(径３～７cm程の大きな礫をわずかに含む)
22. 明赤褐色(5YR5/6)土(細砂～シルト)
23. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫を含む)
24. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径１～２cm程の小礫を多く含む)
25. 褐色(10YR4/6)砂質土(シルト(粗粒砂を含む)径３cm程の礫をやや多く含む)
26. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～極粗砂、径２cm程の礫をやや多く含む)
27. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(極粗砂、径２～５cm程の礫を多く含む)
28. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～６cm程の礫をやや多く含む)
29. 褐色(10YR4/6)砂質土(中砂～極粗砂、径２～５cm程の礫をわずかに含む)
30. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(粗砂～シルト)
31. にぶい黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～５cm程の礫をわずかに含む)
32. 明黄褐色(10YR6/8)～黄橙色(10YR7/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径５cm程の礫をわずかに含む)
33. 赤褐色(5YR5/6)砂質土(細砂～粗砂、径２cm程の礫をわずかに含む)
34. 褐色(7.5YR4/4)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～８cm程の礫をかなり多く含む)
35. 褐色(10YR4/6)砂質土(中砂～極粗砂、径２～５cm程の礫をわずかに含む)
36. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂～極粗砂、径３～５cm程の礫を含む)
37. にぶい黄褐色(10YR4/7)砂質土(細砂～粗砂)
38. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～極粗砂、径２cm程の礫をごくわずかに含む)
39. 明黄褐色(10YR7/6)砂礫土(径0.1～２cm大の礫を多く含む)
40. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(細砂)
41. 淡黄色(2.5Y8/4)+黒褐色(2.5Y3/1)砂礫
42. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～中砂)　42'(27と同じ)
43. 褐色(10YR4/4)砂質土(細砂～極粗砂、径３～５cm程の礫を含む)
44. にぶい黄褐色(10YR5/2)砂質土(粗砂、径１～５cm程の礫を多く含む)
45. 黒褐色(10YR3/1)砂質土(粗砂)
46. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～シルト)
47. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～粗砂)
48. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂)
49. 褐色(10YR4/6)砂質土(中砂～極粗砂)
50. 明黄褐色(10YR6/8)+黄褐色(10YR7/8)砂礫(径３～10cm程の大きな礫をかなり多く含む)
51. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(中砂～シルト)
52. 黄橙色(10YR7/8)砂質土(極粗砂、径２cm程の小礫を多く含む)
53. 黒褐色(10YR5/6)砂質土(極粗砂-明黄褐色(10YR7/6)の小礫含む)
54. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂、径２～５cm程の礫を含む)
55. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(細砂、径２～３cm程の礫を少し含む)
56. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫を含む)

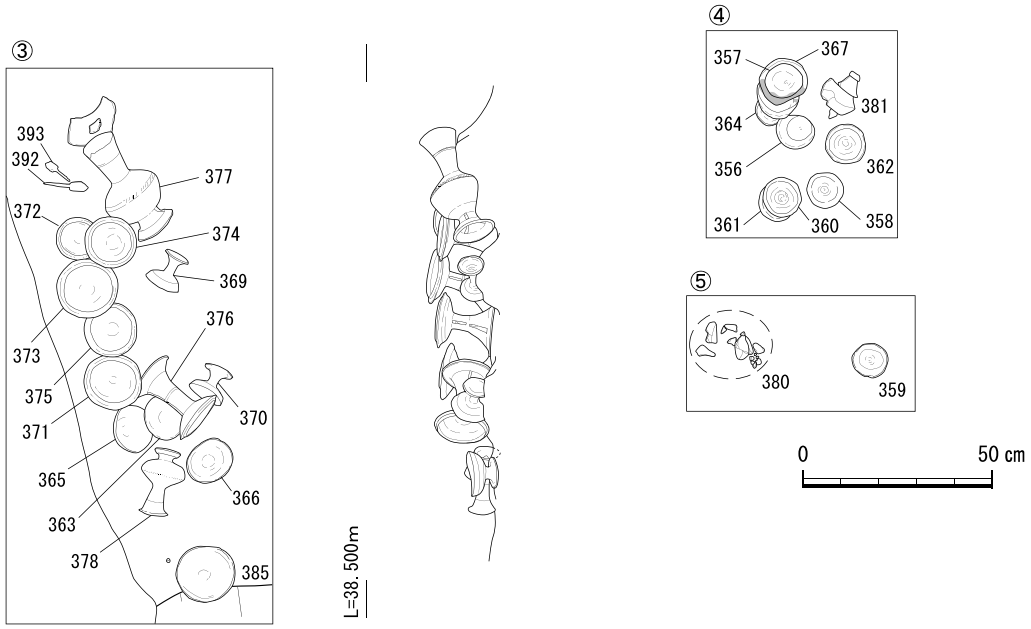
１～12・15～31層、玄室内の13・14・19～22層は横穴使用停止後に堆積したものである。１～11・19・20・39・40層は締りのない砂礫層である。26・29・43層はわずかにマウンド状に盛り上がっており、閉塞土の可能性がある。ただし、玄室内から近世遺物が出土しており、新しい時期に撹乱を受けた可能性もある。玄室内には、46層の直上まで粘質の強い13・14・21・22層の流入土や天井崩落土である39～41層が厚く堆積していた。固く締まった黒褐色砂質土(45層)は墓道の整地層の可能性がある。また、固く締まった黄褐色砂質土(46・47層)は、玄室内に薄く均等に堆積しており玄室内の整地層と判断した。横断面d－d´では20層の上に天井崩落土の塊が落ちている。

④遺物出土状況(第69・70図)

遺物は玄室内の46層上面(第１面)と43層上面(第２面)で出土した。第２面においては玄門付近の右側壁付近で須恵器がまとまって出土した(第69図④)。須恵器高杯Ｃ(367)には同蓋Ａ(357)が蓋をするように重なり、中には赤色顔料が入っていた。須恵器高杯Ｃ(364)に367が横転して入り込んでいる。この北東側に土師器杯ＢないしＤ(381)、須恵器杯Ａ(362)、同蓋Ａ(358)、同杯Ａ(360・361)が重なって出土した。左側壁付近では、須恵器杯蓋(359)、土師器杯身片(380)が出土した。



第69図　35号横穴遺物出土状況図１



第70図　35号横穴遺物出土状況図２

第１面では前述の土器群のすぐ西に接して須恵器がまとまって出土した（第69図③）。墓道側から、須恵器長頸壺Ａ（378）が横転、同高杯Ｃ（366）が正位で出土し、さらに約20cm奥壁側で、同高杯Ｂ（370）と同高杯Ａ（376）が横転、さらに同高杯（363・365）が正位で出土した。さらに奥壁に向かって須恵器高杯Ａ５点（371・375・373・374・372）が正位で、同長頸壺Ａ（377）、同高杯Ｂ（369）が横転して出土した。377のすぐ南からは鉄鏃２点（392・393）が出土した。側壁に沿って出土した高杯５点は直立した状態であったことから、副葬された当時のままか、もしくは追葬の際に右側壁に寄せて片付けられたものと推測できる。玄室奥壁では、左右の隅に土師器高杯Ｂ２点（382・384）、その高杯の間に同甕２点（386・387）が出土した。さらに玄門付近では土師器高杯Ｂ２点（383・385）が出土しており、それぞれの位置関係に規則性があると考えられる。また、堆積状況から第２面の新しい遺物は、墓道側に転落してしまい、第１面の古い遺物よりも低い標高で出土したと推測できる。

また、第１面で４体分の人骨を玄室の左右の側壁に沿って検出した。左側壁側では頭蓋骨の一部と、歯が数点出土しており、その左右で耳環が１点ずつ出土した。耳環の間は30cm離れており、その間に頭蓋骨が遺存していることから、耳環を装着した状態で骨化した可能性が指摘できる。さらに頭蓋骨に沿うように、長辺20cm、短辺３～10cmの石も出土しており、枕として利用されたものと想定できる。これらの骨から奥壁側に50cmほどの位置に大腿骨とみられる長管骨２本と骨片が出土した。右側壁側では、多くの人骨が出土したが、解剖学的位置を留めているものはなかった。頭蓋骨が３点ある他は長管骨、下顎骨、肋骨、腰骨の一部が見られ、その他骨種不明の骨片もある。遺存していた歯がすべて永久歯であることから、この横穴から出土した人骨はすべて成人である。また、側壁側の頭蓋骨は、骨の特徴から成人男性と思われる。出土した骨の種

類や数から、少なくとも４人の遺体が35号横穴に葬られていたと考えられる。

このように、出土した須恵器には時期差があり、右側壁から出土した一群は初葬に伴うもので、玄門付近で出土した一群は追葬に伴うものと考えられる。土師器については、出土状況から原位置を保っていると考えられ、追葬に伴うものと考えられる。人骨については、右側壁に沿って出土したものは解剖学的位置を留めておらず、改葬されていると判断した。左側壁に沿って出土したものは出土状況から解剖学的位置を留めていると判断でき、追葬に伴うものと考えられる。

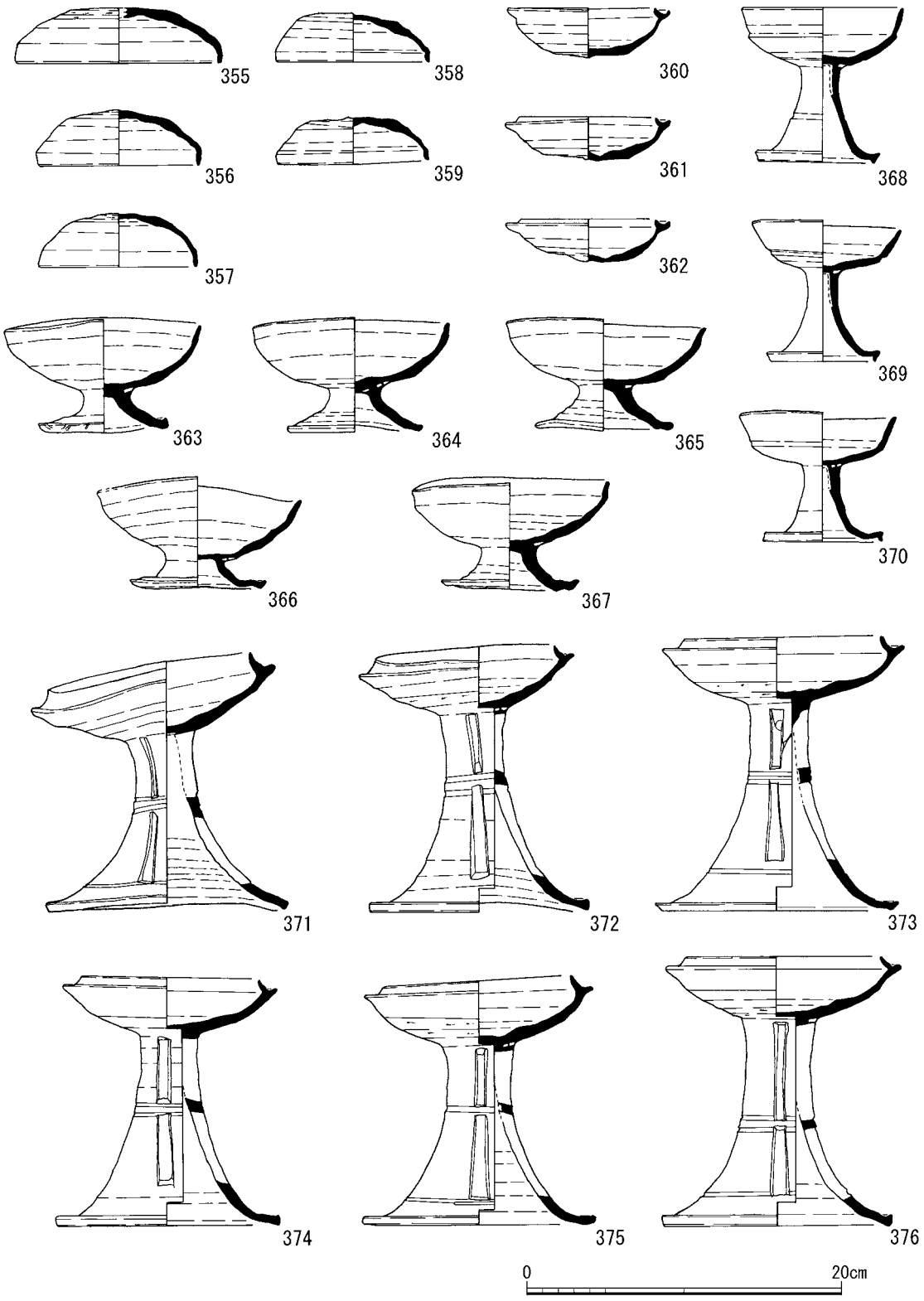
（山﨑美輪）

⑤出土遺物（第71図355～第73図394）

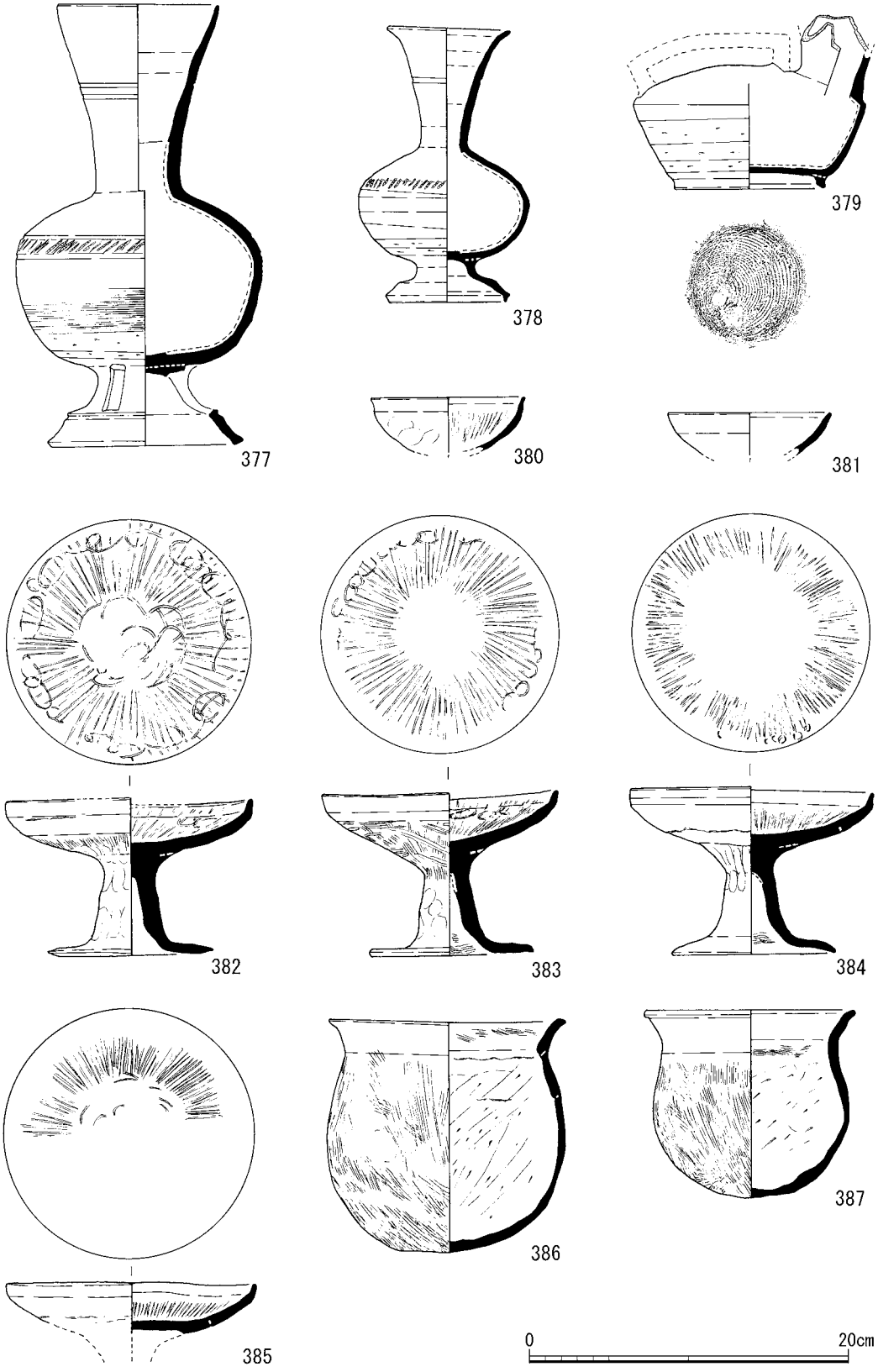
35号横穴から出土した遺物には土器・耳環のほか、鉄製品がある。土器の内訳は須恵器24点、土師器８点である。なお、土器には横穴に伴うもののほか、奈良時代末ないし平安時代ごろの須恵器１点がある。

須恵器には、蓋Ａ５点(355～359)、杯Ａ３点(360～362)、高杯Ｃ(363～367)、高杯Ｂ３点(368～370)、高杯Ａ６点(371～376)、長頸壺Ａ２点(377・378)がある。蓋Ａは破片資料で口径が13.0cmに復元でき頂部に回転ヘラケズリを施すＡａ(355)と、口径10cm前後で頂部がヘラキリ後ナデもしくは不調整のＡｂ(356～359)に分けられる。胎土は類似したものがなく、356や358では黒色粒を少し含み、357は微細に砂粒をごくわずかに含む。杯Ａは、いずれも底部がヘラキリ後不調整もしくはナデのＡｂで、口縁部は短く、口縁端部は受け部の端部よりもわずかに突出する程度である。胎土はいずれも黒色粒を含む。高杯Ｃは、口径12～13cmで、焼け歪んでいるものが多い。脚部は「ハ」字状に開くが、若干の屈曲がみられ、脚端部は上方につまみ上げ気味におさめるものが多い。胎土は363・364・367が微細な砂粒等を含み、365・366は黒色粒を含む。高杯Ｂは、いずれも脚部にスカシを持たないＢｂである。杯部外面の稜線も１条のみで、369・370は沈線状の表現ともいえる。368は胎土が異なるためか、杯部と脚部で色調が微妙に異なる。胎土はそれぞれ異なり、369では微細な砂粒をごくわずかに含み、370では粒径の大きな砂粒を含む。高杯Ａは、いずれも長方形のスカシを有するＡａである。ほぼ同じ特徴を有するが、371のみ３方向にスカシを穿つ。376は杯部外面と脚柱部内面に灰が付着することから焼成時には倒立した状態で焼成した可能性がある。焼け歪むものが多く、特に371は焼け歪みが著しい。372と374は胎土・色調・焼成が非常に類似しているが、その他の個体では胎土は個体ごとに異なる。373は微細な砂粒を含むものの比較的精良である。375は粒径の大きな砂粒が多く、376はやや砂粒を多く含む。長頸壺Ａは大小２点あり、377は脚台に長方形のスカシを３方に穿孔する。胎土には黒色粒を含む。378は小型品で、脚台にスカシは穿孔しない。胎土は砂粒をほとんど含まないが全体に砂っぽい。どちらも口頸部外面に沈線と体部最大径付近に刺突文を施す。なお、377の口縁部はわずかに内湾するが、378のそれは大きく外反する。

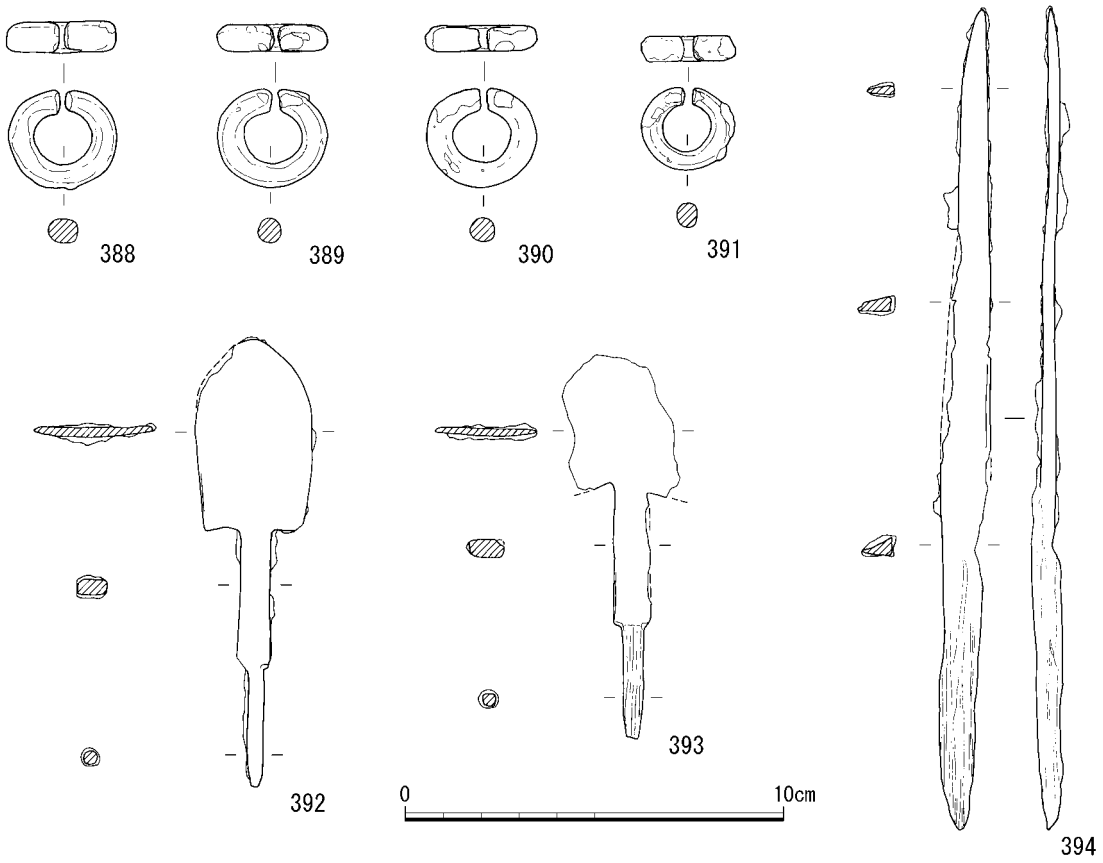
土師器には、杯Ａ１点(380)、杯ＢないしＤ１点(381)、高杯Ｂ４点(382～385)、甕Ａ２点(386・387)がある。380は小破片であるが、都城系土師器ないしその模倣品である。内面に１段放射暗文を施すＡｂである。381も小破片であるが、暗文が認められず、在地産の杯と推定される。口



第71図　35号横穴出土土器実測図1



第72図　35号横穴出土土器実測図２



第73図　35号横穴出土耳環・鉄器実測図

縁端部が内傾する面を持つ。高杯Ｂ４点はほぼ同形同大のものであるが、385のみ脚部を欠損する。接合する破片を確認することができなかったため、もともと脚部を欠損していた可能性もある。いずれも杯口縁部をヨコナデによって上方へ屈曲させ、杯部外面にはハケもしくはナデを施す。内面には放射暗文のほか、螺旋暗文を施す。脚部は下端からほぼ水平に開く形状を呈する。甕Ａは中型品と小型品が１点ずつある。

奈良時代ないし平安時代の須恵器として平瓶１点（379）がある。口縁端部と提梁を欠損するものの、体部は完存する。底部外面に糸切り痕を残す。胎土には黒色粒を含む。

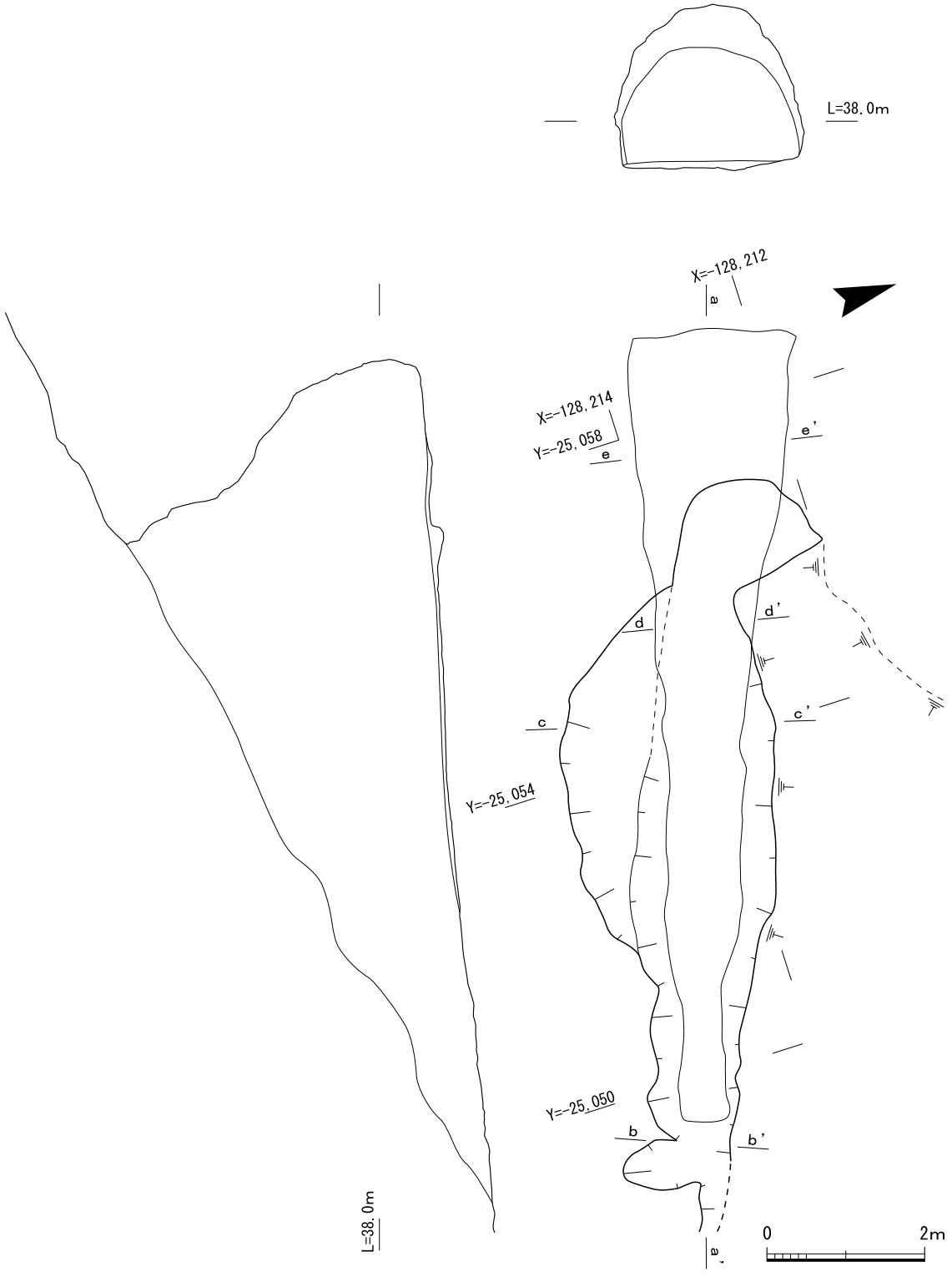
耳環４点（388～391）のうち391は35号横穴と36号横穴の間の撹乱土から出土したもので、本来、いずれの横穴に伴っていたものなのかは不明である。残る３点は35号横穴から出土したもので、幅2.8cm前後、天地2.5cm前後、重量18～19gとほぼ同じ大きさである。耳環の断面はいずれも円形である。388は錆が著しく種類の判別ができないが、389・390は部分的に錆が認められるものの金環である。これらも銅芯に鍍金あるいは箔貼するものである。

鉄製品には鉄鏃２点（392・393）、小型の鉄刀１点（394）がある。鉄鏃はどちらも角関を有する三角形鏃と考えられる。392は鏃身の刃部の一部が欠損するものの、ほぼ完存している。393は鏃身の刃部がすべて欠損するが、茎には木質が遺存する。394は刀身の刃部が大きく欠損するほか、錆や欠損によって関周辺の状況は不明である。茎には木質が遺存する。　（筒井崇史）

(13)36号横穴(ＳＸ09)

①立地・調査時の状況

36号横穴は、35号横穴の南東側に近接している。35号横穴と同様に調査着手前に玄室部分が開口していることを確認した。天井が残存していたため、墓道・羨道の調査後に重機で天井を除去



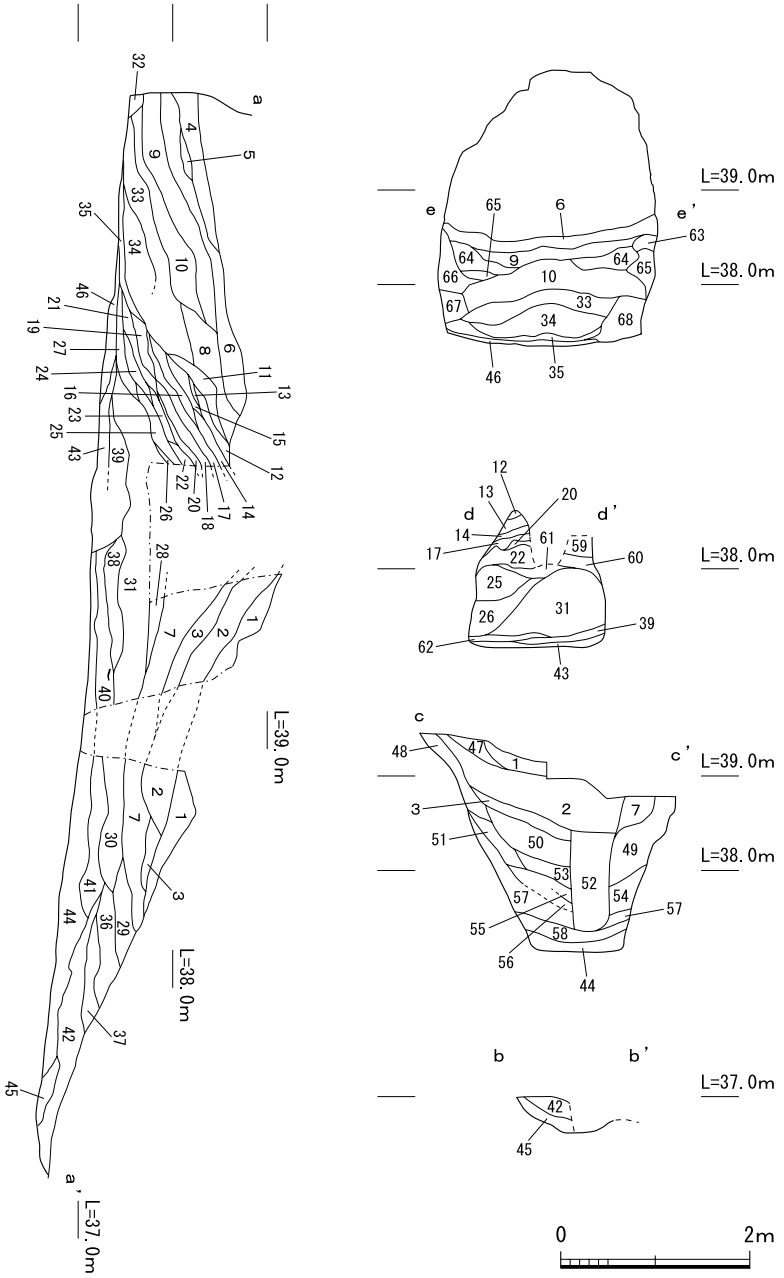
第74図　36号横穴平面・立面図

し、玄室内の調査を行った。玄室奥壁から墓道先端までの全長は10.9mを測る。なお、36号横穴も墓道の一部を断ち割って調査を行ったため、土層断面図に欠落している部分がある。隣接する35号横穴とは、墓道底部で1.4～1.7m、玄室埋葬面で1.6mの高低差があり、36号横穴のほうが低い位置に造営されている。36号横穴の主軸は、N－70°－Wをとる。35号横穴とは主軸は異なる。

②**規模・構造**（第74図）

ａ）**墓道・羨道**

墓道・羨道は全長7.9m、幅0.5～1.0m、墓道床面の標高36.6～37.1mを測る。墓道の横断面の形状は、墓道端から6.0mの地点までは上方が大きく広がる逆台形を呈している。墓道上方の最大



第75図　36号横穴土層断面図

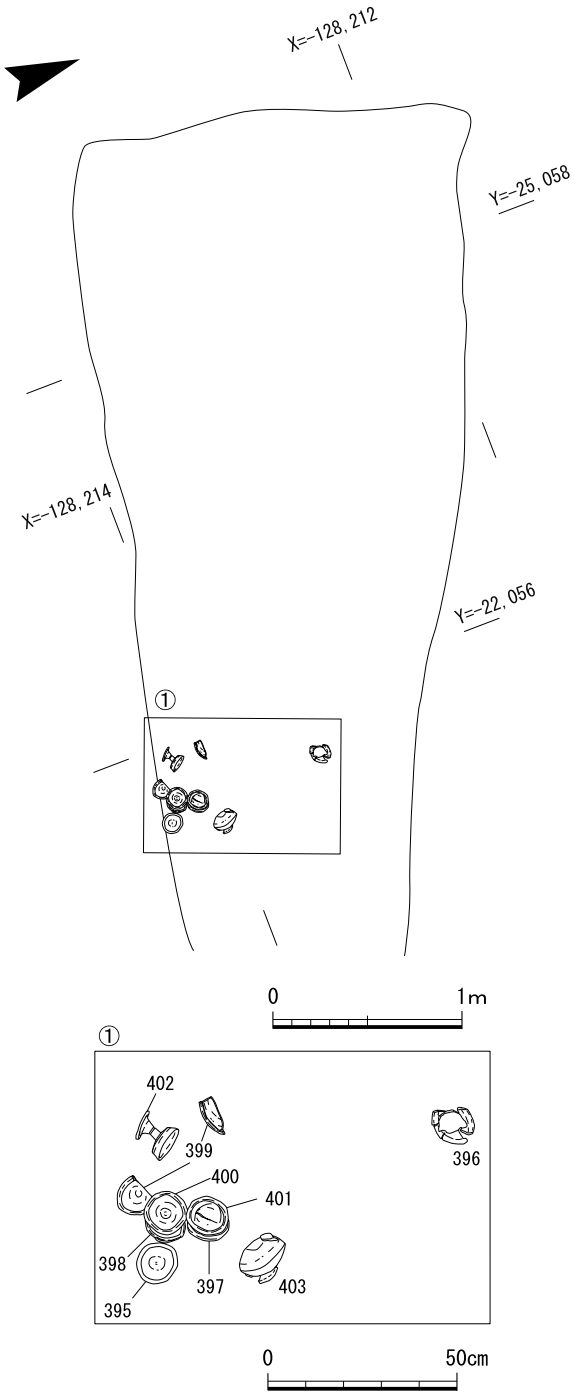
36 号横穴土層断面図土色

1．褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～中砂、径１～４cm程の礫を含む)
2．暗褐色(10YR3/4)砂質土(細砂～粗砂、径２cm程の礫をわずかに含む)
3．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(中砂～極粗砂、径３cm程の礫を含む)
4．褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂～シルト、径１cm程の小礫を含む)
5．黄褐色(2.5YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径１～２cm程の小礫を多く含む)
6．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂～シルト、径３cm程の礫をやや多く含む)
7．にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(細砂～極粗砂、径２～７cm程の礫を多く含む)
8．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(細砂～粗砂、径１～２cm程の小礫をわずかに含む)
9．黒褐色(10YR2/3)砂質土(粗砂～極粗砂、径１～２cmの小礫、径３～５cm程の礫を含む)
10. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～２cm程の小礫を多く含む)
11. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(極粗砂)にオリーブ黒(5Y2/2)(極粗砂)
12. 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(極粗砂、径１～３cm程の礫を含む)
13. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂)
14. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫をごくわずかに含む)
15. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、締りなし)
16. オリーブ黒色(5Y2/2)(極粗砂、締り有)
17. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂)
18. 褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～粗砂、締りなし)
19. 明褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径３cm程の礫を少し含む)
20. 褐色(10YR4/4)砂質土(細砂～粗砂、径２～５cm程の礫をごくわずかに含む)
21. 橙色(7.5YR6/8)砂質土(細砂～粗砂、径２～５cm程の礫を少し含む)
22. 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径１cm程の小礫を含む)
23. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂)
24. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂、径３cm程の礫をやや多く含む)
25. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径１cm程の小礫を含む)
26. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～２cm程の小礫を含む)
27. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径３cm程の礫を多く含む)
28. 褐色(10YR4/4)砂質土(中砂～極粗砂、径２cm程の礫をわずかに含む)
29. 褐色(10YR4/6)砂質土(中砂～極粗砂、径３～５cm程の礫をわずかに含む)
30. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(中砂～粗砂、径２cm程の礫を多く含む)
31. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(極粗砂、径２～４cm程の礫を多く含む) ６層と同じ
32. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫を多く含む)
33. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、径２～５cm程の礫を少し含む)
34. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫をわずかに含む)
35. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂～極粗砂、径１～２cm程の小礫をやや多く含む)
36. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～４cm程の礫を含む)
37. 暗褐色(10YR3/4)砂質土(細砂、径２～５cm程の礫をやや多く含む)
38. 明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２cm程の礫を含む)
39. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(細砂～中砂)
40. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(細砂～粗砂、締りなし、径２cm程の小礫を多く含む)
41. 黄色(2.5Y7/8)～明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土(中砂～極粗砂、径２cm程の礫を含む)
42. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫をわずかに含む)
43. 黄橙色(10YR7/8)砂質土(粗砂～シルト、径３～５cm程の礫を少し含む)
44. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細砂～極粗砂、径２cm程の礫をわずかに含む)
45. 褐色(10YR4/6)～黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～中砂、締りなし)
46. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(細砂～粗砂)
47. 褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～中砂、径２cm程の礫をわずかに含む)
48. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、下に径１cm小礫を含む)
49. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中砂～極粗砂)
50. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２cm程の礫を含む)
51. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(中砂～極粗砂)
52. 明黄褐色(10YR6/8)砂礫層(中砂～極粗砂、径２～10cm程の礫をかなり多く含む)
53. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～３cm程の礫を含む)
54. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂)
55. 黄褐色(10YR5/6)～褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径２～５cm程の礫を含む)
56. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(中砂～極粗砂、径２～５cm程の礫を含む)
57. にぶい黄褐色(10YR5/4)～黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂～極粗砂)
58. 褐色(7.5YR4/6)砂質土(細砂～中砂、径２cm程の礫を多く含む)
59. にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土(細砂～粗砂、締りなし、径２cmの小礫少し含む)
60. 橙色(7.5YR6/8)砂質土(細砂～中砂、締りなし、径２～３cm程の礫を少し含む)
61. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(極粗砂、径３～５cm程の礫を含む)
62. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(極粗砂、径２～５cm程の礫をやや多く含む)
63. 橙色(7.5YR7/6)砂質土(細砂～粗砂)
64. 明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土(粗砂)にオリーブ黒(2.5Y2/2)(粗砂～極粗砂をしま状に含む)
65. 橙色(5YR6/8)砂質土(粗砂)
66. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細砂～中砂)
67. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径５cm程の礫をわずかに含む)
68. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径５cm程の礫をわずかに含む)

幅2.3m、墓道底の幅0.5mを測る。墓道床面では先端から8.7mの付近でわずかであるが段差が設けられていた。遺物の副葬も、この段差より奥側に限定されていることから、この地点を玄門と判断した。天井は残存しておらず、羨道の全長や羨門の位置などは特定できなかった。

ｂ）玄室

先述したように、玄室と羨道の境にはわずかな段差が設けられており、床面が一段高くなる地点から奥壁までを玄室と捉えた。玄室の平面形は撥形を呈し、玄室長2.2m、奥壁幅2.1m、玄門幅1.8mを測る。玄室床面の標高は37.4～37.6mを測る。天井は大部分が崩落し、玄室内に厚く堆積していた。奥壁は床面から垂直に立ち上がる。奥壁上部の形状から天井の断面形はアーチ形を



第76図　36号横穴遺物出土状況図

指向していたと推測される。奥壁での天井高は1.5mを測る。埋葬面は１面確認した(46層上面)。

③土層堆積状況(第75図)

墓道内の１～３・７層、玄室内の４～６・８～10・33・34層は横穴使用停止後に堆積した土である。４～６・８～10・33・34層は締りのない砂礫層で、天井崩落土である。33・34層は流入土である。玄室内には、４～６・８～10・33・34層が埋葬面の直上まで厚く堆積していた。玄門付近から玄室内にかけて細かく堆積している11～27・35層は小礫や直径３cm程の礫を含んでおり、天井の崩落に伴う堆積である。このことから天井の崩落が断続的に起っていたと考えられる。31層はマウンド状に盛り上がっており、閉塞土の可能性が高い。

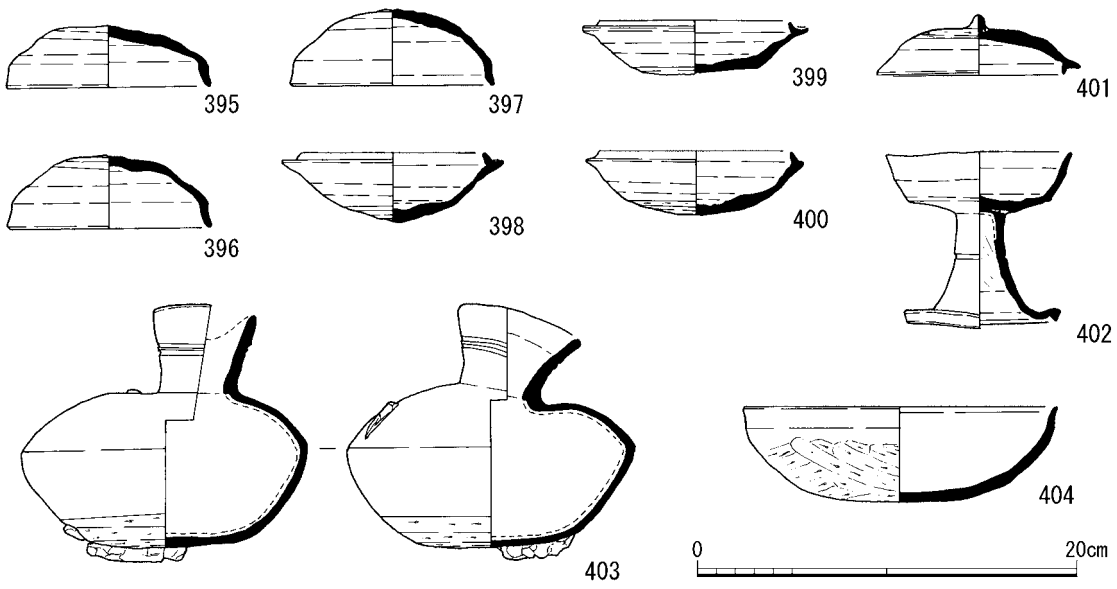
④遺物出土状況(第76図)

遺物は玄門付近に集中して出土した(43層上面)。奥壁側から須恵器杯Ａの破片(399)、同高杯(402)、20cm程墓道側に須恵器杯蓋Ａ・杯Ａ(395～398・400・401)が重なるように出土した。すぐ近くには須恵器平瓶(403)が出土した。出土状況から追葬などの際に、玄門付近に片付けられたものと推測できる。また、墓道の31層中から土師器杯Ｃ(404)が出土した。（山﨑美輪）

⑤出土遺物(第77図395～404)

36号横穴から出土した遺物は土器のみである。土器の内訳は須恵器９点、土師器１点である。

須恵器には蓋Ａ３点(395～397)、杯Ａ３点(398～400)、蓋Ｂないし高杯Ｂ蓋１点(401)、高杯Ｂ(402)、平瓶１点(403)がある。蓋Ａは、いずれも口径11cm前後であるが、頂部外面に回転ヘラケズリを施したＡａ(397)とヘラキリ後不調整のＡｂ(395・396)に分けられる。ただし、397は頂部中央部にケズリ残しがあり、周囲の回転ヘラケズリもやや不十分である。杯Ａは、いずれも口径11cm前後で、口縁部の立ち上がりや受け部が短い。３点とも底部外面はヘラキリ後不調整



第77図　36号横穴出土土器実測図

のＡｂである。401は蓋Ｂとも高杯Ｂの蓋とも判断がつかないが、蓋Ｂに対応する杯Ｂがみられないことから、後述する高杯Ｂ(402)の蓋の可能性が高い。402の口径とほぼ一致する。402は脚部にスカシが認められない。杯部の稜線もほとんど目立たない程度まで退化している。胎土は砂粒がやや多めで、401とは異なる。したがって、セットとして焼成されたのではないと考える。403は焼け歪みが著しいものの、ほぼ完形の平瓶である。体部外面には須恵器片や窯壁の一部と思われるものが融着している。体部の上面にはボタン状の装飾が２つ貼り付けてある。

土師器には杯Ｃ１点(404)がある。都城系土師器もしくはその模倣品と考えられ、口縁端部が内傾する面を持つ。内面は摩滅のため暗文の有無は不明である。外面には４分割してヘラケズリを施す。胎土は比較的精良である。　(筒井崇史)

(14)37号横穴(ＳＸ19)

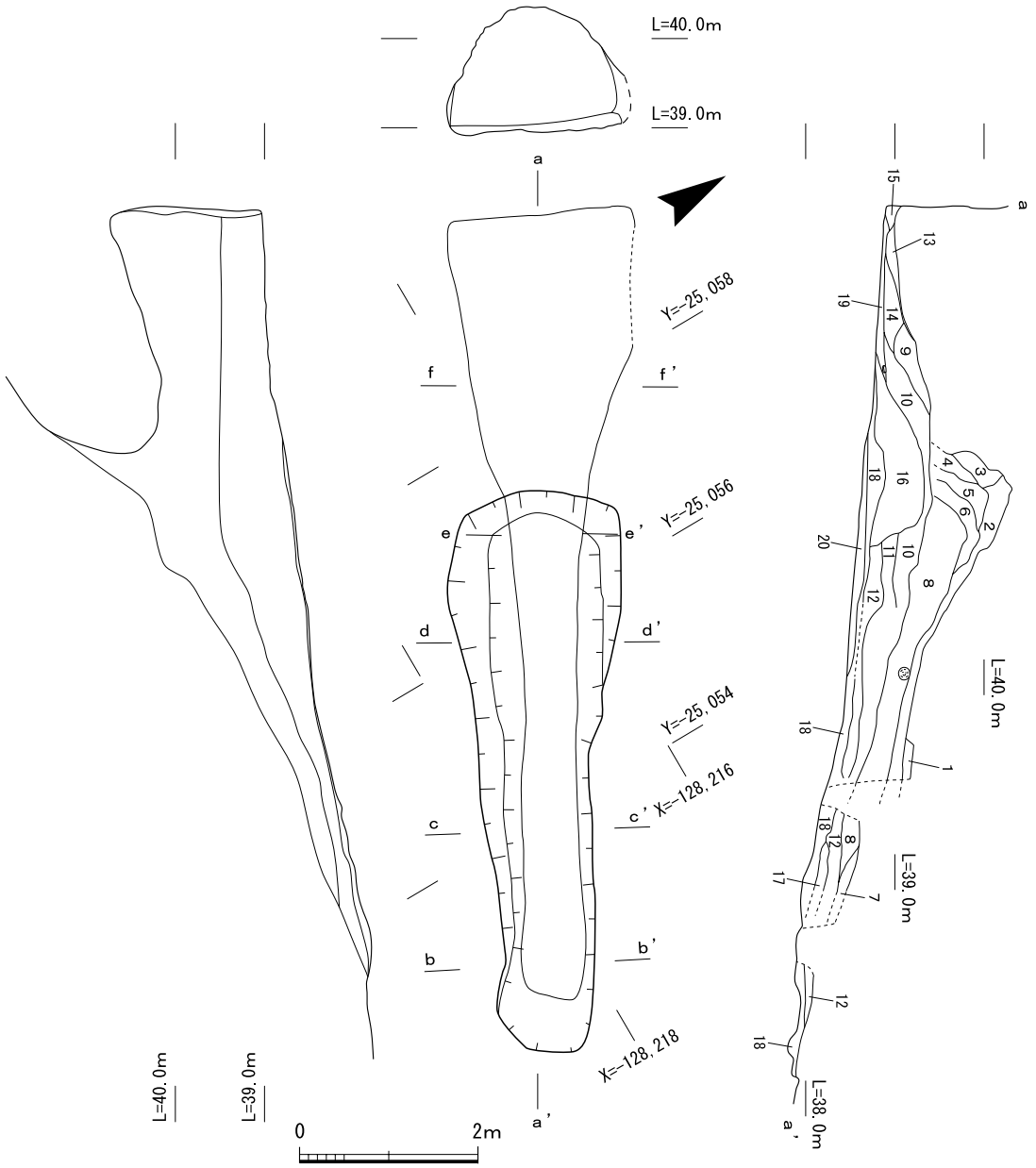
①立地・調査時の状況

36号横穴の南西に隣接して検出した。玄室奥壁から墓道先端までの全長は9.4mを測る。今回調査した19基の中で最も規模の小さな横穴である。天井が良好に残っていたため、墓道・羨道の調査後に重機で天井を除去し、玄室内の調査を行った。主軸はＮ－60°－Ｗをとる。

②規模・構造(第78図)

ａ)墓道・羨道

墓道・羨道の全長6.7m、墓道幅0.5～1.0m、墓道床面の標高37.9～38.6mを測る。墓道端から約６mの地点までは横断面の形状は逆台形を呈している。墓道上部の最大幅は1.5m、墓道底の幅は0.4mを測る。また、墓道端から6.7mの地点で床面にわずかな段差が設けられていた。遺物の出土がこの段差より奥側に限定されていることからこの地点を玄門と判断した。羨道や羨門の特定には至らなかった。



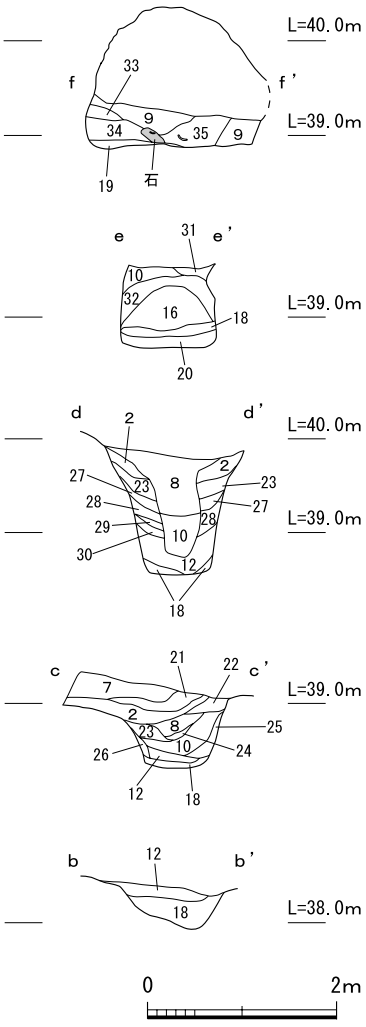
第78図　37号横穴平面・立面図

b）玄室

先述したように、玄室と墓道の境にはわずかな段差が設けられており、床面が一段高くなる地点から奥壁までを玄室と捉えた。玄室の平面形は撥形を呈し、玄室長2.7m、奥壁幅2.0m、玄門幅0.9mを測る。玄室床面の標高は38.7～38.9mである。天井は一部が崩落し、玄室内に崩落土が堆積していた。奥壁での天井高は1.4mを測る。奥壁は床面から垂直に立ち上がり、奥壁上部の形状から天井の断面形は三角形と推測される。

③土層堆積状況（第79図）

１～14層は横穴使用停止後に堆積したものである。２～10・12層は締りのない砂礫層で天井崩落土である。横断面ｅ－ｅ´においてマウンド状に盛り上がっている16層と32層を閉塞土と判断



1．明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土(粗砂)
2．オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土(粗砂、径１～２cmの小礫を多数含む)
3．褐色(10YR4/6)粘質土・浅黄橙色(10YR8/3)粘質土(径２cm程度の小礫を含む)
4．黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂～粗砂含む)
5．黄褐色(10YR5/8)粘質土(細砂～粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
6．明黄褐色(10YR6/8)粘質土(粗砂、径１～２cmの小礫を多数含む)
7．不明
8．黄褐色(10YR5/8)粘質土(粗砂、径２～５cmの礫を多数含む)
9．黄橙色(10YR7/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～５cm程の礫を多く含む)
10．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫をやや多く含む)
11．黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂含む、径２～５cm程の礫を含む)
12．橙色(7.5YR6/8)砂礫層(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
13．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細砂)
14．灰白色(2.5Y8/2)砂質土(粗砂)
15．淡黄色(2.5Y8/3)砂質土(粗砂)
16．黄褐色(10YR5/8)～褐色(10YR4/6)粘質土(粗砂～極粗砂含む、径３cm程の礫含む)
17．黄褐色(10YR5/6)砂礫層(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
18．黄褐色(10YR5/6)砂礫層(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
19．橙色(7.5YR7/6)砂質土(細砂)
20．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂～極粗砂)
21．不明
22．不明
23．褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～粗砂、径１～３cmの礫を含む)
24．黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
25．黄褐色(10YR5/8)粘質土(粗砂を多く含む、径１cm程度の小礫を含む)
26．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂を多く含む、径１cm程度の小礫を含む)
27．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む)
28．オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土(粗砂)
29．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中砂～粗砂、径３cm程の礫を少し含む)
30．明褐色(7.5YR5/8)砂質土(粗砂+１cm程の小礫を含む)
31．明黄褐色(10YR7/6)砂質土(粗砂～極粗砂)
32．褐色(7.5YR4/6)粘質土(粗粒砂を多く含む)
33．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(中砂～粗砂)
34．黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂、径１～２cm程の小礫を少し含む)
35．黄橙色(10YR7/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～６cmの礫を多く含む)

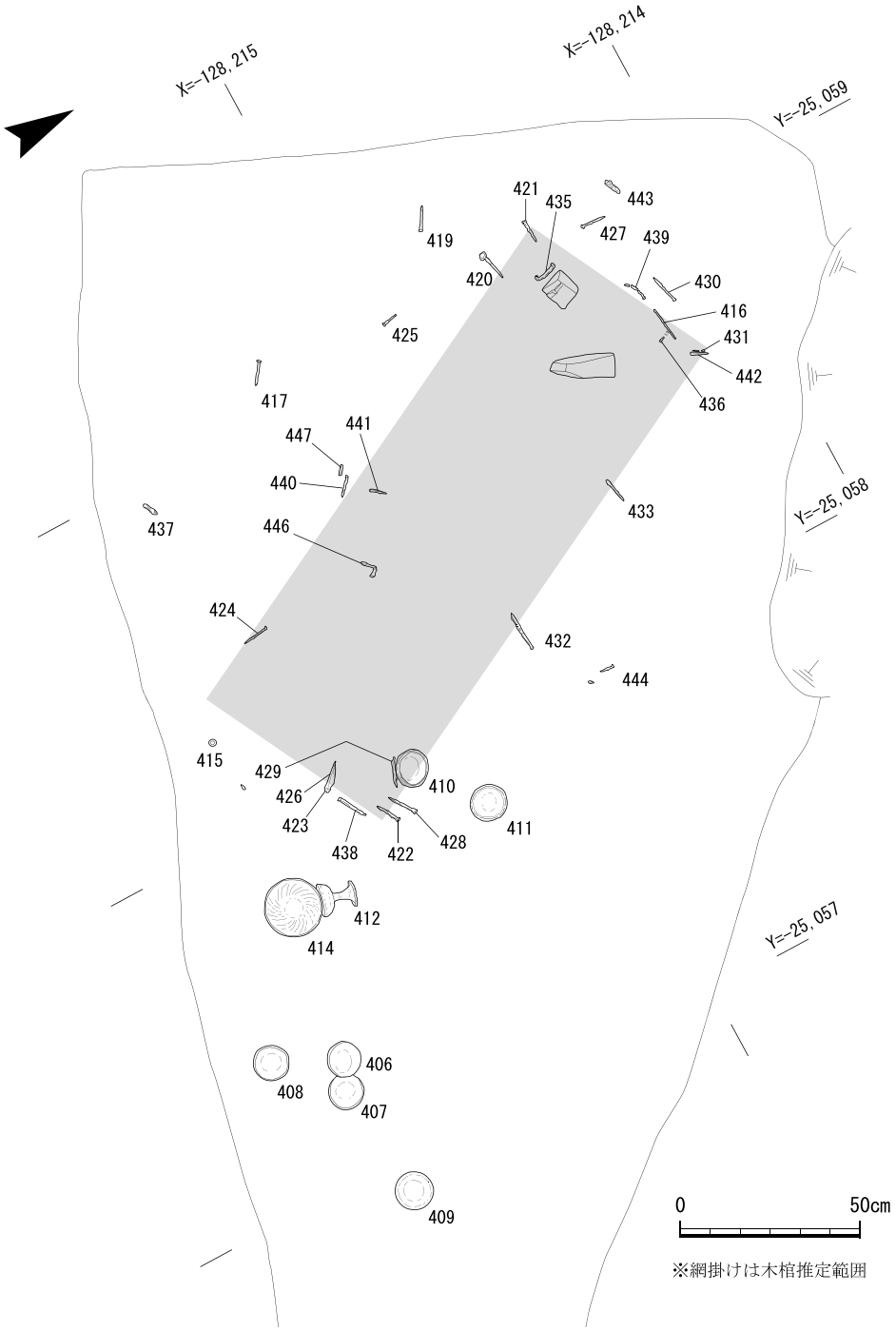
第79図　37号横穴土層断面図

した。16・32層で閉塞した後、まず、天井の崩落によって12層が堆積し、その後28～30層が堆積した後に10層で大きく抉った堆積がみられる。一方で10層は玄室まで入り込み堆積している。その後流入土である２～６・８層、そして天井崩落土である13～15層が堆積したと考えられる。

④遺物出土状況(第80図)

遺物の多くは玄室内の埋葬面である19層上面で出土した。玄室内では、奥壁から墓道に向かって長さ1.6m、幅0.6mの範囲で28点もの鉄釘が出土した。釘の出土位置や釘の方向、釘に木質が一部残っていたことから木棺が納められていたと考えられる。想定される木棺の主軸は横穴の主軸に対して大きく振っているが、これは天井の崩落によって木棺そのものが動いた可能性がある。土器は、奥壁から1.7mの玄室のほぼ中央あたりに須恵器杯Ａ(410・411)、これから0.5m南に土師器杯Ｃ(414)と横転した須恵器高杯Ｂ(412)が出土した。玄門付近では、須恵器蓋Ａ(406～408)、0.2mほど離れて同杯Ａ(409)が出土した。墓道では８層から須恵器長頸壺Ｃ(413)が出土した。

(山﨑美輪)

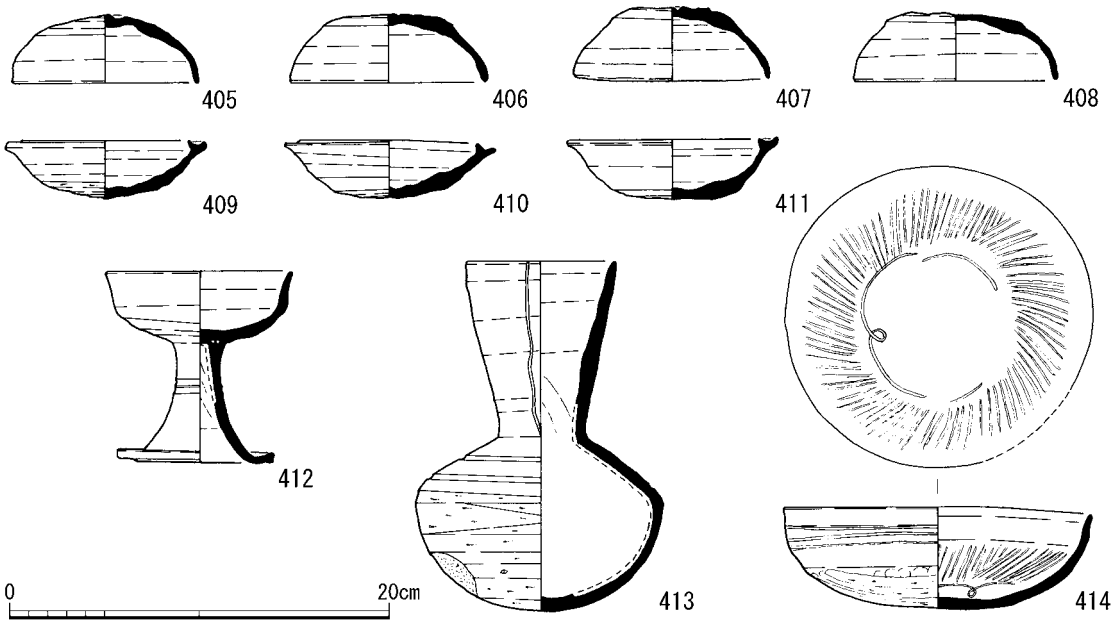


第80図　37号横穴遺物出土状況図

⑤出土遺物（第81図405～第83図447）

37号横穴から出土した遺物には土器・耳環のほか、鉄製品がある。土器の内訳は須恵器９点、土師器１点である。

須恵器には、蓋Ａ４点（405～408）、杯Ａ３点（409～411）、高杯Ｂ１点（412）、長頸壺Ｃ１点（413）がある。蓋Ａは、いずれも口径10cm前後で、頂部外面はヘラキリ後不調整もしくはナデを施す



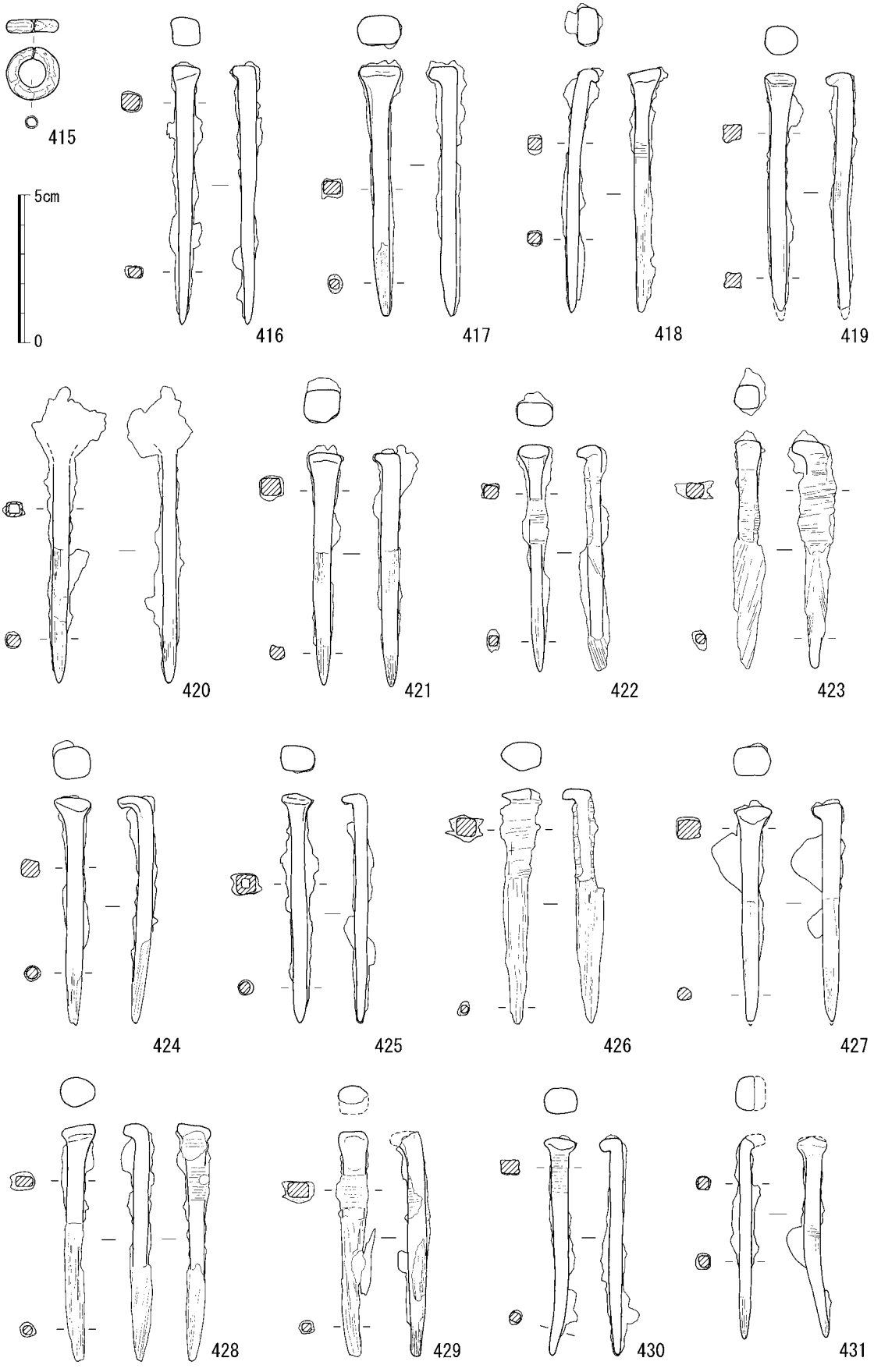
第81図　37号横穴出土土器実測図

Ａｂである。杯Ａは、いずれも口径10cm前後で、底部外面はヘラキリ後不調整もしくはナデを施すＡｂである。口縁部は短く、口縁端部は受け部の端部よりも突出するかどうかという程度である。412は脚部にスカシを持たないものである。杯部外面の装飾も認められない。胎土は405～412がほぼ同じＶ群であるが、詳細にみると409・410の一群と406～408・411の一群、405、412の４種がありそうである。なお、406～408・411はやや砂っぽい。413は直線的に延びる口縁部に、わずかに肩部が張る体部を有する。脚台等は有さない。肩部外面に沈線を２条施すものの、その間に刺突文は施さない。なお、口縁部はわずかに内湾する。口頸部の外面にはヘラ状工具で１条の縦線を線刻する。ヘラ記号の可能性もあるが、詳細は不明である。胎土には黒色粒を含む。

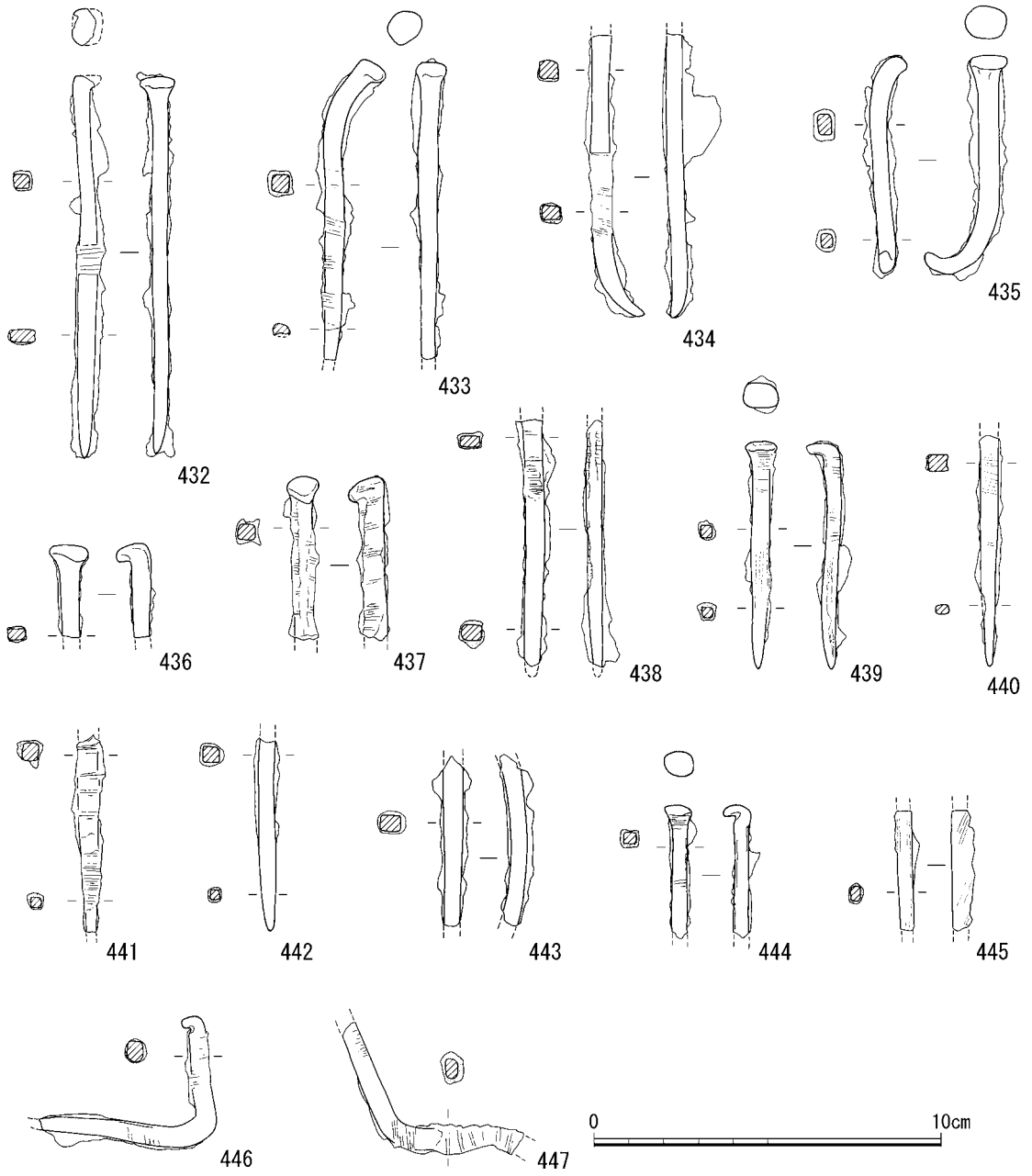
土師器には、杯Ｃ１点(414)がある。口縁端部が内傾し、内面には放射暗文と螺旋暗文を施す。胎土は比較的精良である。

耳環は１点(415)出土した。耳環の断面は円形である。錆が著しいものの、部分的に金色を呈することから金環と思われる。耳環そのものは銅芯に鍍金あるいは箔貼するものである。

鉄製品には釘30点(416～445)、不明鉄製品２点(446・447)がある。釘は断面方形で、頭部を屈曲させるものである。出土した釘は推定されるものも含めると、全長が7.5～8.5cm前後のもの(416～426・428～431・435・439)が最も多く、他に６cm前後のもの(427)や10～11cmほどのもの(432・433)が確認できる。頭部を確認できるものは23点、先端を確認できるものは24点あることから、少なくとも24点の釘が存在する。37号横穴でも木質の残るものが多く、先端側では縦方向の木目、頭部側では横方向の木目であることが確認できる(423・426・428・429・439など)。釘の点数や検出状況などから木棺の存在が想定できる。446・447は大きく屈曲しているが、これが本来の形状かどうか不明である。釘の屈曲したものか、鋏の可能性があろう。　　(筒井崇史)



第82図　37号横穴出土耳環・鉄器実測図 1

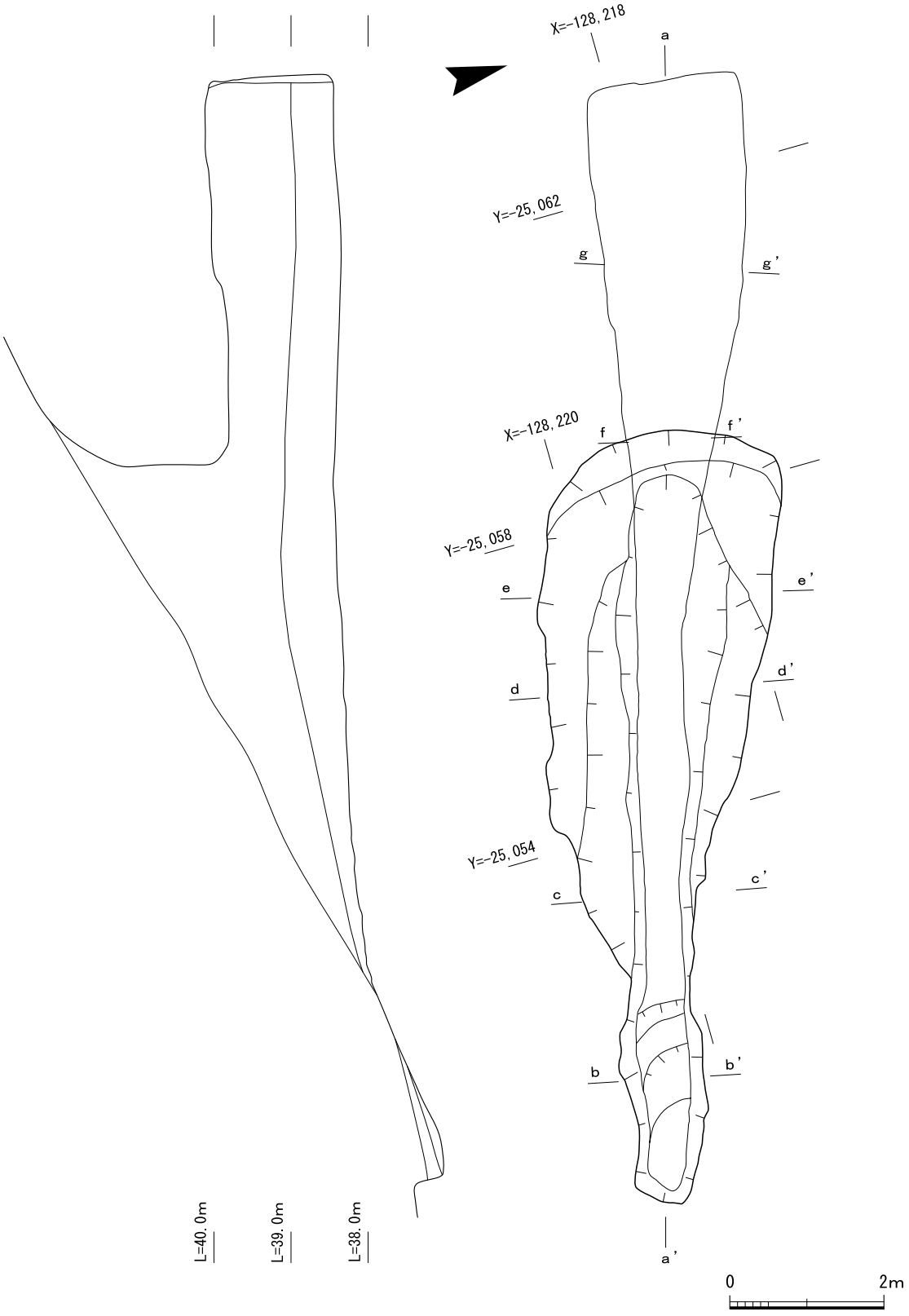


第83図　37号横穴出土鉄器実測図２

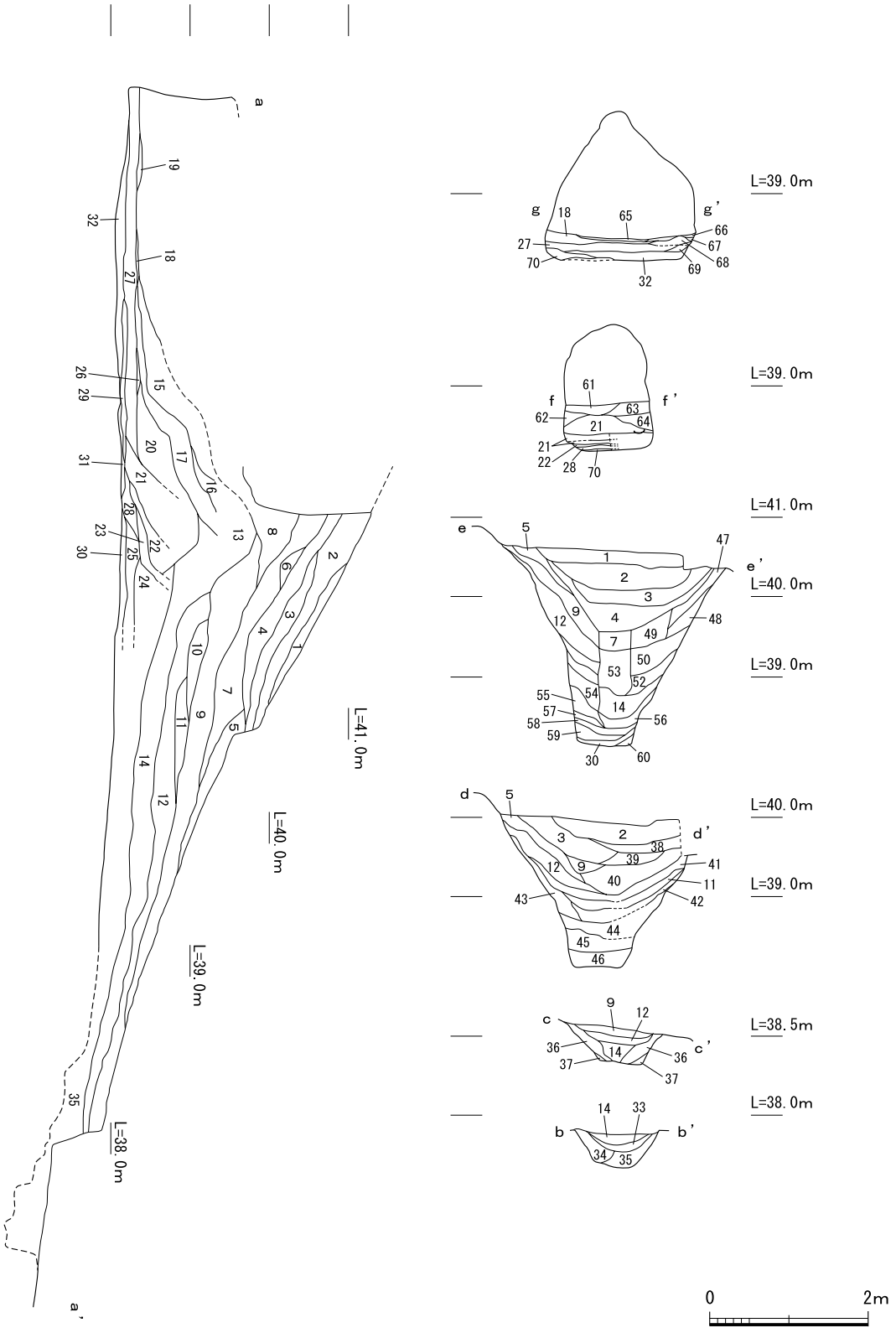
(15)38号横穴(ＳＸ10)

①立地・調査時の状況

37号横穴の南西側に近接して検出した。38号横穴も天井が非常に良好な状態で残存しており、墓道・羨道の調査後に重機で天井を除去し、玄室内の調査を行った。全長は14.5mを測り、主軸はＮ－75°－Ｗをとる。37号横穴と隣接して造られているが主軸は揃っていない。37号横穴との高低差は、墓道床面で0.6m、玄室床面で0.8mを測り、38号横穴が低位に造られていた。38号横穴は今回調査した中でも比較的規模の大きな横穴である。



第84図　38号横穴平面・立面図



第85図　38号横穴土層断面図

39号横穴土層断面図土色

1.明黄褐色(10YR 6/8)砂質土(径２～３cmの礫を多く含む)
2.褐色(10YR 4/6)砂質土(径２～３cmの礫を少し含む)
3.褐色(10YR 4/6)砂質土　粗砂～シルト(径２cm程の礫を少し含む)
4.暗褐色(10YR 3/4)砂質土　粗砂～シルト
5.褐色(10YR 4/6)砂質土　細砂～中砂(径２～５cm程の礫をごくわずかに含む)
6.黄褐色(10YR 5/8)砂質土　粗砂
7.褐色(7.5YR 4/6)粘質土(径２～５cm程の礫を含む)
8.明褐色(7.5YR 5/8)砂質土　細砂(径２cm程の小礫を含む)
9.暗褐色(10YR 3/4)砂質土　粗砂～極粗砂(径２～10cm程の礫をわずかに含む)
10.褐色(10YR 4/6)砂質土　細砂
11.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　細砂
12.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　細砂～粗砂(径５cm程の礫をわずかに含む)
13.明褐色(7.5YR 5/6)砂質土　粗砂(径２～５cm程の礫を含む)
14.褐色(10YR 4/4)砂質土　粗砂～極粗砂(径２～８cm程の礫を多く含む)
15.黄褐色(10YR 7/6)砂質土　極粗砂(径３cm程の礫を少し含む)
16.黄褐色(10YR 5/6)粗砂～極粗砂(径３cm程の礫を含む)
17.褐色(10YR 4/6)砂質土(中砂～粗砂)
18.黄褐色(10YR 5/8)砂質土
19.浅黄橙色(10YR 8/4)砂質土
20.明黄褐色(10YR 6/8)砂礫層　粗砂(径３～５cm程の礫をかなり多く含む)
21.明黄褐色(10YR 6/8)砂質土　粗砂～極粗砂(径２～８cm程の礫を含む)
22.褐色(10YR 4/6)砂質土　細砂～粗砂(径２～３cmの小礫をわずかに含む)
23.黄褐色(10YR 5/8)砂質土　粗砂(径５～８cmの小礫を含む)
24.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　粗砂(径５～８cm程の礫を多く含む)
25.黄褐色(10YR 5/8)～褐色(10YR 4/6)砂質土　細砂～粗砂(径３～５cm程の礫を含む)
26.淡黄色(2.5Y 8/4)砂質土
27.浅橙色礫混土(10YR 8/4)(径１～４cm大の礫を含む)
28.明黄褐色(10YR 6/8)砂礫層　粗砂
29.赤褐色(5YR 4/8)砂質土　粗砂(径１cm程の小礫を含む)
30.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　粗砂(径３～６cm程の礫を少し含む)
31.黄橙色(10YR 7/8)砂質土　細砂～極粗砂
32.明黄褐色(2.5Y 6/8)砂質土　中砂～極細砂
33.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　粗砂～極粗砂(径３cm程の礫を少し含む)
34.褐色(10YR 4/4)砂質土　細砂～粗砂
35.褐色(10YR 4/4)砂質土　粗砂～極粗砂(径３cm程の礫を含む)
36.明褐色(7.5YR 5/8)砂質土　粗砂～極粗砂
37.褐色(7.5YR 4/6)砂質土　シルト～粗砂(径２cm程の礫をごくわずかに含む)
38.褐色(10YR 4/6)砂質土　細砂～粗砂(径３～５cm程の礫をかなり多く含む)
39.暗褐色(10YR 3/4)砂質土(径３～８cm程の礫をかなり多く含む)
40.褐色(10YR 4/6)砂質土(径３～10cm程の礫をかなり多く含む)
41.灰黄褐色(10YR 4/2)砂質土　中砂～粗砂(径３～５cm程の礫を少し含む)
42.明褐色(7.5YR 5/6)砂質土　粗砂～極粗砂
43.褐色(7.5YR 4/6)砂質土　粗砂～極粗砂
44.明黄褐色(10YR 6/8)砂質土　中砂～極粗砂(径２～５cm程の礫を含む)
44.褐色(10YR 4/4)砂質土(細砂～粗砂、径３～５cm程の礫を含む)
45.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　細砂～粗砂(径２～８cm程の礫を含む)
46.黄褐色(10YR 5/6)～褐色(10YR 4/6)砂質土　粗砂(径５cm程の礫を少し含む)
47.黄褐色(10YR 5/8)砂質土　粗砂～シルト(径３cm程の礫を含む)
48.明褐色(7.5YR 5/8)砂質土　細砂～シルト
49.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　細砂～シルト(径１～２cm程の小礫を多く含む)
50.黄褐色(10YR 5/8)砂質土　細砂～シルト(径２cm程の小礫を少し含む)
51.黄褐色(10YR 5/6)砂質土　粗砂～極粗砂(径２cm程の小礫を多く含む)
52.褐色(10YR 4/4)砂質土　粗砂～極粗砂(径２～３cm程の礫を少し含む)
53.明褐色(7.5YR 5/8)砂質土　粗砂～極粗砂(径５～10cmの礫をかなり多く含む)
54.褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂～極粗砂)
55.明褐色(7.5YR 5/8)砂質土　粗砂
56.明褐色(7.5YR 5/8)砂質土　粗砂(径２～５cm程の礫を少し含む)
57.褐色(7.5YR 4/6)　砂質土　細砂～粗砂
58.褐色(10YR 4/6)砂質土　細砂～シルト
59.にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土　細砂～粗砂
60.にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土　粗砂
61.明黄褐色(10YR 6/8)砂礫層(径２～３cm程の小礫)
62.黄褐色(10YR 5/6)砂質土(中砂～シルト)
63.黄褐色(10YR 5/6)砂質土(中砂～シルト)天井崩落土を含む
64.黄褐色(YR 5/8)砂質土(中砂～シルト)(径３cm程の礫を含む)
65.灰白色(2.5Y 7/1)
66.淡黄色砂礫(2.5YR 8/4)砂質土(粗砂、径0.5cm大の礫を含む)
67.にぶい赤褐色(5YR 4/4)砂礫(粗砂　径0.5cmの礫を含む)
68.灰白色(2.5Y 8/2)砂　粗砂
69.にぶい赤褐色(5YR 4/4)砂礫(粗砂　径0.5cmの礫を含む)
70.明褐色(7.5YR 5/6)粗砂層

②規模・構造(第84図)

ａ)墓道・羨道

墓道・羨道の全長11.3m、幅0.5～0.8m、墓道床面の標高37.9～38.1mを測る。墓道上端幅が0.5～1.4mを測るのに対して墓道の底の幅は最大でも0.4mである。墓道は最も深いところで1.2mである。墓道の横断面の形状は、墓道端から8.4m付近までは逆台形を呈している。奥壁から約2.6mの位置で地山を削り出した袖部分を確認しており、玄門と考えられる。土層断面を観察すると、奥壁より６mで閉塞土と思われる土層堆積(21～25)層を確認した。玄門から閉塞土までが羨道と想定される。幅1.1mを測るが、羨門の位置が不明確であり、羨道長は不明である。

ｂ)玄室

玄室は、平面形が羽子板形を呈しており、右側壁には地山を削り込んで袖を有していた。玄室長3.2m、奥壁幅2.05m、玄門幅1.45m、玄室最大幅2.05mを測る。玄室床面の標高は38.1～38.3m

を測る。天井は一部崩落していたが、大部分は横穴が機能していた当時を保っていたと考えられる。床面から天井までの高さは1.0～1.2mである。奥壁は床面から垂直に立ち上がる。奥壁上部の形状から天井の断面形はアーチ形と推測される。

③土層堆積状況（第85図）

墓道内の１～14層および玄室内の15～20・26・27層は横穴使用停止後に堆積したものと判断できる。２・５・６・13層は締りのない砂礫層で天井崩落土と判断した。そのあいだの３・４・10・11層は粘性の強い粗粒砂砂質シルト層であることから、雨水等による流入土が堆積したものと判断した。玄室内の15・18～20・27層についても、締りのない砂礫層なので天井崩落土と判断した。

29～32層は整地層で、特に29・32層は玄室内の窪みを整地するために10～15cmの厚さで敷かれている。29層上面で多くの遺物が出土した。遺物を覆うように17～20・26・27層の天井崩落に伴う土砂や砂礫が堆積していた。

閉塞土は24・25層が初葬時のもので、その後天井崩落土と思われる28層が堆積した後に、再び閉塞土と思われる21～23層の盛り上げが認められる。閉塞土付近の堆積状況から初葬終了後に少なくとも１回は玄室内に出入りしていることがわかった。

また、横断面ｅ－ｅ’にみられる53層は、土層の堆積状況から一度墓道内に堆積した層を雨水等が大きくえぐったのちに堆積したものと思われる。53層は５～10cmの礫を非常に多く含む層であることから、横穴の基盤となっている大阪層群の崩壊等によって堆積したものであろう。こうした堆積状況はほかの横穴でも確認することができた。

④遺物出土状況（第86図）

遺物は埋葬面である29層上面で出土した。遺物の出土位置は玄室内奥壁側、玄門の左側壁付近と、羨道である。玄室の一番奥に須恵器長頸壺Ａ（480）１点が横転した状態で出土した。玄室奥からはこの１点のみ出土した。次に、玄門の左側壁付近では多くの土器が集中して出土した。奥壁から順番に、須恵器長頸壺Ａ（479）が横転していた。すぐ東側に隣接して同高杯Ａ２点（472・473）も横転していた。472の下に少し重なるようにして、杯Ａ（456）が逆位で、蓋Ａ（449）が正位で出土した。473の脚部の下に重なるようにして土師器杯（483）が正位で出土した。その北側に接して須恵器高杯Ａ（475）が横転しており、その下に同高杯蓋（462）が逆位で出土した。そのさらに北側に接して、同杯Ａ（453）が正位で、同高杯Ａ（471）が横転していた。西にわずかに離れて同高杯Ａ（474）が横転していた。その北側には、同杯蓋（466）と同杯身（457）が逆位で、同杯身（455）が正位で、同杯蓋（468）が逆位で少しずつ重なっていた。その南側にすぐ接して同瑞（481）、同高杯Ａ（476）が横転していた。その脚部の下に同高杯蓋（460）が逆位、土師器短頸壺（482）が横転していた。側壁に沿うようにして須恵器蓋Ａ（467）が逆位で出土した。

羨道では左側壁に沿って奥壁から順に須恵器蓋Ａ（448）が逆位、同杯Ａ２点（459・458）が逆位、同蓋Ａ（450）が逆位、羨道の中心付近から右側壁にかけて同杯Ａ２点（452・454）が正位、羨道の中心付近で同高杯蓋Ａ（461・464）が逆位でそれぞれ出土した。



第86図　38号横穴遺物出土状況図

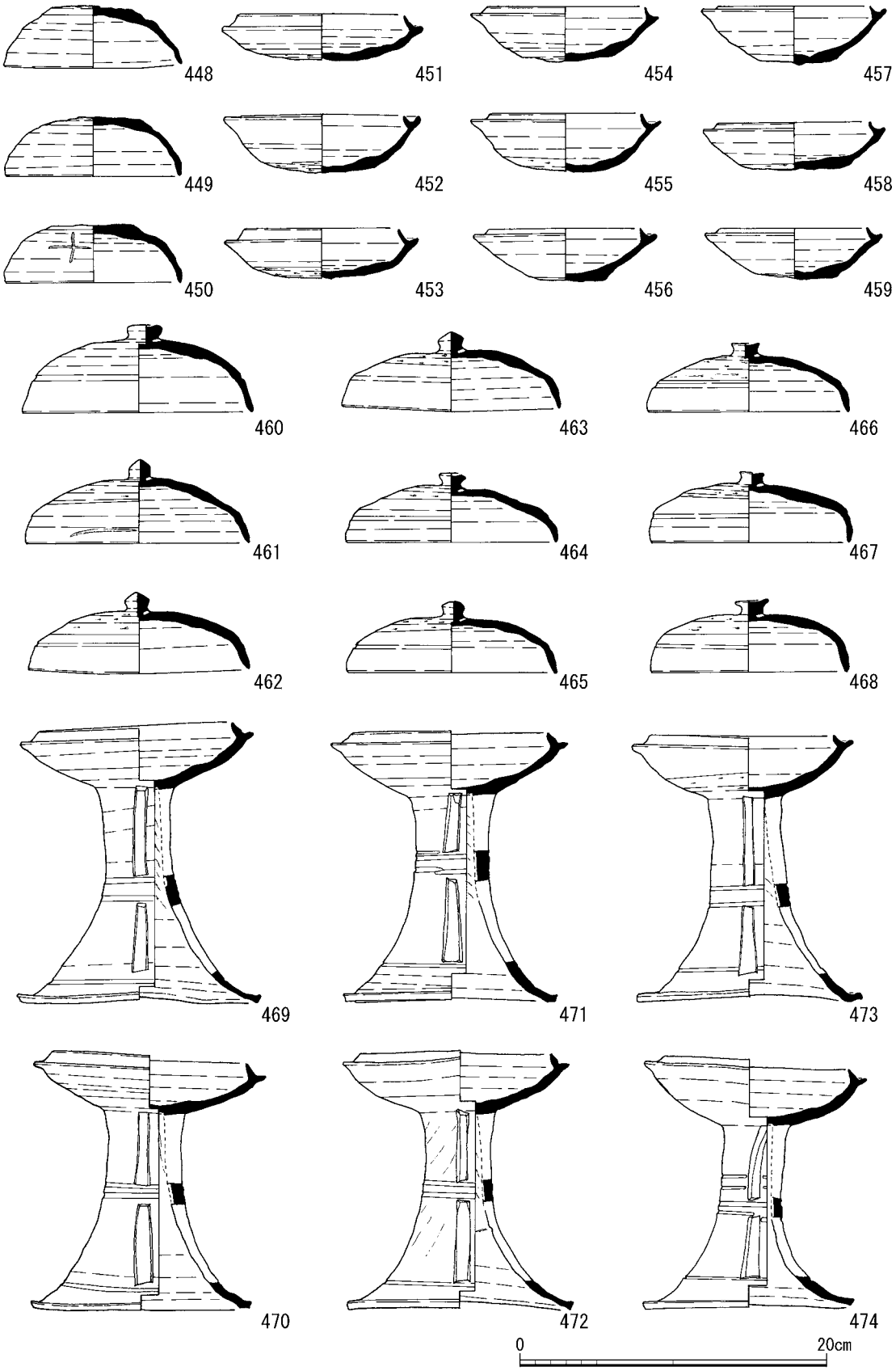
奥壁近くでは、わずかな土器しか出土していないので、初葬以降に玄室内に出入りし、その際に土器類は重ね置かれたものと考えられる。

また、土器のほかに鉄製品が出土している。奥壁付近で鉄族(484・488)と釘(491)が、玄門付近でまとまって出土した土器群の下から鉄鏃２点(486・487)、鉄釘２点(489・490)、不明鉄製品２点(492・493)が出土した。（山﨑美輪）

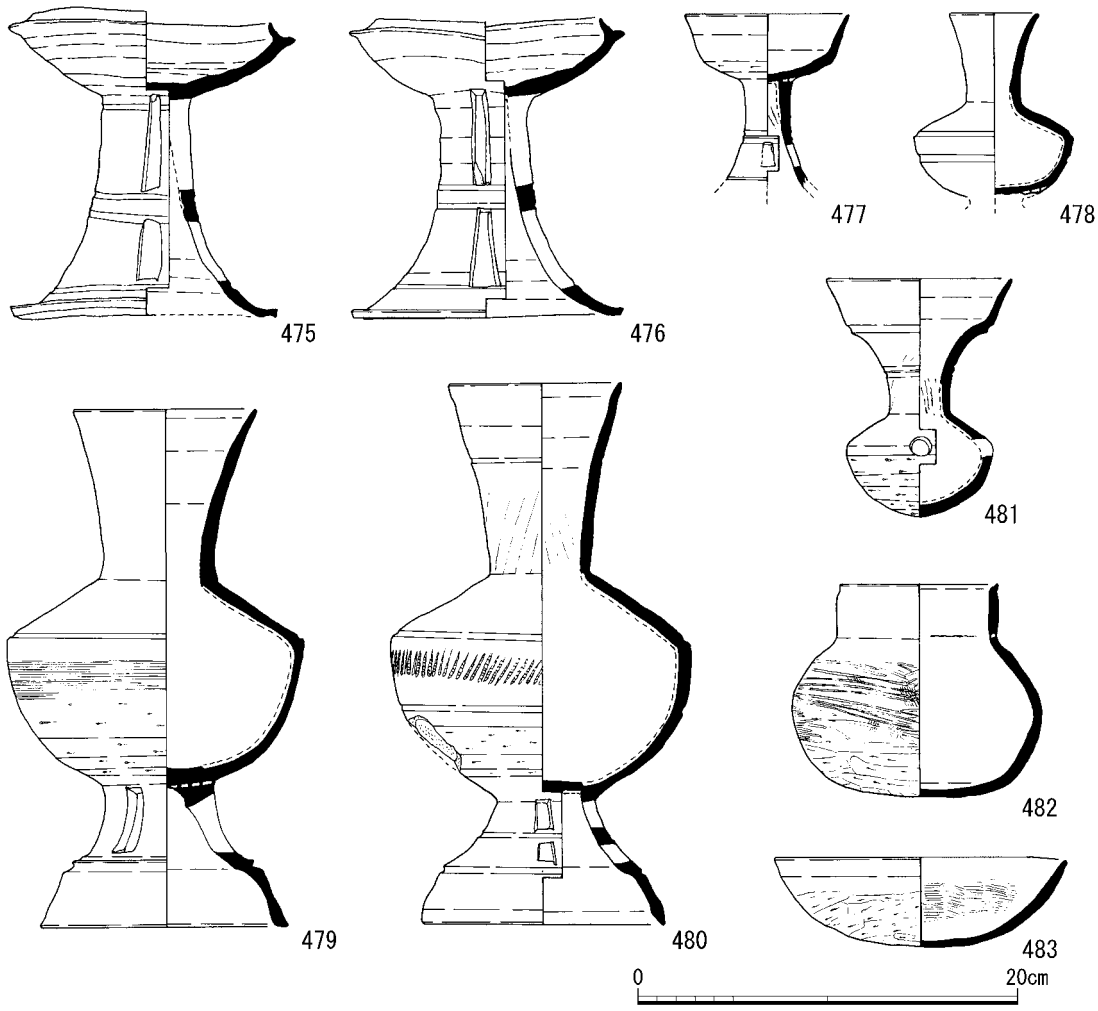
⑤出土遺物(第87図448～第89図493)

38号横穴から出土した遺物には土器のほか、鉄製品がある。土器の内訳は須恵器34点、土師器２点である。

須恵器には、蓋Ａ３点(448～450)、杯Ａ９点(451～459)、高杯Ａ蓋９点(460～468)、高杯Ａ８点(469～476)、高杯Ｂ１点(477)、長頸壺Ａ３点(478～480)、瑞(481)がある。蓋Ａはいずれもヘラ切り後不調整のＡｂである。450は外面に「十」字状のヘラ記号がある。胎土は448が黒色粒を含み、449はやや砂っぽい。杯Ａは451が手持ちによるヘラケズリ、452・453が回転ヘラケズリを施すＡａである。454～459はヘラキリ後不調整、もしくはヘラキリ後ナデのＡｂである。口縁端部が受け部の端部よりもわずかに突出するものが含まれる(452・457)。胎土は、451が断面の色調は断定できないものの、胎土や色調などが455に類似しており、Ⅰ群の可能性がある。453は砂粒がやや多く、全体に砂っぽい。454は胎土に微細な砂粒を含む。455は胎土に砂粒をやや多く含み、451や高杯Ａの473・476などと胎土・色調・焼成が類似する。高杯Ａ蓋は法量に若干の違いがあるものの、頂部に回転ヘラケズリを施してつまみを貼り付けたり、口縁部から頂部への変化点付近に浅い沈線を施すなど、ほぼ同じ特徴を有するものである。460は468や高杯Ａの473・476と胎土・色調・焼成が類似する。また、479も同じ一群かもしれない。463は胎土に砂粒をやや多く含む。466は高杯Ａの474・475と胎土・色調・焼成が類似する。467は全体に砂粒を多く含み、また黒色粒を少量含む。高杯Ａは、いずれもやや太めの脚柱部に長方形のスカシを２段２方向に施し、上段と下段のスカシの間には２条の沈線を巡らすもので、ほぼ同じ特徴を有している。また、いずれの個体も下段のスカシの直下に沈線を１条施す。なお、いずれもの個体も焼け歪みが著しい。胎土は大きく３つのグループに分かれる。まず、470・473・476の一群で、胎土は全体に砂粒が多いⅠ群で、色調･焼成が類似する。また、471は470と同一グループの可能性もあるが、胎土はⅠ群とは断定できず、Ⅳ群の可能性がある。次に474・475の一群はⅢ群に分類でき、胎土のほか色調・焼成が類似する。長頸壺Ａの480も同じ胎土である可能性がある。最後のグループは469・472でⅣ群である。477は脚端部を欠損するものの、方形のスカシを有するＢａである。杯部に装飾がみられない個体で脚柱部にスカシを有するものは非常に珍しい。478は小型の長頸壺であるが、脚台ないし高台部を欠損するためＡかＢか判断できない。体部中位に沈線を２条施し、その間に櫛状工具による刺突文を施す。479は脚台部に長方形のスカシを３方向に穿ち、体部中位にはカキメを施す。胎土は全体的に砂粒が多い。480は脚台部に長方形のスカシを上下２段に２方向に穿ち、体部中位に沈線２条を巡らしてその間に櫛状工具による刺突文を施す。481は体部中位の穿孔は直径１cmである。



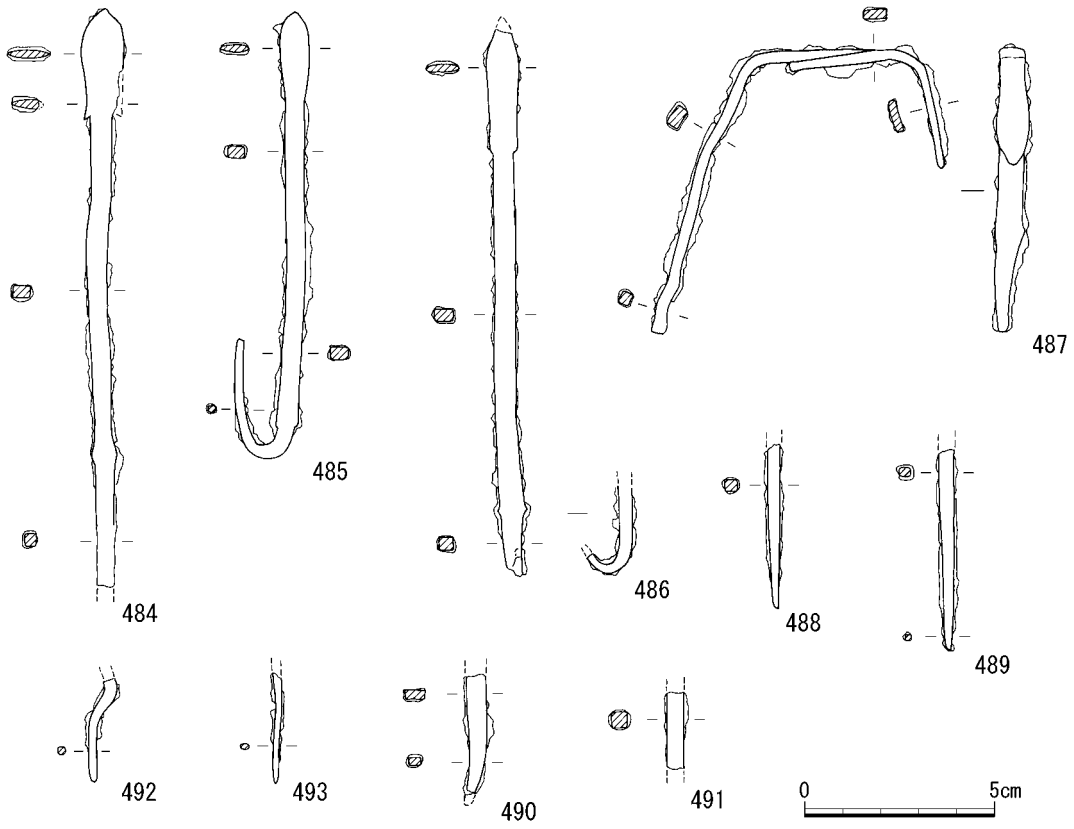
第87図　38号横穴出土土器実測図1



第88図　38号横穴出土土器実測図２

土師器には、短頸壺１点(482)、杯１点(483)がある。482は、口縁部がほぼ真上に立ち上がり、肩部はややなで肩で、体部最大径が中位付近にあるが、底部までの高さが近いためやや下膨れな器形を呈する。底部は平底気味である。口縁端面は明瞭に内傾する。体部外面にミガキを、底部外面にヘラケズリを、それぞれ４分割して施す。胎土は精良である。483は口縁部にヨコナデを施し、外面にヘラケズリ、内面にハケを施す。今回の調査で、内面にハケを施す杯類は483以外には確認していない。胎土には砂粒を多く含む。

鉄製品には鉄鏃５点(484～488)、釘３点(489～491)、不明鉄製品２点(492・493)がある。鉄鏃のうち484～487は棘状関を有する長頸鏃で、鏃身部の形状はいずれも柳葉状を呈するが、鏃身関部などの形状が若干異なる。484は短い逆刺を有するものである。485・487は鏃身部に関を有さないものである。488は鏃身部にごくわずかな斜関を有するものである。485・486の茎先端は大きく折り曲げられており、487は２か所で大きく折り曲げられて、「コ」字状に屈曲させられている。487のように大きく折り曲げられた鉄鏃は35号横穴でも出土している(348)。488は鉄鏃の茎の先端の破片であろう。釘はいずれも細めのもので、489・490は先端のみ、491は中ほどの一部



第89図　38号横穴出土鉄器実測図

のみの破片である。不明鉄製品２点は釘よりも細いもので、針の可能性もあると考えている。492は中ほどで若干屈曲している。（筒井崇史）

(16)39号横穴（ＳＸ11）

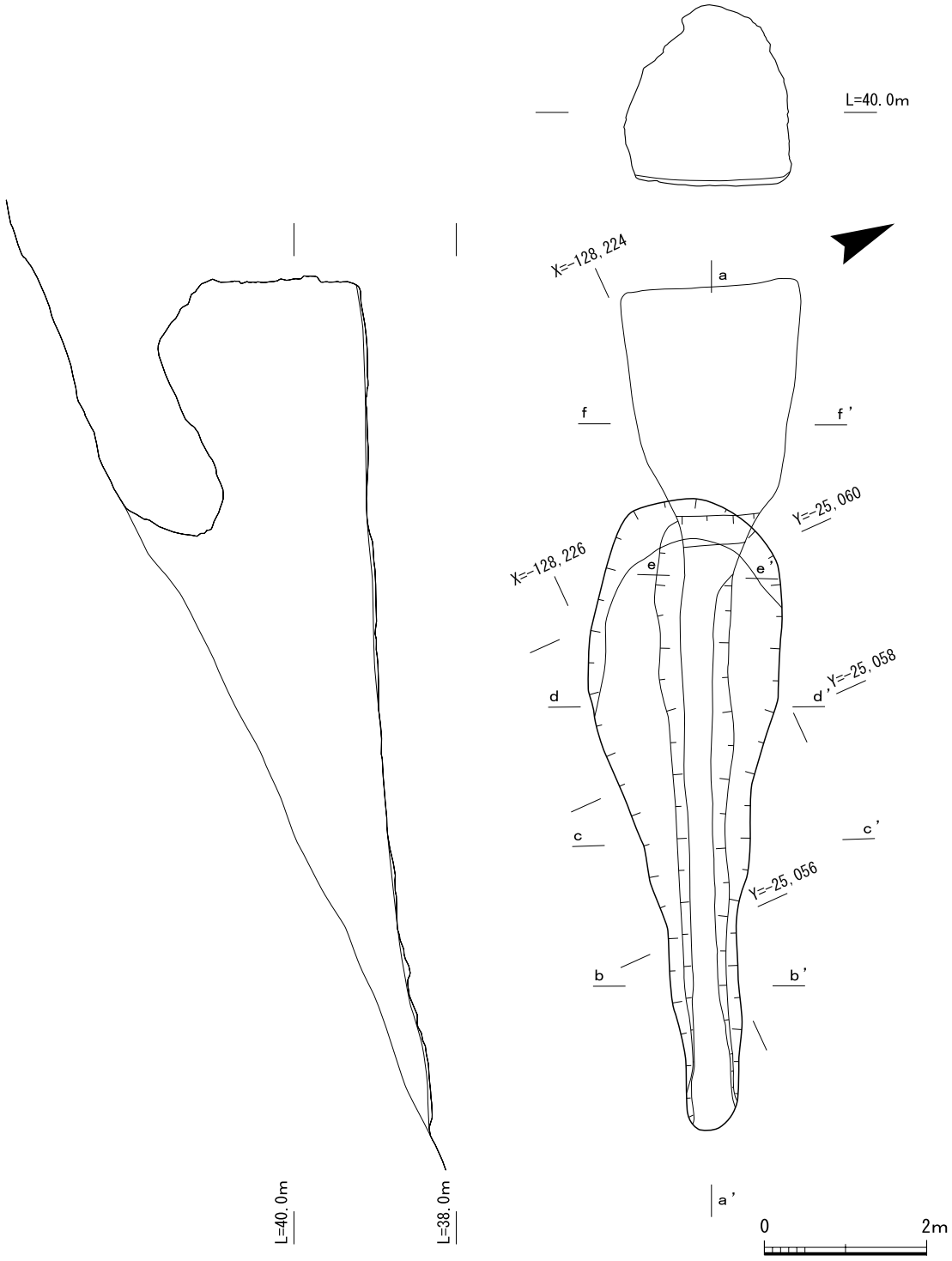
①立地・調査時の状況

40号横穴の南西側に近接して検出した。39号横穴も天井が残存しており、墓道・羨道の調査後に重機で天井を除去し、玄室内の調査を行った。全長10.4mを測り、主軸はＮ－60°－Ｗをとる。隣接する40号横穴と主軸が揃っている。39号・40号横穴の高低差は、墓道の床面では0.5～0.8m、玄室床面では0.5mを測り、39号横穴が高位に造られている。

②規模・構造（第90図）

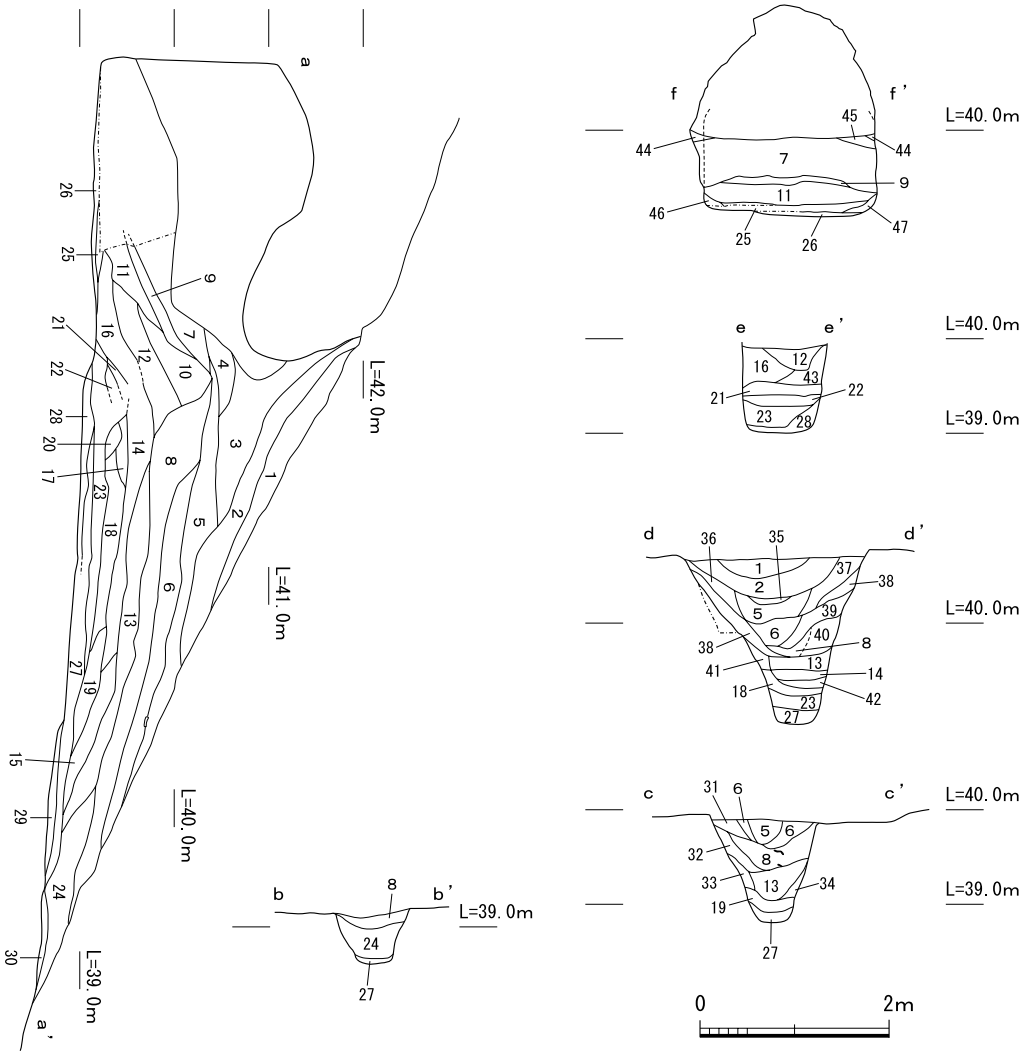
ａ）墓道・羨道

墓道・羨道の全長7.5m、墓道幅0.3～0.8m、床面の標高38.6～39.0mを測る。墓道上部の最大幅は1.9mである。墓道先端から約6.5mの地点までの横断面の形状は逆台形を呈している。墓道先端より7.6mの位置では床面に0.1m程の段差があることから玄門に相当するものと思われる。土層縦断面を観察すると、段差がある位置に閉塞土と考えられるマウンド状の高まりが確認できる。墓道は、上部の幅が0.75～1.9mであるのに対して底の幅は最大でも0.35mで、0.3m前後と一定の



第90図　39号横穴平面・立面図

1.明黄褐色(10YR6/6)粘質土(細砂～粗砂を含む、小礫わずかに混じる)
2.黄褐色(10YR5/8)粘質土(細砂～粗砂を含む、小礫わずかに混じる)
3.黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂～粗砂、径１～３cmの礫を少し含む)
4.褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂を少し含む、径２～３cmの礫を少し含む)
5.黒褐色(2.5Y3/2)粘質土(細砂～粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
6.にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(粗砂、径２～５cmの礫を非常に多く含む)
7.オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫と径10cm程の礫を含む)
8.黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径２～３cmの小礫を多く含む)
9.明黄褐色(10YR6/8)砂質土(極粗砂)
10.黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂、径１cm前後の小礫を多く含む)
11.黄褐色(10YR5/8)砂質土(極粗砂、径２～５cm程の礫を非常に多く含む)
12.径３～５cmの礫を含む
13.黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂、径１～３cm礫を少し含む)
14.黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの礫を含む)
15.明褐色(7.5YR5/6)粘質土(粗砂を含む)
16.黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径２～３cmの礫を少し含む)
17.にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫を含む)
18.黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂を含む)
19.黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂を多く含む)
20.黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫を含む)
21.黄褐色(10YR5/6)砂質土(径１～２cm程の小礫を少し含む)
22.不明
23.明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１cm以下の小礫を多く含む)
24.黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂)
25.赤褐色(5YR4/6)砂質土(粗砂を多く含む)
26.にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(粒砂を含む)
27.黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の礫を含む)
28.不明
29.赤褐色(5YR4/6)砂質土(粗砂を多く含む)
30.にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(粗砂、径１～５cmの礫を少し含む)
31.黄褐色(10YR5/6)粘質土
32.黄褐色(10YR5/8)粘質土(粗砂を少し含む)
33.黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
34.黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂を含む)
35.灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(粗砂を少し含む)
36.褐色(10YR4/4)粘質土(砂礫を少し含む)
37.褐色(10YR4/4)粘質土(粗砂を少し含む)
38.黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂を少し含む)
39.黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂、径１～３cmの小礫を多く含む)
40.黄褐色(10YR5/8)粘質土(粗砂を含む)
41.黄褐色(10YR5/8)粘質土(粗砂を含む)
42.明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂、径２～５cmの礫を含む)
43.褐色(10YR4/6)粘質土(粗粒砂含む、径２cm程の礫を含む)
44.黄褐色(10YR5/8)土
45.淡黄色(5Y8/4)砂礫(地山崩落土、径0.5～0.7cmの小礫を多く含む)
46.灰色(5Y6/1)砂
47.にぶい黄色(2.5YR6/4)砂質土



第91図　39号横穴土層断面図

幅で掘削されている。墓道は最も深いところで1.7mを測る。

b）玄室

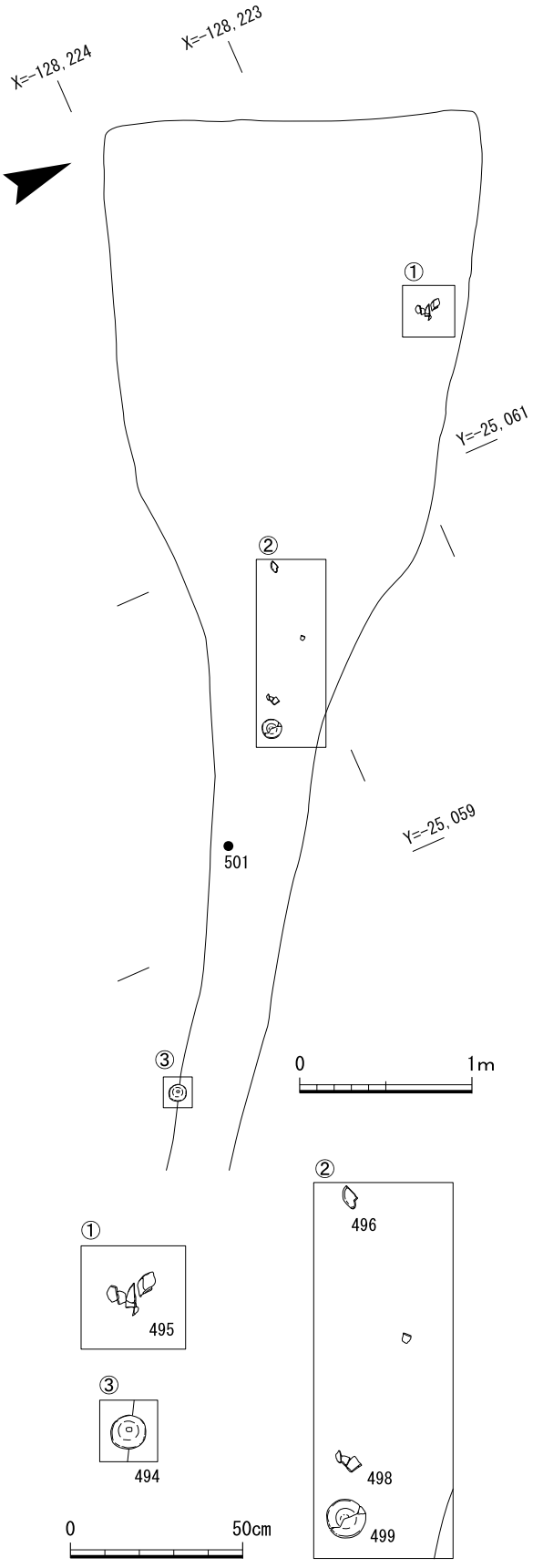
玄室の平面形は撥形を呈しており、玄室長2.8m、奥壁幅2.15m、玄門幅1.0m、最大幅2.2mである。遺物は25層上面で出土した。玄室床面の標高は39.1～39.2mである。玄室内は天井崩落に伴う砂礫が厚く堆積している状態であった。奥壁上部の形状から天井の断面形はアーチ形と推測される。奥壁での天井高は2.2mであるが、天井の崩落が著しく、本来の高さは不明である。

③土層堆積状況（第91図）

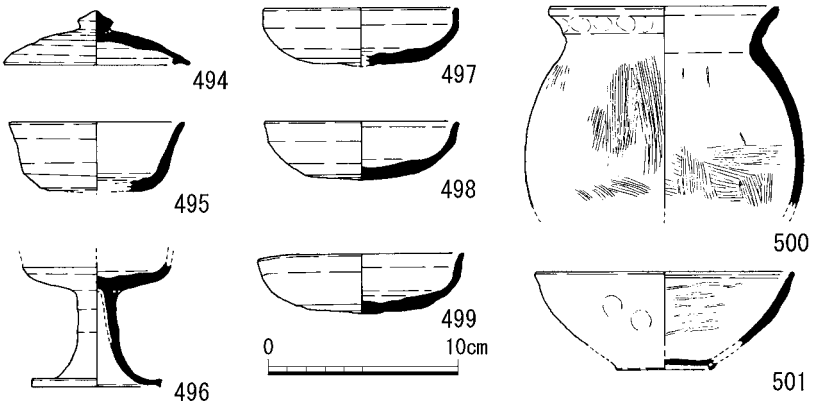
１～13・24層は横穴使用停止後に堆積したものと判断できる。７～12・44～47層は、締りのない砂礫層で、天井崩落土や側壁崩落土と判断した。１～３・５・６・10・13層は粘性の強い細粒砂砂質シルト～粗粒砂砂質シルトで、雨水等による流入土が堆積したものと判断した。５層はある時期の旧表土である。26層は固く締まっており、玄室内の整地層である。25層ないし26層の上面で遺物が出土しており、埋葬面と考えられる。埋葬面の上には天井崩落土（７・９・11層）が厚く堆積している。27～30層は墓道内の整地層である。断面観察では、玄室へ至る一段高くなっている箇所でマウンド状の高まり（20～23層）が確認でき、閉塞土と判断した。

④遺物出土状況（第92図）

墓道及び玄門付近、玄室内の埋葬面で遺物が出土したが、出土点数は少なく須恵器が数点出土しただけである。



第92図　39号横穴遺物出土状況図



墓道からは、須恵器蓋Ｂ(494)が正位で出土した。玄門から墓道にかけては、須恵器高杯Ｂ(496)や土師器杯Ｅ(498・499)が出土した。玄室内からは、須恵器杯Ｂ(495)が出土した。

（山﨑美輪）

第93図　39号横穴出土土器実測図

⑤出土遺物（第93図494～501）

39号横穴から出土した遺物は土器のみである。土器の内訳は須恵器３点、土師器４点である。なお、土器には横穴に伴うもののほか、中世の瓦器椀が出土した。

須恵器には蓋Ｂ１点(494)、杯Ｂ１点(495)、高杯Ｂ１点(496)がある。494は口径8.8cmで、頂部外面に回転ヘラケズリを施したＢａである。495は口径9.2cmで、底部の大半が欠損する。蓋Ｂａとセットになる杯Ｂａであるが、法量や胎土、色調の点でかならずしも494とセットではないかもしれない。焼成がやや軟で、全体に摩滅気味である。496は杯口縁部や脚部の多くを欠損し、脚部にスカシが認められないことから高杯Ｂｂに分類できる。

土師器には杯Ｅ３点(497～499)、甕Ａ１点(500)がある。杯Ｅは口径10.5cm前後、器高３cm前後で、ほぼ同形同大のものである。また、３点とも須恵器の蓋Ａとほぼ同じ製作技法で作られているが、対応すべき杯が確認できないので、ここでは杯として報告する。胎土はＣ群に近いが、砂粒を多く含むことから別の一群と考えている。500は体部下半を欠損するが、今回の調査で出土している甕Ａとほぼ同じ特徴を持つものである。外面に黒斑が認められる。

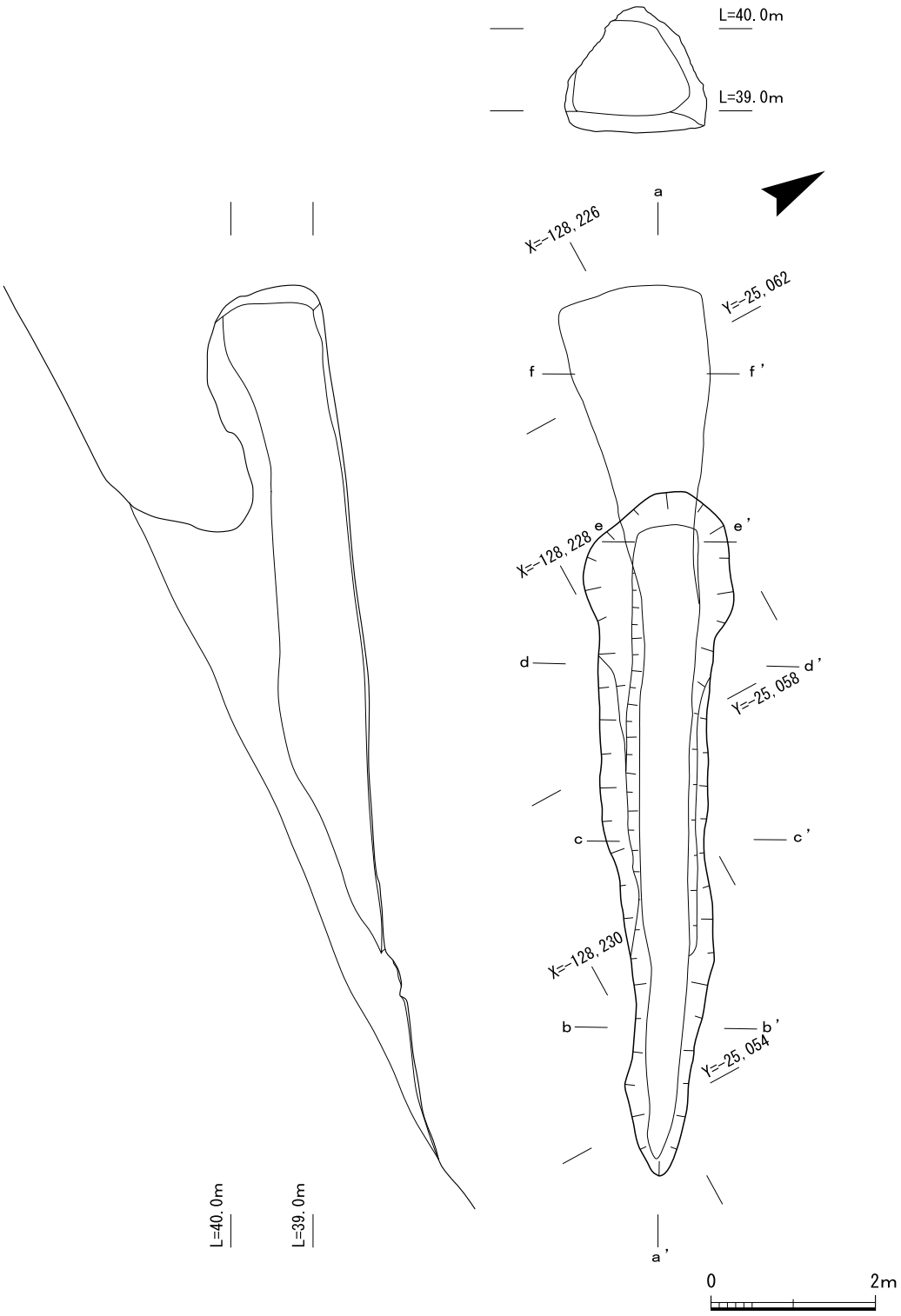
中世の遺物として瓦器椀１点(501)がある。口縁部と底部は直接接合しないが、同一個体である可能性がある。口縁端部の内面に沈線を１条施す。高台は断面三角形を呈する。今回の調査で出土した唯一の中世の遺物である。

（筒井崇史）

(17)40号横穴（ＳＸ12）

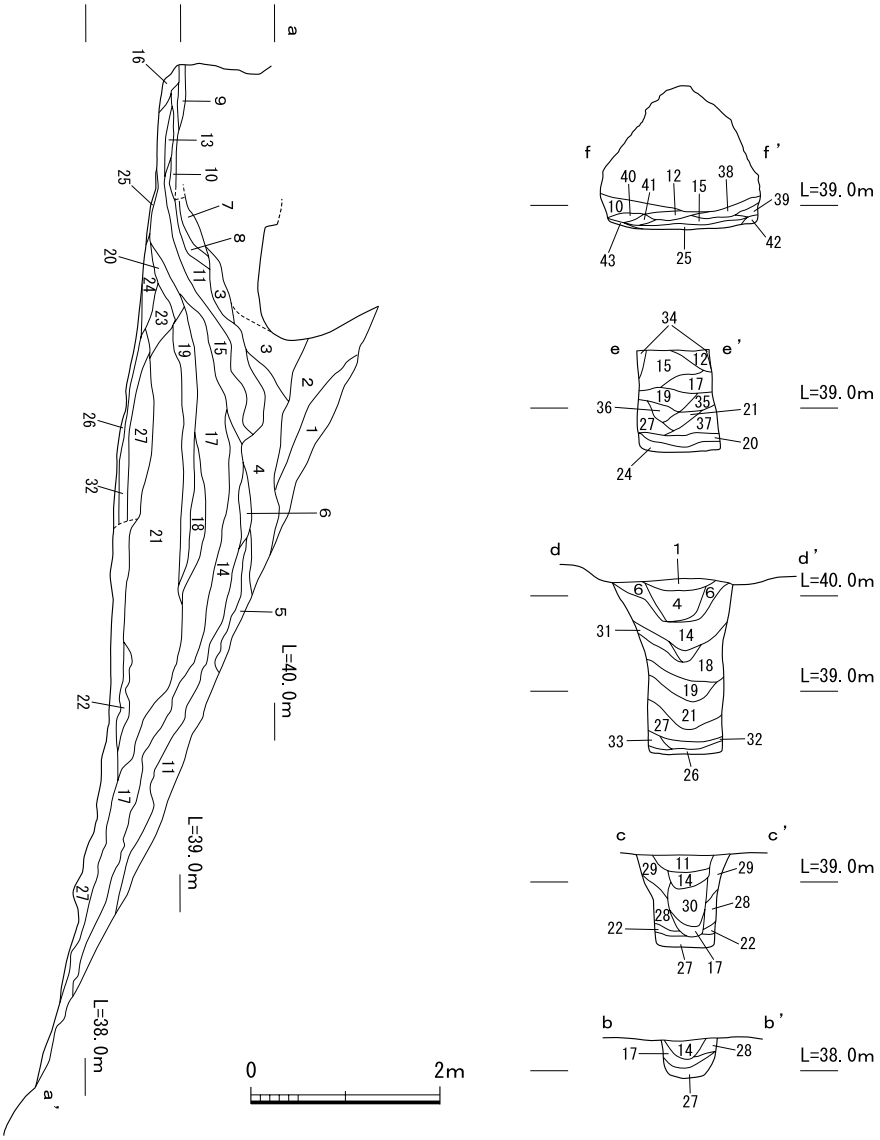
①立地・調査時の状況

40号横穴は調査地南東で39号横穴に近接して検出した。40号横穴は今回調査した中でも小型の横穴の１つである。玄室奥壁から墓道先端までの全長は11.4mを測る。主軸はＮ－60°－Ｗをとる。39号横穴と主軸が揃っている。39号横穴との高低差は、墓道床面で0.5～0.8m、玄室床面で0.5mを測り、隣り合う横穴同士がお互い干渉しないように40号横穴が低く造られている。39号横穴同様、出土遺物は極めて少なかった。



第94図　40号横穴平面・立面図

1．オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土(粗砂)
2．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂～シルト)
3．褐色(10YR4/6)砂質土(細砂、天井崩落の礫を含む)
4．黒褐色(10YR2/2)砂質土(細砂、径２～５cm程の礫を少し含む)
5．にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～４cm程の礫を含む)
6．暗褐色(10YR3/4)砂質土(細砂～シルト、径２cm程の礫を少し含む)
7．褐色(7.5YR4/6)砂質土(細砂～粗砂)
8．褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～粗砂)
9．淡黄色(5Y8/3)粗砂(径0.5cmの砂粒、５cm大の礫少し含む)
10．浅黄色(5Y7/3)砂質土(径0.5cmの細礫多く含む)
11．明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土(粗砂～シルト、径２cm程の礫をわずかに含む)
12．オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土(粗砂～シルト、径２cmの小礫を含む)
13．淡黄色(2.5Y8/4)粗砂(径0.5cmの砂粒)
14．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂～シルト、径２～５cm程の礫を含む)
15．黄褐色(2.5YR5/6)砂質土(粗砂)
16．灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(極細砂、径～0.2cm)
17．黄褐色(10YR5/8)砂質土(シルト)
18．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(極粗砂、径２cm程の礫を含む)
19．黄褐色(10YR5/8)砂質土(極粗砂)
20．浅黄色(2.5Y7/4)砂礫(粗砂、径２cmの小礫多い)
21．黄褐色(10YR5/8)砂質土(極粗砂、径２cm程の礫を含む)
22．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径２cm程の礫を少し含む)
23．黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂)
24．淡黄色(2.5Y8/4)砂礫(粗砂径５～８cmの礫を含む)
25．灰黄色(2.5Y7/2)粗砂
26．明黄褐色(10YR7/6)砂質土(粗砂)
27．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、径２cm程の礫を少し含む)
28．明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂～シルト)
29．褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂～シルト)
30．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂～シルト)
31．黄褐色(10YR5/8)砂質土(中砂～粗砂)
32．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂～極粗砂)
33．明褐色(7.5YR5/6)砂質土(極粗砂～シルト)
34．黄橙色(10YR7/6)砂質土(粗砂～極粗砂)
35．黄褐色(2.5Y5/6)砂質土(粗砂)
36．黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～シルト、径２～５cm程の礫を含む)
37．褐色(7.5YR4/6)砂質土(極粗砂～シルト)
38．浅黄色(5Y7/3)砂質土(粗砂、径0.2～３cmの礫を含む)
39．灰色(5Y6/1)粗砂
40．淡黄色(5Y8/4)砂礫(径0.5～５cmの礫含む)
41．灰白色(5Y7/2)砂質土(粗砂、径～0.3cm)
42．黄褐色(2.5Y5/3)細砂
43．褐色(10YR4/6)極細砂



第95図　40号横穴土層断面図

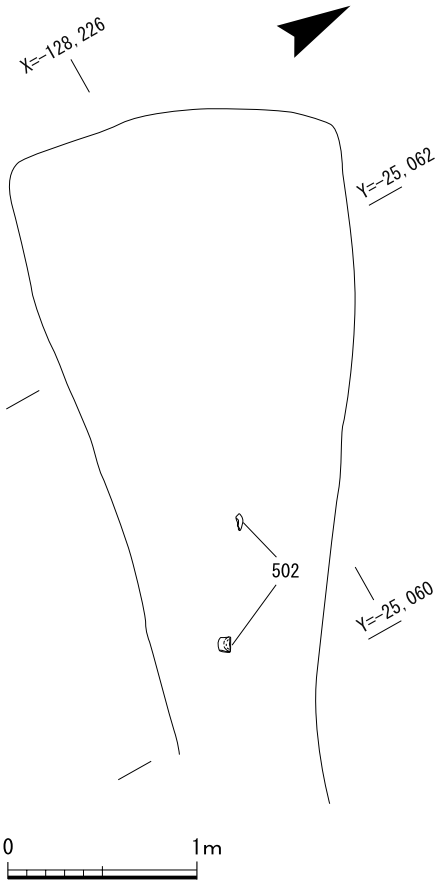
②**規模・構造**（第94図）

ａ）**墓道・羨道**

墓道・羨道の全長は8.9m、幅0.3～0.6m、床面の標高は37.6～38.5mを測る。墓道の横断面の形状は、墓道先端から数mは横断面ｂ－ｂ´のように、底が丸い「U」字状を呈していたようである。しかし、墓道先端から1.5m付近から玄室にむかって、墓道の底は幅0.3～0.4mで平坦になっている。横断面の形状が墓道端から4.0mまでは上方が大きく広がる逆台形を呈している。墓道先端から8.7m付近でわずかであるが段差が設けられており、この付近から奥が玄室と思われる。

ｂ）**玄室**

玄室は、平面形が撥形を呈し、玄室長が2.5m、奥壁幅1.7m、玄門幅0.9m、最大幅は1.8mを測る。玄室は墓道に対して南にやや振れている。遺物は25層上面で出土した。玄室床面の標高は38.7mである。床面から天井までの高さは1.7mである。奥壁上部の形状から天井の断面形は三角形と推測される。



第96図　40号横穴遺物出土状況図

③**土層堆積状況**（第95図）

１～19・21・22・27・32層は横穴使用停止後に堆積したものと判断できる。そのうち、３～５・８～14層は締りのない砂礫層で、天井もしくは、側壁の崩落土と判断した。17層の褐色粗粒砂～シルトが旧表土であろう。２・11・16・18・22層は粘性の強い粘質土であり、雨水等による流入土が堆積したものと判断した。土層縦断面を観察すると、墓道底部は玄室に向かって徐々に上がっており、墓道先端から6.0m付近でマウンド状の高まり（20・23・24層）が確認でき、閉塞土と判断した。25層上面で遺物が出土しており、埋葬面と考えられる。26層は墓道の整地層である。

④**遺物出土状況**（第96図）

40号横穴では、玄室内の玄門付近の床面で須恵器高杯Ｂ（502）が出土した。　（山﨑美輪）

⑤**出土遺物**（第100図502）

40号横穴から出土した遺物は土器のみで、かつ報告できるのは須恵器高杯Ｂの杯部の破片のみである。502は残存率が1/2程度の破片で、脚部は出土しなかった。杯口縁部の外面の下部に突線状の稜が２条巡り、その間に刺突文を施す。　（筒井崇史）

(18)41号横穴(ＳＸ13)

①立地・調査時の状況

41号横穴は40号横穴の南東に隣接して検出した。今回調査した中で最も大型の横穴である。全長は14.3mを測る。墓道・羨道の調査後に重機で天井を除去し、玄室内の調査を行った。隣接する42号横穴とは、墓道底部で1.1～1.4m、玄室埋葬面で0.4mの高低差があり、41号横穴が低位に造られている。主軸はＮ－45°－Ｗをとる。近接する42号横穴と主軸を揃えており、この２基で小群を形成していたと考えられる。

②規模・構造(第97図)

ａ)墓道・羨道

墓道・羨道の全長11.4m、幅0.3～0.6m、床面の標高37.5～38.3mを測る。墓道先端から約4.0mの横断面ｃ－ｃ´の地点までは、上部が大きく広がる逆台形を呈しているが、そこよりも奥壁側では墓道の底は、「Ｕ」字状に変化している。墓道上部の最大幅は2.2mである。墓道先端から8.5mの地点でわずかであるが段差が設けられており、この地点を羨門であると判断した。羨門から約1.8mの地点で両側壁を削って玄室の袖を造り出しており、この地点を玄門と判断した。羨門から玄門まで羨道であり、全長2.2m、幅1.0mを測る。

ｂ)玄室

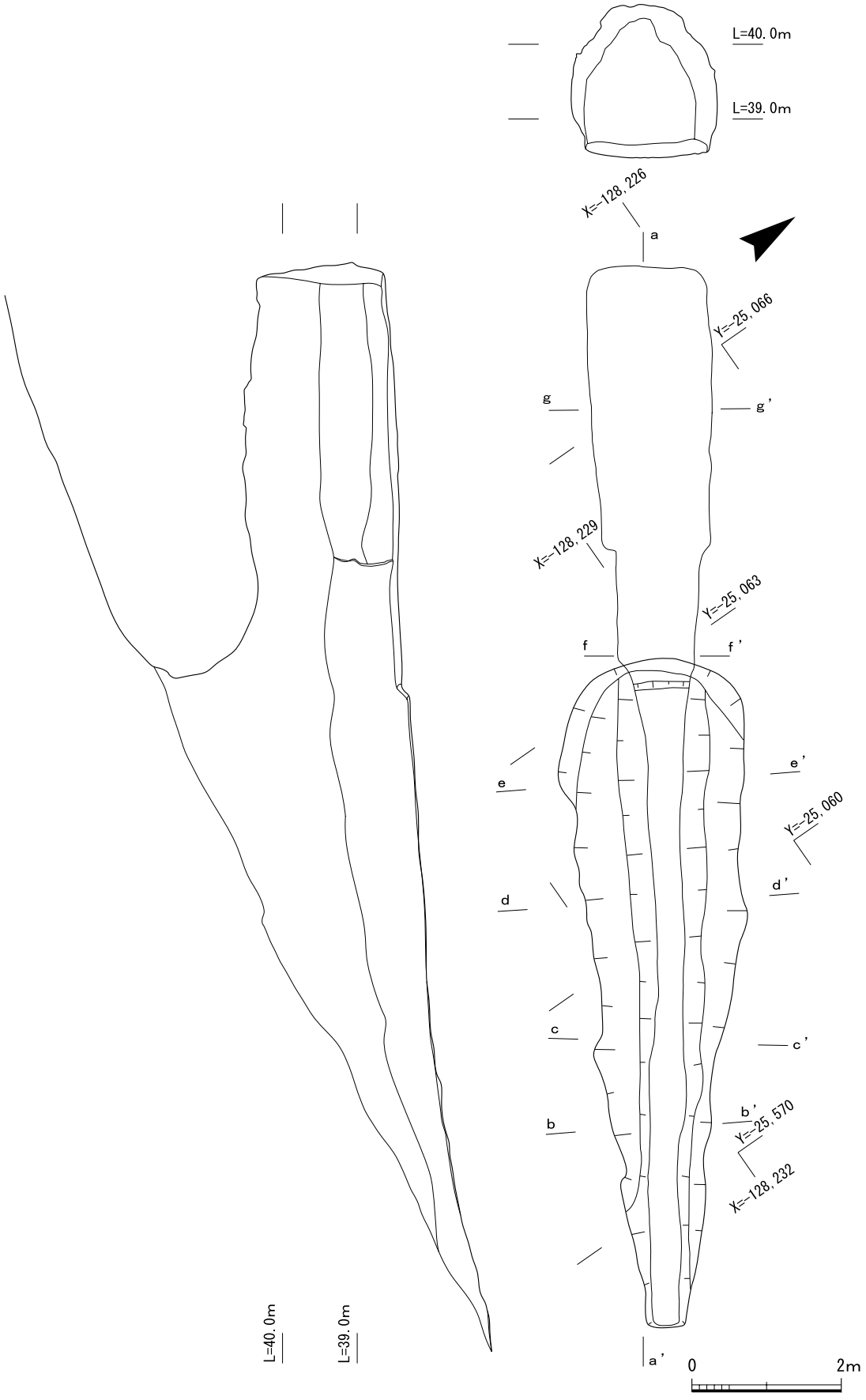
玄室は平面形が長方形を呈し、玄室長2.9m、奥壁幅1.6m、玄門幅1.1m、玄室内最大幅1.6mを測る。玄門に両袖を有している。遺物は33層上面で出土した。玄室床面の標高は38.4～38.6mである。玄室内には天井崩落に伴う砂礫が堆積していた。奥壁での天井高は1.7mである。奥壁の形状から天井の断面形は三角形である。

③土層堆積状況(第98図)

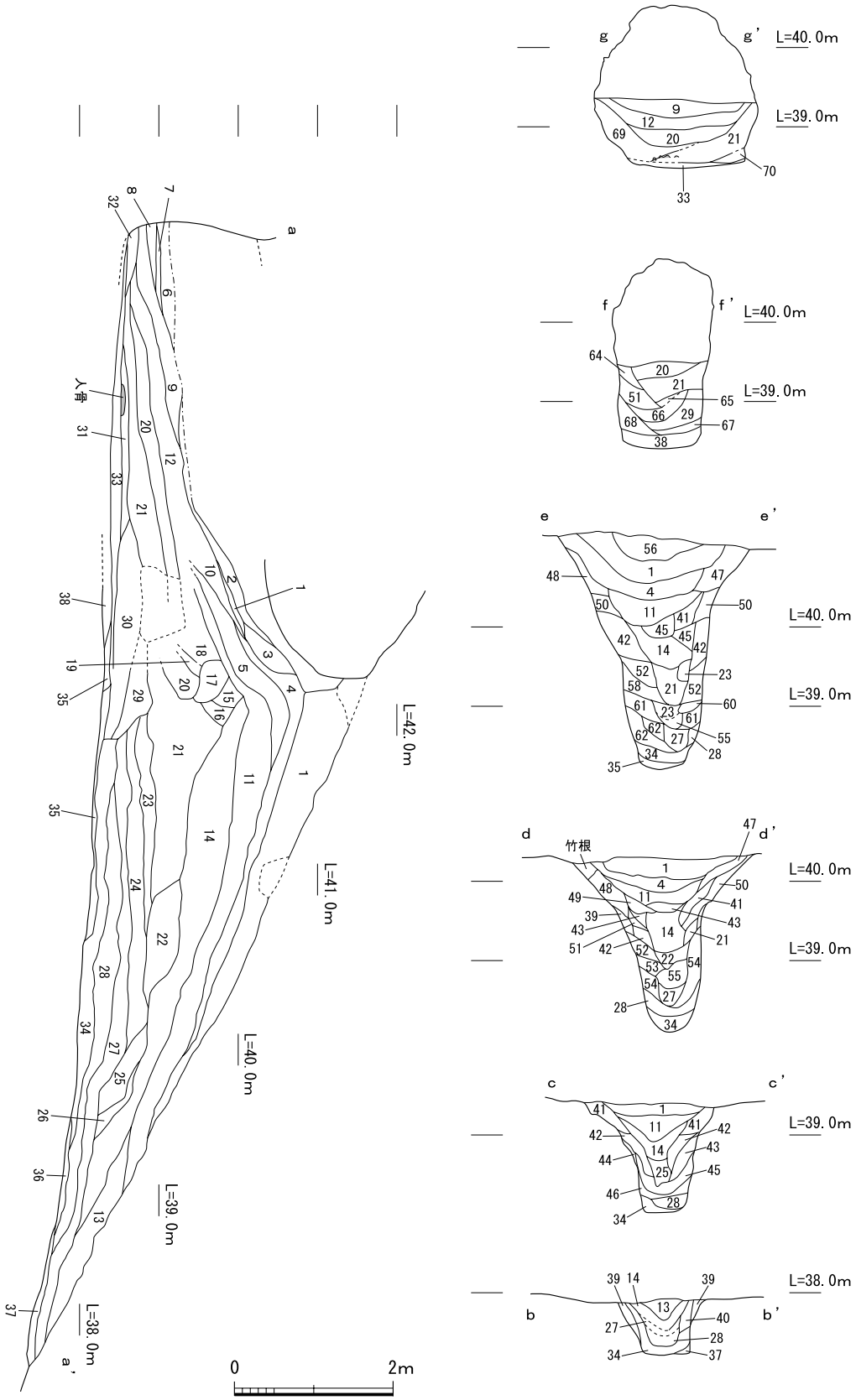
墓道内の１～５・11・13～27・56層、玄室内の６～９・10・12・20・21層は横穴使用停止後に堆積したものと判断する。３・６・９～12・14～25層は締りのない砂礫層で天井もしくは側壁の崩落土であると判断した。２・４・５層は天井崩落土に粘質の強い流入土が混じったものである。１・２・４・５・13・26・27・55・56層は、粘性の強い粘質土で、雨水などで流れ込み堆積した流入土である。墓道先端から8.0m付近のマウンド状の高まり(29層)が閉塞土である。35・36層は固く締まっており、墓道の整地層である。37層は墓道端の窪みを整地したものと考えられる。玄室内は33層で整地されており、その上面で土器や人骨が出土したことから、埋葬面と判断した。土器や人骨は、初期の天井崩落土である31層によって埋没していた。さらにその上に天井崩落土である６～９・12・20・21層が厚く堆積している状況であった。

④遺物出土状況(第99図)

遺物は33層上面で出土した。須恵器高杯Ｂ(503)を除き玄室内から出土した。玄門では503が杯部を墓道に向けて横転して出土した。右袖付近では、須恵器長頸壺Ａ(505)と同台付瑤(504)が、それぞれ口縁部を玄門に向けて横転して出土した。504の台部は、外れて長頸壺の脚部の近くで出土した。



第97図　41号横穴平面・立面図



第98図　41号横穴土層断面図

41 号横穴土層断面図土色

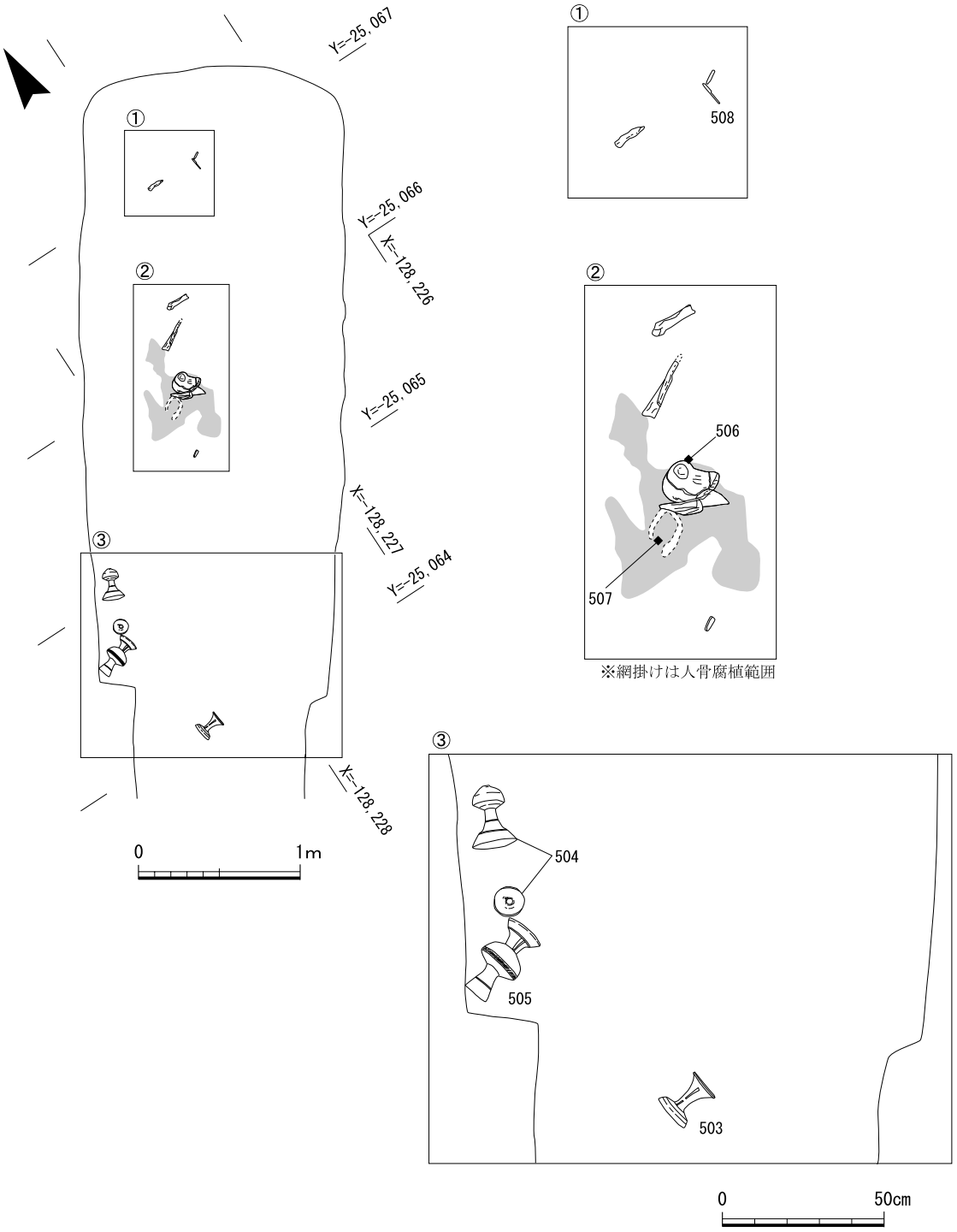
1．明褐色(7.5YR5/6)粘質土(細砂～粗砂、径２cm前後の礫(少量)を含む)
2．明黄褐色(10YR6/6)粘質土・浅黄橙色(10YR8/3)砂質土(砂質土-粗砂、径１～５cmの礫を含む)
3．灰白色(10YR8/2)粗砂(灰白色はブロック状に混じる、径２～４cmの礫が少し混じる)
4．黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂～粗砂径２cm前後の礫を多く含む)
5．黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂～粗砂を含む、径２cm前後の礫を少し含む)
6．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(径１～２cm程度の小礫を多く含む、まれに３～５cm礫を含む)
7．黄褐色(10YR5/8)粘質土(細砂を含む)
8．明褐色(7.5YR5/8)粘質土
9．黄色(2.5Y8/6)砂質土(粗砂・径１～３cm大の礫を含む)
10. 黄橙色(10YR7/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
11. 暗褐色(10YR3/3)砂質土(細砂～粗砂、径２～４cmの礫をやや多く含む)
12. 明黄褐色(2.5YR7/6)砂質土(粗砂径１～５cmの礫をやや多く含む、まれに径10cm程度の礫も含む)
13. 褐色(10YR4/4)粘質土(粗砂、径１～２cmの小礫少し含む)
14. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径１～４cmの礫をやや多く含む)
15. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を少し含む)
16. 黄褐色(2.5YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫をやや多く含む)
17. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫を含む)
18. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫をやや多く含む)
19. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を少し含む)
20. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm未満の小礫を少し含む)
21. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む、まれに10cm程度の礫を含む)
22. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫をやや多く含む)
23. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む、径２～３cmの礫を少し含む)
24. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫をかなり多く含む)
25. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～４cmの礫をやや多く含む)
26. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
27. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂を多く含む、径１～２cmの小礫を少し含む)
28. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
29. 黄褐色(10YR5/8)礫層(径１～４cmの礫を非常に多く含む)
30. 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土(粗砂、径２～５cmの礫を多く含む)
31. にぶい黄色(2.5Y6/4)粗砂層(径１～２cm程度の小礫を少し含む)
32. 明黄褐色(10YR7/6)粗砂(径１cm程度の小礫をごく少量含む)
33. 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む、まれに径４～５cmの礫を含む)
34. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む)
35. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂を多く含む)
36. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂)
37. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を多く含む)
38. 橙色(7.5YR6/8)砂質土(粗砂を多く含む)
39. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂を少し含む)
40. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂を少し含む)
41. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(細砂～粗砂、径１cm程の小礫を含む)
42. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂～粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
43. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂を少し含む)
44. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
45. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を多く含む)
46. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を多く含む)
47. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂～粗砂、径１cm程度の小礫を少し含む)
48. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土(細砂～粗を少し含む)
49. 褐色(10YR4/6)粘質土(粗砂～細砂を含む、径１cm程の小礫を含む)
50. 黄褐色(10YR7/6)粘質土(細砂～粗砂少し含む)
51. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂を含む)
52. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む)
53. 明黄褐色(10YR6/8)よりやや暗めの砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む)
54. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む)
55. 橙色(7.5YR6/8)粘質土
56. 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粗砂、径１cm程度の小礫を少し含む、根が多い)
57. 橙色(7.5YR6/8)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を非常に多く含む)
58. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂を多く含む)
59. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂)
60. 黄褐色(10YR5/6)粘質土
61. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～粗砂を多く含む)
62. 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(粗砂、１cm未満の小礫を含む)
63. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
64. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を少し含む)
65. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂)
66. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を多く含む)
67. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
68. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
69. 淡黄色(2.5Y8/4)砂質土(粗砂をかなり多く含む)
70. 浅黄色(2.5YR7/4)粗砂(径１cm程度の小礫をまれに含む)

また、玄室の中央から奥壁にかけて人骨が出土しており、玄室中央で頭蓋骨を、その北側で長管骨と骨種不明の骨片を確認した。頭蓋骨付近では耳環２点(506・507)が、また、奥壁に近いところで骨種不明の骨とともに鉄製品(508)が出土した。（山﨑美輪）

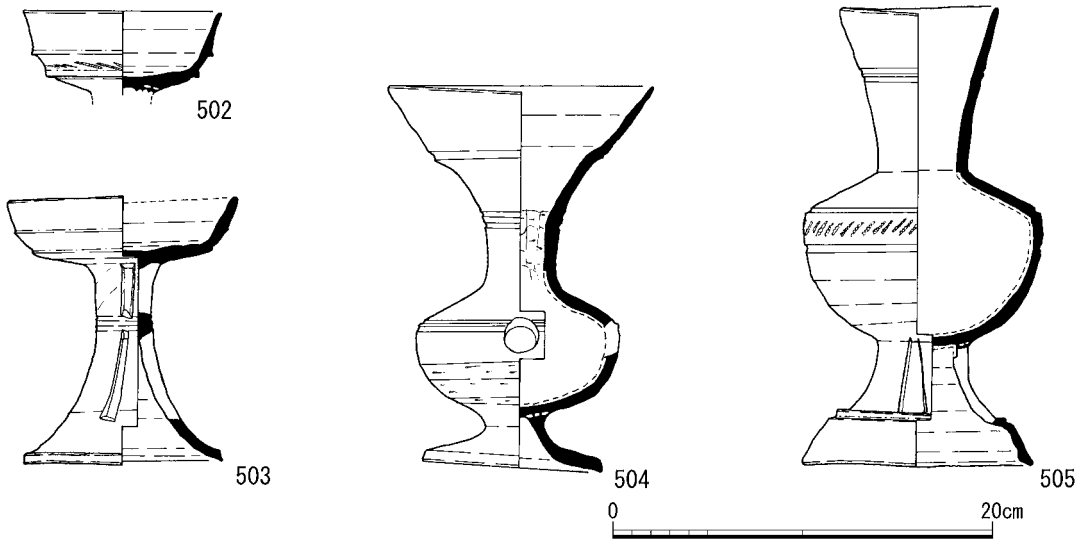
⑤出土遺物（第100図503～第101図508）

41号横穴から出土した遺物は土器・耳環のほか、鉄製品がある。土器の内訳は須恵器３点のみである。

須恵器には、高杯Ｂ１点(503)、台付瑞１点(504)、長頸壺Ａ１点(505)がある。503は脚柱部にスカシを穿つＢａである。40号横穴出土の高杯Ｂに比べ、杯部の稜が緩く刺突文も認められない。全体に厚く灰が付着する。胎土は砂粒を多く含む。504は踏ん張って「ハ」字状に開く台を有する。土師質に焼成されているが、製作技法は須恵器と同じである。須恵器の生焼けであろうか。体部



第99図　41号横穴遺物出土状況図

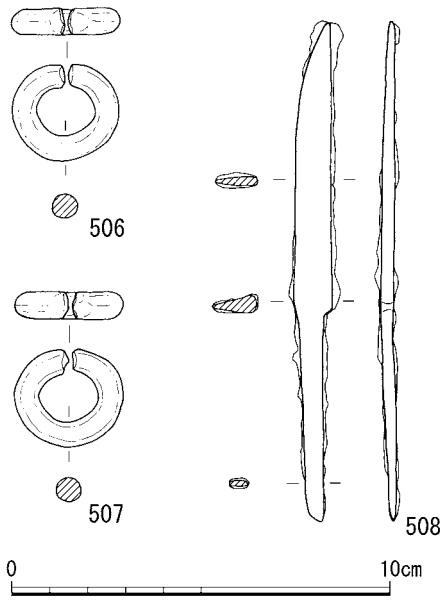


第100図　40号横穴・41号横穴出土土器実測図

中位に直径1.8cmの穿孔が１つある。胎土はⅣ群と推定しているものの、土師器とすればＣ群に近い特徴を持つ。505はスカシを穿った脚台部をもつＡａである。口頸部と体部の最大径付近に沈線を２条施し、その間に刺突文を施す。肩部には厚く灰が付着する。胎土には少量の黒色粒を含む。

耳環は２点（506・507）出土した。ほぼ同形同大のもので、幅2.8cm前後、天地2.5cm前後、重量17g前後である。耳環の断面はいずれも円形である。どちらも金環である。いずれも銅芯に鍍金あるいは箔貼するものである。

鉄製品は１点（508）である。508は刀子と推定され、全体に錆化が進むものの、完存すると考えられる。刃の背の側に関があり、刃部側は斜め関である。



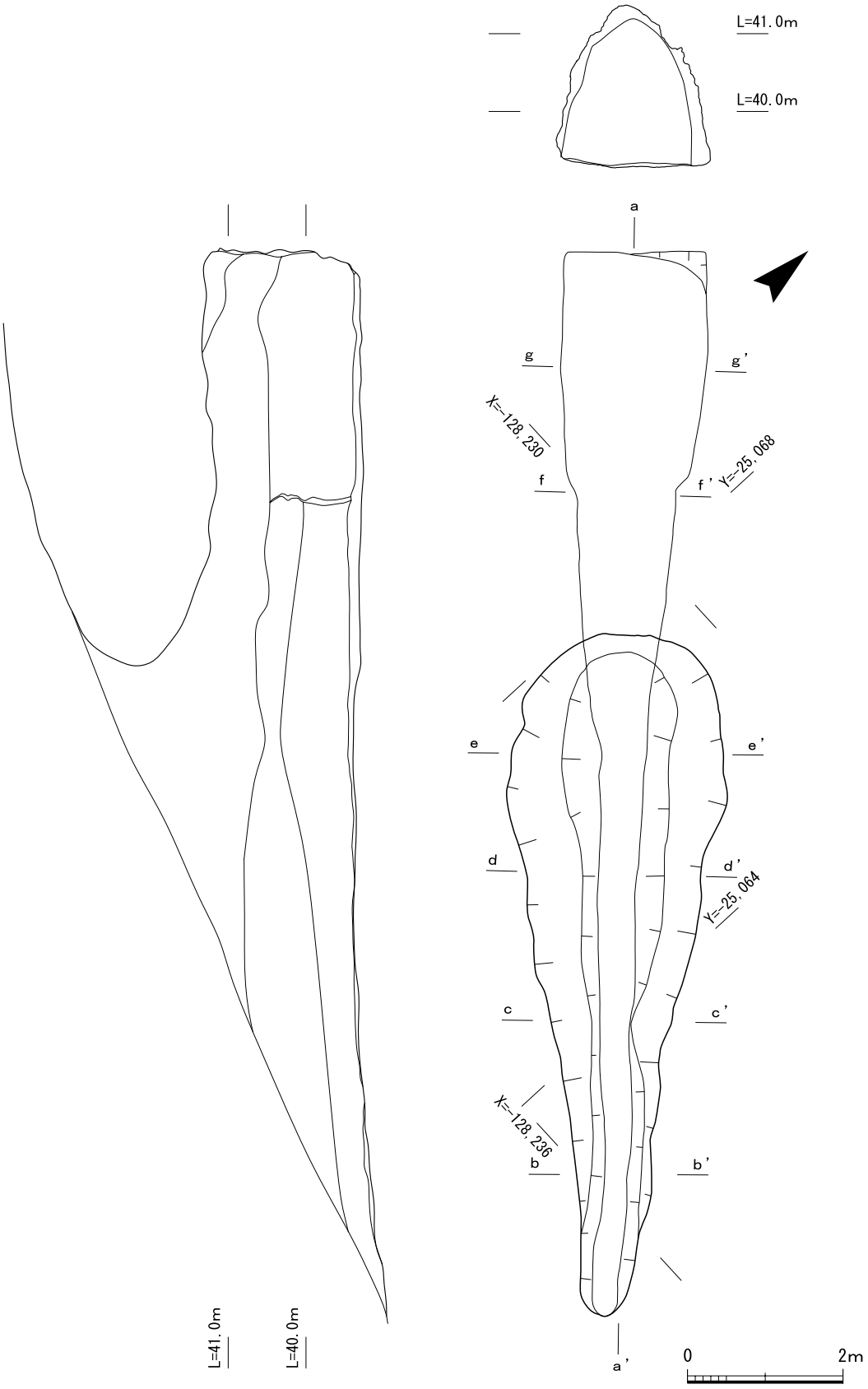
第101図　41号横穴出土耳環・鉄器実測図

（筒井崇史）

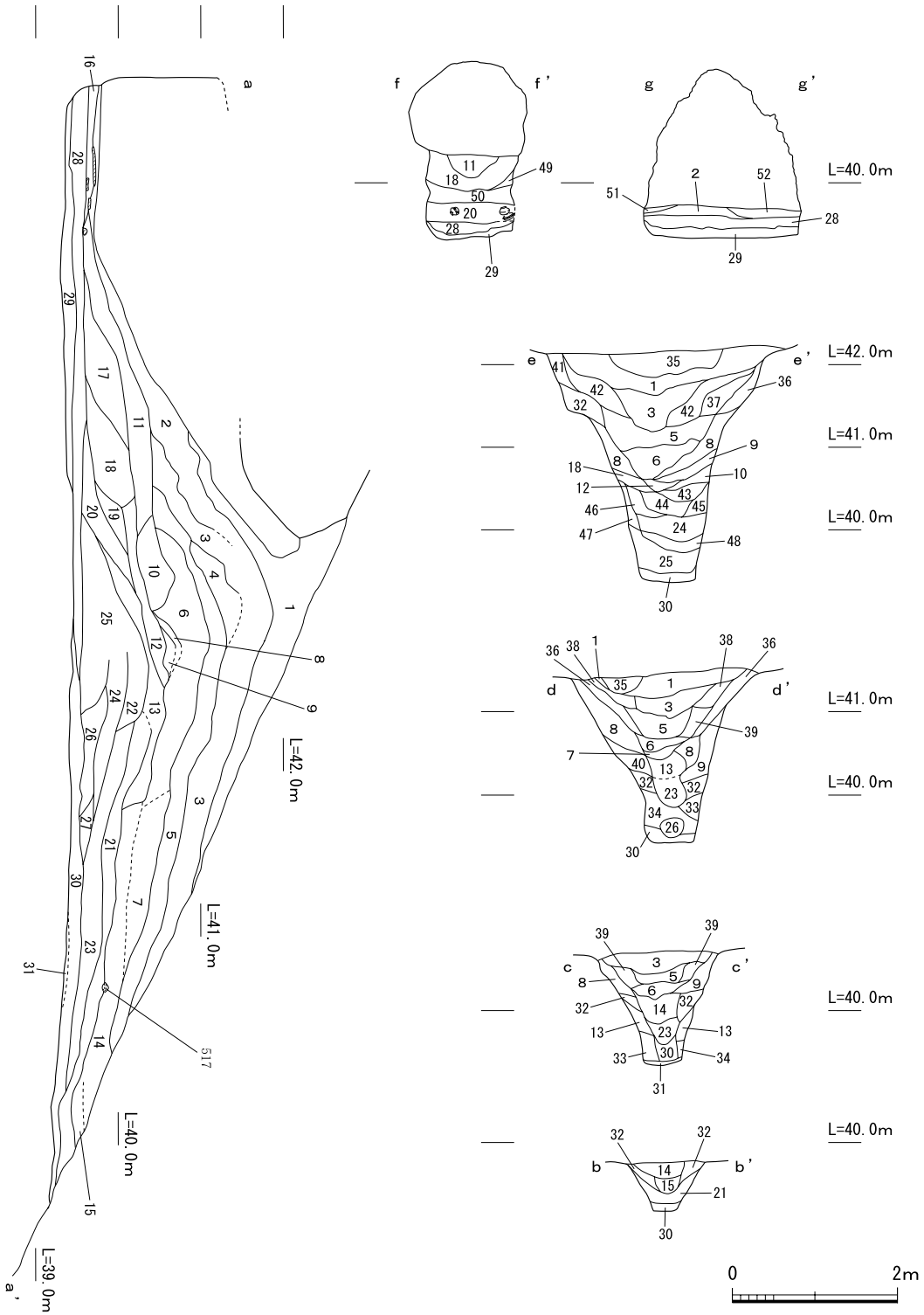
（19）42号横穴（ＳＸ14）

①立地・調査時の状況

41号横穴の南東に隣接して検出した。今回調査した中でも大型の横穴である。全長は13.6mを測る。42号横穴も天井が良好に残存しており、墓道の調査が完了した後に重機で天井を除去し、羨道・玄室内の調査を行った。隣接する41号横穴とは墓道底部で1.1～1.4m、玄室の床面で0.4mの比高があり、42号横穴が高く造られている。主軸はＮ－45°－Ｗをとる。隣接する41号横穴と主軸を揃えており、２基で小群を構成していると判断した。



第102図　42号横穴平面・立面図



第103図　42号横穴土層断面図

42号横穴土層断面図土色

1. 黄褐色(10YR5/8)粘質土(細砂～粗砂、径２～３cmの礫を少し含む)
2. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径２～３cm程の礫を少し含む)
3. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂、径２～８cm礫を多く含む)
4. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土(粗砂、径１～３cmの小礫を含む)
5. 褐色(10YR4/4)粘質土(粗砂、径１～３cm小礫を含む)
6. 褐色(10YR4/6)粘質土(径２～５cmの礫を含む)
7. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの礫を多数含む)
8. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を多く含む)
9. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
10. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径３～５cm程の礫を含む)
11. 明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土(粗砂、径１～３cm程度の礫をやや多く含む)
12. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～４cmの礫を多く含む)
13. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～４cmの礫を含む)
14. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫を非常に多く含む)
15. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂)
16. 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を含む)
17. 明黄褐色(10YR7/6)粗砂(径１～３cm礫をやや多く含む、まれに径５～８cmの礫を含む)
18. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１～３cm程度の礫を多く含む)
19. 明褐色(7.5YR5/6)粘質土(粗砂、径１～３cm程度の礫を少し含む)
20. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～２cm程度の小礫をやや多く含む)
21. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を少し含む)
22. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径１～２cm小礫を含む)
23. 褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫を非常に多く含む)
24. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫をやや多く含む)
25. 黄褐色(10YR5/8)粘質土(粗砂、径１～３cm程度の礫をやや多く含む)
26. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫を含む)
27. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～５cmの礫を含む)
28. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を少し含む)
29. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含むまれに径５cmの礫を含む)
30. オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土(細砂を多く含む、径１cm程度の小礫を少し含む)
31. 黄褐色(2.5Y5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
32. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～４cm程の礫を多く含む)
33. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫を含む)
34. 明黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm以下の小礫をやや多く含む)
35. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径～２cmの小礫、根も多く含む)
36. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を少し含む)
37. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの小礫を少し含む)
38. 黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂)
39. 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径１cmの小礫を含む)
40. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm以下の小礫を含む)
41. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を多く含む)
41. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫を含む)
42. 褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～粗砂を含む)
43. 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を少し含む)
44. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫も多数含む、径４～５cmの礫も含む)
45. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫を少し含む)
46. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～２cm程度の小礫を少し含む)
47. 褐色(10YR4/6)砂質土(細砂～粗砂を含む)
48. 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫をやや多く含む)
49. 明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
50. 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土(粗砂を多く含み、径４c～８cm程の礫も混じる)
51. 黄褐色(10YR5/6)粘質土(細砂を多く含む)
52. 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～２cm程度の小礫を含む)

②規模・構造(第102図)

ａ)墓道・羨道

墓道・羨道の全長10.5m、墓道幅0.3～1.2m、床面の標高38.2～38.4mを測る。墓道の横断面の形状は、上部が大きく広がる逆台形を呈している。墓道の上部幅は最大で2.4m、底の幅は最大でも0.3mと他の横穴と比べても墓道の幅がかなり狭い。墓道先端から10.4mの地点で奥壁側の両側壁を削り出して袖を造っており、ここを玄門と判断した。また、墓道先端より7.2m付近で墓道底部が奥壁に向かって序々に広がっていることから、この地点を羨門と判断した。羨門から玄門までが羨道となる。羨道の規模は、全長3.3m、最大幅1.2m、最小幅0.8mである。

ｂ)玄室

先述したように、袖を削り出している地点を玄門と判断し、ここから奥壁までを玄室と捉えた。

玄室の平面形は長方形を呈し、玄室長3.1m、奥壁幅1.9m、玄門幅0.6m、玄室最大幅1.9m、玄室床面の標高39.3～39.4mを測る。また、玄門にあたる部分には左右に地山を削り出して袖が造られている。左袖のほうがより深くしっかり削り出されている。埋葬面の直上まで天井崩落土や流入土が堆積していた。奥壁は床面から垂直に立ち上がり、奥壁上部の形状から天井の断面形は三角形である。奥壁での天井高は1.85mを測る。

③土層堆積状況(第103図)

墓道内の１～10･12～15層、玄室内の11･17･18層は横穴使用停止後に堆積したものである。１･

３～５層は粘質土で流入土と判断した。２・７～14層は締りのない砂礫層であり、天井崩落土と判断した。玄門付近で22・24～27層がマウンド状の高まりになっており、閉塞土と判断した。墓道は30層で整地されている。玄室内は28・29層で整地され、埋葬面が形成されている。埋葬面で土器や人骨が出土した。土器や人骨の上には天井崩落土である２・11・17層が堆積している状況であった。

④遺物出土状況（第104図）

遺物は埋葬面である28層上面の玄室内および羨道部左側壁付近でまとまって出土した。玄室側から順に、須恵器杯Ａ（519）が逆位、0.4mほど墓道側で同蓋Ａ（510）が正位、すぐ隣接して同杯Ａ（515）・同杯Ａ（509）が正位で出土した。羨道の左側壁に沿って須恵器杯Ａ（521）・同短頸壺（526）・同杯Ａ（520）が重なるようにして出土した。やや離れて中央付近では、須恵器杯Ａ２点（522・523）、同台付椀（527）がそれぞれ正位で出土した。右側壁付近では、須恵器杯Ａ（516）、１mほど離れて同蓋Ａ（511）が逆位で出土した。玄室内では、奥壁から２mの付近で右側壁側に須恵器高杯Ｂ（525）が横転して出土したほか、同蓋Ａ（513）、同杯Ａ（524）が出土した。42号横穴では、玄室内での土器・人骨の出土はあるものの、土器は羨道での出土が圧倒的に多い。これらの土器は、左側壁に片寄っていたり、重なったりしている状況から、追葬時に乱雑に片付けられたものと考えられる。

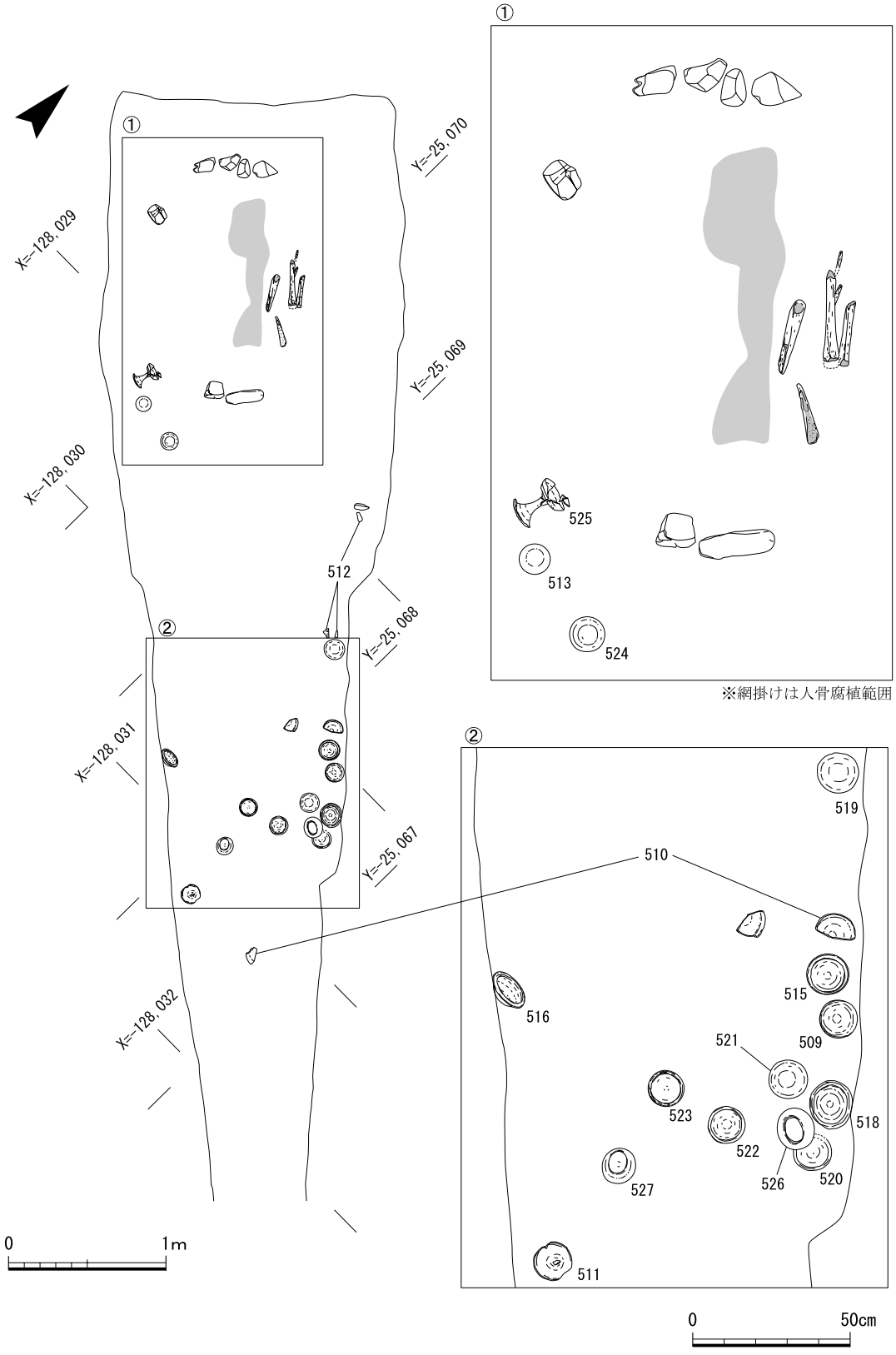
また、奥壁から1.1m、玄室のほぼ中央付近で人骨を検出した。遺存状態は非常に悪く、取り上げるのも困難な状態であった。わずかに遺存していた長管骨は主軸方向を揃えた状態で出土した。人骨は長さ１m、幅0.5mの範囲で出土し、その前後には1.5mの間隔を開けて石が配されていた。石は奥壁側で４点、玄門側で２点がそれぞれ横一列に平らな面を上に向けて並べられていた。標高は39.5mである。これらの石は人骨の出土位置から、遺体を運んだ時に使用した板材などを安置する台として使用されたと考えられる。人骨は、出土位置から左側壁に集められたものが初葬、腐植したものが追葬に伴うと考えられる。

墓道では、21層から須恵器杯Ａ（517）が出土した。これらの出土遺物には時期差が認められるが、埋葬面は１面のみであった。（山﨑美輪）

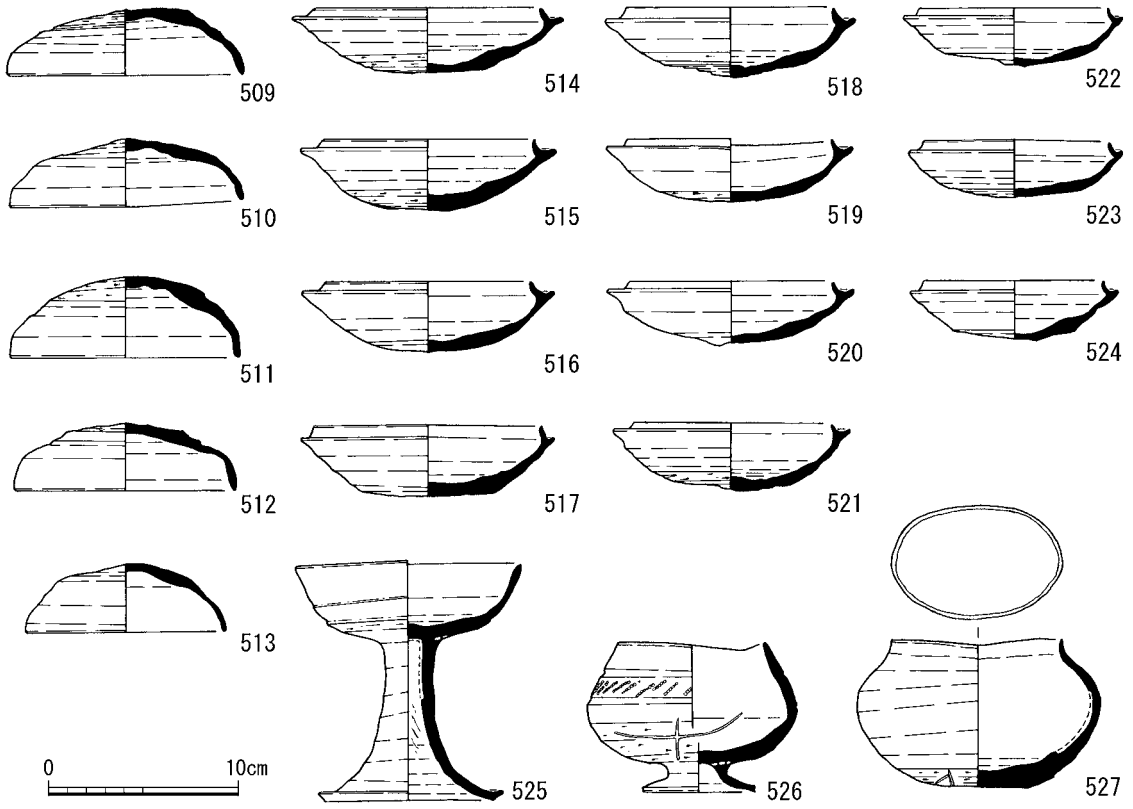
⑤出土遺物（第105図509～527）

42号横穴から出土した遺物は土器のみで、鉄製品等は出土しなかった。また、土器も須恵器が19点出土したのみで、土師器は出土しなかった。

須恵器は蓋Ａ５点（509～513）、杯Ａ11点（514～524）、高杯Ｂ１点（525）、短頸壺１点（526）、台付椀１点（527）である。蓋Ａは、口径12cm前後のもの（509～512）と口径10.5cm程度のもの（513）に分けられる。また、頂部に回転ヘラケズリが施されるＡａ（509・511）と、頂部がヘラキリ後不調整もしくはナデを施すＡｂ（510・512・513）に分けられる。胎土は509が黒色粒を少量含み、510・512が断面赤灰色を呈する。513の胎土・色調・焼成が杯Ａｂの524と非常に類似する。杯Ａは頂部外面に回転ヘラケズリを施すＡａ（514・515・519）と頂部外面がヘラキリ後不調整やナデのＡｂ（516～518・520～524）がある。杯Ａｂのうち520・521は部分的に回転ヘラケズリが施され



第104図　42号横穴遺物出土状況図



第105図　42号横穴出土土器実測図

ているようである。胎土はⅣ群が多く(514・516・518・521～524)、Ⅰ群(519・520)とⅢ群(515・517)が２点ずつある。このうち、514は全体にやや砂っぽい。また、516は胎土が砂っぽく、やや粒径の大きい長石を含む。525は脚柱部にスカシが認められないＢｂで、沈線も施さない。また、杯部に刺突文も施していない。526は台付椀である。高さ1.5cmほどの「ハ」字形を呈する台を有する。体部上半に沈線を２条巡らせ、その間に刺突文を施す。527は口縁部が大きく歪んでおり、口縁の平面形は楕円形を呈する。上面観をみると、意図的に口縁を扁平につぶしている可能性もある。底部外面にヘラ記号と思われる線刻がある。　（筒井崇史）

(20)43号横穴(ＳＸ15)

①立地・調査時の状況

42号横穴の南西側で検出した。全長は12.3mを測る。43号横穴は今回調査した19基の横穴で唯一、調査前から天井の大半が崩落しており、奥壁の一部が残存するのみであった。隣接する42号横穴との高低差は、墓道底部で1.5～2.4m、玄室埋葬面で1.1mを測り、43号横穴が低位に造られている。主軸はＮ－27°－Ｗをとる。

②規模・構造(第106図)

ａ)墓道・羨道

墓道・羨道の全長9.0m、墓道幅0.7～1.1mを測る。墓道の横断面の形状は、上方がやや広がる

逆台形を呈している。墓道底の幅は0.5～0.8m、墓道上部の幅は最大で2.0mを測る。墓道床面の標高は37.1～37.7mである。43号横穴は天井がほぼ完全に崩落しており、どこまで天井が存在していたか推測するのは難しいが、断面図ｄ－ｄ´の地点までは墓道の断面が逆台形を呈していることから､天井はなかったと推測できる。墓道端から8.8m付近でわずかに段差が設けられていた。遺物の出土も、この段差により一段高くなる地点から奥側に限定されること、閉塞土と思われるマウンド状の高まりがあることから、この地点が玄門であると判断した。

ｂ）玄室

玄室と墓道の境界にはわずかな段差が設けられており、床面が一段高くなる地点から奥壁までを玄室と捉えた。玄室の平面形は撥形を呈し、玄室長3.3m、奥壁幅2.9m、玄門幅1.5mを測る。床面の標高は38.1～38.3mである。遺物と人骨は29・78層上面で出土した。天井崩落後にその崩落土を乗り越えて、１回ないしは２回追葬したようである。

③**土層堆積状況**（第107図）

墓道内の２・11・14・15～17層、玄室内の２～10・12～17層は締りのない砂礫層であり、横穴使用停止後に天井が崩落し堆積した天井崩落土であると判断した。２～17層は縞状に堆積していることから、天井の崩落は数回に分けて起こったと推測できる。さらに、横断面ｆ－ｆ´では天井や側壁崩落に伴って締りのない砂礫層（63～77層）が断続的に堆積している。

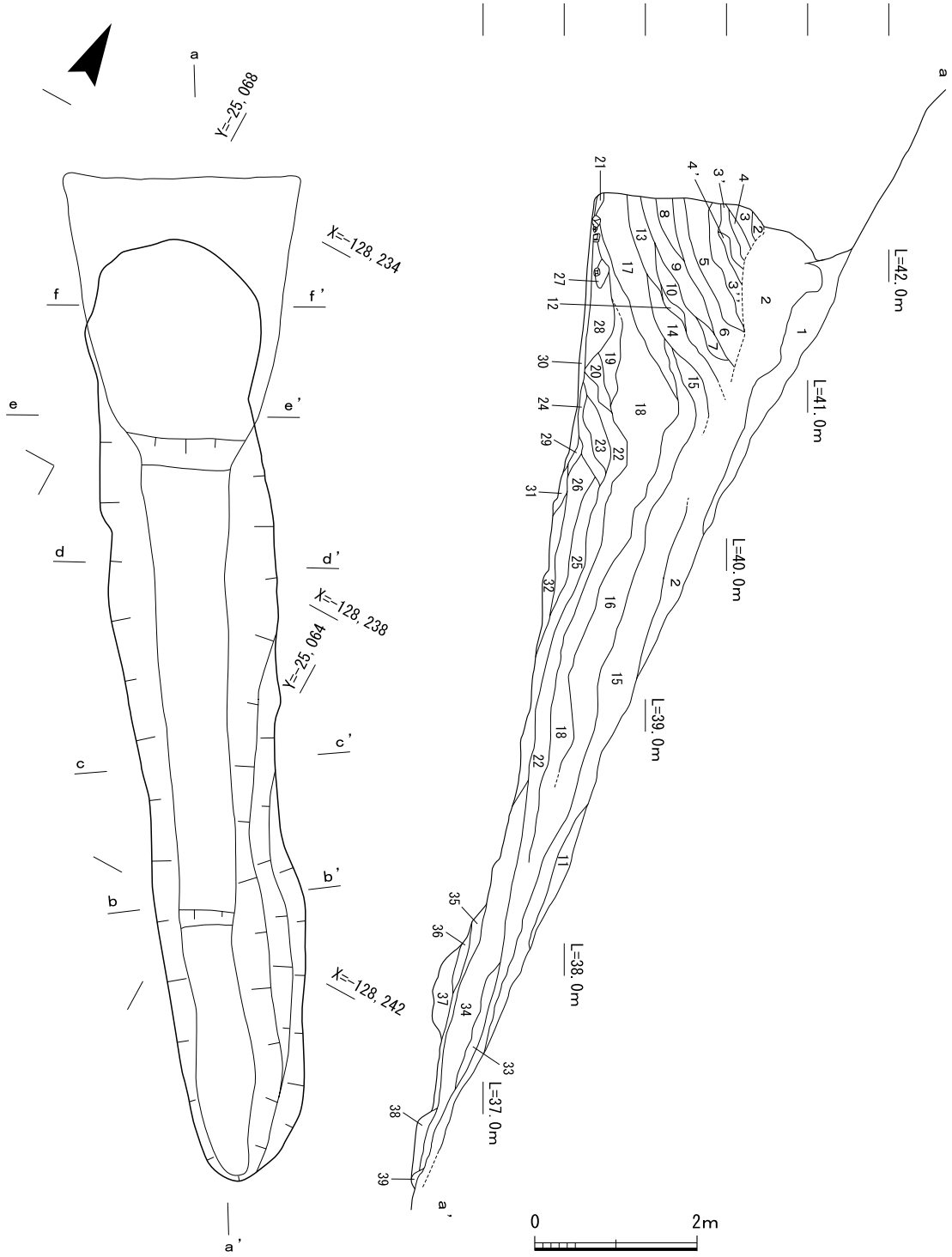
また、横断面ｅ－ｅ’にみられる18層は、最大の厚さが0.65mにも達することや土質等から、43号横穴の天井が大規模に崩落した際のものと考えられる。18層は玄室内のほか、墓道にも広く堆積しており（断面ｃ－ｃ’、ｄ－ｄ’）、天井崩落時の規模が大きかったものと推定される。玄室内は29層によって整地されており、その上面で土器や人骨が出土した。22～26層はマウンド状に堆積しており、閉塞土と判断した。玄門から墓道にかけては30・31層で整地されている。

初葬に伴う土器は閉塞土もしくは18～20・27層の天井崩落土によって埋まっていた。奥壁寄りで出土した追葬に伴うと思われる土器は、初葬時の閉塞土を撤去せずに乗り越えて副葬されたのではないかと考えられる。

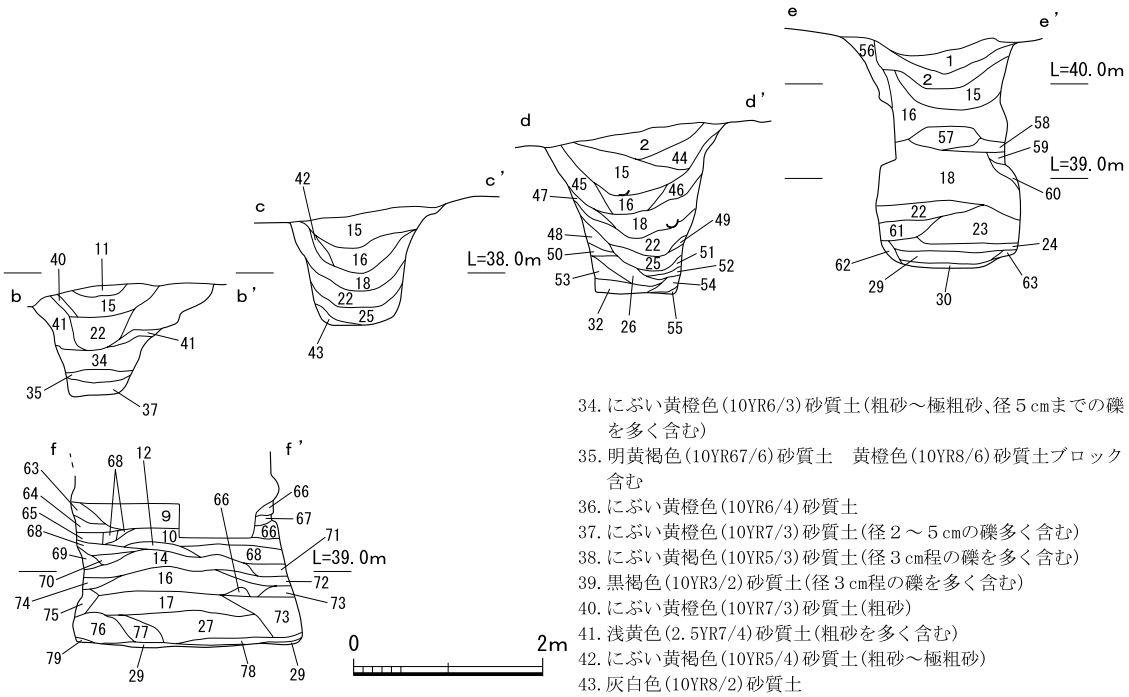
④**遺物出土状況**（第108図）

43号横穴ではほとんどの遺物が29層及び78層上面で出土した。

玄室内奥壁左側（78層上面）では、玄室奥に須恵器杯Ｃ（546）、すぐ南側に隣接して同蓋Ｃ（544）が正位で、この須恵器２点のすぐ東側で耳環２点（550・551）が出土した。その北側の玄室左側壁の最も奥壁寄りで人骨が出土した。玄室中央付近では須恵器蓋Ｃ（545）が逆位で出土した。一方、玄室奥で出土した土器群（544～546）は、奈良時代に初葬時の閉塞土を乗り越えて玄室に入り、追葬を行った際のものと考えられる。玄門（29層上面）では須恵器16点が横１列に並んで出土した。両端には長頸壺Ａ・Ｂが１点ずつあり（540・541）、その間に蓋Ａ２点（528・529）、高杯Ａ８点（530～537）、高杯Ｂ２点（538・539）、蓋Ｂ（542）、杯Ｂ（543）が横転あるいは、逆位で出土した。この玄門での出土状況から、土器は副葬された時の位置をほぼ保っていると考えられ、初葬時のものであろう。早い段階で天井の崩落が起こったのではないかと推測できる。この天井の崩落により

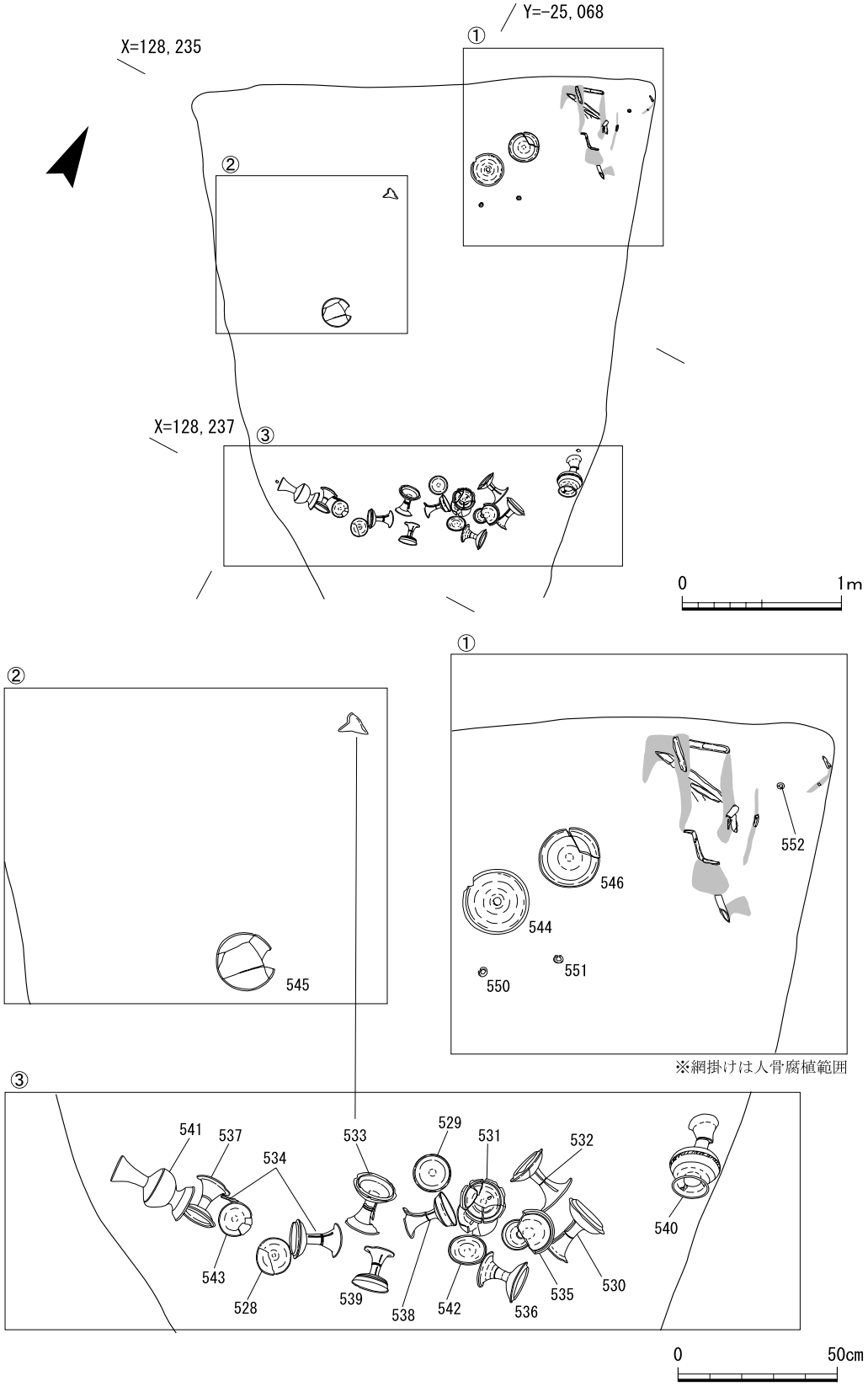


第106図　43号横穴平面図・土層断面図１



1．明黄褐色(10YR6/8)粘質土(細砂～粗砂、径２～３cmの礫を少量含む)
2．黄橙色(10YR7/8)粘質土(粗砂、径２～６cmの礫を多く含む)
3・3'・3''．黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
4・4'．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
5．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(やや粘性あり、粗砂を含む)
6．にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
7．黄褐色(10YR5/6)粘質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
8．にぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫(径１～５cmの礫多く含む)
9．淡黄色(2.5Y8/4)砂質土(粗砂、径0.5～10cmの礫を非常に多く含む)
10．黄褐色(10YR5/0)粘質土(径２cm前後の小礫を少し含む)
11．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂を含む)
12．黄褐色(10YR5/6)砂質土(径２～５cmの礫を含む)
13．浅黄色(2.5Y7/3)砂質土(粗砂、径0.5～10cmの礫を含む)
14．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂、径１～２cmの小礫を含む)
15．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂、径２～６cmの礫を含む)
16．黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～４cmの礫を多く含む)
17．明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土(粗砂、径0.5～５cmの礫を多く含む)
18．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を多く含む)
19．橙色(7.5YR6/8)砂質土(粗砂～極粗砂、径１～３cm程の小礫や礫をやや多く含む)
20．明赤褐色(5YR5/6)砂質土(細砂～粗砂、径２cm程の礫を含む)に褐灰(10YR5/1)の粘土ブロック混じる
21．黄褐色(10YR5/8)砂質土(細砂～粗砂)
22．黄褐色(10YR5/3)砂質土(粗砂、径１cm前後の小礫を含む)
23．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径0.5～３cmの礫を含む)
24．にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(粗砂、径0.5～３cmの礫を多く含む)
25．にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土
26．にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土(極粗砂、径３cm程の礫を非常の多く含む)
27．オリーブ黄(5Y6/4)粘質土(細砂を含む)
28．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径１cm程の小礫や径５cm程の礫を多く含む)
29．にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土(極粗砂、径0.5～５cmの礫を多く含む)
30．明褐色(7.5YR5/6)砂質土(粗砂を含む)
31．灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(粗砂)
32．にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土(粗砂～極粗砂、径３cm程の礫を多く含む)
33．灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(粗砂、径１～５cmの礫を多く含む)
34．にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土(粗砂～極粗砂、径５cmまでの礫を多く含む)
35．明黄褐色(10YR67/6)砂質土　黄橙色(10YR8/6)砂質土ブロック含む
36．にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
37．にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土(径２～５cmの礫多く含む)
38．にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(径３cm程の礫を多く含む)
39．黒褐色(10YR3/2)砂質土(径３cm程の礫を多く含む)
40．にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土(粗砂)
41．浅黄色(2.5YR7/4)砂質土(粗砂を多く含む)
42．にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粗砂～極粗砂)
43．灰白色(10YR8/2)砂質土
44．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を少し含む)
45．褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂、径１cm程度の小礫を少し含む)
46．黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂、径１～３cmの礫を含む)
47．黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂を含む)
48．明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土
49．黄色(2.5Y8/4)砂礫土(径１～２cm)
50．灰白色(10YR8/2)粘質土に明黄褐色(2.5YR7/6)粘質土が混じる
51．淡黄色(2.5Y8/3)砂質土
52．橙色(7.5YR6/8)砂質土(粗砂～極粗砂)
53．にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土(粗砂～極粗砂)
54．にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土(粗砂)
55．橙色(7.5YR6/8)砂質土
56．明黄褐色(10YR6/8)砂質土(粗砂、径１～４cmの礫を多く含む)
57．黄褐色(10YR5/6)砂質土に浅黄橙色(10YR8/4)の地山ブロック(天井の崩落土)が混じる(粗砂、径１～３cmの礫を含む)
58．黄褐色(10YR5/6)砂質土(粗砂)
59．淡黄色(2.5Y8/4)砂質土(粗砂)
60．灰黄色(2.5Y7/2)砂質土
61．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(粗砂～極粗砂、径0.5cmの礫を多く含む)
62．にぶい黄橙色(10YR7/2)粘質土
63．褐色(10YR4/6)砂質土(極粗砂)
64．灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(粗砂)
65．浅黄色(2.5YR7/3)砂質土(粗砂、径３～５cmの礫を多く含む)
66．淡黄色(2.5Y8/4)砂質土(粗砂)
67．淡黄色(5Y8/3)砂質土(中砂～粗砂)
68．にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土
69．浅黄色(2.5YR7/3)砂質土(粗砂、径１～８cmの礫を多く含む)
70．灰白色(5Y8/1)砂質土(細砂)
71．淡黄色(5Y8/3)砂質土(粗砂、径２cm程の礫を含む)
72．黄褐色(10YR5/8)砂質土(粗砂、径２cm程の礫を含む)
73．灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(粗砂～極粗砂、径２cm程の礫を多く含む)
74．黄橙色(10YR7/8)砂質土(径１～５cm程の礫を多く含む)
75．灰白色(5Y8/1)砂質土(細砂)
76．明緑灰色(10GY8/1)砂質土(極粗砂、径３cm大の礫を多く含む)
77．明黄褐色(10YR7/6)砂質土(細砂～粗砂)
78．明褐色(7.5YR5/8)砂質土(粗砂、径１cm程の小礫を含む)
79．黄褐色(10YR5/6)砂質土(細砂～粗砂、少し粘り気あり、径３cm程の礫をわずかに含む)
80．褐色(10YR4/6)砂質土(粗砂)

第107図　43号横穴土層断面図２



第108図　43号横穴遺物出土状況図

土器は横転したり、大きく破損したりしたと考えられる。

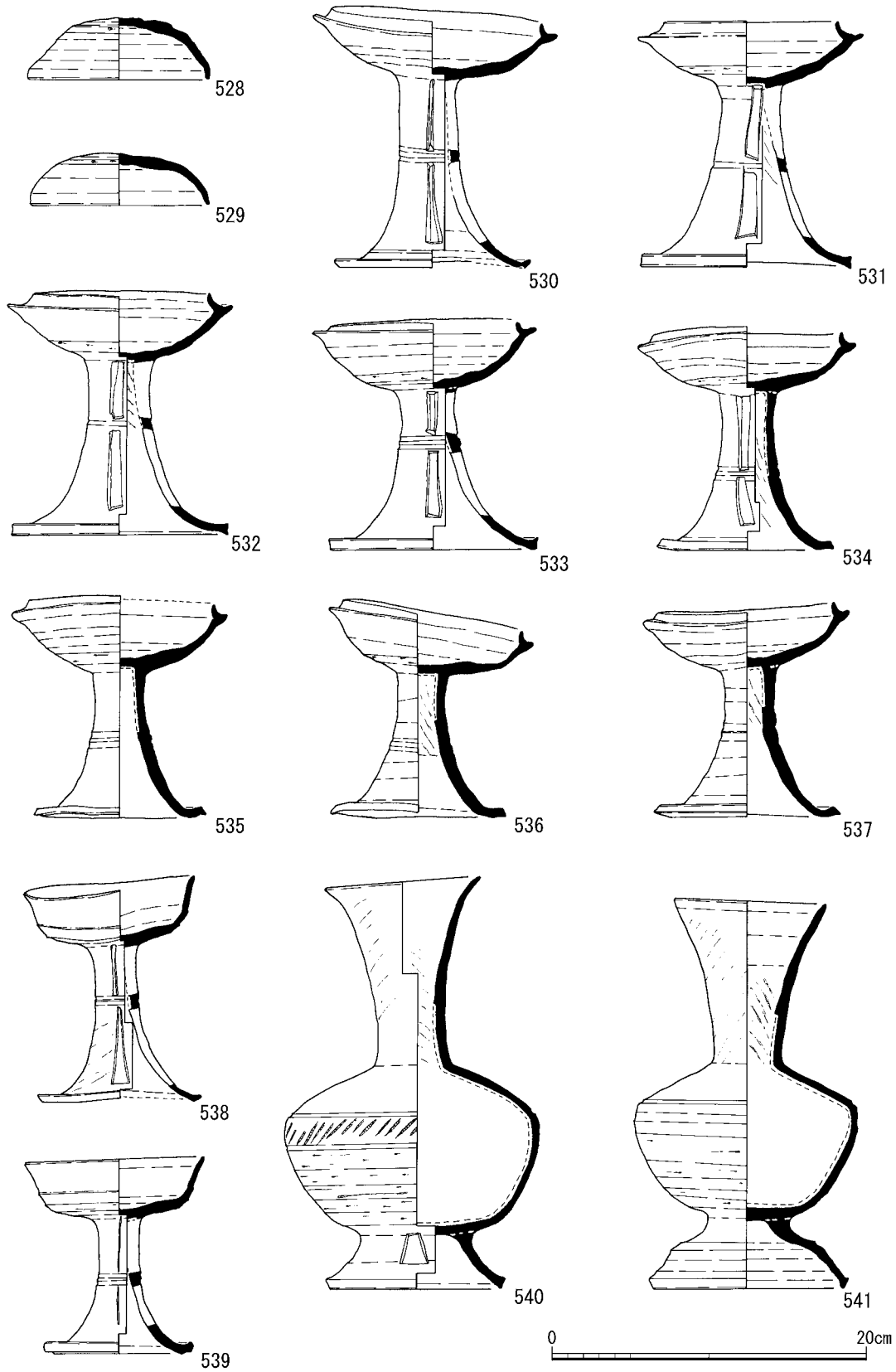
43号横穴では玄室内左側壁の奥壁寄り(78層上面)で１体の人骨を検出した。ほとんどの骨は遺存状態が悪く、骨種などを特定するには至らなかったが、その特徴から成人でもあまり年を取っていないと考えられる。また、出土した人骨はすべて解剖学的な位置関係を留めておらず、確認できた長管骨は主軸方向などを揃えることなく集められていた。これらの人骨の北側に近接して耳環(552)が出土した。また、南西に近接して出土した耳環２点(550・551)は、その間が25cmを測り、耳環を装着した状態で骨化した可能性が指摘できるが、その間に人骨は認められなかった。これらの人骨と耳環については、初葬と追葬のいずれに伴うものか不明である。

墓道では、14層から土師器杯Ａ(549)、15層上面で土師器杯Ｃ(548)、21層上面で土師器蓋Ｂ(547)が出土した。（山﨑美輪）

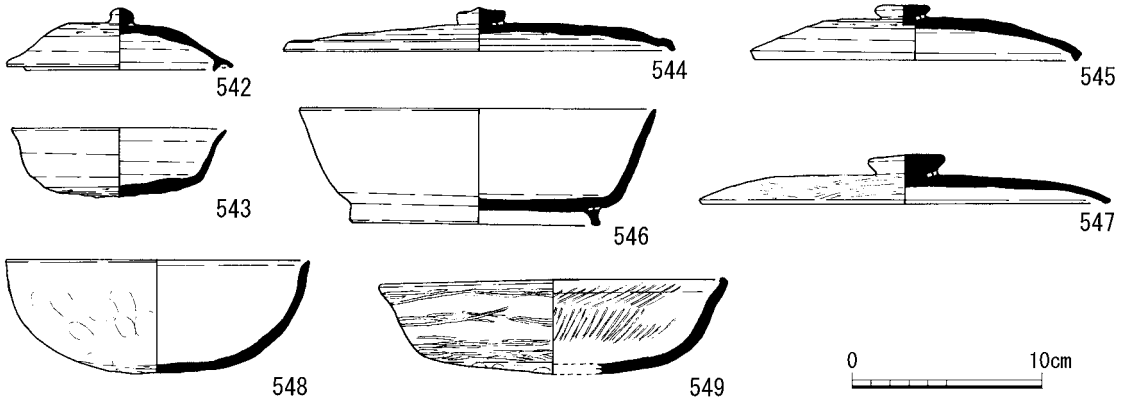
⑤出土遺物(第109図528～第111図552)

43号横穴から出土した遺物には土器のほか、耳環がある。土器の内訳は須恵器19点、土師器３点である。ただし、先に述べたように、土師器３点は玄室や墓道の床面から１ｍ以上上層で出土しており、確実に43号横穴に伴うとは断定できない。

須恵器には、蓋Ａ２点(528・529)、高杯Ａ８点(530～537)、高杯Ｂ２点(538・539)、長頸壺Ｂ１点(540)、長頸壺Ａ１点(541)、蓋Ｂ１点(542)、杯Ｂ１点(543)、蓋Ｃ(544・545)、杯Ｃ(546)１点がある。蓋Ａは、いずれも口径11.5cm前後で、頂部外面はヘラキリ後不調整のＡｂである。胎土は528が黒色粒を少し含み、529がやや砂っぽい。高杯Ａは、脚柱部にスカシを持つＡａ(530～534)とスカシを持たないＡｂ(535～537)とに分けられる。口径は前者が13～14.5cm、後者が12～13cmで、器高は前者が14.2～16.5cm、後者が13.6～14.1cmで、Ａｂの方がＡａよりも口径・器高とも縮小する。胎土は531と532が非常に類似するものの、ほかの高杯はそれほど類似性がみられない。531と532は胎土に石英や長石、チャートを含み、やや砂っぽく、胎土・色調・焼成は非常に類似する。530は胎土にあまり砂粒を含まない。533や534は微細な砂粒を多く含む。536はそれほど砂っぽくない。537は砂粒をやや多く含む。高杯Ｂのうち538は焼け歪みが著しいが、２点とも、口径11cm前後、器高12.5～14cmとほぼ同法量で、杯部外面に稜線が認められるものの、刺突文は確認できない。ただし、スカシは538は長方形であるのに対して、539はヘラで切り込みのみを入れたような状態である。540は高めの高台状を呈することから長頸壺Ｂに分類した。「ハ」字状に開く高台部分に台形状のスカシを２個施す。体部中位には沈線を２条施し、間に刺突文を施す。体部下半にはヘラケズリを施す。胎土は微細な砂粒や黒色粒をやや多く含む。541はスカシを有さない脚台を持つ。また、体部中位には沈線を１条施すのみで、刺突文等はみられない。装飾性を著しく欠いた長頸壺である。胎土は微細な砂粒や黒色粒をわずかに含む程度で、非常に精良である。542と543は胎土や焼成・色調が類似することからセットとなる可能性が高い。542はかえりの先端が口縁部の先端よりも下方に突出する。543は底部外面に回転ヘラケズリを施しており、杯Ｂａでも古相の特徴である。544はやや扁平で口縁端部が屈曲する蓋Ｃである。545は笠形の器形を呈するもので、544とは若干器形が異なる。546は口縁部が直線的に外上方に延びる



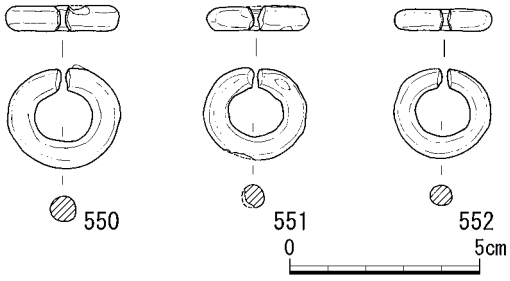
第109図　43号横穴出土土器実測図１



第110図　43号横穴出土土器実測図２

杯Ｃで、胎土をみると、544とセットの可能性が高いが、焼成・色調が若干異なる。

土師器には、蓋Ｂ（547）１点、杯Ｃ（548）１点、杯Ａ（549）がある。547は内外面の摩滅が著しいが外面にミガキを施しているようである。胎土は赤色粒を含む。548は全体に摩滅が著しく、調整や暗文の有無については不明である。胎土は微細な砂粒を多く含み、Ｃ群に近いが色調がやや赤っぽい。549の内面は摩滅気味であるが、２段放射暗文が確認できる。しかし、底部内面の螺旋暗文の有無については摩滅や欠損のため不明である。外面にはミガキを施す。胎土に微細な砂粒を含む。



第111図　43号横穴出土耳環実測図

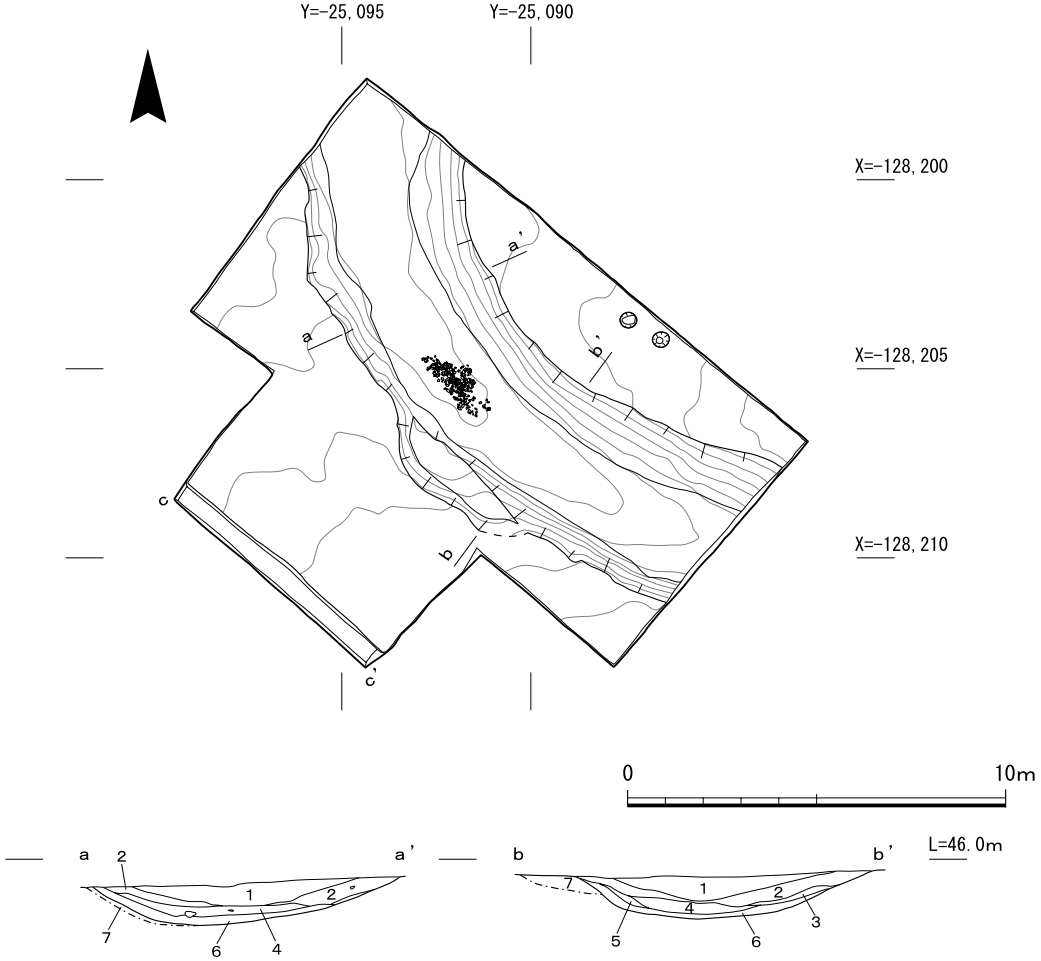
耳環は３点（550～552）出土した。それぞれの大きさには若干のばらつきがあるものの、幅2.5～2.9cm、天地2.4～2.6cm、重量10～17gである。耳環の断面はいずれも円形である。550・551は明らかに金環であるが、552は錆が認められるものの、部分的に金色を呈することから金環と思われる。いずれも銅芯に鍍金あるいは箔貼するものである。（筒井崇史）

(21)御毛通２号墳

①立地・調査時の状況

調査対象地は、横穴が構築された丘陵頂部の平坦面に位置する。高速道路の橋脚建設が予定されており、御毛通古墳群の範囲に含まれるため、発掘調査を実施した。竹の伐根を兼ねて竹林の表土及び造成盛土を重機により除去した後、調査区を設定し、人力により遺構精査を行った。

御毛通古墳群は、平成４年度に実施した調査により新たに確認された古墳群である(注16)。今回の検



第112図　御毛通２号墳平面・土層断面図



第113図　埴輪出土状況図

出地点から南西に約800m離れた地点において埋没古墳として確認されたのが１号墳である。１号墳は一辺21.5mを測る方墳であったが、削平により埋葬施設および墳丘盛土は失われていた。周溝内から蓋形埴輪や円筒埴輪が出土した。今回の検出は、それに次ぐ成果である。

②検出遺構（第112・113図）

重機により除去した表土・造成盛土は0.3m程で、その下層さらに0.2m程で確認した明褐色砂質土と褐色砂質土が均質に混入した地山面が遺構検出面である。遺構検出を行った結果、北から南東方向へ緩やかに円弧を描き、調査区内を縦断していく溝を１を検出した。両端が調査区外へと延びていくため、橋脚施工により影響を受ける範囲内に限って拡張を行った。最終的な調査面積は140㎡である。検出した溝は、全長16.3mにわたっており、検出面で幅3.8～4.5mを測り、深さ0.3～0.7mが残存する。この溝は、弧状を呈することから円墳の周溝と考えられるが、墳丘はすでに削平を受けており、残存していない。墳丘基底部を基に墳丘規模を復元すると、直径22.0mとなり、今回の調査により全体の1/5程度を検出したこととなる。東側の周溝外縁には、長さおよそ１m、幅0.4m程を測る平坦面が削り出されていた。埋葬施設に関しては、今回の調査区外に位置すると想定されるが、復元される墳丘の中心付近には、既設の里道が付設されており、周辺より標高が低くなっていた。そのため、埋葬施設の存否を確認すべくその地点周辺で遺構精査を行ったが、広く地山面を確認したのみで、すでに削平を受け消失したものと判断された。また、墳丘上から直径0.4m程を測るピットを２基検出したが、遺物は出土せず、性格等は不明で

ある。

周溝の埋土は６層からなり、第４層の黒色シルト内から多数の埴輪片が出土した。埴輪は細片化していたが、出土範囲が限定されることから、墳丘上から転落し破損したと判断される。土器類は含まれず、家形埴輪、鶏形埴輪等の形象埴輪が出土している。築造時期は、埴輪の編年観から４世紀末～５世紀前葉に求められる。以上の調査成果から、この古墳は御毛通２号墳とされた。

（奈良康正）

③出土遺物（第114～117図）

出土した埴輪は全て形象埴輪で、円筒埴輪は１点も含まれない。その種類が判明するものは、家形埴輪３個体、鶏形埴輪１個体である。

a)家形埴輪

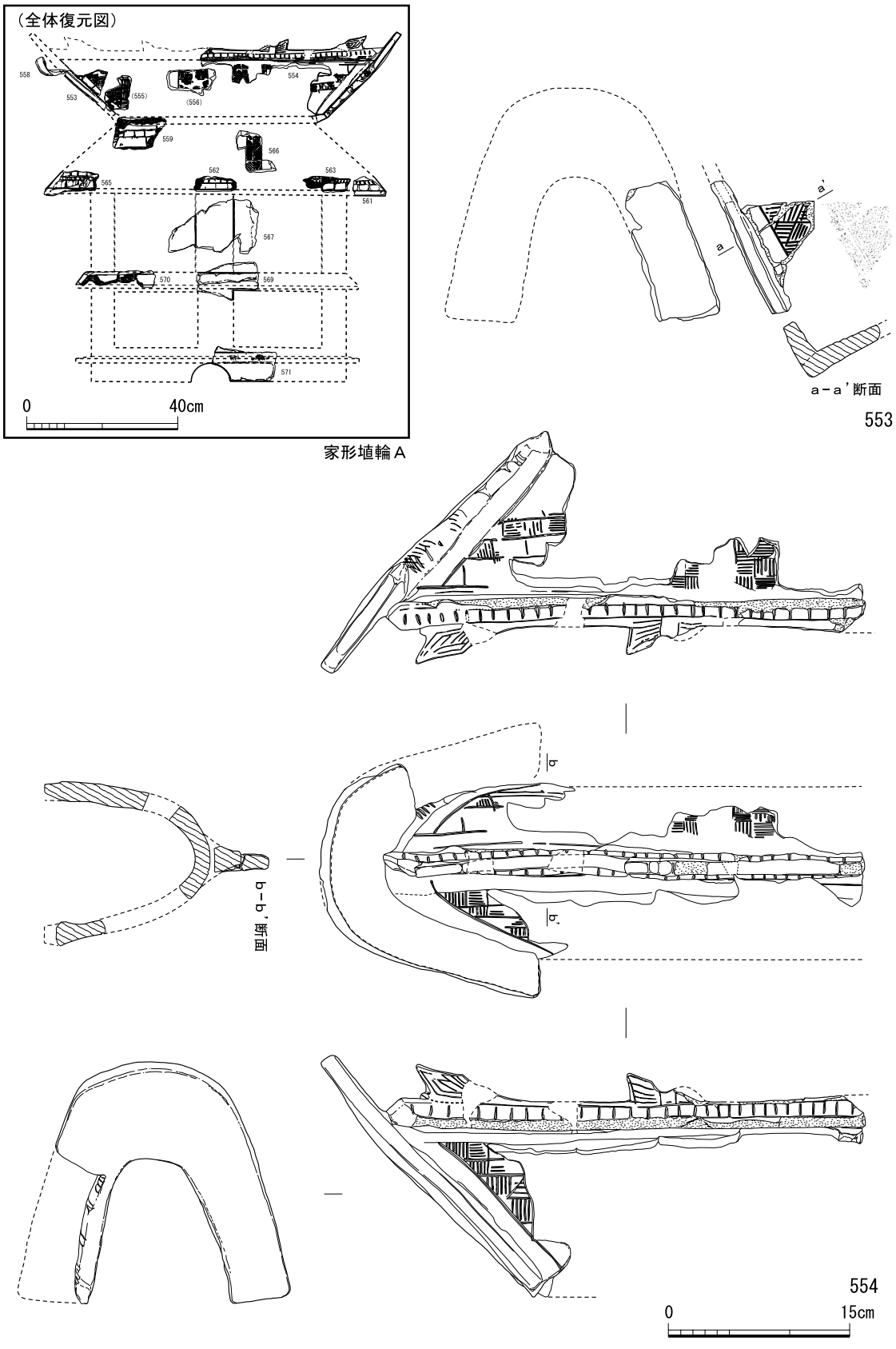
家形埴輪は、屋根の流れや大棟に鰭状の装飾や立体的な梯子状表現を表す高床構造のもの（以下これを家形埴輪Ａと称す）と、軸に窓を開けない閉塞的な空間を表現した平床型式のもの（家形埴輪Ｂ）、さらに、屋根の軒先を方頭状に肥厚させてアクセントを持たせたもの（家形埴輪C）の少なくとも３種類が確認できる。Ａ・Ｂの屋根型式はともに擬似入母屋に造っている。

家形埴輪Ａ（第114図553・554、第115図555～571）

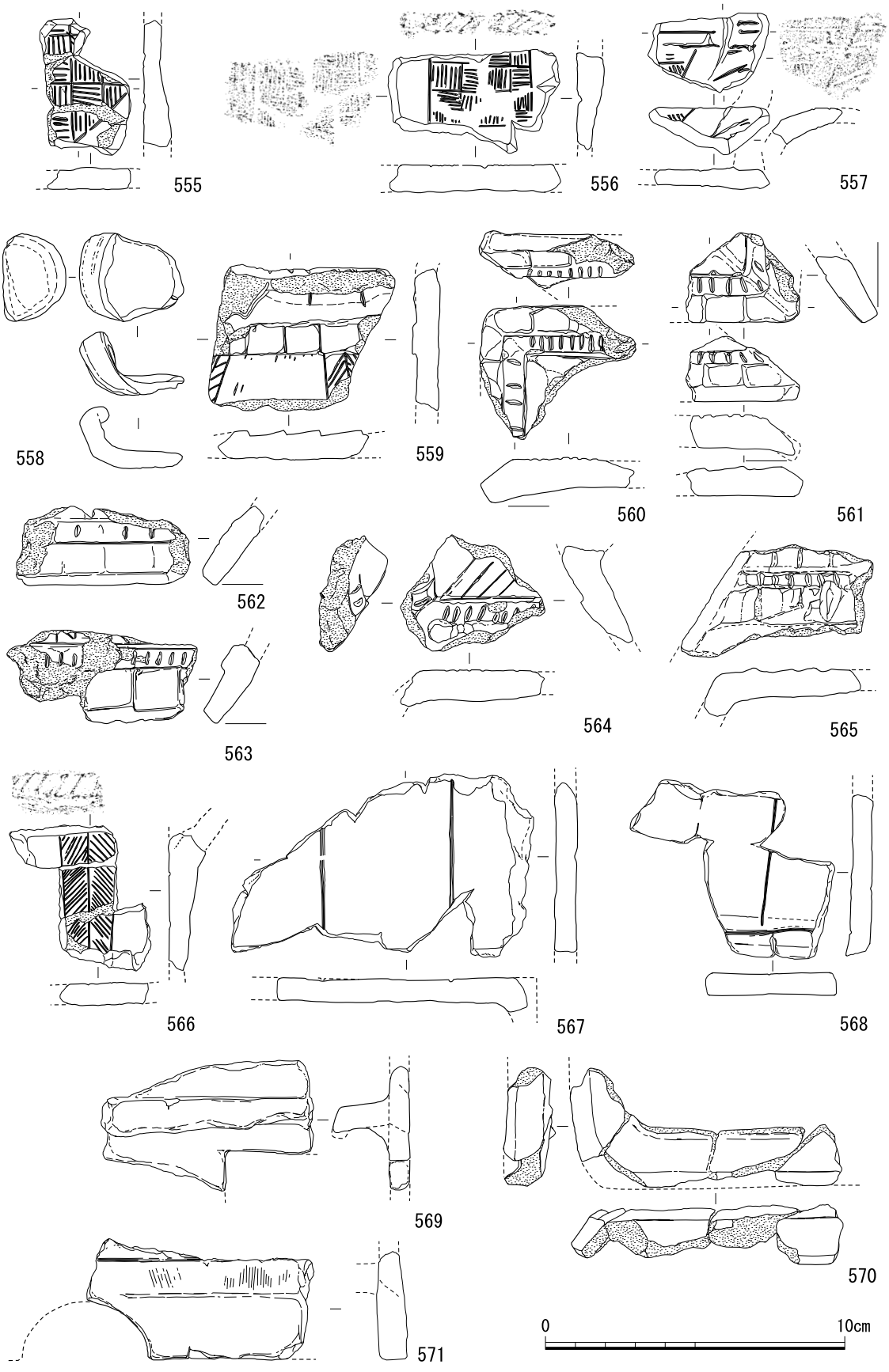
大棟に鰭飾りを付し、各部に梯子状の突帯や沈線による加飾豊かな高床構造、入母屋屋根の家形埴輪である。上屋根は1/2程度の破片が遺存するが、下屋根より下部の残存率が低く全体の形状を正しく復元する要素を欠く。床部外面突帯よりも下部に高床を示す資料があり（569）、高床構造を呈するものと推測できる。

553・554は、妻側小口に破風が表された上屋根である。胎土や文様意匠等に共通要素があるので両者は同一個体とみられる。破風板は天縁ほどその幅を広げ（３～４cm）、曲率の大きな上屋根の小口端の流れの面に接合傷を深く設けて粘土板接合されている。屋根の流れ面には線刻により網代押縁と網代が表現されている。方格図文の施文順序は、正位で、まず縦方向が幅約１mmの尖頭状工具で上から下に線刻され、その後、横方向の界線で方格を描く。方格内は市松に線刻充填を加える。縦列は、およそ５列おきに横位線を入れずに、縦押縁を表現する。破風板が取り付く基面に妻のころびに平行する１条の沈線を加え、破風基壇を表す。大棟の鰭状装飾は、屋根側の棟頂の中軸（棟通り）に１条の沈線を引いて位置を決め、上縁に複数の鰭を切り出して造形した突帯を貼り付ける。突帯基部には横位の梯子文を配す。鰭は古式の意匠を良く残し、内湾する上縁の中程に深い抉りが入り、それを境に外形ラインは外湾に変化する。鰭の内部には非常に細い線刻により、縁取り線と抉り下の２条の平行線を境にその両側上縁に沿った充填文で埋められる。棟飾りの妻端から約34cmの位置で折損剥離痕跡があり、この部分に中心飾りが位置したものと推定される。

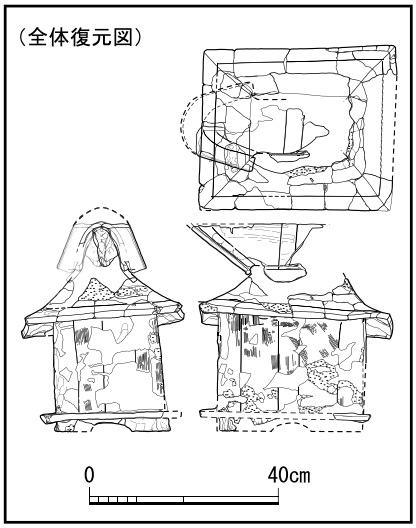
555・556は上屋根で、棟覆の網代が線刻により表現された破片である。線刻充填が省かれた縦押縁が網代格子５単位ごとに出現することがわかる。557は破風板の接合傷を側面に残す。558は棟木で、器状の一側面を残してその他を切り去った上、下部を平坦に成形している。充分に乾燥



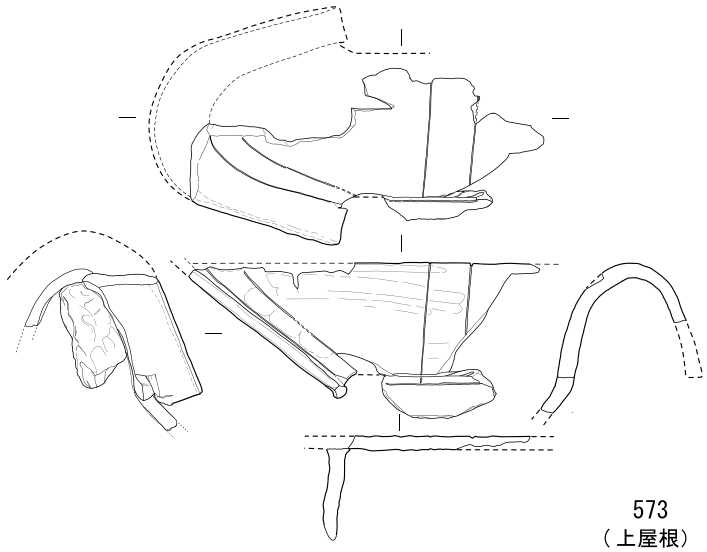
第114図　埴輪実測図1



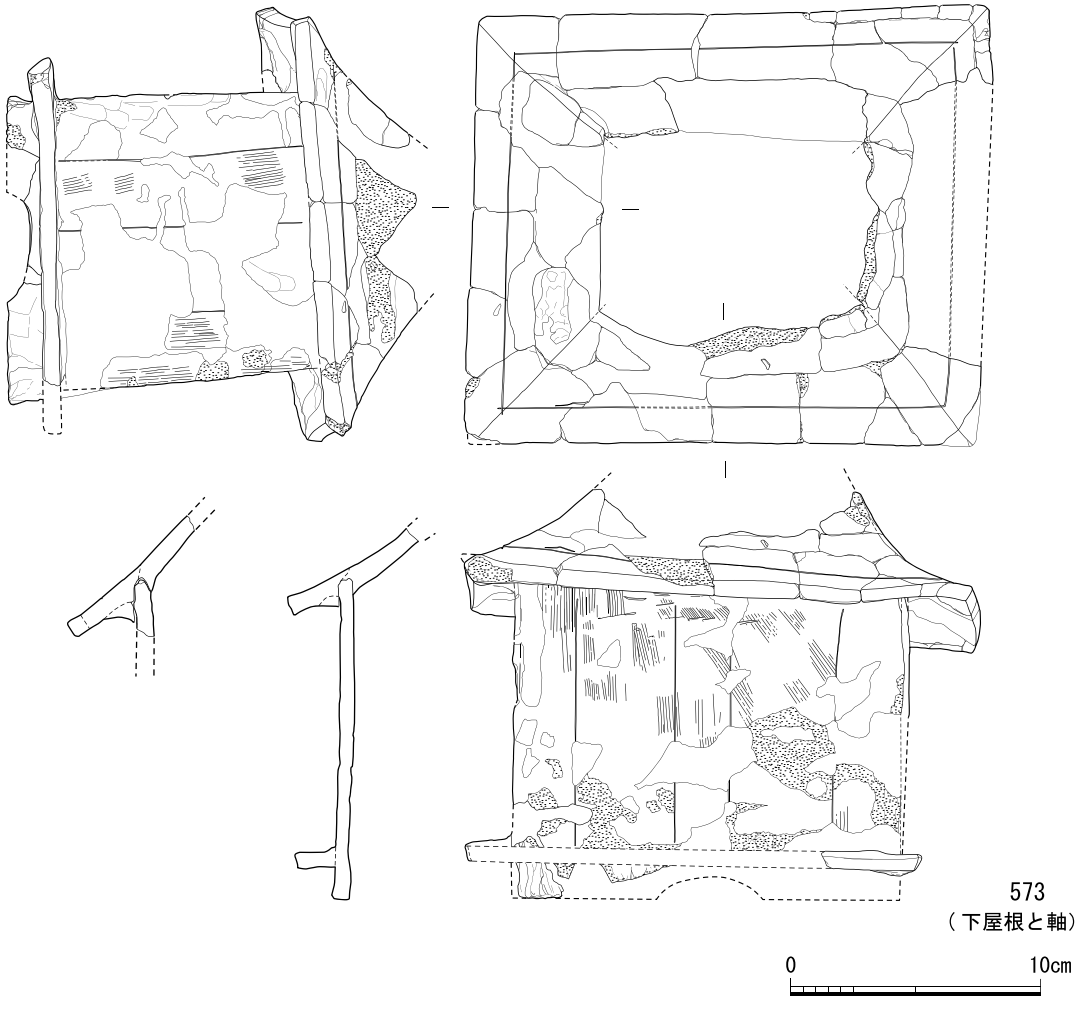
第115図　埴輪実測図２



家形埴輪Ｂ



573
（上屋根）



573
（下屋根と軸）

第116図　埴輪実測図３

が進んだ屋根部に接合するため、単体で剥離した資料が複数認められた。559は横向する立体的な梯子文（幅１cm前後の平坦な突帯の上面を工具先で斜めに押圧して軸方向の断面が鋸歯状を呈する）の下方に間隔を置いて垂下する綾杉文が線刻される。上端破面に接合傷を残し、下屋根の上端と考えられる。560～565は下屋根の軒先部である。刻文を充填した突帯とその縁に立体的な梯子文を造形する多重の梯子文でその先端を装飾する。566は緻密な綾杉文を施したもので、下端面には接合傷の反転文様が残り、軸部から下屋根への接合部に近い部位が想定できる。567・568は平行または直行する間隔を置いたヘラ描き直線を有する板状片で、壁とみられる。568は施文面が丁寧に仕上げられている。569･570は先端が下方に鈍角に屈折する断面形の突帯（側廻突帯）を有する。569では突帯よりも下位に方形の切込（透し）があり、高床部を表現している。570の突帯接合面には軸部に施されたハケメ調整が写し取られている。571は半円形透しを残す基部で、基部裾廻突帯の剥離痕下に調整時のハケメが残る。

家形埴輪Ｂ（第116図572・573、第117図574～576）

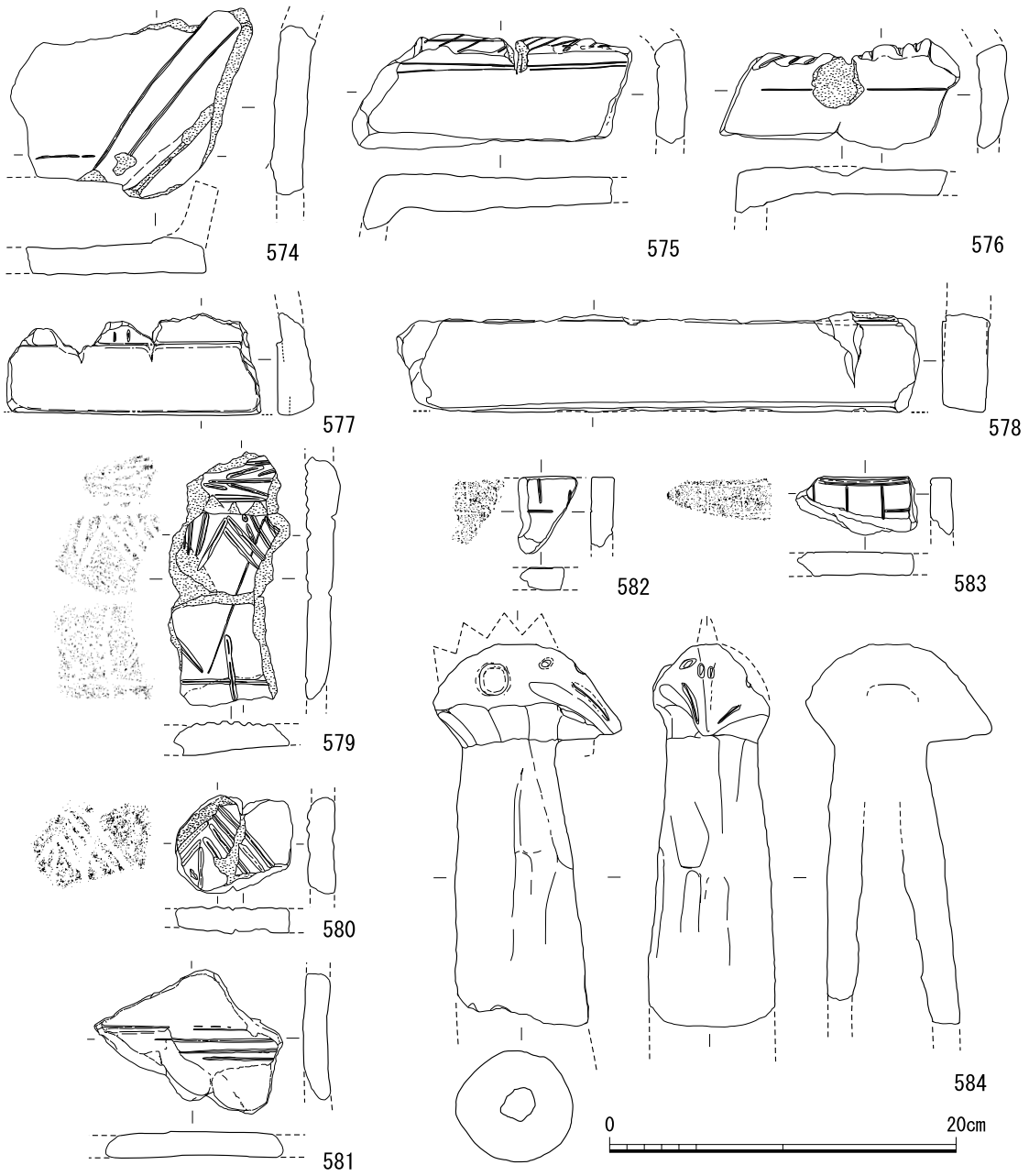
壁体部に窓をもたない閉塞的な軸部を特徴とする、平地式入母屋屋根の家形埴輪である。入母屋下屋根以下の残存率が高い。上屋根と下屋根には直接接合関係がないが、図上での復元に基づき全体像を図示した（第116図左上、図版第87・88）。全高約47cm、下屋根の軒先で計測して、平側幅46.2～46.6cm、妻側幅38.5～39.4cm、壁体部は平側31.2cm、妻側23.1cmの規模を有する。

上屋根は、屋根の流れの面に、深くしっかりとした単線線刻により、破風基部界線と縦押縁、桁界線が表現される。破風板は上縁を欠くが幅約4.6cmで、屋根本体の小口面に接合傷を設けて接合される。破風板基部の位置に揃えるように妻壁が屋根内に鉛直方向に挿入される。下屋根の流れは四面ともやや外反りを描き、降棟角の稜線の屈曲は鋭角に造る。軒先付近に１条のヘラ沈線を入れてアクセントを入れる。外面には化粧粘土が薄くかけられて平滑に仕上げられる。断面を仔細に観察すると、下屋根は軸部との接合部を境界に製作工程の時間差が認められる。すなわち、接合傷を設けた軸部上端を基礎に、粘土帯を積み上げることで屋根の上半部を成形し、充分な乾燥工程を経て屋根縁を下方に追加するように接合する。補充粘土は内面にのみ認められる。壁体部の基部付近は正位の状態で粘土紐を積み上げて成形するが、直線的に延びて屈折しない裾廻突帯よりも上位では、四壁をそれぞれ別に板形に成形し、内面にわずかな粘土を補充しつつ箱状に組み上げている。こうした手法は形象埴輪にみられる古式の技法である。このため四壁の角は鋭角に屈折する。壁面には平行する２条のヘラ沈線により柱が表現される（２間×２間）。基部には扁平な半円形透しが刳られている（妻側で確認）。器表には仕上げの化粧土が掛けられ平滑な面をなすが、部分的に先行する調整時のタテハケが観察できる。

574は、緩く湾曲する板状の一側面に平行する沈線が２条近接して描かれ、上屋根の妻付近の破片と考えられる。575・576はともに上端面に顕著な接合傷を設け、外面に１条の横向する沈線を描く。下屋根の上端である。

家形埴輪Ｃ（第117図577・578）

建物型式は不明ながら、屋根下端（軒先）に幅の広い突帯を造形する家形埴輪である。577・578



第117図　埴輪実測図４

は直線状に終わる長い板状の一側面に低平な（幅約3.9～4.5cm、高さ約0.3cm）突帯を貼り付けて肥厚させた個体で、屋根縁（軒先）と考えられる。上記家形埴輪のどちらにも帰属しない要素なので別個体と考えた。

ｂ）鶏形埴輪（第117図584）

584は鶏形埴輪で、頭部に付設された肉髭や鶏冠は欠損するものの、頭部から頸部まで残存する（残存高19cm）。卵形に造形された頭部の一端を尖り気味にひねり出し、側面に１条の沈線を加えて嘴を写実的に表現する。頭部側面には円棒状の工具刺突（直径約0.5cm）による目と、円盤状の粘土（直径約1.4cm、高さ0.2cm）を貼り付けた耳を表現する。

ｃ）その他の形象埴輪（第117図579～583）

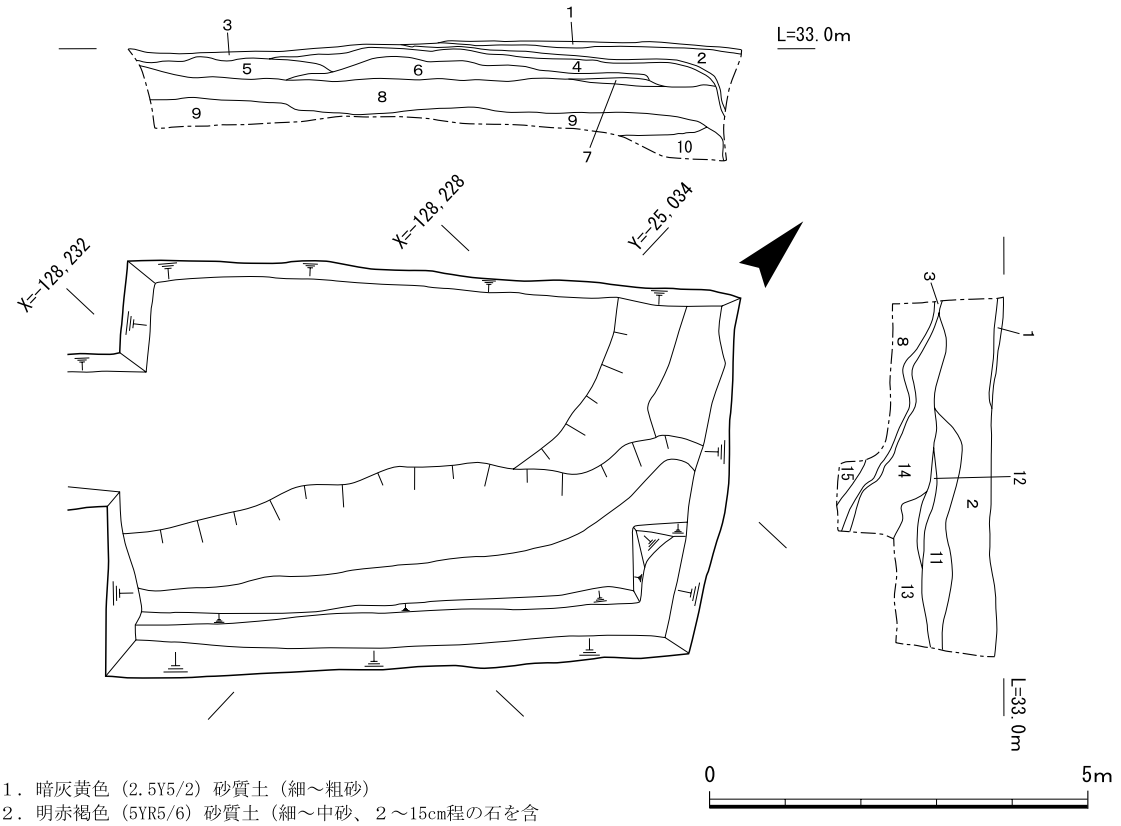
579・580は板状の一側面に円棒状の施文具で粗い線刻を菱形に相似形に加える。579は図の下が端部で、手前方向に接合痕跡が残る。581は断面が両軸方向に内湾し、４条のヘラによる接合傷をもつ。582・583は図の上端が緩い円弧を呈し、一側面に非情に細い施文具による放射状とこれを橋渡しする線刻がみられる。両者とも厚さは1.3cmである。　（伊賀高弘）

(22)丘陵裾３・４トレンチ

①概要（第２・118・119図）

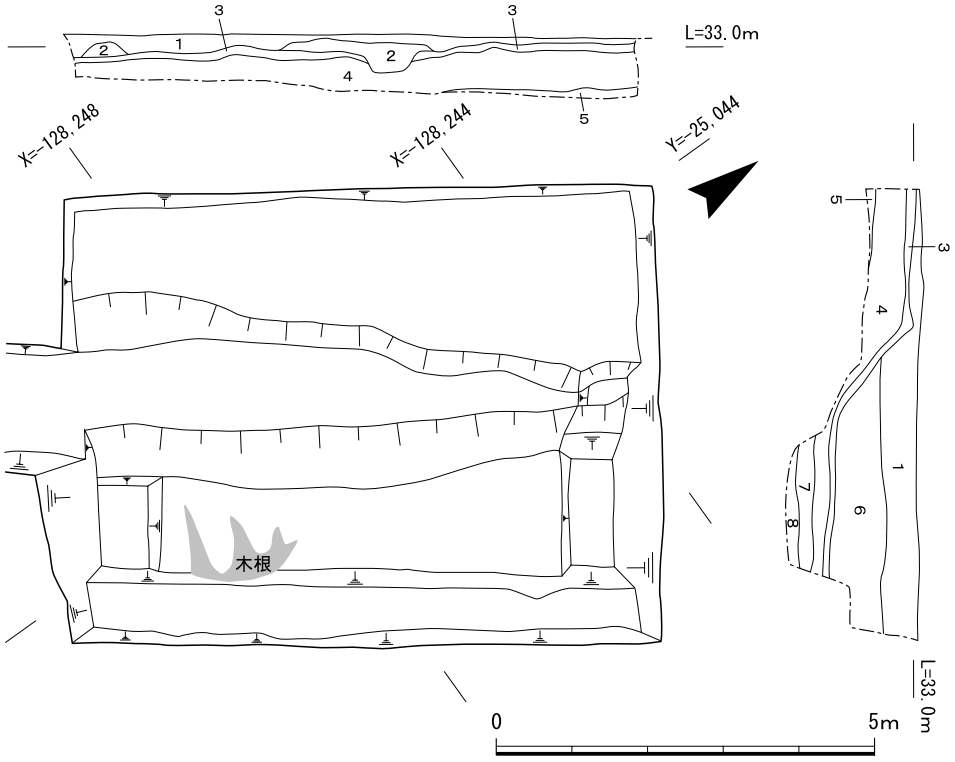
調査は、丘陵の裾部、大谷川との間に形成された平坦地において、施工が予定される橋脚部分２か所で実施した。北側を３トレンチ、南側を４トレンチとした。調査面積は２か所合わせて90㎡である。

調査は、表土、盛土を重機により除去した後、人力により遺構精査を行い、遺構検出に努めた。竹の伐根を兼ねて現表土を除去すると、旧表土である黒色砂質土が露出する。両トレンチとも、



1．暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土（細～粗砂）
2．明赤褐色（5YR5/6）砂質土（細～中砂、２～15cm程の石を含む。盛土）
3．黒色（2.5Y2/1）砂質土（シルト～細砂、旧表土か）
4．黄褐色（10YR5/8）砂質土（細砂）
5．橙色（7.5YR6/8）砂質土（細～中砂）
6．浅黄色（2.5YR7/3）砂質土（中～粗砂）
7．黄褐色（10YR5/6）砂質土（細～中砂）
8．明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土（極細砂）
9．明褐色（7.5YR5/8）砂質土（シルト～中砂）に明黄褐色（10YR7/6）砂質土（細砂が混入）
10．黄褐色（10YR5/8）砂質土（シルト～中砂）ににぶい黄橙色（10YR7/2）粘質土が層状に混入
11．オリーブ灰色（10Y6/3）粘質土（塩ビ管埋め込み）
12．オリーブ黒色（10Y3/1）砂質土（シルト～細砂）
13．２に同じ
14．５に同じ
15．灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（中～極粗砂、径0.5～１cm程の礫を多く含む）

第118図　３トレンチ平面・土層断面図



1．明赤褐色(5YR5/6)砂質土(細～中砂、径２～15cm程の石を含む。盛土)
2．にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土(細～粗砂、根撹乱)
3．黒色(2.5Y2/1)砂質土(シルト～細砂、旧表土か)
4．明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土(極細砂)
5．明黄褐色(10YR6/6)砂質土(シルト～中砂)
6．オリーブ灰色(10Y4/2)砂質土(シルト～粗砂、径２～20cm程の石を多く含み、アスファルト、コンクリート塊混入)
7．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～中砂)
8．オリーブ灰色(10Y6/2)砂質土(シルト～細砂)

第119図　４トレンチ平面・土層断面図

南東側を流れる大谷川に向かって傾斜する地形が確認され、コンクリート、アスファルト片を含む盛土により南東側1/2 程は1.0～2.0mにわたって埋め立てられていた。旧表土直下では、安定した明黄褐色砂質土が確認でき、これが遺構面となると判断されたが、遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。（奈良康正）

４．　総括

１)山城南部地域に所在する横穴群について

京都府内において、山城南部地域の八幡市から京田辺市にかけての丘陵部には横穴が集中的に築造されている。今回発掘調査を実施した女谷・荒坂横穴群以外に、八幡市には狐谷横穴群、美濃山横穴群、京田辺市には松井横穴群、堀切谷横穴群、飯岡横穴群、木津川市には北谷横穴群が所在する。これら横穴群の概要について、以下に記す。

【狐谷横穴群】八幡市美濃山狐谷に所在し、府立高等学校建設を契機に、昭和57年に当調査研究センターにより発掘調査が実施された(注17)。８基の横穴が検出されており、記録保存調査が終了した後、埋め戻され府指定史跡とされた。８基の横穴はいずれも南東に開口し、３・４号横穴を除き玄門に段を設け玄室内の床面に比高を持たせている。また、２・５号横穴では、玄門に主軸と直交する溝が穿たれており、閉塞に際し板材等を用いた可能性が指摘されている。横穴の構築は

６世紀後葉に開始され、７世紀前葉には使用が停止されている。

【美濃山横穴群】 八幡市美濃山大塚に所在する。竹林となっている東向きの丘陵に開口し、現在、遺跡地図には６基が搭載されている。昭和２年には、１基において発掘調査が実施されており、玄室内から須恵器、土師器、切子玉、金環、刀子が出土している(注18)。古墳時代後期の構築と考えられる。

【松井横穴群】京田辺市松井向山・上西浦に所在する。現地踏査により10基前後の横穴が確認され、測量等が行われていた(注19)。平成23年度から、当調査研究センターが新名神高速道路整備事業に先立ち、確認調査を実施している。現在までに75基の横穴を確認している。

【堀切谷横穴群】京田辺市薪堀切谷に所在する。丘陵斜面に10基の横穴が分布していたが、現在は全て開発に伴い消滅している。昭和44年には、京都府教育委員会により５・６号横穴の発掘調査が実施され、６号横穴からは、家形石棺が検出されている(注20)。石棺内からは１体分の人骨が出土している。これは成年男子と推定され、石棺への埋葬に際し、解剖学的に正確な位置関係を保つことを意識して改葬されていた(注21)。６号横穴は７世紀前半の築造と考えられる。堀切谷横穴群が所在する丘陵上には、11基からなる堀切古墳群が分布している。横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳と横穴が併存する在り方は、この堀切谷横穴群のみで確認されている。両者は同時期に造営されており、異なる葬送形態の採用は、同一集団内の階層差に基づく可能性が考えられる。

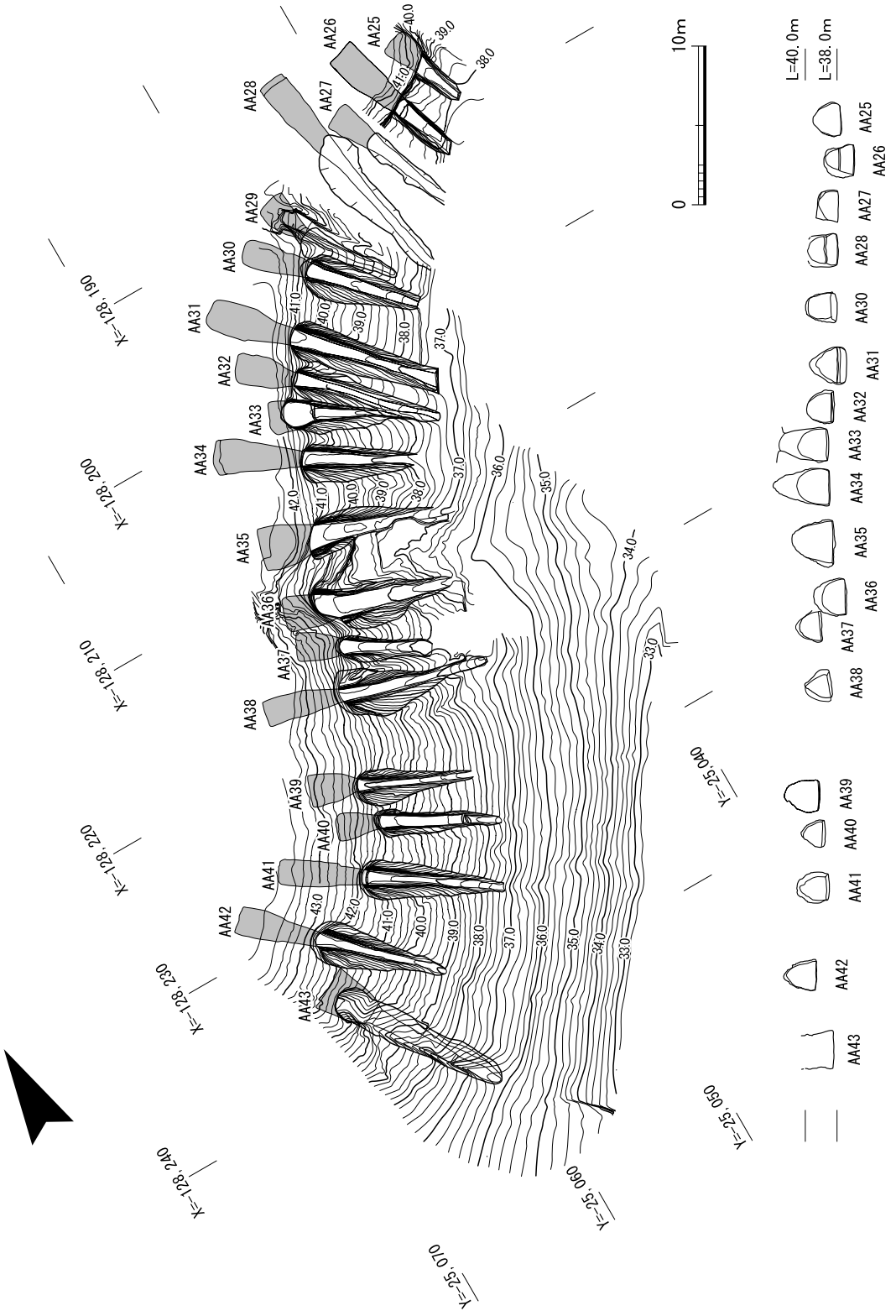
【飯岡横穴群】京田辺市飯岡久保田に所在する。飯岡丘陵の東南端に位置し、遺跡地図には２基が搭載されている。このうち、１号横穴の発掘調査が実施されている(注22)。左側1/2の調査に留まっており、判明した事項は限定的である。平面形は胴張りの長方形を呈し、玄門に袖を有していた。６世紀後半の築造と考えられ、横穴への追葬が停止された後、平安時代から近世にかけて、複数回にわたり再利用されていた状況が確認されている。

【北谷横穴群】木津川市山城町北河原北谷に所在する。この横穴群が唯一、木津川右岸に分布する。やや軟弱な花崗岩の岩盤に開削されており、現在４基が確認されている。２号横穴の玄室は胴張りの正方形を呈し、床面には排水溝を穿ち、扁平な河原石を敷く。羨道は1.5mにわたり残存している(注23)。６世紀後半の構築と判断される。

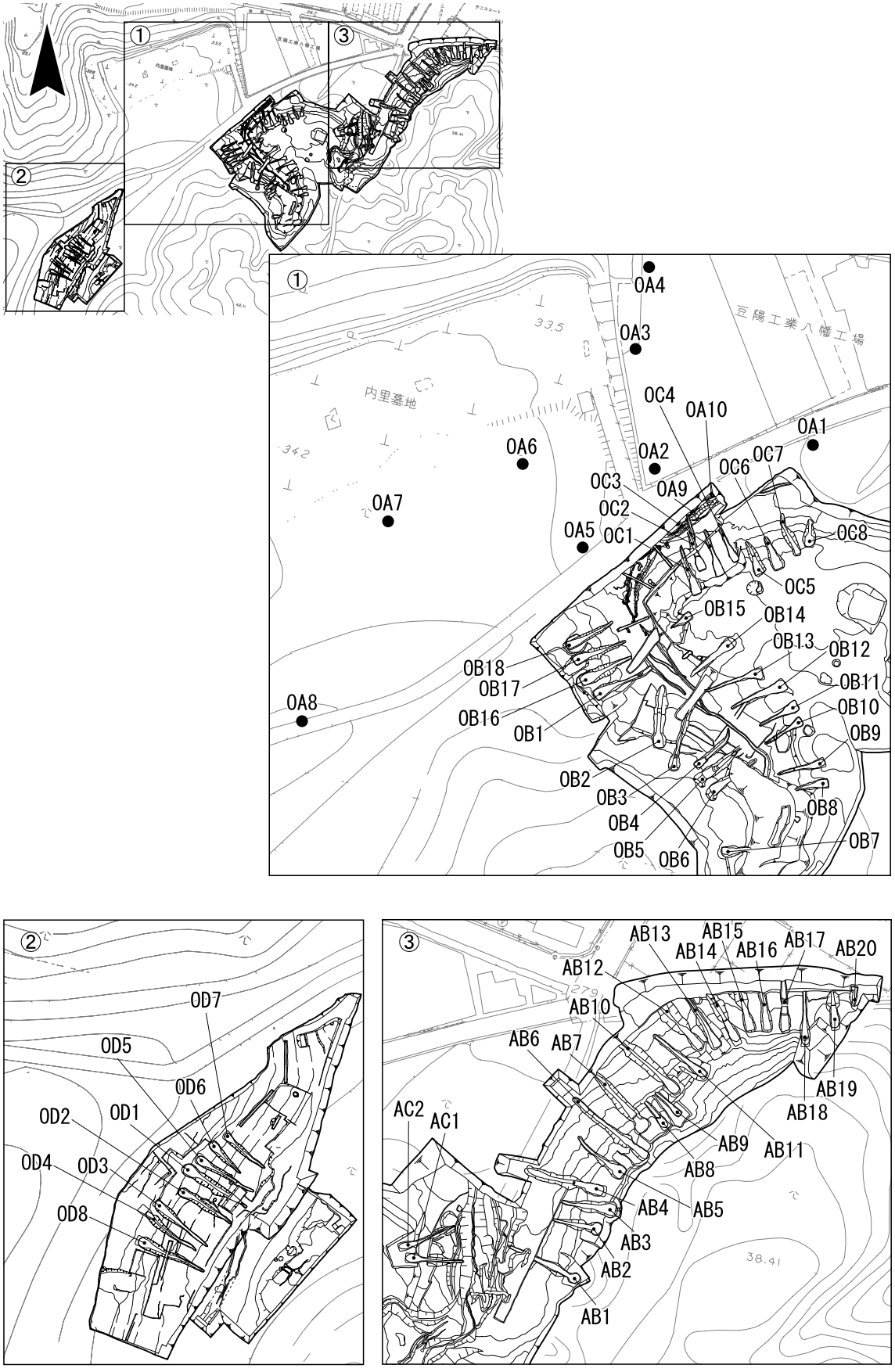
女谷・荒坂横穴群での発掘調査は、今回が13次となる。旧来は女谷横穴群、荒坂横穴群として個別の横穴群として認識されていたが、先述したように、両者の間隙を繋ぐ形で連続して横穴が確認されたことから、両者は同一の横穴群であると判断され、女谷・荒坂横穴群と遺跡名称を変更することとなった。横穴群の全範囲において発掘調査が実施されていないため、今後さらに数が増す可能性があるが、現在、大きく７支群に分けられており、各支群の概要は以下のとおりである(注24)（第121・122図、付表３参照）。

【女谷Ａ支群（OA）】丘陵北西の平野部に最も近い地点に位置する。内里墓地の敷地内とその周辺に点在している。10基の横穴が確認されており、この内２基の調査が実施されている。

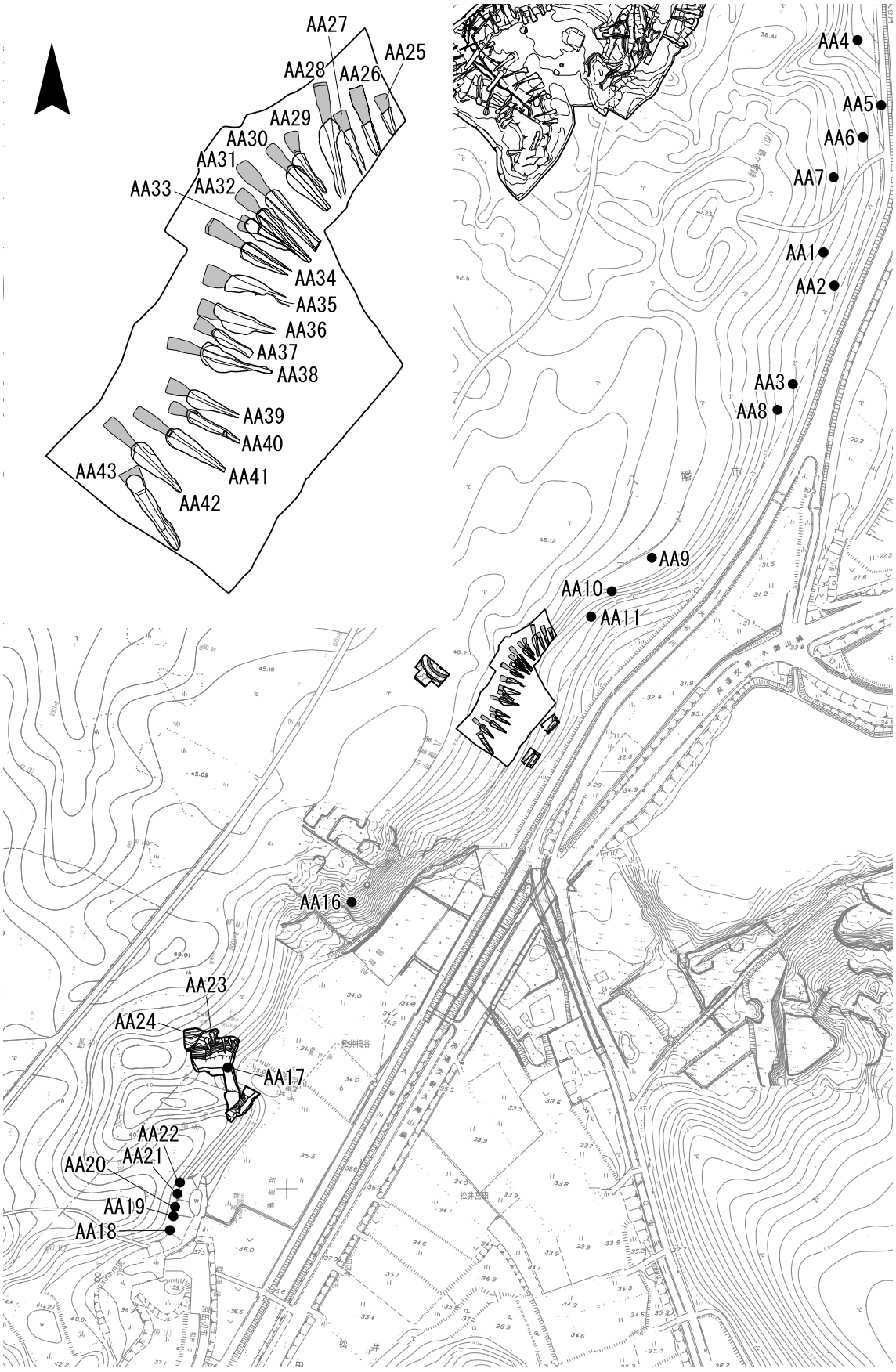
【女谷Ｂ支群（OB）】女谷Ａ支群の南側で、南東方向に延びる谷部の両側斜面に位置する。北東



第120図　横穴配置図(平面・断面)



第121図　各支群横穴位置図１



第122図　各支群横穴位置図２

付表３　女谷・荒坂横穴群調査概要一覧

番号	遺跡名	概要	備考
AA1	荒坂 A 支群 1 号横穴	全長 6.5 m、東向	
AA2	荒坂 A 支群 2 号横穴	全長 3.9 m	
AA3	荒坂 A 支群 3 号横穴	全長 7.4 m	
AA4	荒坂 A 支群 4 号横穴	玄室天井陥没	
AA5	荒坂 A 支群 5 号横穴	天井陥没	
AA6	荒坂 A 支群 6 号横穴	天井陥没	
AA7	荒坂 A 支群 7 号横穴	天井陥没	
AA8	荒坂 A 支群 8 号横穴	天井陥没	
AA9	荒坂 A 支群 9 号横穴	東向	
AA10	荒坂 A 支群 10 号横穴	東向	
AA11	荒坂 A 支群 11 号横穴	東向	
AA12	荒坂 A 支群 12 号横穴	東向	欠番（第 13 次調査と重複）
AA13	荒坂 A 支群 13 号横穴	玄室天井一部陥没	欠番（第 13 次調査と重複）
AA14	荒坂 A 支群 14 号横穴		欠番（第 13 次調査と重複）
AA15	荒坂 A 支群 15 号横穴	天井陥没	欠番（第 13 次調査と重複）
AA16	荒坂 A 支群 16 号横穴	天井陥没	
AA17	荒坂 A 支群 17 号横穴	天井陥没	
AA18	荒坂 A 支群 18 号横穴	99 年発掘、近世導水施設	欠番
AA19	荒坂 A 支群 19 号横穴	玄室長 2.0 m以上	
AA20	荒坂 A 支群 20 号横穴	玄室長 3.0 m以上	
AA21	荒坂 A 支群 21 号横穴	玄室長 3.0 m以上	
AA22	荒坂 A 支群 22 号横穴	天井崩落、玄室長 3.0 m以上	須恵器・土師器
AA23	荒坂 A 支群 23 号横穴	02 年発掘、全長 5.3m 以上、玄室長 2.1 m	須恵器・土師器
AA24	荒坂 A 支群 24 号横穴	02 年発掘、全長 8.2m 以上、玄室長 2.8 m	須恵器・土師器
AA25	荒坂 A 支群 25 号横穴	12 年発掘、全長 5.6m 以上、玄室長 2.6 m	須恵器・土師器・鉄釘・刀子
AA26	荒坂 A 支群 26 号横穴	12 年発掘、全長 9.8m 以上、玄室長 3.6 m	須恵器・土師器・鉄釘・刀子・耳環・臼玉・人骨
AA27	荒坂 A 支群 27 号横穴	12 年発掘、全長 9.0m 以上、玄室長 3.0 m	須恵器・鉄釘・鉄製品・耳環
AA28	荒坂 A 支群 28 号横穴	12 年発掘、全長 15.7m 以上、玄室長 5.5 m	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄刀・不明鉄製品・耳環・人骨
AA29	荒坂 A 支群 29 号横穴	12 年発掘、全長 9.4m、玄室長 2.5 m	須恵器・土師器・鉄釘・刀子・耳環・人骨
AA30	荒坂 A 支群 30 号横穴	12 年発掘、全長 11.6m 以上、玄室長 4.2 m	須恵器・土師器・鉄鏃
AA31	荒坂 A 支群 31 号横穴	12 年発掘、全長 15.7m 以上、玄室長 5.8 m	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄刀・刀子・鎹・人骨
AA32	荒坂 A 支群 32 号横穴	12 年発掘、全長 14.0m、玄室長 4.2 m	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄釘・楔・人骨
AA33	荒坂 A 支群 33 号横穴	12 年発掘、全長 9.5m 以上、玄室長 2.9 m	須恵器・土師器・鉄釘・耳環
AA34	荒坂 A 支群 34 号横穴	12 年発掘、全長 13.0m 以上、玄室長 5.4 m、石棺	須恵器・土師器・鉄鏃・不明鉄製品・耳環・人骨
AA35	荒坂 A 支群 35 号横穴	12 年発掘、全長 12.4 m、玄室長 4.0 m	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄刀・耳環・人骨
AA36	荒坂 A 支群 36 号横穴	12 年発掘、全長 10.9 m、玄室長 2.2 m	須恵器・土師器
AA37	荒坂 A 支群 37 号横穴	12 年発掘、全長 9.4 m、玄室長 2.7 m	須恵器・土師器・鉄釘・不明鉄製品・耳環
AA38	荒坂 A 支群 38 号横穴	12 年発掘、全長 14.5 m、玄室長 3.2 m	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄釘・不明鉄製品
AA39	荒坂 A 支群 39 号横穴	12 年発掘、全長 10.3 m、玄室長 2.8 m	須恵器・土師器
AA40	荒坂 A 支群 40 号横穴	12 年発掘、全長 11.4 m、玄室長 2.5 m	須恵器
AA41	荒坂 A 支群 41 号横穴	12 年発掘、全長 14.3 m、玄室長 2.9 m	須恵器・刀子・耳環・人骨
AA42	荒坂 A 支群 42 号横穴	12 年発掘、全長 13.6 m、玄室長 3.1 m	須恵器・人骨
AA43	荒坂 A 支群 43 号横穴	12 年発掘、全長 12.3 m、玄室長 3.3 m	須恵器・土師器・耳環・人骨
AA44	荒坂 A 支群 44 号横穴	南向	
AB1	荒坂 B 支群 1 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 18.0m、玄室長 2.8 m	須恵器・刀子
AB2	荒坂 B 支群 2 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 10.6m、玄室長 2.1 m、礫床	須恵器・土師器・馬具・鉄製武器・刀子・人骨
AB3	荒坂 B 支群 3 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 11.4m、玄室長 3.8 m、礫床	須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・鉄釘・石突
AB4	荒坂 B 支群 4 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 18.7m、玄室長 4.6 m	須恵器・土師器
AB5	荒坂 B 支群 5 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 13.3m、玄室長 2.4 m、礫床	須恵器・土師器・玉類・鉄製武器・埴輪
AB6	荒坂 B 支群 6 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 21.3m、玄室長 3.3 m	須恵器
AB7	荒坂 B 支群 7 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 16.7 m、玄室長 2.4 m	須恵器・土師器
AB8	荒坂 B 支群 8 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 8.0 m、玄室長 4.1 m	須恵器・刀子
AB9	荒坂 B 支群 9 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 7.4 m以上、玄室長 3.4 m	須恵器
AB10	荒坂 B 支群 10 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 17.0 m以上、玄室長 4.0 m	須恵器・土師器・耳環・刀子・鉄製武器
AB11	荒坂 B 支群 11 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 14.9 m、玄室長 3.6 m	須恵器・土師器・刀子・鉄製武器

番号	遺跡名	概要	備考
AB12	荒坂 B 支群 12 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 11.8m 以上、玄室長 3.3 m	須恵器・土師器・刀子
AB13	荒坂 B 支群 13 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 12.7 m以上、玄室長 4.5 m、礫床	須恵器・土師器・鉄鏃
AB14	荒坂 B 支群 14 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 13.3 m以上、玄室長 3.5 m	土師器・ミニチュア土器・ガラス玉・耳環・鉄製武器
AB15	荒坂 B 支群 15 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 8.2 m以上、玄室長 3.1 m	須恵器・土師器
AB16	荒坂 B 支群 16 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 9.1 m以上、玄室長 4.5 m	須恵器・土師器
AB17	荒坂 B 支群 17 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 12.2 m、玄室長 4.4 m	須恵器・土師器・鉄鏃・刀子
AB18	荒坂 B 支群 18 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 12.7 m以上、玄室長 3.4 m	須恵器・土師器・刀子・人骨
AB19	荒坂 B 支群 19 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 9.5 m以上、玄室長 3.4 m	須恵器・土師器
AB20	荒坂 B 支群 20 号横穴	99 ～ 01 年発掘、墓道長 3.9m 以上	
AC1	荒坂 C 支群 1 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 13.1 m以上、玄室長 3.1 m	須恵器・土師器
AC2	荒坂 C 支群 2 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 13.3 m、玄室長 3.6 m	須恵器・土師器
OA1	女谷 A 支群 1 号横穴	羨道長 4.0m、幅 1.5m、玄室長 3.5m、幅 2.0m、南向	
OA2	女谷 A 支群 2 号横穴	東向	
OA3	女谷 A 支群 3 号横穴	東向	
OA4	女谷 A 支群 4 号横穴	北向	
OA5	女谷 A 支群 5 号横穴		
OA6	女谷 A 支群 6 号横穴		
OA7	女谷 A 支群 7 号横穴		
OA8	女谷 A 支群 8 号横穴		
OA9	女谷 A 支群 9 号横穴	02 年発掘	
OA10	女谷 A 支群 10 号横穴	02 年発掘	
OB1	女谷 B 支群 1 号横穴	99･00 年発掘、全長 13.3m、玄室長 4.8m	須恵器・土師器・鉄鏃・耳環・瓦器・黒色土器・人骨
OB2	女谷 B 支群 2 号横穴	99･00 年発掘、全長 14.0m、玄室長 3.1m	須恵器・鉄釘・石鏃
OB3	女谷 B 支群 3 号横穴	99･00 年発掘、全長 13.9m 以上、玄室長 3.0m	須恵器・土師器
OB4	女谷 B 支群 4 号横穴	99･00 年発掘、全長 11.0m、玄室長 2.9m	須恵器・土師器
OB5	女谷 B 支群 5 号横穴	99･00 年発掘、全長 10.2m、玄室長 3.6m	須恵器・土師器・鉄鏃
OB6	女谷 B 支群 6 号横穴	99･00 年発掘、全長 12.3m、玄室長 4.2m 以上	須恵器・土師器
OB7	女谷 B 支群 7 号横穴	99･00 年発掘、全長 5.9m 以上、玄室長 3.8m	須恵器・土師器・瓦器
OB8	女谷 B 支群 8 号横穴	99･00 年発掘、全長 7.8m 以上、玄室長 2.8m	須恵器・鉄刀・鞘金具・足金具・鏃・鉄釘
OB9	女谷 B 支群 9 号横穴	99･00 年発掘、全長 10.9m、玄室長 2.7m	須恵器・土師器・耳環・刀子・朝顔形埴輪・人骨
OB10	女谷 B 支群 10 号横穴	99･00 年発掘、全長 9.6m、玄室長 2.3m	須恵器・土師器
OB11	女谷 B 支群 11 号横穴	99･00 年発掘、全長 9.7m、玄室長 3.6m	須恵器・土師器・耳環・刀子・黒色土器・人骨
OB12	女谷 B 支群 12 号横穴	99･00 年発掘、全長 13.2m、玄室長 4.4m	須恵器・刀子・槍状鉄製品・土師器・黒色土器・銅銭・人骨
OB13	女谷 B 支群 13 号横穴	99･00 年発掘、全長 12.9m、玄室長 4.2m	須恵器・土師器・刀子・耳環
OB14	女谷 B 支群 14 号横穴	99･00 年発掘、全長 11.8m、玄室長 3.5m	須恵器・土師器・銅銭
OB15	女谷 B 支群 15 号横穴	99･00 年発掘、全長 8.5m 以上、玄室長 2.5m	須恵器・土師器・瓦・人骨
OB16	女谷 B 支群 16 号横穴	02 年発掘、全長 12.9m、玄室長 3.7m	須恵器・耳環・刀子・人骨
OB17	女谷 B 支群 17 号横穴	02 年発掘、全長 12.5m、玄室長 3.9m	須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・耳環・臼玉・人骨
OB18	女谷 B 支群 18 号横穴	02 年発掘、全長 11.1m、玄室長 3.2m	須恵器・土師器・胡籙金具・鉄鏃・鉄製品・耳環
OC1	女谷 C 支群 1 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 11.6m、玄室長 4.0m	須恵器・土師器・鉄刀・耳環
OC2	女谷 C 支群 2 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 9.3m、玄室長 3.1m	須恵器・土師器
OC3	女谷 C 支群 3 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 11.1m、玄室長 3.5m	須恵器・土師器・刀子・鉄鏃
OC4	女谷 C 支群 4 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 9.6m、玄室長 2.3m	土師器・鉄刀・不明鉄製品
OC5	女谷 C 支群 5 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 7.8m、玄室長 3.3m	須恵器・土師器・鉄鏃・耳環・人骨
OC6	女谷 C 支群 6 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 7.8m 以上、玄室長 4.0m	須恵器・土師器・耳環
OC7	女谷 C 支群 7 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 9.8m 以上、玄室長 3.0m	鉄鏃・耳環
OC8	女谷 C 支群 8 号横穴	99 ～ 01 年発掘、全長 5.9m 以上、玄室長 2.8m	鉄鏃・刀子
OD1	女谷D支群 1 号横穴	09 年発掘、全長 17.2m、玄室長 3.5m	須恵器・土師器・鉄鏃・耳環
OD2	女谷D支群 2 号横穴	09 年発掘、全長 13.8m、玄室長 2.1m	須恵器・耳環
OD3	女谷D支群 3 号横穴	09 年発掘、全長 15.3m、玄室長 3.6m	須恵器・土師器・鉄釘・耳環・馬具・布目瓦
OD4	女谷D支群 4 号横穴	09 年発掘、全長 15.7m、玄室長 3.5m	須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・耳環・銅鏡・布目瓦
OD5	女谷D支群 5 号横穴	09 年発掘、全長 15.2m、玄室長 3.6m	須恵器・土師器・耳環
OD6	女谷D支群 6 号横穴	09 年発掘、全長 11.0m、玄室長 3.4m	須恵器・鉄鏃・耳環
OD7	女谷D支群 7 号横穴	09 年発掘、全長 11.8m、玄室長 2.8m	須恵器・鉄釘・耳環
OD8	女谷D支群 8 号横穴	09 年発掘、全長 15.6m、玄室長 3.3m	須恵器・土師器・鉄釘・砥石

側斜面に８基、南西側斜面に10基の計18基の横穴が確認されている。すべての横穴で調査が実施されている。

【女谷Ｃ支群（OC）】女谷Ａ支群と谷を挟んだ南側の斜面に位置する。北西に開口する８基の横穴が確認されており、すべての横穴で調査が実施されている。

【女谷Ｄ支群（OD）】女谷Ｂ支群から南西に丘陵を１つ隔てた南東を向く斜面に位置する。８基の横穴が確認されており、すべての横穴で調査が実施されている。

【荒坂Ａ支群（ＡＡ）】横穴が所在する丘陵の東側斜面に位置する。総延長700m程の広がりを有し、分布調査で確認された横穴には配置に粗密がある。そのため、さらに基数が増加し複数の支群に分かれる可能性が高い。39基の横穴が確認されており、この内22基の調査が実施されている。

【荒坂Ｂ支群（AB）】荒坂Ａ支群と同じ丘陵の北東端に位置する。北西を向く斜面の裾付近で20基の横穴が確認されている。すべての横穴で調査が実施されている。当横穴群の中で最も早い段階に築造されている。

【荒坂Ｃ支群（AC）】荒坂Ｂ支群南端と谷を挟んで西側に位置する。東向きの丘陵斜面に２基の横穴が確認されており、すべての横穴で調査が実施されている。

２）横穴出土土器の検討

横穴出土土器の概要は以上に報告したとおりであるが、ここでは各横穴の築造時期や追葬時期を考えるために出土した土器について検討する。

各横穴の調査では、明確な複数の埋葬面を確認できた横穴はほとんどない。数少ない例として、30号横穴では整地層中から高杯Ａの杯部（188・189）が出土し、整地層の上面で蓋Ｂ・Ｃ、杯Ｂ・Ｃなど様式的に新しい土器の一群（190～195）が出土している。しかし、こうした例はまれで、先に副葬された土器群が追葬の際に片付けられて、同一埋葬面で新しい土器群とともに出土しているような状況である。つまり、複数の時期にわたる土器群が一つの埋葬面から出土していることになる。

このため、出土土器の検討は、飛鳥地域をはじめとする宮都での土器編年に伴う研究成果を参照しつつ、主に型式学的な手法により、今回の調査で出土した土器群に検討を加え、荒坂Ａ支群25～43号横穴の時期的な変遷を明らかにしたい。

①器種構成上の特徴

まず、出土した土器の大半が須恵器である。各横穴における須恵器の器種構成は、蓋・杯が多数あり、次いで高杯・長頸壺が続き、以上の４器種が主体を占める。このほかに短頸壺、平瓶、瑞、甕などがあるものの、量的には少ない。また、女谷B・C・D支群や荒坂Ｂ支群の調査では出土しているものの、今回の調査で出土しなかった器種として提瓶がある。少なくとも荒坂Ａ支群25～43号横穴では、器種構成から提瓶が欠落することが大きな特徴といえる。

一方、土師器が多数出土する横穴は少なく、31号横穴でややまとまって出土したほかは、数点ずつしか出土していない。土師器の場合、器種構成がわかるほどではないものの、都城域出土土師器と類似するものがあり、出土土器の時期を考える上で重要である。

②須恵器の検討

出土した須恵器のうち時期を考える上で重要な指標となる杯や蓋をみると、口縁部の立ち上がりや受け部の退化がみられるものの古墳時代に通有な杯Ａや、飛鳥時代になって出現するつまみとかえりを有する蓋Ｂ、本格的な都城の造営以降にみられるようになるかえりを持たない蓋Ｃなどがある。つまり、今回の調査では古墳時代後期から奈良時代前半までの土器が出土した。なお、必ずしも蓋Ｃが出土する横穴が奈良時代に造営されたわけではないが、奈良時代になっても横穴への埋葬が行われていたことが明らかになったことの意義は大きい。

以下では代表的な器種の型式学的な検討を加えることにしたい。

蓋Ａ・杯Ａについては、頂部もしくは底部に回転ヘラケズリを加えるかどうかという点によって大きく２群に分けることができる（蓋ＡａとＡｂ、杯ＡａとＡｂ）。これらの器種については、飛鳥地域でも、山城地域でも同じように変化するが、回転ヘラケズリを省略する際の法量に地域差がみられることが指摘されており[注25]、同一法量＝同時期と考えるのではなく、回転ヘラケズリの省略を基準に地域ごとの法量変化を検討すべきと考えられる。今回の調査で出土した蓋Ａ・杯Ａについても同様のことがいえると考えている。

次に高杯Ａは、まず脚柱部の方形スカシの有無が大きな違いとして注意される（高杯ＡａとＡｂ）。また、蓋Ａや杯Ａが時間経過とともに縮小することがわかっているが、高杯Ａａの法量も大きいものとやや小さいものがあり、蓋Ａなどと同様に縮小している可能性が高い。その際注意されるのは、杯部との接合部にあたる脚柱部上部の径が太いものから細いものへと変化している可能性が高いと考えられることである[注26]。高杯Ｂも脚柱部のスカシの有無から高杯ＢａとＢｂに分類できるほか、杯部外面に刺突文などを施すものと無文のものとの違いがある。また、長頸壺Ａ・Ｂも脚台部のスカシの有無によってＡａとＡｂ、ＢａとＢｂに細分できる。このほかにも体部への刺突文などの施文の有無が認められる。このように、高杯Ｂや長頸壺Ａ・Ｂなどでは装飾を加えるものから装飾を省略するものへと変化していくようすも読み取ることができる。

一方、蓋Ａ・杯Ａよりも明らかに後出する器種として、蓋Ｂ・杯Ｂがある。さらに遅れて蓋Ｃ・杯Ｃが出現する。いずれも金属器を模倣したものと考えられており、古墳時代から続く蓋Ａ・杯Ａとは型式学的な連続性は認められない。

蓋Ｂも法量とかえりの突出度の違いから大きく２群にわけることができ（蓋ＢａとＢｂ）、前者が杯Ｂａと、後者が杯Ｃとセットになると考えられる。ただし、今回出土した資料で、より詳細な型式学的変化を追いかけることは困難である。飛鳥地域などの研究成果を参照にすると、蓋Ｂが法量の小さなものから大きなものへと変化することが確認できる程度である。

③土師器の検討

土師器は上述ように量的に少なく、また、杯類などでは、在地系と都城系（模倣品を含む）のものが複数の系統を持って存在するなど、個々の器種ごとに型式学的な変遷を明らかにすることは困難である。ここでは、器種別の検討は避け、時期決定の上で重要な個体を取り上げたい。

まず、25号横穴出土の杯Ａ（８）は、径高指数[注27]が30で、内面の螺旋暗文の有無は不明であるが、

２段放射暗文を施していることから、飛鳥Ⅳを中心とする時期に位置づけられる。

次に31号横穴の杯Ａ(225・226)は、径高指数が22ないし26で、内面に２段放射暗文と螺旋暗文を施すことから、飛鳥ⅣないしⅤに位置づけられる。

34号横穴出土の杯Ｃ(343)は、径高指数が42で、内面に２段放射暗文を施すものの、螺旋暗文は施さない。径高指数からみると飛鳥Ⅰに近い資料であるが、２段放射暗文を施すことから飛鳥Ⅱ前後に位置づけられる可能性がある。

37号横穴出土の杯Ｃ(414)は、径高指数が34で、内面に１段放射暗文と螺旋暗文を施す。飛鳥ⅡないしⅢの位置づけられる。

最後に43号横穴出土の杯Ａ(549)は、径高指数が27で、内面に２段放射暗文を施すものの、螺旋暗文の有無は不明である。法量に違いがあるものの､31号横穴出土の杯Ａと共通する点があり、飛鳥ⅣないしⅤに位置づけられる｡ただし､549は玄室床面からかなり浮いた状態で出土しており、43号横穴の時期を決定しうる資料かどうかは断定できない。

３)横穴の時期変遷について

上記で述べてきた須恵器の変化と土師器の編年的位置づけ、ならびに飛鳥地域における編年研究の成果から、第13次調査出土の土器群の変遷と横穴の対応を付表５にまとめた。出土した土器の内容から、大きく３期区分(Ⅰ～Ⅲ期)とし、Ⅰ・Ⅱ期については２小期に細分した。また、Ⅰ期よりも先行するものとして30号横穴の最下層から出土した高杯杯部２点がある。これは、他に同時期のものが確認できず、Ⅰ期以前という時期設定をしたい。今回の調査地で横穴の本格的な造営が開始されるのはⅠ－１期からである。以下、各期の特徴をまとめる。

Ⅰ期　須恵器蓋Ａ・杯Ａを主体とする時期で、回転ヘラケズリを施す一群が主体となる時期をⅠ－１期、回転ヘラケズリが省略される一群が主体となる時期をⅠ－２期と細分する。Ⅰ－１期は須恵器蓋Ａａ・杯Ａａのほか、須恵器高杯Ａａ・Ｂａ、長頸壺Ａａ、短頸壺などの器種で構成される。これに対応する土師器の確実な例は確認できなかった。一方､Ⅰ－２期は須恵器蓋Ａｂ･杯Ａｂのほか、須恵器高杯Ａａ・Ａｂ・Ｂｂ、長頸壺Ａｂ・Ｂｂ、短頸壺・平瓶などの器種で構成される。この段階で平瓶が副葬土器群に加わる点が注意される。高杯Ｃ・Ｄや長頸壺ＣもⅠ－２期には確実に伴うが、これらの器種がⅠ－１まで遡るかどうかは今回の調査では明らかにできなかった。これに対応する土師器としては杯Ｂ、杯Ｃなどがある。Ⅰ－２期は、土師器杯Ｃの例(343・414)から、飛鳥編年のⅠ期新相からⅡ期、あるいはⅢ期までに位置づけられる。現在の年代観では７世紀の第２四半期から第３四半期にかけてを中心とすると考えられる。一方、Ⅰ－１期はこれよりも古く位置づけられることから、飛鳥編年のⅠ期、７世紀の第１四半期から第２四半期にかけての時期に位置づけられる。なお、第二京阪道路の建設に伴う調査報告の際の時期区分との対応は、Ⅰ－１期が６～７期に、Ⅰ－２期が７～８期である。(注28)

Ⅱ期　須恵器蓋Ｂａ･杯Ｂａを主体とする時期で､蓋Ｂａと杯Ｂａがセットととなる時期をⅡ－１期、蓋Ｂｂと杯Ｃがセットになる時期をⅡ－２期と細分する。Ⅱ－１期の器種構成は、須恵器蓋Ｂａ・杯Ｂａのほか、須恵器高杯Ｂｂ、長頸壺Ａｂ・Ｂｂなどで構成される。土師器は確実な

付表４　荒坂A支群横穴変遷表

横穴名	Ⅰ期以前	Ⅰ　期		Ⅱ期		Ⅲ期
		-1期	-2期	-1期	-2期	
25号横穴					(●)	
26号横穴		●				
27号横穴			●	○		
28号横穴		●	○			
29号横穴			●			
30号横穴	●	○		○		○
31号横穴		●		○		○
32号横穴	不明					
33号横穴			●			
34号横穴		●		○		
35号横穴		●	○	(○)		
36号横穴			●			
37号横穴			●			
38号横穴		●	○			
39号横穴				●?		
40号横穴			●?			
41号横穴		●?				
42号横穴		●	○			
43号横穴			●	○		○
44号横穴	不明					

※凡例：●造墓期、○追葬期

例が少ないが杯Ｃや杯Ａがあると考えられる。Ⅱ－１期は、土師器杯Ａの例(225・226)から飛鳥Ⅳを前後する時期、７世紀の第３四半期後半から第４四半期にかけてと考えられる。なお、須恵器蓋Ｂａ・杯Ｂａと蓋Ａｂ・杯Ａｂは型式学的にはつながらないため、両者が同時に存在する可能性もあることを指摘しておきたい。Ⅱ－２期の確実な例は25号横穴のみである。25号横穴の例では杯Ｃを伴わないが、都城域の例などから存在するものと想定しておきたい。時期的にはⅡ－１期と大きな時間差は存在しないが、飛鳥編年のⅣ期からⅤ期にかけての７世紀第４四半期を中心とする時期であろう。

Ⅲ期　須恵器蓋Ｃ・杯Ｃがセットとして存在する時期である。この時期に位置づけられるものとしては、30・31・43号横穴があり、いずれも築造時期を示すものではなく、追葬に伴うものである。これに伴う可能性のあるものとして、須恵器長頸壺Ｄがある。土師器の例は不明である。須恵器蓋Ｃの形態から、平城宮土器編年のⅡ・Ⅲ期、８世紀の第１・２四半期に位置づけられる。出土点数が少ない割に時間幅をやや広くとっているのは、43号横穴出土の須恵器蓋Ｃ(544)のように口縁端部が屈曲するという特徴を持つ須恵器蓋の出現が８世紀中頃と考えられているからである。(注29)　（筒井崇史）

４)横穴の構造について

①配置について

今回の調査では、南東向きの丘陵斜面において20基の横穴を検出した。北東端に位置する25号横穴から南西端で検出した44号横穴までは、芯心間でおよそ62ｍの距離にあり、各横穴間の間隔が最も離れるものは６ｍ程、近接するものは２ｍ程である。32・33号横穴のように、墓道が重複する例も認められ、狭い範囲に密集して配置されている。

横穴の時期については後述するが、30号横穴からは、Ⅰ期以前(TK209型式段階)の遺物が出土しており、今回検出した横穴の中で最初に築造された１基と判断される。その後、Ⅰ－１期に26・28・31・34・35・38・41・42号横穴が築造されることとなる。各横穴間は６ｍ～13ｍ程と、

広く間隔を設けて配置されており、34・35号横穴や、41・42号横穴のように隣接して造られた横穴間でも、５ｍ前後と広めの間隔を有している。その後、Ⅰ－２期にその間隙を埋めるように27・29・33・35・36・37・40・43号横穴が築造されていく。Ⅱ－１期には39号横穴が、そしてⅡ－２期には25号横穴が築造されている。32号横穴については､玄室内から良好な遺物の出土がなく、時期を比定することが困難であるが､その墓道が33号横穴の墓道を一部掘り込んでいることから、Ⅰ－２期以降の築造と考えられる。

上記のような在り方は、横穴を築造する際に、先行して存在する横穴への影響を避けるため、計画的な配置を行っていたためと推測される。近接せざるを得ない横穴間では、玄室位置を前後に違えて構築していたり、墓道や玄室床面に標高差を設ける等の工夫が見受けられる。新たに築造される横穴が標高を高くする傾向も見て取れる。

②横穴の形態について

今回調査を実施した横穴は19基におよび、このうち15基は検出段階で天井が残存していることが判明した。そのため、横穴調査では初めての試みとして、３次元レーザー測量を実施し、記録作成を行った。その結果、これまで判然としなかった横穴の立体構造を検討する上で貴重な資料を得ることができた。奥壁の形状には、床面から天井へ直立させるタイプ(26～33・36・38～40・42～44号横穴)と、緩やかに前傾しながらアーチを描くタイプ(25・34・35・37・41号横穴)の２者が確認できた。また、天井の形態については、崩落により当初の形態を留めていないと考えられるが、奥壁上部に残されたわずかな痕跡から、テント状に三角形に掘削するタイプと、丸くドーム状に掘削するタイプの２者の存在が窺える。これらの形態に時期差は認められず、築造集団の系譜の違いを反映したものと考えられる。また、羨道と玄門部に段差を設け、玄室の床面を高くする横穴(25・28・29・32・34・39・41～43号横穴)も確認した。

横穴の規模に関しては、Ⅰ－１期には、28・31号横穴のように墓道先端が調査区外へと延びていき、全容が不明ながら15mを超える横穴や、13～14mを測る横穴(34・38・41・42号横穴)が中心となっている。Ⅰ－２期になると、９～11m程の規模が中心となっていく。Ⅱ－１・２期は、検出例が各１点ずつと少なくなっているので様相は不明であるが、新しく築かれた横穴ほど小規模化していく傾向が看取される。この他、注目すべき成果としては、以下の事項が挙げられる。41・42号横穴では玄室に両袖を削り出していた。41号横穴では、墓道先端から8.4mの床面に設けられた段差を玄門と判断しており､袖部はそこからさらに２m程奥壁寄りに削り出されている。そのため、玄門と袖部の間に空間が生じている。42号横穴でも同様のことが指摘できる。42号横穴では、この空間に遺物の副葬が顕著であり、玄室奥側の空間では中央部に改葬骨が安置されていた。玄室の形態の差異はこのような利用形態に基づく可能性が考えられる。26・28号横穴の奥壁には棚状遺構が削り出されていた。床面からの高さは26号横穴が1.0m、28号横穴が0.8m、奥行は前者が0.3～0.4m、後者が0.2～0.3mをそれぞれ測る。どちらも棚上に載せられている遺物等は確認できなかった。今回の調査ではこの２基のみで検出されており、他の横穴では確認されていない。これまでの女谷・荒坂横穴群の調査においても、同様の遺構の検出例は報告されていな

い。荒坂Ｂ支群２・３・４・13号横穴、女谷Ｄ支群２号横穴では玄室床面で礫床が検出されている。しかし、今回の調査ではそうした遺構は検出されていない。また、女谷Ｂ支群での検出が顕著であった墓道端土坑も検出されず、横穴内に施工された排水施設等も検出されなかった。

③埋葬方法について

埋葬方法に関しては、これまで出土した人骨に基づき、改葬の在り方等を検討することに主眼が置かれていた。木棺等の使用の有無については､その存在を推測させる鉄釘等の出土が少なく、積極的に検討の俎上に載せるには至っていなかった。しかし、平成21・22年度に実施した女谷Ｄ支群の発掘調査では、３号横穴からまとまった数の鉄釘が出土し、木棺の使用を窺わせる資料を得ることができた。今回の13次調査では、８基の横穴から合わせて鉄釘154点が出土している。これは、図化できたものに限られ、出土点数はさらに多数ある。37号横穴では、先端部を内側に向け長方形に配列された鉄釘が30点余り出土している。これは、木棺の痕跡を示していると考えられ、埋葬方法として木棺が使用されたことを裏付けるものであろう。この他にも、27号横穴からは19点、29号横穴からは33点、31号横穴からは21点、32号横穴からは35点の鉄釘が出土している。また､26号横穴では改葬された人骨が長さ2.0m､幅0.5mの範囲に納まるように出土している。これについても木棺の使用を類推させる成果である。木棺本体の木質は遺存しておらず、使用された鉄釘のすべてが残存していない状況から、検討を進めるにはさらなる類例の蓄積が必要であろう。

さらに注目される成果として、34号横穴で組み合せ式石棺を１基検出した。女谷・荒坂横穴群での石棺出土は初例であり、山城南部地域の横穴から出土した例としても、堀切谷６号横穴に次いで２例目となる。石棺は、蓋石及び底石が３石ずつ、小口と側石は２石ずつの計10石で構成されており､初葬時の副葬遺物が埋没したのちに横穴内に運び込まれ､据え置かれたと考えられる。内法が小さく､伸展での埋葬が困難であると考えられることから､改葬骨を納めた可能性が高い。先にも述べたとおり、石材も本来とは異なった位置で使用され、石材に施された刳り込み、切り欠き等の加工も整合していないことから、他からの転用を窺わせる資料である。本来の使用箇所の特定を含め、検討すべき点が多く残されている。

閉塞に関しては、いずれの横穴においても、土砂を盛り上げることにより行っていたものと判断される。34号横穴で確認されたように、羨道及び玄門付近の天井は1.0mに満たない高さと考えられ、羨道入口から奥壁側へ土砂を積み上げ閉塞を行っていたと考えられる。また、32・33号横穴では、玄門部に横穴の主軸方向と直交する溝が掘削されていた。32号横穴は、上面幅0.3m、深さ0.1～0.2mを測り、にぶい黄褐色砂質土で埋没していた。33号横穴は、上面幅0.2m、深さ0.1～0.2mを測り、褐色砂質土で埋没していた。いずれにおいても、中から遺物は出土していない。狐谷横穴群２・５号横穴や、荒坂Ｂ支群４号横穴で同様の遺構が検出されており、この溝に板戸を立てかけて閉塞した可能性が指摘されているが、今回の調査では、有機物等の痕跡は確認できなかった。

④出土人骨について

今回の調査では、20体余りの人骨が出土した。しかし、遺存状況は良好とはいえず、横穴内での在り方にもさまざまな様相が確認できた。26号横穴では、玄室左側壁寄りで少なくとも５体分が出土した。解剖学的な位置を留めておらず、改葬に伴い集骨されたと判断される。頭蓋骨の下には、須恵器が枕として転用されていた。28号横穴では、奥壁寄りと中央左右側壁寄りの３か所から集中して出土した。いずれも長管骨を残すのみで、改葬が行われていた。32号横穴では頭蓋骨を２体分確認した。玄室中央付近に集中しており、改葬が行われていた。34号横穴では、石棺の中から出土している。わずかに長管骨を残すのみであった。35号横穴では、右側壁際で少なくとも３体分、左側壁際で１体分が出土した。右側壁際のものは解剖学的な位置関係を留めず、改葬が行われていた。人骨の出土が長さ1.6m、幅0.8mの範囲に納まっており、集骨にあたって木棺等が利用されたと考えられる。また、左側壁際の１体は、石を枕とした頭蓋骨を中心に耳にあたる地点で耳環が１点ずつ出土しており、頭蓋骨から0.8m程奥壁側で大腿骨が２点並んで出土した。これらは解剖学的位置を留めていると考えられ、埋葬後、何らかの事情により改葬が行われなかったものと判断される。42号横穴では、玄室奥側の中央付近で数点の長管骨が出土した。人骨が出土した地点には、玄室の主軸方向に沿って1.6mの間隔で両端に石材が列状に並べられていた。この石材配置の中軸から人骨までは0.4mを測り、反対側に折り返すと0.8mとなる。これは、35号横穴で復元した木棺の範囲と同じ数値となり、木棺の使用があったと仮定した場合、その大きさに規格性を窺わせる。43号横穴では、玄室左側壁の最奥部から出土しており、遺存状態は良好ではなかった。改葬の有無に関しては不明であるが､付近から耳環が１点出土している。この人骨に伴うと考えられる須恵器は８世紀中葉に位置付けられ、これまで女谷・荒坂横穴群の墓としての利用は飛鳥時代には終息すると考えられていたが、奈良時代まで継続して利用していたことが判明した。

今回の調査では、以上のように多くの人骨が出土した。この中で、複数の頭蓋骨が良好に残存した横穴を対象に、血縁関係および性別に関する情報を得ることを目的として、DNA分析を実施した(注30)。対象としたのは26・35号横穴から出土した人骨各３体の合計６体で、歯を対象として実施した。対象資料の詳細は付表４である。結果として、血縁関係を分析するために必要な情報が得られた資料は、No.1とNo.2だけであった。この２者には血縁関係はないとの結果が得られており、同一の横穴に血縁関係のない被葬者の存在が証明された。なお、性別に関しては、全員が男性であるとの結果が得られている。（奈良康正）

付表５　DNA分析を実施した歯の一覧

ｻﾝﾌﾟﾙNo	試料名	部位	重さ（g）	近遠径（mm）	頬舌径（mm）	歯冠長（mm）	歯根長（mm）	備考
1	26-1	右上顎第３後臼歯	0.943	10.55	11.09	7.48	-	遊離歯牙，咬耗わずか
2	26-2	右上顎第１後臼歯	1.015	11.87	12.15	7.04	-	植立歯牙，M2 部歯槽吸収，象牙質ほぼ全面露出
3	26-3	右上顎第１後臼歯	1.707	12.15	12.95	5.32	14.55	遊離歯牙，象牙質ほぼ全面露出
4	35-1	左下顎第１後臼歯	1.62	12.15	11.42	6.97	13.45	遊離歯牙，咬耗わずか
5	35-2	左上顎第１後臼歯	1.315	10.34	11.54	7.11	14.54	植立歯牙，象牙質点状露出
6	35-3	右上顎第１後臼歯	0.725	9.88	11.59	5.48	15.32	植立歯牙，象牙質全面露出，近心側火口状う触？

5）おわりに

女谷･荒坂横穴群では、今回を以て80基に及ぶ横穴の発掘調査を実施したことになる。しかし、調査を実施したのは、開発により影響を受ける遺跡範囲の一部に過ぎない。当横穴群の未調査部分には、未周知の横穴が高い確率で存在するものと考えられる。既存の調査状況と同様の密度で築造されていると仮定すれば、全域では総数300基を大きく超える横穴の存在が推測され、府内屈指の横穴群となる可能性が高い。

また、丘陵を異にするが、隣接する松井横穴群においても、多くの横穴が検出されつつある。このことからも、美濃山丘陵一帯は横穴築造の集中地域であり、両者を合わせればさらに総数は増大することとなる。

近畿地方で確認された大規模な横穴群としては、奈良県天理市に所在する龍王山横穴で確認された292基や、大阪府柏原市に所在する高井田山横穴で確認された162基が知られているが(注31)、当横穴群は、基数だけをとらえると両者に匹敵する規模のものとなる。女谷・荒坂横穴群で構築された横穴は、その多くが軟弱な大阪層群に穿たれており、築造段階、使用段階において常に崩落の危険性を抱えていたと考えられる。そうしたことから、当地域は墓域を継続的に形成するには、決して適地であるとは言い難い。そうであるにもかかわらず、なぜこの一帯に横穴の構築を続ける必要があったのか、その要因については、さらなる検討が必要である。

（奈良康正）

（２）荒坂遺跡第５次調査

１．はじめに

荒坂遺跡の発掘調査は、平成23年度に新名神高速道路整備事業に伴って、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。同年度には荒坂遺跡のほか、美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡の２遺跡について調査を実施し、すでに報告している(注32)。

荒坂遺跡は、美濃山丘陵上に立地する古墳時代から奈良時代の集落跡である。この丘陵の北西側に美濃山廃寺や美濃山廃寺下層遺跡があり、東側に女谷・荒坂横穴群が所在する。

これまでの調査では、平成４年度に古墳の周溝と思われる溝や、掘立柱建物が検出されている（第１次調査(注33)）。また、平成14年度には、縄文時代と考えられる土坑を検出した。土坑からはサヌカイトの母岩が出土している（第４次調査(注34)）。

２．調査概要

平成23年度の調査地は、荒坂遺跡の遺跡範囲の南西部に位置する。調査は４地点（Ａ～Ｄ地区）で合計６か所の調査区を設定して実施した。いずれの調査区も調査前は竹林で、土入れのために地形が大きく改変されていることが予想された。いか、各調査区の概要について述べる。

１）Ａ地区（第２・123図）

Ａ地区の地形は東側の平坦部から西へ向かって傾斜している。現地形の標高は、東側の平坦地で約45m、西側では約44.2mを測る。調査は、東側の平坦部から西側の斜面（谷部）に向かって幅約４ｍ、東西の長さ約20mの長方形の調査区を設定し実施した。調査の結果、東端では標高約44.1mで明赤褐色粘質土の地山層を、西端では標高約42.2mで明黄褐色粘質土の地山層を確認した。第１～７層までは、現代まで続く竹林の入れ土と判断した。第９層は旧表土層、第10・11層は地山層である。東側の平坦部および西に傾斜する斜面地で遺構精査を行ったが遺構・遺物は確認できなかった。

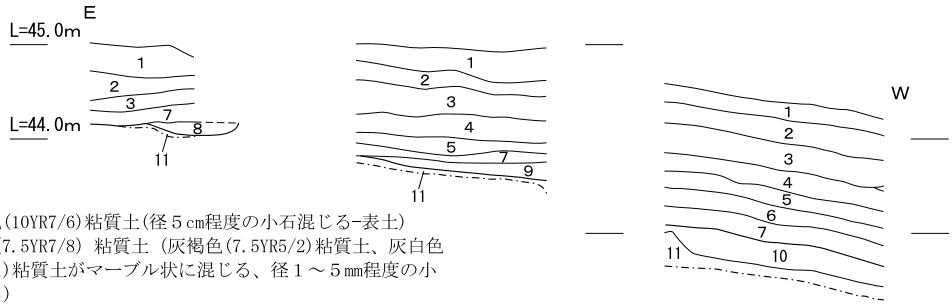
２）Ｂ地区（第２・123図）

Ａ地区より北西に約100mの地点に設定した幅約３ｍ、南北の長さ約８ｍの調査区である。第１～８層までは竹林の入れ土である。第９層は盛土以前の地表面であったと考えられる。第９・10層は北に向かって緩やかに傾斜し堆積している。現地表面から約1.4m下で地山層（第13・14層）を検出した。第11・12層はほぼ水平で各層は現状の地形と同様に東側に向かって傾斜していることが確認できた。調査によって、本来の地形は平坦地ではなく、近年に竹林の入れ土によって造成された地形であることがわかった。遺構・遺物は確認できなかった。

３）Ｃ地区（第２・124図）

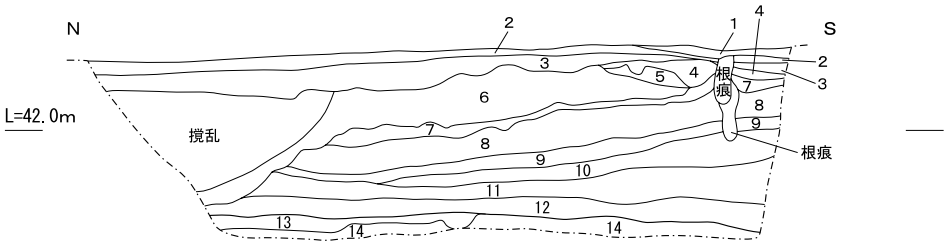
Ｃ地区では、Ｂ地区より北西に約40mの地点に南北方向に２か所の調査区を設定した。２か所のうち、北側に設定したＣ－１トレンチは、幅約２ｍ、南北の長さ約10mの調査区である。現地

A地区南壁



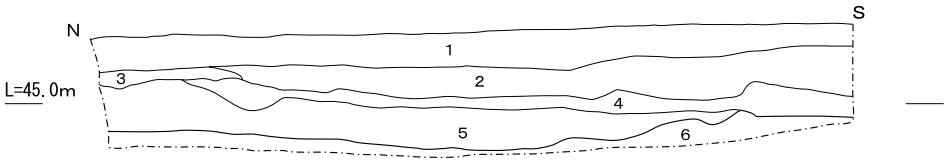
1．明黄褐色(10YR7/6)粘質土(径５cm程度の小石混じる-表土)
2．黄橙色（7.5YR7/8）粘質土（灰褐色(7.5YR5/2)粘質土、灰白色(10YR7/1)粘質土がマーブル状に混じる、径１～５㎜程度の小石混じる）
3．橙色(7.5YR6/8)粘質土（褐色(7.5YR4/3)粘質土マーブル状に混じる、径１～５㎜程度の小石混じる）
4．橙色(7.5YR6/8)粘質土（褐灰色(5YR4/1)粘質土多く混じる。灰白色(10YR7/1)粘質土がマーブル状に混じる、径１～５㎜程度の小石混じる）
5．橙色(5YR6/8)粘質土（褐灰色(7.5YR5/1)粘質土混じる）
6．明黄褐色(10YR6/6)粘質土(極細粒)（灰黄褐色(10YR5/2)粘質土が多く混じる、径５㎜程度の小石をわずかに含む）
7．明黄褐色(10YR6/6)粘質土(極細粒)（灰黄褐色(10YR6/2)粘質土混じる、径５㎜程度の小石をわずかに含む）
8．橙色(5YR6/8)粘質土（灰黄褐色(10YR6/2)粘質土がまだらに混じる）-撹乱(根痕)
9．明黄褐色(10YR7/6)粘質土（灰黄褐色(10YR6/2)粘質土混じる）-旧表土と地山の混合層
10．明黄褐色(10YR7/6)粘質土
11．明赤褐色(5YR5/6)粘質土　　地山層

B地区東壁



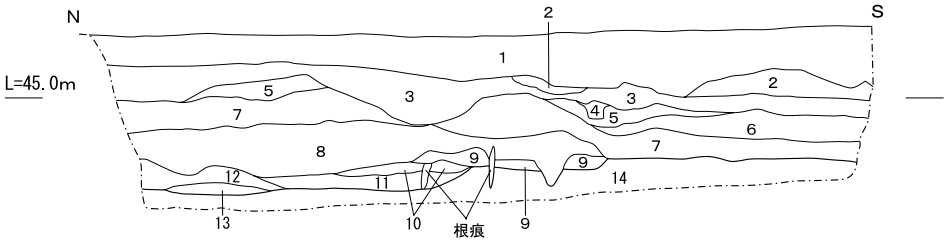
1．灰黄色(2.5Y6/2)粘質土（橙色(5YR6/8)粘質土・礫混じる）-表土
2．暗灰色(N3/1)粘質土(礫層)-表土、現代の盛土
3．にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土（橙色（5YR6/8）粘質土ブロック含む、径５cm程の石含む）-現代の盛土
4．にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土（径３㎜ほどの小石混じる）
5．にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（根痕にともなう埋土）
6．にぶい黄色（2.5Y6/4）粗砂礫（径２～３cmほどの小石を含む）
7．黒褐色（5YR2/1）粘質土（黄褐色（10YR5/6）粘質土混じる）
8．明褐色(7.5YR5/6)粘質土、褐灰色(10YR4/1)粘質土、灰白色(5Y7/1)粘質土がマーブル状に混じる
9．明褐色(7.5YR5/6)粘質土（灰色(10Y5/1)粘質土(泥層)を挟む。灰黄褐色(10YR5/2)粘質土がマーブル状に混じる）
10．明褐色(7.5YR5/6)粘質土（灰色(5Y5/1)粘質土混じる、径５㎜程度の小石混じる）
11．明褐色(7.5YR5/6)粘質土（灰色(5Y5/1)粘質土多く混じる、径0.5～１cmの小石多く混じる）
12．明黄褐色(10YR6/6)粘質土（灰色(N5/)粘質土混じる、径0.3～１cmの小石が少し混じる）
13．明青灰色(5BG7/1)（黄橙色（7.5YR7/8）粘砂混じる）-地山
14．明青灰色(5BG7/1)粘質土（黄橙色（7.5YR7/8）粘土混じる）-地山

C-１tr東壁



1．褐灰色(7.5YR5/1)砂礫層(整地バラス)
2．灰褐色(7.5YR5/2)粘質土(炭混入・埋め立て土)
3．にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土
4．にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土
5．明褐色(7.5YR5/6)粘質土
6．明黄褐色(10YR6/6)粘質土

C-２tr東壁

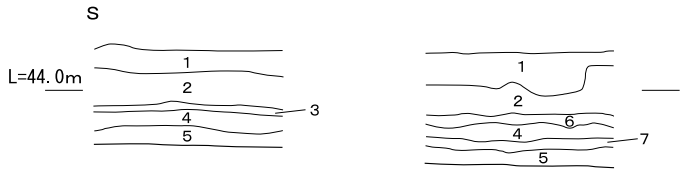


1．褐灰色(10YR4/1)礫層(整地バラス)
2．浅黄橙色(10YR8/4)粘質土(埋め立て土)
3．浅黄橙色(10YR8/3)粘質土(埋め立て土)
4．明黄褐色(10YR7/6)粘土
5．灰黄褐色(10YR6/2)粘質土
6．にぶい黄褐色(10YR5/3)砂礫土(１～３cm大の礫)
7．褐色(10YR4/1)粘質土
8．灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
9．灰褐色(7.5YR5/2)粘質土
10．にぶい褐色(7.5YR5/3)粘質土
11．褐色(7.5YR4/1)粘質土
12．にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土
13．浅黄橙色(10YR8/4)砂質土
14．明黄褐色(10YR7/6)砂質土

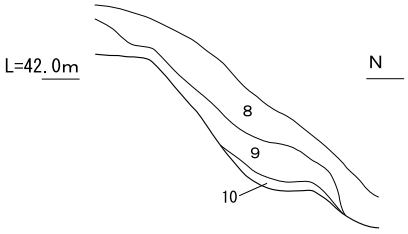


第123図　A～C地区土層断面図

D－1tr南壁断面図

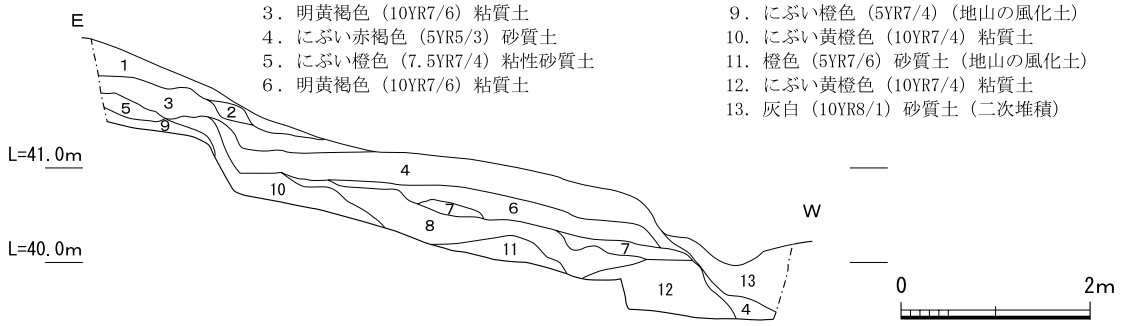


1．灰褐色（5YR4/2）砂質土（現表土）
2．にぶい黄褐色（10YR7/2）粘質土
3．にぶい橙色（5YR7/3）粘質土（粗砂混じり）
4．明黄褐色（10YR6/6）粘質土
5．黄橙色（10YR7/8）粘質土
6．にぶい黄橙色（10YR7/4）粘質土
7．明黄褐色（10YR7/6）粘質土
8．橙色（7.5YR6/6）粘質土
9．橙色（7.5YR7/6）粘質土
10．浅黄色（2.5YR7/3）粘質土（粗砂混じり）



D－2tr南壁断面図

1．灰褐色（5YR4/2）砂質土（竹根：現表土）
2．にぶい橙色（5YR6/3）粘質土
3．明黄褐色（10YR7/6）粘質土
4．にぶい赤褐色（5YR5/3）砂質土
5．にぶい橙色（7.5YR7/4）粘性砂質土
6．明黄褐色（10YR7/6）粘質土
7．にぶい橙色（5YR6/3）砂質土
8．黄橙色（10YR7/8）粘質土
9．にぶい橙色（5YR7/4）（地山の風化土）
10．にぶい黄橙色（10YR7/4）粘質土
11．橙色（5YR7/6）砂質土（地山の風化土）
12．にぶい黄橙色（10YR7/4）粘質土
13．灰白（10YR8/1）砂質土（二次堆積）



第124図　D地区土層断面図

表面から約１m下で地山層（第６層）を検出した。第１～４層までは､竹林の入れ土である。第５･６層で遺構精査を行ったが遺構・遺物は確認できなかった。また、南側に設定したC－２トレンチは、幅約２m、南北の長さ約10mの調査区で、現地表面から約1.2m下で地山層（第14層）を確認した。第１～８層までは、現代の盛土による造成である。地山面である第14層の上面は北に向かって緩やかに傾斜し、その傾斜地に第９～13層が堆積している。第９層以下、各層で遺構・遺物の確認に努めたが確認できなかった。

４）D地区（第２・124図）

美濃山廃寺および美濃山廃寺下層遺跡が所在する丘陵頂部の南西側にあたる。調査区は、C地区の北側の微高地状の上部から斜面地の２か所に設定した。

D－１トレンチは、微高地の頂部から北に傾斜する斜面に設定した幅約５m、南北の長さ約30mの調査区である。頂部の平坦地では現地表下から約1.4m下で地山層を検出した。現地表面から約0.6m（第１～３・６層）までは竹林の入れ土である。地山面で遺構精査に努めたが、遺構・遺物は確認できなかった。

D－２トレンチは、微高地から西に傾斜する斜面地に設定した幅約３m、東西の長さ約７mの調査区である。現地表面から約１m下で地山面を検出したが、堆積状況は現地形と同様に、西に

傾斜する堆積層(第１～13層)を確認したのみで、遺構・遺物は確認できなかった。

３．小結

今回、荒坂遺跡では、４地点で計６か所のトレンチを設定して調査を実施した。

Ａ地区は、平成４・14年度の調査地に近く、古墳や掘立柱建物に関連する遺構の検出が期待されたが、遺構・遺物は確認できなかった。Ｄ地区も、美濃山廃寺下層遺跡に近接することから、縄文時代から弥生時代にかけての遺構・遺物の検出が期待されたが、確認できなかった。その他の地区では、旧地形(地山面)を確認し、調査前の丘陵の傾斜地である現状の地形は、旧地形の傾斜とさほど変わっていないことが明らかになった。遺構・遺物は確認できなかった。

(村田和弘)

注１　岩松保ほか『女谷・荒坂横穴群』(『京都府遺跡調査報告書』第34冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2004

注２　引原茂治・松尾史子「女谷・荒坂横穴群第11・12次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2011

注３　奈良文化財研究所の土器類の分類については、下記の文献を参照。
奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊)　1976、同『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊)　1978　など

注４　長頸壺の分類については、下記の文献を参照した。
増田一裕「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」(『土曜考古』第19号　1995)

注５　畿内産土師器の定義については下記の文献を参照。
林部均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学雑誌』第72巻第１号　日本考古学会　1986)、同「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』第39巻第３号　考古学研究会　1992)など

注６　ここでは、飛鳥･藤原地域や平城宮･京域で主体的に出土するものを「都城系」土師器と呼ぶ。これは「畿内産土師器」と呼ばれるものとほぼ同一のものを指すものとするが、生産地については、例えば京都府南部地域のように、畿内であっても「畿内産土師器」の生産地とは断定できない地域があり、当該地域では「畿内産土師器」の在地での模倣品が存在すると考えられることから、無用な混乱を避けるために、あえて「都城系」の用語を用いることにしたい。

注７　飛鳥地域の編年は西広海氏によってまとめられた後、その後の新出資料等を加えて少しずつ年代観などに変化が認められる。研究史的に重要なのは以下の報告である。
西広海「土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥･藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊)奈良国立文化財研究所)　1978、西口壽生「遺物　小結」(『飛鳥･藤原宮発掘調査報告Ⅳ』(『奈良国立文化財研究所学報』第55冊)奈良国立文化財研究所)　1995、深澤芳樹「山田寺下層の土器について」(『山田寺発掘調査報告』(『奈良文化財研究所学報』第63冊)奈良文化財研究所)　2002

注８　「補助ケズリ」は、須恵器の蓋杯類をロクロ台から切り離す際に、ヘラ状工具を差し込んで生じるケズリ状の痕跡をさす。工程としては回転ヘラケズリなどと異なり、あくまでも切り離しに際して生じた痕跡であるが、最初に注目された際の名称をそのまま使用している。

菱田哲郎ほか「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」(『鬼神谷窯跡群』(『竹野町文化財調査報告書』第７集) 竹野町教育委員会) 1990

注９　耳環の観察や製作技法については下記文献を参照した。
渡辺智恵美「一須賀古墳群出土耳環の自然科学的調査」(『大阪府立近つ飛鳥博物館　館報』16　大阪府立近つ飛鳥博物館) 2012

注10　松本百合子「耳飾」(『古墳時代の研究８(古墳Ⅱ　副葬品)』 雄山閣) 1991　106～110頁

注11　鉄鏃の記述にあたっては下記の文献を参照した。
杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」(『橿原考古学研究所論集』８　奈良県立橿原考古学研究所) 1988

注12　古墳時代の須恵器の編年については下記の文献を参照した。
田辺正三『須恵器大成』(角川書店) 1981、宮崎泰史ほか『年代のものさし－陶邑の須恵器－』(『大阪府立近つ飛鳥博物館図録』40　大阪府立近つ飛鳥博物館) 2006

注13　石棺石材の材質、他遺跡での類例等については橋本清一氏(元山城郷土資料館)のご教示を得た。あわせて、府内の石棺石材のほとんどは兵庫県高砂市の竜山石を使用しているとの教示も得た。

注14　山城地域における、須恵器蓋Ａ・杯Ａの頂部もしくは底部の回転ヘラケズリ調整の省略と法量の関係については下記の文献を参照。
筒井崇史「飛鳥時代須恵器杯Ｈの地域性について」(『京都府埋蔵文化財論集』第５集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

注15　ここで述べる手法名は奈良文化財研究所が使用されているものである。
神野恵「土器類」(『平城宮発掘調査報告XVI』(『奈良文化財研究所学報』第70冊　奈良文化財研究所) 2005など。

注16　伊賀高弘「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要　(２)荒坂遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注17　久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第８冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注18　佐藤虎雄「美濃山の横穴」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10冊　京都府) 1928

注19　奥村清一郎「南山城の横穴」(『京都考古』第27号　京都考古刊行会) 1982

注20　高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1969)』 京都府教育委員会) 1969

注21　池田次郎「法貴Ｂ１号墳および堀切６号横穴の改葬人骨と近畿におけるその類例」(『橿原考古学研究所論集』第12　橿原考古学研究所) 1994

注22　同志社大学校地学術調査委員会編「飯岡横穴の調査」(『古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書』 田辺町教育委員会) 1980

注23　川西宏幸「第三節 国家の形成」(『山城町史 本文編』 山城町) 1987

注24　注１・２文献

注25　注14文献

注26　神戸市教育委員会富山直人氏にご指摘いただいた。

注27　土器の口径と器高の割合を示すものとして、径高指数を使用する。径高指数は「器高/口径×100」で算出する。奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(1976)　81頁など。

注28　岩松保「横穴の築造順位」(注１文献　127～137頁)

注29　杯Ｂ蓋の口縁部の形態は奈良国立文化財研究所(当時)の分類ではＡ形態とされる(奈良国立文化財研

究所編『平城宮発掘調査報告Ⅺ』 1981)。この種のものは平城宮土器Ⅱに出現し、それ以降に一般化するという(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』 1991)

注30　歯牙の咬耗状況から推定される年齢は以下のとおりである。ただし、片山(1990)も指摘しているように、歯の咬耗すなわち歯の歯冠部分の咬合面の摩耗は、食物の種類や調理内容に強く関係している。したがって、年齢については、頭蓋骨の縫合状態なども含めて総合的に判断する必要がある。

【No.1】左右第１後臼歯では象牙質がわずかに露出、第３後臼歯ではエナメル質がわずかに咬耗する程度である。これより、壮年(20～39歳程度)後半以降の可能性がある。

【No.2】右上顎第２後臼歯の歯槽部は吸収。第３後臼歯は未検出で、歯槽部も破損。左右上顎第１後臼歯とも象牙質が全面露出。これより、熟年(40～59歳程度)以降の可能性がある。

【No.3】第３後臼歯の歯槽部は破損。右上顎第１・２後臼歯、右上顎第１後臼歯とも象牙質が全面に露出。これより、熟年(40～59歳程度)以降の可能性がある。

【No.4】右下顎第３後臼歯は、歯槽が開放することから萌出済みとみられる。右第１・２後臼歯ともわずかに咬耗する程度。これより、成人(16歳程度以上)に達していたとみられ、咬耗状況からみると壮年(20～39歳程度)前半の可能性がある。

【No.5】右第３後臼歯は萌出済みとみられる。右第１～３後臼歯ともわずかに咬耗する程度。これより、成人(16歳程度以上)に達していたとみられ、咬耗状況からみると壮年(20～39歳程度)前半の可能性がある。

【No.6】右上顎第３後臼歯は、歯槽が開放することから萌出済みとみられる。右第１後臼歯は象牙質が全面に露出。これより、熟年(40～59歳程度)以降の可能性がある。

引用文献

片山一道『古人骨は語る－骨考古学ことはじめ－』 1990　210頁

注31　横穴の基数に関しては次の文献に依る。

斎藤忠・杉山博久編『古墳時代文化基礎資料日本横穴地名表』 1983

注32　村田和弘ほか 「美濃山廃寺第６次・美濃山廃寺下層遺跡第９次」(『京都府遺跡調査報告集』 第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013

注33　伊賀高弘 「京都南道路関係遺跡平成４年度発掘調査概要 （２）荒坂遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注34　岩松保 「第４章　平成14年度の調査　荒坂遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』 第34冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

参考文献

八幡市教育委員会『八幡市遺跡地図　2005年版』(八幡市教育委員会) 2005

筒井崇史・関広尚世ほか「美濃山廃寺第７次・美濃山廃寺下層遺跡第10次」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013

付表６　出土土器観察表

報告番号	種類	器種	法　量（単位は cm）			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
			口径	器高	底径						
25 号横穴											
1	須恵器	蓋Ｂｂ	12.2	2.4	－	完形	やや粗（Ⅱ群か）	灰白色（7.5Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり、胎土は３と類似
2	須恵器	蓋Ｂｂ	15.3	4.4	－	5/12	密（Ⅲ群）	青灰色（5B5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪み著しい、外面全体に灰が付着
3	須恵器	蓋Ｂｂ	20.1	2.4	－	9/12	密（Ⅱ群か）	灰白色（5Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪み著しい、外面の大半に灰が薄く付着
4	須恵器	長頸壺	10.0	（4.2）	－	3/12	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	口縁部内外面；回転ナデ	外面に灰が付着、内面に自然釉が少量付着
5	土師器	蓋Ａ	11.0	（2.1）	－	3/12	密（Ａ群）	橙色（5YR6/8）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	６～８と胎土・色調が類似、全体に磨滅著しい、いわゆる畿内系土師器か
6	土師器	蓋Ｂ	18.0	3.9	－	5/12	密（Ａ群）	橙色（5YR6/6）	良好	口縁部；ヨコナデ、頂部内面；ナデ、頂部外面；ミガキ、	５・７・８と胎土・色調が類似、外面の剥離著しい、いわゆる畿内系土師器か
7	土師器	杯Ａｂ	12.0	（3.2）	－	3/12	密（Ａ群）	橙色（5YR6/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	５・６・８と胎土・色調が類似、放射暗文あり、いわゆる畿内系土師器か
8	土師器	杯Ａａ	17.4	5.3	－	10/12	密（Ａ群）	橙色（5YR6/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面上半；ミガキ、外面下半；ケズリ	５～７と胎土・色調が類似、２段放射暗文あり、底部の螺旋暗文の有無は磨滅のため不明、いわゆる畿内系土師器か
9	土師器	片口鉢	17.0	9.7	－	9/12	密（Ｂ群か）	浅黄色（10YR8/4）～にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面上半；ナデ、外面下半；ハケ	黒斑あり
10	土師器	甕Ａ	14.3	13.0	－	9/12	密（Ｂ群）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部外面・端部；ヨコナデ、口縁部～底部内面；ハケ、体部～底部外面；ハケ	うすい黒斑あり、ハケ工具に違いあり（２種類）
11	土師器	甕Ａ	13.7	（12.5）	－	11/12	密（Ｂ群）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部内面・体部上半；ハケ、体部下半～底部内面；ハケのちナデ、口縁部外面；ヨコナデ、体部上半外面；ハケ、体部下半～底部外面；ハケのちナデ	黒斑あり、ハケ工具に違いあり（３種類）
12	土師器	甕Ａ	12.4	12.9	－	7/12	密（Ｂ群か）	明赤褐色（5YR5/8）	良好	口縁部外面・端部；ヨコナデ、口縁部内面；ハケ、体部内面；ハケのちナデ、底部内面；ユビオサエ・ナデ、体部～底部外面；ハケ	ハケ工具に違いあり（２種類）
26 号横穴											
20	須恵器	蓋Ａａ	13.5	3.8	－	11/12	密（Ⅱｂ群）	灰白色（N7/0）～灰色（5Y6/1～N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みが著しい、焼成時に土器片が融着、内面の 1/2程度と外面はわずかに灰が付着
21	須恵器	蓋Ａａ	13.4	3.4	－	完形	密（Ⅱａ群）	灰色（N6/0～N4/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	わずかに焼け歪みあり
22	須恵器	蓋Ａａ	12.5	3.2	－	ほぼ完形	密（Ⅱａ群）	外面;灰色（N6/0）、内面;灰色（N5.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	外面に灰や窯壁等の破片が付着
23	須恵器	蓋Ａａ	12.5	4.0	－	10/12	密（その他）	外面；黒色（N3/0）内面；浅黄色（2.5Y7/3）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	生焼け気味、外面全体にススが付着（不完全燃焼によるススの付着か）
24	須恵器	杯Ａａ	12.7	3.4	－	完形	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0～N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	
25	須恵器	杯Ａａ	12.8	3.7	－	完形	密（Ⅱ群）	灰白色（N7/0～6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みが著しい、外面の大半に灰が付着（一部自然釉となる）

26	須恵器	杯Ａｂ	12.3	4.0	－	完形	密（Ⅱａ群）	外面；灰白色（N7/0）～灰色（7.5Y7/1）、内面；灰白色（N7.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり、外面の 1/2 程度に灰が付着
27	須恵器	杯Ａａ	12.0	3.2	－	8/12	密（Ⅳ群）	外面；灰色（N6/0）～ 10Y5/1）、内面；灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	
28	須恵器	高杯Ａ蓋	14.0	4.8	－	ほぼ完形	密（Ⅳ群）	灰白色（N7/0 ～ N6/0）、内面；灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪み大きい
29	須恵器	高杯Ａａ	12.7	14.8	11.4	8/12（底 8/12）	密（Ⅳ群）	杯部；灰色（N7/0）～明オリーブ灰色（2.5GY7/1）、 脚柱部；灰色（N6/0）～暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり
30	須恵器	高杯Ａａ	12.8	14.7	11.2	12/12（底 11/12）	密（Ⅳ群）	杯部；灰色（N7/0）～明オリーブ灰色（2.5GY7/1）、脚柱部；灰色（N5/0）～オリーブ灰色（2.5GY5/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり
31	須恵器	短頸壺	7.3	7.6	－	11/12	密（Ⅳ群）	灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部下半～底部外面；回転ヘラケズリ	
32	土師器	杯Ｂ	13.5	5.0	－	10/12	精良（Ａ群）	明赤褐色（5YR5/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	放射暗文あり（磨滅気味）、都城系杯類の模倣である
33	土師器	鉢	14.2	7.9	－	完形	密／やや粗（Ｃ群）	にぶい黄橙色（10YR7/4 ～ 6/3）	良好	口縁部内面；ヨコナデ、体部～底部内面；ハケ、口縁部外面；ハケ後ヨコナデ、体部上半；ユビオサエ・ハケ、体部下半～底部外面；ケズリ	在地系の鉢であろう

27 号横穴

76	須恵器	蓋Ａｂ	10.8	3.3	－	完形	密（Ⅲ群）	外面；灰色（7.5Y6/1）、内面；灰白色（7.5Y7/1 ～ 7/3）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	
77	須恵器	蓋Ａｂ	10.5	3.8	－	完形	密（Ⅱｂ群）	外面；灰白色（7.5Y7/1）、内面；灰色（7.5Y6/1）	良好	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり
78	須恵器	蓋Ａｂ	10.6	3.6	－	ほぼ完形	やや粗（その他）	外面；灰白色（N7/0）一部灰色（N5/0）、内面；灰白色（5Y8/1）	軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	焼成不良のため磨滅著しい
79	須恵器	蓋Ａｂ	10.6	3.3	－	完形	密（Ⅱａ群）	外面；灰色（10Y6/1）、内面；灰白色（7.5Y7/1 ～ 7/2）	良好	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後少しナデ	補助ケズリらしきものあり
80	須恵器	蓋Ａｂ	10.7	3.6	－	7/12	密（Ⅱ群）	外面；灰白色（N5/1）～灰色（7.5Y6/1）内面；灰色（7.5Y6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪み著しい
81	須恵器	杯Ａｂ	10.3	3.1	－	10/12	やや粗（Ⅱｃ群か）	外面；浅黄色（2.5Y7/4）、内面；明黄褐色（2.5Y7/6）	軟	内面・外面；回転ナデか、底部外面；ヘラキリ後不調整か	全体に磨滅が著しい（調整不明瞭）
82	須恵器	杯Ａｂ	10.8	3.3	－	完形	密（Ⅱｃ群）	灰色（7.5Y6/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪みが著しい
83	須恵器	杯Ａｂ	10.2	（3.1）	－	3/12	密（Ⅰ群）	外面；灰色（5Y6/1）、内面；灰色（N6/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整か	補助ケズリらしきものあり
84	須恵器	蓋Ｂａ	9.4	3.4	－	ほぼ完形	密（Ⅴ群か）	外面；灰白色（5Y7/2）～灰色（5Y6/1）、内面；灰色（5Y5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり、外面 4/5 程度に灰が付着

85	須恵器	蓋 Ｂａ	9.5	3.6	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；にぶい黄色（2.5Y6/4）～黄灰色（2.5Y4/1）、内面；黄灰色（2.5Y5/1～4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪み少しあり、外面全体に灰が付着
86	須恵器	蓋 Ｂａ	9.1	3.0	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；灰色（5Y6/1）、内面；灰色（5Y6/1）～灰オリーブ色（5Y6/2）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	わずかに焼け歪みあり
87	須恵器	蓋 Ｂａ	8.8	3.2	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；黄灰色（2.5Y5/1）、内面；灰黄色（2.5Y7/2）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	外面全体がやや黒灰色を呈する
88	須恵器	杯 Ｂａ	9.8	3.4	－	完形	密（Ⅴ群）	外面;灰色（7.5Y6/1～5/1）、内面；灰白色（7.5Y7/1）～灰色（7.5Y6/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	焼け歪みあり補助ケズリあり
89	須恵器	杯Ｂａ	9.8	3.5	－	完形	密（Ⅴ群）	外面;灰色（7.5Y6/1～5/1）、内面；灰白色（7.5Y7/1～7/2）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪みあり、補助ケズリあり、外面1/3程度に自然釉が付着
90	須恵器	杯 Ｂａ	9.7	3.8	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；灰色（7.5Y6/1）、内面；灰白色（7.5Y7/1～7/2）	良好	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	補助ケズリあり
91	須恵器	杯 Ｂａ	9.7	3.4	－	完形	密（Ⅲ群）	外面；灰白色（7.5Y7/1）、内面；灰色（7.5Y6/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整（一部ナデ）	焼け歪みあり、補助ケズリあり、口縁部周辺に自然釉が付着
92	須恵器	杯 Ｂａ	9.5	3.3	－	完形	密（Ⅴ群）	灰白色（7.5Y6/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整（一部ナデ）	補助ケズリあり
93	須恵器	甕	18.7	39.8	－	11/12（頸部　以下完存）	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0～5/0）	堅緻	口縁部内外面；回転ナデ、体部外面；格子タタキ	口縁部～肩部外面に自然釉が付着

28号横穴

116	須恵器	杯 Ａａ	13.4	4.1	－	完形	密（Ⅱ群）	灰色（N5/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ、底部外面；ヘラキリ後不調整	外面全体に灰が厚く付着
117	須恵器	杯 Ａａ	13.1	4.0	－	完形	密（Ⅱ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みが著しい
118	須恵器	杯 Ａｂ	12.0	（3.6）	－	3/12	密（Ⅴ群）	外面；灰白色（N7/0）、内面；灰色（7.5Y7/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	
119	須恵器	杯 Ａｂ	10.6	（3.1）	－	7/12 強	密（Ⅱ群か）	明褐灰色（7.5YR7/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	
120	須恵器	高杯 Ｂａ	12.2	15.1	11.8	5/12（底2/12）	精良（その他）	杯部；灰色（N6/0）脚柱部；オリーブ黒色（7.5Y3/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのち回転ナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	底部外面・脚部内外面に灰が付着、脚柱部のスカシは２段３方向
121	須恵器	長頸壺 Ｄか	/	（11.9）	7.8	実測範囲完存	密（Ⅳ群）	灰色（10Y7/1）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	奈良時代の遺物
122	須恵器	長頸壺 Ｃ	8.4	24.3	－	完形	密（Ⅳ群）	灰白色（N7/0）～オリーブ灰色（5GY5/1）、釉色；暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	堅緻	内面・口縁部～肩部外面；回転ナデ、体部下半～底部外面；回転ヘラケズリ	口縁部外面にシボリ痕あり、体部中位外面にヘラによる刺突文あり、底部外面に重ね焼きの痕跡あり
123	須恵器	甕	26.7	8.6	－	3/12 強	密（Ⅴ群）	灰色（N6/0）	堅緻	口縁部内外面；回転ナデ	
124	土師器	杯	13.9	3.9	－	10/12	密	にぶい橙色（7.5YR7/4）	やや軟	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	平安時代の遺物
125	土師器	高杯 Ａ	11.8	6.6	8.4	完形	密（Ａ群）	橙色（5YR6/8）	良好	杯口縁部内外面；ヨコナデ、杯部内面；ナデ、杯部外面；ナデ・ユビオサエ・ハケ、脚部外面；ヨコナデ、脚部内面；ハケ・ナデ	

127	土師器	皿	14.8	2.3	−	7.5/12	精良	橙色（5YR7/6）～浅黄橙色（10YR8/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	平安時代の遺物
128	土師器	皿	9.6	1.7	−	完形	密	浅黄橙色（7.5YR8/4）	やや軟	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	平安時代の遺物
128	土師器	皿	15.4	2.5	−	10/12	密	橙色（2.5YR6/8）～明橙色（10YR7/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、底部内面；ハケ、外面；ユビオサエ・ナデ	平安時代の遺物

29 号横穴

143	須恵器	蓋 A a	11.2	(3.0)	−	3/12	密（Ⅲ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	
144	須恵器	蓋 A b	10.9	3.7	−	完形	密（Ⅳ群）	灰白色（7.5Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	外面 2/3 程度に灰が付着、頂部外面にヘラ記号「－」あり
145	須恵器	蓋 A b	10.5	3.6	−	完形	密（Ⅱb 群）	灰色（7.5Y6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり、焼け歪みあり
146	須恵器	杯 A b	11.1	3.1	−	完形	密（Ⅳ群）	灰白色（10Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪みあり、底部外面にヘラ記号「－」あり
147	須恵器	長頸壺 B b	4.5	15.5	6.0	完形	密（Ⅱb 群か）	灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部～体部上半外面；回転ナデ、体部下半外面；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	
148	須恵器	壺蓋か	7.7	2.6	−	完形	密（Ⅱb 群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	
149	須恵器	短頸壺	5.2	5.1	−	10/12（体部完存）	密（Ⅱ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	外面 1/2 程度に薄く灰が付着
150	須恵器	脚台付ハソウ	7.6	9.4	4.3	10/12（頸～脚台完存）	密（Ⅱ群か）	灰白色（10Y7/1）	堅緻	内面・口縁部～体部上半外面；回転ナデ、体部下半外面；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	焼け歪みあり
151	土師器	杯B	16.1	4.5	−	完形	密（C 群）	橙色（7.5YR7/6）	良好	口縁部；ヨコナデ、内面；磨滅のため不明、底部外面；ヘラケズリ	在地系の土器か

30 号横穴

186	須恵器	蓋 A b	13.3	(3.8)	−	6/12	密（Ⅲ群）	外面；黄灰色（2.5Y5/1）～にぶい黄色（2.5Y6/3）、内面；黄灰色（2.5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）	やや軟	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり
187	須恵器	杯 A a	11.8	4.1	−	完形	やや粗（Ⅲ群か）	外面;灰色（5Y6/1）～灰白色（5Y8/2）、内面;灰色（5Y6/1）	やや軟	内面・外面；回転ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	
188	須恵器	高杯 A a	15.0	(5.0)	/	杯部ほぼ完形	密（Ⅱb 群）	外面;灰色（7.5Y6/1～N5/0）、内面；灰色（10Y6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱接合部；ナデ	
189	須恵器	高杯 A a	15.7	(4.9)	/	杯部ほぼ完形	やや粗（Ⅱa 群）	外面；灰白色（7.5Y7/1）、内面；灰色（7.5Y6/1）	良好	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱接合部；ナデ	杯部外面全体に灰が付着
190	須恵器	蓋 B a	8.8	3.0	−	完形	密（Ⅱ群）	外面；にぶい黄褐色（10YR5/3）、内面；黄灰色（2.5Y6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり、外面全体に灰が付着（色調は灰の色で土器本来の色ではない）
191	須恵器	蓋 B a	8.7	3.0	−	完形	密（Ⅱ群か）	外面；黄灰色（2.5Y6/1）、内面；灰色（5Y5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり、外面 4/5 程度に灰が付着
192	須恵器	杯 B a	9.4	3.7	−	完形	密（Ⅱb 群）	灰色（N5/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪みあり
193	須恵器	杯 B b	12.3	4.0	−	6/12	やや粗（Ⅲ群）	浅黄色（2.5Y7/3）	軟	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	わずかに焼け歪みあり、補助ケズリあり

194	須恵器	蓋C	13.7	1.9	−	完形	密（V群か）	外面；灰色（10Y6/1）、内面；灰色（10Y5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	胎土は黒色粒を少し含む、つまみ周辺を除く外面に灰が付着
195	須恵器	杯C	12.6	4.7	9.0	完形	密（V群）	灰色（N5/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	わずかに焼け歪みあり
196	須恵器	甕	（16.4）	5.0	−	1/12以下	密（Ⅱ群か）	外面；灰色（7.5Y5/1）、内面；灰色（7.5Y6/1）	堅緻	口縁部内外面；回転ナデ	
197	土師器	皿	10.0	0.8	−	2/12	密	明黄褐色（2.5Y7/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	平安時代の遺物、全体に歪である

31 号横穴

202	須恵器	蓋Aa	12.5	3.7	−	完形	密（Ⅱa群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面;回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	外面1/3程度に灰が付着
203	須恵器	杯Ab	11.5	3.5	−	ほぼ完形	やや粗（Ⅲ群か）	外面；灰色（N5/0）～灰白色（5Y7/1）、内面；灰白色（5Y7/1）	やや軟	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	補助ケズリらしきものあり
204	須恵器	壺蓋か	7.8	2.7	−	完形	精良（Ⅱb群）	灰色（N6/0～5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり、内面に薄く灰が付着、重ね焼きの痕跡が明瞭
205	須恵器	高杯Bb	10.5	7.8	7.3	完形	密（Ⅳ群）	灰色（N5/0～4/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのちナデ、脚部内外面；回転ナデ	杯部の焼け歪み著しい
206	須恵器	高杯Ba	11.4	12.7	−	ほぼ完形	やや粗（Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり
207	須恵器	高杯Aa	12.5	（9.7）	/	11/12	密（V群）	灰色（N5/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのちナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり
208	須恵器	高杯Aa	12.4	15.8	12.9	完形	密（Ⅱb群）	灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのちナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	シボリ痕は丁寧にナデ消される、焼け歪みあり
209	須恵器	高杯Aa	12.5	15.8	13.2	11/12	密（Ⅲ群）	灰色（N5/0～4/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのちナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり
210	須恵器	高杯Aa	14.1	15.6	13.1	ほぼ完形	密（Ⅲ群）	灰色（N5/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのちナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	わずかに焼け歪みあり
211	須恵器	長頸壺Aa	8.0	29.4	13.2	完形	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面～体部外面上半；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	口頸部内外面にシボリ痕あり、口頸部2/3程度に灰が付着
212	須恵器	長頸壺C	8.1	15.7	−	ほぼ完形	密（Ⅳ群）	外面;灰色（7.5Y6/1～5/1）、内面；灰色（7.5Y5/1）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部下半；回転ヘラケズリのちカキメ	口縁部の焼け歪み著しい、全体の1/4程度に自然釉が付着
213	須恵器	杯Ba	9.4	3.6	−	完形	精良（V群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪みあり
214	須恵器	杯Ba	11.4	3.7	−	8/12	密（Ⅱa群）	灰白色（7.5Y6/1）～灰色（7.5Y6/1）	堅緻	口縁部内外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	焼け歪みあり
215	須恵器	杯Bb	12.5	3.7	−	4/12	密（V群）	外面；灰白色（7.5Y7/1）、内面；灰白色（5Y7/2）	良好	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	
216	須恵器	杯Bbか	14.4	3.5	−	11/12	やや粗（Ⅲ群）	外面；灰色（N5/0）内面；灰色（N6/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデか	外面に薄く灰が付着、そのうち1/4程度が自然釉となる

217	須恵器	蓋C	12.8	2.9	−	ほぼ完形	密（Ⅳ群）	外面；灰色（7.5Y6/1）～黒色（7.5Y2/0）、内面；灰色（N5/0～4/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり、外面全体に灰が付着する
218	須恵器	杯C	12.0	5.2	7.0	完形	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	焼け歪みあり
219	土師器	杯D	12.3	4.2	−	完形	密（C群）	明黄褐色（10YR7/6）～にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ケズリ	ほぼ同形同大の土師器杯の第１グループ、在地系であろう
220	土師器	杯D	11.5	3.9	−	ほぼ完形	やや粗（C群か）	外面；橙色（7.5YR7/6）、内面;橙色（7.5YR6/6）	やや軟	口縁部内外面；ヨコナデ、内面;ナデか、外面;ユビオサエ・ナデ（もしくはケズリ）か	ほぼ同形同大の土師器杯の第２グループ、全体に磨滅が著しい
221	土師器	杯D	11.9	3.8	−	11/12	粗（その他）	橙色（5YR6/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；不明、外面；不明（ユビオサエあり）	ほぼ同形同大の土師器杯の第３グループ、全体に磨滅が著しい
222	土師器	杯D	11.8	4.0	−	完形	粗（その他）	明赤褐色（5YR5/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	ほぼ同形同大の土師器杯の第３グループ
223	土師器	杯D	11.6	4.1	−	ほぼ完形	粗（その他）	明赤褐色（5YR5/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面;ナデか、外面;ユビオサエ・ナデ	ほぼ同形同大の土師器杯の第３グループ、内面の磨滅が著しい
224	土師器	杯D	10.9	4.1	−	完形	粗（その他）	外面；橙色（5YR6/6）、内面；橙色（5YR6/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	ほぼ同形同大の土師器杯の第３グループ
225	土師器	杯A	11.8	3.1	−	9/12	精良（A群）	明赤褐色（5YR5/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面上半；ミガキ、底部外面；ユビオサエ・ナデ	2段放射暗文＋螺旋暗文あり、都城系土器そのものか
226	土師器	杯A	11.6	2.6	−	完形	精良（A群）	橙色（5YR6/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面上半；ミガキ、底部外面；ユビオサエ・ナデ	2段放射暗文＋螺旋暗文あり、都城系土器そのものか
227	土師器	杯C	14.2	3.0	−	11/12	密（A群）	橙色（2.5YR6/8）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	放射暗文あり、全体に磨滅気味、都城系そのもの、もしくはその模倣
228	土師器	ミニチュア	4.5	6.2	−	6/12 頸以下は完存	密（A群）	橙色（5YR6/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、体部外面；ナデのち一部ミガキ、底部外面；不明	いわゆる「てづくね土器」である
229	土師器	甕A	15.2	13.6	−	ほぼ完形	密（B群）	浅黄橙色（7.5YR8/6）～黄橙色（7.5YR7/8）	良好	口縁部外面；ヨコナデ、口縁部内面;ハケ、体部内面;ナデ・ユビオサエ、体部外面上半；ハケ、体部外面下半；ナデ	体部内面に粘土紐接合痕あり
230	土師器	甕B	/	/	−	1/12	密（B群）	外面；にぶい橙色（7.5YR7/4）、内面;橙色（7.5YR7/6）	良好	口縁部外面・端部；ヨコナデ、口縁部内面；ハケ後ヨコナデ、体部内面；ナデ、体部外面；ハケ	外面に黒斑あり
231	土師器	杯	15.0	(3.3)	−	2/12 強	密	橙色（7.5YR7/6）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、内面；ナデ、外面；ユビオサエ・ナデ	平安時代の遺物か

32 号横穴

260	須恵器	杯Ba	/	3.0	−	1/12 以下	密（V群）	外面；オリーブ灰色（2.5GY5/1）～灰白色（N7/0）、内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	
261	須恵器	高杯	/	(2.9)	−	1/12 強	密（V群）	灰色（N5/0）	堅緻	脚部内外面；回転ナデ	古墳時代の高杯（TK47 型式か）
262	須恵器	長頸壺D	/	(23.4)	10.3	底 11/12	密（I群か）	灰白色（N7/0）～灰色（5/0）	堅緻	内面・口縁部～体部上半外面；回転ナデ、体部下半外面；回転ヘラケズリ	
263	須恵器	甕	18.6	(12.9)	−	2.5/12	密（V群）	外面；灰色（N6/0～N5/0）、内面；明オリーブ灰色（2.5GY7/1）～灰色（N6/0）	堅緻	口縁部内外面；回転ナデ、体部外面；格子タタキのちナデ（ナデは部分的）	
264	土師器	杯C	12.4	3.2	−	ほぼ完形	密（A群か）	橙色 7.5YR6/6	良好	内面・口縁部外面；ヨコナデ、底部外面；ナデ・ユビオサエ	放射暗文の痕跡あるものの磨滅のため詳細不明、表面が剥離している

265	土師器	甕A	13.5	11.8	−	9/12	密（その他）	橙色（5YR6/6）～明赤褐色（5YR5/6）	良好	口縁部外面：ハケのちヨコナデ、口縁部内面ハケ、体部外面：ハケ、体部内面：ユビオサエ、ナデ	口縁部に焼け歪みあり
266	土師器	甕A	15.2	（14.0）	−	11/12 強	密（B群）	にぶい黄橙色（10YR6/4）～明黄褐色（10YR6/6）	良好	口縁部外面：ハケのちヨコナデ、口縁部内面ハケ、体部外面：ハケ、体部内面：ユビオサエ、ナデ	体部内面に粘土紐接合痕あり、外面に薄い黒斑あり

33 号横穴

304	須恵器	蓋 A b	10.4	3.4	−	9/12	密（Ⅰ群）	灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部外面：ヘラキリ後不調整	補助ケズリらしきものあり
305	須恵器	杯 A b	11.0	3.0	−	ほぼ完形	密（Ⅲ群）	灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部外面：ヘラキリ後不調整	焼け歪み少しあり、外面全体に灰が付着
306	須恵器	平瓶	5.4	13.8	−	完形	密（V群か）	灰白色（7.5Y8/1～N5/0）	やや軟	内面・外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ（中央部にケズリ残し）	体頂部に閉塞のための粘土の充填痕あり
307	土師器	甕A	11.6	11.1	−	9/12	密（C群）	橙色（7.5YR7/6）	良好	口縁部：ヨコナデ、口縁部内面：ハケ後ヨコナデ、体部内面上半：ケズリ、体部内面下半：ナデ・ユビオサエ、体部～底部外面：ハケ	

34 号横穴

316	須恵器	蓋 A b	12.6	3.6	−	ほぼ完形	密（Ⅲ群）	外面：灰色（N6/0）内面：褐灰色（10YR5/1）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部内面：不定方向ナデ、頂部外面：ヘラキリ後不調整	319･321･326･328 と胎土・色調・焼成が類似、外面の大半に灰が付着
317	須恵器	蓋 A a	12.6	3.9	−	11/12	密（Ⅲ群）	灰色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部内面：不定方向ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	
318	須恵器	蓋 A a	12.4	3.6	−	完形	密（Ⅱc群）	外面：灰色（N5/0～4/0）、内面：灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部外面:回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	焼け歪みあり、外面に灰が付着
319	須恵器	蓋 A a	12.4	（3.4）	−	4/12 強	密（Ⅲ群）	外面：青灰色（5B6/1）、内面：褐灰色（10YR5/1）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ	316･321･326･328 と胎土・色調・焼成が類似
320	須恵器	蓋 A a	12.3	3.7	−	5/12	密（Ⅲ群）	青灰色（5PB6/1～5/1） 断面：暗青灰色（5PB4/1）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部内面：不定方向ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ	322･325･327･329 と胎土・色調・焼成が類似、焼け歪みあり
321	須恵器	蓋 A a	12.3	3.8	−	ほぼ完形	密（Ⅲ群）	外面：青灰色（5PB6/1）、内面：紫灰色（5RP5/1）	やや軟	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部内面：不定方向ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ	316･319･326･328 と胎土・色調・焼成が類似、わずかに焼け歪みあり
322	須恵器	蓋 A a	12.2	3.2	−	ほぼ完形	密（Ⅲ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部内面：不定方向ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	320･325･327･329 と胎土・色調・焼成が類似
323	須恵器	蓋 A a	12.0	4.0	−	ほぼ完形	やや粗（Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部内面：不定方向ナデ、頂部外面：手持ちヘラケズリ	焼け歪みあり
324	須恵器	杯 A a	12.6	4.0	−	ほぼ完形	密（Ⅱb群）	灰（5YR6/1）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部内面：不定方向ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ	焼成がやや甘く一部橙褐色を呈する、少し焼け歪みあり
325	須恵器	杯 A a	12.0	3.6	−	完形	密（Ⅳ群）	外面:灰色（N6/0）、内面：灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部内面：不定方向ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ	320･322･327･329 と胎土・色調・焼成が類似、わずかに焼け歪む、外面 1/2 程度に灰が付着
326	須恵器	杯 A a	12.2	4.4	−	完形	密（Ⅲ群）	外面：青灰色（5B5/1）、内面：暗紫灰色（5RP4/1）	やや軟	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部内面：不定方向ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ（ケズリそのものは粗い）	316･319･321･328 と胎土・色調・焼成が類似、底部外面にヘラ記号のような１条の線刻がある
327	須恵器	杯 A a	11.8	3.6	−	完形	密（Ⅲ群）	外面：灰色（N6/0）～青灰色（5B6/1）内面：紫灰色（5P6/1）	やや軟	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部内面：不定方向ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ（ケズリそのものは粗い）	320･322･325･329 と胎土・色調・焼成が類似、焼け歪み著しい

328	須恵器	杯 A a	11.8	4.0	−	ほぼ完形	密（Ⅲ群）	外面；灰色（N6/0）～明紫灰色（5RP7/1）、内面；暗紫灰色（5RP4/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ（ケズリそのものは粗い）	316･321･326･328 と胎土・色調・焼成が類似、わずかに焼け歪みあり
329	須恵器	杯 A b	11.9	4.0	−	ほぼ完形	密（Ⅱ群）	外面;灰色（10Y6/1～ 5/1）、内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整か	320･322･325･327 と胎土・色調・焼成が類似、焼け歪みあり、外面全体に灰が付着
330	須恵器	高杯 D	13.5	7.5	11.0	完形	密（Ⅳ群）	青灰色（5B6/1～ 5/1）	堅緻	杯部内面・杯口縁部外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	焼け歪み少しあり
331	須恵器	高杯 D	13.8	7.2	10.5	完形	密（Ⅳ群）	青灰色（5B6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	焼け歪みあり
332	須恵器	高杯 D	13.4	7.7	9.0	完形	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	
333	須恵器	高杯 D	13.1	7.4	10.0	ほぼ完形	密（Ⅳ群）	灰色（N7/0～ 5/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	スカシ 2 方向あり（ただし穿孔位置は 3 等分したうちの 2 か所となる）、わずかに焼け歪みあり
334	須恵器	高杯 D	13.0	7.4	10.1	ほぼ完形	密（Ⅳ群）	明青灰色（5PB7/1）～青灰色（5PB6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	
335	須恵器	高杯 D	10.8	6.2	7.0	完形	密（Ⅳ群か）	青灰色（5B6/1）～灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	焼け歪みあり
336	須恵器	高杯 B	9.5～ 12.1	14.5	11.0	完形	密（Ⅳ群）	灰色（7.5Y6/1～ N6/0）	堅緻	杯部内外面・脚柱部内外面；回転ナデ	焼け歪み著しい、杯部外面 1/4 程度・脚部外面全体に灰が付着
337	須恵器	ハソウか	11.7	(3.0)	−	1.5/12	密（Ⅴ群か）	灰色（N6/0）断面；灰色（N5/0）	堅緻	回転ナデ	外面に灰が付着
338	須恵器	長頸壺 A か	/	(10.0)	10.1	底 9/12	密（Ⅱ群）	灰色（N6/0）釉；暗緑灰色（7.5GY3/1）	堅緻	体部内面・体部外面上半・脚台部内外面；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ	内面の一部と脚台に灰や自然釉が付着
339	須恵器	長頸壺 B か	/	(9.0)	9.9	底 12/12	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0～ 5/0）	堅緻	体部内面・外面上半；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリのち回転ナデ	高台外面に灰が付着、体部外面の一部に自然釉が付着、円形スカシを高台上部に 3 方向に施す
340	須恵器	甕	21.6	(8.2)	−	5/12	密（Ⅲ群）	灰色（N5/0～ 4/0）	堅緻	口縁部；回転ナデ、体部外面；タタキ	口縁部外面に波状文あり、口縁部内面に灰が付着
341	須恵器	平瓶	6.2	16.1	−	4.5/12（体部完存）	密（Ⅰ群ないしⅡ b 群）	外面；明青灰色（5PB7/1）～黒色（N2/0）、内面；灰色（N5/0）、断面；暗紫灰色（5RP4/1）	堅緻	口頸部内外面・体部内面；回転ナデ、体部外面；回転ヘラケズリ後カキメ	口頸部内外面の一部と体部上半に灰が付着、体部上部に融着した須恵器片あり、体部上部に「＋」のヘラ記号あり
342	土師器	杯 D	12.0	4.8	−	ほぼ完形	やや粗（B 群）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	良好	内面；ヘラ状工具によるナデ、口縁部内外面；ヨコナデ、体部下半～底部外面；ヘラケズリ	成形時の粘土紐接合痕あり、黒斑あり
343	土師器	杯 C	18.2	7.6	−	完形	密（A 群）	橙色 5YR6/6	良好	内面；ナデ、口縁部内外面；ヨコナデ、口縁部外面～体部上半；ミガキ、体部下半～底部外面；ナデ・ユビオサエ	内面に 2 段放射暗文を施す、典型的な都城系土師器であろう
344	土師器	甕 B	22.7	(22.2)	−	口縁～体	やや粗～密（B 群）	浅黄色（2.5Y7/4）一部；黄灰色（2.5Y5/1）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、体部内面上半；横方向のハケ、体部内面下半；ナデ・ユビオサエ、体部外面；縦方向のハケ	外面に黒斑あり

35 号横穴

355	須恵器	蓋 A a	13.0	3.5	−	3.5/12	密（Ⅲ群か）	灰色（N6.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	色調や焼成は 360･362 に類似

356	須恵器	蓋 A b	10.2	3.6	−	完形	密 （Ⅲ群）	外面；明緑灰色 （7.5GY6/1）、 内面；灰オリーブ色（2.5GY5.5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	
357	須恵器	蓋 A b	10.0	3.5	−	完形	密 （V群）	灰色（N4/0）、自然釉；暗オリーブ色（5Y4/4）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	外面に自然釉付着、焼け歪みあり
358	須恵器	蓋 A b	9.7	3.1	−	完形	密 （Ⅳ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	補助ケズリらしきものあり、焼け歪みあり
359	須恵器	蓋 A b	9.6	3.0	−	11/12 強	密 （Ⅱc群）	外面；灰色（N6/0） 内面；灰白色 （N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり
360	須恵器	杯 A b	9.9	3.2	−	完形	密 （Ⅱb群）	外面；灰色 （N5.5/0）、内面；灰色（N6/0）、自然釉；オリーブ灰色（2.5GY6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	色調や焼成は 355･362 に類似、外面の大半に灰が付着（一部が自然釉となっている）、焼け歪みあり
361	須恵器	杯 A b	9.8	2.8	−	完形	密 （Ⅱc群か）	灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリらしきものあり、焼け歪みあり
362	須恵器	杯 A b	9.8	2.7	−	完形	密 （Ⅱc群）	灰色（N6.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面;ヘラキリ後ナデ（補助ケズリか）	色調や焼成は 355･360 に類似、外面の 2/3程度に薄く灰が付着、焼け歪みやや大きい
363	須恵器	高杯 C	12.5	7.3	7.9	完形	密 （V群）	灰白色（7.5Y7/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、脚部内外面；回転ナデ	焼け歪みが著しい
364	須恵器	高杯 C	12.4	7.3	8.3	完形	密 （V群）	灰色（10Y6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、脚部内外面；回転ナデ	外面にヘラ状工具の当たり痕あり、杯部内面に薄く赤色顔料が付着、焼け歪み著しい
365	須恵器	高杯 C	12.6	7.3	8.3	ほぼ 完形	密 （Ⅱc群）	外面；灰色（N6/0） 内面；灰白色 （7.5Y7/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、脚部内外面；回転ナデ	胎土は 366と類似、焼け歪みあり
366	須恵器	高杯 C	13.0	7.1	8.1	完形	密 （Ⅱc群）	灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、脚部内外面；回転ナデ	胎土は 365と類似、焼け歪み著しい
367	須恵器	高杯 C	12.5	7.2	8.2	完形	密 （V群）	灰色（N6/0 ～ N5/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、脚部内外面；回転ナデ	焼け歪み著しい、杯部内面に薄く赤色顔料付着
368	須恵器	高杯 B b	10.2	9.9	7.4	9/12 弱	密 （Ⅳ群）	杯部；青灰色 （5B5/1） 脚部；青灰色 （5PB6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、脚部内外面；回転ナデ	杯部と脚部で色調が微妙に異なる、脚部の 1/2程度と杯部内面に少量の灰が付着
369	須恵器	高杯 B b	9.5	9.0	6.8	完形	密 （V群）	灰白色（2.5Y7/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、脚部内外面；回転ナデ	内外面とも 1/2程度に灰が付着、焼け歪みあり
370	須恵器	高杯 B b	9.9	8.3	7.6	ほぼ 完形	密 （Ⅱc群）	灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、脚部内外面；回転ナデ	ほぼ全面に灰が付着し一部ガラス質化する、焼け歪みあり
371	須恵器	高杯 A a	13.0	16.4	15.1	完形	密 （Ⅲ群）	杯部内面；灰色 （N5/0）、その他；灰色（N6/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	スカシ 3 方向、焼け歪み著しい
372	須恵器	高杯 A a	11.5	17.0	13.9	完形	密 （Ⅱc群）	杯部；灰色 （7.5Y6/1） 脚部；灰色（N4/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	374とは胎土・色調・焼成が非常に類似、焼け歪みあり
373	須恵器	高杯 A a	12.6	17.4	14.7	完形	密 （V群）	青灰色（5B5/1）～ 暗青灰色（5B4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、わずかに焼け歪みあり
374	須恵器	高杯 A a	11.3	15.9	14.1	完形	密 （Ⅱc群）	杯部内面；灰色 （10Y6/1）、その他; 青灰色（5B5/1）～ 灰白色 10Y7/1	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ（のちナデか）、脚柱部内外面；回転ナデ	371とは胎土・色調・焼成は非常に類似、少し焼け歪みあり
375	須恵器	高杯 A a	12.0	15.8	13.3	完形	密 （Ⅳ群）	青灰色（5PB5/1） ～暗青灰色 （5PB4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	少し焼け歪みあり
376	須恵器	高杯 A a	12.5	17.1	14.4	完形	やや粗 （Ⅱc群か）	青灰色（5B5/1）～ 暗青灰色（5B4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、 脚柱部内外面；回転ナデ	杯部外面と脚部内面に灰が付着

377	須恵器	長頸壺 Aa	10.1	27.7	11.5	ほぼ完形	やや粗（Ⅲ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部下半；回転ヘラケズリのちカキメ、脚台部内外面；回転ナデ	外面1/2程度に灰が付着、スカシ3方向
378	須恵器	長頸壺 Ab	7.5	17.3	7.2	完形	密（Ⅲ群）	口頸～体部；灰色（N5/0）、脚台部；灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	肩部に刺突文を施す
379	須恵器	平瓶	/	（10.8）	9.5	実測範囲完存	密（Ⅱ群か）	青灰色（5PB5/1）	堅緻	口頸部内外面・体部内面・体部外面上半；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ	口頸部内外面・体部上面・体部側面に灰が付着（一部は自然釉となる）、体部上面に提梁の剥離痕あり、底部外面に糸切り痕あり
380	土師器	杯A	9.6	（3.4）	－	4/12	精良（A群）	明赤褐色（2.5YR5/6）	良好	内面・口縁部外面；ヨコナデ、底部外面；ナデ・ユビオサエ	放射暗文あり、底部内面の暗文有無不明、いわゆる都城系土師器
381	土師器	杯B/D	10.2	（2.7）	－	2/12弱	密（その他）	にぶい褐色（7.5YR5/4）	良好	内面・口縁部外面；ヨコナデ、底部外面；ナデ・ユビオサエ	在地系の杯か、底部外面の調整やや粗い
382	土師器	高杯B	14.7	10.4	10.2	完形	密（A群か）	橙色（5YR6/8～7/6）	良好	杯部内面・口縁部外面；ヨコナデ、杯底部外面；ハケ後粗いミガキ、脚部外面；ナデ・ユビオサエ、脚端部内外面；ヨコナデ、脚部内面；ハケ・ナデ	焼け歪みあり、杯部内面に放射暗文・螺旋暗文を施す
383	土師器	高杯B	15.4	9.9	10.2	ほぼ完形（口縁端部一部欠損）	密（A群か）	橙色（5YR7/8～6/8）	良好	杯部内面・口縁部外面；ヨコナデ、杯底部外面；ハケ、脚部外面；ナデ・ユビオサエ、脚端部外面・脚部内面；ヨコナデ（先行してハケのあるところあり）	杯部内面に放射暗文・螺旋暗文を施す
384	土師器	高杯B	15.2	10.5	10.3	完形	密（A群か）	橙色（7.5YR7/6）～明黄褐色（10YR7/6）	良好	杯部内面・口縁部外面；ヨコナデ、杯底部外面；ナデ、脚部外面；ナデ・ユビオサエ、脚端部内外面；ヨコナデ、脚部内面；ハケ・ナデ	杯部内面に放射暗文を施す
385	土師器	高杯B	15.6	（3.2）	/	杯部完存	密（A群か）	橙色（5YR7/6）	良好	杯部内面・口縁部外面；ヨコナデ、杯底部外面；ナデ	杯部内面に放射暗文を施す、黒斑あり
386	土師器	甕A	14.7	14.7	－	完形	密（C群）	にぶい黄橙色（10YR7/4）～浅黄橙色（10YR8/3）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、体部内面；ケズリまたは板ナデ、体部外面；ハケ	
387	土師器	甕A	13.1	11.8	－	完形	密（B群）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部内外面；ヨコナデ、頸部内面；ハケ、体部内面；ケズリ、底部内面；ユビオサエ、体部外面；ハケ	外面に黒斑あり

36号横穴

395	須恵器	蓋 Ab	10.7	3.3	－	完形	密（Ⅱb群）	灰色（10Y6/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり、焼け歪みあり
396	須恵器	蓋 Ab	10.6	3.9	－	7/12	密（Ⅱ群か）	灰白色（7.5Y7.5/1）	軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり
397	須恵器	蓋 Aa	10.6	4.0	－	完形	密（Ⅱ群か）	淡黄色（5Y8/3）～明黄褐色（10YR7/6）	軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリか（中央にケズリ残しあり）	
398	須恵器	杯 Ab	10.9	3.7	－	完形	密（Ⅱ群か）	灰白色（7.5Y8/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデか、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリらしきものあり
399	須恵器	杯 Ab	11.3	2.9	－	9/12弱	密（Ⅱa群）	外面；灰白色（10YR7/1）、内面；灰白色（2.5Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	少し焼け歪む、外面全体に灰が付着
400	須恵器	杯 Ab	11.0	3.4	－	完形	密（Ⅳ群）	灰白色（N7.5/0）～灰色（N6/0）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり、わずかに焼け歪む
401	須恵器	高杯B蓋か	9.5	3.2	－	完形	密（Ⅱ群か）	外面；灰色（N6/0）内面；灰白色（5Y8/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	

402	須恵器	高杯B	9.8	9.3	7.8	完形	密（Ⅳ群）	暗青灰色（5PB4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ、脚部内外面；回転ナデ	脚部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり、杯部内面に灰が厚く付着、杯部外面・脚部外面に灰が付着
403	須恵器	平瓶	5.4～6.5	12.8	－	完形	密（Ⅳ群）	灰色（5Y4.5/1）	堅緻	口頸部内外面・体部内面・体部外面；回転ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	口縁部や体部上半は大きく焼け歪む、体部上面にボタン状装飾が２つある、焼成時の土砂や小礫が溶着
404	土師器	杯C	16.6	5.0	－	5/12 弱	比較的精良（A群）	橙色（7.5YR6/6）	良好	内面；磨滅のため調整不明、口縁部外面；ヨコナデ、底部外面；ヘラケズリ	全体に磨滅気味、外面のケズリは４分割して施す、都城系土師器の模倣であろう

37 号横穴

405	須恵器	蓋Ａｂ	9.8	3.6	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；灰白色（5Y8/1～7/1）、内面;灰白色（5Y7/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	
406	須恵器	蓋Ａｂ	10.3	3.6	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；灰色（N6/0）内面；灰色（N5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	407･408･411 とは胎土・色調・焼成がよく類似
407	須恵器	蓋Ａｂ	10.3	3.9	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；灰色（N6/0）内面；灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	406･408･411 とは胎土・色調・焼成がよく類似、焼け歪みあり
408	須恵器	蓋Ａｂ	10.7	3.6	－	完形	密（Ⅴ群）	外面;灰色（N5.5/0）内面；灰色（N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	406･407･411 とは胎土・色調・焼成がよく類似、若干焼け歪みあり
409	須恵器	杯Ａｂ	10.0	3.1	－	完形	密（Ⅴ群）	灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	410 と胎土・焼成は類似、補助ケズリあり
410	須恵器	杯Ａｂ	10.2	3.1	－	完形	密（Ⅴ群）	灰色（N6.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	409 と胎土・焼成は類似
411	須恵器	杯Ａｂ	10.4	3.2	－	完形	密（Ⅴ群）	青灰色（5B5/1）～暗青灰色（5B4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	406･407･408 とは胎土・色調・焼成がよく類似、補助ケズリあり
412	須恵器	高杯Ｂｂ	9.8	10.1	8.1	完形	密（Ⅴ群）	青灰色（5B5.5/1）	堅緻	杯部内面・杯口縁部外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚部内外面；回転ナデ	脚部内面にシボリ痕あり、杯部外面3/4程度と脚部外面の大半に灰が付着
413	須恵器	長頸壺C	7.8	18.5	－	完形	密（Ⅱｂ群）	灰色（N6/0～N4/0）、自然釉；オリーブ灰色（5GY5/1）	堅緻	口頸部内外面・体部上半；回転ナデ、体部外面下半・底部外面；回転ヘラケズリ、体部内面；調整不明	口頸部外面1/3程度に灰・自然釉が付着、体部上半全体・体部下半の一部に灰が付着
414	土師器	杯C	16.3	5.5	－	完形	比較的精良（A群）	内面～口縁部外面；橙色（5YR6/8）、底部外面；明黄褐色（10YR7/6）	良好	底部内面；ナデ、口縁部内面・口縁端部；ヨコナデ、口縁部外面;ヨコナデのちミガキ（粗い）、底部外面ヘラケズリ	1段放射暗文・螺旋暗文あり、都城系そのものの可能性あり

38 号横穴

448	須恵器	蓋Ａｂ	11.6	4.1	－	完形	密（Ⅳ群）	外面；灰白色（N7/0）内面；明青灰色（5B6.5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリらしきものあり
449	須恵器	蓋Ａｂ	11.4	3.9	－	完形	密（Ⅴ群）	外面；灰色（N6/0）～暗青灰色（5PB7/1）、内面；灰色（7.5Y5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；ヘラキリ後不調整	粘土紐巻き上げ痕あり
450	須恵器	蓋Ａｂ	11.5	3.8	－	完形	密（Ⅳ群）	外面；灰色（N6/0）内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリらしきものあり、ヘラ記号「＋」あり
451	須恵器	杯Ａａか	12.2	3.1	－	完形	密（Ⅰ群か）	外面；青灰色（5B5/1）～暗青灰色（5B4/1）、内面;紫灰色（5P6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；手持ちヘラケズリか（ケズリ残しあり）	若干焼け歪みあり
452	須恵器	杯Ａａ	11.6	3.8	－	完形	密（Ⅳ群）	外面；灰色（N6/0）内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面;回転ヘラケズリ（ケズリ残しあり）	若干焼け歪みあり

453	須恵器	杯 Ａａ	11.2	3.3	－	完形	密 （Ⅳ群）	灰色（N6/0）～灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面;回転ヘラケズリ（ケズリ残しあり）	
454	須恵器	杯 Ａｂ	11.6	3.6	－	ほぼ完形	密 （Ⅴ群）	灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	胎土に微細な砂粒を含む
455	須恵器	杯 Ａａ	11.2	3.8	－	完形	密 （Ⅰ群）	外面；青黒色（5PB2/1）～灰赤色(2.5YR6/2)、内面；赤灰色（5R6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	補助ケズリらしきものあり
456	須恵器	杯 Ａｂ	11.2	3.5	－	完形	密 （ⅡＣ群）	灰色（N6/0）～灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	若干焼け歪みあり
457	須恵器	杯 Ａｂ	11.4	3.8	－	完形	密 （Ⅴ群）	外面ａ；灰色（N5/0）、 外面ｂ；灰色（N6.5/0）、内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリらしきものあり、重ね焼き痕跡明瞭
458	須恵器	杯 Ａｂ	11.0	3.1	－	完形	密 （Ⅳ群）	外面；明オリーブ灰色（2.5GY7/1）内面；青灰色（5B6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	補助ケズリあり
459	須恵器	杯 Ａｂ	10.9	3.4	－	完形	密 （Ⅴ群か）	外面；青灰色（5B5/1）～暗青灰色（5PB4/1）､内面;灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	
460	須恵器	高杯 Ａ蓋	15.2	5.8	－	6/12強	密 （Ⅰ群）	青灰色（5B5/1）～暗青灰色（5B4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	
461	須恵器	高杯 Ａ蓋	14.7	5.5	－	完形	密 （Ⅱｂ群）	外面；オリーブ灰色（5GY6/1）～灰白色（5Y8/1）、内面；灰白色（7.5Y7/1）	良好	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ	
462	須恵器	高杯 Ａ蓋	14.5	5.3	－	完形	密 （Ⅲ群）	外面；暗青灰色（5B3.5/1）～灰色（7.5Y6/1）、内面；緑灰色（7.5GY6/1）～灰白色（10Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ	外面の一部に灰が付着
463	須恵器	高杯 Ａ蓋	14.2	5.2	－	完形	密 （Ⅳ群）	暗青灰色（5PB4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ	焼け歪み著しい
464	須恵器	高杯 Ａ蓋	13.9	4.5	－	完形	密 （Ⅳ群）	外面；青黒色（5B2/1）、内面；灰色（N6/0～N5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	内外面とも薄く灰が付着、つまみの一部欠損
465	須恵器	高杯 Ａ蓋	13.8	4.7	－	完形	密 （Ⅳ群）	外面；暗青灰色（5PB4/1）、内面；灰色（N4/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ（その後回転ナデか）	
466	須恵器	高杯 Ａ蓋	13.2	4.5	－	完形	密 （Ⅲ群）	外面；暗青灰色（5PB4/1）、内面；灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	
467	須恵器	高杯 Ａ蓋	13.1	4.7	－	完形	密 （Ⅳ群か）	外面；灰色（N6.5/0）、ガラス質;暗灰色（N3/0）、内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪み少しあり、外面の4/5ほどにガラス質化した灰が付着、内面1/6ほどに灰が付着
468	須恵器	高杯 Ａ蓋	12.9	4.7	－	完形	密 （Ⅰ群）	外面；暗青灰色（5PB3/1）、内面；青灰色（5PB4.5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	
469	須恵器	高杯 Ａａ	14.0	18.3	15.7	完形	密 （Ⅳ群）	外面；青灰色（5PB6/1）、杯部内面；灰色（10Y6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、スカシ孔の位置が対向しない
470	須恵器	高杯 Ａａ	14.0	16.9	14.2	完形	密 （Ⅰ群）	外面；青灰色（5PB5/1）、脚柱部内面；褐灰色（10YR6/1）、断面；赤灰色（5R6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	わずかに焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、杯部外面全体に灰が付着、脚柱部外面1/2程度に灰が付着

471	須恵器	高杯 Aa	14.3	17.7	13.8	完形	密（Ⅳ群か）	外面；青灰色（5PB5/1）、杯部内面；灰色 N6/0）脚柱部内面；灰褐色（5YR5/2）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	わずかに焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、杯底部内面に亀裂あり、杯部外面の一部粗い仕上がり
472	須恵器	高杯 Aa	13.5	16.9	14.5	完形	やや粗（Ⅳ群）	外面・脚柱部内面；灰白色（N7/0）、杯部内面；灰色 N5/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、外面全体・脚部内面全体に灰が付着
473	須恵器	高杯 Aa	13.6	17.4	14.7	完形	密（Ⅰ群）	青灰色～暗青灰色（5PB5/1～4/1）、断面；灰赤色（7.5YR5/2)	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ（のち回転ナデか）、脚柱部内外面；回転ナデ	若干焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、外面の 1/4 程度に灰が薄く付着
474	須恵器	高杯 Aa	13.5	16.5	13.5	完形	密（Ⅲ群）	暗青灰色（5PB4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ナデ（先行して回転ヘラケズリか）、脚柱部内外面；回転ナデ	焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、外面 2/3 程度に灰が付着
475	須恵器	高杯 Aa	14.0	16.4	13.9	完形	密（Ⅲ群）	青灰色～暗青灰色（5PB5/1～4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、外面に灰が薄く付着
476	須恵器	高杯 Aa	13.3	15.9	14.2	完形	密（Ⅰ群）	青灰色～暗青灰色（5PB5/1～4/1）、脚柱部内面；褐灰色（7.5YR6/1）、断面;赤灰色（5R7/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	杯部が大きく焼け歪む、脚柱部内面にシボリ痕あり、杯部外面 1/2 程度と脚部内面のほぼ全面に灰が付着
477	須恵器	高杯 Ba	8.6	(9.2)	/	4/12 弱	密（Ⅰ群）	暗青灰色（5PB4/1）断面；赤灰色（5R6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ、	焼け歪みあり、脚柱部内面にシボリ痕あり、杯部内外面に広く灰が付着
478	須恵器	長頸壺 Aか	4.7	(9.7)	－	底部より上ほぼ完存、脚台部欠損	密（Ⅳ群）	青灰色（5B5.5/1）～灰白色（10Y7/1）	堅緻～やや軟	口縁部内外面・体部内面・体部外面上半；回転　ナデ、体部下半；回転ヘラケズリのち回転ナデ	
479	須恵器	長頸壺 Aa	9.7	27.2	13.1	7/12 弱（底 10/12、体;完存）	密（Ⅰ群）	青灰色（5PB5/1）断面；赤灰色（5R6/1）	堅緻	内面・口頸部～体部上半外面；回転ナデ、体部中位外面；カキメ、体部下半外面；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	口縁部～体部上半外面に灰が付着、脚台部外面に灰がうすく付着、脚台部のスカシ孔が 3 方向に穿孔される
480	須恵器	長頸壺 Aa	9.0	28.8	12.6	完形	密（Ⅲ群）	暗青灰色（5PB4/1）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部下半外面；回転ヘラケズリ、脚台部内外面;回転ナデ	焼け歪みあり、口頸部内外面にシボリ痕あり、口縁部～体部上半・脚台部外面に灰が付着
481	須恵器	ハソウ	9.8	12.5	－	完形	密（Ⅳ群）	灰色（10Y6/1）～灰白色（10Y7/1）	良好やや軟）	口縁部内外面・体部内面・体部外面上半；回転ナデ、体部下半；回転ヘラケズリ	口頸部内外面にシボリ痕あり
482	土師器	直口壺	8.3	11.3	－	完形	精良（A群）	橙色（2.5YR6/8）	良好	口縁部；ヨコナデ、体部・底部内面；ナデ、体部外面；ハケのちミガキ、底部外面ヘラケズリ	ミガキは 4 分割して施す
483	土師器	杯D	15.5	4.8	－	完形	やや粗（C群）	橙色（7.5YR7/6～5YR7/6）	やや軟	口縁部；ヨコナデ、内面ハケ、底部内面；、磨滅のため不明、外面ヘラケズリ、底部外面ナデ	ヘラケズリの痕跡から椀を左手で持って、口縁部側から底部側に向かって削った推察される

39 号横穴

494	須恵器	蓋 Ba	8.8	2.9	－	完形	密（Ⅲ群）	青灰色（5PB5/1）、自然釉；オリーブ灰色（10Y4/2）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	外面全体に灰が付着（一部自然釉と化す）、外面調整は灰付着のため不明瞭
495	須恵器	杯 Ba	9.2	(3.7)	－	12/12(底　大半欠損)	密（V群）	灰白色（5Y8/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；磨滅のため不明	補助ケズリらしきものあり、全体に磨滅気味（特に外面）
496	須恵器	高杯 Bb	/	(6.6)	6.8	底 5/12	密（Ⅳ群）	灰色（N4/0 ないし N6/0）	堅緻	全体に回転ナデ	

497	土師器	杯 E	10.2	3.1	－	2/12 弱	密（その他）	橙色（7.5YR6/8）	良好	内面・口縁部外面；回転ナデ（磨滅気味）、底部外面；ヘラキリ後不調整	498･499 と同形同大、同一製作技法で作られている、黒斑あり
498	土師器	杯 E	10.2	3.1	－	5.5/12	密（その他）	明褐色（7.5YR5/6）	良好	内面・口縁部外面；回転ナデか（磨滅のため不明）、底部外面；ヘラキリ後不調整	497･499 と同形同大、同一製作技法で作られている
499	土師器	杯 E	10.8	3.1	－	完形	密（その他）	外面；明赤褐色（5YR5/8）　内面；明褐色（7.5YR5/8）	良好	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	497･498 と同形同大、同一製作技法で作られている、底部内面の一部に黒斑あり
500	土師器	甕 A	12.0	（10.7）	－	8.5/12	密（C 群）	明黄褐色（10YR7/6）	良好	口縁部；ヨコナデ、口縁部内面；ハケ後ヨコナデ、体部内面上半；ナデ（板ナデか）、体部内面下半；ハケ、体部外面；ハケ	体部外面に黒斑あり、体部外面に赤色顔料付着、全体に磨滅気味
501	瓦器	椀	13.6	（5.2）	5.0	1.5/12 強（底 5/12）	比較的精良	器表面；黒色（10Y2/1）、断面；灰白色（7.5Y8/1）	やや軟	口縁部内面；粗いミガキ、口縁端部；ヨコナデ、口縁部外面；ナデ・ユビオサエ、　底部内外面；ナデ、	今回の調査で唯一出土した瓦器椀

40 号横穴

502	須恵器	高杯 B	10.4	（4.4）	－	6/12 強	やや粗（Ⅲ群）	灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ底部外面；回転ヘラケズリのち回転ナデ	杯部外面に刺突文あり

41 号横穴

503	須恵器	高杯 B a	12.0	14.2	10.5	9/12	やや粗（Ⅱ c 群）	杯部外面；灰白色（5Y7/1）、脚部内面；青灰色（5PB5/1）	堅緻	杯部内面・杯口縁部外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、外面の大半に灰が付着
504	須恵器（土師質）	脚台付ハソウ	14.0	20.4	9.4	完形	密（Ⅳ群か）	浅黄橙色（10YR8/3）～橙色（7.5YR7/6）	良好	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	土師質に焼成されているが製作技法は須恵器に同じ
505	須恵器	脚台付長頸壺	8.3～9.1	24.3	12.2	完形	密（Ⅲ群）	灰色（N5/0）～青灰色（5PB5/1）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部外面下半；回転ヘラケズリ、 脚台内外面；回転ナデ	口頸部～肩部・脚台部外面に灰が付着（肩部はやや厚い）焼け歪みあり

42 号横穴

509	須恵器	蓋 A a	12.4	3.6	－	完形	密（Ⅲ群）	緑灰色（5G5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり
510	須恵器	蓋 A a	12.3	3.6	－	10/12	密（Ⅰ群）	暗青灰色（5PB3.5/1）、断面；暗赤灰色（5R4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；浅い回転ヘラケズリ	焼け歪みあり
511	須恵器	蓋 A a	12.0	4.3	－	6/12	密（Ⅲ群）	外面；青灰色（5PB5/1）、内面；灰白色（N7/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	外面に部分的に灰が付着
512	須恵器	蓋 A a	11.7	3.6	－	6/12 強	密（Ⅰ群）	暗青灰色（5PB4/1）断面；暗赤色（7.5R3/4）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ、一部に回転ヘラケズリ	補助ケズリあり、内面に粘土紐接合痕残る
513	須恵器	蓋 A b	10.5	3.6	－	完形	密（Ⅳ群）	暗青灰色（5B4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面；ヘラキリ後ナデ	
514	須恵器	杯 A a	13.2	3.4	－	8/12 弱	密（Ⅳ群）	灰色（N6/0）、外面がやや濃い	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	
515	須恵器	杯 A a	12.7	3.8	－	完形	密（Ⅲ群）	灰色（N6.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面;回転ヘラケズリ（中央にケズリ残しあり）	焼け歪みあり
516	須恵器	杯 A b	12.5	3.7	－	完形	密（Ⅳ群）	外面；灰白色（7.5Y7/1）、内面；オリーブ褐色（2.5Y4/4）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	
517	須恵器	杯 A b	12.7	3.8	－	完形	密（Ⅲ群）	灰白色（5Y7/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	補助ケズリらしきもあり、少し焼け歪みあり、外面の一部に自然釉が付着

518	須恵器	杯 Ａｂ	12.3	3.7	－	完形	密（おそらくⅣ群）	外面；青灰色（5BG5/1）～暗青灰色（5B3/1）、内面；青灰色（5PB5.5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり、ヘラキリ痕明瞭
519	須恵器	杯 Ａａ	12.4	3.3	－	完形	密（Ⅰ群）	暗青灰色（5PB3.5/1）、断面；暗赤灰色（5R4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ底部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり
520	須恵器	杯 Ａａ	12.1	3.4	－	完形	密（おそらくⅠ群）	暗青灰色（5PB4/1～5PB3/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ、部分的に回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリは螺旋状に１周半程度、少し焼けひずむ
521	須恵器	杯 Ａｂ	12.0	3.6	－	完形	密（Ⅳ群）	青灰色（10BG5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後不調整、一部回転ヘラケズリ	補助ケズリの有無不明確
522	須恵器	杯 Ａｂ	11.2	3.1	－	完形	密（Ⅳ群）	暗青灰色（10BG6.5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	外面全体に薄く灰が付着
523	須恵器	杯 Ａｂ	10.9	3.1	－	完形	密（Ⅳ群）	外面；暗青灰色（5BG4/1）～青灰色（10BG6.5/1）内面；青灰色（10G5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後軽くナデ	焼け歪み少しあり
524	須恵器	杯 Ａｂ	10.5	3.2	－	完形	密（Ⅳ群）	外面；青灰色（5B5/1）、内面；暗青灰色（5B4/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	外面 1/2 程度に灰が付着
525	須恵器	高杯 Ｂｂ	11.9	12.8	8.8	完形	密（Ⅴ群か）	灰白色（5Y8/1）～灰黄色（2.5Y6/2）	良好	杯部内外面；回転ナデ、杯底部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり
526	須恵器	短頸壺	9.0	7.8	－	完形	密（Ⅱｃ群）	内面；灰白色（N7/0）、外面；灰かぶりのため不明	堅緻	内面・外面上半；回転ナデ、外面下半；カキメか、底部外面；回転ヘラケズリ	口縁を上面観を意図的に扁平にしている　可能性あり、上半部全体と下半部の一部に灰が付着、底部外面にヘラ記号「」あり
527	須恵器	脚台付椀	7.7	7.9	6.0	12/12（底7.5/12）	密（Ⅱｃ群）	灰白色（N7/0）～灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部～体部外面上半；回転ナデ、体部下半；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	外面 1/3程度と内面 1/2 程度に灰が付着、体部外面にヘラ記号「＋」あり

43 号横穴

528	須恵器	蓋 Ａｂ	11.5	3.9	－	完形	やや粗（Ⅳ群）	外面；オリーブ灰色（2.5GY6/1）、内面；灰色（N6/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面ヘラキリ後不調整	補助ケズリあり、焼け歪み著しい
529	須恵器	蓋 Ａｂ	11.4	3.3	－	完形	密（Ⅲ群）	青灰色（5B6/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部外面ヘラキリ後不調整	
530	須恵器	高杯 Ａａ	14.5	16.5	11.8	12/12（底10/12）	密（Ⅱａ群）	外面・脚部内面；青灰色（5B6/1～5BP6/1）、杯部内面；灰色（N6.5/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリのち回転ナデ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪み著しい、脚柱部外面 3/4ほど灰が付着
531	須恵器	高杯 Ａａ	13.2	15.6	13.5	ほぼ完形	やや粗（その他）	灰白色（5Y7/1）	軟	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	胎土・色調・焼成は 532 に非常に類似する、脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり、磨滅気味
532	須恵器	高杯 Ａａ	13.3	15.5	13.9	完形（口縁部一部欠損）	やや粗（その他）	灰白色（2.5Y7/1）	やや軟	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	胎土・色調・焼成は 531 に非常に類似する、脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり、磨滅気味
533	須恵器	高杯 Ａａ	13.1	14.7	13.0	12/12（口縁端部の欠損大、底3.5/12）	密（Ⅲ群）	灰白色（N7/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	胎土の特徴は 530 に類似するが 533 は微細な砂粒を多く含む、脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪み少しあり、スカシの穿孔位置対向しない
534	須恵器	高杯 Ａａ	13.0	14.2	11.3	完形	密（Ⅲ群）	暗青灰色（5B4/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり、外面 1/2 ほどに灰が付着

535	須恵器	高杯 Ａb	12.9	14.1	11.0	6/12（底 12/12	密（Ⅱc群）	灰色（10Y6/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり、焼成時の火ぶくれや亀裂あり、杯部外面・脚柱部内面に灰が付着
536	須恵器	高杯 Ａb	12.2	13.8	11.2	完形	密（Ⅲ群）	杯部・脚部外面；オリーブ灰色（5GY5/1）、脚部内面；灰色（N7/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ、	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり、外面と脚柱部内面に灰が付着
537	須恵器	高杯 Ａb	12.3	13.6	12.0	完形	密（Ⅲ群）	青灰色（10BG5/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯部内面；不定方向ナデ、杯底部外面；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪みあり
538	須恵器	高杯 Ｂa	10.8～12.0	14.4	9.7	12/12（底 9/12）	密（Ⅱa群）	灰色（N6/0～N5/0）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面（一部）；回転ヘラケズリ、脚柱部内外面；回転ナデ	脚柱部内面にシボリ痕あり、焼け歪み著しい、杯部内面に火ぶくれあり、杯部内面全体・杯部外面1/6程度・脚柱部外面1/3程度に灰が付着
539	須恵器	高杯 Ｂa	11.3	12.5	9.3	12/12（底 11/12 弱）	密（Ⅴ群）	青灰色（10BG6/1～5B5/1）	堅緻	杯部内外面；回転ナデ、杯底部外面；回転ナデ（先行して回転ヘラケズリか）、脚柱部内外面；回転ナデ	焼け歪み少しあり、外面1/2程度に灰が薄く付着、スカシはヘラで切り込みを入れる程度
540	須恵器	長頸壺 Ｂa	9.7	26.2	10.9	8.5/12（口縁端部のみ、その他は完存）	密（Ⅱc群）	暗青灰色（5PB4/1）～青灰色（5PB6/1）	堅緻	口頸部；回転ナデ、体部上半；回転ナデ、体部下半；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	口頸部内外面にシボリ痕あり、口頸部内外面・肩部外面・脚台部外面に灰が付着
541	須恵器	長頸壺 Ａb	9.6	24.8	12.2	完形	密（Ⅱc群）	灰色（N6.5/0）	堅緻	口頸部；回転ナデ、体部上半；回転ナデ、体部下半；回転ヘラケズリ、脚台内外面；回転ナデ	口頸部内外面にシボリ痕あり外面全体と口頸部内面に灰が薄く付着
542	須恵器	蓋 Ｂa	11.0	3.3	－	完形	密（Ⅱb群）	灰色（N5.5/0）やや緑色がかる	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	外面全体に薄く灰が付着
543	須恵器	杯 Ｂa	11.2	3.7	－	完形	密（Ⅱb群）	灰色（N5.5/0）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；回転ヘラケズリ	製作技法・胎土・焼成・色調が542と類似することからセットの可能性が高い、外面の1/2程度に灰が付着
544	須恵器	蓋Ｃ	20.6	2.3	－	完形	密（Ⅱb群）	オリーブ灰色（2.5GY6/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ後回転ナデ	焼け歪み少しあり
545	須恵器	蓋Ｃ	17.0	3.0	－	10.5/12	やや粗（Ⅳ群か）	淡黄色（2.5Y8/4）～灰白色（7.5Y8/1）～オリーブ灰色（2.5GY6/1）	やや軟	内面・口縁部外面；回転ナデ、頂部内面；不定方向ナデ、頂部外面；回転ヘラケズリ	焼け歪みあり
546	須恵器	杯Ｃ	18.7	6.2	13.0	完形	密（Ⅱb群）	青灰色（5PB5/1）	堅緻	内面・口縁部外面；回転ナデ、底部内面；不定方向ナデ、底部外面；ヘラキリ後ナデ	胎土をみると544とセットの可能性が高いが焼成・色調が異なる
547	土師器	蓋Ｂ	21.4	2.6	－	ほぼ完形	密（Ｂ群）	橙色（7.5YR6/8）	良好	頂部外面；ミガキ、口縁端部ヨコナデ、内面；摩滅のため調整不明	胎土に赤色粒を含む
548	土師器	杯Ｃ	15.9	6.0	－	ほぼ完形	密（Ｃ群か）	明赤褐色（2.5YR5/8）	良好	全体にき表面の剥離が著しく調整不明（底部外面に砂粒の動きあり、ケズリか）	
549	土師器	杯Ａ	18.2	5.0	－	11/12	密（Ａ群）	明赤褐色（5YR5/8）	良好	口縁部内面・端部；ヨコナデ、底部内面；磨滅のため不明、口縁部外面；ヨコナデ後ミガキ、底部外面；ナデ・ユビオサエ	２段放射暗文あり、底部内面の螺旋暗文の有無については不明

〔凡例〕
法量：/ は計測不可のもの、－ はその部位が存在しないもの、() は残存高。
残存率：破片等の場合、分母を「12」とし、約分はしていない。

付表７　耳環法量表

報告番号	種類	遺構名	法量（A・B・断面径；cm、重量；g）				構造
			A（幅）	B（天地）	断面径	重量	
34	金環	26 号横穴	3.15	2.74	0.74 ～　0.8	21.5	銅芯鍍金
35	金環か	26 号横穴	2.88	2.63	0.65 ～ 0.72	16.5	銅芯鍍金か
36	不明	26 号横穴	2.85	2.60	0.67 ～ 0.68	20.1	銅芯
94	銀環	27 号横穴	2.95	2.74	0.6 ～ 0.89	3.8	中空
95	銀環	27 号横穴	2.85	2.69	0.61 ～ 0.86	4.2	中空
129	不明	28 号横穴	2.66	2.36	0.64 ～ 0.67	11.5	銅芯
308	金環	33 号横穴	2.35	2.23	0.51 ～ 0.76	12.2	銅芯鍍金
345	金環か	34 号横穴	2.43	2.21	0.51 ～ 0.54	9.7	銅芯鍍金か
388	不明	35 号横穴	2.82	2.57	0.65 ～ 0.8	19.0	銅芯
389	金環	35 号横穴	2.85	2.57	0.64 ～ 0.7	17.9	銅芯鍍金
390	金環	35 号横穴	2.83	2.54	0.64 ～ 0.65	17.7	銅芯鍍金
391	金環	35 号横穴と 36 号横穴の間	2.37	2.14	0.5 ～ 0.67	10.6	銅芯鍍金
415	金環か	37 号横穴	1.75	1.72	0.41 ～ 0.42	3.6	銅芯鍍金か
506	金環	41 号横穴	2.80	2.51	0.64 ～ 0.66	16.9	銅芯鍍金
507	金環	41 号横穴	2.83	2.52	0.64 ～ 0.67	17.8	銅芯鍍金
550	金環	43 号横穴	2.89	2.59	0.63 ～ 0.66	17.3	銅芯鍍金
551	金環	43 号横穴	2.66	2.41	0.60	12.1	銅芯鍍金
552	金環か	43 号横穴	2.48	2.50	0.52 ～ 0.54	10.1	銅芯鍍金か

付表８　鉄製品法量表

報告番号	種類	残存状況	法量（原則錆を除く、単位：cm）			備　　考
			全長	幅	太さ / 厚さ	
25 号横穴						
13	刀子	ほぼ完存	(12.2)	0.9	0.3*0.5	
14	刀子	刃部	(2.8)	0.9	0.1	
15	釘	頭頂部付近	(5.2)	－	0.6*0.6	
16	釘	頭頂部以外	(10.9)	－	0.6*0.6	大型の釘、木質残存
17	釘	先端部	(4.3)	－	0.6*0.6	
18	不明鉄片	不明	(2.2)	1.2	0.5	
19	不明鉄片	不明	(2.3)	1.2	0.5	
26 号横穴						
37	刀子か	先端部	(6.5)	1.4	(0.8)	木質（鞘か）残存
38	釘か	ほぼ完存	*5.8	－	0.3*0.3	折れ曲がる
27 号横穴						
96	鏃か	部分	3.2、3.3	－	0.5*0.5	木質残存
97	釘	ほぼ完存	10.1	－	0.5*0.5	大型の釘、木質残存
98	釘	完存	9.1	－	0.6*0.6	
99	釘	ほぼ完存	*9.1	－	0.5*0.5	
100	釘	完存	8.5	－	0.5*0.5	
101	釘	上半部	(5.9)	－	0.6*0.7	大型の釘
102	釘	頭部 + 先端部	(2.5+3.0)	－	0.5*0.6	
103	釘	頭頂部	(3.8)	－	0.5*0.5	
104	釘	先端	(2.4)	－	0.4*0.4	
105	釘	ほぼ完存	(8.0)	－	0.4*0.6	先端を少し欠損
106	釘	頭頂部欠損	(8.6)	－	0.5*0.5	大型の釘か、木質残存
107	釘	ほぼ完存	*7.8	－	0.5*0.6	木質残存、少し折れ曲がる
108	釘	一部欠損	8.2	－	0.5*0.5	

109	釘	部分	(5.1)	−	0.5*0.5	木質残存
110	釘	完存	8.2	−	0.4*05	木質残存
111	釘	完存	8.8	−	0.6*0.5	
112	釘	ほぼ完存	8.6	−	0.5*0.6	
113	釘	ほぼ完存	9.8	−	0.6*0.6	大型の釘
114	釘	完存	*8.9	−	0.4*0.5	木質残存、少し折れ曲がる
115	釘	完存	9.0	−	0.5*0.6	

28 号横穴

130	鉄鏃	鏃身	(2.6)	−	0.3	
131	鉄鏃	ほぼ完存	13.6	2.2/ 鏃身	0.3/ 鏃身	
132	鉄鏃	鏃身～頸	(5.3)	0.8/ 鏃身	0.2/ 鏃身	
133	鉄鏃	ほぼ完存	(13.0)	0.8/ 鏃身	0.3/ 鏃身	
134	鉄鏃	ほぼ完存	(14.1)	0.8/ 鏃身	0.3/ 鏃身	頸部の途中で屈曲する
135	鉄鏃か	茎か	*（5.4）	0.5	0.3	茎の途中で屈曲する
136	鉄鏃か	頸ないし茎か	*（6.5）	0.5	0.3	頸部の途中で屈曲する
137	鉄鏃か	茎か	(3.4)	0.5	0.2	
138	鉄鏃	ほぼ完存	*16.0	0.9/ 鏃身	0.2/ 鏃身	意図的に折り曲げて変形させている
139	刀子か	刃部か	*（5.4）	1.1	0.4	少し折れ曲がる
140	刀	切っ先・刃部の一部を欠損	(40.6)	2.3/ 刃部	0.5/ 刃部	
141	刀装具	鞘か	3.2	1.7	0.4	
142	刀装具	鞘か	3.1	1.6	0.4	

29 号横穴

152	刀子	刃部のみ（欠損部あり）	(6.5)	1.1/ 刃部	0.4/ 刃部	
153	釘	ほぼ完存	8.5	−	0.6*0.6	木質残存
154	釘	ほぼ完存	8.3	−	0.5*0.5	木質残存
155	釘	ほぼ完存	8.3	−	0.6*0.5	錆化著しい
156	釘	完存	7.8	−	0.8*0.7	木質残存
157	釘	完存	7.6	−	0.8*0.6	木質残存
158	釘	先端欠損	(7.2)	−	0.7*0.6	
159	釘	完存	7.4	−	0.6*0.5	木質残存
160	釘	完存	7.2	−	0.6*0.5	木質残存
161	釘	先端欠損	(6.3)	−	0.6*0.5	木質残存
162	釘	頭部のみ	(5.1)	−	0.5*0.4	木質残存
163	釘	頭部のみ	(5.1)	−	0.5*0.4	木質残存
164	釘	頭部・先端欠損	(8.0)	−	0.7*0.6	木質残存
165	釘	頭部欠損か	(8.0)	−	0.6*0.5	
166	釘	頭部・先端欠損	(6.2)	−	0.6*0.5	木質残存
167	釘	頭部欠損	(6.5)	−	0.5*0.5	木質残存
168	釘	頭部・先端欠損	(4.3)	−	0.7*0.4	やや幅広の釘か、木質残存
169	釘	頭部・先端欠損	(3.6)	−	0.4*0.4	木質残存
170	釘	頭部欠損	(4.9)	−	0.5*0.4	木質残存、少し曲がる
171	釘	頭部欠損	(4.7)	−	0.5*0.4	木質残存
172	釘	先端のみ	(3.5)	−	0.3*0.3	木質残存
173	釘	先端のみ	(3.8)	−	0.4*0.4	木質残存
174	釘	先端のみ	(4.0)	−	0.5*0.4	木質残存
175	釘	先端のみ	(3.2)	−	0.6*0.5	木質残存
176	釘	頭部のみ	(3.1)	−	0.7*0.5	木質残存
177	釘	頭部・先端欠損	(4.2)	−	0.5*0.4	木質残存
178	釘	完存	6.8	−	0.7*0.7	木質残存
179	釘	先端欠損	(5.0)	−	0.6*0.4	

180	釘	頭部欠損	(7.2)	−	0.7*0.6	木質残存、少し曲がる
181	釘	頭部・先端欠損	*(6.5)	−	0.5*0.5	木質残存、中ほどで曲がる
182	釘	頭部・先端欠損	(3.3)	−	0.6*0.5	
183	釘	先端のみ	(3.3)	−	0.6*0.6	木質残存
184	釘	先端のみ	(3.5)	−	0.7*0.5	木質残存
185	釘か	完存	2.8	0.4	0.2	木質残存

30 号横穴

198	鉄鏃	鏃身～頸	(14.4)	0.5	0.2	
199	鉄鏃	鏃身～頸	(7.9)	0.8/ 鏃身	0.3/ 鏃身	
200	釘	一部	(5.0)	−	0.5*0.5	
201	鉄鏃	頸か	(5.7)	−	0.5*0.4	木質残存、緊縛の紐残存か

31 号横穴

232	鉄鏃	完存	9.3	2.5/ 鏃身	0.3/ 鏃身	木質残存
233	鉄鏃	完存	9.9	2.3/ 鏃身	0.4/ 鏃身	
234	刀か	刃身の一部	(3.7)	2.1	0.7	
235	刀子か	刃部のみか	(5.6)	1.2	0.4	木質（鞘か）残存
236	刀子か	刃部～茎	(9.4)	0.8/ 刃部	0.3/ 刃部	木質残存
237	刀子か	刃部～茎	(6.5)	1.3/ 最大	0.7/ 最大	木質残存するか
238	鎹か	一部	3.8、1.2	−	0.4*0.5	
239	釘か	完存か	3.5	−	0.5*0.4	木質残存
240	釘か	頭頂部	(3.0)	−	0.7*0.7	
241	釘	完存	*7.9	−	0.5*0.5	木質残存
242	釘	先端欠損	(7.9)	−	0.5*0.4	木質残存
243	釘	完存	8.1	−	0.5*0.4	
244	釘	完存	9.8	−	0.5*0.5	大型の釘
245	釘か	頭頂部欠損	(8.6)	−	0.7*0.6	大型の釘か、木質残存
246	釘	完存	*8.9	−	0.5*0.4	木質残存、中程で大きく屈曲
247	釘	完存	*7.0	−	0.4*0.4	中程で曲がる
248	釘	完存	6.7	−	0.5*0.4	
249	釘	完存	5.7	−	0.5*0.4	木質残存
250	釘	完存	5.8	−	0.5*0.5	木質残存、頭部付近曲がる
251	釘	完存	*5.1	−	0.4*0.4	木質残存、先端曲がる
252	釘	完存	5.3	−	0.4*0.4	
253	釘	先端欠損	(4.4)	−	0.4*0.4	木質残存
254	釘	完存	*5.9	−	0.4*0.4	木質残存、先端曲がる
255	釘	完存	*5.7	−	0.4*0.4	先端曲がる
256	釘	完存	*6.1	−	0.4*0.4	先端曲がる
257	釘	完存	*5.4	−	0.5*0.4	先端曲がる
258	釘	先端	(4.0)	−	0.6*0.5	
259	釘	先端	(4.3)	−	0.5*0.5	

32 号横穴

267	鉄鏃	頸部以下欠損	(8.8)	3.9/ 鏃身	0.3/ 鏃身	
268	不明鉄製品（楔か）	完存か	4.3	1.1	0.7	
269	釘	完存	7.9	−	0.7*0.4	やや幅広の釘、木質残存
270	釘	ほぼ完存	7.9	−	0.5*0.4	木質残存、頭部付近少し曲がる
271	釘	完存	7.8	−	0.6*0.6	
272	釘	完存	7.7	−	0.5*0.4	木質残存
273	釘	頭部欠損	(7.6)	−	0.5*0.5	木質残存
274	釘	頭部欠損	(7.1)	−	0.5*0.4	
275	釘	ほぼ完存	(7.3)	−	0.5*0.5	
276	釘	完存	7.0	−	0.5*0.5	

277	釘	先端欠損	(6.9)	−	0.6*0.5	
278	釘	完存	6.9	−	0.6*0.5	木質残存
279	釘	完存	6.8	−	0.5*0.4	
280	釘	ほぼ完存	(6.6)	−	0.8*0.6	やや幅広の釘、木質残存
281	釘	ほぼ完存	*6.7	−	0.5*0.5	木質残存、頭部付近少し曲がる
282	釘	ほぼ完存	6.7	−	0.5*0.5	木質残存
283	釘	完存	6.7	−	0.5*0.4	
284	釘	ほぼ完存	(6.5)	−	0.6*0.5	木質残存
285	釘	ほぼ完存	(6.4)	−	0.6*0.6	木質残存
286	釘	完存	6.3	−	0.5*0.5	
287	釘	完存	6.4	−	0.5*0.5	木質残存
288	釘	ほぼ完存	6.3	−	0.6*0.5	
289	釘	ほぼ完存	(5.7)	−	0.4*0.3	木質残存か
290	釘	完存	*8.1	−	0.5*0.5	頭部付近曲がる
291	釘	ほぼ完存	(8.2)	−	0.4*0.4	頭部付近少し曲がる
292	釘	完存	8.1	−	0.5*0.4	木質残存
293	釘	完存	7.7	−	0.5*0.4	
294	釘	ほぼ完存	(7.7)	−	0.6*0.5	木質残存
295	釘	完存	7.6	−	0.5*0.4	
296	釘	ほぼ完存	6.9	−	0.5*0.5	木質残存
297	釘	完存	7.1	−	0.6*0.5	
298	釘	完存	6.4	−	0.6*0.5	
299	釘	ほぼ完存	(6.2)	−	0.5*0.5	
300	釘	完存	6.5	−	0.6*0.5	木質残存
301	釘	先端欠損	(4.5)	−	0.4*0.4	
302	釘	先端欠損	(6.0)	−	0.5*0.4	
303	釘	頭部・先端欠損	(5.3)	−	0.4*0.4	

33 号横穴

309	釘	完存	5.2	−	0.5*0.4	木質残存
310	釘	先端欠損	(4.6)	−	0.5*0.4	
311	釘	先端欠損	(5.3)	−	0.5*0.4	
312	釘	ほぼ完存	(5.7)	−	0.4*0.4	木質残存
313	釘	完存	6.1	−	0.5*0.4	木質残存
314	釘	ほぼ完存	6.3	−	0.5*0.4	木質残存
315	釘	完存	10.7	−	1.0*0.7	大型の釘、木質残存

34 号横穴

346	鉄鏃	ほぼ完存	(12.0)	0.9/ 鏃身	0.2/ 鏃身	
347	鉄鏃	茎先端欠損	(10.0)	0.9/ 鏃身	0.2/ 鏃身	
348	鉄鏃	茎先端欠損	*14.6	1.0/ 鏃身	0.2/ 鏃身	意図的に折り曲げて変形させている
349	鉄鏃か	茎か	* (6.4)	0.6	0.4	折れ曲がる
350	不明鉄製品	完存	7.0	0.9	0.3	
351	不明鉄製品	一部	(4.0)	1.1	0.4 ～ 0.6	
352	鉄鏃か	茎か	(3.7)	0.7	0.4	先端が大きく折れ曲がる
353	不明鉄製品	完存	11.1	1.0	0.4	
354	不明鉄製品	完存	11.4	1.1	0.4	

35 号横穴

392	鉄鏃	完存	11.8	3.1/ 鏃身	0.3/ 鏃身	
393	鉄鏃	鏃身刃部一部欠損	(10.0)	(2.6) / 鏃身	0.2/ 鏃身	木質残存
394	刀子	刃部一部欠損	21.7	(0.9) / 刃部	0.3/ 刃部	木質残存

37 号横穴

416	釘	完存	8.7	−	0.6*0.5	

417	釘	完存	8.4	−	0.6*0.5	木質残存
418	釘	完存	8.2	−	0.5*0.4	木質残存
419	釘	ほぼ完存	(8.0)	−	0.6*0.5	木質残存
420	釘	完存	(8.0)	−	0.6*0.4	木質残存
421	釘	完存	7.8	−	0.6*0.6	木質残存
422	釘	完存	7.6	−	0.5*0.4	木質残存
423	釘	完存	7.7	−	不明	木質残存
424	釘	完存	7.7	−	0.5*0.5	木質残存
425	釘	完存	7.7	−	0.5*0.4	木質残存
426	釘	完存	8.9	−	不明	木質残存
427	釘	ほぼ完存	7.3	−	0.6*0.6	木質残存
428	釘	完存	7.9	−	0.5*0.5	木質残存
429	釘	完存	(7.6)	−	不明	木質残存
430	釘	完存	7.5	−	0.5*0.4	木質残存、先端少し曲がる
431	釘	完存	5.8	−	0.5*0.4	木質残存
432	釘	ほぼ完存	11.0	−	0.6*0.5	木質残存
433	釘	先端欠損	*（9.1）	−	0.6*0.5	木質残存
434	釘	頭部欠損	*（8.7）	−	0.5*0.5	木質残存、先端曲がる
435	釘	完存	*8.0	−	0.6*0.5	頭部・先端少し曲る
436	釘	頭部のみ	(2.6)	−	0.5*0.5	
437	釘	先端欠損	(4.7)	−	不明	木質残存
438	釘	頭部・先端欠損	(7.0)	−	0.6*0.5	木質残存
439	釘	完存	6.5	−	0.5*0.4	木質残存
440	釘	頭部欠損	(6.6)	−	0.6*0.5	木質残存
441	釘	頭部・先端欠損	(5.6)	−	0.6*0.5	木質残存
442	釘	頭部欠損	(5.5)	−	0.5*0.4	木質残存
443	釘	頭部・先端欠損	(5.0)	−	0.6*0.5	緩やかに曲がる
444	釘	先端欠損	(3.8)	−	0.4*0.4	木質残存
445	釘	頭部・先端欠損	(3.5)	−	0.5*0.4	木質残存
446	釘か	先端欠損	*（8.5）	−	0.6*0.5	木質残存
447	不明鉄製品（鎹か）	部分	3.7、3.8	−	不明	木質残存

38 号横穴

484	鉄鏃	茎先端欠損	*（15.2）	1.1/ 鏃身	0.2/ 鏃身	木質残存
485	鉄鏃	完存	*15.6	0.8/ 鏃身	0.2/ 鏃身	茎が大きく折れ曲がる
486	鉄鏃	鏃身先端欠損	*（15.3）	0.9/ 鏃身	0.2/ 鏃身	茎が大きく折れ曲がる
487	鉄鏃	ほぼ完存	*15.0	0.9/ 鏃身	0.2/ 鏃身	意図的に折り曲げて変形させている
488	鉄鏃か	茎か	(3.2)	0.5	0.3	
489	針か	頭部欠損	(4.3)	−	0.4*0.3	
490	釘	頭部欠損	(5.3)	−	0.3*0.3	木質残存
491	釘	頭部・先端欠損	(2.0)	−	0.4*0.4	
492	釘 / 針	頭部欠損	*（2.9）	−	0.2*0.2	
493	針か	頭部欠損	(3.0)	−	径 0.2	断面円形

41 号横穴

508	刀子	ほぼ完存	13.1	1.1/ 刃部	0.3/ 刃部	

※鉄製品の法量の凡例は以下の通り
全長；() は残存長、* は復元長、*（）は残復元長
太さ / 厚さ；() は残存厚、〇*〇は釘の太さ

付表９　26号横穴出土臼玉法量表

報告番号	種類	法量（A ～ C・孔径；mm、重量；g）					色調
		A（幅）	B（天地）	C（高さ）	孔径	重量	
39	臼玉	5.5	5.0	4.9 ～ 5.0	2.0	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
40	臼玉	5.3	5.1	5.0	2.0	0.2	灰白色（7.5Y7/1）
41	臼玉	5.4	5.5	6.0	2.3	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
42	臼玉	5.6	5.7	4.6	2.2	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
43	臼玉	5.3	5.8	6.1	2.2	0.4	灰白色（7.5Y7/1）
44	臼玉	6.1	6.0	5.0	2.0	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
45	臼玉	5.5	5.7	5.8	2.1	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
46	臼玉	5.9	5.9	5.1	2.2	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
47	臼玉	5.5	5.7	5.3	2.0	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
48	臼玉	5.7	5.9	4.4	2.0	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
49	臼玉	5.7	5.8	5.3	2.4	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
50	臼玉	5.5	5.6	5.9	2.8	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
51	臼玉	5.6	5.8	6.1	2.5	0.4	灰白色（7.5Y7/1）
52	臼玉	5.8	6.0	5.5	2.5	0.4	灰白色（7.5Y7/1）
53	臼玉	6.1	5.85	4.5	2.8	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
54	臼玉	5.9	5.9	4.7	2.9	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
55	臼玉	5.5	5.5	4.6 ～ 4.9	2.0	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
56	臼玉	5.5	5.5	5.8 ～ 6.3	2.0	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
57	臼玉	5.6	6.5	5.4	2.0	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
58	臼玉	5.9	6.0	5.1 ～ 5.45	2.1	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
59	臼玉	5.8	5.2	4.8 ～ 5.25	2.3	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
60	臼玉	5.8	5.65	5.7	2.4	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
61	臼玉	5.9	5.9	5.3	2.1	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
62	臼玉	5.8	5.9	5.4	2.1	0.4	灰白色（7.5Y8/1）
63	臼玉	5.7	5.9	6.1	2.3	0.4	灰白色（7.5Y8/1）
64	臼玉	5.7	5.7	5.1	2.0	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
65	臼玉	5.7	5.9	4.8	2.2	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
66	臼玉	6.0	6.0	6.0	2.6	0.4	灰白色（2.5Y7/1）
67	臼玉	5.9	6.0	5.0	2.0	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
68	臼玉	5.8	5.9	4.6	2.5	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
69	臼玉	5.6	5.5	4.8	2.3	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
70	臼玉	5.7	5.7	6.0	2.3	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
71	臼玉	5.4	5.4	5.0	2.0	0.3	灰白色（7.5Y8/1）
72	臼玉	6.1	6.1	5.9	2.4	0.4	灰白色（7.5Y7/1）
73	臼玉	5.6	5.8	5.2	2.2 ～ 2.8	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
74	臼玉	5.8	2.4	5.8	2.4	0.3	灰白色（7.5Y7/1）
75	臼玉	5.5	5.7	5.6 ～ 5.85	2.0	0.4	灰白色（7.5Y7/1）

図　　版

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第１

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)調査地全景(南西から)



(2)調査地全景(上から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第２

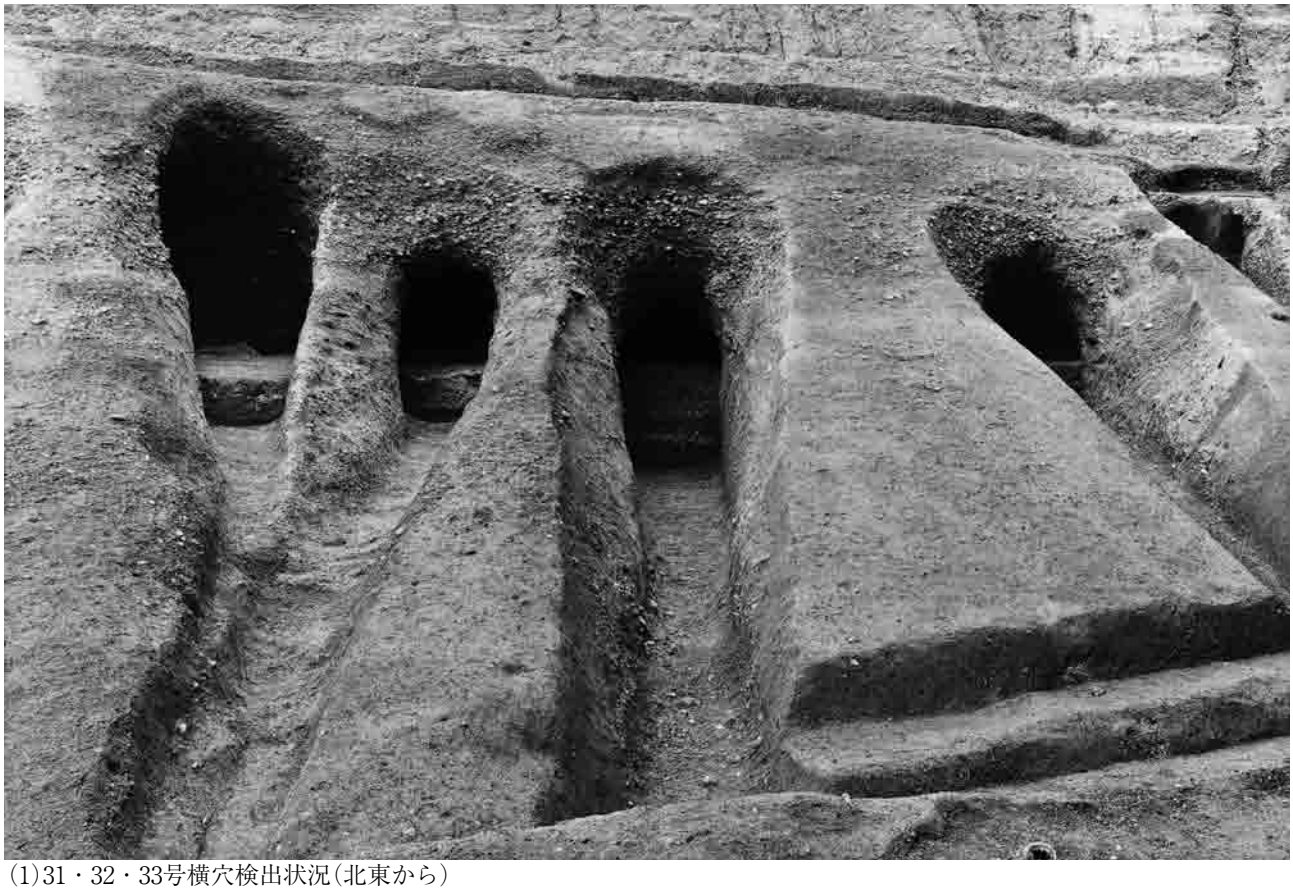
女谷・荒坂横穴群第 13 次



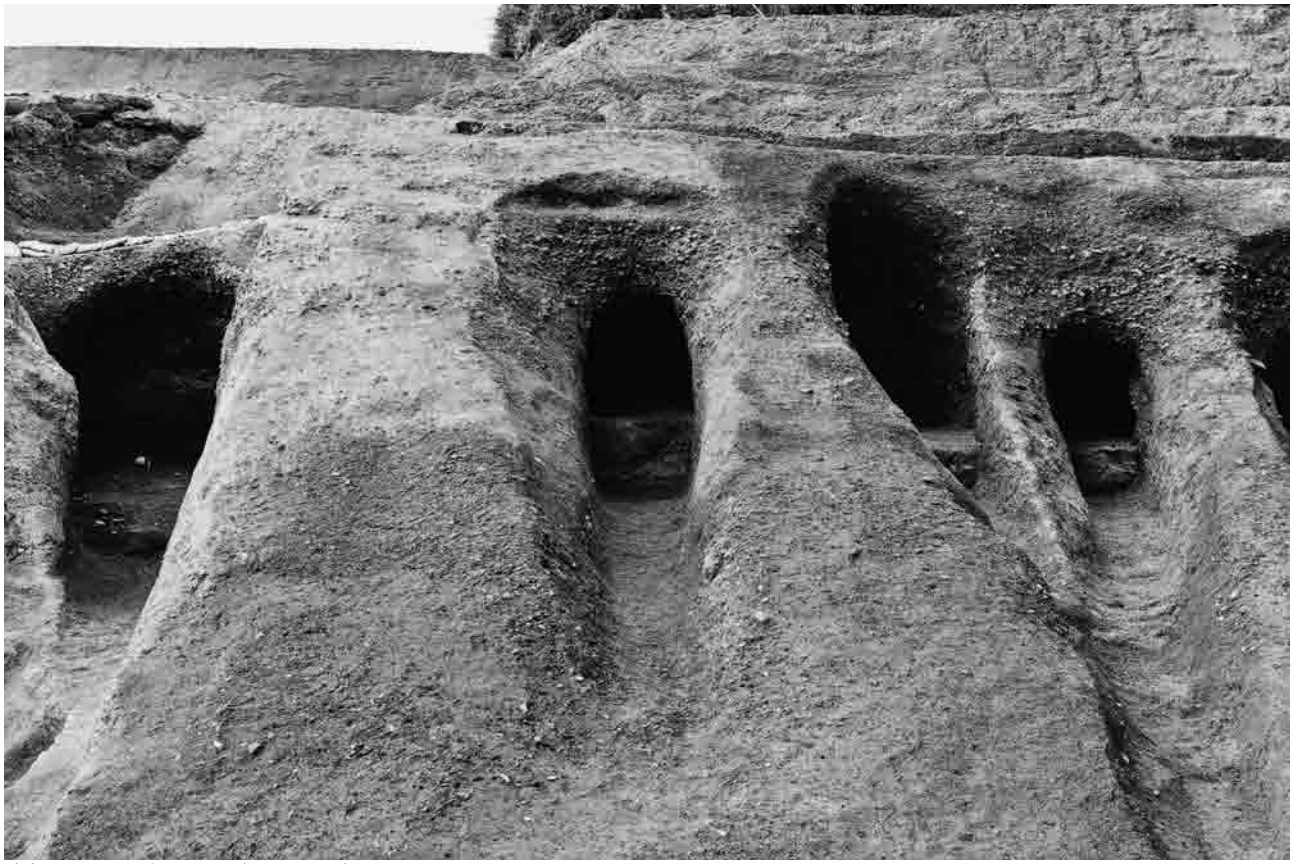
(1)25・26・27号横穴検出状況(北東から)



(2)30号横穴検出状況(北東から)



(1)31・32・33号横穴検出状況(北東から)



(2)34号横穴検出状況(北東から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第４

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)35・36号横穴検出状況(北東から)



(2)37・38号横穴検出状況(北東から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第５

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)39・40・41号横穴検出状況(北東から)



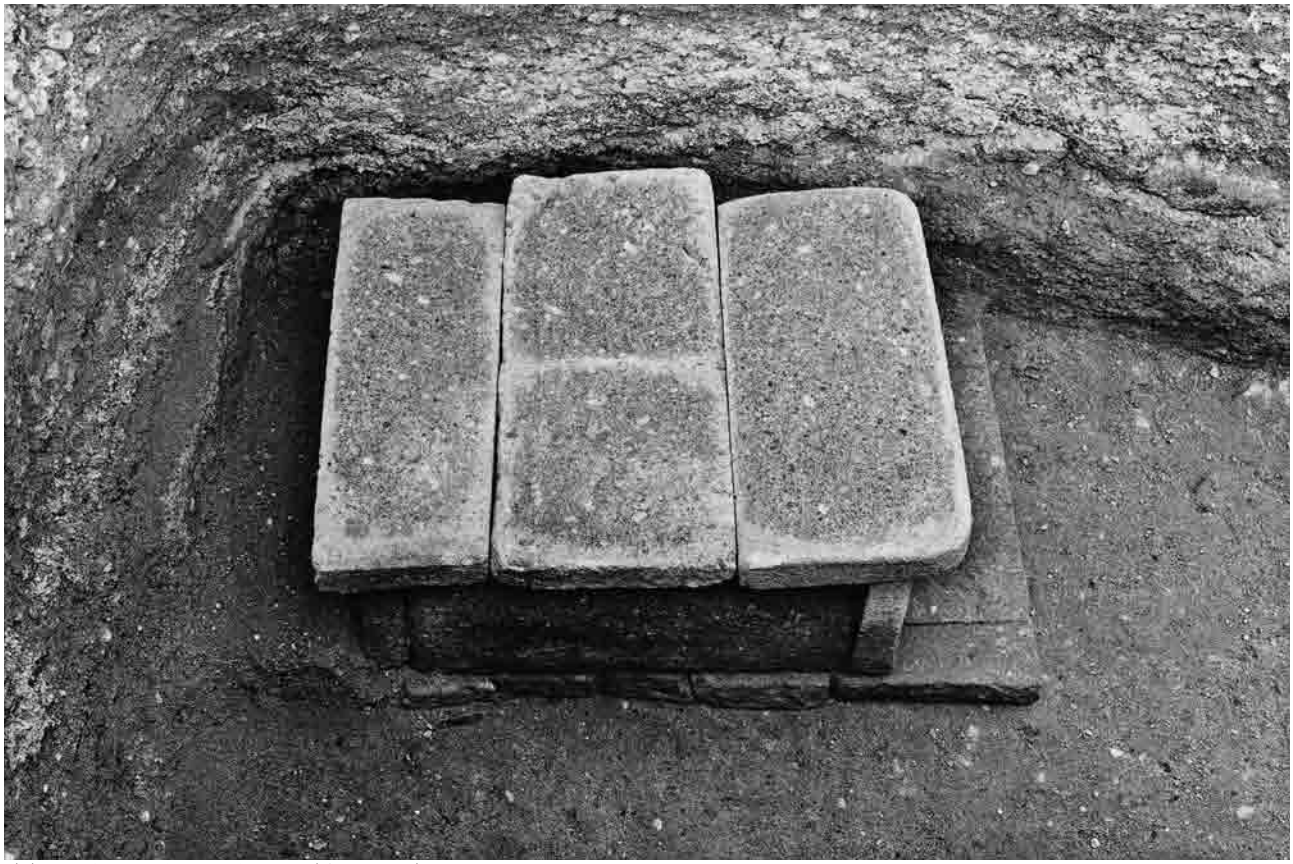
(2)42号横穴検出状況(北東から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第６

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)34号横穴石棺出土状況１(北東から)



(2)34号横穴石棺出土状況２(南西から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第７

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)調査前状況(南東から)



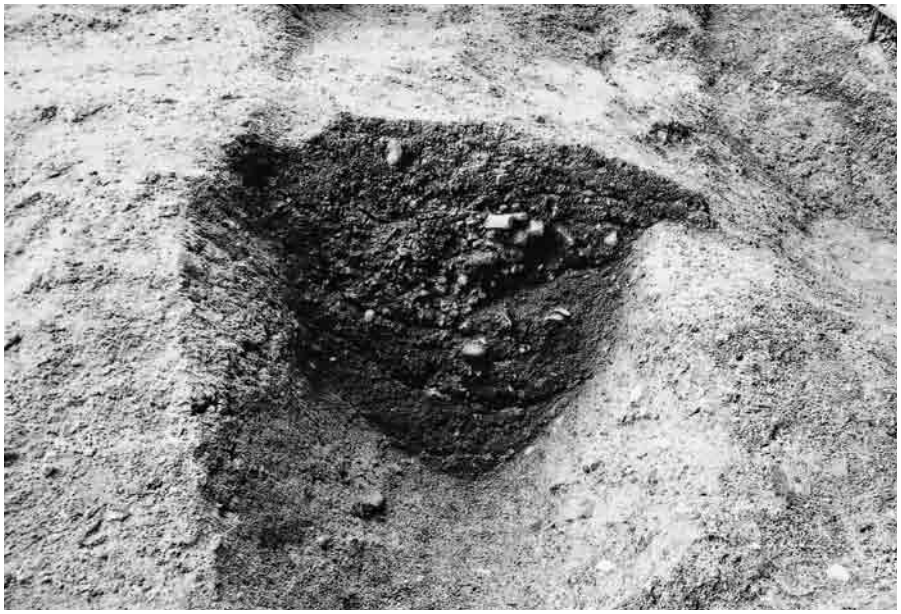
(2)25・26号横穴調査前状況
(南東から)



(3)25号横穴検出状況(南東から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第８

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)25号横穴横断土層ｂ－ｂ’
（南東から）



(2)25号横穴遺物出土状況
（南東から）



(3)25号横穴完掘状況（南東から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第９

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)26号横穴検出状況(南東から)



(2)26号横穴横断土層ｂ－ｂ'
(南東から)



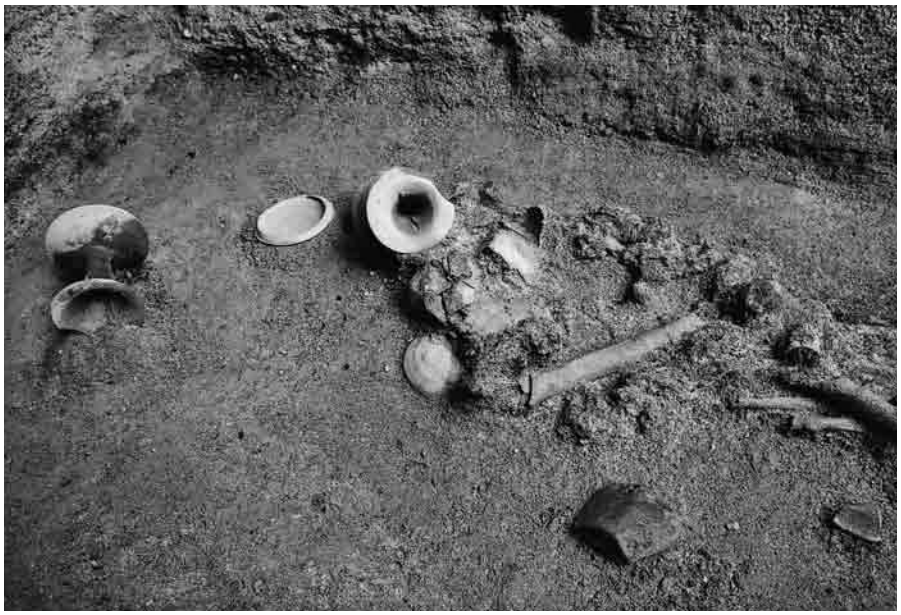
(3)26号横穴縦断土層(南東から)



(1)26号横穴玄室遺物出土状況
（南から）



(2)26号横穴玄室人骨出土状況 1
（西から）



(3)26号横穴玄室人骨出土状況 2
（西から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 11

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)26号横穴玄室臼玉出土状況
（南から）



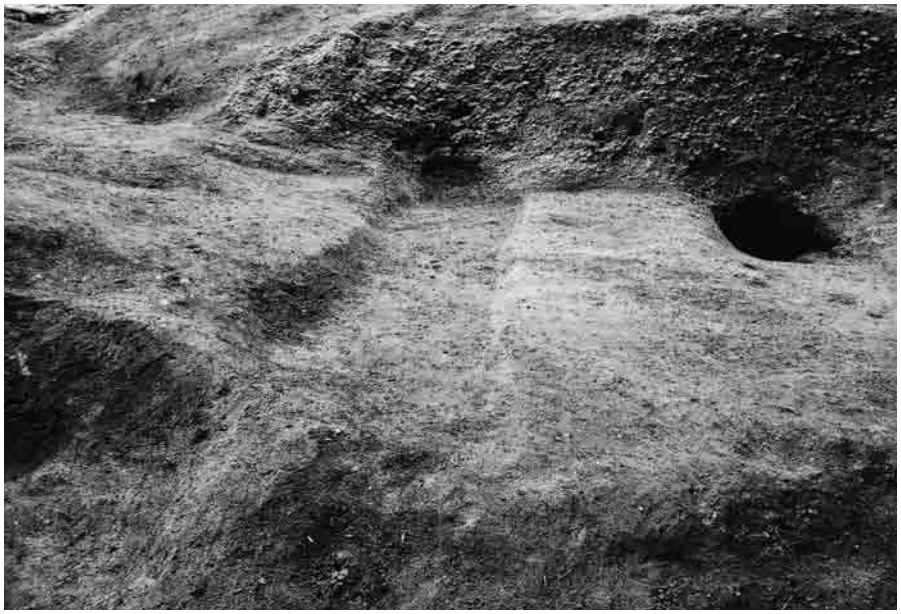
(2)26号横穴奥壁棚検出状況
（南東から）



(3)26号横穴完掘状況（南東から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 12

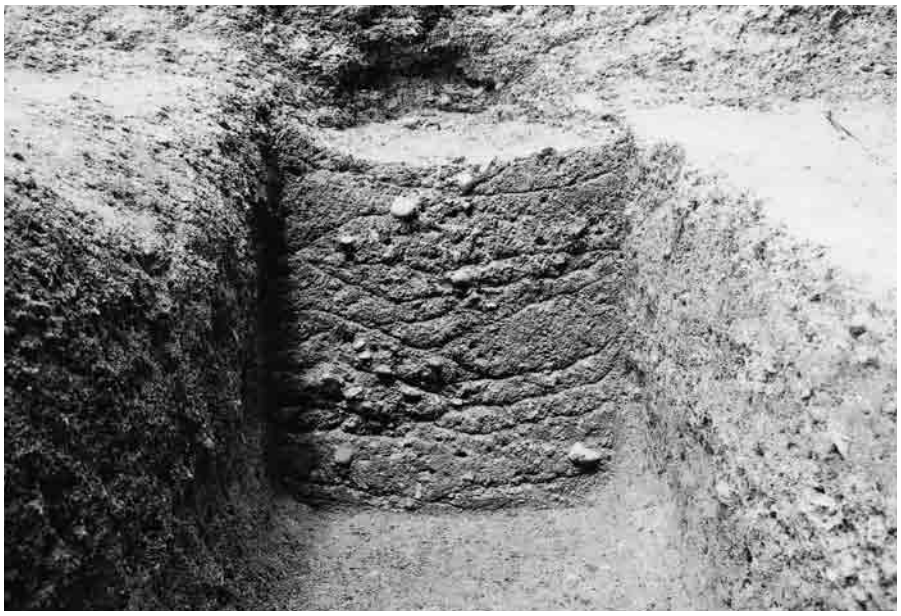
女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)27号横穴検出状況(南東から)



(2)27号横穴縦断土層(南から)



(3)27号横穴横断土層ｄ－ｄ'
(南東から)



(1)27号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）



(2)27号横穴玄室鉄製品出土状況
（北西から）



(3)27号横穴完掘状況（南東から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 14

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)28号横穴検出状況(南東から)



(2)28号横穴横断土層ｅ－ｅ'
(南東から)



(3)28号横穴玄室遺物出土状況 1
(南東から)



(1)28号横穴玄室遺物出土状況２
（南東から）



(2)28号横穴奥壁棚検出状況
（南東から）



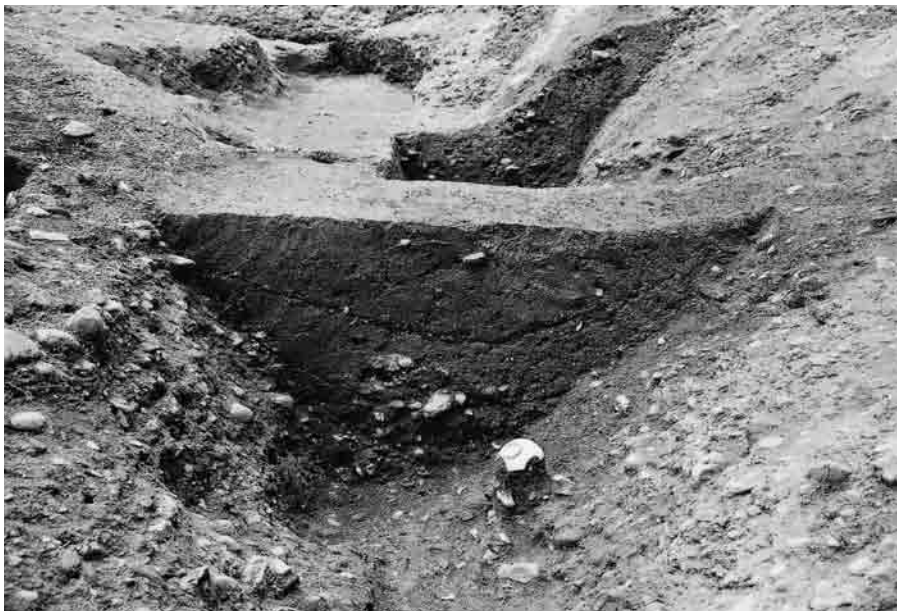
(3)28号横穴完掘状況（南東から）



(1) ＳＸ20、29号横穴検出状況
（南東から）



(2) ＳＸ20縦断土層（北東から）



(3) ＳＸ20横断土層ｄ－ｄ’
（南東から）



(1)29号横穴縦断土層(北東から)



(2)29号横穴横断土層ｄ－ｄ'
（南東から）



(3)29号横穴玄室遺物出土状況１
（南東から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 18

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)29号横穴玄室遺物出土状況２
（南東から）



(2) ＳＸ20完掘状況（南東から）



(3)29号横穴完掘状況（南東から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 19

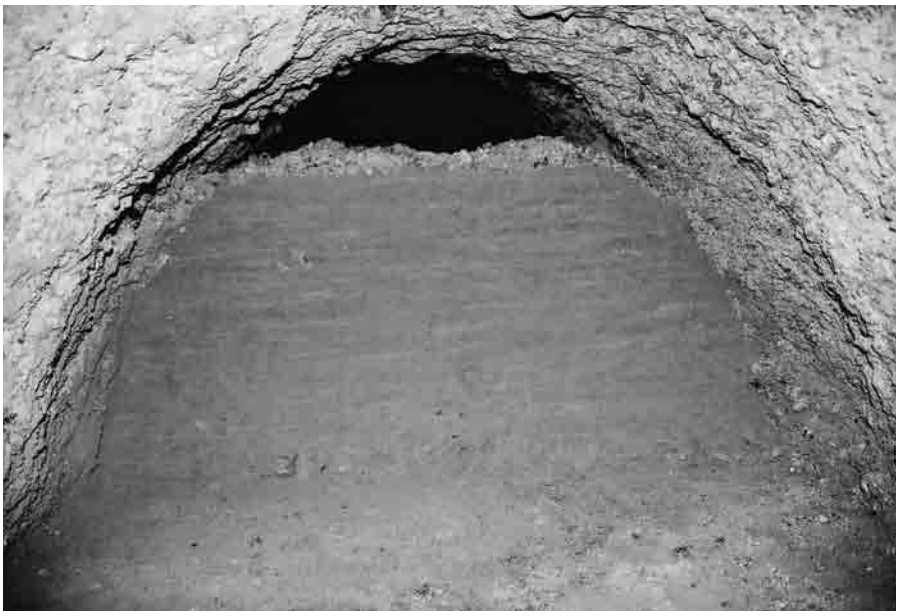
女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)30号横穴縦断土層(北東から)



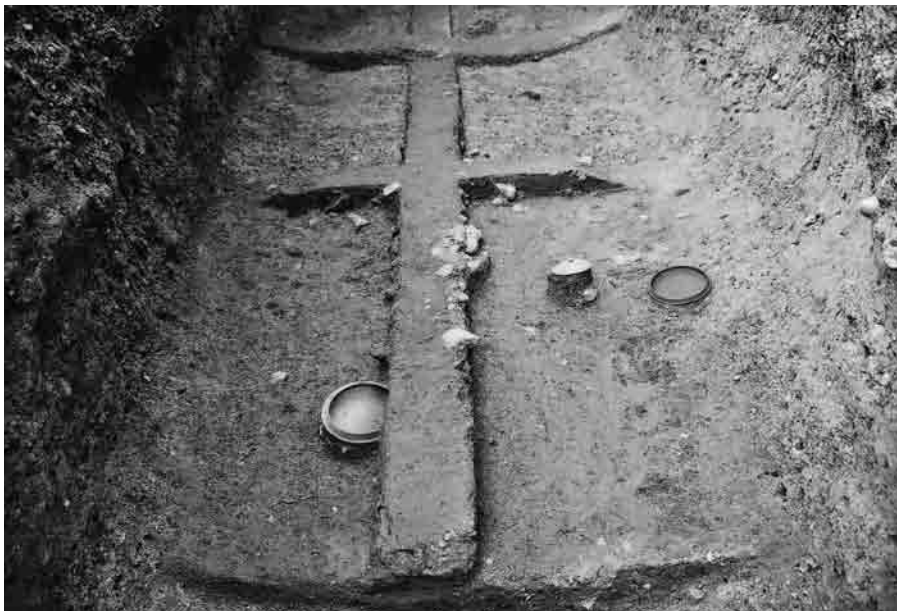
(2)30号横穴横断土層ｅ－ｅ'
(南東から)



(3)30号横穴玄室内流入土堆積状況
(南東から)



(1)30号横穴玄室遺物出土状況 1
（南東から）



(2)30号横穴玄室遺物出土状況 2
（南東から）



(3)30号横穴完掘状況（南東から）



(1)31・32・33・34号横穴検出状況
（東から）



(2)31号横穴横断土層ｄ－ｄ’
（南東から）



(3)31号横穴玄室遺物出土状況１
（北東から）



(1)31号横穴玄室遺物出土状況２
（北東から）



(2)31号横穴奥壁棚検出状況
（南東から）



(3)31号横穴完掘状況（南東から）



(1)32号横穴横断土層ｅ－ｅ’
（南東から）



(2)32号横穴遺物出土状況
（北東から）



(3)32号横穴玄室人骨・鉄製品
出土状況（南西から）



(1)32号横穴玄門付近溝状遺構
検出状況(南東から)



(2)32号横穴奥壁棚検出状況
(北東から)



(3)32・33号横穴完掘状況
(南東から)



(1)33号横穴横断土層ｂ－ｂ’
（南東から）



(2)33号横穴縦断土層(北東から)



(3)33号横穴玄室遺物出土状況１
（北西から）



(1)33号横穴玄室遺物出土状況２
（北東から）



(2)33号横穴玄室遺物出土状況３
（北東から）



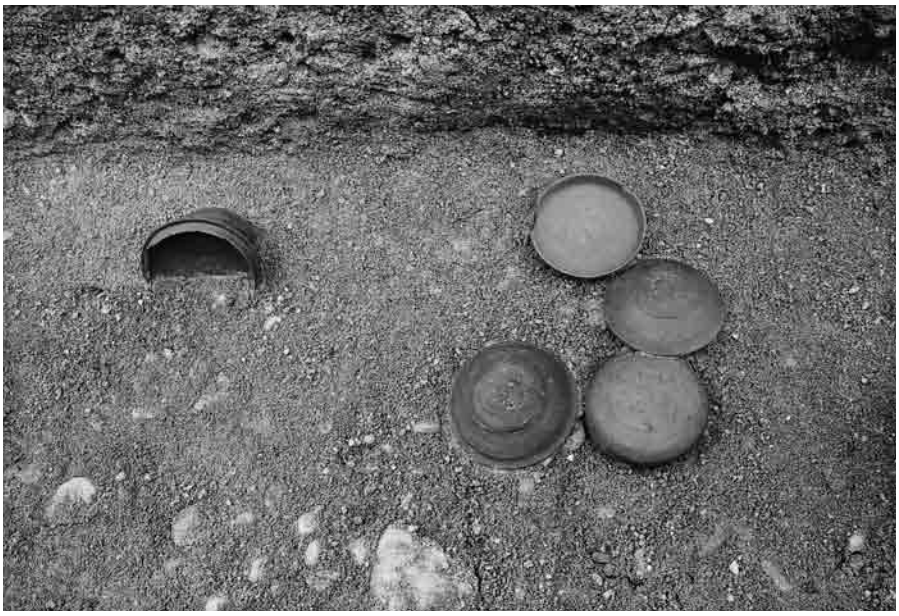
(3)33号横穴玄門付近溝状遺構
（南東から）



(1)34号横穴横断土層ｅ－ｅ’
（南東から）



(2)34号横穴玄室遺物出土状況１
（南東から）



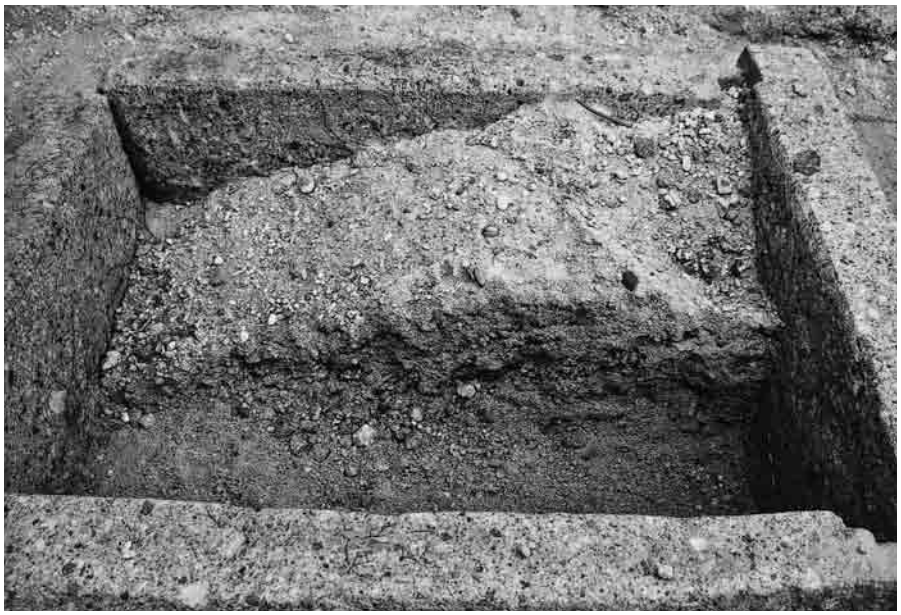
(3)34号横穴玄室遺物出土状況２
（北東から）



(1)34号横穴玄室遺物出土状況３
（北東から）



(2)34号横穴玄室遺物出土状況４
（南東から）



(3)34号横穴石棺内土層堆積状況
（南西から）



(1)34号横穴石棺内人骨出土状況
（南東から）



(2)34号横穴石棺底石出土状況
（南西から）



(3)33・34号横穴完掘状況
（南東から）


(1)35号横穴縦断土層(南から)


(2)35号横穴横断土層 d-d'(南東から)


(3)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況１(北東から)


(4)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況２(北から)


(5)35号横穴玄室遺物・人骨出土状況３(北から)


(6)35号横穴玄室人骨出土状況１(北西から)


(7)35号横穴玄室人骨出土状況２(北から)


(8)35号横穴玄室鉄製品出土状況(東から)



(1)35号横穴玄室遺物・
人骨出土状況(東から)



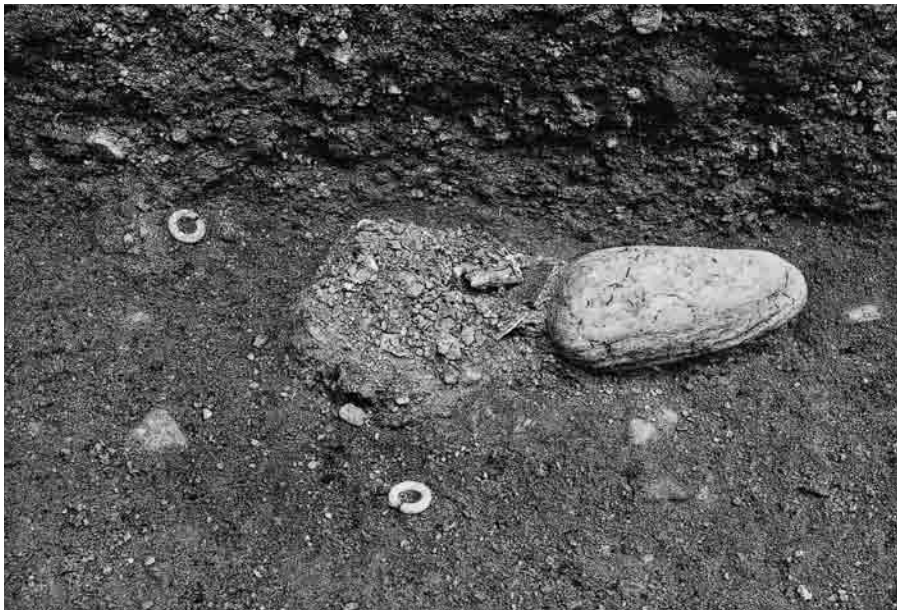
(2)35号横穴玄室遺物出土状況
(北から)



(3)35号横穴玄室遺物出土状況
(北から)



(1)35号横穴玄室遺物出土状況
（東から）



(2)35号横穴玄室耳環・
人骨出土状況(南から)



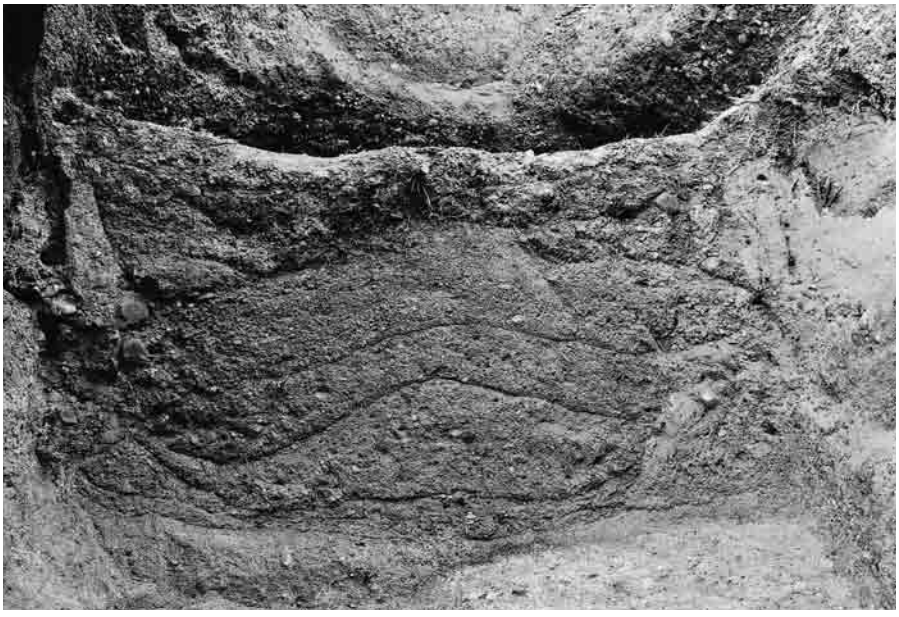
(3)35号横穴玄室完掘状況(東から)



(1)36号横穴横断土層ｄ－ｄ’
（南東から）



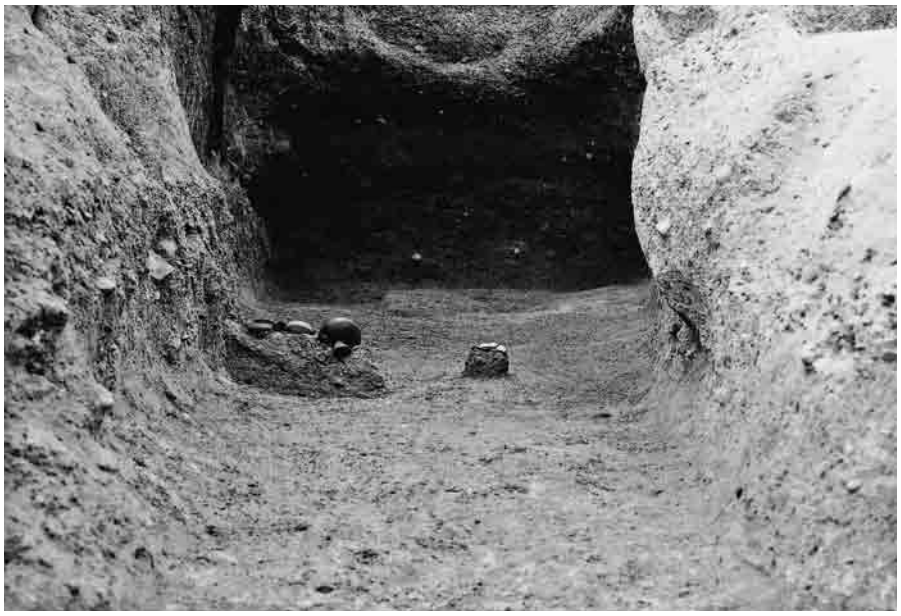
(2)36号横穴縦断土層（北東から）



(3)36号横穴横断土層ｅ－ｅ’
（南東から）



(1)36号横穴縦断土層(南東から)



(2)36号横穴玄室遺物出土状況
(南東から)



(3)36号横穴玄室遺物出土状況
(南東から)



(1)36号横穴玄室遺物出土状況
（東から）



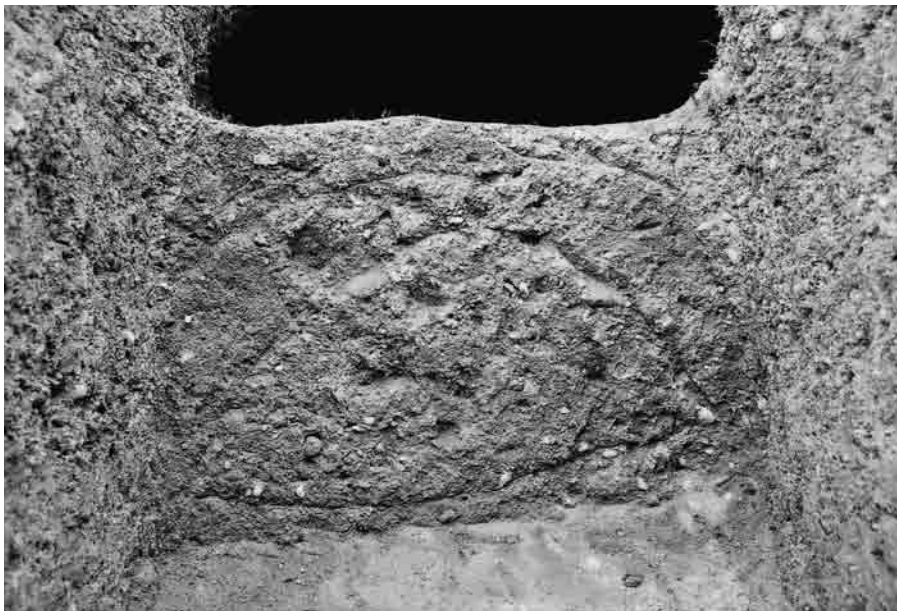
(2)36号横穴完掘状況（南東から）



(3)35・36号横穴全景
（南東から）



(1)37号横穴縦断土層(北東から)



(2)37号横穴横断土層ｅ－ｅ'
(南東から)



(3)37号横穴玄室遺物出土状況
(北から)



(1)37号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）



(2)37号横穴玄室遺物・
鉄釘出土状況(南から)



(3)37号横穴完掘状況(南東から)



(1)38号横穴縦断土層(北から)



(2)38号横穴玄室遺物出土状況
(東から)



(3)38号横穴玄室遺物出土状況
(東から)



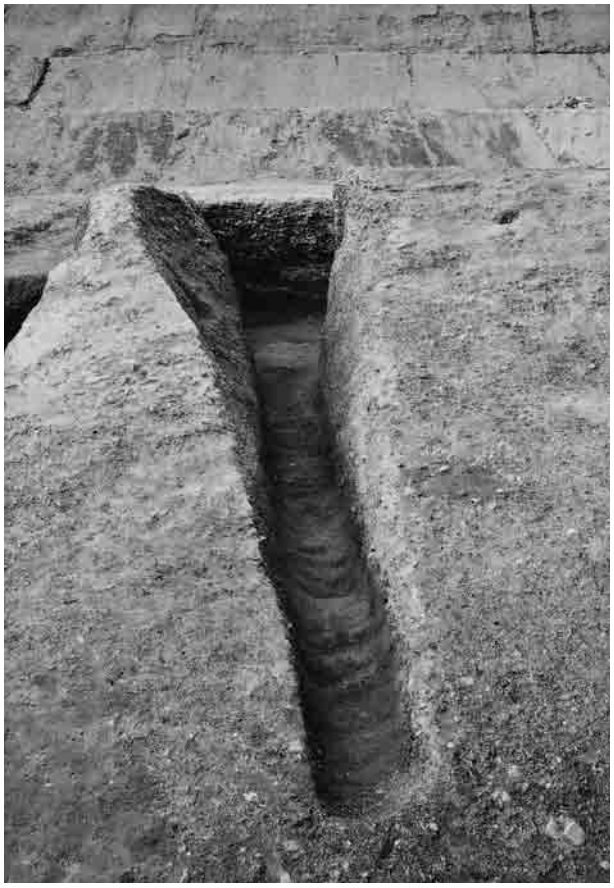
(1)38号横穴玄室遺物出土状況
（西から）



(2)38号横穴玄室遺物出土状況
（西から）



(3)38号横穴完掘状況（東から）


(1)39号横穴完掘状況(南東から)


(2)40号横穴完掘状況(南東から)


(3)41号横穴完掘状況(南東から)


(4)42号横穴完掘状況(南東から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 41

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)39号横穴横断土層ｃ－ｃ’（南東から）



(2)39号横穴縦断土層（北東から）



(3)39号横穴墓道遺物出土状況（北西から）



(4)39号横穴玄室完掘状況（北西から）



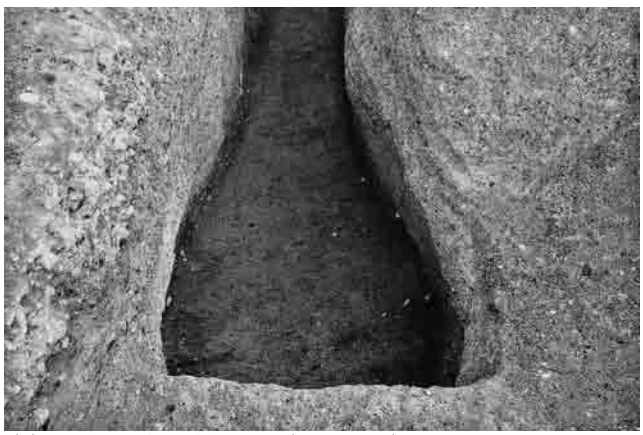
(5)40号横穴縦断土層（北東から）



(6)40号横穴縦断土層（北東から）



(7)40号横穴横断土層ｅ－ｅ’（南東から）



(8)40号横穴玄室完掘状況（北西から）



(1)41号横穴横断土層ｃ－ｃ’
（南東から）



(2)41号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）



(3)41号横穴玄室遺物出土状況
（南西から）



(1)41号横穴玄室遺物出土状況
（東から）



(2)41号横穴玄室両袖検出状況
（北東から）



(3)41号横穴玄室完掘状況
（北東から）



(1)42号横穴横断土層ｄ－ｄ’
（南東から）



(2)42号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）



(3)42号横穴玄室遺物出土状況
（北西から）



(1)42号横穴玄室人骨・棺台
出土状況(南西から)



(2)42号横穴玄室両袖検出状況
(北西から)



(3)42号横穴玄室完掘状況
(北西から)


(1)43号横穴横断土層ｆ－ｆ’（南東から）


(2)43号横穴縦断土層（南西から）


(3)43号横穴玄室遺物出土状況（北西から）


(4)43号横穴玄室遺物出土状況（北西から）


(5)43号横穴玄室遺物出土状況（北西から）


(6)43号横穴玄室耳環・人骨出土状況（南から）


(7)43号横穴玄室遺物出土状況（南東から）


(8)43号横穴玄室耳環出土状況（南西から）



(1)43号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）



(2)43号横穴玄室遺物出土状況
（南東から）



(3)43号横穴完掘状況（南東から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 48

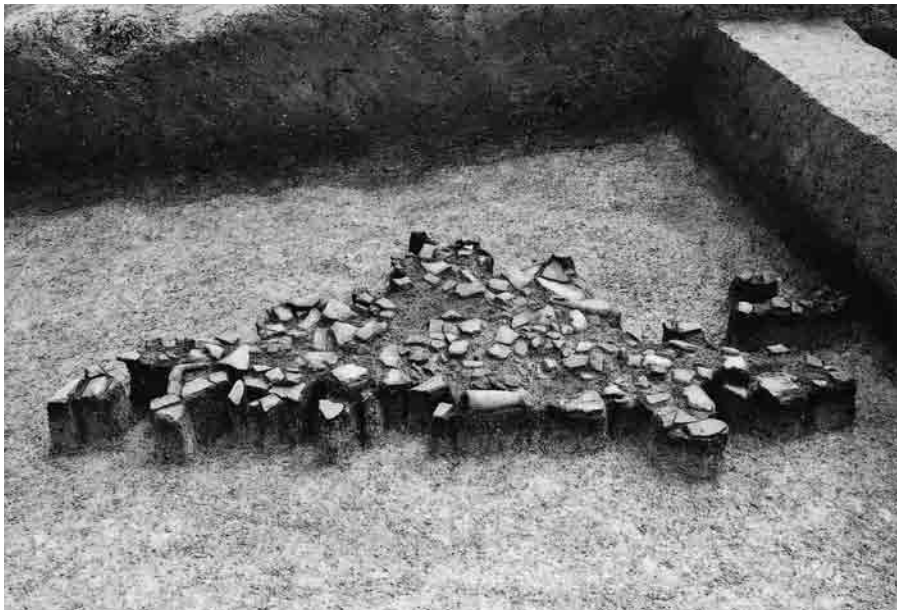
女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1)御毛通２号墳完掘状況
（南東から）



(2)周溝土層堆積状況(南東から)



(3)埴輪出土状況(南西から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 49

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1) 3 トレンチ完掘状況(南から)



(2) 3 トレンチ北壁土層(南西から)



(3) 3 トレンチ東壁土層(北西から)

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 50

女谷・荒坂横穴群第 13 次



(1) 4 トレンチ完掘状況(南から)



(2) 4 トレンチ北壁土層(南西から)



(3) 4 トレンチ東壁土層(北西から)


1


2


3


10


11


6


8


9


12


32

出土遺物 1　25・26号横穴


20


22


21


24


25


23


26


28


27


30


29

出土遺物２　26号横穴


31


33


76


81


77


82


78


84


79


85


80


86


87

出土遺物３　26・27号横穴


88


89


90


91


116


117


125


92


93


120


127


128

出土遺物 4　27・28号横穴


122


121


144


124


146


145


151


150


148


149


147

出土遺物５　28・29号横穴


186


187


188


189


202


203


204


190


191


192


194


195


212

出土遺物６　30・31号横穴


208


205


206


209


210


211

出土遺物７　31号横穴


213


214


215


216


220


221


226


227


217


218


219


222


223


224


225

出土遺物８　31号横穴


228


260


264


265


304


305


229


262


266

出土遺物９　31・32・33号横穴


306


307


316


320


317


321


318


322


319


323


324


325

出土遺物10　33・34号横穴


326


328


327


329


330


333


331


334


332


335


342


343

出土遺物11　34号横穴


338


339


336


341


340


356


344


357


358

出土遺物12　34・35号横穴


359


362


360


368


361


370


369


363


365


364


366

出土遺物13　35号横穴


367


379


378


377


387


386


385

出土遺物14　35号横穴


371


372

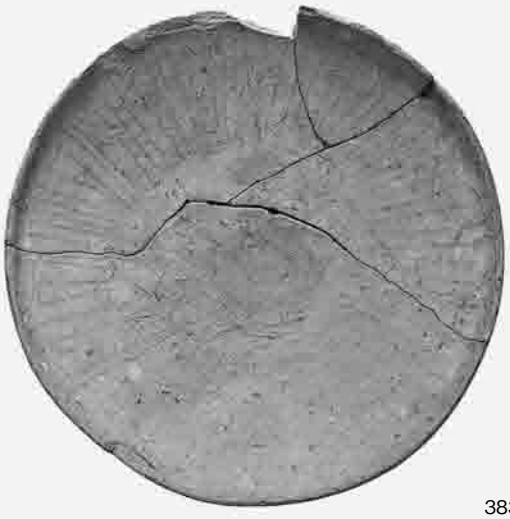

373


374


375


376

出土遺物15　35号横穴


383（内面）

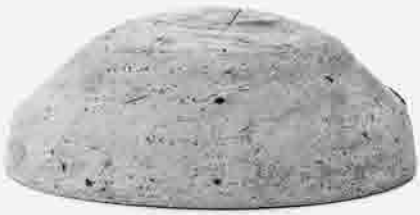

382（内面）


383


382


384


396


397


399


395


400

出土遺物16　35・36号横穴

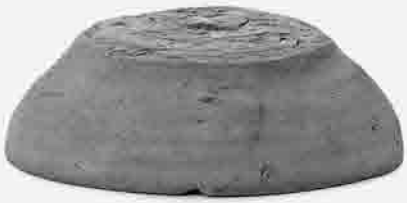

398


401


404


408


405


406


407


402


403


412


409


410

出土遺物17　36・37号横穴


411


413


448


449


451


453


414（内面）


414


450


454


456


458

出土遺物18　37・38号横穴


452


455


457


459


460


461


462


463


464


465


466


467


468

出土遺物19　38号横穴


469


471


470


472


474


473

出土遺物20　38号横穴


475


476


479


480


481


478

出土遺物21　38号横穴


482


494


495


499


498


500


503


505


504

出土遺物22　38・39・41号横穴


509


510


514


515


516


517


518


522


511


512


513


519


520


521


522


524

出土遺物23　42号横穴


525


526


528


529


542


543

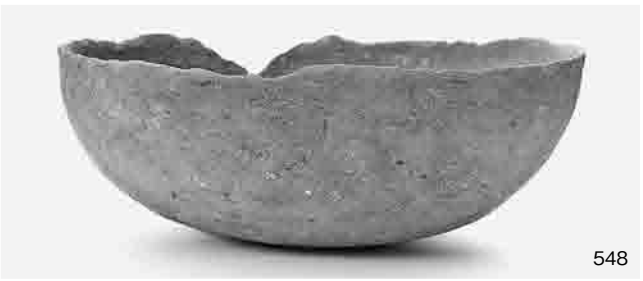

527


545


544


546


547


548


549

出土遺物24　42・43号横穴


530


531


532


533


535


534

出土遺物25　43号横穴


537


536

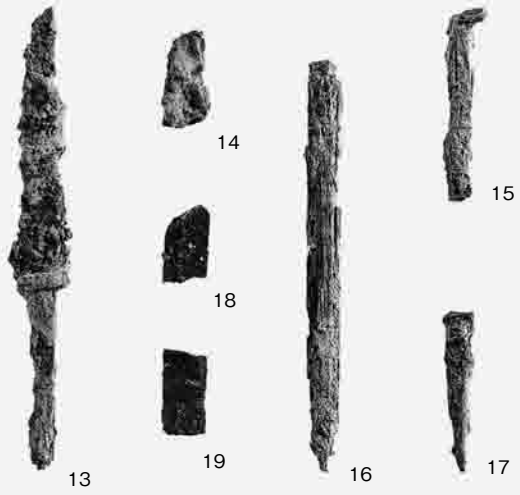

539


538


540

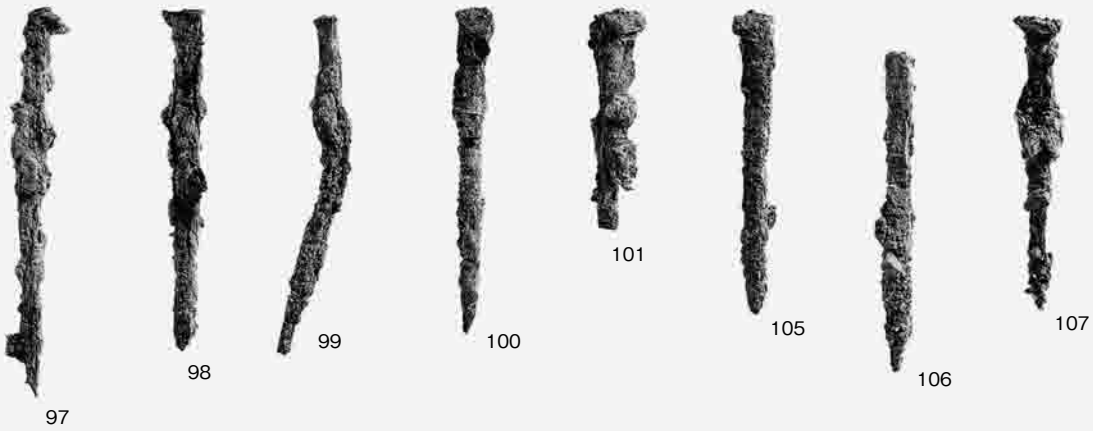

541

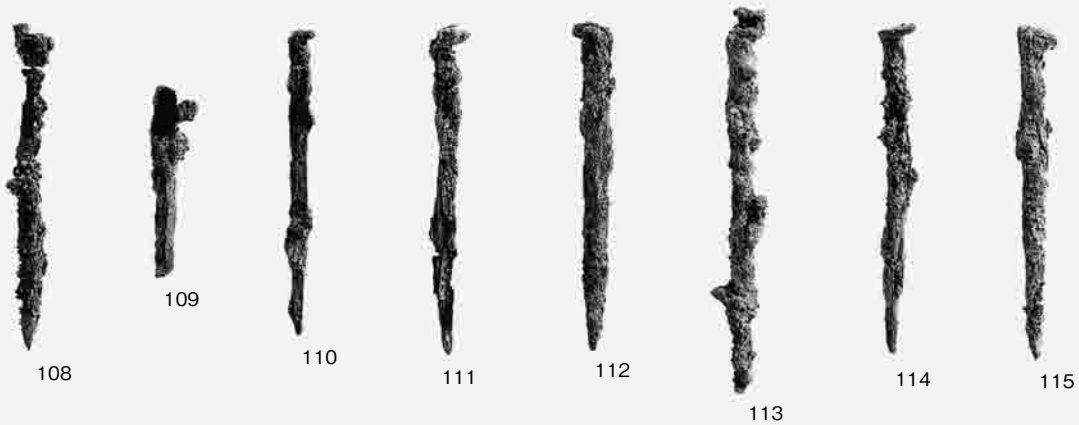
出土遺物26　43号横穴



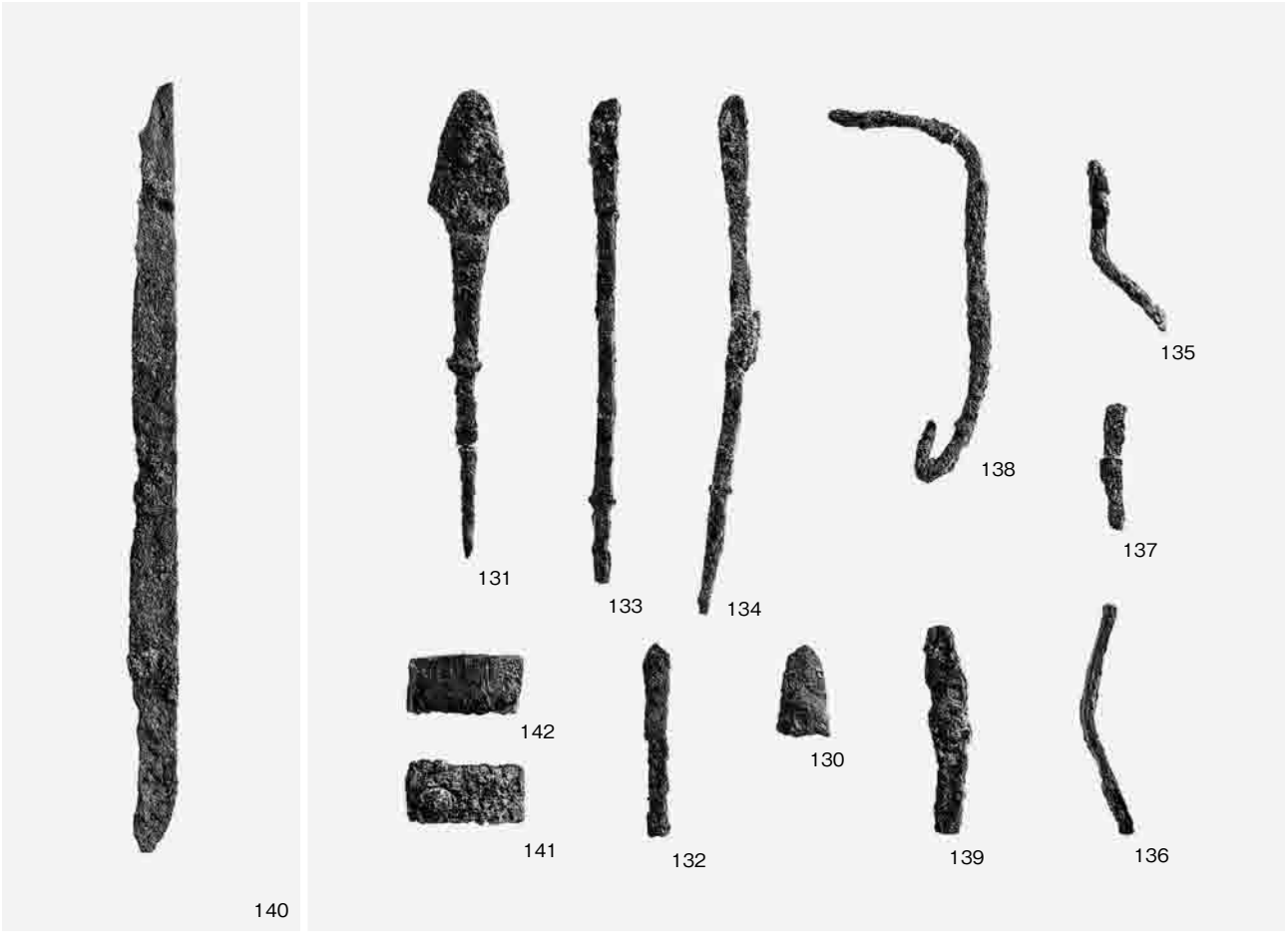


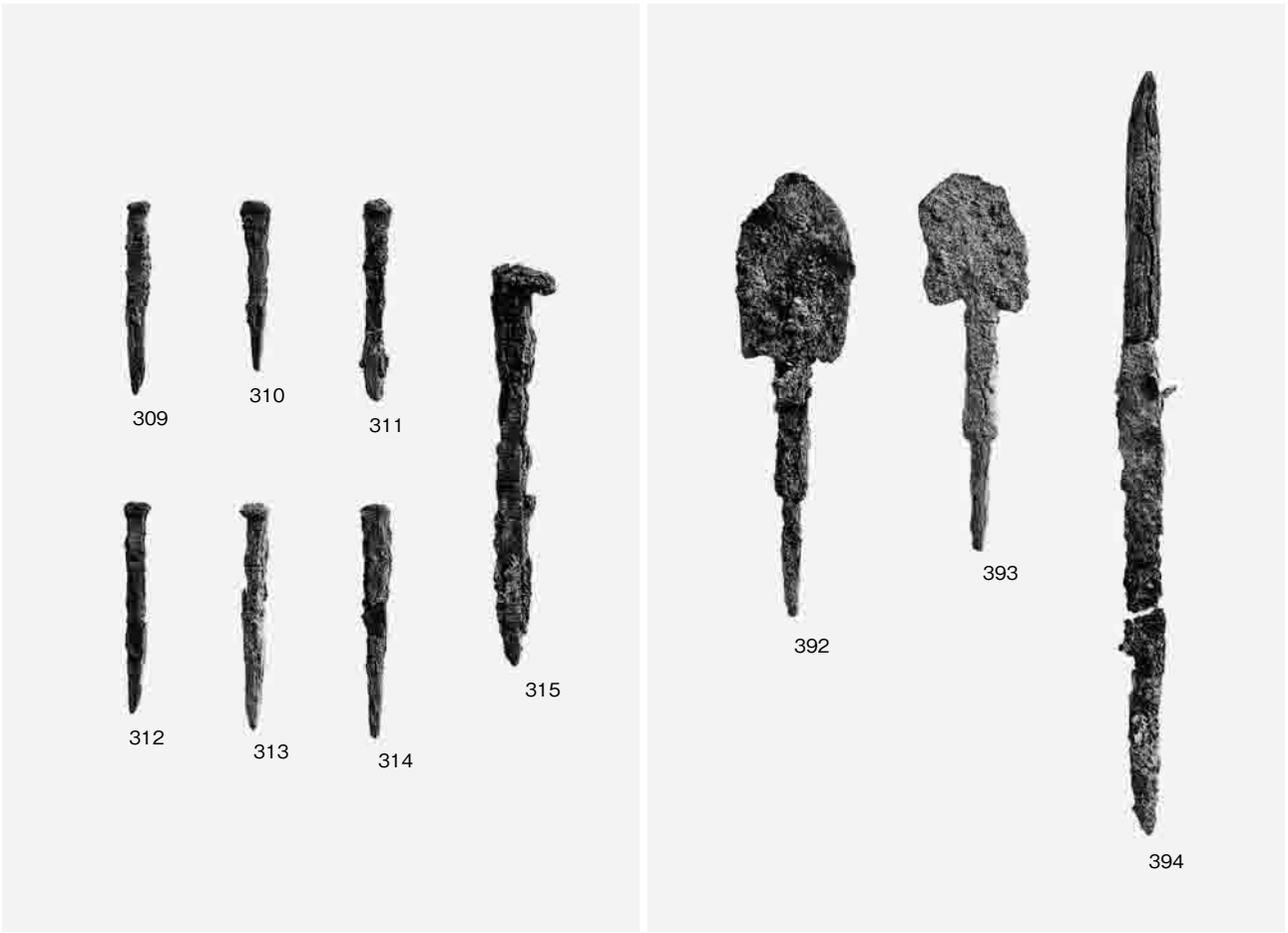




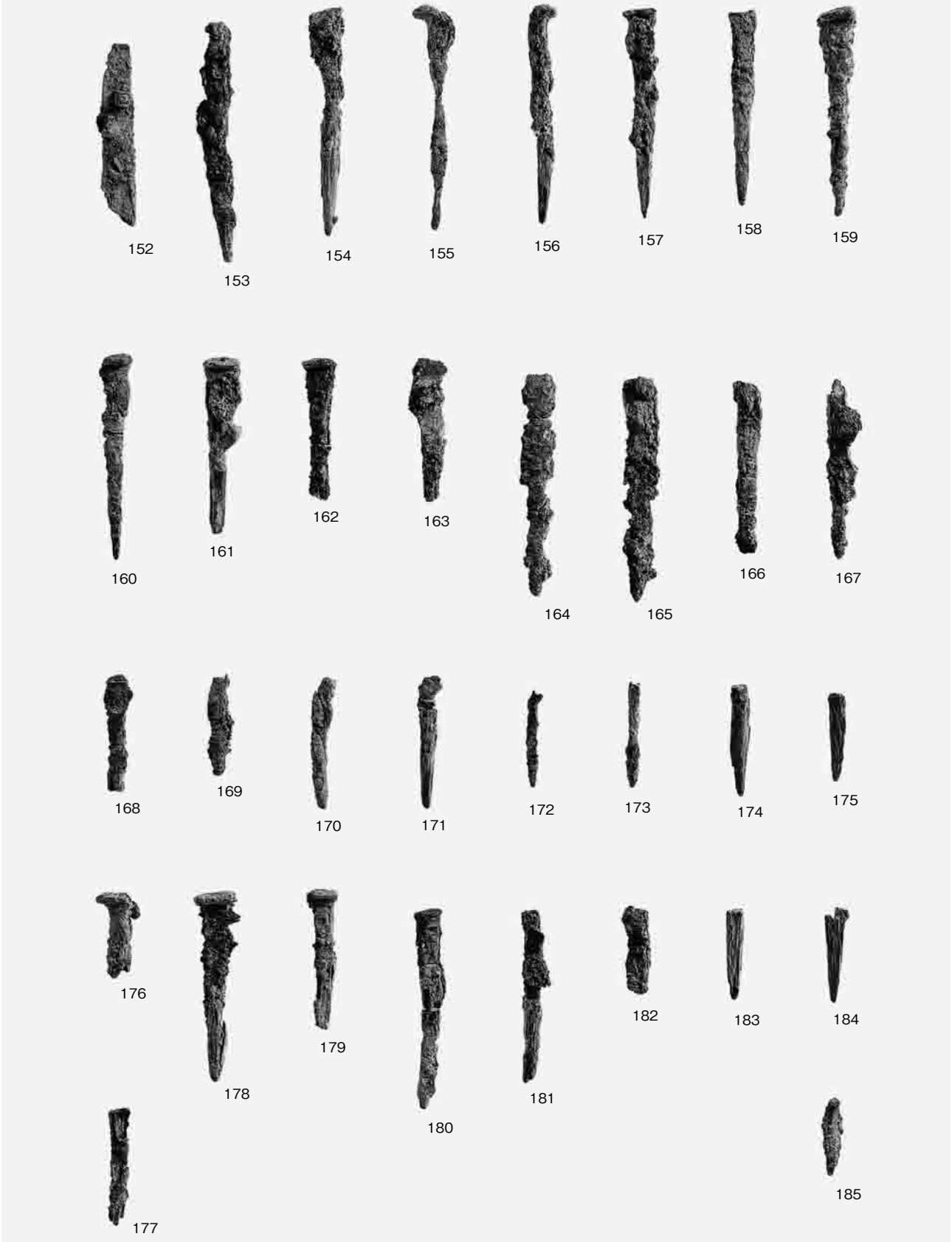


出土遺物27　25・26・27号横穴

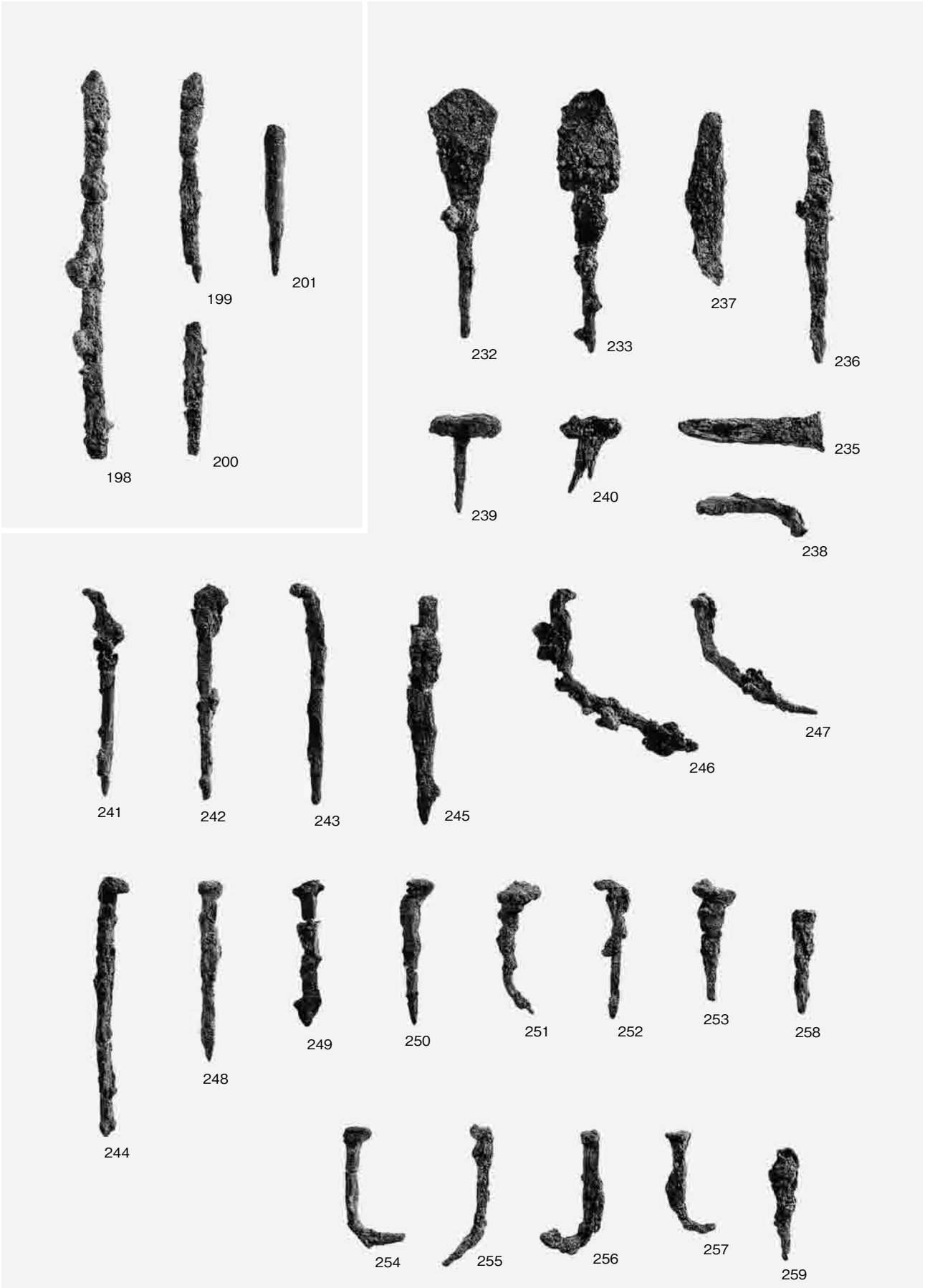




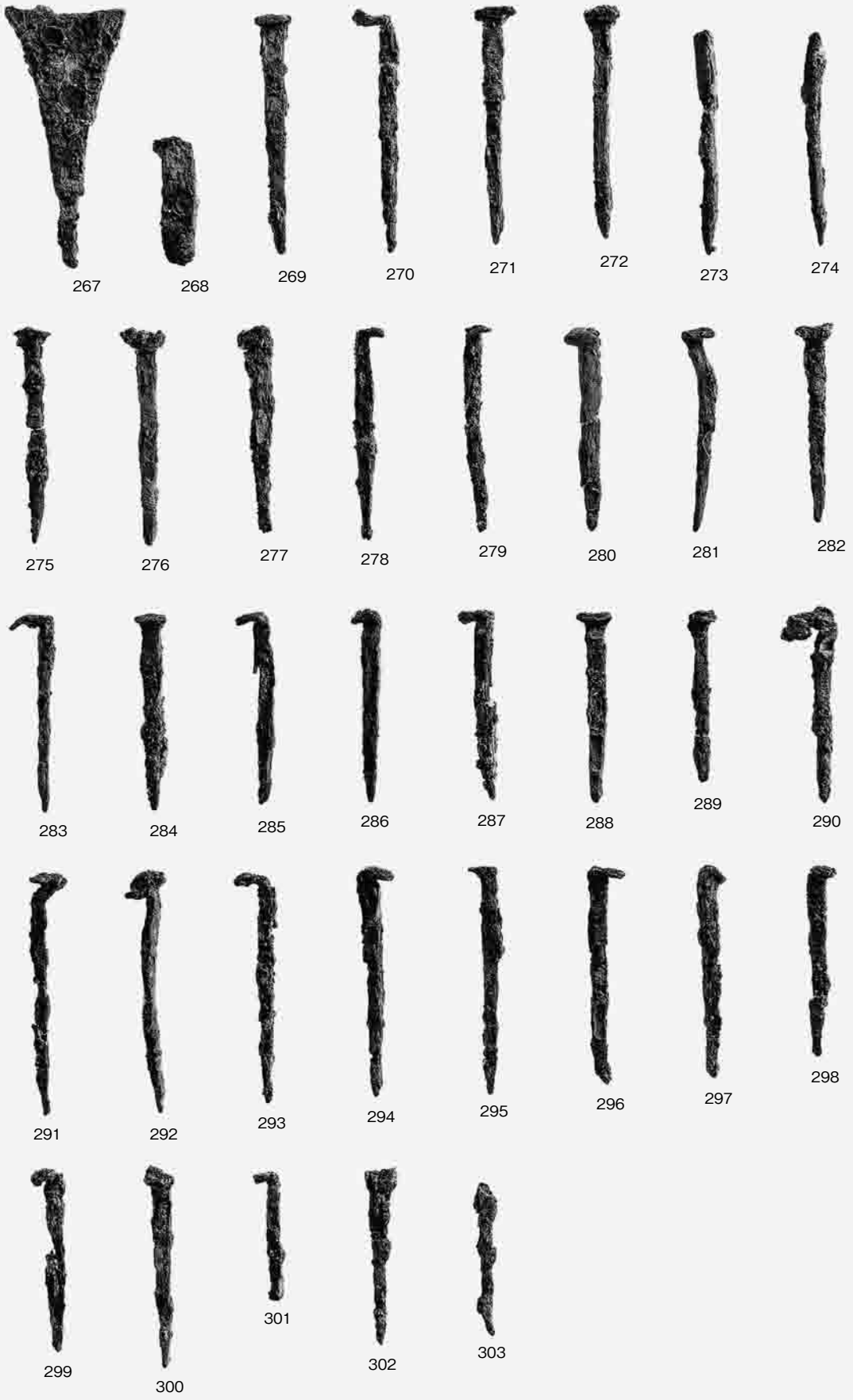
出土遺物28　28・33・35号横穴



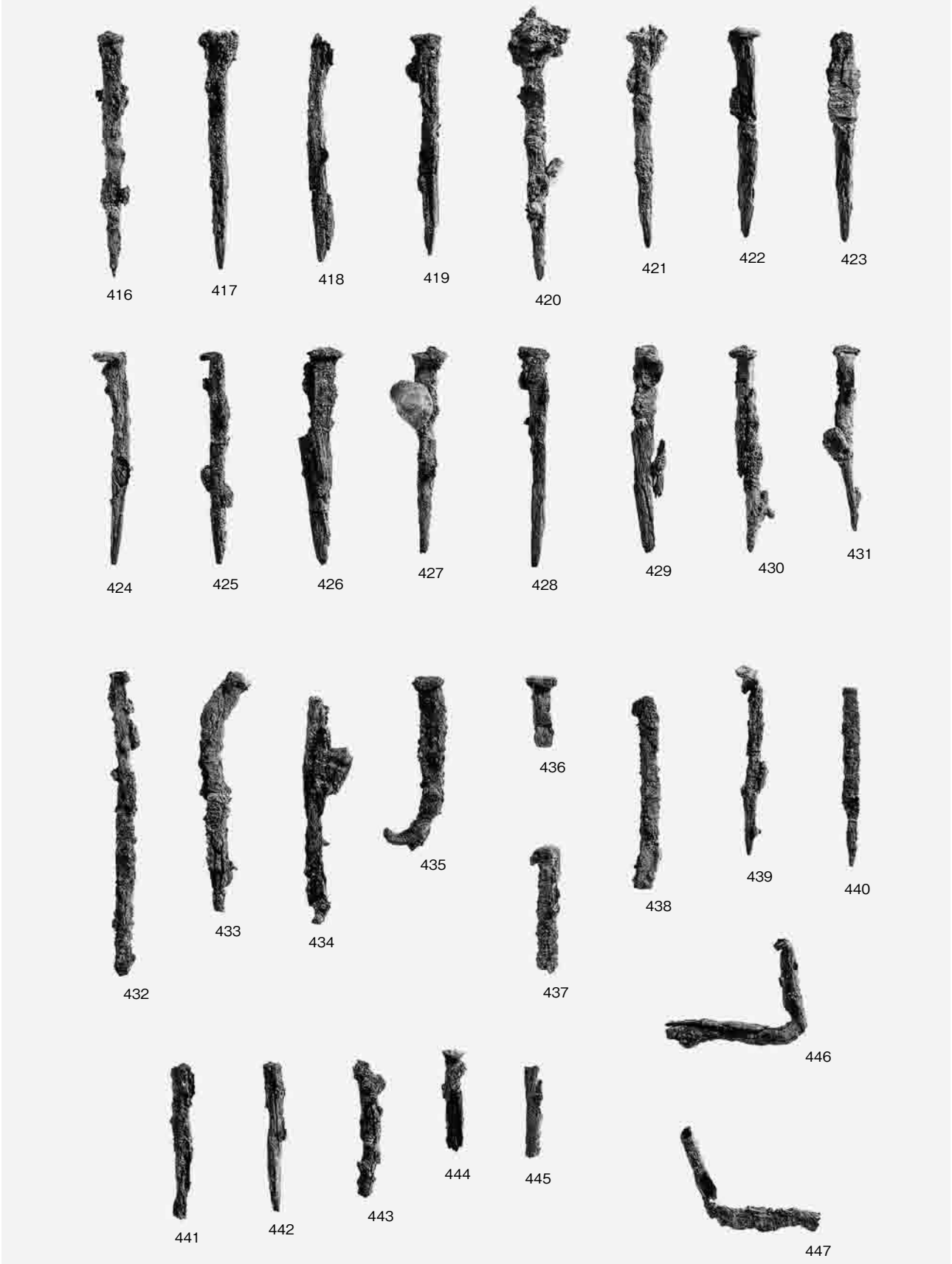
出土遺物29　29号横穴



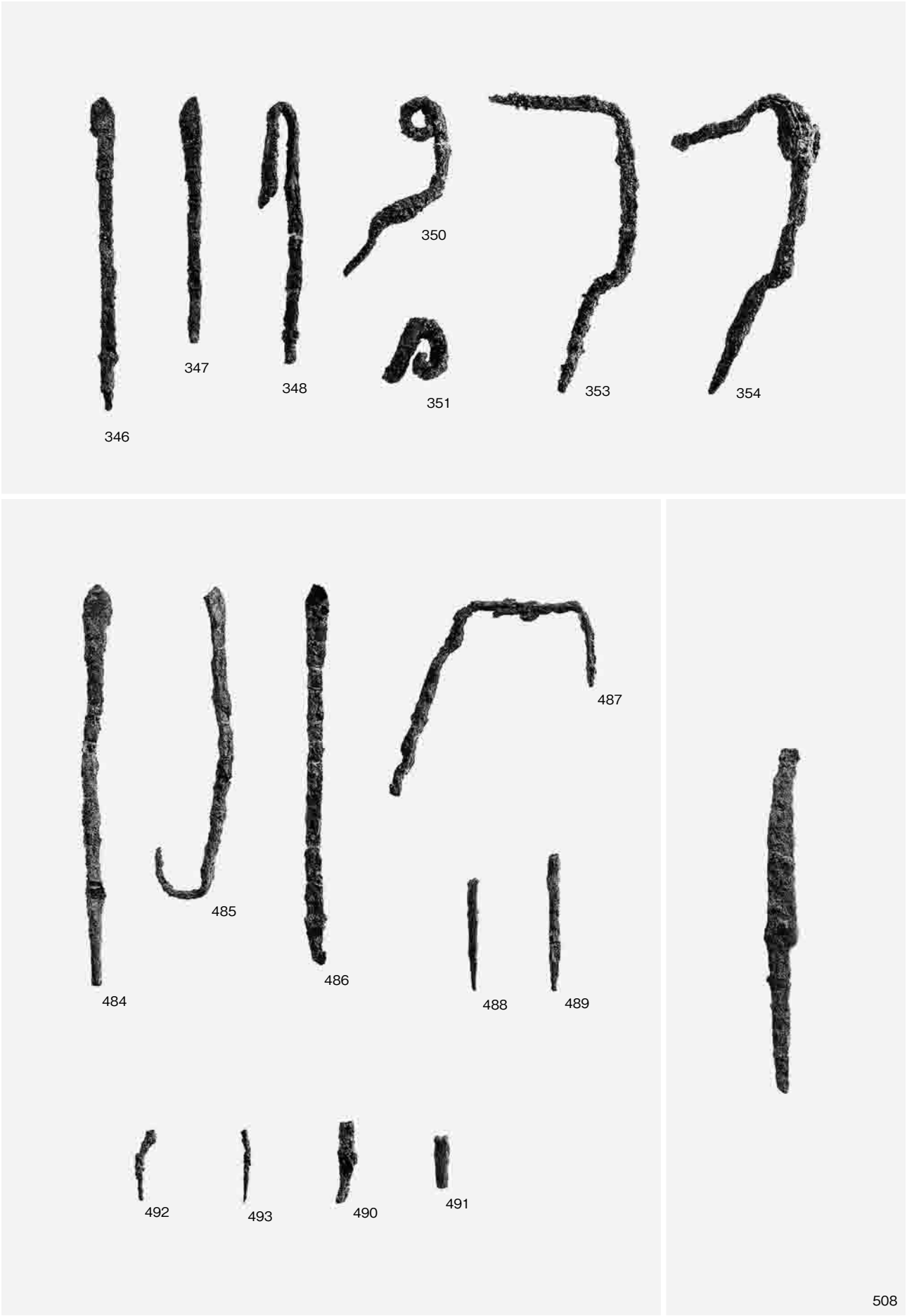
出土遺物30　30・31号横穴



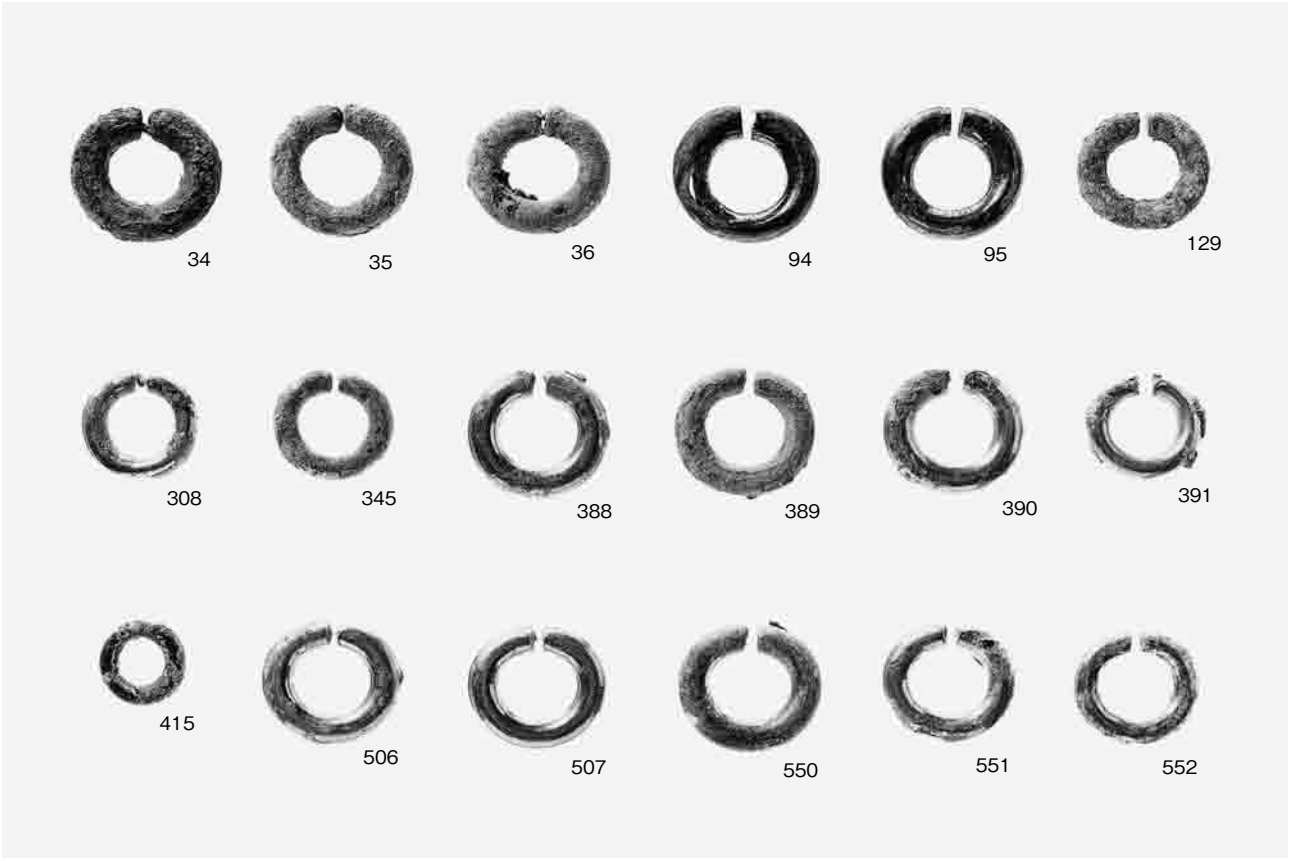
出土遺物31　32号横穴



出土遺物32　37号横穴



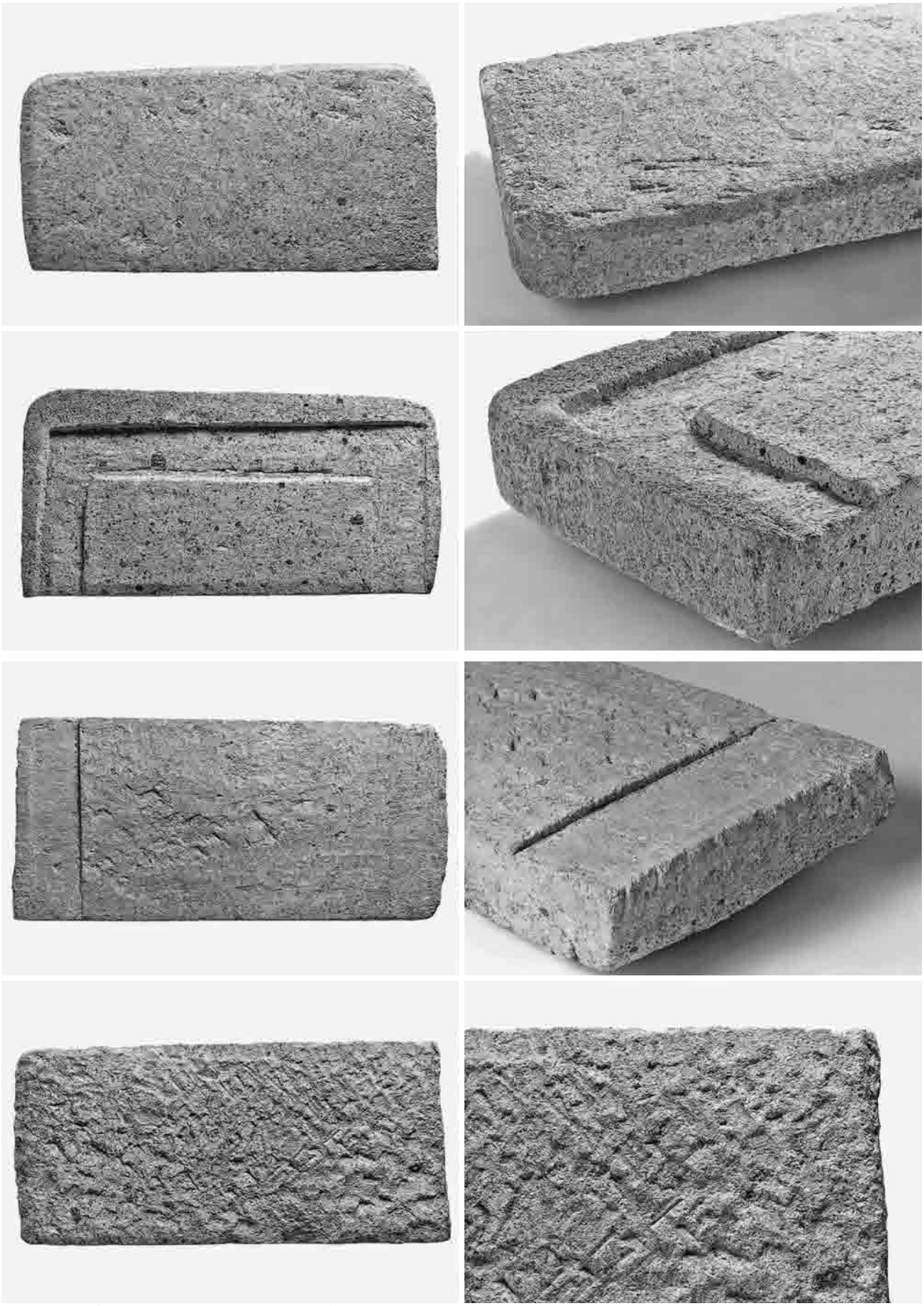
出土遺物33　34・38・41号横穴



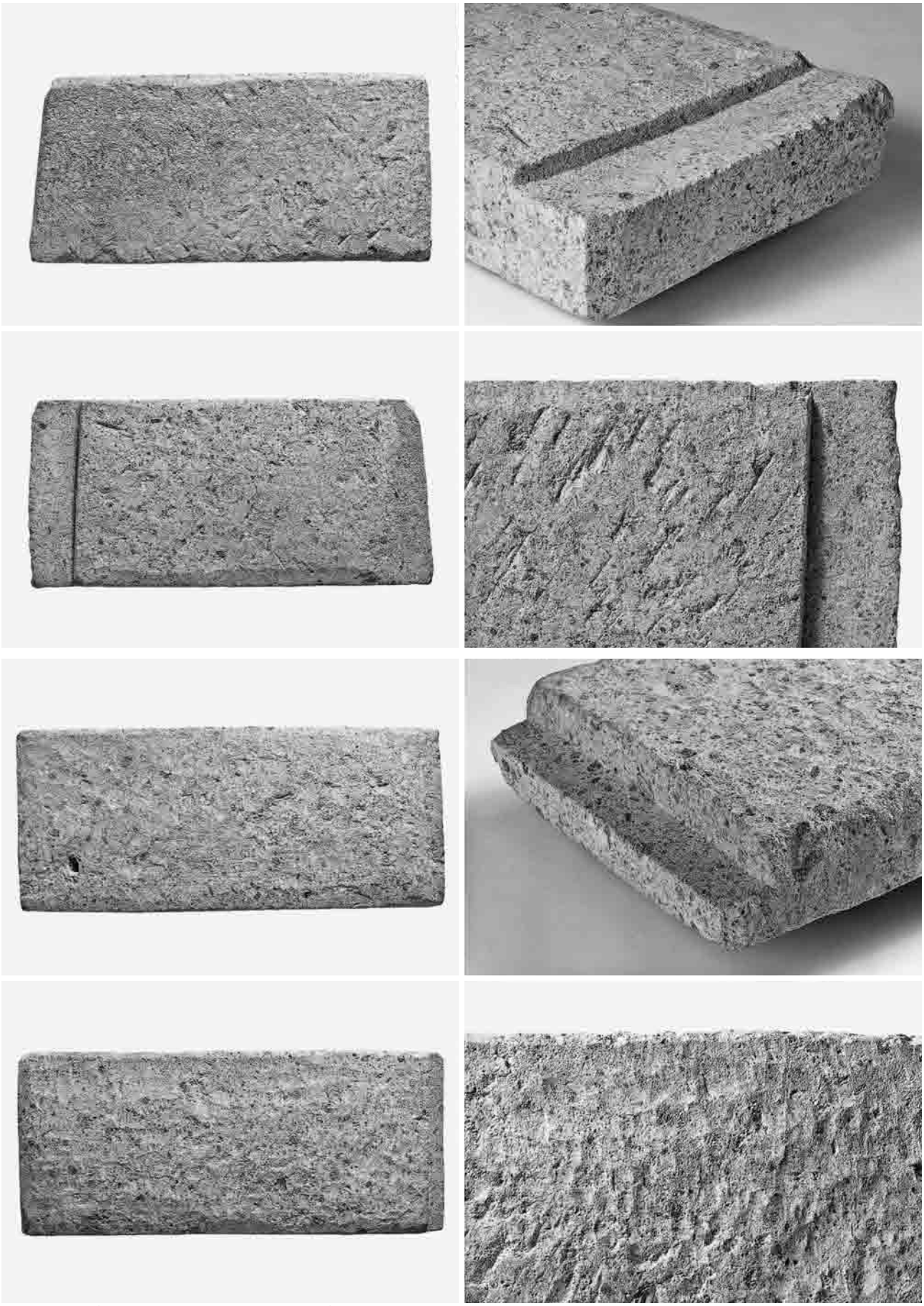
(1)出土遺物34　耳環



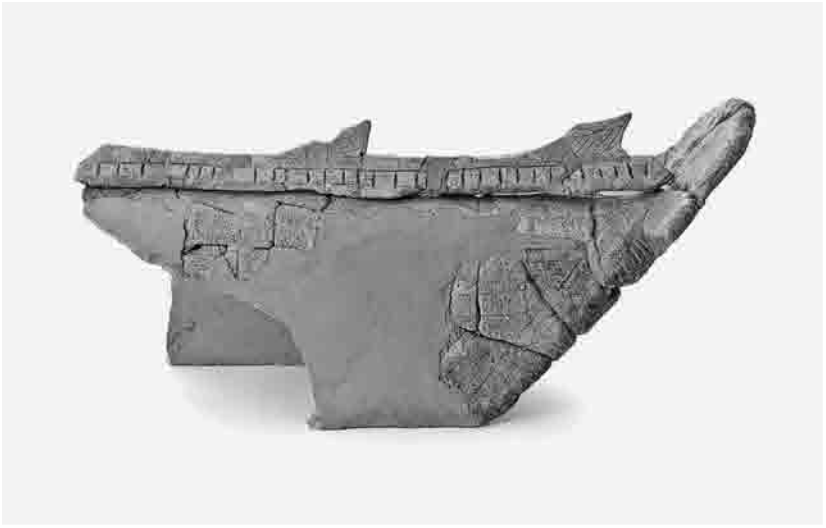
(2)出土遺物35　玉類



石棺石材 1（上段・蓋石 1、下段・底石 1）



石棺石材２（上段・小口１、下段・側石１）







554





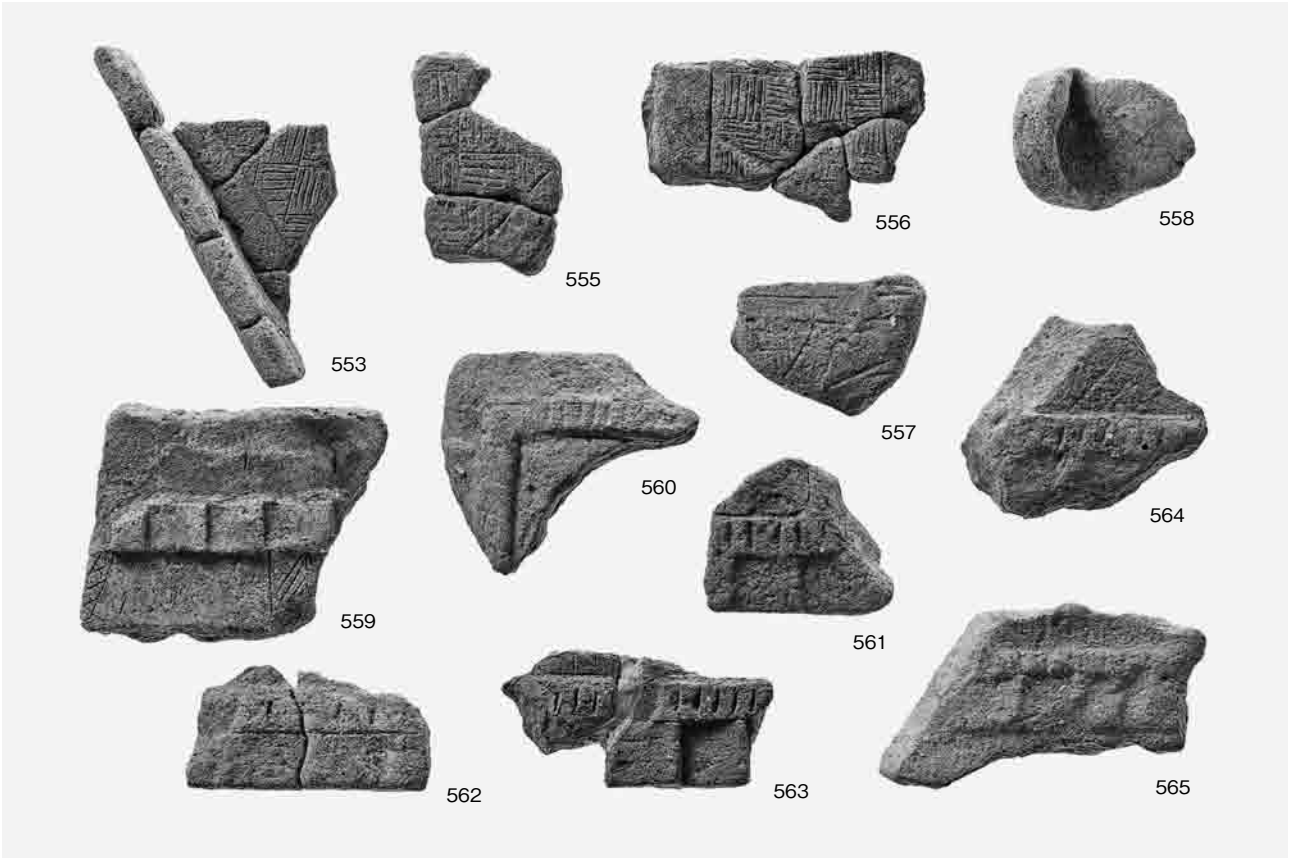
573

家形埴輪 1

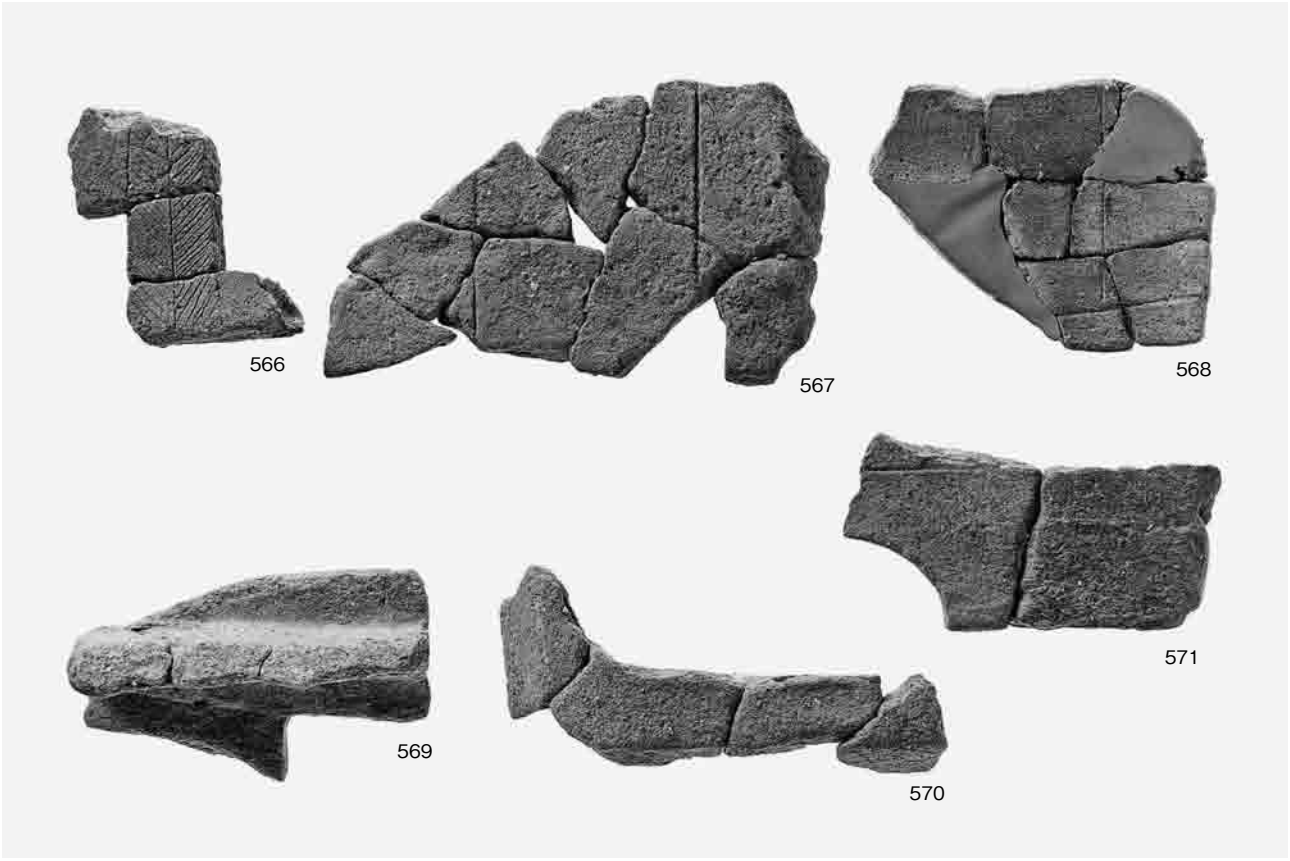


573

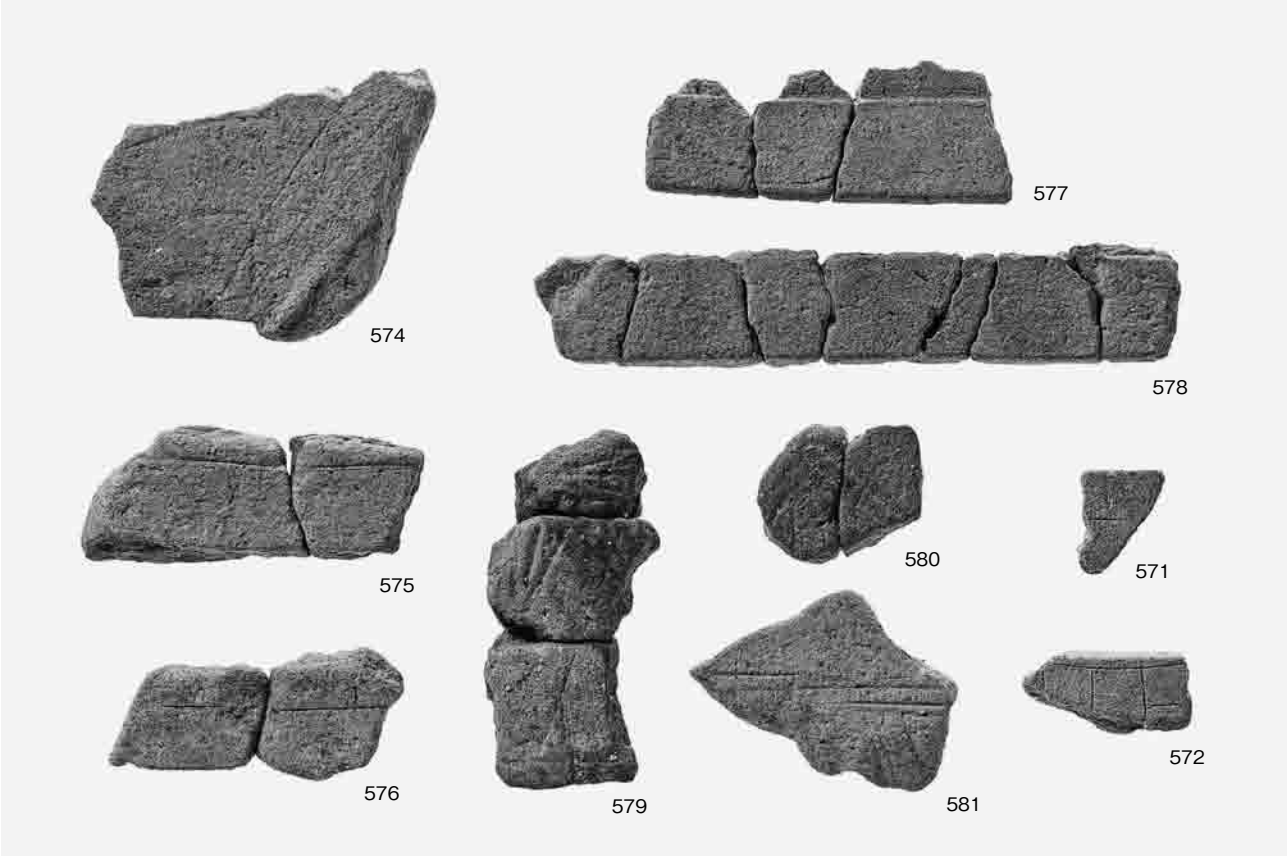
家形埴輪 2



(1)家形埴輪 3



(2)家形埴輪 4



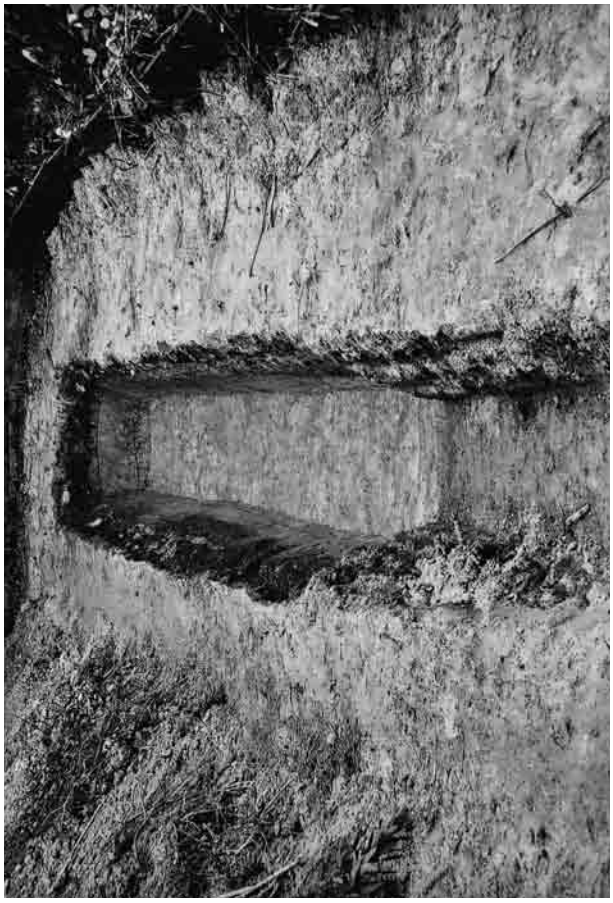
(1)家形埴輪 5



(2)鶏形埴輪



（2）A地区　完掘状況（西から）



（4）C地区　1トレンチ完掘状況（南から）



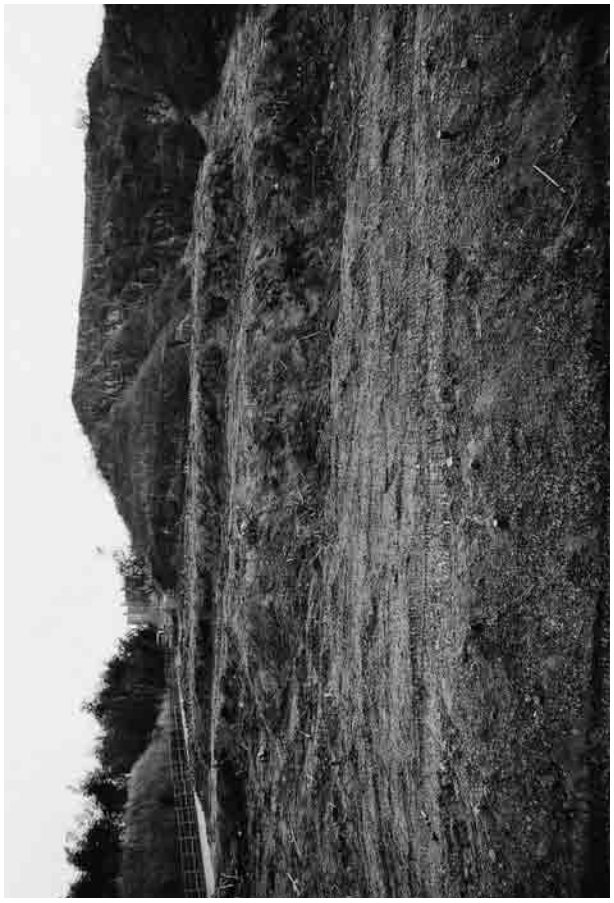
（1）A地区　調査前状況（西から）



（3）B地区　完掘状況（北から）

新名神高速道路整備事業関係遺跡　図版第 92

荒坂遺跡第５次



（2）Ｄ地区　調査前状況（北から）



（4）Ｄ地区　２トレンチ完掘状況（西から）



（1）Ｃ地区　２トレンチ完掘状況（南から）



（3）Ｄ地区　１トレンチ完掘状況（北から）

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第157冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番の3　Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2014年3月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
おんなだに・あらさかおうけつぐんだいじゅうさんじ 女谷・荒坂横穴群第13次	やわたしみのやまごけどおりちない 八幡市美濃山御毛通地内	26210	31 91 41	34° 50′ 37″	135° 43′ 33″	20120424 ～ 20130227	2,150	道路建設
あらさかいせきだいごじ 荒坂遺跡第５次	やわたしみのやまあらさかちない 八幡市美濃山荒坂地内	26210	70	34° 50′ 38″	135° 43′ 21″	20110421 ～ 20120224	315	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女谷・荒坂横穴群第13次	横穴	古墳～奈良	横穴・石棺	土師器・須恵器・鉄製品・耳環・玉類	人骨出土
御毛通２号墳	古墳	古墳	方墳	家形埴輪・鶏形埴輪	
荒坂遺跡第５次	集落跡	古墳～奈良	なし	なし	

所収遺跡名	要　約
女谷・荒坂横穴群第13次	今回の調査では、南東向きの丘陵斜面において20基の横穴を検出した。これらの横穴は狭い範囲に密集しており、築造する際に、玄室位置を前後に違えて構築したり、墓道や玄室床面に標高差を設ける等の工夫が見受けられるなど、先行して存在する横穴への影響を避けるため、計画的な配置を行っていたと考えられる。奥壁の形状には、床面から天井へ直立させるタイプと、緩やかに前傾しながらアーチを描くタイプの２種類が確認できた。閉塞に関しては、多くの横穴において土砂を盛り上げることにより行っていたものと判断される。32・33号横穴では、玄門に横穴の主軸方向と直交する溝が掘削されており、この溝に板戸を立てかけて閉塞した可能性も想定できる。埋葬施設としては当横穴群では初例となる石棺を１基確認したほか、出土した釘の位置から木棺が想定できる横穴が若干みられた。横穴の時期は、追葬の時期も含め古墳時代の終わりから奈良時代である。 また､今回の調査では､20体余りの人骨が出土した。いずれも遺存状況は良好とは言えず､解剖学的な位置を留めているものはわずかで、多くは集骨された状態であった。
御毛通２号墳	直径約22mの円墳を検出し、周溝から多数の埴輪片が出土した。出土した埴輪には家形埴輪や鶏形埴輪などがある。
荒坂遺跡第５次	今回の調査では、４地点で計６か所のトレンチを設定して調査を実施した。 Ａ地区では古墳や掘立柱建物に関連する遺構の検出が、Ｄ地区では縄文時代の遺構・遺物の検出が期待されたが、いずれの地区においても遺構・遺物は確認できなかった。その他の地区でも遺構・遺物は確認できなかった。

京都府遺跡調査報告集 第157冊

平成26年３月28日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel（075）256-0961（代）　Fax（075）231-7141